
ぬらりひよんの孫～不死身と中二、時々フラグ～

くろいあくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫〜不死身と中二、時々フラグ〜

【Nコード】

N11660

【作者名】

くろいあくま

【あらすじ】

テンプレのごとく、トラックに跳ねられて死んだ中二病の主人公。最強オリ主が出来ると思いきや、危うく魂すら壊されそうに・・・その後なんやかんやあって、原作知識が殆どない“ぬらりひよんの孫”の世界へ転生。彼は念願のハーレムを作ることが出来るのか?!

注意) 基本この作品はギャグ路線なので、チートなんかを求めてはいけません。

転生？馬鹿言っな、中二病乙！（前書き）

この作品は、作者がストレス発散のために一時間で考えて書ききった作品です。なので、細かいことを気にしてはいけません。

そしてこの作品は、チートオリ主ではありません。むしろ最弱、不幸属性オリ主です。チート能力が付きませんが、彼には使いこなせません。

ついでに言うと、この作品はぬらりひょん世代から始まります。故に、原作本編に行くまでに大分時間がかかります。

以上のことが大丈夫な人は、本編を見てやって下さい。

転生？馬鹿言っな、中二病乙！

はいどうも初めまして、高校二年生彼女いない歴17年の四波家しなみい間名えまなです！あれ？なんだこの名前。物凄い適当につけた感じ、一体どういうことなんだろう？

まあ、そんなどうでもいいことは置いて、今俺が何してるかと言っと・・・うん、トラックに跳ねられてるね！駄目だよな、やっぱりジャンプは家で読まなきゃ！フラゲ出来たからって歩きながら読んじゃ駄目だぞ！

ああ、現実逃避している間になんか意識が薄くなってきた・・・というか、トラックに跳ねられたのによくここまで意識残ってたな。でもこれあれだよな、転生フラグ！やっぱり中二病患者の俺としては、チート能力万歳のオリ主やりたい訳よ？うん、逆に跳ねられて良かったかも。ジャンプの神様ありがとう！！！！

俺はそんな馬鹿なコトを考えながら、この世にお別れを告げた・・・

「・・・ろ、きろ。起きるのじゃー！！」

「う、うーん？」

快適な睡眠をとっていると、誰かの野太い声が聞こえた。その声に俺がしぶしぶ起きてみると、目の前にいたのは超でかい髭面のオッサン。・・・あれか、俗に言う閻魔大王。

「やべーぜ、神様じゃないのは意外だったが・・・これで俺も最強オリ主の仲間入り・・・グフフ」

「いやー、マジでありがとうございます！これも日頃の行いがいいお陰だよな！うん、偶に赤い羽根募金に募金してやってたし。」

俺が最強オリ主になれることを喜んでいると、例の閻魔大王がなんか可哀想な物を見る目で俺を見ていた。止めるよ！俺のガラスのハートはそんな目に耐えられないんだ！！

「・・・お前、頭大丈夫か？死んだのにそんなに喜ぶ者は初めてじゃ」

「え？いやいや、俺だって死にたかった訳じゃないですけどね？閻魔さんが転生させてくれるんでしょ？なら別にいいですよ！！」

「そうか、転生するのがそんなに嬉しいのか。うむ、ならば望み通り転生させてやろう」

「k t k r r ! ! さあ、一体どこの世界に転生させてくれるのかな？ やっぱ王道にネギまか、リリカルか・・・いやいや東方も捨てがたい。うーん、悩むぜ！」

「よし、お前の転生先はこれだ」

「うっし！さあ一体どんな・・・はい？」

閻魔さんから渡された紙に書かれてあった転生先は・・・

アメリカ在住の日本人夫妻の長男山田大悟。両親は農業を営んでおり、それなりの生活水準はある。

……えーっと。

「ちょっと閻魔さん、どういことつすか……?」

「うん?何がだ?お前が転生させてくれと言っただろう?希望通りじゃないか」

「いやいや違うでしょ?!ここは間違えて殺しちゃってごめんなさい、お詫びに漫画の世界に転生させますでしょうが!!!」

このお方は、何をやっちゃってくれやがりますか?!こんなオリ主どころか、有名人にすらなりそうにない所に転生とかアホですか!?

「……馬鹿か貴様は。お前は、普通にトラックに跳ねられて死んだだけじゃぞ……」

「あー嘘だ!聞こえないー!!」

「……こんなアホを人間に転生させたら、転生先の人間が可哀想じゃな。よし、お前は狐に転生な」

「ちよ、てめえ!オリ主どころか人間じゃねえって、ふざけんな!」

狐とかあれだぜ?エキノなんとか、って言う猛毒の寄生虫が寄生してるらしいぞ?下手すりゃ人間に駆除されちまうじゃねえか!

「知っているか?少し前のある電○文庫の小説で、主人公の癖に一巻で死亡し、二巻で狐に転生するという作品があつてじゃな……」

「知るか!!あんた意外にオタクなのか!??」

「いや、閻魔大王が出ていると部下が言うから読んでみたのだが・

・ただ一つ言わせろ、僕はあの小説のようにロリコンではない！」「もつと知るか！！元の小説知らなきゃ、ツッコミもしにくいんだよー！！！！」

本当、なんだこのオッサンは？！ていうか、このままじゃ俺まさかの死に損！？おいおい、俺童貞で死んでいいとこ無しじゃねえか！！

「全く、うるさいのお・・・分かった分かった、お前はどついう転生がしたいんじゃ？」

・・・え？まさか・・・これは、一発逆転の大チャンス？！やっぱり来たぜ俺の時代！諦めないで良かった！

「そうだな・・・転生先はネギまの世界で、エヴァがまだ吸血鬼になる前から！俺が持つ能力としては、Fateのアーチャーの能力全てに最強の肉体、あとガツシユのアンサーカーをつけるってことで！！」

「はいはい、中二病乙。お前、やっぱり狐にすらさせたくないわ。おい！誰か！魂壊す金棒持って来い！」

「つて、おいー！！！！！！！！」

何これ？え？マジですか？変な赤い鬼が金棒振り回してるよ。しかもあれ、イチローの構えだぜ？10年連続200本安打おめでとぅ！！・・・つて違うわ！

「ちよつ、マジでお願いします！！夢だっただんです！最強オリ主になって、ハーレム作って、熱いセリフ叫んだりするのが！どうか！どうか御慈悲を！」

俺はもう破れかぶれで、一生の中で一番綺麗なスライディング土下座をする。F a t eのワカメも言ってたしな、お願いするなら土下座が筋って。

「えー、面倒くさいしー」

閻魔大王は、なんか物凄い脱力した感じである。あんだ、最初とキヤラ変わり過ぎじゃね？

「そこをなんとか!!」

「・・・大体、儂にそんな権限・・・ちょっと待て、天界の神から電話だ。静かにしている」

閻魔大王が俺の最後のお願いを否定しようとした時、閻魔大王曰わく神からの電話。あれ？神様と閻魔大王って電話で連絡してんの？

「おっつー、神ちゃん？何か用？」

って、なんだよそのフランクな会話は?!仮にも閻魔大王だろ! ?もう少し威厳を持とうぜ?!

「・・・ふんふん・・・えっ、マジで?そんな企画やんの?超ウケるんですけど!」

いや、超ウケるのはお前の方だよ!馬鹿でかい髭面のオッサン閻魔大王が、現代人っぽく電話してて、しかも電話の持ち方が女が持つてる感じって・・・

「へえー、なるほどー。さっすが神ちゃん!考えることがえげつないねー。うんうん、あっ今ちょうどいい所に、それにぴったりな奴

がいるからさ、そいつでいいんじゃないかね？うん、今から資料送るよ」

「……えっと、ぴったりな奴って多分俺のことだよな？なんだよ、えげつない考えって。超怖いんですけど、俺何やらされるのよ？」

「あ、資料届いた？……OK？マジで？うん、じゃあこっちで説明して送っとくよ。じゃあねー」

え？ちょ、待てよ！あ、なんかキムタク風……じゃねえ、俺の意思は無しですか？！いや、内容知らないけどさ！

「……さて、お前には望み通りに漫画などの世界に転生させてやる」

「……え？……今、聞き間違いじゃないよな？」

「ほ、本当ですか？ありがとございます！あんた俺の父さんだ！今まで似非閻魔って思ってたすいませんでした！！」

「僕は別にお前の父さんでは……それに似非って……」

なんか大閻魔様がげんなりしているが、俺は全く気にしない！だって俺の願いが叶うんだぜ？これが喜ばずにいられるかってんだ！

「で、お前の行く世界だが……」

「はいはい！どこですか！？」

「この中から、好きなものを選べ」

そうして渡された紙に書かれていたのは……

『ひぐらしのなく頃に』 『ブラッディ・マンデイ』 『ライアーゲー』

△『ぬらりひよんの孫』『ドラえもん』

・・・ちよつと待て、選ばせるつもりないだろう？ぬらりひよんの孫以外、オリ主無双できないじゃないか！？というよりドラえもんって・・・

まあいい、ぬらりひよんの孫と言えば、内容はよく知らないが雪女のつららと羽衣狐様が素晴らしい世界だ。他にも美少女たちがいるらしいし、中々いいのかもしれない。

「んじゃ、ぬらりひよんの孫で！」

「よし、分かった。そしてお前に渡す能力じゃが・・・こうなっておる」

そして渡された新しい紙に書かれていた内容は・・・

『不老不死』『無限の剣製』『妖怪化』『ガツシユの世界の魔術全』

・・・これは中々にチートじゃね？無限の剣製とガツシユの魔術があれば、大体の戦いで無双が可能だ。そしてぬらりひよんの孫の世界なのだから、妖怪化は介入するのにとっても役立つ。

「どうじゃ？何か不満はあるか？」

「いや、OKです！」

「・・・ちなみに、送る時代は原作より前だが構わんな？」

「OKOK！むしろ、そっちのが色々できて嬉しいっす！」

「よし、では行って来い！」

閻魔大王がそう言って俺に手を翳すと、俺の体が光り出す。これ

から遂に、俺の最強オリ主生活が始まるんだ！

「行くぜ！待ってるよ？ぬらりひよんの孫！」

「……本当に馬鹿じゃのう、あの男」

転生？馬鹿言っな、中二病乙！（後書き）

この作品は、作者が書いてる別の作品が行き詰まった時に衝動で書いたものです。

とりあえず数話更新してみても、評判が良ければ本格的にやりますが、微妙だったら凄く不定期更新になると思います。

契約内容をよく確認しよう！

「……うっ、ここは……？」

閻魔大王に転生させられた俺は今、何やら洞窟のような所にいた。転生って言ったたら、母親から生まれるのかと思ってたが……妖怪設定なんだし、親はいないのかもね。

「つつーか、寒っ！俺、何で裸なんだよ！！」

そう、俺は今素っ裸だ。生まれたばっかだからか？

まあ、そんなのはどうでもいい。今この世界は、冬かそれに近い季節なんだろう、とても寒い。何でもいから、着る物探さなきゃな。

「えーっと？……おっ！こんな所に、いい感じの服があんじゃんよ」

洞窟の中で綺麗に置まれていたのは、昔の人がよく着てた着流しとか言うやつ。結構上等そうだし、これでいいや。誰のか知らないけど、俺の前にあんだから着ろってことだろ？

「……んつと、こつか？いや、ちょっと違うな……よし、これでいいだろ」

俺は悪戦苦闘しながらも、なんとか着流しを着込む。うん、やっぱり服があると全然違うわ。

「服も着たし、まずは……」

「おいてめえ、何でワシの着物を着てるんじや」

まず初めにすることを決めようとしていた時、俺に向かって何やら怒った声が後ろから聞こえる。そりゃそうだよな、勝手に自分の服着られたら怒るよね。

「あつ、すみません。自分何故か服をき、て・・・」

「なんじや？続きを言え」

声のする方に振り向いて謝ろうとするが、顔が見えた瞬間に絶句してしまう。そこにいたのは、重力を無視した長髪をお持ちの超イケメン。

ぬらりひよんの孫の内容はよく知らないが、さすがにこいつの顔は知っている。おいおいマジかよ、最初から主人公に会えるとは・・・

「いや、悪い悪い。あまりにもあんたがイケメンだったからさ、ちよつとびっくりしてな？」

「イケメン？なんじやそれは？」

あれ？イケメンの意味を知らない？いやまあ、そういう人もいるかもしれないけど。

「イケてるメンズ、ようするに顔が格好いいってことだよ」

「ほうほう、おぬし中々見る目があるのう」

やべーよ、こいつ自分がイケメンってこと認めちゃったよ。お世辞っていうものがあるだろう？本当は不細工なのに、自分がイケメンだと思ってる奴はイタいぜ？・・・まあ、本当にイケメンなんだけどな。

「本題に戻るけどさ、俺起きたらなんか裸でここに居たんだ。着る物なかったから、これ借りただけど・・・」

「ああ、そういうことか。なら着ていればいいぞ、他にも何着か持っているからな。なんならおぬしにくれてやる」

「マジで？サンキュー！身ぐるみ剥がされたら、どうしようかと思っただ」

こいつマジでいい奴だぜ、流石はジャンプ漫画の主人公。全く、こんないい奴なんだったら、もつときちんと原作見とけばよかった。

「それはいいとして・・・ここどこよ？」

「ここか？ここは遠野の隠れ里の洞窟じゃが」

遠野っていつたら、東北地方のどっかだったっけ？あんま覚えてないな、ていうか原作に遠野って出てきたんだろうか、出てきたならいつぐらいなんだろう？

「んつとじゃあ、最近あった出来事教えてくれない？何分現状が掴めてないんだ」

「最近の出来事？んー、ワシはずっとここで修行してたから、よく知らないのだが・・・たしか織田のうつけが今川を倒したと聞いたな」

・・・えっと、織田が今川を倒した？それってまさか桶狭間の戦いか？あれは戦国時代の筈・・・

「・・・つかぬことをお聞きするのですが、あなたのお名前は？」

「なんじゃ、急に口調を変えおつて。まあいい、ワシの名か・・・人は、ワシをぬらりひよんと呼ぶ」

「……ぬらりひよん？ぬらりひよんの孫じゃなくて？……え？
もしかして、あのチヨココロネの昔の姿？うっそだー……じゃな
くて！えっ？原作より前って戦国時代まで遡るのかよ？！」

「どうした？」

「いや、なんでも！脳内会議するんで、ちょっと待っててくれ！」

「脳内会議……」

勘違いやら何やらで凄く冷や汗を流している俺に、ぬらりひよん
が訊ねてくるが俺はそれを気にかける余裕がない。脳内会議の意味
についてぬらりひよんが聞いたがっているが、それも気にせずに会
議に移る。

『おい、なんで戦国時代なんだよ？！原作まで400年ぐらいある
じゃねーか！』

『しかし、この時代から動けば、未来で動きやすくなるのもまた事
実……』

『はっ、確かにそうだ！今の時代からフラグをたてれるキャラもい
るはずだし、むしろ今じゃなきや無理なキャラすらいるだろうっ！』

『ならどうする？これからどう動けばいいのか……』

『……そういやさ、ぬらりひよんが総大将なんだろ？あいつ倒せ
ば、総大将の座奪えるじゃん』

『『『それだ！』』』

「……よし」

「ん？やっとなん会議とやらが終わったか？」

会議が終了し意識を戻すと、ぬらりひよんは横に寝転んでいた。
あれ？そんなに時間経ってたの？

「・・・ああ、たった今終わった。ついでにぬらりひょん、俺と決闘しろ」

「・・・急じゃねーか、一体何があつたんだい？」

「別に、大したことじゃないさ。それより受けるのか？受けないのか？」

俺が挑発的に指をくいつとすると、ぬらりひょんはニヤリと笑う。奴は着物を弄つて長ドスを取り出し、それを抜きはなつた。

「いいじゃねーか、気に入った。おめえは中々やるみてえだからな、殺さずにワシの百鬼夜行に加えてやる」

「光荣だな。だが、逆の結果になると思つぜ？」

そう、俺には閻魔大王から貰つたチート能力がある。今回はやはり見た目的に格好いい、アーチャーの能力からいくか。それを使えば、ぬらりひょん如き軽く一捻りだ！

「さあ行くぜ！投影、トレス・オン開始！」

「・・・なんじゃ？」

まずは出始めに、アーチャーの干将・莫耶を投影・・・出来てないな。あつるええー？おかしいな、干将・莫耶じゃ駄目なのか？・・・そついやあの紙に書いてたのは無限の剣製だったもんな、普通の投影はできないのかもしれない。

「くそつ、ならば・・・」

体は剣で出来ている。(I am the born of m

y s w o r d .)

血潮は鉄で心は硝子。(Steel is my body, and fire is my blood.)

幾たびの戦場を越えて不敗。ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。(I have created over a thousand blades. Unknown to Death. Nor known to Life.)

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。(Have withstood pain to create many weapons.)

故に、生涯に意味はなく。(Yet, those hands will never hold anything.)

その体はきつと剣で出来ていた。(So as I play, "Unlimited Blade Works")

これでどうだ!」

長つたらしい呪文を唱えきると、そこにあの剣の墓場が……うん! さつきと風景が全く一緒だね!

「……おぬしはさつきから、一体何を言っておるんじゃ? バレレんの言葉か何かか?」

「うおおおお! 止める! 俺をそんな目で見るな——!」

何だよ?! 閻魔大王は確かに“無限の剣製”をくれるって言うたし、俺は呪文を間違えていない。なのに何故! 無限の剣製が使える

なんだ――！！！！！！

『オホン、オホン・・・あー、聞こえるか？』

『はっ、その声は閻魔大王！おいてめえ、これはどういうことだっ
！！！！』

閻魔大王の声が頭に流れこんできたので、俺も脳内で怒鳴り返す。
直接声だしたりしたら、ぬらりひよんにまた変な目で見られちゃう
んだもの。

『別におかしな事ではないだろう？』

『はあ？頭おかしいのか、てめえ！能力くれたんだろう？！』

『ああ、能力はつけてある』

『だったら・・・』

『しかしな、お前には魔力がないだろう？』

・・・あ。・・・そういやあの紙には、確かに魔力について書いて
なかった。なんてこった、よくあるオリ主物でも魔力チートは必
須項目なのに・・・

『それって、俺もう能力使えないってことか・・・？』

『いや、儂としてもな？流石にそれだと可哀想だということ、お
前にもう一つ追加で何でも願いを叶えてやることにした』

『マジか！じゃあ勿論、魔力チートのレベルで！！』

『確認じゃが、それはどれくらいの量が具体例を出してくれ』

うーん確かに、魔力の量を決めといた方がいいだろう。しかし無
限と言うのは駄目だ、上限が無いと危機感つてのが無くなるからな。

『そうだな・・・遠坂凜の魔力の千倍で』

え？どこに上限があるって？・・・はっはっは、馬鹿だな、無限とじゃ天と地ほどの差があるじゃないか。

『なるほど、あい分かった。・・・これから変更は出来ないが、構わんか？』

『大丈夫っす！』

『よし、しばし待っておけ・・・終わったぞ、これでお前に魔力がついた』

おお、なんだこの感覚。体の中に、今まで無かった何かがあるようだ。これが魔力の感覚なんだろう。

ぬらりひよんを見ると、何やら顔を引き締めている。そうか、この力が奴にも分かったのだらう。余りに強大なんで、少し本気になるたつて所か。

「ふっ、悪いな、ぬらりひよん。これで俺は最強だ」

「ちっ、何があつたんじゃ」

「さあな、今度こそ行くぜ！

体は剣で出来ている。(I am the born of my sword.)

血潮は鉄で心は硝子。(Steel is my body, and fire is my blood.)

幾たびの戦場を越えて不敗。ただの一度も敗走はなく、ただの一度も理解されない。(I have created over a thousand blades. Unknown to death. Nor known to Life.)

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。(Have with
t o o d p a i n t o c r e a t e m a n y w e a p o
n s .)

故に、生涯に意味はなく。(Yet , t h o s e h a n d s
w i l l n e v e r h o l d a n y t h i n g .)

その体はきつと剣で出来ていた。(S o a s I p l a y ,
“ U n l i m i t e d B l a d e W o r k s ”)

「どうだ！」

「またもや長つたらしい呪文を唱えきると、そこには剣の墓場が・
・うん！影も形も無いね！」

「・・・どうだ、と言われても」

「うおおおお！何でだーーーー！！！」

「おいおい、おかしいだろう?! 魔力が無かったからさつきは出来
なかつたんだろ!? 魔力ある今なら出来るんじゃないか?!」

「おい、どういふことだ似非閻魔！」

「似非つて・・・まあいい、別におかしいことはないだろう?」

「はあ?なんで発動しねえんだよ!! 魔力はあるんじゃないか?
!」

「魔力はある。だが、この世界には魔術基盤という物が無いからな」

「・・・えーっと、魔術基盤?何それ？」

『ネットに繋いでやる、自分で調べる』

脳内に、何だかインターネットのような物が流れこんでくる。えーつと魔術基盤、魔術基盤つと。あ、あったこれか。

何々・・・魔術師には、えーつと・・・よく分からん。けど、なんかこれが無きゃ魔術使えないみたいだな・・・

『じゃあ、それこの世界に作ってくれ!』

『阿呆、先ほど最後の願いを叶えてやったろうが。あれで最後だ』

やべーよ、もうマジで無理っぽい。・・・はっ、待てよ？俺にはまだ、別のチート能力があるじゃないか!

「ふっふっふ・・・魔力がある今！俺にはこれが使えるのだ!“バオウ・ザケルガ”!!!!!!」

そうだ、ガツシユの魔術はそんな魔術基盤なんて関係ない。俺の呪文の呼びかけに電撃の竜が・・・出てこないね!

「・・・もう、止めねえか？」

「おっふう、涙が止まらねえ・・・」

くそつたれ！何だよマジで！俺のチート能力は一体どうなってるだ!

『なあ、閻魔さんよ？今度は何だつてんだ・・・』

『Fate世界の魔力とガツシユ世界の魔力は違うからな、当然使える筈もない』

『・・・詐欺だ・・・俺に何が残されてるってんだ』

『後残っているのは、不老不死と妖怪化だけだな』

・・・妖怪化・・・使えるんだよな？この世界の能力だし・・・

「・・・こんな感じ？」

体に力を入れて、感覚で妖怪化というものをしてみる。そうすると俺の姿が変化していき、現れた姿は・・・

「・・・鏡がないからよく分からん」

顔が分からねえ、っていうか変化してない時はどんな姿だったんだろ？今分かるのは、身長は変わってなくて、皮膚の色も変わっていないことぐらい。あ、あと髪が長くなっただけがする。

「・・・おぬし、何の妖じゃ？変化して髪が長くなるだけなんて、見たことねえぞ」

いや、そんなこと言われても分かんねえから。それに俺の姿変わってないのね、ここまでくると笑えてくるよ。

『で、俺って何て妖怪？』

『さあな、考えてない』

『つて、おい！』

『いや、妖怪というのは人間が名付ける物だからな。元々は、名前なんてないのだ。お前の特徴でも名付ければいいんじゃないか？』

そんな適当な・・・お前マジ何がしたいんだよ。・・・それにしても、俺の特徴か・・・姿が変わってないんだし、精神的な何か・・・

「中二病・・・」

いやいや頭おかしいだろ、そんな名前付けられた日にゃ・・・

「なるほど、沖児猫か・・・聞いたことがないが、いい名じゃ。猫の妖か？」

「って、おいーーーーー!?何納得してんだよ!!それに何だよその字!?俺のどこ見たら猫に何だよ!!」

「いや、俺は猫じゃないし・・・」

「そうか、それは悪かった。沖児猫よ、変化した今ここからは本気でやるということじゃな？」

「おい、人の話は最後まで・・・」

「行くぜ、沖児猫。ここからが闇、妖の本来の戦じゃ」

「最後まで言わせるやーーーーー!!」

ぬらりひよんは俺の話なんか聞かずに、何やら怪しげな雰囲気を出している。やべー、あの目滅茶苦茶怖いんですけど。って言うてる間に、ぬらりひよんの姿が見えなくなった。

「え?何コレ?何でぬらりひよんはいなくなっただんだ？」

「・・・何者も、自分にとって大きすぎる存在と出会ってしまったと」

「ちょ、声だけ聞こえるとかどんなホラー？」

「・・・出会ってしまったとき、その存在を畏れ」

「おーい、どこ行った?いい歳して隠れん坊なんて恥ずかしいぞ？」

「・・・畏れるあまり、気づくことをや」

「今なら怒らねえからさ、さっさと出てこいって」

「ええい、さっきから何じゃ?!ワシの畏れにかかっておるんじゃ

る！？何でそんなに余裕なんじゃ！！」

あ、何か怒りながらぬらりひょんが出てきた。っていつか目の前じゃん！？どんなトリックだよ！

「いや、何か別に見えないだけじゃ・・・」

「ワシの畏を完全に否定か！？・・・ええい、こうなったら刀のみでやってやるわ！！」

あつるうえー？何でだ？どうしてこうなった？何でぬらりひょんは勝手にキレて、ドスをこちらに向けてるんでしょうか。

「行くぜ、沖兎猫！」

「ちょ、待、ぐぼおおおお！！！！」

ぬらりひょんが一度切りかかっただけで、俺の体は真つ二つにぶった切られる。ぬらりひょんも、俺がこんな簡単にやられるなんて予想外だったんだろう、えらく驚いている。

「沖兎猫ー！！なんでじゃ！？何故、避けも守りもしなかったんじゃ！？ワシはおぬしを殺すつもりでは無かったのに！！」

「ふざけたこと言ってるじゃねえぞ！？殺すつもりねえのに、刀なんて振るんじゃねえ！！」

「おう？！生きておつたか！！」

生きておつたか、じゃねえだろ！！あの糞閻魔に不老不死能力貰って無かつたら、確実に今なのであの世逝きだったぞ？！それに滅茶苦茶痛てえ！！

・・・って、ちょっと待て。そーいや俺、死なないんだな。なら、痛みにさえ負けなければ、外敵に負けることは無いってことだろ？！

「・・・ふっふっふ。そうか、俺は不死身の男。この勝負、貰ったああああ！！！！」

「ちいつ、不死身じゃと!?!」

そうだ、俺の特徴と言えば、中二病ならではの妄想力。俺の妄想にかかれば、痛みなんて大して感じねえんだよ！！何回死んだって不死鳥のごとく食らいついてやる！！

「そう考えりゃ、中二病って名前もあながち間違いじゃねえな！！！！」

そして俺は、渾身のグーパンをぬらりひよんに叩き込む！

「うおおおおおおお！！！！おりゃあつ！！！！」

「・・・おぬし、まさかそれでワシに勝つつもりか？（ぺしっ）」

「うおおおおお、簡単に防がれたぜー！！！！！！」

っていつか、それも当然か。俺は基本ただの中二病オタクだったわけで、まともに喧嘩したことなんて殆ど無かったからな。人の殴り方なんか知らないし、妖怪化した癖に力弱かったもん。

これはもう、勝てる要素がねえ。こうなったら、ぬらりひよんに謝って許して貰おう。

「・・・てへっ、僕ちゃん弱いもん！見逃して?」

「・・・ぶん（ぬらりひよん、無言で沖見猫を斬る）」

「ぶぎやああああ！！！！」

やっぱり、こんなじゃ無理だよな！

「……でも、酷くねえか……？」

「……いや、つい反応してしもうた」

「そうだよな……あれ、なんか意識が……」

遠のいていく。そういやそうだよな、不老不死だろうと、血が無くなったら意識保てねえよな……

「おい、沖児猫!？」

ぬらりひよんが結構、本気で慌ててるみたいだ。まあ大丈夫だよ、俺は不死身なんだから……

「……閻魔」

「あ、神ちゃん。どうよ、あの男は」

妖怪、沖児猫の生まれる原因となった場所で、原因となった二人が会話をしている。片方は、小型化して少年の姿をとっている閻魔大王。もう一人は、少女の姿をとっている神。彼らは最高峰の権利者同士の筈だが、どうもそうは見えない。

「いや、中々いいな。思う存分笑わせて貰った」

「それは良かった、紹介した甲斐があったよ」

「うむ、あれ以上にびつたりな者はおらんだろう」

そうして二人は笑いあう。しかし、彼らが笑っているのは、沖児猫の無様な姿なのだ。あまり、いい趣味とは言えない。

「それにしても、神ちゃんって本当にえげつないよね。最弱の雑魚オリ主を作ろうなんて、普通は考えないよ？」

「他の神は知らんがな・・・我は蹂躪者よりも、間抜けな者の方が見ていて楽しいのだ」

神は非常にサディスティックな笑みを浮かべて、これから先沖児猫がどうなるかを考える。あの男なら、必ずもつと笑わせてくれるだろう。

「いやーでも、あの男は本当に予想通りに動いてくれるね。能力の件で、下手したらチート能力ついてたのに」

「あの男ならば、やってくれると思っていた。それでチート能力がいたら、我らの認識が甘かったというだけだ」

閻魔が沖児猫に能力を渡したのは、そうすれば面白いかと思っただけ。ただそれだけ。もしあの男がチート能力を持てば、観測を止めて新しい者を捜すつもりだったのだ。

「・・・まあこれで、お膳立ては終了」

「・・・これ以上は、我らは何も介入しない」

「さあ、我らに余興を見せておくれ？」

契約内容をよく確認しよう！（後書き）

ということでのこの作品は、不死身の妖怪『沖兎猫』がフルボッコにされながらも、なんやかんやで頑張ろうをコンセプトにやっています。

あ、閻魔さんや神様は多分もう出ません。最後のやつも、帳尻あわせに入れただけなんで。

・・・それにしてもこの沖兎猫、鬼發とか鬼憑って何になるんだろう？畏は不死身でいいとして・・・さあ、どうしようか？

痛い横文字叫びながら、ただぶん殴るだけの映像しか思い浮かばないな

ファーストチツスは何の味？（前書き）

キャラが全然出てこないぜ、あとギャグも全然駄目だぜ。ついでに、なんか繋ぎ回っぽいぜ。

ファーストチツスは何の味？

「……………い、何・の？」

「……………ら、ワ・が……………る……………る」

誰かの話し声に、眠っていた俺は目を覚ます。そしてどうやら俺は、古い家みたいな所に寝かされていたようだ。

あれ、俺どうしたんだっけ？何でこんな所にいるんだろう？えーっと、確かジャンプをフラゲして……………ああ、そうか。俺、ぬら孫の世界に転生したんだった。

えっとそれで、ぬらりひよんに二回斬られて倒れて……………後でぬらりひよんぶん殴る。ああもしかして、ぬらりひよんが倒れた俺を運んでくれたのか？

「……………ぐっ、う……………」

とりあえず俺は、布団から起き出してみる。そして会話をしていた二人が、俺が起きたことに気づいたようだ。

「おう、気づいたか沖児猫！」

「……………だから、俺はそんな名じゃ……………」

大声を出して否定したいが、血が足りなくて出せない。そんなだから、ぬらりひよんに聞こえていないのだろう。

「ん？どうした沖児猫。飯が食いてえのか？」

「あ、お願い……………」

今まで何にも食ってないもんな……………って、違げえ！！名前だ

よ、名前！このままじゃ一生、中二病なんて名前になるじゃねえか！俺不老不死だから、いつまでもってことだぜ！？

まあ、俺のそんな心の叫びがぬらりひよんに届く筈もなく。ぬらりひよんは俺を無視して、横にいる人物に話しかけていた。おそろく、俺の飯についてだろう。

「おい、雪女。こいつの飯作ってやってくれ」

「嫌よ、何で妾わたしがそんなことしなきゃいけないのよ」

「いーじゃねえか、高々一食作るだけだろう？」

やっぱりそうだ、俺の飯についてだったようだ。っていうか、一食ぐらい作ってくれてもよくね？ぬらりひよん、いいぞもつと言つてやれ。

「い・や」

「おぬし、ワシの飯はすぐ作るくせに・・・頼んでもねえのに」

「あら、迷惑だった？」

「いや、そうじゃねえが」

ちよつと、待て。ぬらりひよんてめえ、なんだそのリア充発言は？高校生ぐらいで言えば、毎日お弁当持参してくる彼女ってか？

ちくしょー、ぬらりひよんの彼女はどんな顔してん、だ・・・つて、おい！もしかしてつらら？！雪女のつららさんですか！？俺あなたのファンだったんですよ、あ、サインくれます？・・・つて、違う！え？何なの？もしかしてつららつて、ぬらりひよんの側室か何かだったのか？

「とりあえず飯作ってやってくれよ、ワシの頼みじゃ」

「・・・なら、妾と口吸いしてみなさいよ」

・・・えーっと、口吸いって・・・チツスですか？俺がまだ一度もしたことが無い、あのチツスですか？！ぬらりひょん、てめえー
ー！ー！ー！

「止める、ワシを殺す気がい？」

「いい加減にしろや、このリア充がー！ー！女からの、しかもこんな美女の誘いを断るとか、彼女いない歴〓年齢（俺たち）を馬鹿にしてんのか？！」

「うおっ、なんじゃ急に」

もう、血が足りなくて大声出せねえとか言ってる場合じゃねえ。

こんな野郎に、俺のつららを盗られてたまるか！！

「こんな甲斐性無しなんかほっといて、俺と一緒に素敵な家庭を築きませんか？」

「・・・はあ？」

テンションが上がりすぎて、何かこのナンパ野郎だつてセリフがすらすら出てくる。前の世界じゃ告白すらできなかったのに、こんなプロポーズ紛いの言葉がよく出てきたもんだ。

「ついては、俺と口吸い・・・」

って、俺何言つてんだ？！会って数分でチツスのお誘いとか、石田〇一でもやらねえよ！！ああ、これでつららフラグが完全に消えた・・・

「ごめん、今のな」

「・・・してもいいわよ？」

「・・・え？今なんと・・・？」

「だから、口吸いしてやってもいいって言うてるの」

何・・・だと？つまり、どういうことだってばよ。・・・え？マジで、チツスOK？夢じゃねえのこれ？ほっぺをつねって・・・あ、痛。やべー現実だ、夢じゃねえ。よし、落ち着くんだ俺。とりあえず素数を数えて・・・あれ、素数って何だったっけ？まあいいや、これで俺のファーストチツスが遂に奪われるんだよ！今まで使われなかったのは、この時のためだったんだ！・・・彼女ができなかったからじゃないもん！

「ほら、しないの？妾と口吸ひ」

「いえいえ、します！させていただきますとも！！」

なんか凄く扇情的に、つららが俺を誘ってくる。今までは、かわいい系のキャラなんだとばかり思っていたが・・・これはこれでありだ。

「・・・おい、沖児猫。悪いことは言わねえ、その女だけは止めとけ」

「ふざけんなつ！！俺はお前と違って、チャンスに飢えているんだ！！こんなチャンス捨ててたまるか！！」

「・・・ワシは忠告しといたぞ」

ぬらりひよんが何か言っているが、俺は全く気にしない！つららとの距離を縮め、優しくチツスを・・・

「ぐびゃっ！！！！」

「私があんたなんかになびく訳がないでしょう」

チツスをする瞬間、俺の口の中に強烈な冷気が流れ込んで来た。
え？ごはっ！！ちよっ、何これ？死ぬ、マジでこれは死ぬ！

「・・・だから、止めとけって言ったんじゃ。雪麗と口吸いしたら、
冷気で殺されるんじゃ」

「それを、がひっ、先に・・・言え・・・！」

くそう！！俺の胸のときめきを返せ！！こんな女だとは、全然思
わなかった・・・

「・・・ふーん、私の冷気で死なないんだ？」

「ああ、こいつは不死身らしいからな・・・他はあれじゃが」

あれって言うなー！！！！俺だつて本来なら、チートオリ主
だったんだよ！！どうしてこうなった！？・・・ん？そっぴやさっ
き、気になることを・・・

「そっぴや聞いてなかったけど、あんたの名前は？」

「さっきの冷気受けて分からないの？雪女よ」

「いや、名前だよ」

「・・・下の名前を、なんであんたに教えなきゃならないのよ」

「こいつは雪女の雪麗じゃ」

「ちよっと、ぬらりひょん！！」

「いいじゃねえか、名前ぐらいで・・・」

ぬらりひょんと雪麗とかいう雪女が、俺を無視して口喧嘩を始め
やがった。っていうか、つららじゃなかったのかよ。それにしちや、
似すぎなような・・・はっ！まさか母親か？！つまり雪麗とニヤン
ニヤンすれば、つららの父親になれるということか！？・・・それ
はそれでアリだ。

「はあ、もういいわ。・・・それで、結局なんなのコイツ？」

「だから、沖児猫だと言つとるじゃろうが。なかなか面白い奴じゃからな、ワシの百鬼夜行に加えることにした」

「・・・はあ!？」

ぬらりひよんの発言に、俺と雪麗がハモってしまう。俺はそんなこと聞いてねえよ、馬鹿なのコイツ?的な意味で言ってしまったのだが、雪麗はおそらく何でこんな雑魚を入れるの、馬鹿なのアンタ?的な意味なのだろう。・・・自分で考えてて、何か泣きそうになつてきた。

「ちよつと正気?ぬらりひよん」

「何がおかしい?不死身な奴なんて、妖でもそうそういねえぜ?」

「それは・・・そうだけど」

ぬらりひよんが諭すことによつて、雪麗も何も言えなくなったよ。うだ。だが待ってくれ、俺はお前の百鬼夜行に入るなんて言つてねえ。

「ぬらりひよん、俺は別に」

「さて、そういうことだ。沖児猫の組入りと遠野修行の終わりを祝して、ぱーつと宴会でもしようぜ」

「だから、人の話を聞けやー!ー!ー!」

こいつ、本当に何なの?俺の話をもとにも聞かねえ。今だって、俺が叫んでるのに無視してやがる。

「・・・ぬらりひよん、あんた本当にもう出て行くの?」

「ああ、ワシの修行は済んだ。こうなりや江戸に帰って組を纏めて、

魑魅魍魎の主になつてやる」

「・・・そう」

え？何よこの空気？会話内容から察するに・・・雪麗はこの住人で、ぬらりひよんはもうここを立ち去るってか？・・・おいおい、どこの恋愛小説だよ。完全に俺が邪魔者じゃねえか。

「・・・あんたがいなくなると、食事作る相手がいなくなつて・・・少し、残念ね」

「何言つてやがる。お前もワシについてくりゃいいじゃねえか」

「え？」

「あなたの飯は美味いからな、これからもワシに作ってくれよ」

「ぬらりひよん・・・」

や・め・ろ・よ、何だこのピンクの空気は。俺を除け者にして、完全に二人の空気作りやがって・・・もう俺主人公じゃなくて、ぬらりひよんが主人公だろ？これ。

「おう、そうだ沖見猫。おぬしにこれをやる。おぬしは不死身でも、力がねえからな」

ぬらりひよんが急に思い出したように、懐からドスを取り出して俺に投げってきた。・・・キャッチできなかったのは、あれだ、ぬらりひよんの投げ方が悪かつたんだよ。

「・・・いいのか？」

「ワシは別に持つておる。それにこれからは、おぬしも組の仲間なんじゃ。何の不都合がある？」

だから俺は、お前の仲間には・・・待てよ？ぬらりひよんは主人

公サイドのキャラクターだ。ならば当然、本筋に関係する行動をとる筈。本編に出るキャラクターは基本的に、美女率が高い。つまり奴についていけば、俺の美女ハーレムが作りやすいつてわけだ。

「・・・よし、いいだろう。ぬらりひょん、てめえを俺の大将にしてやる」

「はっはっは、何をいまさら言っておる」

「・・・お前、本当に人の話聞いてねえな」

俺の話聞いてたら、絶対に出ねえセリフだぞ。・・・もう俺の名前、沖兎猫で確定してるみたいだしな。もう開き直ったが。

「よし、それなら杯を交わすか」

「杯？」

「親分と子分の誓いみてえなもんだ。ワシとしちゃ、義兄弟の杯でもいいがな」

なるほど、ヤクザの杯みたいなもんか。確かぬらりひょんの孫って作品は、妖怪が組を作ってるって設定だったから、そういうヤクザ的行事があってもおかしくない。

「いいぜ？俺としても、人の下につくより義兄弟の方がいいからな」

「おう、ならば話は早い」

ぬらりひょんは、どこからともなく二つの杯を取り出す。そしてそれに酒を注ぎ、俺に差し出した。

「・・・俺、酒飲んだことねえんだけどな」

「別に水と変わらん、普通に飲みゃいい」

まあ別にいいか、一度は飲んでみたかったし。俺の決心がついたところで、ぬらりひょんと俺は腕を交差させ、一気に酒を飲み干す。

「……これで、ワシとおぬしは義兄弟じゃ」

「……」

「ん？どうした、何かあったか？」

「……ちょ、気持ち悪い……おえええ」

「ぬおおお！？ワシの上に吐くなー！！！！」

いや、マジで自分の酒の飲めなさにびつくりした。飲んですぐに吐くとかどうよ？これから先、絶対に酒なんて飲まねえ。……は！酒が飲めねえってことは、美女にお酌をしてもらおうという夢が叶えられないということか！？

「くそつ、駄目だ！その夢は絶対に叶える！！」

「……何じゃ、急に」

「よし、ぬらりひょん特訓だ！酒が飲めるようになるまで、宴会じやああああ！！……おえええ」

「だからワシの上に吐くんじゃねえ！！！！」

「……はあ、先が思いやられるわね」

ファーストチツスは何の味？（後書き）

とりあえず今回は、作者的にはつららより好きな雪麗さん登場回。雪麗さんが遠野出身ってのはオリ設定です。これから先も、結構オリ設定出る予定。一ツ目とか、納豆小僧とか、一ツ目とか、鴉天狗とか、一ツ目とか。

修行？何それ美味しいの？（前書き）

オレって本当にオチが締まらないよな・・・

修行？何それ美味しいの？

どうも、名前を沖児猫ちゅうじこねで固定されてしまった俺です。元々の名前も覚えてないし（何か鬮がかかった感じで分からない）、もうこの際開き直って認めてしまいました。

そんな俺こと沖児猫は、現在ぬらりひよん達と一緒に江戸へ向かっている。しかも、かなりの大所帯でだ。

遠野を出るとき、雪麗だけじゃなくて色んな妖怪がついてきたのにはびっくりした。まさか、遠野の大將の赤河童までついて来たがるとは・・・ぬらりひよんの魅力が、それだけ凄いつてことなんだろうか。

そんなこんなで、遠野を出て江戸に向かう途中にも、色んな妖怪が組に入れてくれと言ってきた。ぬらりひよんも大抵承諾し、かなり規模が拡大してきたんだが・・・

「・・・こいつ、役にたつのか？」

そう言いながら俺が見下ろすのは、近寄るだけで臭い妖怪。なんで、こんな妖怪が存在してるんだろうか。

「あ、沖児猫！オイラを馬鹿にしてんのか！？」

「・・・ああ、だってお前・・・ただの納豆じゃん」

そう、納豆である。納豆に体がついただけの妖怪、納豆小僧。妖怪って人を驚かせるものだろう？こんなんじゃビビらないだろう・・・
・臭いで引くかもしれないが。

「はつきり言い過ぎだバカヤロー！よし、こうなったら決闘だ！」
「は？お前が、俺と？ははは、バロス。寝言は寝て言え」

いくら俺が力が無いつつてもな？納豆なんかじゃ負けねえよ。あんまり虐めても、さすがに可哀想だしな。とりあえず俺は、軽くあしらう大人の余裕を・・・

「はっ、逃げるんだな？」

「んだと、コラ。俺がお前なんかから、逃げるわけねえだろうが」

「じゃあ、オイラと決闘しろよ」

「いいぜ、やってやらあ！今から土下座の準備しとけカス！」

え？簡単に挑発に乗りすぎ？馬鹿だな、こういう躰がなってない奴にお仕置きするのも、大人の在るべき態度なんだよ。

「お？喧嘩か？いいぜ、もつとやんな」

「・・・普通、大将が止めるもんでしょ」

「かまわねえって、こまけえことは気にすんな」

なんかぬらりひょんが俺たちを煽って、雪麗がそれを諫めている。まあ、あの自由人ぬらりひょんのことだ、他人の説得なんかに応じないだろう。

「まさか、止めたりはしねーよな？」

「止めねえさ、ただ刃傷沙汰にはすんじゃねえぞ」

「わーってる、こいつなんて刀使うまでもねえ。俺の、この唸る拳だけで十分だ」

俺は指をポキポキ・・・鳴らせないからふりだけして、納豆（笑）の前に立ちはだかる。納豆（笑）は俺の威圧感に畏れをなしたのか、

若干引き気味だ。

「おいおい、決闘をふっかけてきた側がびびってんのか？」

「び、びびってなんかねーぜ！おめえこそ、後で吠え面かくんじゃねーぞ！」

「ふっ、この俺が？吠え面？笑えねえ冗談だ。修行で得た力、てめえに試してやる」

「しゅ、修行?!」

そう、修行だ。俺は遠野を出てから、あることに気づいた。不老不死系の能力を貰ったオリ主達は、一体何をしていたか、と。

答えは、ハンターハンターのネテロ会長のあの特訓。つまり、感謝の正拳突きだ。俺は、それを実践してみることにしたのだ。

「・・・そんな姿、ワシは見たこと無いんじやが」

「ワシは見てたぜ、大将」

「狒々か・・・」

ぬらりひょんが疑惑の目を俺に向けていたが、その目は声のした方に向けられる。声の主は能の仮面を付けている大男、大猿妖怪の狒々だ。奴の仮面の下は見たことが無いが、俺はとんでもない不細工なんだと踏んでいる。

「で？修行って、結局何をしてたんじや？」

「・・・ワシは、あんな修行をする奴を見たことがない」

狒々が凄いシリアスな声でぬらりひょんに語っている横で、俺と納豆（笑）の決闘の準備が整った。俺たちの周りには奴良組の連中が集まってきていて、一斉に俺たちをはやしたてている。

「往くぜ、俺が修行で得た『108式波動拳』・・・その身で受けな!!」

「うっ、うおおおおお!!」

そして俺たちは互いに走り出し、お互いの射程圏内に入った所で、全力の拳をぶつけ合う

!

「・・・ワシは、あんな修行をする奴を見たことがない

腕立て伏せを30回するだけの修行なんて!しかも一日で止めたし」

ずっとーん。ぬらりひょんや狒々の話を真剣に聞いていた妖怪たちが、某新喜劇のごとく一斉に転けた。あ、ついでに言う俺も何故か地面に顔が着いてるよ。何でだろう、俺も転けたのかな?

「・・・沖兎猫、弱っ!!」

「納豆に、一発で沈められたぜ・・・」

「え?さすがに冗談だろ?」

「・・・いや、立ち上がれないみたいだぜ。生まれたての小鹿みたいだ」

「うそーん」

ふっ、何やら小妖怪どもが言ってるぜ。・・・俺だって、うそー
んって言いたいんだよ。まさか納豆ごときが、こんなに力あるとは思わなかった・・・

え？ネテロ会長式の修行はどうしたって？馬鹿言っちゃいけないよ、あんなの普通のオタクに続けられるわけないじゃん。ダイエツトだってそうだろう？やろうやろうと思っても、結局は出来ないんだよ。

だからさ、思い立って5分で感謝の正拳突きは止めたよ。でも、腕立て伏せをやるうと思っただことは褒めて欲しいんだ。・・・30回やったら筋肉痛になって、それで止めちまったけど。

「・・・」
「・・・」
「・・・」

何故だろうね？周りのみんなの視線が凄く痛いよ。納豆や小妖怪ぬらりひょんは別に構やしないんだけど、雪麗の視線が凄く冷たいよ・・・でも、それがいいと思ってしまふ俺は変態なのだろうか。

「・・・おい、沖児」

「さあ、ぬらりひょん！さっさと江戸に向かおうか！」

「ちよつと待て、沖児」

「いやー納豆、お前は実に運がいい！俺が封印さえされてなければ、邪気眼によってお前の命は無かっただろう！」

「・・・こんの、沖児」

「ほら何をしている？みんな行くつぜーはーはっはっは」
「・・・」

ぬらりひよんが凄く苛立ってるのが分かるが、俺は全然気にしない。こつこつ時には、適当に誤魔化するのがベストなのさ。

・・・だからお前ら、そんな目をするなよ。そんな目されたらさ、滝のように流れてる冷や汗が止まらねえじゃんよ。

「・・・あんた、クソ雑魚ね。なんでぬらりひよんは、あんたなんかを義兄弟にしちゃったのやら」
「ぐふうっ」

せつらの つめたいことば！ ちゅうにびょうのライフに 50
000のダメージ！

「ワシは最近奴良組に入ったばかりで、大将のことを完全に分かってるわけではないが・・・流石に軽率だったと思うぞ」
「がふっ！ぐふっ！」

ひひの れいせいなジャッジ！ ちゅうにびょうのライフに 3
000のダメージ！

「止めてやれよ！今は、オイラの運が良かったただけだ！沖見猫の封印が解けたら、オイラも流石に勝てる気がしねえ」
「ぬおおおおお！！」

なつとうの むくなようっ！ ちゅうにびょうのライフに 80
00のダメージ！

「・・・もう、止めてくれ・・・俺が悪かった・・・俺のライフは、とっくにゼロだ・・・」

もう、立ち上がることもさえも出来ない。今の状態はあれだ、天使がお迎えに来る前みたいな感じ。つまり、これを言えということか。

「パトラツシユ・・・俺もう疲れたんだ。なんだか、とつても眠いんだ・・・眠い・・・ぐうう」

「つて、寝るんじゃないねえ！なんでこの状況で、堂々と寝れるんじゃない？それに、ぱとらつしゅとは何者じゃ！？」

「・・・はっ！しまった！まさか、封印の影響がこんなところにまで・・・」

「その設定、まだ続いとつたのか！？」

「設定・・・だと？馬鹿を言うな、全て真実に決まっているだろう。俺の封印さえ解ければ、この世界はすぐに俺のものだ」

「話が飛躍し過ぎじゃー！」

こういう時はな？ワケの分からない話で煙に巻くのが一番なんだ。それに、封印つてもあながち間違いないし・・・あれ？ぬらりひょんってこんなツツコミキャラじゃ無かった気が・・・まあいつか、それ程俺の話が素晴らしかったってことだろう。

「・・・おい、沖見猫」

「ん？なんだ？」

「おぬしも少しぐらい修行を「却下」・・・最後まで言わせる」

俺がこれ以上修行するなんて、どう考えても有り得ない。メタ○キングをわんさか倒せりゃ、経験値が軽く貯まるんだがな。流石に、この世界にメタキングはいねえよ。よって、俺の修行は無しだ。

「俺は、今のままでいく！今のままの俺が天下をとつてこそ、俺の偉大さが分かるのだ！」

俺は高らかに、そう宣言する。俺は不死身なわけだし、修行しなくても死にはしない。

「……本当に、それでいいのかい？」

そんな俺に対して、ぬらりひょんがそう言ってきた。いつもの薄ら笑いは消え、とても真剣な目だ。

「……どういう意味だ、ぬらりひょん」

「構えな、ワシがためえを試してやる」

ぬらりひょんの雰囲気が変わり、俺にドスを向けてくる。……あれ？なんで急にことなことに？今までギャグ漫画みたいなノリだったのに、急にバトル漫画っぽく……。打ち切り目のジャンプ漫画画かっつての。あ、そういやこっつてジャンプ漫画の世界だったっけ。

「前は何故か効かなかったが……これがワシの真・明鏡止水ぬらりひょんのめいぎょうしすいじゃ」

俺が最初にぬらりひょんに出会った時と同じく、ぬらりひょんの姿が消えた。……俺にどうしろってんだ、ぬらりひょんを倒せるわけないし……

「よし、ここは逃げよう！」

俺はさっさとその場を離れ、なんとなく安全そうな雪麗の下へ……

「つて、逃げるんじゃないねえ！！」

「ぐええええつ！！」

逃げれなかった。ぬらりひょんが急に現れて、俺の右半身を切り裂いたよ。頭おかしいのコイツ？俺は不死身でも、痛いものは痛いんだよ。

ヤバいね、俺の体からお血血がびゅーびゅー、内臓飛び出て、骨がどーん。具体的に描写したら、R18指定ものさ。はっはっはっはっはっはっはっ。笑えよみんな、今頑張つて痛みを忘れようとしてるけどさ、そんな顔されたら意識しちゃうじゃん。

「・・・あれでも生きてるって、不死身つてのは本当みたいね」

「・・・不死身でも、敵を倒せねば意味がないと思うが」

雪麗と狒々が、何かひそひそと話してるぜ。でもさ、君ら少しぐらい心配してくれよ。俺の体、リアル死に体だけ？・・・なんか殺され過ぎて、回復力上がってきたから、もう治ったけど。

「おいこら、ぬらりひょん。問答無用に斬るとはどういうことだ」

「・・・悪かった。つい、な」

「ついですんだら、警察も博麗神社の巫女も風紀委員も管理局もいらねえんだよ！！」

「どれも分かんわ！」

何だと！？ちゃんとアニメを全て見て来なさい！これ今日の宿題ね！・・・あ、東方はアニメないか。

「・・・ということであらひょん、一撃入れさせる」

「・・・まあ、いいじゃろ。ワシは動かん、好きにせい」

あれ？通っちゃったよ。普通に断られると思ってたけど・・・っていうか俺、あいつにダメージ与えられないじゃん！奴め、そこまです算ずくか！？

「……とまあ冗談はここまでにして、どうするか……奴にダメージを与えられる必殺技が欲しいな、何かないか何か。」

「……これだ」

「ん？どうした？早く来い」

「言われなくても、行ってやらあああああああ！！！」

あつたぜ、俺の出来る必殺技。ジャンプの忍者漫画の必殺技、誰もが一度は試した必殺技！

「行くぜ、らあ……せん」

「よし、来い！」

俺が奴に近づいても、奴は一步も引こうとしない。俺をなめてるな？この技を受けて、悶え苦しむがいいわ！

俺は手を必殺技の形に変えて、奴の目の前へ。余裕ぶっている奴をスルーし、奴の背後へ！

「ねんごろしいいいいいい！」

「ぬうおおおおおう！？」

俺の千年殺しが奴に炸裂、奴はケツを押さえて苦しんでいる。ちなみに千年殺しつてのは、カカシ先生が昔やってた浣腸のことだ。

「……ふっ、またつまらぬものを掘ってしまった」

あれ？この言い方だと、やらないか？みたいに聞こえ……駄目だ駄目だ！俺はそっち方面は駄目なの！同性愛に偏見はもってない

けど、俺を巻き込むな！

「……ぐっ、やるじゃねえか……」

「……お前も、あれを受けて生き残るか。流石は俺の大将だ」

ぬらりひよんは結構涙目だ、相当痛かったんだろう……肉体的にだよな？精神的にもあれなんだが……え？大げさに言い過ぎ？馬鹿言っちゃいけない、千年殺しはマジで痛いんだ。

「……これが、おぬしの鬼憑か」

「ん？鬼憑？何のことだ？」

「鬼憑とは……」

それからは、ぬらりひよんのスーパー説明タイムだった。掻い摘んで説明すると、妖怪には畏という力があって、それを発動するのが鬼發、妖怪としての特徴を技として昇華したものが鬼憑らしい。

「……つまり、何か？俺の妖怪としての特徴は、千年殺しだとも？」

「いや、おぬしの妖怪としての特徴はおそらく……空気殺しじゃ」

食う気殺し？喰う気殺し？あ、空気殺しか。……やだ、何それコワイ。

「おぬしの発言、行動全てがワシらの真剣な空気を殺す。空気を壊し、畏を断つ……それが、おぬしの鬼發なのじゃろう」

……つまり、俺は空気が読めない野郎と？なんだそれ、チート能力くれよマジで。そんなカツコ悪い能力、いらねーよマジで。

「これは何気に強いぞ？敵の心を侵食し、畏の発動を止める・・・
これで攻撃力があれば・・・」

余計なお世話だよ、俺だって派手な技使いたいんだよ。何だよその地味な能力・・・あれ？これ何気に幻想殺し（イマジンプレイカー）に似てね？よし、技名を空気殺し（シリアスブレイカー）としよう。

取り敢えずそれからなんやかんやあって、みんな揃って江戸への旅を再開した。納豆とも和解し、俺もまあ奴良組に打ち解けている・・・なんか下に見られている感があるが。

微妙だがある意味強い技を手に入れたので、俺はこれからチート能力を開花させるのだろう。その時に、奴らには吠え面をかかしてやろうと決めておく。

修行？何それ美味しいの？（後書き）

話の展開的に、何故か沖児猫は能力を手に入れた！

空気殺し（シリアスブレイカー）

空気の読めない馬鹿げた言動や行動により、敵の畏を断つ沖児猫の鬼憑^{ひょうい}。

敵の畏は沖児猫には効かず、沖児猫の攻撃は敵の畏を貫通する。

これだけ聞けば強そうだが、実際は沖児猫のあまりの貧弱ぶりで大して効果が無い。

作者はこの作品をノリと勢いで書いています。この技も、付けるつもり無かったのに作ってしまった・・・この設定はいつ生かされるのだろうか。

というか中二病って、こんな感じでいいんだろうか？

江戸だぜ江戸！田舎だがな！（前書き）

オチがさ・・・まったく思いつかなかったんだよ・・・

江戸だぜ江戸！田舎だがな！

「はーるばる来たぜ、江ー戸！」

え？リズムあってない？しょうがないじゃん、言い出してから気づいたんだから。何も考えずに口に出しちゃいけないってことだよ、うん。

まあそんな下らないことは置いて、俺たちは遂に江戸に着いたんだよ！遠野を出てから数週間、やっとたどり着いた江戸に対する俺の最初の感想は・・・

「・・・田舎だな」

「・・・そう言うな、京から遠い地は発展し辛いんじゃない？」

ぼっさぼっさの統一感の無い土地に少ない家屋、終いには人影も殆どないときたもんだ。これ田舎って言わずに何て言うんだって話だよな。

江戸ってのは徳川の幕府が開かれた場所で、今の東京周辺のことだ。そんなこんなで発展してると思ってたんだが・・・まあ当然かこの時代の家康って大した力無い筈だし、そもそも江戸にいないだろう。

「にしても田舎過ぎるぜ、何にもねーじゃん。・・・あれ？ここに何しに来たんだったっけ？」

「おいおい、忘れんなよ。ここが、ワシらの本拠地じゃろーが」

・・・そうでした。俺つてば、ここでこれから暮らすんだなー。

俺はさ、超現代っ子だったわけよ、今までは二次元の世界ってことでテンション保ってたけど、この田舎でテンション保てるんだろう

か・・・

っていうかよく考えたらさ、これから何百年経たないと、俺が生きてた時代に追いつかないわけだよな？つまり、漫画やアニメがそれまでお預けってことだよ！

今まで俺が好きだった作品は、ちゃんとこの世界で生まれるのか！？俺はまだ、ワンピースの新世界編を見てないし、禁書やそらおとの二期視てないんだよ！！

「くつ、俺の妹がこんなに可愛いわけがない」だけは視ておきたかった・・・」

原作は見てないが、アニメは超期待だったんだよ！兄弟が姉だけな俺にとつて、妹物は大好物なんだ！姉物は絶対に駄目だがな！

『お兄ちゃん』あれ、何か俺の脳内妹のミュちゃんが呼んでるや。おいおい待ってくれよ、俺たちは兄妹なんだぜ？恋愛は御法度だろう？はっはっは

「・・・あんた何やってんのよ、皆先に行ったわよ」

はっ！しまった、ミュとの語らいに浸っている間に周りに雪麗しかない！・・・ってちょっと待ってくれ、雪麗が残っているだど？周りに誰もいないのに、俺を待っていただど？これは、つまり・・・

「雪麗、お前は・・・」

「・・・何勘違いしてるか知らないけど、私はぬらりひよんに頼まれただけだからね。普通なら、あんたなんか置いて行くのに」

ツンデレですね、分かります。そうか、いつの間にやらそんなこ

とになっていたか。フラグを立てた覚えは無いが・・・無自覚つても主人公の基本だもんな。

「ちょっと、聞いてるの？」

「・・・ああ、お前の気持ちはよく分かった」

「・・・あんだ、一体何を言ってる？」

「みなまで言うな、分かっている。・・・さて、子どもは何人がいい？俺としては皆元気なら何人で、ぐべえあああああ？！」

「・・・死になさい」

冷たいよー、逆に熱いよー、通り越して痛いよー、痛いも通り越して・・・何て表現しようか、死の味？

雪麗め、何てことしやがる。吹雪を俺の口の中に、有り得ないほどぶち込みやがった！体の中の臓器が、これ動いてないんじゃないかね？って感じた。

「・・・ふんっ、死なないって便利ね」

本当にな！これ無かったら、俺は雪麗だけに何十回殺されたんだろつか。その分、俺と雪麗は打ち解けたけど・・・多分、きつと、そうだといいなー。

「早く回復しなさい、私だって早く追いつきたいのよ」

「・・・り、了・・・解」

雪麗の冷たい視線と言葉に、俺はかろうじて了解と言えた。心の中では大概にふざけてるけど、肉体的には限界超えてるんだよ？

「・・・まあなんやかんやあって、ぬらりひよん達に追いつきましたよ、と」

「誰に向かって言っておるんじゃない？」

そんなこと気にしちゃ駄目、中二病特有の妄想さ、きつと。

「で？ここが奴良組本家ってか？」

「ああ、その通りじゃ。なかなかいいところじゃろ」

まあぬらりひよんの言う通り、結構いい感じな物件だ。ど田舎な江戸の中で群を抜く大きさの純和風建築、奴良組の全員だって住めるんじゃないだろうか。

「さ、入ろうぜ。ワシの組の奴らが待つてらあ」

聞いたところによると、ぬらりひよんは元々江戸で奴良組の大将をしていたらしい。その後、自分の力を高めるために一人で遠野に修行へ・・・うん、俺には無理だ。

そんなこんなで、ぬらりひよんを始め俺たちは門をくぐる。初めて見た庭の様子はとても綺麗で、ぬらりひよんが居ない中でもきちんと整備していたことが分かった。

「おう、てめえら！帰っ「総大将ーーーう！！」・・・鴉天狗か」

ぬらりひよんの帰宅宣言を遮って、巨大な鴉 鴉天狗って言うらしいな が屋敷から飛んで来た。黒くてでっかい、そんな奴が号泣している姿は・・・ごめん、ちょっと引いちゃった。

「総大将、よくぞご無事で・・・この鴉天狗、信じて待つておりましたぞ」

「おう、ありがとよ。ワシの留守中に、何か変わったことはあったかい？」

「はっ、特にこれといってございませんでした！」

「そうか、そりゃ良かった」

・・・何さ、この事務的な会話。普通こういう時って、先に俺たちを紹介しない？友達を引き合わせた時の気まずさって、こういうのを言うんだよね。

「で、総大将。彼らはもしや・・・」

「ん？ああ、新しいワシらの仲間じゃ」

「おお、こんなにも多くの者たちを・・・流石は総大将でございます！」

やっと紹介されたと思いきや、鴉天狗はぬらりひよんを持ち上げてしかねーよ。いや、気持ちは分かるよ？久しぶりの自分の大将なんだもんな。当然、テンションはアゲアゲ（これって死語？）のはずだ。

でもな？ほっとかれてる俺たちとしては、なんかてめえ超うぜえつてなるわけだよ。そこんところ、分かってないよね君。

「・・・なあ、ぬらりひよん」

「ん？なんじゃ？」

「そろそろ中に入れてくんねーか？ずっと立ち話もなんだろうよ」
「おお、そうじゃったな。さっさと入って、中で宴会でもするか！」

「……中に入るのはいい、俺が催促したんだからな。だが問題はその後だ。……宴会……だと？」

馬鹿言つな、俺は酒が飲めないのは知ってるだろう？ちつとは飲めるようになったが、それでも俺は世間一般に下戸と呼ばれる人種だ。

つまり、宴会で殆ど酒が飲めない。するとどうなるか？考えるまでもない、実につまらないことになるのだ。いやもしかしたら、悪乗りした馬鹿どもが俺に酒を強要してくるかもしれない。そうなれば、俺はずっと吐き続けなければならないことになる。

「……それは、絶対に駄目だ」

つまり今俺が成すべきことは、宴会を中止させること。ぬらりひよん達のことなんて知るか、世界は俺を中心に回っているんだ！

「おらー、もっと酒持って来いやー！」

とまあ、俺が頑張ったところで宴会を止められるはずもなく。今

現在、宴会の真っ只中ですよ、はい。

「おい沖兎猫！お前も飲まんかい！」

「いや、俺はちよつと……」

これはマジで普通にキツイ。知識として下戸の宴会での肩身の狭さは知ってたけど、実際に自分になってみるとよく分かるよ。

さつきから、近寄ってくる妖怪全てに酒を勧められてる。いや、フレンドリーなのはいいことさ。でも、その愛が重いことってあるんだよね。

「のー、沖兎猫ーお！飲んどるかー！」

「その声は、ひ……ひ……？……なん……だと」

……馬鹿な、有り得ない。コイツが酔ってることは別にいい、何も珍しいことじゃないんだから。だが俺の目には、信じられない光景が映っている。狒々の仮面を外した顔が……顔が……

「なんでそんなイケメンなんだよー！？」

「んー？イケメンってなんじゃー？」

「イケてるメンズだって言ってるんだろぅがー！……！」

おいマジか！仮面の下がこんなのだったとは予想外だ！不細工だと思っ、今まで優しく接してたっていうのに……

「くそう、ぬらりひよんに狒々、その他数名のイケメンがいるってのに、この組にや美女が雪麗しかいねえ……鬱だ」

「何を言っるとるんじゃお前は……」

いつの間にか隣に来てたぬらりひよんが、なにやら呆れながら俺

につつこんでくる。コイツは本当にぬらりくらりと掴みどころがない野郎だな。

「・・・だってしょうがないじゃないか、他の女妖怪共は顔面偏差値30未満ぐらいなんだから」

「・・・なんじゃそれは」

「もっと美女を組に入れるよ、そしたらきつと素晴らしい組になるから」

「どうしてそうなる!？」

お前、普通に考えれば分かるだろう?美女がいればテンションが上がる、いなけりゃテンションが下がる、これ世界の常識ね。

「・・・その馬鹿に何言っても無駄よ」

「・・・そうかもな」

近くで一人酒を飲んだ雪麗が、不機嫌そうにぬらりひよんに言っている。・・・ん?不機嫌そう、だと?この状況で不機嫌そうになる理由としては・・・俺への嫉妬だよね!

「大丈夫だよ雪麗・・・俺はお前、ぎゃぶえしあああああ!!」

「!」

「しつこいのよ」

最後まで言っていないのに・・・うん、雪麗ルートって難しいんだろうな。こんなのを普通に落とすギャルゲーの主人公って凄いな、マジで。あ、ぬらりひよんは落としてたっけ。

「なあ、ぬらりひよん」

「駄目じゃ」

「まだ何も言っていないだろーが！」
「変なことなのは分かっ取る」

ひでえ、人権侵害だ！俺だって、いつも変なこと言うわけじゃねえよ！・・・今は、ぬらりひょんに女を落とすコツを教えて貰おうと思っただけだ。

「総大将！こつちにも来てくだせえ！」
「おう、今行くぜ」

そんなこんなで、ぬらりひょんは向こうの方へ行っちゃまった。とすればだ、この場に残るのは俺と雪麗のみ。これは色々とチャーンス！

「なあ雪「黙りなさいクズ、私は一人で静かに飲みたいの」・・・
ぐすん」

俺・・・何かしましたか？いや、してきたけど。

「・・・いいいいよ、やけ酒してやんよ」

「あんた、飲めないんでしょ」

「吐いても構わんさ、今の俺にはそれが似合ってる・・・」

「・・・無駄に哀愁漂わせなくていいわよ」

お前には分からんさ、俺の気持ちなんて。せめてハードボイルドに決めて散るのが、男のロマンってやつなんだよ。

「ふっ、あばよ雪麗」

俺は最後にそうキメて、杯に妖名酒という酒を注ぐ。もはや誰に

も、俺を止められねえ！

「（ぐびっ）……ふっ、俺は成長したのさ……すぐに吐くことはなくなった」

「……」

「……一分も保たないがな！おええええええええ！」

「……馬鹿じゃないの？……馬鹿だったわね」

雪麗の言うとおりさ……俺は馬鹿な男なんだよ。だけどな、一つ言わせてくれ。男には、引けない時があるんだ……今回は引けたかもしれないけどね。

まあ結局俺は、その後すぐにダウン。ぬらりひよん達は朝まで宴会してたらしく、俺はずっとほっとかれたみたいだ。

……あれ、これで終わり？オチとかけなくていいのか？……
今までも別にオチはなかった気がするけど。

江戸だぜ江戸！田舎だがな！（後書き）

やっぱりギャグって難しいな、と感じる今日この頃。さっさと原作の辺りに行かないとヤバいね、マジで。まあ、次は一ツ目さんの出番……の筈！

漢ってのは顔じゃないんだ！（前書き）

なんか今回はスイスイ書けた。一つ言っと、作者は綺麗な一ツ目エが大好きです。

漢つてのは顔じゃないんだ！

俺たちが江戸に到着してから、すでに数年が経過している。最近
は奴良組も大きくなり、屋敷は色々な妖怪で溢れている。ただし、
美女妖怪なんていないがな！

え？いきなり飛びすぎだろうって？・・・しょうがないじゃない
か、大したことなかったんだから。いや、多少はあったけど。

例えば、そうだな・・・一年前ぐらいに思い立ったんだけどさ、
オリ主無双は無理でも、現代知識無双は出来るんじゃないかって。
農業とかはちょっと分かんないから、歴史介入とかいいんじゃない？
ってね。

で、一人でどっかの大名の所行ってみただけど・・・うん、も
のの見事に捕まったんだよね。そりゃそうか、普通は疑うよな。未
来が分かるとか、天下を取らせてやるとか言っちゃったら。

いやー、あん時は焦ったね。不死身なことがバレて、何回も何回
も殺されちゃったから。ぬらりひょん達が助けてくれなかったら、
俺本当にヤバかったよ。

まあそんな事件が幾つか起きつつ、奴良組は順調に力を蓄えてい
ったんだよ。ん？俺はどうかって？・・・聞くな、死人がでるぞ。

それは置いといて、今現在奴良組は、江戸近辺の妖怪の統一に動
いている。奴良組が大きくなったとはいえ、所属していない妖怪も
結構いるんだこれが。

「・・・とまあこのように、奴良組に組みしない勢力が幾つかあり
ます」

今はそのことについて会議中で、木魚達磨とかいうオッサンが司

会をやってる。普段は鴉天狗がこのオツサンが司会なんだが、鴉天狗は今パトロール中らしい。

「小さな組や小妖怪などは、おそらく手を出すまでもないでしょう。問題は、奴良組以外の二大勢力です」

そう言いながら木魚達磨は、汚い日本地図みたいなのを指差した。なんでも、妖怪の勢力図を地図上に記したものらしい。・・・こんな誰が作ったんだ？

「一つは、大将のいないごろつき鬼の軍団・・・少し強い者共がいますが、統率がとれていない者など容易いでしょう」

「ごろつきって言ったなら、要するにヤンキーのことだよな。話せば面白い奴とか結構いるけど、基本的には関わりたくないよね。・・・あ、今俺ってヤンキーよりヤバい極道だった。」

「そしてもう一つが・・・一ツ目入道率いる独眼鬼組。組員もさることながら、大将の強さは際立つものがあると聞きます」

一ツ目入道・・・ねえ？強いのかどうかは知らないが、名前からして目が一つしかないんだよな？だったらイケメンなわけがない、俺の敵じゃねえな。

「ふうん？ワシらに従わねえ剛の者ってか。いいじゃねえか気に入った！その一ツ目って奴を、ワシの傘下に入れるぞ！」

まあた始まったよ、ぬらりひよんの悪い癖。美女妖怪は捜さないくせに、ガッチガッチの強面ばっか引き抜きやがる。このままじゃ、奴良組の顔面偏差値がヤバいことになるぞ？端から見たら、顔面だ

けで畏に変わるんだ。

それを解消するためには、やはり美女妖怪を入れるべし。ついでに言えば、俺のハーレムの一員になるなら尚よし。・・・今のところ一人もいないがな！

「・・・あなた、また馬鹿なこと考えてるでしょ」

「ぐっ、何故分かった！？・・・まさか、俺の思考を読んで・・・」

「・・・あなたの考えてることなんて、数年一緒にいれば分かるわよ」

雪麗・・・その言葉は、熟年夫婦にのみ許された言葉だぞ（偏見か？）？つまり、俺と雪麗は熟年夫婦であるということ・・・

ここからは沖児猫の脳内妄想

「あら、最近やけに疲れてるみたいね？」

長年連れ添ってきた雪麗が、俺のため息に反応した。あまり心配をかけたくないが、こいつに隠し事は出来ないみたいだな。

「いや、少し馬鹿なことやっちゃまってさ・・・また、組の奴らに泥を拭わせちまったな・・・」

「・・・沖児猫」

「俺は、弱いからな。あいつらに迷惑ばかり・・・いっそ抜けた方がいいのかもしれない」

俺の力といえば、ただ不死身なだけ。空気殺し（シリアスブレイカー）もあるが、大して役に立たない。・・・こんなんじゃ、ぬらりひよんの魑魅魍魎の主って目標を邪魔しちまう。

「駄目よ！あんたはちゃんと役に立ってるわ！・・・嘘でも、抜けるなんて言わないで」

「・・・雪麗、これは嘘でも冗談でもねえ、俺の本心だ。・・・お前も俺のことは忘れて、新しい恋を探しな」

雪麗を見ていて、俺の心は決まった。俺なんかと一緒にいたら、雪麗はきつと不幸になる。俺は最後に捨てぜりふを残して、住み慣れた屋敷を出ようとす。

「待つて！私を・・・私たちを置いていかないで！」

「駄目だ雪麗、お前を不幸には・・・私、たち？」

「・・・そうよ、言ってなかったけど・・・出来たの、私たちの子ども」

「なっ！？」

「・・・あんたが出て行ったら、それこそ不幸になるのよ」

雪麗は少し恥ずかしそうに、少し嬉しそうにしながらそう言う。

・・・そうか、俺たちに子どもが出来たのか・・・

「それなら、俺が勝手なことするわけにはいかない・・・」

「そうよ、勝手なことしたら許さないんだから」

それから俺たちは、ずっと笑いあっていた。これから先の、輝かしい未来を描きながら・・・

ど。

「なんじゃ騒々しい」

「大変です、一大事ですぞ!!」

来たよベタなやつ、大変大変言いながら要領得ないやつ。大変なんだったら、さっさと要点だけ言えってんだよな……ん？

「なあカラス、そいつ誰だ？」

さつき気づいたんだが、鴉天狗はなんかちっこい妖怪を抱えている。小人体型の体に、ふっさふっさの毛が生えた一ツ目妖怪だった。

「おお、そうじゃった！総大将、この者は独眼鬼組の組員の者です！」

「……独眼鬼組？なんでそんな奴が鴉天狗といるんじゃ？」

独眼鬼組って、さつき話題に出てた奴らだろ？これはあれか、噂をすれば……えーっと、何だったっけ？……あ、影か。

「実は……」

鴉天狗と独眼鬼組の小妖怪の説明によると、なんでも独眼鬼組がごろつき鬼どもに襲われたらしい。強い連中が出てた時に襲われたらしく、戦力といえれば大将の一ツ目入道ぐらいだったみたいだ。

そして一ツ目入道は、組員の奴らを逃がして一人で食い止めてもらしい。で、このちつこい妖怪が奴良組に助けを求めに来たところを、鴉天狗に保護されたと。・・・何？その漢展開。

「・・・どうすんの、総大将？」

「決まってるなあ、ワシを頼る奴は見捨てねえ。・・・行くぜためえら！久々の出入りだ！」

雪麗の問いに、ぬらりひよんは立ち上がってすぐにそう叫んだ。

おいおい、そんな簡単に決めていいのかよ。・・・ま、そういうところが、ぬらりひよんの魅力の一つでもあるんだがな。

「んで？結局今どういう状況？」

「独眼鬼組の本家で、一ツ目入道様が一人奮戦しています。他の組の者は、散り散りに逃げたか、単騎で敗れたようです」

小妖怪は目を飛び出して、俺たちに説明する。ここから独眼鬼組のシマぐらいまでなら、こいつには楽勝に見えるらしい。・・・何気にいい能力だな。

「ちつ、流石にここからじゃ間に合わんだろうな・・・」

そう、いくら強いと言われる一ツ目入道でも、多勢に無勢ならば長くは保たない。ここから独眼鬼組まで全力で行っても、奴良組が到着するまで保つ可能性は低い。

「よし、こうなったら・・・狒々！白田坊！」

ぬらりひよんは少し逡巡した後、狒々と白田坊を呼んだ。白田坊
つていうのは、ガタイのいい僧みたいな妖怪だ。

ぬらりひよんは狒々と白田坊に耳打ちをし、あいつらもうんぐん
と頷いている。おい俺たちにも教えるよ、お前らだけで秘密を共有
してんじゃねえよ。

「・・・分かったか？」

「了解です、総大将」

「ワシも、全力でやるとするかの」

狒々と白田坊は微妙に黒い笑みを浮かべた後、ぬらりひよんと手
を組んだ。そして俺に近づいて来て・・・あれ？君たち俺をホール
ドしてるけど、一体何がしたいの？

「よし、さっさとやれ」

「え？え？お前ら一体な、にいいいいいい！！！」

狒々と白田坊は俺を抱えてぶりをつけ、一気に放り投げやがった
！！わー凄い、俺今空を飛んでるよ？

「沖兎猫！ワシらもすぐ行く！少しの間保たせておけ！」

どんどん飛んでいってる時、ぬらりひよんがそう叫んでいるのが
聞こえた。先に言えとか、そういうベタなことは言わない。ただ一
つ言わせる、俺に何を期待している！？

あー空気が冷たいや、まあ雪麗の吹雪にやかなわないうが。つてい
うか目開けてらんないから、前見えないうんだよね。今どのあた

ドオオオオオン！！

「……うん、ついたみたいだな。俺の体、今どうなってんのかな？ここ数年殺され過ぎて、死んだ時の復活スピード上がったきたんだよね。血なんかいらなげつ、ってぐらいになったしな。」

「な、何だあ！？」

「何かの妖怪が飛んできた……のか？」

「いやでも、この有り様じゃ……」

「つつ！見る！動いてるぞ！」

ふっ、何やら雑魚鬼軍団が、俺の登場に畏をなしてやがる。ここは、俺との格の違いを教えてやらなきゃな。

「はっはっは、俺は奴良組幹部の沖児猫様だ！雑魚鬼どもよ、俺の敵になったことを後悔するがいい！」

……決まった。俺の名乗りに対して、奴らはびびって……

「奴良組……だと？」

「やべーぞ！奴良組幹部っていつたら、相当強い筈だ！」

「……いや、あいつ立ち上がれてないぞ？本当は雑魚なんじゃ……」

「……かもな。ってことは、奴良組幹部ってのはハツタリか？沖児猫なんて聞いたことねーし」

……そうくるよな、分かってたさ。毎回毎回ワンパターンなんだよな、持ち上げといて落とすってのが。

前までの俺だったら、ここで何しに来たの？ってなっていただろう。しかし、今日の俺は一味違うぜ！

「なめんじゃ、ねえ！」

「た、立ち上がったー！」

俺は氣力を振り絞って立ち上がった。こんな痛み、痛くも痒くも・
・ごめん、滅茶苦茶痛いよやっぱ。俺の妄想力でもカバーできね
え痛みだ。

「・・・おいてめえ、もういい下がってる」

そんな俺に、後ろから誰かが話しかけてきた。振り返ってみると、
一ツ目の二メートルぐらいの大男がいた。おそらくこいつが、一ツ
目入道って奴だろう。・・・何さ、ちよっとイケメンじゃないか。

「・・・俺は大将に、お前を助けるって言われてんだよ」

「そんな体でか？馬鹿言え、足手まといだ」

「・・・ん」

確かに、こんな体で戦っても足手まといかもしれない。でも、こ
こは引けねえ。

「だけど・・・！」

「それにな、ワシはお前に助けられたさ。お前が奴らの気を惹いて
る間に、少し回復出来た」

一ツ目入道はそう言いながら、俺の前に立った。その体はボロボ
ロで、とても回復したようには思えない。

「お前・・・」

「安心しな。ワシの後ろには、奴らを一步たりともいかせねえ。お

前に、それ以上傷はつかん」

そう言う一ツ目入道の背中は、とても・・・大きい。なんて野郎だ・・・この俺が、こんな心揺さぶられるとはな。これが、漢に惚れるってやつか。

そこからは、凄まじい戦いだっただ。一ツ目入道相手に多数の鬼が切りかかり、殴りかかり、火を吐いたり・・・そして一ツ目入道はその猛攻に対して一歩も引かず、宣言通り俺はダメージを負っていない。だが・・・

「はっ、はっ、そろそろ限界だろ？」

「・・・ちっ」

もう、一ツ目入道は限界だ。いやむしろ、よくここまで保ったんだよ。普通の奴なら、ここまで保つわけがない。

「くそっ、ぬらりひょん達はまだか!？」

ぬらりひょん達がくれば、こんな奴ら・・・いや、違うだろ。

「・・・ここで体張らないで、何のための不死身だっただよな」

「んなっ、おい、足手まといだってんだろっが!」

一ツ目入道・・・もう一ツ目でいいや、めんどいし。一ツ目が焦ってやがる。はっ、いつもお前の思い通りになると思うなよ？

「おいおい、俺をなめるなってんだ。お前と違って、もう完全回復してる・・・さあ、雑魚モブキャラども！俺がミックミックにしてやんよ!」

「みつくみ・・・何だって？」

俺が決めゼリフしたってのに、奴らと一ツ目のテンションが下がってやがる。・・・いや、これ計算通りだからね？空気殺し（シリアスブレイカー）の効果だって！！

「・・・下がってるよ」

「・・・うわーあん！！」

せつかく俺がまともに頑張ってたのに、何だよこの空気は！！いや、俺のせいだけど。そりゃ、泣きながら特攻したくなるぞ。

「・・・えいつ」

「・・・（ぺしっ）」

「・・・ああ、そうだろうな」

「・・・（ぶんっ）」

「ぐぶううううう！！」

・・・今のくんだり、描写しなくても分かるよな？・・・ああそうさ、俺はどんなに成長しても雑魚なんだよな・・・

「・・・さて、一ツ目入道を「待てよ」「何ッ!？」」

俺を無視して一ツ目を倒そうとしたモブ野郎を、殴られた状態のまま引き止める。本気になった俺は、鍋にこびりついた油污れよりしつこいぜ？

「ぐっ、お前ら！全員でかかれ！！」

モブ野郎は、雑魚鬼集団全員を使って俺を襲ってきた。いやあ、

躊躇ないねお前ら。俺、これで原型残るのか？

「でも、俺死くはない！」

俺はいくら殺されようとも、死ぬことだけはない。気持ちで負けなければ、負けることはないんだよ！

「く、こいつは無視しろ！ただの雑魚だ！」

奴らは、俺が結局のところ雑魚だと気づいたらしい。俺を無視して、一ツ目を倒そうとする。・・・けど駄目だな、全然駄目だ。

「もう、タイムオーバー なのですよ」

「ふっ、待たせたな沖兎猫。よくやった」

俺が後ろを振り返ると、そこにあったのは百鬼夜行。ぬらりひよんを先頭に、威風堂々と畏を放っている。

「ぬ、奴良組だあー！」

「あの野郎、本当に奴良組だったのか！？」

「くそ、駄目だ引けーっ！」

まああんな雑魚集団に、最強奴良組が苦戦なんてしないんですよ。それからはあの野郎どもを駆逐しつくす、スーパー奴良組無双タイムだった。

「・・・ふーっ、疲れたマジで」

「おう、本当によくやった。ワシも、あまり期待はしてなかったんじゃないが・・・」

「・・・おい」

ならあんな無茶すんじゃないやねえよ！空中でちょっとちびりかけたんだぞー！？」

「ま、あなたにしては上出来ね」

「・・・そりゃどーも」

雪麗さん、もうちょっと褒めてくれてもよくないですか？俺、今回だけで何回致死を迎えたと思ってるんだよ。

「・・・ま、いいけどね。それよりちょっと寝みいや。雪麗、膝貸してくんない？」

あ、言った瞬間空気変わった。うん、分かってたって。さっさと呪いの吹雪でも何でもしてくれよ、準備は出来る。

「・・・しょうがないわね、ほら頭乗せなさい」

「はいはい、頭を乗せて・・・なん・・・だと？」

馬鹿な・・・嘘だ！雪麗が、雪麗が、こんなこと許すわけがない！俺に対してデレを見せるなんて、天が降ってくるより有り得ない！

「さては、お前偽物だな！？」

「何でそうなるのよ・・・」『呪いの吹雪 雪山殺し』「

ほら偽物だ、本物の雪麗が眠らせるだけの技なんて使わないもの。だからこの冷たい膝の感触も、きつと偽物なんだよな・・・

後日談として

俺は起きたら、木魚達磨の膝の上だった。うん、死にたくなつたね。あ、一ツ目他独眼鬼組は奴良組傘下に入ったらしいよ？・・・俺は頭を洗うのに必死だから、それどころじゃないけどね。

漢ってのは顔じゃないんだ！（後書き）

アニメ版しか見てない人とかいたら、今回の一ツ目エはどう思う
んだろうか。・・・アニメ版は、一ツ目を落とし過ぎだと思うんだ
よな〜

簡単な金儲けと言えば・・・エロス（前書き）

今回は色々な意味で酷いです。な〜んで、こんな考えついたんだらうか？

簡単な金儲けと言えば・・・エロス

「突然ですが、奴良組の資金が底をつきました」

奴良組の緊急会議にて、木魚達磨がそう発言した。俺たちは急に呼び出されて、一体何事かと思っていたが・・・え？どゆこと？

「・・・ちよつと待て達磨、今なんつった？」

「だから、資金が底をついたと言ったのです」

「ワシはそんなこと聞いてねーぞ！」

「言いました。しかし総大将が私の話を聞かず、沖兎猫と遊びに出て行ったのではないですか」

あー、そーいやこの前ぬらりひょんや狒々とお座敷に行く前に、達磨がなんか言ってたなー。早く行きたかったから、適当に交わして話聞かなかったんだっけ。

あの時は楽しかったなー、なんとって見渡す限り美女、美女、美女だったから・・・俺はチキンだから、手出せなかったけど。

「・・・まあ、うん。・・・すまん」

「・・・分かってくれればいいです」

「で、どうしてそんなことになったんじゃ？」

うーん確かに、何でそんなことになったんだ？今の奴良組は、結構収入があるはずなんだがな。

「・・・まず第一に挙げられるのが、組員が増え過ぎたことによる食糧難でしょうな」

「そついやそうだよな、組がデカくなつたつてことは、それだけ組員も増えたつてことだ。入ってくる収入も増えるが、出て行く支出も増えることになる。」

「ぶつちやけ今の奴良組は武闘派が多いからな、収入がない大飯ぐらいが多いんだよね。・・・俺も、半二ト生活してるから人事じやないけどな。」

「じゃが、それだけではあるまい？」

「はい、二つ目に・・・最近、無駄に宴会が多いことでしょう」

「あー・・・ぬう」

ぬらりひよんは反論しようとしたようだが、言い返せずに沈黙する。確かに、最近は無駄に宴会が多かった。

組が大きくなったから宴会、仲間が増えたから宴会、出入りに勝利したから宴会・・・etc。まあ、あいつらは単に馬鹿騒ぎしかつただけだろうが。・・・俺はまだあんまり酒飲めないし、乗り気じゃなかったがな。

「・・・そして、最後の要因ですが・・・」

木魚達磨が、もつたいぶつてそう言いやがる。これ以上、一体何があるつていうんだ？

「・・・誰かが、勝手に組の資金を費やしてるんですな・・・」

「何イ！？そんな奴がいるのか！？ふてえ奴だなあ！」

俺は立ち上がつてそう叫ぶ。組の金を勝手に使つたと？なんてふざけた奴だ！みんなもそう思うよな？・・・あれ？何で、みんなそんな目で俺を見てるんですか？

「・・・沖児猫、おぬし何か身に覚えはないか？」

ぬらりひよん・・・お前、そんなに俺を信用してないのか？・・・
ぐすん、悲しくて涙が出ちゃう。だって男の子だもん。・・・実際
自分で言つと、マジで気持ち悪いな。

「俺は知らないな」

「・・・信用できん。おい、誰か！沖児猫の部屋を調べろ！」

「おいーーーーっ！！」

何こいつ？マジで俺を信用してないの？何年一緒にいたと思っ
てるの？友情を感じていたのは、俺だけだったのか！

「総大将！沖児猫の部屋にこんなものが！」

「これは・・・春本？・・・こんなに大量に・・・」

「・・・沖児猫、これでもシラをきる気か？」

・・・ごめんなさい。そうです、俺ですよ。だってしょうがない
じゃないか、春本は男の子の嗜みです。あ、因みに春本っていうの
は、要するにエロ本のことね。

「・・・あんだ、最低ね」

「NOーーーーーオーーーー！！」

ぬらりひよん達にバレて怒られるのは、別に構わない。だが、雪
麗に見られたつてのは・・・もう死にたい・・・死ねないけど。

「よくもまあここまで・・・少なくとも、百、二百ではあるまい」

「・・・そらおとの智樹にゃ負ける」

「誰じゃそれは・・・」

何！？知らないのか貴様、あの全裸王を！！一期を最初から見て、二期のオープニングを見ることをお勧めする！『俺のベルが鳴る』
・・・俺一話しか視ずに死んだから、その後は知らないけどね。ニンフ可愛いよニンフ。

「一つ言つと、智樹の声はひぐらしの圭一にしか聞こえな、ぐあああううええあ！！！！」
「話そらしてんじゃないわよ」

くつ、やはり雪麗が立ちふさがるか・・・せつかく、馬鹿話で注意をそらしてたってのに。このままじゃ、俺へのお仕置き確定じゃないか。

「・・・確かに、俺は組の金で春本を買っていた」
「開き直った・・・」
「だがしかし！それにはちゃんとした理由があるのだ！！」
「！？？」

よし、食いついたな？こんな時にこう言われれば、普通の奴は続きが気になる。そんな中で暴論でも理屈が通れば、それは正論として通るんだ。考える俺、この場を乗り切るための言い訳を・・・！

・・・これで、どうだ！！

「・・・よく考えてみる？この世で一番簡単な金儲けの方法とは何だ？」

「そりゃあ・・・奪い取る？」

「シヤラップ！！例え極道でも、それはやっちゃいけない！！教育委員会からクレームがくるぞ！！」

「しゃら・・・？」

ぬらりひよんが怯んだ、今がチャンスだ！更にたたみかける！

「いいか？この世で一番簡単な金儲けつてのはエロス！何？エロスが分からない？馬鹿め、要するに雄の本能だ！！馬鹿な雄は必ずエロスに走る、それが例えどんなに金がかかってもだ！」

「お、おう・・・しかし、それが何に・・・」

「つまりはだ、俺たちはエロスで金儲けが出来るということだ！！俺がやっていたのは、そのための研究に過ぎない！！これから先の奴良組の未来のた、ぐあああううええあああううええあ！！」
「・・・長つたらしくてうるさい」

そりやねーぜ、せつかくごり押し出来そうだったのに。やっぱり圧倒的な暴力の前には、単なる屁理屈は効かないんだなあ・・・あれ？みつを？

「ま、何か理由があったとしても、これは処分ね」

「うおおおー！！それだけはーーーー！！！！」

俺がこれまで集めてきた春本たち、絶対に消させない！この時代では、俺の一番の楽しみなんだ
！

「ふうーっ」

「あ」

滅・・・
・・・雪麗の・・・呪いの吹雪・・・
沖児猫の春本・・・全・・・

「・・・うう、おう・・・えつぐ・・・俺の、春本・・・」

「・・・別に泣かなくても」

これが、泣かずにいられるか・・・？・・・いや、いられない。いいじゃないか、俺はそらおとの智樹と違って、エロ担当の友達やら何やらいないんだから・・・。え？そらおとを推し過ぎ？・・・今はそういう気分なの。

「・・・まあ、なんだ・・・頑張れ沖児猫！」

ぬらりひょん・・・そんな慰め方は止めてくれ、虚しくなってくるから。・・・あれ？でもこの状況だと、俺へのお仕置きは無しに・・・

「では、沖児猫は落とし前として、損害額を返済するように」

うん、そんな上手い話は無いよね！そうだと思っただき、俺が楽になるような展開なんて起こるはずがないんだよ。

・・・しかし、だ。この俺が、どうやって金儲けをするっていうんだ？俺には商才なんて無いし、元手金も無い。芸術方面で攻めようにも、俺は絵なんて上手く無いし・・・未来の作品パクるか？漫画とか小説で・・・無理か。

「・・・やはり、エロ方面だよな。簡単に釣れて、なおかつ金がわんさかっただけ」

でもこの組には、美女つて雪麗しかいないしな・・・。俺が雪麗をチラッと見ると、露骨に嫌な顔された。・・・うん、雪麗は使えない。

「・・・だとすれば」

この組にいる連中で、エロ方面で金を稼ぐ、そんな上手い方策があるのか……。ん？ちよつと待て、発想を変える沖兎猫、なにもエロってのは……。キューピーン！

「・・・これだ！」

「いらつしゃいませー、ホスト火主妬倶楽部奴良へようこそー」

そう、エロってのはなにも雄だけにあるものじゃない。女にだって、そんな本能ってのは普通にある。奴良組はぬらりひよんを始め、イケメンが数多いんだ。これを上手く利用するには……。やつぱりホストだろう！

「・・・なあ沖兎猫、なんでワシらが手伝わなけりゃいけないんじや？」

「いいじゃねえか、宴会みたいなもんだし」

「むう、それはそうだが・・・」

ちつ、まだ難色を示してやがる。だが、ぬらりひよんに抜けられる訳にはいかない。奴ほどのイケメンは、この組どころか世界にも殆どいねえ。

「ぬらりひよん・・・俺たち奴良組は、杯に関係ある奴はみな縁者、

兄弟・・・仲間の危機には立ち上がるもんなんだろう？」

俺は目をキラキラさせて、情に訴えかける作戦に出る。・・・俺のキャラじゃないんだがな。

「・・・裏があるような気がするが、まあいいじゃろ」

そう言っただぬらりひよんは、若干しぶしぶと承諾した。俺は見えないように拳を握り、この戦いの勝利を確信する。これが上手くいけば、春本を買い戻すんだ。・・・あ、やべ、これ死亡フラグじゃね？

まあ俺の憂いは杞憂だったようで、ホスト火主妬倶楽部奴良は順調な滑り出しを見せた。ぬらりひよん達は何気に楽しんでいるようで、やって来た女達との談笑は笑顔が絶えない。

ちなみにやってくる女達は、人妖ごちゃ混ぜだ。イケメンには人も妖も無いようで、色んな所から人の姫がお忍びでやって来ていた。・・・この国の未来は大丈夫なのか？

「おい、沖兎猫！ワシの所に妖名酒持って来い！」

「はいよー」

・・・今のを聞いてわかる通り、俺はただのお手伝いだ。いや、最初は俺もホストやってたんだよ？でも・・・色々、あつてね・・・

「ん？ぬらりひよん、それ何だ？」

「これか？この姫さんがくれたんだ」

ぬらりひよんは今まで無かった、犬妖怪の襟巻きをつけていた。それが・・・姫からの貢ぎ物だと？しかも美人。ふざけんなよ、イケメンはいいな本当に！

「ねえ、ぬらりひよんさん・・・もつと飲みましょう」

「ん？おう、飲もう飲もう」

おいおい、この姫さんの目は、マジでぬらりひよんに惚れてる目だ。駄目だよな、こついうホストに惚れて貢いじゃうってのは。将来いいこと無いぜ？うん。

そして俺はぬらりひよんの座敷（テーブルは無いからな）から離れ、他の奴らの座敷を見回ることにした。せつかくなんだし、他の奴らの接客ぶりも見てやらないとな。

「つと、ここは狒々の座敷か・・・」

狒々はこのホストクラブで、ぬらりひよんの次の売り上げを誇る売り上げを叩き出している。一体、どんな接客方法を・・・

「・・・つて、何やってんだよ」

「んー？おー、沖兎猫か。何つて、おぬしがやれと言ったのじゃろう？」

「・・・いや、まあそうなんだが・・・」

確かに、俺が接客しろと言った。しかし、ここまでしろとは言っていない。え？どんなのかって？・・・美女を5人も侍らせて、盛大なハーレムを築いてやがるんですよ。それは俺の役目だろう！

「あんたら・・・なんでそんな」

「えー、だってー」

「狒々様・・・とっても可愛いんですもの!」

「「「「「ねー?」「」「」」」」」

・・・さいですか、この世は不条理だ・・・。よし、こうなったら、あんまりモテる筈がない一ツ目の所に行こう! 数あわせのために、無理やりあいつもやらせてるんだよな。

「・・・えーっと、ここか?」

一ツ目の野郎の座敷は、確かここだった筈・・・。何やら余り声が聞こえないな。つまりは俺の予想通り、一ツ目はモテていないんだろ。当然だが。

「一ツ目エー、邪魔する、ぜ・・・なん・・・だと?」

「・・・沖児猫か・・・なんでワシが、こんなことせにゃならんだ・・・」

・・・てめえ、何言ってるやがる。こんなこと・・・だと?俺はしたくても出来ないんだよ! しかも、だ・・・お前の客、なんか心酔しきった目してるんですけど。

「・・・お客さん、あんたはなんで・・・一ツ目をそんなに見つめてるんですか?」

「様をつけなさい、様を! 一ツ目様よ!」

「あ、すいません・・・」

「何で一ツ目様が素晴らしいかって? そんなこと言い尽くせないわ!」

「いや、そんな」

「でもそうね、簡単に説明してあげるわ！一ツ目様はもうね、カッ
コ良すぎるのよ！多くを語らず、背中で語る・・・もう！どれだけ
私を悶えさせれば気が済むの！？」

「・・・・・・・・」

あー、駄目だこりゃ。ジャーニーズのファンとかAKBのファンで、
一番コアな部類の奴らと同じだな。・・・ぐすん、悲しくなんてな
いもん。いくらファンがついたからって、いつまでもその人気が続
くと思うなよ！？

で、それから全部の座敷回ってみたんだが・・・何気に凄いな、
ホストクラブって。この分なら、すぐに金が貯まるぜ！

「・・・・・・・・そう思ってた時期が、俺にもありました」

「・・・・・・・・悪銭身につかずって、こういうのを言うのかしらね？」

「・・・・・・・・別に、悪いことした訳じゃないぜ？」

「まあ、もうそんなこと関係ないじゃろ・・・」

・・・・・・・・そうだよな、別にもうそんなの関係ないよな。だって・
ホスト
火主妬倶楽部奴良の屋敷が、盛大に焼けてるんだもの。

「はっはっはっはっはっは、私以外がぬらりひよんさんと話す必要は無いのよー！ー！！！」

ぬらりひよんに貢いでいた姫さんが、発狂したように叫んでいる。聞いてわかる通り、彼女が放火の犯人だ。まあ、なんだ・・・要するに、ヤンデレ？

「怖いよな、ヤンデレは・・・俺も一時期さ、School Days 視て女恐怖症になったことあるぜ？」

「・・・おぬしの言っとることは、時々よく分からん・・・いや、殆どか」

何をう？・・・まあ、そうかもな。だって俺の話すことって、一応未来のことだしな。・・・空気読めてたら、もう少しましなのかもしれないが。

「・・・何にせよ、火主妬ホストは終わりね」

「くうっ、俺の春本・・・」

「諦める・・・」

その後俺たちは、姫さんの発狂した叫び声をバツクに、燃え続ける火主妬倶楽部奴良を、全焼するまで眺め続けていた・・・

あ、その後白蛇っていう土地神が奴良組に入って、奴良組の幸運が上昇、金の回りがよくなったらしい。そのため、俺へのお仕置きは見逃してくれたみたいだ。

・・・その点では白蛇に感謝するべきなんだが、奴に人間の彼女がいると聞いて感謝する気になれない。・・・なんで蛇に人間の彼女がいるんだ？

簡単な金儲けと言えば・・・エロス（後書き）

いやー、牛鬼仲間にする前に数話入れようと思ったただけなのに、
なんでこんなことになったのか・・・

もうー、二話オリジナルの話入れようと思ったんだけど・・・
ネタが思いつかないや。ガゴゼ先生とか出てないけど、使い方が
らないし・・・次は飛ばして牛鬼編に入るかも。

あ、なんかいいネタあったら教えてください。出来るだけやって
みますんで。

シンデレじゃない、シンデレだ！（前書き）

Fateの方が進まないと、反比例してこっちが軽々進む・・・
何故だろうか？

あ、今回初めてぬらりひょん視点があります。それに伴って、お
ふぎけがちよい少なめ。

ツンドラじゃない、ツンデレだ！

織田信長が急激に勢力を伸ばし、日本中が戦国真っ只中の時代。俺たち奴良組も、魑魅魍魎の主となるために勢力を拡大していった。そして現在、野望の一環として、奴良組は西の方に侵攻している。

「掬眼山の牛鬼・・・ねえ」

そして次に俺たちが狙いを絞ったのが、今の滋賀県あたりにある掬眼山に住まう、牛鬼という妖怪率いる牛鬼組だ。そいつらは日本の武闘集団の中でも一大勢力を誇っているらしい。

「噂によれば、牛鬼は実力、才能、知能、全てに優れていて、そう簡単には崩せないかと」

「なるほどのう、力があつて頭もいってか？いいねえ、ワシの百鬼夜行に加えてえな」

「・・・またかよ」

本当、いい加減にしろよ。俺奴良組に二十年いるけどさ、未だに雪麗以外の美女がいないんだぜ。宴会とかで酌するのだから、顔の無い女妖怪とかそんなんばっか。

・・・っていうかよく考えると、俺って結構長い間こいつらといたんだな。不老不死だから年老いちゃいけないけど、精神的には成長・・・してないか。雪麗に殺された回数は増える一方だし。

「で？牛鬼つてのはどんな妖怪なんじゃ？」

「此度の牛鬼は、本来の牛鬼とは違います。元々公家の子だった梅若丸という人間が、牛鬼を殺して成り変わったそうにございます」

「梅若丸・・・か」

そこから鴉天狗が、牛鬼の生い立ちについて説明した。平安時代において梅若丸は、幼くして父を亡くし、そして寺へ預けられて母とも別れ、母へ会いに行く旅の途中で牛鬼に襲われ・・・

「ま、よくある妖怪話だな」

「じゃが、それが実際の話だとすれば、相当な実力じゃろう・・・
ますます気に入った！ 実際に戦って、試してやる」

ぬらりひょんが凄いやる気になってるよ、まあ分かりきってたことだがな。俺以外の連中も、やれやれってしてるところから観るに同意見らしい。・・・雪麗がぬらりひょんを、うっとりした目で見てるのが気に入らないが。

「よし、こうなれば善は急げじゃ。沖兎猫、宣戦布告をしてこい」
「はあ!?!」

何考えてんだよお前？ 宣戦布告ってあれだぜ、えーっと・・・
宣戦布告。ごめん、他の例え方分からなかった。
とりあえず、宣戦布告の使者ってのは、酷い目にあわされることが多い。襲ってくる敵の兵士を生かす理由がないし、殺されるのが当たり前だ。

「なんで俺が、そんなもんやらなきゃならないんだ!?!」

つまり、俺がこういうのは当然だ。だから俺は悪くないし、他の連中に冷たい目で見られる覚えはない。お前ら本当になんだよ！
そんなに俺を虐めたいのか!?!

「いいじゃねえか、お前は死なないんじゃから」

「そういう問題じゃねえ!! お前知らないだろ!? 死ぬ時の痛み!!」

ホントさ、死ぬ時の痛みって、いつまでたっても慣れないもんだよ。いやむしろ、あんなもんに慣れたくないね。

・・・その割に、俺って死にまくってるけどな。よくまあ、あんなに自分から死に行けたもんだ、うん。

「・・・大丈夫だ、きつとお前ならやれるさ」

「だから止めるって」

「雪女も、沖児猫ならやれると思うよな?」

「・・・そうね、沖児猫ならやってくれると信じてるわ」

「やりますとも!!」

さあて、雪麗にいいとこ見せるために、ちやちやっとミッションクリアすっか!・・・あれ、なんか上手く乗せられた感が・・・まあいっつか、細かいことは気にしな〜い!

「さあ行ってくるか・・・って、狒々に白田坊、なんでお前ら俺をホールドしてんの?」

いつだったかな、こんな状況になった覚えがあるような・・・ああ、一ツ目が仲間になった時か! 懐かしいな、あん時は本当に痛かつ、・・・っておい!? まさか・・・

「じゃあな沖児猫、逝ってこい!!」

「字がちげええええええええええ!!」

予想通りこれだよ! 今回、俺って急ぐ理由何かありましたっけ!? あ、お前らニヤニヤと笑いやがって! 俺を虐めるのそんな

に楽しいか!!

「きつとお前の悪影響を受けたんじゃよー！ー！！」

・・・ああ、そうだろうな。全部俺のせいなんだよな・・・俺ってなんか不幸補正とかあんの？

ドオオオオオオオン！！！！

・・・着いたか。体が凄い痛いよ、痛みなんて通り越してるけど。ぬらりひよんさ、本当は俺のこと好きじゃねえだろ。

「何事だ！」

「何者かの急襲か!？」

あー、なんかあちらさんにも気づかれたみたいだな。っていうか、狒々と白田坊はコントロールいいな。見えてないのに、距離感とかどうやってつかんでるんだ？

「・・・こいつか」

何やら近くで渋い声が聞こえたので、痛む体をおして顔を上げる。

するとそこにいたのは、顔の右半分を髪で隠したイケメンだった。

「貴様、何者だ？ オレのシマに何をしにきた」

「・・・あんたが牛鬼か、俺は奴良組幹部の沖兎猫だ」

そう言った瞬間、牛鬼以外の周りの連中が騒ぎ出した。そりゃそうか、最近話題の奴良組の幹部が自分たちのシマに現れたんだもんな。

「・・・お前たち、騒ぐな」

「しかし、牛鬼様・・・！」

いたって牛鬼は冷静なものだ。動揺する配下たちを抑えて、静かに俺を分析している。うん、こういう上司がいたらいいよね。

「して、何故奴良組の幹部がここに現れた？」

「・・・んなもん分かってるだろ、宣戦布告に来たんだよ」

「なっ！」

またしても牛鬼組の配下どもが、俺の言葉にざわめく。だがやはり、牛鬼だけは冷静なままだ。

「・・・そうか、オレを潰そうと・・・ふっ、よかるう。真正面から叩き潰してくれる」

「牛鬼様・・・」

「皆の者、戦の準備だ！」

牛鬼の号令により、牛鬼の配下たちは散り散りに別れていった。まあ、奴良組との決戦に備えるんだろうな。・・・ところで牛鬼さん、なんであなたは刀を抜いて、私めに近づいているんでしょうか？

・・・一回言ってみたかったんだよね、このセリフ。痛みで上手く言えたかは分からないけど。

まあそんな馬鹿なことは置いといて、意識がもう保たないな。ぬらりひよん、後は任せた・・・

S I D E ぬらりひよん

沖見猫を使者として送り出したワシらは、ゆっくりと擦眼山に向かっている。それにしても随分とまあ、ワシの百鬼夜行もでかくなつたもんだ。

「総大将・・・沖見猫はどうなってますかね」

ワシの横を飛んでいた鴉天狗が、心配そうに尋ねてきた。沖見猫がどうなっているかじゃと？ そんなもん、悲惨な目にあってるに決まっとるじゃろう。

「ふん、いいのよ。あいつは大して戦闘に役立たないんだし」

雪女の雪麗が、清々したように吐き捨てる。まあ確かに、あいつは殆ど役にたたないもんな。

「・・・総大将、何で沖児猫は幹部なんでしょうな？」

「カラス、確かにあいつは戦闘に役立たないし、空気が読めないし、馬鹿だし、変態だし、言ってることの意味が分からないが、いいところも・・・」

あれ、あつたっけか？ 沖児猫のいいところ・・・

「ま、確かにあいつは幹部には向いてないでしょうね」

ワシが沖児猫のいいところを必死に考えていると、雪女が静かにそう言った。・・・うん、沖児猫は幹部にゃ向いてないよな。

「・・・でも、もし沖児猫がいなくなったら・・・つまらないことになるわね」

・・・そうだな、確かに沖児猫は殆どいいところがねえ。けど、あいつの行動は奇想天外で、ワシらの考えの斜め上に行く。

先の分かりきったことはつまらない。あいつがいるおかげで、ワシらは見えない未来を楽しむことが出来るんじゃない。

「それにしても、雪女が沖児猫をそんな風に言うとはな」

「別に・・・ただ単に、事実を言ったまでよ」

雪女はそっぽを向いて、不満そうにそう言った。これが沖児猫が言っていた・・・えーっと、つんどらとか言うやつか？

「・・・さて、あれが揆眼山か？」

「はい、その通りでございます」

沖児猫の話が終わった頃に、ワシらの目的の揆眼山が見えてきた。

山からは畏が立ち上っていて、ワシらを迎え撃つつもり満々なのがよく分かった。

「ふーん？ いい塩梅になってるみたいだな」

ワシらはそのまま山を登り、牛鬼のいる屋敷まで行くこととした。しかし、そこに辿り着く前に、牛鬼とおぼしき男が率いる軍団が現れた。

「・・・お前さんが、牛鬼かい？」

「そういう貴様は奴良組総大将、ぬらりひよんだな。・・・随分とまあ、おかしなことをしたものだ。器がしれると言つもの」

そう言った牛鬼は何か球体のものを掴み、ワシらに向かって投げた。ワシはそれを掴んで、それが何なのかを確認すると・・・

「・・・沖児猫」

それは使者として送り出した、沖児猫の首だった。目は完全に白目になっていて、ぴくりとも動かない。

「ふん、どういふつもりだったかは知らないが、配下の者を容易く切り捨てるなどは愚の骨頂・・・その者も、もっとマシな大将につけば、長く生きれたものを・・・」

「・・・御託はいいけどよ、こいつの胴体返してくんねえか？」

「・・・よかろう。死してまで辱められる必要はあるまい」

牛鬼が配下の者に合図をすると、すぐに沖児猫の体を持ってきた。随分とすっぱり斬ったようで、切り口がとても綺麗じゃった。

「雪女、こいつをつなぎ合わせといてくれ」
「了解」

ワシは雪女に頭と胴体、両方を渡した。雪女は裁縫とか得意だし、繋げるぐらい簡単じゃろう。沖兒猫は不死身だし、繋げばなんとかなる筈じゃ・・・たぶん。

「んじゃ、その間に・・・ワシらはやり合つとすつか」

ワシは刀を抜いて、牛鬼に向ける。牛鬼も刀を抜き放ち、上に掲げた。

「ふん、かかれえええ!!」

牛鬼の号令と共に、牛鬼組の連中がワシらに詰め寄ってくる。すると遅れてうちの連中も、楽しそうに応戦していった。

ワシは最初は様子を観るために、木の上に立って戦況を眺めることにした。観た限り、奴良組の方が地力は上なようじゃ。

「・・・で、牛鬼はつと」

肝心の牛鬼を探していると、屋敷の辺りで鴉天狗と戦っているようじゃった。鴉天狗は空中戦も出来るとあってなかなか強い筈じゃが、牛鬼はそれ以上の強さらしい。戦闘が長引けば、鴉天狗はおそらく負けるじゃろう。

「んじゃ、行くとすつか」

ワシは木から飛び降り、勢いをつけて牛鬼の下へ走っていく。す

ぐにその場にたどり着き、鴉天狗を蹴飛ばして牛鬼との間に割って入った。

「んな、総大将!？」

「細げえことは気にすんな。牛鬼、ワシが相手じゃ」

「・・・いいだろう。大将の首をとるのが、戦で一番簡単な勝利方法だ」

そしてワシらは切り結ぶ。一度二度ではない、何度も何度も切り結んだ。そして分かったのが、やはり牛鬼は素晴らしい才能と実力を持っているということじゃ。

「ははっ、楽しいなあ牛鬼？」

「・・・ふんっ！」

その後それぞれの配下が乱入して、サシでの勝負はそこで決着がつかなかった。そしてこの抗争は、始まってから三日三晩続いた。

S I D E 沖兎猫

「・・・んうゝ、ん？」

あれ、俺どうしたんだっけ？ 確か牛鬼に首チヨンパされて・・・俺ってさ、絶対主人公とかの扱いじゃないよね。このままじゃヤバいわ、ハーレム作ったり無双とかどんなに遠いんだよ。

いつそのこと、伝説の剣とか手に入れる旅にでも出てみようか。それ手に入れたら、もしかしたらチートになれるかもしれないし。

「あら、起きたの？」

「ん？雪麗か・・・俺の首繋げたのって雪麗か？」

ちよつとしてから気づいたが、俺の首がつながっていた。こんなことが出来るような奴は、奴良組の中だったら雪麗ぐらいだろう。・・・もし雪麗がやってくれなかったら、俺って首離れっぱなしだったのか？

「まあね。それより、あんたが起きたこと・・・総大将に教えないと」

雪麗は俺の状態を少し確認した後、さっさと立ち上がってそう言った。・・・確認していた時に顔が近くなって、嫌にドキドキしたのは秘密だ。

「つつーか、雪麗。結局、今どんな状況？」

俺は起きたばっかで、今何がどうなってるかは分からない。ここで雪麗にほっとかれたら、俺は何したらいいのってなる。

「牛鬼組と抗争中で三日目、もうすぐで勝てる、以上」

「纏めすぎだろ！？ っっていうかちよつと待て！」

「何？ これ以上あんたに使う時間ないのよ」

雪麗はマジで物凄くめんどくさそうに、俺に対して冷たい視線を向けてきた。・・・俺は、ちゃんと雪麗を攻略出来るんだろうか？
あ、何か今、無理だつて電波が届いた。

「あー、ぬらりひよんの所には俺が行く」

「はあ？ 何だよ」

「どうせ牛鬼と一緒にいるんだろう？ 仲間にするんだつたら、ぬらりひよんが俺を見捨てたつて思われたら困るじゃん？」

牛鬼を仲間にするのなら、ぬらりひよんの器を認めさせる必要がある。もし牛鬼が俺が死んだと勘違いして、ぬらりひよんが俺を使い捨てにしたと思っていいたら、あいつはぬらりひよんを認めないだろう。

・・・それに、一回あいつを殴っておきたい。ぶっちゃけ今回はマジで駄目なやつだった。それとももう一回、千年殺しをやってみようか？

「・・・まあ、そうね。・・・総大将なら、西にずっと行けば見つかるわ」

「ん、サンキュー！ じゃ行ってくる」

俺は雪麗から情報を得ると、寝転がされてた草の上から立ち上がり、礼を言ってから走って西に向かう。ぶっちゃけその辺の人間並の速さなんだが、ここ何年かの出入りで体力はそこそこついた。

ずっと走っていると、戦火の痕が見てとれる。でもそこらにいる妖怪で立っているのは奴良組の連中ばっかなので、雪麗が言う通り、勝利は目前なのだろう。

「んーつと・・・ああ、あれか」

大分走って、ぬらりひよん達を見つけた。俺がついた時は、ちよ
うどぬらりひよんが牛鬼の刀を折ったところで・・・ん？折れた刀
の部分、俺に向かつて来てませんか！？

「くっ、こんなもん避けて・・・」

「ちよつと、止まらないでよ」

「なっ！？」

ちよつ、何で雪麗さんが、俺の後ろにおられるのでございませよ
うか！？ まさか、一緒について来たのか！？ 何のために・・・
俺の不幸補正ですね、分かります。

「・・・いいぜ、来いやおらあああああああ！！ つく、ぐがあ
あああああああ！！」

刀の折れた先端は、ちようど俺の腹にぶち刺さった。あー、でも
さ、首斬られた時よりは楽だな。って、比べるものが間違ってるか。

「ちよつと、まさか私を庇ったの？」

「あ、ああ、気にすんな・・・怪我は無いか？」

「別に庇わなくても、吹雪使えば余裕だったのに」

「畜生め！！」

このパターンですか、自分の行動は全て無意味だったパターン。
・・・俺ってさ、色んな角度から虐められてるよね。

「おお、沖見猫！ 目を覚ましたか！！」

そして俺の悲鳴によって、ぬらりひよんが俺たちに気づいたようだ。とりあえず一つ言っておく、一言でもいいから謝ってくれ。

「まさか・・・首が斬れて、なお生きていると言うのか」

「ん、ああ、あいつは不死身だからな」

「不死身・・・なるほど、な」

牛鬼はやはり、俺が生きていたことを知らなかったようだ。ぬらりひよんの言葉を聞いて、妙に納得している。

「・・・奴のように不死身でもなければ、首を斬れば死ぬだろう。・

・・・さあ、オレを斬るがいい」

・・・何だ？ 要するに、自分を殺せって言ってるのか？ おいおい、どんなDMだよ。・・・DMでもそんなことは言わないか。

「はっ、何でワシがおぬしを斬らねばならんのじゃ？」

「オレは大将だ・・・ならば、斬られるのは当然」

「はっはっは、阿呆じゃのうおぬし。ワシの配下になるんじゃから、おぬしは大将ではないわ」

「なっ!?!」

まーた出たよ、ぬらりひよんの自己中で人のことを気にしない発言。こいつみたいなの奴ってさ、善く言えば器がデカいんだけど、下手すりゃ皆から嫌われるんだぜ？

「おぬしはやはり強いのが、うわさ通りの力と才能じゃ!」

「・・・」

「牛鬼、おぬしワシの仲間んなれ。のう？」

牛鬼の顔は、信じられないものを見たような顔だった。牛鬼が何を思ったかは、俺には分からない。だが、ぬらりひよんの器を感じたのは間違いないだろう。

「2日待つてやる、決心がついたらワシン所に来い。・・・行くぜ、おめえら」

ぬらりひよんはそう言い残し、牛鬼を置いて立ち去る。俺たちもそれに付いていったが、ふと牛鬼を見てみると、どうすればいいのか分からないような顔をしていた。

そして、2日後の夜。俺たち奴良組は、牛鬼組のシマのすぐ近くで天幕を張り、宴会というよりも馬鹿騒ぎをしていた。

「一番、沖児猫！ 一発芸やります！！」

俺はそんな中で、盛り上げ係りをやっている。何もしてなかったら酒を強要されるからな、俺も必死なんだよ。未来の知識があるから、幸い一発芸には事欠かないからな。パクリにもならないし。

で、随分と盛り上がっていると、天幕の入り口の辺りがざわめきだした。皆がそっuchiの方を見ると、牛鬼がゆっくり歩いてこちらに来

ていた。

そしてぬらりひよんの前まで来ると、静かに座り、杯を掲げた。これはつまり、奴良組の傘下に入るとのこと……

「……随分と、遅かったじゃねえか」

ぬらりひよんはそう言うが、あいつは絶対牛鬼が来ることを分かっていた。ニヤニヤと笑いながら、牛鬼の杯に酒を注いでいる。

「……では」

「おう」

ぬらりひよんと牛鬼は腕を交わしあい、盃を交わす。これで牛鬼は、俺たちの仲間……奴良組の一員となったわけだ。

「ワシがお前の親になってやるよ 梅若丸」

「あ」

そして、ぬらりひよんのこの口説き文句である。親の愛を覚えていない牛鬼にとって、この言葉はクリーンヒットな筈だ。牛鬼は感動したのか、目元に涙を滲ませながら、ぬらりひよんに頭を下げた。……そういや俺も、親の顔思い出せないなあ。元気でやってるのかな？……俺がいなくなつて、悲しんでるのかな？……どんな親だったかは覚えてないが、悲しんでくれてたら嬉しいなあ。

まあ、そんなしんみりは置いて……一つだけ言わせる。ぬらりひよん、確かお前百歳もいつてないだろ？ 牛鬼は平安時代から生きてるんだから、お前の方が年下だぜ？

ツンドラじゃない、ツンデレだ！（後書き）

今回、一番苦労したのは沖見猫のいいところ。ぶっちゃけ有るの
だろうかと小一時間考えてました。あんなんでいいのかな？

さて、牛鬼を仲間にしたところで・・・ぬらりひょん過去編が見
えてきました。あと二、三話すれば、瑛姫や羽衣狐（淀殿）が出て
・・・くるかな？

偶には俺もカッコ良く！（前書き）

今回は短いし、おふさげも殆どない。主人公何言ってるの？って感じ。

だが、遂に・・・遂に！

偶には俺もカッコ良く！

時は瞬く間に過ぎていき、日本の戦国時代は終わりが見えてきた。ついこの間は、関ヶ原の戦いがあったりした。俺も日本人として見学していたが、あれは酷い戦いだった。

西軍の方は、まともに動く軍が少ないし、味方の軍がいくつも裏切るし・・・前世で西軍好きだった俺としては、三成ー！とか吉継ー！とか叫ばずにはいられなかったね。

まあ、そんな関係ないことは置いて・・・現在俺たち奴良組は、名を上げるべく、日本全国を渡り歩いている。ちなみに今は、前世でいうところの和歌山の辺りだ。

奴良組も大きくなってきたことだし、魑魅魍魎の主となるべく京都に進出するため、更なる力を求めていると言ったところか。

「そして京都には・・・羽衣狐がいるんだな！？」

「まあ、正確には大坂じゃがな。大坂城の淀殿に憑いているらしい」

キターー！！ 羽衣狐！！ 原作は殆ど知らない俺だが、羽衣狐の容姿だけは知っている。全身黒づくめの、ナイスセーラー美女羽衣狐。彼女をチラッと見かけた時、なんかこう胸に熱いものがこみ上げてきたんだ。

その羽衣狐にリアルで会える、これが興奮せずにはいられるわけがない。・・・まあ、この時代にセーラー服があるわけがないし、淀殿ってどういうこと？ とか思わないでもないんだが、気にしないようにしよう。

「さあ、ぬらりひょん！ さっさと力をつけて、羽衣狐の下へ行くぞー！」

「・・・あんだ、やけに気合い入ってるわね？」

雪麗は俺が気合いが入ってることを、本当に疑問に思っているらしい。俺に微妙なる原作知識があると知らないわけだし、当然と言えば当然の疑問なのだ。

「なんだ、俺が気合い入ってちゃおかしいか？」

「・・・別に構わないけど」

ふっ、これ以上何も言えないことは計算済みだ。大丈夫だ雪麗、羽衣狐を落としても、お前は俺のハーレムに（ギロツ）ごめんなさい。

本日の出入りを終えて、俺は一人で海岸線を歩いていた。たまにはさ、一人でこういう散歩も乙なものじゃないか？

「ふんふんふーん・・・ん？ あれは・・・」

俺が気持ちよく鼻歌を歌いながら歩いていると、視界の先に5歳くらいの、頭に布を巻きつけている女の子がいた。海の方をずっと眺めていて、今にも飛び込みそうで・・・

「って、マジで飛び込んだ!？」

俺が観察している間に、女の子は海に飛び込んでしまった。ちょっと待て、俺の前でそういうのは無しだ!!

「っち、ふざけてんじゃねえ!!」

俺は急いで海に向かって走り、勢いをつけて飛び込んだ。こうみえて俺、泳ぐことは出来るんだよ。・・・犬掻きだな!

「ぐっ、ぷっ、はっ! おい、大丈夫か!？」

「・・・っぷ、ふぁ?」

俺は苦勞しながらも、なんとか女の子の下にたどり着いた。水をあまり飲んでなかったんだろう、女の子はすぐに息を吐いた。

「なん、誰・・・?」

「話は、ぷはっ、後だ! 今は、海から出るのが先!」

女の子は困惑の声をあげるが、俺はそんなのに構ってる暇はない。女の子を抱えたまま、少しずつ浅瀬の方に向かう。

そうして頑張って泳ぎきり、開けた砂場まで戻ることが出来た。

俺は荒れた息を整えて、女の子の状態を確認することにする。

「はっはっ、おい、大丈夫だったか?・・・ん? どうした?」

「嫌っ、見ないで!!」

女の子は小さな手で、自分の頭を必死に隠している。だが、その手で覆い隠せる範囲は限られていて、布が取れた髪の毛がない頭が見えていた。

「……ああ、そういうことか」
「……うっ」

俺が漏らした言葉に反応したのだろう、女の子は頭から手を離し、ポロポロと涙をこぼしだした。……俺としては、こんな状況になつたことがないから困るんだが。

この時代、いや全ての時代において、髪は女の命だ。しかし、元いた時代と違って、この時代はそれが更に顕著である。髪が長いことが美人の条件だし、無ければ嫁の貰い手がないとさえ言っている。

「……それで、絶望して身を投げた……ってか」
「……ぐすつ、うっ」

女の子は泣きながら、コクンと頷く。おそらくこの女の子は、長い間苦しんだんだろう。そして耐えきれなくなって、死という道を選んだ。

「なんだよ、そこで諦めたのか？」
「ぐすつ、ふえ？」
「俺なんかさ、最初の目的なんて達成出来んのかよ！ って状態だけどさ、まだ諦めてないぜ？ これから先状況が変わるかもしれないし、自分で道が切り開けるかもしれない」
「……」

「諦めて死ぬのなんぞ、馬鹿だろうっが何だろうっが誰でも出来る。でもな、それはただの逃げなんだ」

まあ俺は死ねないが、これは前世からの俺の持論だ。 実際問題、

俺は自殺する奴の心境なんか理解できないし、したくもない。

「そりゃ生きるのは苦しいし辛い。だけど、楽しいことが味わえるのも、生きてる時だけだ。死んだらその先にや、何も無い。本当の天国も地獄も、この世にしかねえんだよ」

俺は閻魔とか神とかがいることを知ってるが、あんな所には天国も地獄もない。生きているからこそ、痛みや苦しみ、快楽や楽しみがあるんだ。

「・・・私も、諦めなかつたら楽しめる？」

「そんなもん知るか、お前の努力次第さ」

俺のよく分からない話で、女の子の心境は少し変わったようだ。こんなんで自殺するのを止めるなら、俺っていうのも捨てたもんじやないかもしれない。

「・・・ま、最悪神頼みつても手じゃないか？ ほら、あれなんかいいんじゃないか」

そう言っただけ俺は、砂に突き刺さってる金色の仏像を指差す。何やら後光が射していて、いかにもって感じた。・・・何でこんな所に、こんなんがあるんだ？

「・・・うん！」

女の子は元気よく返事をして、その仏像を丁寧に拝んだ。この様子なら、もう馬鹿なことをしたりはしないだろう。

「ま、それでも駄目だったら、俺んどこに来な。18越えたらハ-

レムに入れてやつから」

「はーれ……?」

女の子は首をコテン、と横に傾けている。……こんな可愛い子に、俺は何を言ってるんだよ。流石に自己嫌悪するぜ……

「何でもないよ。……さて、俺はそろそろ行くわ」

「えっ?」

「仲間が待ってるからな。……なんなら家まで送るが?」

「……ううん、大丈夫。近いから」

「そうか。じゃあな、達者で暮らせよ」

俺は別れの挨拶をして、女の子から離れる。ここからなら、多分今夜の宿まで一時間くらいかかる。急がないと、また雪麗に晩飯を抜かれちまう。

「待って! あなたの……お名前は?」

俺が先を急ぐとすると、背後から女の子のそんな声。んー、どうすっかな? こういう時は……

「ふっ、名乗るほどの者じゃないさ」

「教えて、くれないの……?」

「……効かないのか」

こういう時はこのセリフってのが決まってるんだがな……普通はまだ言ってくるか。でもどうしよ、一般人に妖怪だって言わない方がいいだろうしな……

「……俺は、ゼロだ」

俺が思う、格好いい名前ランキング一位の名前を言っておくことにした。え？ 中二病臭すぎる？・・・いいじゃん、俺沖児猫だし。

「・・・是^で炉^ロ様」

またなんか変な当て字をされた気がするが、気にしないようにしよう。俺はそのやり取りを最後に、その場を離れた。

まあなんだかんだで一連のこれが、俺と後の髪長姫である宮子姫の出会いである。・・・初めてまともなフラグだった？

ちなみに、結局帰りが遅れた俺は晩飯抜きだったりする。事情を説明しても、誰も助けしてくれないんだよね・・・ぼくちゃん悲しい！

偶には俺もカッコ良く！（後書き）

はつきり言って誰得展開であろう、髪長姫フラグ。だが待ってくれ、過去編でフラグたてれるキャラってそう多くないんだよ。

次話で少し間を置いてから、次次話でぬらりひょん過去編の辺りに入っていきます。次は多分、おふざけが過ぎる感じになるかな？

食の恨みは恐ろしい・・・(前書き)

前の宣言を破って、一気にぬらりひよん過去編の序章へ・・・
伝説の剣探しに行くつてのを書いてたんですけどね・・・仕方ないじゃないか、面白くできなかったんだもの。

食の恨みは恐ろしい・・・

俺たち奴良組は現在京にて、妖狩りにより名をあげている。今も、生き肝信仰によって子どもや女性を狙う妖を倒しに回っているところだ。

生き肝信仰。赤子・巫女・皇女のように、より尊い命には妖の力を増幅させる力があると妖たちは信じ、それを求めているという。

「くだらないな、ただの迷信じゃねえの？」

「さあな、実際に効果があるかどうかは知らん。ただ、それを信じるとる奴が多いのは事実じゃ」

「・・・ふーん」

まあ仮に、効果が本当にあるのだとしよう。それなら妖が生き肝を狙うのも、まあ分からなくもない。

だが、俺は生き肝信仰なんて認めるわけにはいかない。当たり前だろう？ 生き肝信仰で狙われているのは、赤子、巫女、皇女・・・これ見たら、俺の言いたいことは分かるな？

そう、狙われているのは女・・・しかもよく狙われているのは、若くて美人な生娘だ。生き肝信仰なんてやつがはびこれば、俺のハレムの住人が減っちゃうんだよ！！

「行くぜぬらりひょん、妖狩りじゃあああああ！！！！」

「何？ その気合い・・・」

「まあ、気合いがあるのは良いこと・・・」

雪麗と牛鬼が、俺の後ろでちよい引き気味だ。前世の時も偶にあ

つたな、俺の意味不明なテンションで周りを引かせることが。

「はっはっは、またワケの分からんことを考えとるんじゃろ？ いいじゃねえか、今日も派手に妖狩りで行こうぜ」

周りの連中が根こそぎ引いている中、ぬらりひょんだけは俺に理解を示す。だが待て、お前は分かっちゃいない。巫女や若い生娘の命を守ることが、ワケの分からんこととは何事かあ！！！！

まあそんなことを口に出しはしないが、俺たちは普通に妖狩りに向かう。ちようど少し歩いた所で、妖に追われている赤ん坊を抱えた女性がいた。

「ふっ、いたぞ沖児猫。さっさと狩るか」

「・・・いや、待てぬらりひょん。あと少し、様子を見よう」

「ん？・・・まあ、別に構わんが」

ぬらりひょんを始め奴良組の面々は、首を傾げながらも俺の言うとおりにする。そうすれば当然、女性は妖たちに追いつかれるワケで・・・

「うわああ・・・ヒイツ、お、お願い・・・こ、この子だけは・・・」
「ギヒヒ・・・よくやった、ぬりかべ、三途魚・・・赤子の生き肝・・・食らえば百人力の妖になるとい・・・」

ぬりかべと三途魚という妖に足止めされたらしい女性は、他の犬の妖みたいなのがしゃばってる妖軍団に捕まった。自分の命の危険を知っていながらも、赤ん坊の命乞いをする・・・うん、いい女だ。

「よし、いまだぬらりひょん!!」

「おっ」

俺のゴーサインを受けたぬらりひょんは、一気に近づいてぬりかべを切り裂く。その時に、俺もちゃんとぬらりひょんの横で刀を振る振りをしておいた。

「ハア　、ハア　、ハア　、!?、!?」

女性は涙を流しながら、何が起こったか分からない顔をしている。・・・色々あって、着物の肩の所がはだけているのがセクシーだ。

「ぬ・・・奴良組だああああああ!!　　奴良組が出たぞお
おおお　　!!!」

敵方の妖が、俺たちの出現に畏れをなしているようだ。ぶっちゃけさ、今の奴良組って凄いいポジションに来てるんだよね。多分、羽衣狐に次ぐ戦力ぐらいになってんじゃね?

「さあて今日も、行こうか・・・お前ら、妖狩りだ」

ぬらりひょん、その顔でその言い方はイケメン過ぎる。最近リニユールした服も相まって、実に素晴らしい畏を纏ってるよ。

ぬらりひょんの号令によって、奴良組の組員が一斉に前に出る。中でも一番速かったのは牛鬼、気合いの声と共に犬妖怪を切り捨てた。

「牛鬼だ、抜眼山の・・・牛鬼だぁー!!」

そうそう、牛鬼って何気に有名人・・・有名妖なんだよね。長い間牛鬼組とかやってたし、武闘集団として名が知れてるらしい。

「貴様らの大将は誰か！？ この牛鬼が相手になるぞ！！」

悪いが牛鬼、さっきのやり取りを見る限り・・・お前の持つてるそれが大将じゃないか？ 実際は知らんが、その可能性は結構あるぜ？

「はは、やはりお前が一番のじゃばりか」

ぬらりひよんは笑いながら、ゆっくりと牛鬼の下に歩いていく。こんな雑魚集団、これ以上自分が手を出すまでも無いということだろう。

「よこせ、えりまきにする」

「・・・・・・・・お役に立てて光栄・・・」

ぬらりひよんがよこせと言ったのは、牛鬼が殺した犬妖怪。前に使ってたえりまきが駄目になったので、新しいえりまきが欲しいのだろう。・・・えりまきコレクションとかし始めないだろうな？

「ひ・・・引け！！ 引けーーーー！！！！」

そんなこんなしてる内に、敵方は逃げて行った。はっきし言って、奴良組に勝てる妖軍団は、もう羽衣狐勢力ぐらいしかいないだろう。

「ふふ・・・ステキですう」

「だるう雪女、これがワシの組じゃ」

「いいえ、あなたがステキなの（はーと）総大将様……」
「やめろ、ワシを殺す気がい？」

雪麗がぬらりひよんに近寄り、そのまま口吸いに移行しようとするが、ぬらりひよんは手で雪麗の顔を押さえている。まあ、雪麗と口吸いしたら死んじまうからな。

「あら、一度ぐらいいいじゃない。妾と口吸ひ」

「……うん？」

「……どうしたの？」

「いや……いつもならここで、沖兎猫が何か……」

「……確かに」

……気づいたか、しかし俺の目的はもう完遂する！！ お前たちが入り込む余地など、微塵たりともある筈がない！！

「ハア……ハア……妖……助けて……見逃して……」

「俺には、君が一体何を言ってるのか分からないな。俺が、君を害するとしても？」

「ハア……ハア……え？」

「俺は君の、自分より赤ん坊を守る姿勢に感動したんだ。だから、俺が君を殺すなんてもってのほか。いやむしろ、ずっと守ってやりたいとすら思っている」

俺は自分が出来うる限りの笑顔で、助けた女性を口説きにかかる。そう、全てはこのため。雪麗とぬらりひよんはいつもの事だし、口吸いする筈がないのでほっといた。そして助けるのをギリギリにしたのも、ぬらりひよんの横で手を貸した振りをしたのもこのため！
！ これなら、落とせる ！

「わ、私には・・・子どもも、夫も・・・」

「子ども？ はっはっは、可愛いじゃないか。夫？ 大丈夫、今以上に幸せにしてあげ、らあくおふあああああ！！！！」

「・・・止めなさい」

なんでだ、よ・・・いいじゃないか、夢見たって・・・俺はさ、未だにハーレム作れてないんだよ？・・・いや、ハーレム要員一人もないけど。

「わ、私と、この子の生き肝が・・・欲しいのですか!？」

「ん・・・？ そんなワケなかるう、ハハハ」

女性は困惑しながら、ぬらりひよんに問いかける。・・・まあ、妖がこんなコントをしてたらそうなるわな。ん？ 俺はもう復活したよ？ 最近、本当に復活スピードが神がかってきたんだよ。

「ゆけ・・・生き肝なんかに興味はない。ましてや、しょんべんくせえ赤子の肝なんてな」

女性はすぐに立ち上がって、俺たちに礼をして走り去って行った。・・・ぐっ、せっかくの美人で落とせそうな人が・・・

「ワシは、魑魅魍魎の主になるんじゃないからな」

女性の去り際の背中に、ぬらりひよんが言葉を投げつける。きつとき、イケメンっぷりなら一番だと思っぜ？

「（ぐぎゆるうう）・・・腹、減ったな」

「ん？ おぬしもか沖兎猫、ワシも何か食いたいと思っと思った」

本日の妖狩りを終えての帰宅途中、俺とぬらりひよんは空腹を感じた。そういや、昼は雪麗に凍らされて抜き、夜も雪麗に凍らされて・・・あれ、俺ってどれだけ雪麗に凍らされてるんだ？

「なら、その辺の屋敷で食ってくか。おい、てめえら！ ワシと沖兎猫は寄る所があるから、先にけえってな！！」

ぬらりひよんがそう言うと、他の連中は今日のねぐらに帰って行く。雪麗と鴉天狗は気にしてたようだが、結局は先に帰って行った。

「さて、どの屋敷がいい？」

「ん、やはりこの近辺が一番デカイ屋敷がいいじゃろ」

そうしてぬらりひよんは高い木に登り、一番デカイ屋敷を探す。それはすぐに判別がついたようで、俺を拾ってから屋敷に向かう。

「おお、なかなかデカイな」

ぬらりひよんが俺を担いでたどり着いた屋敷は、なかなかの広さを持つ豪邸だった。奴良組の本家と比べても、こっちの方がデカいかもしれない。

「おっじゃましーす」

「はっはっは、わざわざ言わんでもよかるう」

ぬらりひよんの能力は、そこに居ても誰にも気づかないという能力。それは周りの者にも作用し、俺たちは誰にも気づかれずに屋敷に入れる。・・・魑魅魍魎の主の能力が、無銭飲食ってのはどうかと思うが・・・

「ん〜つと、飯は無いかな・・・お、ぬらりひよん！ この部屋にあるっばいぜ」

俺とぬらりひよんは屋敷を探索して、飯を見つけることに成功した。なかなか豪華な料理で、俺たちは満足してそれらを平らげた。

「他に何か・・・あ、これカステラじゃん」

「貸す寺？・・・ああ、南蛮の菓子か」

「うめえんだぜ？ お前も食ってみろよ」

俺はカステラを食べながら、ぬらりひよんにもカステラを勧める。ああ美味しい、流石に未来の方が美味しいが・・・それでも今生で一番美味しいかもしれない。

「うむ・・・ほう、なかなか美味しいな」

「だろ？・・・あ、まだまだあるな。よし、全部食べ尽くしてやるか」

カステラは何気に大量にあったが、あまりの美味さにどんどん食べ進めていく。そうして気づいた時には、俺たちは全部食い尽くしていた。

「ふう、満足だ・・・よし、帰るか」
「おお、そうする、ん？」

俺たちが満足して帰ろうとしていると、部屋に公家の格好をした男が入ってきた。おそらくはこの屋敷の主だろう、キツネみたいにつり上がった目で癖があるが・・・なかなかのイケメンだ。

「・・・・・・・・ボクの、かすてらが・・・」

ああ、カステラ楽しみにしてたのね。悪いが、俺たちが食い尽くしてしまつたよ。まあ俺たちの姿はコイツには見えないし、悠々と帰るとしよう。あばよとっつぁ〜、んぐふあああああ!!!

「・・・・・・・・キミらやね？ ボクのかすてら食つたのは・・・」

な、なんで・・・俺たちが見えるんだ!? ぬらりひよんも唾然としてるし・・・というか、俺今なにされた？

「・・・・・・・・ちつ、陰陽師か」

「そうやで、妖くん・・・どこの妖か知らんけど、覚悟はええなあ？」

ああ、陰陽師ね。そりゃ、俺に致死量ダメージ与えたのも納得だわ。・・・だが、陰陽師でもぬらりひよんの能力が効かないのはなんですか？

「食いものの恨みは・・・恐ろしいんやで〜」

「それだけでワシの畏を攻略したのか!？」

陰陽師ってすげえ、食いものの恨みだけで俺の空気殺し(シリア

スブレイカー）なみの力を得るとは・・・あれ、俺の力の意義が更に減った？

それから、激しい攻防が始まった。陰陽師はぬらりひよんを滅茶苦茶に攻撃し、ぬらりひよんは真・鏡花水月（認識ずらし）でよけていく。

俺？ ぬらりひよんに捕まってさ、よけられない攻撃のガードに使われてるよ？ 今も、ぐっ、式神、ばひっ、に・・・ぐふううう
ああああ！！

ま、結果的に言えば、ぬらりひよんと陰陽師は和解した。余りに俺が可哀想なので、陰陽師も流石に萎えたらしい。

「ボクの名は花開院^{けいかいん}秀元、芦屋家直系京守護陰陽師、花開院家十三代目当主の秀元や」

「ワシは奴良組総大将、ぬらりひよんじゃ。・・・コイツは、幹部の沖見猫」

「ああ、ぬらりひよん・・・それで」

俺が倒れて一言も話せない内に、それぞれ自己紹介が終わったよ
うだ。あんたらさ、もう少し俺に優しくしてもいいんじゃないか？

「ぬらりひよんに沖見猫、なんや言いにくいな・・・ぬらちゃんにちゅうちゃんてええか」

「いいんじゃないか？」

いや、よくねえだろ！？ 何だその呼び方、寒気がするわ！！・・・まあ、今俺は喋れないから、多分確定してしまっただろうが。

「かすてらを食われたんは腹立つけど・・・なんやキミらおもしろいな」

「ふっ、機会があつたら返してやるよ」

「そうか、楽しみにしてるで」

その言葉を最後に、ぬらりひよんは俺を背負って帰ろうとする。だが俺たちが帰る前に、秀元は思いついたように手を叩いた。

「あ、兄さんに遭つたら気をつけてな」

「兄さん？ おぬしが当主なんじゃろ？」

「ボクの方が才能あつたからなあ・・・あ、兄さんや」

秀元が指差した方を見ると、何やらハゲがぶるぶると震えていた。ああ、あれは不幸属性の匂いがするよ。当主になれるのも納得だ。

「なぜ、花開院本家がこんなに荒れとるんじゃー！！ 秀元おあー！！」

「ああ、兄さんこつちや」

なんでこのお方は、わざわざあのハゲを呼ぶんでしょうか？ 絶対、一悶着あるのがわかりきってるだろうに・・・

「・・・秀元、そいつらは妖じゃないのか・・・？」
「そつや ぬらりひよんのぬらちゃんに、沖見猫のちゅうちゃんや」
「秀元おおーーーー！！！」

何故妖と親しくしとるんじやー！ という叫びを聞きながら、俺を背負ったぬらりひよんは花開院本家を立ち去る。分かったよ秀元。お前、ただ兄貴を弄りたかっただけだろ？

食の恨みは恐ろしい・・・（後書き）

恐らくは、次で瑛姫への夜這い編になるかと。羽衣狐様は・・・
その次、かな？まあ予定は未定なので、当てにはなりません。

瑛姫とぬらりひょん + (前書き)

最近気づいたんですが、ぬら孫ってそこまでフラグたてるキャラじゃないですよね？ 現代いたら、誰にフラグをたてればいいんだ……？ (つららは、自分的には有り得ないんで)

瑛姫とぬらりひょん+

「京で一番の美女と言えば誰じゃ？ 鴉天狗」

「拙者が知る限りでは、公家の瑛姫という者でしょうな。噂によれば、京で一番の美貌らしいです」

「よし、行くか」

「ちよつと待てええー！ーい！ー！ー！」

今の会話を考えてみる、ぬらりひょんは京一の絶世の美女に会いに行くということだ。つまりは、その美女を落としに行く・・・お前ってそんなキャラだったっけ？ まあそれは置いて、俺も行きたいですっ！！

「俺も行くぜぬらりひょん、瑛姫ってのはどの屋敷に居るんだ？」

「・・・ついてこんでいいんじゃないかな」

ばっか！ 俺がいないで、話が進むと思うなよ？・・・進むか。あれ、もしかして俺ってさ・・・主人公じゃなかったりする？

まあなんやかんやあって、瑛姫が住んでいるという屋敷に着いた。なかなかデカい屋敷みたいだな、門の所に門番がいる時点であれだ

が。

「なあ、なんか農民がたかってるんだが」

「ふむ、何か直談判したいことがあるんじゃないか？」

瑛姫が住んでいる屋敷の門には、あまりいい格好とは言えない農民が集まっている。それらの農民を、門番が蹴って追い返しているのはムカつくな。

俺たちはぬらりひよんの能力で彼らには見えていないが、とりあえず頑張れとエールをおくっておく。……ん？ 集まった農民が抱えてる子どもに、何やらしみがあるな。何かあるのか？

「流行り病じゃろう、薬を嘆願してるのかもな」

「ふうーん？ そんなもんかね」

薬って言えば、医者が持つてるものだと思ってたんだが。俺はその辺の細かいことは分からないから、そうなのかもしれないな。

俺がそんなことを考えてる間に、何か小汚い妖が門の前に現れた。いいのか？ あんな普通に人前に出て。門番も何か困惑してるみたいだが。

「ぬらりひよん、アイツ何か分かるか？」

「知らんが……金が出せるってことは、金霊かねだまじゃないか？」

金が出せる……だと？ 本当だ、持ってるお椀から小判が溢れてやがる。……あの妖、奴良組にスカウトしようぜ？

「あ、首が伸びた」

「ほお、意外とや……伸びた先で殺られたらしいな」

「早っ!？」

まったく、惜しい奴を亡くしたもんだ。アイツが組に入っただけ、俺たちは好き勝手に色々な物が買えたのに……まあ、奴が遺していった小判は拾っておこう。

「あれ、アイツは何がしたかったんだ？」

「……分かんらん」

まあ、瑛姫の屋敷になんか用があつたんだろが……別に小判を出す必要はないよな？ 妖つてのは、偶にワケが分からないことするよな……俺もか。

俺とぬらりひよんは門番を馬鹿にしながら門をくぐり、瑛姫の屋敷に入る。しばらく屋敷を探索していると、とある部屋にたどり着いた。

「お、ここ宝物庫じゃね？」

その部屋は、見るからに高そうな品を溜め込んでいる部屋だった。どう考えても、これは宝物庫だろう。俺には、使わない品を溜め込む理由ってのが分からないがな。

「巻物、屏風、掛け軸、地球儀……いらないだろ、こんなの」

「確かにな、人間の愚かなところじゃ。まったく風情がない……ん？ おお、これはいいのう」

そう言いながらぬらりひよんが手に取ったのは、なかなか高級そうなキセル。確かにあれはいい品だ、何より格好いい。中二病患者にとって、マントと刀とキセルって凄いそそらない？ あとは、眼

帯とか顔に傷とか。

「ぬらりひよん、俺の分はないか？」

「おお、あるぞ。ほれ」

「サンキュー」

「さんきゅーとは・・・礼の言葉じゃったか」

「そうそう、ありがとさん」

ぬらりひよんはすぐに新しいキセルを漁りだし、俺に投げ渡してきた。ぬらりひよんのやつと同じくらい、このキセルも上物っぽい。俺はそのキセルに火をつけ、先ずは香りを楽しんでみることにする。・・・うん、煙たい。香りを味わうのは止めて、普通に吸ってみる。

「・・・うん、不味い。よく吸えるな、こんなの」

「初めはそうかもな、ワシは気にならんが」

そういうものか？ まあ、今の俺は吸えないな。とりあえず、貰っただけ貰ったところ。使われずにこんな所に置かれるよりも、俺が持つてた方が有意義だよ、多分。

「・・・っと、もう日が落ちてるぜ？ 目的の姫の所に行こうや」

「おっと、そうじゃったな」

今気づいたが、すでに外は真つ暗だった。あまり遅くなったらあれだし、さっさと瑛姫を見に行かないと。

俺とぬらりひよんは、瑛姫がいる部屋を探していく。探している最中に気づいたが、何故かこの屋敷には陰陽師がゴロゴロいた。まあこんなご時世だし、ボディーガードみたいなもんか？

で、最終的に瑛姫を見つけた。部屋から少し出て、何やらため息をついたりしている。俺とぬらりひよんは胡座をくんで、それをじつくりと眺めておく。月夜の下で憂いでいる美女・・・うん、素晴らしいね。

「お父上も変わられてしまった・・・」

「思いついた憂い顔が、これ程月夜にはえるとはな」

月夜の下で独り言を漏らした瑛姫に、ぬらりひよんが突然話しかけた。こちらから話しかければ、俺たちの姿は見えるからな。

「な・・・何奴!? くせもの・・・あ・・・」

瑛姫が騒ぎ出す前に、ぬらりひよんが瑛姫を押し倒した。それに伴って、おそらくは護身刀だろう、瑛姫が持っていた刀の鞘が宙を舞っている。・・・ん? 押し倒した?

「成程、噂どおり絶世の美女だ。ワシはお前が欲しい」

それが　ぬらりひよんと瑛姫の出会いだった・・・じゃねえよ!!!　ぬらりひよん、ちよ、お前何やってんの!?

「ちよ、おい、ぬらりひよん!？」

「うるさいのお・・・黙っておれ」

ぬらりひよんは俺を無視して、瑛姫の方に向き直った。瑛姫は涙を流しながら、ジタバタと抵抗をしている。そりゃそうだ、姫様なんだからこんな経験ある筈がない。

「いやっ・・・痛いっ、離して下さい!　何を・・・何をなさるの

です!!」

「フン・・・カラス天狗の言う通り、いい女じゃ・・・」

ぬらりひよんは瑛姫の抵抗など気にせず、瑛姫の顔を観察している。あいつにとつて、ただの少女の抵抗なんて抵抗の内に入らないだろう。・・・って、呑気に解説してる場合じゃねえ!!

「ちょっと待てぬらりひよん!! お前、そういうことには、順序というものがあってだな!!」

「順序も何もないわ、ワシには何の関係もない」

いや、関係大有りでしょうが!! 何だその自己中発言は? 多分、この世全ての女を敵に回すぞ?・・・イケメン補正で、むしろ有りなのかもな。

「いや、だがな・・・って、ぬらりひよん
「ん?」

俺と話していて気が抜けていたのか、瑛姫が振るった護身刀がぬらりひよんの腕を傷つける。ぶっちゃけそんな傷、妖には意味ないんだがな。ぬらりひよんは「フン」と鼻を鳴らして、余裕の表情を・・・

「な!?!」
「!?!」

余裕の表情をしていたが、それはすぐに驚愕の表情に変わる。刀で斬られた傷から、ぬらりひよんの妖力が溢れているのだ。少なくとも、俺はこんな現象見たことがない。

「・・・おいおい・・・それは妖刀か」

こんな状態になっても、ぬらりひよんは取り乱すことはない。それは凄い器だとは思うのだが、少しぐらいは焦ろうぜ？ せっかく溜めた力が、根こそぎ無くなっちまうぞ。

そんな妖力が抜けていつているぬらりひよんに、瑛姫が慌てて近寄って行った。そしてそのまま、ぬらりひよんの傷口に手を当てて・

「・・・何だ、これ？」

「・・・」

「ハア、ハア、と・・・止まった・・・」

瑛姫が手を翳すと何やら光が溢れて、ぬらりひよんから出て行く妖力がピタリと止まった。・・・どうということだ？ 瑛姫つてのは、何かの能力持ちってことか？

傷の癒えたぬらりひよんは、信じられないものを見た顔で瑛姫を見ている。何十年一緒にいたが、俺が殆ど見たことがない貴重な顔だ。

「お前・・・何だ・・・？」

「ハア、ハア」

ぬらりひよんの問いには、おそらく二つの意味が込められている。瑛姫が持つ能力と・・・襲った相手を助けた事。普通なら、そんなことしないよな。

俺が蚊帳の外におかれ、ぬらりひよんと瑛姫が見つめ合っている中、どこからかドタドタと誰かが走る音が聞こえてきた。

「姫君！！ ごぶじですか！？」

この声・・・秀元の兄さん（ハゲ）か。まあこの辺で陰陽師っていったら花開院家だし、あれだけ陰陽師がいる中であれがいてもおかしくはない。

秀元の兄さん（ハゲ）の声を聞いたぬらりひよんは、瑛姫を離して立ち上がる。その時に瑛姫が「あッ・・・」って言ったんだが・・・流石はぬらりひよんと言っておこう。

「ぬらりひよん」人はワシをそう呼ぶ

ぬらりひよんは先ほど入ってきた扉に手をかけ、振り向きざまにそう言った。俺もそれに合わせて立ち上がり、自己紹介しておくことにする。

「俺は一応、こいつの配下の沖兎猫だ。よろしくな、瑛姫」

「・・・あ、はい」

・・・まさかとは思つが、俺のこと忘れてたりしました？ 確かに、ぬらりひよんの存在感には軽く負けるけどさ・・・俺もちつとは傷つくぜ？

俺が軽くへこんでいると、ぬらりひよんにさっさと来いと急かされた。お前もさ、一回ぐらい虐められてみるよ。俺の気持ち分かるから。

「あんたおもしろいな、また来るぞ」

「つたく・・・じゃ、またな瑛姫」

最後にそう言い残して、俺たちは瑛姫の屋敷をあとにする。一応

俺たちは侵入者なんだが、そんなことを感じさせない不敵な発言だよな。うん、少し格好よくね？

「・・・沖兎猫」

「ん、なんだ？」

今日のねぐらに帰る途中で、ぬらりひよんが俺を呼んだ。いつもの薄ら笑いを止めて、真剣な顔つきだ。

「ワシは、あの姫を落とすぞ」

「ふーん・・・はっ!？」

あまりに自然に言うもんだから普通に返してしまったが、こいつは今なんて言った？ えーっと、つまり瑛姫をぬらりひよんが落とすって・・・はあっ!？

「ちょ、どういうことだ!？」

「そのままじゃ、ワシはあの姫に惚れた。だから、たとえ時間をかけても落とす」

「・・・まあ、頑張れよ・・・？」

「おう」

ぬらりひよんは笑いながら、俺の前を歩いていく。・・・ぬらりひよんは有言実行の男だ、必ず瑛姫を落としかかるだろう。・・・雪麗が荒れるんだろうなあ、今から心構えだけはしとこう・・・

瓊姫とぬらりひょん + (後書き)

さて、次はぬらりひょんの求婚、次いで羽衣狐がいる大坂城へ・
・髪長姫の口調とか性格とかどうしようかな？ 彼女原作で話した
セリフ、おまけ合わせても十無いですからね・・見切り発車が過
ぎたか。

俺が恋のアドバイス？正気か？（前書き）

はい、またもや前言撤回で、羽衣狐までいきませんでした。何故か、当初入れる予定がなかった恋愛話が多めになったせいで・・・オレ、そういうの苦手なのにな・・・まあ、スルー推進で。

俺が恋のアドバイス？正気か？

ぬらりひよんの瑛姫夜這い事件から幾日も経ったある日、俺は雪麗に呼び出された。一体、何の用だ？・・・はっ、まさか愛の告白！？

「んなわきゃないでしょ」
「がふっ、ですよね」

この何も言っていないのにツッコミが入る感じは、俺たちが如何に心が通じ合って、かひっ、・・・悪かった、冗談が過ぎました。

「で、結局何の用だ？」
「・・・総大将ぬらりひよんのことよ。・・・今日も、例の姫の所に行ってるんでしょ」
「・・・ああ」

そのことが、いつかはくるだろうと思ってたけど・・・まあ、もう限界だつてところか。雪麗はあれでも、ぬらりひよんにぞっこんだからな。

あの日からぬらりひよんは、毎日かかさずに瑛姫の所に通っている。下手したらストーリーカー呼ばわりされそうだが、まあまだ順調な通い婚状態だ。

「うーん・・・あいつは、一度決めたことはやり切るやつだからな。多分、瑛姫を落とすまでは諦めないだろうなあ」
「・・・そうよね」

そう言って不安そうにする顔は、完全に恋する乙女だ。はっきし

言って、こういうのは好きじゃないんだが・・・まあ、仕方ないか。
「はあ、そんな気にするなって。お前が、頑張っただけを振り向かせればいいだろう？ そんな辛気くさい面してたら、出来るもんも出来なくなるぞ」

あー、俺の柄じゃねえ。なんで雪麗の応援してるんだ？ これで下手したら、ぬらりひよんのハーレムが完成するぞ・・・

「・・・ふん、偶にはいいこと言っじゃない」

「偶には、じゃないがな」

「ま、そういうことにしといてあげるわ」

「なんだよそれ、認めてない風に聞こえるぜ？」

「認めてないもの」

そんなたわいない会話で、俺たちは笑い合う。なんだろうな、俺と雪麗のこの関係は。恋愛関係には発展しない、いわゆる幼なじみの悪友ポジかな？

「さて、と・・・じゃ私は今夜の食事の準備をしてくるわ」

「おお、楽しみにしとく」

「ええ、楽しみにしてなさい」

最後にそう言い残して、雪麗は屋敷の厨房へ向かっていく。俺はそれを見送って、暇つぶしに街をぶらつくことにする。瑛姫の屋敷から拝借したキセルに火をつけ、もう一回チャレンジしてみる・・・
うん、不味い。

で、街をぶらついて買い食いやら何やらやってた。流石に日本で一番な場所だけあって、いいものが揃っている。・・・こういう時に彼女がいたら、滅茶苦茶楽しいんだろうな

「おい、沖見猫」

「ん？ ぬらりひょん・・・って、お前何やってんの？」

急に声をかけられたので振り向いたら、声をかけたのはぬらりひょんだった。それはいいんだが・・・なんでこいつは、瑛姫をお姫様だっこしてるんだ？ いや、姫なんだからそうだろうが・・・羨ましいぞこんちくしょう!!

「あの・・・どうも」

「何、瑛姫を借りてきただけじゃ」

「それって誘拐じゃ・・・」

そこは越えちゃいけない一線だったり？ まあこいつに常識を言っても、絶対に聞き入れようとはしないだろうが。瑛姫はそこまで嫌そうにしてないから、親にバレなきゃいいのかな？

っていうかさ、ぬらりひょんの能力で二人は他の奴らからは見えないんだよな・・・その手のプレイが好きな奴にとって、こういうのはどうなんだろうか・・・俺って脳内ピンク色？

「それはそうと沖見猫、島原にさっさと帰るぞ。今日は瑛姫のために宴会じゃ」

「・・・ああそうね、了解」

おそろくぬらりひよんは、外の世界を知らない瑛姫を楽しませたいのだろう。それなら俺は、出来る限りサポートしてやる。・・・雪麗が不機嫌になるな。

ちなみに島原というのは、俺たちがねぐらとして居る屋敷がある場所だ。その屋敷を簡単に言えば、お座敷のような感じだな。遊びをしたり宴会したりするのにいいんだこれが。

そんなことを考えながら、俺たちは島原の方へ歩いて行った。時々俺が馬鹿話をして、ぬらりひよんがそれをハハハと笑う。瑛姫は俺の話に少々驚いて、やはり姫様なんだなと思わせた。

「さて瑛姫、ここがワシらの今のねぐらじゃ」

「はあ」

そんなこんなで、俺たちは島原の屋敷にたどり着いた。瑛姫はさすが今まで、正直今の状況についていけてないのだろう。まあ、ぬらりひよんには関係ないだろうが。

「おう、てめえら！ 瑛姫を連れてきたぜ！」

ある部屋に集まっていた組の仲間、その部屋に入るなりぬらりひよんがそう言った。・・・そこにいた雪麗が、なんか怖い。

「ほう、それが！！ 総大将が落とすために毎日通ったという、京都一の・・・絶世の美女ですかあ」

ぬらりひよんの紹介を受けて、組の妖怪が瑛姫に注目する。その視線には色々の種類があつて、興味・不信・感心・嫉妬など、バリエーション豊かだった。

「ふーん、ふーん」

まあその内の嫉妬は、雪麗独りしかいないわけだが。さっきから瑛姫に対しての警戒レベルがハンパない。やっぱり実際に目の前にいると違うのだろう。

「あ・・・妖・・・ですよ？」

「心配すんな、みんなワシの下僕入だ」

いや、お前の下僕だろうとなんだだろうと心配するだろ。というか、ぬらりひよんが信用されてるのがおかしいと思つんだが・・・まあ、ぬらりひよんだしな。

「彼女く箱入り娘なんだつて!？」

「オレが遊びおしえてやるよ」

小妖怪なんか、オロオロしてる瑛姫を遊びに誘つた。どう聞いても、チャライ男がナンパするようにしか見えないんだが・・・実際に見たら、なんかほのぼのするな。

「あ・・・あ・・・妖様・・・」

小妖怪どもに流されていく瑛姫がぬらりひよんに助けを求めるが、ぬらりひよんはキセルを吸って澄まし顔だ。・・・どうでもいいが、妖怪って呼び方はどうなんだ？

まあ瑛姫に拒否権などなく、お座敷遊び 投扇興ってやつか
を教えられている。瑛姫の話によると、こつという遊びはしたこと
がないようだ。普段、一体何で暇つぶししてるんだらうな？

「どう？ 楽しいでしょ？」

遊んでいる途中で、一人の小妖怪が瑛姫にそう尋ねた。それに対
して瑛姫は、少し困惑しながらも、一拍おいてからいい顔で答える。

「あの・・・外は・・・楽しゅう、ございます」

その瑛姫の言葉は、おそらく小妖怪とぬらりひょん両方への言葉
なのだろう。それを聞いたぬらりひょんも、微妙に微笑んでいるよ
うだ。・・・雪麗、気に入らないのは分かるが、俺の横で冷気を出
さないでくれ、寒いから。

そして楽しい時間はすぐに過ぎていくもの、気づけば大分時間が
経っていたようだ。遊んでいる瑛姫も、やり方をマスターしてみた
いだな。

「スゲエ瑛姫！！ 夢浮橋五十点出たー！！！！」

「えっと・・・これは凄いのでしょうか」

瑛姫が投じた扇は、夢浮橋という一番得点の高い状態になってい
た。狙って出すのなんて不可能に近いが、これがビギナーズラック
というやつだらうか。まあ、瑛姫が楽しんでるみたいだからいいが。

「瑛姫」

「ハイ？」

遊んでいる瑛姫を眺めながらずっと酒を飲んでいたぬらりひよんが、おもむろに彼女に話しかけた。というかお前が連れてきたんだから、ちゃんとエスコートしてやれよ。

「ワシと夫婦めおとになろう」

なるほどなるほど、ぬらりひよんと瑛姫が夫婦めおとに……うん？

めおと、夫婦……えっと、つまりぬらりひよんと瑛姫が結婚すると……ワッツ！？

「ちよちよちよ、待って下さい総大将おー！ー！ー！ー！ー！」

みんなの空気が凍りついている中、いち早く復活した鴉天狗が待ったをかけた。それに対してぬらりひよんは「ん？」と、なんで騒いでるのか分からない風になっている。

「今、何と言いました！？ この女は……人間ですぞ！！ 人と交わる気かあんたー！！！」

鴉天狗の全力の叫びが、おそらく屋敷中に響きわたった……。人と交わるって、なんか響きがあれだね。俺は別に構わないと思うが。

というか今思い出せば、確かぬらりひよんの孫つてのは、四分の一妖怪って設定だったはずだ。なら、瑛姫と結婚してもおかしいことではないよな。

「ちよつと！！ ぬらりひよん！！ こんな女のどこがいいのよ！！！」

「どわっ……、そーい問題じゃないぞ雪女」

長いことフリーズしてた雪麗が、鴉天狗の叫びで復活して立ち上がって早々に噛みついた。この状況は雪麗にとって、想定外にして最悪の状況だろう。ふざけるなど言いたいのかもしれない。

「雪麗、この女はお前ひとが思ってるより、よっぽどいい女だぜ」

「し……し……下の名前では呼ばないでよ……今は……この……変態!!」

そういや、ぬらりひよんは雪麗の名前呼ぶことないよな。その種族が他にいなかったら、名前すらつけない奴ばつかだからな（俺やぬらりひよんもそうだが）。

それにしても変態か……この場合どっちの意味だ？ 異種間での結婚という意味か、それともかなり年下と結婚するロリコンという意味か。

「こりゃ雪女、総大将に向かって何てことを」

わなわなと震えている雪麗に、鴉天狗が注意をする。だが待て鴉天狗、今の雪麗に話しかけるのは死亡フラグだぞ？

「殺してやるううう!! 死ねばいいのにいい!!」
「うわあああ!! カラス天狗が雪だるまにいいいい!!」

あーあ、言わんこっちゃない。泣きながら部屋を出て行った雪麗に、ついで見たいな感じで雪だるまにされた。いつもは俺の役目な筈だが、今日はセーフだったようだ。

「瑛姫」

「八……ハイ……!？」

状況についていけない瑛姫に、ぬらりひょんが再び話しかける。お前自分のせいで場がカオスになったっていうのに、我関せず過ぎるだろう……

「あんたは特別な存在だ……ワシはずっとあんたを見てきたが、その思いはいや増すばかりじゃ……」

だからさ、それって見方を変えたらストーカーだよ。イケメンだからいいけど、不細工がやったら犯罪者呼ばわりされるぜ？

「平たくいやああんたに惚れた、瑛姫……ワシの妻おんなになれ!!」

ぬらりひょんのどストレートな言葉に、瑛姫の顔が一気に赤くなっ
ていく。なるほど、こうすれば女は落ちるのか……

「え？ え……え……ええー……!?」

少しして、瑛姫の叫び声が木霊する。さっき夫婦になるうって言
われた時はあれだったのに、なんで今になって叫ぶんだ？……ま
さか、夫婦の意味分かってなかったとか？……うん、有り得ない。

「……まあ、いつか。ぬらりひょん、俺ちよつと出てくるわ」

「おお、任せた」

任せた……ねえ。俺が何しにいくか分かってるなら、もう少し
考えて行動してくれよ……まあ、任された。

「・・・ここにいたか雪麗」

「ぐすつ・・・何？」

屋敷を出て少し行った所にあつた神社に、泣いている雪麗がいた。泣いてるとこなんて見たことなかったからかもしれないが、なんか物凄く可愛く見えた。・・・これが、ギャップ萌えというやつか。

「何って、お前が出て行ったから来たただけだが？」

「なら帰りなさい、今私は独りになりたいの」

「いいじゃんか、俺もここにいたいんだよ」

そう言いながら、俺は雪麗の横に腰掛ける。俺が動きそうにないと思つたのか、雪麗は無言で立ち上がつてどこかへ行こうとした。だが、俺はそれを許さない。雪麗の肩をつかんで、無理やり座らせる。

「・・・何よ、ここにいたいんでしょ？ 私は関係ないじゃない」

「違いよ、俺はお前の横にいたいんだ。誰が好き好んで、こんな場所ですりでいたがるんだよ」

「・・・私を馬鹿にしてるの？」

おっと、雪麗は好き好んでここにいたんだっけか？ まあ、普段ならこんな所に来ないだろうが。

「悪い悪い、そんなつもりじゃなかったんだが」

「……ふん。……それで、何よ」

結局、雪麗は俺と話すことにしてくれたようだ。俺をジト目で見つつも、ちゃんと聞く体勢に入っている。

「そうさな……未来の日本について話してやるうか?」

「はあ?……一体、何のつもりよ?」

「つもりも何も、ただの与太話だが。こういう話しちゃいけないのか?」

「……別に構わないけど」

んー、思いつきで未来の日本とか言っちゃったが、どう話したもんかな……事実を婉曲して、大袈裟に伝えてやるうか。

「んつとな〜取りあえず未来の日本は、新人類であるオタクが席卷する」

「何よそれ」

「オタクの力は凄まじい……オタクを味方につければ、そいつは強大な力を手に入れることが出来る。ついでに言えば、オタクが日本を……いや、世界を動かすこともあるんだ」

「一体……どんな奴よ。ほら話にも程があるわ」

いや、全て事実だぞ? オタクを味方につければ、経済効果が物凄いことになるもん。オタク文化は、世界に羽ばたいたいな。

「他にはな……全ての人間が冷氣や熱気、あと電気とかを使いこなすことが出来るようになる。それらで、自分の欲望を満たすんだ」
「そんなことになったら、世界は終わりよ」

残念、これも本当なんだな。未来では電子レンジ、冷蔵庫、テレ

ビ、電話、パソコン・・・それらをみんなが使えるようになるからな。料理とかに使えば、食欲を満たせるし。」

「これらは全て事実だ・・・信じるか信じないかは、雪麗次第です」「信じないわ」

即答ですか。だが、そんなこと言ったら、後悔することになるぜ？ 全て真実なんだから。自信もって言った答えが見当違いって、もんの凄く恥ずかしいんだぞ。

「言ったな？ もし本当だったら、俺の言うこと一つ聞けよ？」

「ええ、構わないわ」

「じゃ、ん」

「・・・何よ、この指」

「指切りだが？ まさか知らないのか？」

俺はそう言いながら、突き出した指をくいくいっとする。雪麗は暫く無言でそれを見つめていた後、俺の指に自分の指を絡ませてきた。

「私はこういう子どもっぽいこと、あまり好きじゃないんだけどね」

「はいはい、ツンデレ乙で、ぶふううううああああ！！」

「つんでれか何か知らないけど、私はそんなじゃないわ」

くっ、今回はセーフだと思ってたのに・・・まあいっか、ツンデレはこうでなきゃ。ツン9割デレ1割ぐらいがちょうどいいんだよ。「勘違いしないでよ！？」とかやってればツンデレとか思っちゃ駄目だ、ブルアアアアア！！」

「ぐおっ・・・かぶっ・・・はー、はー、はー・・・ぶっ、はっは

「は」

「・・・何よ、気持ち悪いわね。凍らされて笑わないでよ」

「いや、良かったじゃないか。元気出たみたいで」

俺が見る限り、雪麗はもう大丈夫なようだ。それなら、こんな痛みは俺にとって安いもの。

「・・・ふん」

俺の言葉に、雪麗は鼻を鳴らしてそっぽを向いた。・・・なんだろう、本当にツンデレにしか見えないんだが。

「・・・分かってるのよ。あの人が、おんじゆんもう私に振り向くことは無いって」

「・・・そうだな」
「でも・・・やっぱり認められないのよ。突然現れて、あの人の心を奪っていったあの人間が・・・」

雪麗も、ぬらりひよんが本当に瑛姫に惚れていることを分かっているのだ。だが、今まで一番近くにいた女として、認められないこともあるのだろうか。

「いいんじゃないか？ 別に瑛姫を認めなくても」

「え・・・」

「ただな、お前が惚れたぬらりひよんが惚れた女なんだ。だから、瑛姫は認めなくても、お前が惚れたぬらりひよんを応援してやれ」

好きな奴が別の奴を好きになるのは、それはもう辛いだろう。だがそれで相手を恨むんじゃない、自分が好きな奴が幸福になるように応援したい。

俺はちゃんとした恋愛つてものをしたことがないが、こつするべきなんじゃないかと思ってる。まあ、知らない奴がこんなこと言っても説得力ないか。

「・・・ふん、勝手なこと言っわね」

「まあな、自覚ありだ」

「・・・あっそう」

雪麗は微妙な顔をしながら、立ち上がった。俺もそれに合わせて立ち上がって、二人揃って屋敷に戻って行く。

これでいいんだ。別に俺の言うことに共感してくれなくていい。けど、それで少しでも雪麗の心が楽になるなら、それでいいんだ。

屋敷に帰る途中で、この機に乗じれば雪麗を落とせたんじゃね？と気づいて、ちょっと後悔した俺は悪くないと思いたい。

俺が恋のアドバイス？正気か？（後書き）

次は絶対に羽衣狐が出てきます。あと、髪長姫との再会。上手く表現出来ればいいが・・・

それより、ジャンプ49号のぬら孫第百三十幕を見たんですが・・・あれは、ちよつとなあ・・・椎橋先生は、これからちゃんと納得のいくオチをやってくれるんだろうか・・・不安だ。

人違いです、ふざけんな！！（前書き）

今回は髪長姫視点が長めだったりします。女性視点って難しいなあ・・・考えてることがおかしくなければいいんですがね。

人違いです、ふざけんな！！

「沖兎猫、ワシはこれから瑛姫の返事を聞いてくる」

「ふーん、頑張ってこーい」

「ハハハ、では行ってくるぞ」

ぬらりひよんの求婚騒動から一日経った今日、ぬらりひよんは瑛姫に返事を聞きに行く。昨日はきちんと屋敷に帰して、今日まで答えを考えるようにしたらしい。

まあ、ぬらりひよんとしても、惚れた女の意味は尊重するらしいな。これ以上俺に出来ることはないし、頑張れと言っしかない。

「・・・総大将は、一体何を考えているんじゃ・・・」

「んー？ 一ツ目エ、お前は納得いつてないのか？」

「当たり前だろう。妖と人が交わるなど、常識はずれにも程がある」

ぬらりひよんが出かけるのを俺の横で見ていた一ツ目は、決まりが悪そうにそう言った。まあ、常識から言えばそうだろう。あくまで、常識で言えば・・・だが。

「あいつは、常識なんかにとらわれねえ。だからこそ、お前や組の皆がついていつてんだろ？」

「むうう、確かにそうだが・・・」

「それにさ、別にいいじゃん人と何しようが。同じ形してるわけだし」

人と妖が交わるのが駄目ってのは、要するに違う種類の生き物がニヤンニヤンつてのが駄目なわけだろ？ 犬とかならともかく、同じ人型なら大丈夫だろうよ。・・・あ、白蛇つてのがいたな。

「・・・そういうものか？」

「そういうもんだって！！ お前もいつぺん、人の女と話してみれば？」

「・・・考えとく」

一ツ目はキセルをぷかーとふかして、それ以上は何も語るうとしなかった。・・・うー、空気が気まずいぜ、何か話題はないか！？
こういう時に発揮されるよ、空気殺し（シリアスブレイカー）！！

そんなこと考えても、何も出来ないのが俺クオリティー。それに長い時間、無言の面倒くさい空気が生まれていた。

「大変だ！！ 皆を集めよ！！」

そんな空気をブレイクしたのは、血相を変えて飛び込んできた牛鬼。いつもの澄ました顔が、面白いくらいに焦っている。

「ん？ どした、牛鬼？」

「総大将が、大坂城に一人で向かった！！」

「は！？ あいつ何やってんだよ！？」

大坂城って言ったたら、あの羽衣狐がいる所だろ？ 一人で行くとか、羨まし、ゲフンゲフン・・・危ないだろう色々々。

「あの瑛姫という人間が、どうやら浚われたらしい」

「・・・ああ、そゆこと」

まあ瑛姫は特殊能力持ちの美女（おそらく乙女）だし、羽衣狐に狙われるのも無理はないな。むしろ、今までよくもってた方なのか

もしれない。

瑛姫に惚れてるぬらりひょんとしては、そんなこと絶対に許せないのも自明の理だ。・・・全く出来すぎたタイミングだよ、流石は少年ジャンプ漫画。

「・・・ま、ヒーローは勝つてのは分かってるがな」

「・・・沖兎猫？」

俺はそう言いながら、どこらせと立ち上がる。ジャンプ漫画なら、必ずこの戦いにも勝利するのだろ。しかし、この世界は言うなれば『ぬらりひょんの孫』がベースの別世界。先がどうなるかなんて、誰にも保証されない。

「さ、行こうぜみんな。やれやれ、まったく総大将のおもりは大変だな」

「・・・ふ、お前らしいな」

牛鬼が俺を見てそう言うが、別に俺らしいわけではないと思うんだ。多分普段の俺だったら・・・どうしてるだろうな？

「・・・で、この腕は、例のあれってことでいいのかな？」

「よく分かってるじゃねえか」

そりゃあ、三度目ともなれば嫌でも分かるさ。俺をがっちりとホルドする狒々と白田坊の腕・・・分かってる、緊急事態には必須なんだから？ このイベント。

「ふっ・・・来いやあああああああ！！」

「どっせええええええいつっつ！！！！」

「行ってきまあー！！すううううううう！！！！」

俺は叫びながら、三度目となる空中浮遊を体感している。こういうのはいつまで経っても、慣れることはないんだろぅなぁ・・・あ、今下にぬらりひょんが見えた。このままだと俺、先に行っちゃうよ？

S I D E 宮子姫

大坂城のとある一室。私と他の姫二人は、豊臣秀頼様のご生母であられる淀殿に自己紹介をしている。他の姫というのは、緊張のためか随分と震えている貞姫と、未だ幼い苔姫という姫だ。

「もう少し待っておれ、瑛姫という姫がまだ到着しておらぬ」

淀殿はそう言って、私たちに待つように言う。瑛姫と言えば、私も聞いたことがある。確か、京都で一番の美貌を持つ姫だった筈だ。私たちが集められたのは、秀頼様の側室となるため。だとすれば、噂の瑛姫が選ばれるのも無理はない。

「あっ」

私がそう考えている内に、部屋の襖が開いて、二人の男が一人の女性を連れてきた。桃色の着物がよく似合う美女で、おそらくはあ

れが瑛姫だろう。

「待っておったぞ、瑛姫」

入ってきた女性に、淀殿がそう呼びかける。やはり私の推測通り、彼女が瑛姫だったようだ。

「京で一番の美貌と噂の……噂通り美しいのう、近ごろ近ごろ」
「……は……はい……」

淀殿の呼びかけにより、瑛姫は私たちの下に近寄ってくる。その顔には、どういうわけか困惑の色が浮かんでいた。

「今日は四人か……」

瑛姫と顔を合わせている時に、傍にいた家臣の一人であろう男が、ボソッとそう呟いた。どうということだろう、秀頼様というのは好色家ということか？

「貞姫……もう少し寛いではどうかえ？」

「は、はい……申し訳……ございませぬ」

未だガタガタと震えていた貞姫に、淀殿が優しく語りかける。しかしそれでも、彼女の震えは止まりそうになかった。その顔はどちらかというと、恐怖のような……

「どれ、妾わらわに自己紹介してはくれんか」

私が貞姫を観察している間に、淀殿がそう言った。待たせては拙いので、私が進み出て自己紹介をすることにする。

「私のような田舎者を側室に選んでいただき、光栄です。世間一般では、私のことを髪長姫と呼んでいるそうです」

「知っておるぞ、髪長姫。どうれ、さわらしてみい」

私の簡単な自己紹介の後に、淀殿は私に手を伸ばしてくる。しかし、私はそれを受け入れることは出来ない。頭を下げて、淀殿に申し入れをする。

「何のつもりじゃ？」

「・・・失礼であることは重々承知しておりますが、私は今回の話を辞退させてもらいたいのです」

「・・・ほう、理由を聞かせよ」

天下人である豊臣秀頼の側室となることを断るといふのは、すぐさま殺されてもおかしくない不敬だ。だが、淀殿は理由を聞いてくれるらしい。私は僅かに安堵して、己の心の内を明かす。

「実は・・・私の胸の内には、一人の男性がいるのです。別に恋というわけではありません。しかし、このような心持ちでは、秀頼様へのご奉公をする資格が無いと考えるのです」

私が思い浮かべるのは、幼い私を救ってくれた是炉様。あれから十数年経ったが、今でもはつきり思い出せる。あの時の言葉の真意、聞くまでは嫁ぐことは出来ない。

「ホホ、そなたはそんなことのために、折角の機会を棒に振るどころか、自分の命すら棄てるのか？」

「・・・覚悟の上で、ございます」

元々、それを考えていなかったわけではない。断ることの不敬を詫びることと、私の想いを知ってもらうために、私は今日ここに来たのだ。

「ホホホ、面白い、面白いぞ髪長姫。まこと初な乙女じゃ・・・よ
かろう、秀頼に嫁ぐ必要はない」

「ほ・・・本当でございますか？」

「当たり前じゃ・・・そもそも、そのようなことは、大した問題ではないのじゃ・・・」

・・・？ 一体、どういうことだろうか？ 秀頼様に嫁ぐために、私たちは喚ばれた筈で・・・それが、大した問題ではない？

「あの、それは一体・・・？」

皆が思ったであろう疑問を、瑛姫が代表して尋ねる。その質問に対して、淀殿は返答をしない。その代わり、その表情が残酷な・・・人ではないような・・・

「はう・・・はう・・・や、やっぱり喰べられてしまうのね・・・
私の、見た未来が現実・・・！！！」

淀殿の様子を見ていた貞姫が、息を荒くしてそう言う。喰べられてしまう・・・？まさか・・・そういえば、貞姫の能力は・・・

私や瑛姫たちが困惑している中、貞姫は背を向けて逃げ出そうとする。だが、部屋に侍っていた家臣たちが、その退路を阻む。その顔が、次第に変容していつて・・・

「ウヒツ、ウウツ、妖・・・」

その顔は人のものではなく、完全に妖の顔だった。部屋にいる家臣は、全て妖に変化している。私、そして瑛姫と苔姫は、あまりの事態に声すら出せない。

「未来が見える・・・妖に、私は・・・」

そうだ、噂に聞く貞姫の能力は、未来が見えるというものだった筈。だとすれば、この未来を知っていたということだとも言うの
だろうか。

「外にイイイイイ、出してええー！ー！！！！」

貞姫は、狂ったように叫びだした。いや、これが普通の反応だ。私だって、彼女がそうしなかったら、ここまで冷静にいられず、叫びだしていたかもしれない。

「何事だ！！」

「ああ・・・ああ！！ 妖が・・・妖が！！」

おそらく貞姫の叫び声を聞きつけたのだろう、年老いた家臣が部屋に入ってきた。貞姫はその家臣に向かって、助けを求めろ。

「淀殿・・・これは一体、どういうことだー！！！！」

家臣の男が、淀殿に向かって糾問する。だが駄目だ、この人は普通の人間。こんな妖の巣窟の中で、何か出来る筈もない！

パシュツ・・・ゴロン・・・

一瞬・・・一瞬の内に彼の首は、胴体と永遠の別れを告げた。それを行ったのは、日本では珍しい金髪をした男。首に十字架というものをつけていることから、キリシタンという者かもしれない。

「・・・淀殿、あまり派手になさるな・・・」

「いつ、いやああああ！！！！」

キリシタンらしき男が、家臣の人間を殺したことによって、貞姫を助ける者はいなくなつた。そして部屋に引きずり込まれ、淀殿がその顔を掴み・・・

ズギュツ！ ズギユ、ズギユ・・・ドサ・・・ン、ゴクン・・・

「ん・・・んー、やはり、不思議な力を持つ者の肝は違う・・・」

淀殿は顔を血で染めながら、恍惚の表情を浮かべる。倒れ臥した貞姫は、もう動くことはない。当然だ、肝が無くて生きれる人間などいる筈が無いのだから！

「・・・あ・・・！！」

私の心の臓が、ドクンと脈を打つのがよく分かる。この鼓動も、もうすぐ消えてしまうのか・・・？

「ひっ、ひっく、うえーん、うえーん」

蒼姫が、遂に泣き出してしまった。幼い彼女には、こんな状況耐えられないだろう。私だって、気を抜けばすぐにでも・・・

だが、私取り乱すわけにはいかない。この中ではおそらく、私

が一番年上なのだから。私たち三人は、身を寄せ合って互いを守り合う。

「おそれることはない。瑛姫、髪長姫・・・そなたたちの血肉は、妖怪千年の京の礎となるのだから」

淀殿はそう言いながら、私たちににじり寄ってくる。私たちはギョウウウと抱き合うが、こんな抵抗無駄なのかもしれない。

そして、最初に私の生き肝を喰うことにしたのだろう。私の顔を掴んで、顔を近づけてくる。

「ゆだねよ、美しき姫・・・」

私は、ここで終わりなのだろうか。あの時のことを、彼に聞いたかったのに・・・もう一度、逢ってみたかった・・・是炉様・・・

「うおおおおおおおおお！...！...！」

え

ドツゴオオオオオオオオ！！！！

「妾じゃが……妾に何か用でもあるのか？」

是炉様の質問に、淀殿が自分だと答える。そうか、淀殿の妖としての名が……羽衣狐と言うのか。

「お前が、羽衣狐だと……？」

「そうじゃと言っておる」

是炉様は淀殿に確認をとった後、下を向いてぶつぶつと何か言っている。そして顔を上げた時の顔は、憤怒に染められていた。

「羽衣狐エ……俺はてめえを許さねえ!!!」

ああ、是炉様……まさか、私たちのために怒ってくれているのですか？ もしそうなら、私は……

S I D E 沖兎猫

俺は例のイベントにより、大坂城にたどり着いた。例の如く最高に痛かったが、今回はなんとか持ち直した。

そして、今の現状を思い返してみる。そうだ、俺が成すべきことは……周りを見渡して、一人の死体と三人の姫を見つけた。

その内の一人は瑛姫であり、あとの二人はガチロリ姫と髪の毛の長い美人な姫。・・・うん、この中じゃ髪の毛の長い姫だな。いや、そんなこと考えてる場合じゃない。羽衣狐は・・・どれだ？

「・・・で、羽衣狐・・・ってのは誰なんだ？」

「妾じゃが・・・妾に何か用でもあるのか？」

俺の問いかけに、一人のおばさんが自分だと答えた。・・・はい？ 羽衣狐は黒ずくめの女子高生で、断じてこんなおばさんじゃない筈・・・

「お前が、羽衣狐だと・・・？」

「そうじゃと言っておる」

・・・なるほど、分かった。こいつはあの羽衣狐じゃなくて、別の羽衣狐なんだ。なんだよこのやろう、俺がどれだけ期待してたと思っただよ？ あ、なんか凄いムカついてきた。よし、こいつぶん殴りたい。

「羽衣狐エ・・・俺はてめえを許さねえ!!!」

人違いです、ふざけんな!! (後書き)

つい先日、いつの間にかPV10万、ユニーク1万を軽く越えて
ました。それで、何か企画でもやろうかになって思ったり。・・・何
か番外編でも書いてみようか・・・リリカルとかうみねことかの世
界に行ってみようかな、完全夢オチで(笑)

まあ、やるかどうかなんて分かんないですけど。

沖児猫と宮子姫・・・《沖児猫》（前書き）

今回の話は沖児猫視点で、次話に髪長姫視点にしたいと思っています。セリフは同じなのに、考えることは全然違うという例のあれです。

ちなみに今回、沖児猫以外に一人の扱いが酷いです。

沖兒猫と宮子姫・・・《沖兒猫》

「羽衣狐エ・・・俺はてめえを許さねえ!!!」

俺は自分の内にある怒りを、全てぶち込んで怒鳴りつける。例え神や閻魔が許そうとも、俺はこいつを許すことは出来ない!

「ホホホ、いきなりやって来て何を言うかと思えば・・・妾がお前に何をしたというのじゃ?」

「何をした・・・だと? てめえのせいで、心がひどく傷ついたんだ!!! どうしてくれる!!!」

俺のこの、羽衣狐に逢うことを心待ちにしていたピュアハートが、てめえのせいでブロークンファンタズムだ。絶対に許すわけにはいかねえ。

「それに、そのこの姫・・・お前がやったんだろう? 多分、もっと多くの奴らを殺してきた筈だ。ここに残ってる姫たちも、な・・・許せるわけがねえ!!!」

俺は地面に倒れ臥して、既に絶命している姫を指して言う。まったく、ふざけたことをしやがる。俺のハーレムの一員になったかもしれない女たちを・・・こんなおばさんに!!!

「ふ、お主も妖じやろう。何故そんなことを言う?」

羽衣狐は、多少蔑んだ目で俺を見てきた。おそらくこいつは、妖が人より上だと考えている口なんだろう。まったく、やれやれな奴だ。

「妖？ 人間？ 何を狭い考えで、ものを言ってるやがる。ただ単に、好きだからやってるだけだ」

俺は妖だとか人間だとか関係なく、美女が好きだからこそ行動する。ああ、そうとも。お前みたいな奴だって、美女なら良かった。美女なら！！

「羽衣狐！！ 俺はお前を許さない！！ 例え土下座して詫びようとも、俺の楽園・・・ハーレムには絶対入れてやらん！！」

いや、元々こんなおばさん入れるつもりはないが。俺のハーレムが汚れちまうからな・・・ハーレム、全くできてないけどね・・・

「楽園、はーれむ？・・・何のことじゃ？ 我らの宿願や、妖による闇の世界のことではないようじゃが」

「ハーレムってのは、この世にある天国にして、誰もが悲しまない理想の姿！！ てめえの宿願？ 闇の世界？ 知るか、そんなもん！ そんな妄想、ガキしか持たねえんだよ。中二病乙ー！！」
「・・・誰か、この鼠を駆除しろ。目障りにもほどがある」

羽衣狐は俺の発言で少しイラついたようで、すぐさま部下に俺を排除するように言った。ふん、口で負けたからって実力行使とは・・・程度がしれるぜ！！

「ギャハハ、ギャハハ、オレがイクゼエエー！！」

「狂骨か・・・どれ、魅せてみよ」

俺の前に出てきたのは、包帯で右目を隠したハゲ。見た目や笑い方から、そうとうヤバい奴だったので分かる。うん、もちろん頭が

ね。

「はっ、こいよイタ野郎!!」

「ギャハハハッ!!!」

俺の誘いに、イタ野郎が槍を構えて乗ってくる。・・・俺がイタ野郎って言ったなら、何故か卒塔婆みたいな板が生えている男が反応してた。板野郎・・・自分で思ってるならするなよ。

まあそんなことは置いといて、イタ野郎が槍を突いてきた。俺は刀を抜いて、それに応戦する。初めて使った感じがするが、一応使ってたんだよ？ ちなみに名前は『夜王丸』・・・普通の刀だけだね！

「ギャハハ、雑魚だなテメエ！」

ちょっと戦ってる内に、イタ野郎がそう言うてきた。まあ、そう思っても無理はない。奴の槍で既に俺は血だらけだし、あいつは一つも傷を負ってない。だが・・・

「・・・ふっ」

「ん？ ドウした？」

俺はあまりの滑稽さに、笑いを禁じ得ない。そんな俺を訝しんだのか、イタ野郎も動きを止める。ふっ、そういう所が滑稽なんだよ。

「イタい格好して、イタい笑い方して、どんな戦い方するかと思ったら・・・がっかりだ、そんな普通の戦い方しかないのかよ。あーあ、期待して損した」

「ギャハッ!？」

「まったく・・・キャラ付けをきっちりして来いよ、この中途半端野郎。せめて逆立ちして戦うとか・・・それぐらいの気概は魅せるよな」

俺はため息をつきながら、イタ野郎改め中途半端野郎にそう言う。中途半端野郎はしばし呆然とした後、怒ったように逆立ちしだした。

「こ、これで満足カー!？」

「・・・はあ、だから中途半端なんだよ、この常識人。言われたことをそのままやるとか・・・猿真似なんてな、猿だつて出来るんだよ、この猿以下野郎」

俺は更に深いため息をつきながら、イタ野郎改め中途半端野郎改め常識人改め猿以下野郎にそう言う。猿以下野郎は大量の汗を流して考える素振りを見せた後、ハツとした顔をして何やらし始めた。

「コレで、ドウだああああ!!」

「ああ、うん。凄い凄い」

長い思考の末、猿以下野郎が叩き出した答えは・・・片手逆立ち+足をピッチリと天高く伸ばす+もう一つの手を鼻の中に入れるという・・・うん、変態だ。

「良かったな、変態野郎! ちゃんとキャラ付けが出来たじゃねえか!!」

「ア、そりゃドウも・・・」

「よし、それじゃあ戦闘再開だ!!」

「エ、チヨツ待ッた!! 俺こんな・・・」

変態野郎が何やら命乞いのようなものをしているが、そんなこと

知るか。俺だつて、いつも待つてくれないんだもん。偶にはやる側に回らせてくれ。

「チエストオオオオオオオオ！！！」

「チヨ、ぐおおおおおおお！！？」

俺は変態野郎の体を、思いっきりぶつた斬つた。まあ俺は糞雑魚だし、死んではないかもな。うん、敵の発言なんて聞くもんじゃないよ。

「ふつ、またつまらぬものを斬つてしまった・・・」

以前は掘ると言つてしまったこの言葉、ようやくちゃんと使えただぜ。何か斬つたら、絶対に言わないと。まあ、斬つたのはこれが初めてだけだね。

それにしても、意外と抵抗なかったな・・・あれだけ自分がやられてたら当然か。60年近くこの世界で生きてきて、俺つて何回致死ダメージ受けたんだろうな？

つていうかよく考えたら、もしかして俺つてこれが初勝利だったりする？・・・何だろうこの感覚。ちよつと嬉しいのか、な？！

「ぐふつ、おいおい・・・ちよつと、卑怯なんじゃねえの？」

「知つたことではない・・・お前と戦うのは、ただの余興だったのだから」

俺が感慨に耽つてる間に、後ろから俺の体を刀が貫いた。その犯人は、角刈りみたいな髪型してるオッサン。じじいになったら、渋格好良くなりそうだ。

「是炉様ああ!!」

俺がやられたのを見て、髪の毛長い姫が叫んだ。是炉様って、えーつと確かどっかで・・・ああ、自殺しようとした女の子を助けた時か。

だとすると・・・もしかしてあの女の子だったりするのか？よく見れば似てるな、目の下の黒子とか・・・良かったな、綺麗な髪じゃん。

「さて・・・半分に割れば死ぬか」

俺の思考なんかお構いなしに、件のオッサンがそう言った。半分か・・・止めて、くそ痛いから。そんなことしたって、無駄なんだから。

「止めとけ止めとけ、俺はそんなんじゃない。なんたって、俺は不老不死だからな」

刀で貫かれたダメージなんて、痛い痛いけどもう慣れたんで、軽く手を振りながらそう言っとく。・・・ん？　なんか空気が変わったような・・・

「お主が・・・不死じゃと？」

「馬鹿な、そんな筈・・・」

「有り得ぬ・・・鶴でさえ・・・」

羽衣狐を始めとする敵の妖連中が、分かりやすく動揺している。ん？　何をそんなに動揺することがあるんだ？　あと鶴って何よ。

「・・・実際に、試してみるが一番」

「え、何を、いぎいがあああああああああああ！！！！」

オッサンは刀を振りかぶって、躊躇いなく俺を真上から切り落とした。俺の体は完全に真つ二つになっていて、右と左に分裂した。・
・一応意識は、心臓がある左側にあるみたいだな・

「いやあああ！！ 是炉様あああ！！！！」

あの姫が・・涙を流して叫んでいる。一応無事だということアピールするために、頑張って手を上げる。

「・・・これは、まことに不死なのか・・・？」

「どうしますか、羽衣狐様」

「一旦保留じゃ、後で色々試す。先に、姫たちの生き肝を喰らうておく」

羽衣狐はオッサンと話した後、三人の姫に向かっていく。このままじゃ・・・ちくしょう・

「ま・・・てよ・・・俺の、肝・・喰え、ば・・・いい、だ・・ろ・
・？」

確か不死の力を持つ者の肝つてのは、かなりの力が有った筈だ。なら、俺の方を先に喰わせれば・

「ふ、妾はムサイ男の肝は嫌いでな・・お主の肝は、後でしかるべき処置をしてやる」

・・・ムサくて悪かったな、こんちくしょう。って、羽衣狐が瑛姫の顔を掴んで・・くそつ、何かないか、何か・

ダン!!ダン!!ダン!!

「この、足音・・・遅いんだよ、ぬらりひょん・・・! まあ、ヒローは遅れてやってくるってか？」

そしてぬらりひょんは羽衣狐の下に辿り着き、そのまま刀を振り下ろす　　!　だが、それは羽衣狐配下の妖に阻まれる・・・

「・・・・・・・・チ・・・」

静かになった空間に、ぬらりひょんの舌打ちが響いた。その音がかわかない内に、デカイ鬼が金棒を振り回し、ぬらりひょんに向けて放った。

「・・・・・・・・何じゃ?　また侵入者が」

羽衣狐は、静かにぬらりひょんを観察している。その姿は堂々としていて、器というものが感じられた。

「何奴じゃ!!」

デカイ鬼が、ぬらりひょんに向かって問いかける。・・・あれ、今になってぬらりひょんの着物がびりびりと破れてるんだけど・・・何だ、この時間差。

「・・・・・・・・ヤクザ者が」

破れた着物の下から、ぬらりひよんの筋肉に包まれた体が露わになる。そしてその背には、仏とか妖が描かれた刺青が・・・え、お前そんなの有ったのか？ いいなあ、それ・・・

「ワシは奴良組総大将、ぬらりひよん。こいつはワシの女じゃ、悪いが連れて帰るぜ・・・ついでに、そこの真つ二つの馬鹿もな」

おいおい、馬鹿呼ばわりはねえだろ。俺だって頑張ったんだぜ？
一応ねぎらいの言葉をだな・・・無理か。

「なんと・・・こやつの大將も、人を助けにくるとは」

羽衣狐は俺を見下して、少々驚いたようにそう言った。俺とぬらりひよんが同類だつて言いたいのか？ 馬鹿言つな、ぬらりひよんみたいな主人公体質じゃないんだよ、俺。

「・・・是炉様！」

「・・・ん・・・」

俺がそんなことを考えていると、俺の近くにあの姫と瑛姫が近寄ってきた。そして瑛姫が俺に手を翳して・・・

「じつとして下さい、沖兎猫様」

「ああ、つて・・・すげえな・・・これ」

瞬く間に、俺の傷が治っていった。普通ならここまで治らないんだろうが、俺の不死性と合わせての結果だろう。失った体の部分が、全て元通りになった。

「良かった・・・是炉様・・・」

あの姫が、治った俺に泣きながら抱きついてきた。嬉しいんだけど……ごめん、かなり痛いぜ。でも、まあいっか。我慢して、一応聞くべきことを聞いとく。

「……あんだ、もしかしてあん時の」

「……はい、あの時救われた……宮子姫と申します、是炉様」

「宮子姫……じゃ、ミヤって呼んでいいか？」

宮子姫って、ちょっと長いからな。とりあえず、呼び方だけ確認しとく。え？ 緊張感なさすぎる？……まあ、いいじゃん。

「はい、構いません」

「じゃあミヤ、とりあえず、っておい！！」

「え？ きゃっ！！」

俺がミヤ達に下がるように言う前に、板野郎が二人を捕まえた。くそっ、治ったばかりで体が動かねえ……！ 二人を助けることは、俺には……無理だ。

「異な事をする奴らじゃ、二人だけで我らに挑んでくるとは……血迷うたはぐれ鼠どもか何かか？」

ドゴオオオオン！！！！

羽衣狐の言葉とほぼ同時に、天井を破って奴良組の妖が現れた。まったく……お前らも遅すぎるぞ。

「なんだ……きたのか、てめえーら」

「百鬼夜行ですからな」

「入れ墨だけじゃーさびしいでしょう」
「・・・バカな奴らじゃ！」

牛鬼や鴉天狗の言葉に、ぬらりひよんは多少嬉しそうな顔をする。まあ、俺がいるってことで、こいつらも来るって分かってもよかったですと思うんだがな。

「・・・ちよっと、いつまで寝てんのよ」

「雪麗、お前もきたのか？」

「ふん・・・総大将の手伝いに来ただけよ」

雪麗はやはりツンデ、ごめん、調子に乗った。まあとりあえず、これで奴良組全員集合ってわけだ。

「・・・何やら珍客が多いのう、力の差もわからぬ虫けらが・・・」

羽衣狐は笑いながら、余裕の態度をとる。へっ、その顔はきつとあと少して歪められることになるぜ！・・・ぬらりひよんによってな！！

沖兒猫と宮子姫・・・《沖兒猫》（後書き）

今回の話から、髪長姫の考えてることを予想するのも楽しいかも？・・・予想を下回る出来になるか、予想の斜め上に行くか、ズバリそのままになるか・・・あれ、なんだろ？下回る気しかないや。

沖見猫と宮子姫・・・〈宮子姫〉（前書き）

うーん、今回は自信ないです。前の話を地の文だけ変えたんですが・・・ちょっと違和感が。とりあえず、宮子姫の思考回路がおかしなことになってます。

沖兒猫と宮子姫・・・〈宮子姫〉

「羽衣狐エ・・・俺はてめえを許さねえ!!!」

是炉様は全ての怒りを込めたように、淀殿に怒鳴りつけた。まさか私たちのために、そんなに怒ってくれているのですか・・・？

「ホホホ、いきなりやって来て何を言うかと思えば・・・妾がお前に何をしたというのじゃ？」

「何をした・・・だと？ てめえのせいで、心がひどく傷ついたんだ!!! どうしてくれる!!!」

是炉様・・・そんな、私たちの心まで心配してくれているなんて・・・でも、大丈夫です。是炉様が来てくれただけで、私たちの心は救われました。

「それに、そのこの姫・・・お前がやったんだろう？ 多分、もっと多くの奴らを殺してきた筈だ。ここに残ってる姫たちも、な・・・許せるわけがねえ!!!」

是炉様は、床に倒れ臥した貞姫を指してそう言った。なんて、お優しい方なのでしょう。知りもしない人たちのために、ここまで怒れるなんて・・・

「ふ、お主も妖じやろう。何故そんなことを言う？」

淀殿は、多少蔑んだ目で是炉様を見てそう言う。・・・妖、それはそうか。是炉様の姿が変わっていないというのは、つまりそういうことだろう。・・・なら、何故是炉様は・・・

「妖？ 人間？ 何を狭い考えで、ものを言ってるやがる。ただ単に、好きだからやってるだけだ」

是炉様の言葉に、私はハツとする。そうだ、何を私は狭い考えだつたのか。妖だとか人だとか・・・そんなこと、考える必要は無いということですね？

「羽衣狐！！ 俺はお前を許さない！！ 例え土下座して詫びようとも、俺の楽園・・・ハーレムには絶対入れてやらん！！」

はー、れむ・・・あの時の、是炉様の言葉。18になったら私が入ってもいいと言われたもの。淀殿は入ってはいけない・・・楽園。

「楽園、はーれむ？・・・何のことじゃ？ 我らの宿願や、妖による闇の世界のことではないようじゃが」

「ハーレムつてのは、この世にある天国にして、誰もが悲しまない理想の姿！！ てめえの宿願？ 闇の世界？ 知るか、そんなもん！ そんな妄想、ガキしか持たねえんだよ。中二病乙！！」

是炉様の言っている言葉の意味が、私には半分しか分からない。けど、これだけは分かる。はーれむとは、とても素晴らしいものなのだ。

「・・・誰か、この鼠を駆除しろ。目障りにもほどがある」

その是炉様の言葉が気に入らなかつたのか、淀殿が妖怪たちに命令した。・・・是炉様の言葉に、口での負けを認めたということか。口で勝てないから、実力行使とは・・・卑怯な。

「ギャハハ、ギャハハ、オレがイクゼエエ!!!」
「狂骨か・・・どれ、魅せてみよ」

是炉様の前に出たのは、包帯で右目を隠した恐ろしい男。その見た目や態度から、そうとうな力を持っているのが分かる。

「はっ、こいよイタ野郎!!!」
「ギャハハハハッ!!!」

是炉様の誘いに、イタ野郎とやらが槍を構えて乗る。・・・是炉様がイタ野郎と言うと、何故か卒塔婆のような板が生えている男が反応していた。あの男も・・・イタ野郎という名前なのだろうか？

私がそんな下らないことを考えている間に、是炉様とイタ野郎とやらの戦いが始まった。イタ野郎の突きを、是炉様は刀で応戦するが・・・

「ギャハハ、雑魚だなテメエ！」

イタ野郎が、少し戦ってすぐにそう言った。・・・確かに、観た限りそうとも言える。是炉様の体は見るのとはばかれる程血まみれだが、イタ野郎には傷ひとつすらない。

「・・・ふっ」
「ん？ ドウした？」

しかし是炉様は、誰の目から見ても余裕の表情だ。笑いすら零し、絶対の勝利を確信しているようですらある。一体、どういうことなのか・・・？

「イタいい格好して、イタいい方して、どんな戦い方するかと思ったら・・・がっかりだ、そんな普通の戦い方しかないのかよ。あーあ、期待して損した」

「ギャハツ!？」

「まったく・・・キャラ付けをきっちりして来いよ、この中途半端野郎。せめて逆立ちして戦うとか・・・それぐらいの気概は魅せるよな」

是炉様はため息をつきながら、イタ野郎　いや、中途半端野郎だろうか　に言った。その中途半端野郎はしばし呆然としていた後、怒ったように逆立ちしだした。

「こ、これで満足カア!？」

「・・・はあ、だから中途半端なんだよ、この常識人。言われたことをそのままやるとか・・・猿真似なんてな、猿だって出来るんだよ、この猿以下野郎」

是炉様は更に深いため息をつきながら、えーつと・・・猿以下野郎?にそう言った。猿以下野郎は大量の汗を流して考える素振りを見せた後、ハツとした顔をして何やらし始めたようだ。

「コレで、ドウだあああああ!！」

「ああ、うん。凄い凄い」

長い思考の末、猿以下野郎が叩き出した答えは・・・片手逆立ちに足を天高く、もう片方の手を・・・気持ち悪いとしか思えない。是炉様は一体、何を・・・まさか!

「良かったな、変態野郎!　ちゃんとキャラ付けが出来たじゃねえ

か!!」

「ア、そりゃドウも・・・」

「よし、それじゃあ戦闘再開だ!!」

「エ、チヨツ待つタ!! 俺こんな・・・」

是炉様の戦闘再開の合図に、気持ち悪い男が醜くも命乞いをするが、是炉様は気にせず立ち向かった。そうか・・・全て、是炉様の策略だったのか。

ワザと負けている振りをして、絶対に勝利出来る状況を作り出す・・・なんて、聡明なお方だろうか。あの有名な諸葛孔明にすら劣らない、希代の天才とすら言えるかもしれない。

「チエストオオオオオオ!!」

「チヨ、ぐおおおおおお!!」

是炉様は刀を振りかぶり、かの男に斬りつけた。見たところ、是炉様はワザと手加減をして、あの男を殺さなかったようだ。己の敵すら救う、その心・・・まさに、菩薩のごとき心だ。

「ふっ、またつまらぬものを斬ってしまった・・・」

その言葉は、ため息・・・つまり憂いと共に吐き出された。きつと、今までも是炉様は、多くの者たちを切り捨ててきたのだろう。故にこそ、そんなに悲しそうな顔をするのか・・・人の命の儂さを、知っているから。

是炉様は、少し気の抜けた顔をしている。それが何を考えてのことかは分からないが、おそろ、く!?

「ぐぶっ、おいおい・・・ちよつと、卑怯なんじゃねえの?」

「知ったことではない・・・お前と戦うのは、ただの余興だったのだから」

私が是炉様のことを考えている間に、是炉様の体を刀が貫いた。その刃は完全に腹を割いていて、どう見ても致命傷！

「是炉様ああ！！」

私は無我夢中で、是炉様の名を呼ぶ。その声に反応したのか、是炉様はこちらを凝視してきた。その様子から察するに、体の傷は思ったほどではないのかもしれない。

是炉様はしばらく考える素振りを見せた後、得心したような顔を見せた。私が名を呼んだことによって、私のことを思い出して下さったのだろうか。

そして是炉様の顔は、次第に慈愛の表情に変わっていく。私のことを見て、是炉様が微笑んでくれている。・・・何故だろうか、胸の高鳴りが止まらない・・・

「さて・・・半分に割れば死ぬか」

私がぼーっと考えている内に、是炉様を刺した男がそう言った。

駄目だ、例えば是炉様が丈夫な体を持っていたとしても、そんなことをされれば、生きていられる筈がない！

「止めとけ止めとけ、俺はそんなんじゃない。なんたって、俺は不老不死だからな」

だが是炉様は、いたって余裕の表情でそう語る。不老不死・・・それは、人、いや全てのものがなし得なかった偉業・・・そこに、あのお方はたどり着いたというのか・・・

「お主が・・・不死じゃと？」

「馬鹿な、そんな筈・・・」

「有り得ぬ・・・鶴でさえ・・・」

是炉様の不老不死という発言に、淀殿や妖たちの間に動揺が広がる。おそらくは、彼らにすら成し得なかった偉業・・・ならば、その反応も頷ける。

「・・・実際に、試してみるが一番」

「え、何を、いぎいがあああああああああああ！！！！」

是炉様を刺した男が、瞬く間に刀を振り下ろした。そして是炉様の、断末魔？ え？なんで是炉様がそんな声を？ それに、あの吹き出している赤は何？ 私の着物に跳んできた、この液体は何？ あの、2つに分かれている人は・・・誰？

そんなもの、決まっている。断末魔は斬られたから。吹き出して、跳んできた、赤い液体は血。2つに分かれている人は・・・是炉様だ。

「いやあああ！！ 是炉様あああ！！！！」

私の止まっていた時間は、知らず自分が出した叫び声に引き戻される。頬には涙が伝い、その涙は止まることがない。是炉様は不老不死、でもそれが通用しないことだって・・・！！

しかし、私を安心させるためだろうか、是炉様は分かれた左の体だけで動き、手を上げた。体を裂かれる痛みなんて、想像もつかないほどの筈だ。なのに、意識を離さず、こんな・・・

「・・・これは、まことに不死なのか・・・？」

「どうしますか、羽衣狐様」

「一旦保留じゃ、後で色々試す。先に、姫たちの生き肝を喰らうておく」

淀殿は是炉様を斬った男と話した後、私たちの下に向かってきた。
・・・私たちの肝を、喰うつもりなのだ。

「ま・・・てよ・・・俺の、肝・・・喰え、ば・・・いい、だ・・・ろ・・・」

是炉様は体が2つに割られたにも関わらず、自分の肝を喰うように言う。私たちのことを救うために、そんなことを言っているんだ・・・！

「ふ、妾はムサイ男の肝は嫌いだな・・・お主の肝は、後でしかるべき処置をしてやる」

だが淀殿は、是炉様の言葉を聞かずに私たちに近寄る。そして、最初に選ばれたのは瑛姫。淀殿は瑛姫に頬を掴み、顔を近づけ・・・

ダン！！ダン！！ダン！！

瑛姫と淀殿の顔が重なる寸前、叩きつけるような足音が聞こえてきた。白く長い髪をたなびかせる男が、こちらへ向かってきている。

そしてその男は淀殿の下に辿り着き、そのまま刀を振り下ろす

！ だが、その刃は淀殿に届くことは無かった。妖たちが、そ

の刃を幾重にも止めたのだ。

「・・・・・・・・・・チ・・・・・・・・」

静かになった空間に、侵入者の舌打ちが響いた。その音がかわかない内に、大きな鬼が金棒を振り回し、侵入者に向けて放った。

「・・・・・・・・何じゃ？ また侵入者か」

淀殿は、静かに侵入者を観察している。私にも、この男が何者かは分からない。しかし、この男を見て是炉様が微笑んだように見えた。ならば、彼は是炉様のお知り合いなのだろう。

「何奴じゃ！！」

大きな鬼が、侵入者に向かって問いかけた。その問いかけに侵入者は答えず、淀殿のことを睨みつけている。

「・・・・・・・・ヤクザ者か」

侵入者の破けた着物の下から現れた肉体、その背には入れ墨が刻まれていた。そんな入れ墨をしている者は、ヤクザ者以外にはないだろう。

「ワシは奴良組総大将、ぬらりひょん。こいつはワシの女じゃ、悪いが連れて帰るぜ・・・・・・・・ついでに、その真つ二つの馬鹿もな」

奴良組総大将ぬらりひょん・・・・・・・・つまり、是炉様はこの方の部下ということだろうか。ですが、是炉様は私たちのためにこうなってしまうのだから、馬鹿呼ばわりはないと思います。

「なんと……こやつの大將も、人を助けにくるとは」

淀殿は驚いたように、是炉様とぬらりひょん様を見ている。他の妖たちもそうだ。……今なら、是炉様の下に行ける。

私は瑛姫の手を引き、是炉様の下へ走る。今是炉様を救えるのは、噂に聞く瑛姫の治癒能力だけだ。

「……是炉様！」

「……ん……」

私が是炉様の名を呼ぶと、是炉様は弱々しく反応した。瑛姫は素早く是炉様に近寄り、その手を翳す。そしてその手の先から光が溢れ、是炉様の体が復元していく。

「じつとしていて下さい、沖児猫様」

「ああ、つて……すげえな……これ」

沖児猫様？ 是炉様の別の名前だろうか。とりあえずそれは置いて、是炉様の体はみるみるうちに治っていき、最後には完全に治っていた。

これが、瑛姫の治癒の力……どんな病も傷も治すという奇跡の力。私の中で、私にその力があれば、私が是炉様を救えたという、瑛姫に対する嫉妬のような感情が湧いていた。こんな感情、持っていない筈が無いのに……

「良かった……是炉様……」

だが、そんなことよりも、是炉様が治ったことの方が重要だ。私は、自分の内から溢れ出る喜びの感情を抑えられない。流れてくる涙が、いつまでも止まらない。

そして私はそのままの勢いで、是炉様に抱きついてしまった。・・・はしたない女だと思われてしまっただろうか。・・・でも少し、役得感があります。

「・・・あなた、もしかしてあん時の」

「・・・はい、あの時救われた・・・宮子姫と申します、是炉様」
「宮子姫・・・じゃ、ミヤって呼んでいいか？」

ミヤ・・・初めてそう呼ばれました。何か、響きがスツと胸に落ちます。ちよつと恥ずかしいですけど、嬉しいです。

「はい、構いません」

「じゃあミヤ、とりあえず、っておい!」

「え? きゃっ!」

是炉様が私たちに何か言う前に、私たちの体は後ろに引つ張られる。後ろを振り返ると、顔を板で隠している男が、私たちを捉えていた。

「異な事をする奴らじゃ、二人だけで我らに挑んでくるとは・・・血迷うたはぐれ鼠どもか何かか?」

ドゴオオオオオン!!!

淀殿の言葉とほぼ同時に、天井を破って大量の妖が現れた。是炉様の顔を見るに、彼らも奴良組・・・の仲間なのだろうか。

「なんだ・・・きたのか、てめえーら」

「百鬼夜行ですからな」

「入れ墨だけじゃーさびしいでしょう」

「・・・バカな奴らじゃ！」

ぬらりひょん様と妖の数人が、楽しそうに話している。そして彼ら見て、是炉様はやれやれといった感じた。これが、男の友情とやらなのかもしれない。

「・・・ちよつと、いつまで寝てんのよ」

「雪麗、お前もきたのか？」

「ふん・・・総大将の手伝いにきただけよ」

そんな是炉様に、親しげな様子の美女が話しかけていた。・・・もしかして、是炉様の想い人なのだろうか。・・・少し、胸が痛い。

「・・・何やら珍客が多いのう、力の差もわからぬ虫けらが・・・」

淀殿は笑いながら、余裕の態度をとっていた。でもその顔は、あと少しで歪められることになるでしょう・・・是炉様によって！！

沖兒猫と宮子姫・・・《宮子姫》（後書き）

何か、やらなきゃよかったな雰囲気になるのが怖い・・・次話
は、ちゃんと話が進みます。

例えるなら桜、例えるなら・・・（前書き）

感想について、制限を取っ払ってみた。なんか、取っ払った方がいいのかな？と思って。いまいち意味が分からないんですけどね。

例えるなら桜、例えるなら・・・

「曲者じゃ、キタナイ鼠どもが入り込んでおるぞ」

俺たちに向けて指を突き刺し、羽衣狐がそう言う。おい、人に指向けちゃいけないって、親に習わなかったのか!!!・・・冗談で思っただけだから、冷気を止めてくれ雪麗さん。

「誰か・・・余興を見せてくれる者はおらぬか？」

羽衣狐の呼びかけに、ぬらりひよんの着物を破った鬼が前に進み出た。こいつは多分・・・出オチパターンの雑魚だな。

「我が名は凱郎太!! 羅生門に千年住まう者!!」

羅生門・・・って、確か芥川龍之介の作品だったよな。国語の授業でやったよ。確か、老婆の着物を剥ぎ取る話・・・あれ、違ったっけ？

「この技の名を、冥土の土産に持っていけ」

凱なんとかさんが、金棒を振りかぶってそう言った。メイドの土産・・・ごめん、メイド好きなんだ。

まあ、そういうセリフって死亡フラグだし、軽く避けて・・・あれ、雪麗さんと牛鬼さん。何で、俺の後ろに隠れているんですか？

「雷棍棒豪風らいこんぼうたけかせ!!!」

必殺技のセリフを喋る必要って、一体どこにあるんだろうな？

真名解放とか必要ならともかく・・・リアルでやったらどん引きだぞ？

まあ、いいよな。そんなどうでもいいこと。重要なのは・・・俺に、必殺技がクリーンヒットしてることだよ。

「ぶふうおおおおおおお！！！！」

え、ちよつと何で俺を掴んだの、雪麗さんに牛鬼さん！？ あ、ハイタッチとかかましてんじゃねえ！！ ていうか、あんたらそんなに仲良かったっけ！？

「・・・いいのよ、楽しければ」

さいですか・・・それにしても、お前キャラ崩壊し過ぎじゃないか？ もしかして、瑛姫を助けに来たのでイラついてんの？・・・まあ、理解はしても納得出来ないってあるよな。

「ガハハ・・・跡形もなく吹っ飛びおつたわ！！」

「何じゃ、呆気ない」

あー、今ので小妖怪数匹がやられたな。それに、ぬらりひよんの姿も見えない。・・・でもな、それ負けフラグって言うんだ。知ってる？

「凱郎太！！」

「のけ」

「な・・・なああつ！！！！」

はい、フラグ回収ー。オッサンが凱なんとかさんに注意をするが、

ぬらりひよんにぶつた斬られた。俺みたいに不死じゃなけりや、あれで終わりだ。

「邪魔する奴あ、たたつ斬る」

はい来たぜ、ぬらりひよんの決めゼリフ。イケメンのみに許された、俺の邪魔すんじゃねえよっていうゼリフ。ああ、いいなあ本当に。

「うほ〜いいぞ！！ 総大将につづけー！！」

「いやっほー！ 出入りじゃあー！」

ぬらりひよんが一体強そうなのを倒したことにより、奴良組の士気が上昇した。みんななんか凄いテンション高いんだが・・・ストレスでも溜まってんの？

「キヤハハ、楽しいじゃあねえか、総大将のおもりはよお。生きて帰ったら、また盃くみ交わそうぜエー大将おー」

おい狒々、そのゼリフはまだいい。主人公の悪友的ポジションのゼリフだし。けどな、面を外すんじゃねえ、イケメン率が上昇するだろ。

「ひるむな！ 必死と心定めれば、畏れるものなど何もない！！」

奴良組の総攻撃が始まる中、牛鬼の声が響きわたる。だがそんなゼリフを言えば、必ず出てくるこの漢。

「いらん心配だぜ、牛鬼。ワシらも元は、闇の化生」

キターーーー！！ イケメンな筈がない一ツ目顔の癖に、イケメンにしか見えない奴良組の中で一番の漢！！ 一ツ目エーーー！！

「死なんざ誰もおそれちゃいねえ、冥土に戻るが早いか遅いかじゃ」
「・・・ふっ、かなわないな・・・一ツ目には」

マジでな！ その格好良さ、少し俺に分けてくれ。今なら俺の秘蔵のブツくれてやるから！・・・え？ 内容は教えないよ？

「・・・何をしておる、お前たち・・・。妖としての格の違いを、見せてやらんか・・・！」

奴良組の総攻撃に入ったのを見て、羽衣狐が配下に指示する。その命令を受け、あちら側の妖もこちらに向かつてき、百鬼夜行入り混じっての戦いとなった。

敵で先ず戦陣をきったのは、金髪のこれまたイケメン。十字架のネックレスに着物と、合わないような合ってるような組み合わせのファッションセンス。そいつは刀を抜いて、ぬらりひょんに向かつていく。

「させるかあーーー！！」

それを防いだのは、木魚達磨・・・え？ あれ、俺って目がおかしくなった？・・・いや、正常か・・・達磨、お前って戦えたんだ。

そして他の奴らも、それぞれの相手と戦い始める。大体格が高そうな敵には、奴良組の中でも強い連中が立ち向かってるな。達磨は・・・まあ、おいとけ。

「・・・おい、沖児猫」

「ん？ なんだ、ぬらりひょん」

「お前も雑魚の相手をしてな。ワシが、羽衣狐と決着をつける」

一人動いてなかった俺に、ぬらりひょんがそう言ってきた。まあ、ぬらりひょんは主人公的立場だし、そうするべきなんだろうが・・・

「やだね。俺も、羽衣狐と戦る。お前だけいいところ取りしようとするんじゃないよ。それに、一人よりは二人のがいいだろ？」

「・・・はっ、足手まといになんじゃねえぞ」

「わーってるって。トドメはくれてやるから、タイミング・・・機を逃すなよ」

「おう、任せな」

俺たちはニヤリと笑い合って、羽衣狐の前に進み出る。おかしそうに笑う羽衣狐の腕の中にはミヤと瑛姫がいて、完全なる攫われの姫態勢が出来上がっていた。

「面白い・・・面白い余興じゃ・・・ここまで魅せる役者も珍しい。妾に刃向うた妖は、百年振りじゃ」

「ワシの女に、触んじゃねえ！！」

羽衣狐は無手で隙だらけ、しかも人質を抱えている状態。だからこそ、ぬらりひょんは突進したのだろうが・・・それは拙い。相手はおばさんと言えど、大妖怪だ。

羽衣狐の目は完全に妖怪のそれになり、その着物の下から何本か尻尾が出てきた。そしてその尻尾は、いとも簡単にぬらりひょんを切り刻む。

「ガハ……」

「ほう……この女に惚れているのか……この芝居は本当に奇想天外じゃ」

ぬらりひよんは一瞬で血まみれになり、羽衣狐の尻尾はシウルシウルと音を立てて動き回っている。……これが、美女だったらな……尻尾は、やっぱ美少女にあるべきだよな。

「不死の男、おぬしはこんのか？」

「俺か？……悪いが俺は、ぬらりひよんと違って、直進しかしない奴じゃないんでね。無駄なことはしない主義だ」

俺は一応そう言うておくが、内心は完全に違う。だって、あんなのに貫かれたら痛いじゃん。ぬらりひよんは余興として手加減されてるんだろうけど、俺は不死だから手加減ないだろうからな。

「ほう……おぬしの方が、まだカシコイようじゃの。こやつのように、芸がなく一方的に向かってくるのでは。これは『余興』じゃぞ……楽しませてみる」

「……ふん、待つてな。今に、楽しくて抜け出せない地獄に連れて行ってやんよ」

こんな中二臭い憎まれ口を叩いてるけど、俺の心臓は今バクバクだ。やべーなおい、どうするよ、この状況。一旦思考を整理してみよう。

ぬらりひよんにトドメをさせるのは決定事項だ。俺はダメージ当てられないし。だとすれば、俺は奴の隙を作ること集中すべき……

「瑛姫ええー！ー！ー！！」

「つて、おい!？」

俺のシンキングタイムが終了しない間に、ぬらりひょんがまた突っ込んでいった。馬鹿かてめえ、こういう時は作戦を・・・はっ、これが主人公の資質か!？ 愚直な方が、カツコいいもんな・・・

「まったく、芸がないのう・・・楽しませると言っておるに」「ガ・・・ぐ・・・が・・・」

羽衣狐はそう言って、またもやぬらりひょんの体に傷を作っている。・・・これはやべえな、下手すりやすぐに殺られる。・・・仕方ない、か。

「ちっ、どけぬらりひょん!！」

「なっ、おい!」

俺はぬらりひょんを突き飛ばして、羽衣狐との間に割ってはいる。すると当然、羽衣狐の尻尾は俺に向かってくるわけで・・・

「ぶふうううおうううう!!!！」

「是炉様ああ!!!！」

またもや当然、俺はボロカスにされてしまうわけですよ。ミヤが叫んでるな・・・うん、あんまり心配させちゃ駄目だな。

「ぶっ、この程度じゃ、俺は倒れねえぞおばさん」

「ならば、もつと切り刻もつ」

「いや、結構で、そおおおおおおい!!!！」

「是炉様ああ!!!！」

くそ、まさかの逆効果。羽衣狐め、ちつとは手加減しろよ。このままじゃ、俺ダメージ ミヤ叫ぶ、のスパイラルだぞこんちくしよ
う。

「沖児猫!! 下がれ!!」

「く、ぬらりひよん・・・ちゃんと決めろよ!？」

俺がメツタ刺しされてる間に、ぬらりひよんが前に飛び出た。羽衣狐の尻尾は俺に向かっていているから、今ならやれるか!？

「ふん、愚かじゃのお。お前にはこの尻尾の数が見えるか？ 妾も数えてはおらん・・・妾の「転生」した数と同じじゃ。齒向かってくる血の気の多い妖に反応するようになった」

「ぐおっ・・・っ!」

「ほれほれ、お前の惚れた女を頂くぞ」

だがやはり、ぬらりひよんの特攻は無駄に終わった。羽衣狐の尻尾は素早く動き、ぬらりひよんを更に傷つける。羽衣狐は笑っていて、超余裕そうだ。

「踊れ、死の舞踏を。妖の血肉舞うのが演目なら、それもよからう
て」

「妖精————!」

ぬらりひよんが傷ついていくのが耐えられなくなったのだろうか、瑛姫は叫んで暴れもがく。・・・だが、羽衣狐はそれを許さない。

「おっ・・・駄目じゃ。能力は知っておるぞ・・・そういうのはつまらん」

羽衣狐はきつちり瑛姫を捕まえて、ぬらりひよんの下に向かうのを阻む。けどな、多分瑛姫がぬらりひよんの下に行きたいのは、能力を使うためじゃないと思うんだ。

「なぜ!? こんな無茶を!」

ぬらりひよんの下へ行けないことを感じただろう瑛姫は、おそらく自分が出せる最高の声で叫び、ぬらりひよんに問う。

「私は・・・妖様がわかりません!! こんなになるまで・・・男の人は、皆そうなのですか・・・!?」

瑛姫は涙を流しながら、ぬらりひよんだけに問う。そう、ぬらりひよんだけ（・・・）だ。・・・俺のことは、ガン無視ですか？

「カワイイことを言うのう、瑛姫・・・いいかえ？世の中には人も妖でも『カシコイ男』は大勢いるのだ」

羽衣狐は諭すように、瑛姫にそう言った。だが、瑛姫はぬらりひよんを心配そうに見つめるだけで、それに返答することはない。

「男を知らんな。初めて知った男が、あんなバカで愚直で・・・カワイそうに」

おいおい、セクハラか？ いい年したおばさんが、若い女に当たってんじゃないよ。それにな、バカで愚直って主人公属性の基本だぞ？

「そして・・・それが最後の男なんじゃからな」

羽衣狐の言葉が終わるか終わらないかの内に、ぬらりひよんがヨロヨロと態勢を立て直す。そして・・・

「瑛姫・・・ワシはお前の目に・・・今どう映ってる？ やはりそいつが言うように、バカに映るか・・・？」

ぬらりひよんは瑛姫の質問に対し、逆に質問を返す。その質問に、瑛姫はすぐにフルフルと首を振って、否と答えた。

「あんたのことを考えるとな・・・心が・・・綻ぶんじゃない・・・」

ぬらりひよんは血だらけにもかかわらず、笑みをこぼしながら瑛姫に語りかける。

「例えるなら『桜』。美しく・・・清らかで・・・儂げで、見るものの心をやわらげる」

う、うーん、まあ・・・そりゃ言ってることはそうなんだが・・・あんな桜全面に押し出したピンクの着物着てたら、桜以外に例えられないだろ・・・って、こんな考えは野暮か。

「あんたがそばにおるだけで、きつとワシのまわりは華やぐ。そんな未来が・・・見えるんじゃない」

ぬらりひよんの未来は・・・まあ、チョココロネだが、それでも素晴らしいものだろう。子どもを作って、孫が出来て・・・それは、瑛姫がいなければ出来ない。

「なのに・・・あんたは、不幸な顔をしてた。ワシが、あんたを幸せにする。・・・どうじゃ、目の前にいるワシは。あんたを、幸せ

に出来る男に見えるか？」

まだまだ、ぬらりひよんの言葉は続く。瑛姫は、涙を流して震えている。

「フハツ・・・見えんだろうな・・・ワシはあんたにカツコイイとこを見せてつけて、ほれさせにゃーいかんのかな・・・」

ぬらりひよんは刀を上に向けて、完全に立ち上がる。その目は、俺が今まで見たことがない、妖のそれだった。

「あんたに溺れて、見失うところじゃった。そろそろ返してもらおうぞ、羽衣狐」

ぬらりひよんの雰囲気・・・今までとは遥かに違う・・・。だけどな、瑛姫だけじゃなくて、ミヤも羽衣狐に捕まってるんだぜ？ん？・・・ちよつと待ってくれ、ミヤ。なぜ、俺の方を期待の目で見てるんですか？・・・まさか、俺にもぬらりひよんみたいなセリフを言えと？

「・・・え、えーっと・・・例えるなら、例えるなら・・・『髪』」

あ、終わった。空気が・・・完全に死んだ。周りの妖怪たちも止まってるし、ミヤも瑛姫もなんか固まってる。羽衣狐なんか、尻尾が萎えて垂れ下がってる。

「・・・ふっ、もらったああ!!」

い、いや、今こそ好機だった!! 羽衣狐の隙を作るために、空

気殺し（シリアスブレイカー）を発動しただけさ！！

「……はっ……ふざけおってからに！！」

途中まで固まっていた羽衣狐だが、すぐに復帰して俺に尻尾を繰り出してきた。だが、遅い！　すでに夜王丸は、射程圏内だ！！

「くらいな、バカめ！！」

「バカは貴様じゃ。妾の尻尾を、舐めるでないわ！！」

あと少しで夜王丸が当たるという時に、尻尾が夜王丸を吹き飛ばす。そして更に、俺自身にも尻尾がきて、俺も吹っ飛ばす。

「……だから言ったんだよ、ぶわああーか！！」

「何じゃと!？」

羽衣狐の意識が俺に集中してる間に、ぬらりひよんが羽衣狐の目の前で刀を振りかぶっていた。そう、これこそが俺の目論見……！　本当だって、信じるよ！！

羽衣狐の尻尾はオートで敵を狙うらしいが、ぬらりひよんの明鏡止水に引つかかれば、それは効かなくなる。故に、俺に羽衣狐の意識が集中していれば、ぬらりひよんは完全フリーだ！！

「これこそ、俺の気殺しと、ぬらりひよんの明鏡止水の合体技、えーと……名前は後で考える！！」

俺がそんなことを言ってる間に、ぬらりひよんは羽衣狐に斬りつけた。しかし、一寸の差で、刀は尻尾に飛ばされる。

これで終わり？　んなわきゃない。ぬらりひよんはその背に隠し持った刀を、もう一度羽衣狐に斬りつける　　！

「同じことを!!」

すでに余裕がなくなった羽衣狐の尻尾が、またぬらりひよんの刀を弾こうとする。しかし、ぬらりひよんの刀は、瑛姫が持っていた退魔刀。羽衣狐の尻尾を軽々と切り裂く!

「何!?!」

そしてその勢いのまま、羽衣狐の顔を深々と斬りつけた。そしてそれにより、ミヤと瑛姫は解放される。

「是炉様……」

「い、いや、悪かった……」

解放されたミヤが、すぐに俺に近づいて話しかけてきた。多分、例えるなら髪のことだよな……うん、あれは俺が悪い。

「いえ、あれも作戦だったのですね!! 見事でした!!」

「え?……ああ、そうね、作戦だよ作戦!」

なんか知らんが、怒ってないようなんで、良しとしよう。……さて、これからどうなる?

例えるなら桜、例えるなら・・・（後書き）

羽衣狐を斬りつけたところで今回は終わり。そして次話、ちょっと急展開？になるかな？連載初期に考えてた展開で・・・まあ、おもつくそネタですが。

妹？・・・いいえ、義妹です（前書き）

今日は11月22日、いい夫婦の日。そして、ぬらりひょんと瑛
姫が祝言をあげた日。・・・まあ、この話には何も関係ないです
け
ど。

妹？・・・いいえ、義妹です

「ガッ、ハ・・・が・・・ぐう・・・!? な・・・なんじゃ・・・!? その・・・刀は・・・」
「ハア、ハア」

ぬらりひよんが退魔刀で斬りつけたことにより、羽衣狐は苦しみながら酷く狼狽している。斬りつけたぬらりひよんは、息を荒くしながらもまだ油断はしていない。

周りの妖たちも、状況を固唾を飲んで見守る中、変化が現れる。羽衣狐の裂けた傷から、大量の妖力が溢れ出ていって、天井を突き破るほどになったのだ。

「おおおおおおおお!! ぬ・・・抜けていく!? こ・・・これは・・・妾の妖力が抜けてゆく!？」

羽衣狐から抜け出た妖力は止まることを知らず、遙か天空の彼方に昇っていく。羽衣狐はそれを信じられないような顔で見つめ、慌てて追いかけようとす。

「まま、待て・・・どこへ行く・・・戻りやああああ!! 何年かけて集めたとおもつとるうー!!」

抜け出した妖力を追って、羽衣狐は天井を突き破って行った。羽衣狐配下の妖たちも、信じられないようにそれを眺め、困惑のセリフを吐いている。

「瑛姫ー!!」

それを見届けたぬらりひよんは、瑛姫の名を呼ぶ。助けだした時は必死だったから、見失ってたのかもしれない。

「総大将！！　ここはオレ達にまかせろ！！」

そうぬらりひよんに言ったのは、ぬらりひよんが助けだした瑛姫をすぐに保護した牛鬼。

「あんたはあいつを追え！！　とどめを・・・刺しにいけー！！」

「・・・牛鬼・・・！！　まかせたぞ！！」

牛鬼の言葉を聞いたぬらりひよんは、後を託して羽衣狐を追っていく。ここで羽衣狐を倒せば、ぬらりひよんは目的の魑魅魍魎の主となる・・・！

「さて！！　行かせんぞ！！」

だが、そんなことを羽衣狐の配下が許すはずがない。幹部らしき奴らを筆頭に、ぬらりひよんを追おうとする。

だが、逆に聞いてやる。羽衣狐を追おうとするぬらりひよんを阻もうとするお前らを、俺たちが邪魔しないとでも？

「おっと、あんたらの相手は・・・オレたちだぜ？」

さすがの漢、一ツ目を先頭に、奴良組の面々が、羽衣狐配下の行く手を遮る。ちなみに、一ツ目の後ろには、何故かガチロリの姫がいた。

「・・・まあいつか、俺ももう少し頑張るかね。・・・ミヤ、俺の

後ろにいるよ、危ないからな」

「はい、分かりました」

俺が指示すると、ミヤは頷いて俺の後ろに隠れる。・・・あれ？
ちよつと待て・・・やべ、俺ってザコいのに、ミヤ守りながら戦
えんのか？・・・まあ、なんとかなるか。

そこからは、奴良組の妖と羽衣狐配下が入り混じれる乱戦となつた。普通なら勝負にならないくらいの格差なんだろうが、ぬらりひよんが羽衣狐を斬ったことにより、奴良組の士気が上昇しているから、まだ勝負になっている。

「でもなあ・・・地力が、違うんだよなあ・・・」

現在の戦況を見て、俺はそう呟いてしまう。今はまだいいが、多分後から俺たちが不利になっていくはずだ。ここは、強い連中に頑張ってもらおうしか・・・ん？

「あれ？ 牛鬼はどこ行つた？ それに瑛姫もいないし・・・」

「あ、是炉様。瑛姫ともう一人の殿方なら、先ほど上へ上がって行きました」

「なんでやねん!？」

こんのくそ大事な時に、あいつ何やって・・・ああもしかして、瑛姫がぬらりひよんの所行きたいって言ったとか?・・・まあ、しようがない・・・のか？

「ちつ、なんとか乗り切るしかないか・・・」

主戦力の牛鬼がいないってのは痛手だが、頑張つてぬらりひよん

が羽衣狐を倒すまで耐えるしかない。頭がいなくなれば、奴らだつて多分矛を収めるだろう。

「がつ・・・っ！」

「つて、雪麗!？」

俺が状況把握をしている中で、雪麗が俺の近くに飛ばされてきた。飛んできた方向を見ると、板野郎が目つきを尖らせている。・・・どうやら、あいつが犯人らしいな。

「大丈夫か、雪麗」

「・・・平気よ。まだ・・・やれるわ」

雪麗はそう言つて、ふらふらと立ち上がる。だが無理をしているのは明白で、このまま戦わせるのは、男として絶対にNGだ。

「無茶すんじゃないよ。・・・よし、ミヤ。雪麗と一緒にいな」

「ちよつと、沖見猫・・・」

「だまれ馬鹿。ここは、俺にまかせときな・・・」

雪麗が俺を止めようとするが、俺は気にせず前に進み出る。まったく・・・ここは、俺の活躍フラグに決まってるだろう？

「ああ？　なんだ？　てめえがくんのか、クソ野郎」

俺が前に出て行くと、板野郎がメンチを切つて俺に毒づく。・・・お前、口悪いなあ。そんなんじゃない、女にモテねえぞ？

「ふっ・・・黙れ板野郎。女を傷つけて喜ぶ変態が、俺に勝てると思つてんじゃない」

「ああん？ 切り刻まれてえのか、てめえ」

切れたのか何なのか知らないが、板野郎は俺に向かって突進してきた。だが、てめえは分かっちゃいない。女を守る時の主人公ってのは、新たな力を手に入れるものなのだというのを！！

「死ね、ゴミムシ野郎」

板野郎は俺の下まで一瞬でたどり着き、刀を振り下ろす。さあ、今こそ、俺の新たな力が生まれ・・・あれ、ちよつと、早くしてくれよ？ 早くしないと、板野郎の刀が当たっちま、

「ぐうおおおおおおおおおおふうああああああ！！！！ 何でじゃー！！！！ 俺の、新しい力は！！！！」

「・・・何言つてやがる、このカスムシ野郎」

ぐっふ、普通に斬られたぜこの野郎。何でだよ・・・こういう時は、絶対に奇跡の力が働いて、なんかビームが出せるようになったり・・・なあ？

「・・・馬鹿じゃないの？」

「あの、是炉様にはきつと、深いお考えが・・・」

・・・ごめん、俺が悪かった。そんな奇跡が起こるなんて、主人公だけの特権だよ・・・俺って絶対、主人公の扱いじゃねえもんなあ・・・

「いいよいいよ！！ 俺の地力だけでやってやるから！！！！」

「・・・ああ？ まだやんのか、カスムシ野郎」

そう言いながら、板野郎が再び刀を構える。・・・どうすつかな。この状況で、こいつを倒すことなんて、俺には無理・・・ん？ 何か、あそこ光ってね？

SIDE めらりひょん

「君は 魑魅魍魎の主になって・・・何がしたい？ 徳川の世は明るいで・・・今よりもつとな。闇は 確実に消えてゆく。この先・・・妖には生きにくい世の中になる」

途中で割り込んできた秀元の協力もあって、ワシは羽衣狐を倒した。そして、秀元はワシに問うてきた。羽衣狐を倒して魑魅魍魎の主となったワシは、一体どうするのかと。

「・・・失われてゆく闇 　　んなこたあわかってる」

ああ、わかっているとも。徳川の世になれば、戦国の世は終わり・・・闇が失われる。だからこそ、ワシは・・・

「だからワシは、消えてゆくかもしれん・・・そいつらの為に主となるんじゃない」

「妖を “ 守る為 ” 　　か？ 人の行いを認め・・・妖の世界も

守る。“共生”やな・・・それはムズイで」

秀元は少し伺うように、ワシにそう言う。じゃが、そんなことはない。

「それでもないさ。総大将が・・・無敵になりやあいんだからな」

そう・・・ワシが無敵になって、誰にも邪魔させなけりやいい。おいおい、ワシの言葉を聞いて秀元の目が、微妙に開いてるのが面白いな。

「妖精~~~~~!!!」

・・・ん？

「ハア・・・ハア」

「よ・・・瑛姫！？ な、何故ここに!？」

声が出た方を向いて見ると、瑛姫が息を切らして屋根を登っていた。牛鬼がその後ろに続けてるが・・・何で瑛姫にそんな危ない真似させてやがる。後で、一発殴らせる。

「おケガを・・・あ!？」

「おい!!」

最後まで言い切る前に、瑛姫が足を滑らせる。そんな着物着てたら、当然の結果だ!! ワシのケガなんて、大したことねえつてのに・・・!

ワシは急いで手を伸ばし、瑛姫の伸ばされた手を掴む。そしてその勢いのまま、瑛姫をワシの胸に抱き寄せた。・・・沖見猫が見た

ら、また何か阿呆なことを言っんじやろうなあ。

「瑛姫……」

「妖精……瑛姫は……心配しました。私に……おケガを治させて下さい……あなたの側で……この先もずっと……」

ワシの側で……ずっと？　それは、ワシと一緒にいるということ……で、いいんじやよな？

「よ……ようひめ……」

「ハイ……」

ワシと瑛姫は、互いに見つめあう。そんなワシらを見て、秀元と禿兄が何か言っているが……全く聞こえない。ワシの目には、瑛姫しか映らず　ムラツときた。

「瑛姫エエッ！！」

「え」

その衝動のままに、瑛姫をきつく抱きしめる。瑛姫が気の抜けた声を出す、それすらも可愛らしく思える。そして、そのまま

「何をなさってるんですか、総大将」

「あ痛て」

ワシが暴走する前に、牛鬼がワシの頭を小突いた。まあ、そのままだったら拙いことになってただろうが……少し恨むぜ。

「……総大将を、叩いていいと思うのか」

「すみません。しかし、放っておけば……沖兎猫と同類になって

しまつかと思ひましてな」

「すまなかつた。ありがとう」

「いえ・・・」

ああ、そうだ。ワシは一体、何をするところだったんじやるうか。牛鬼が止めなければ、沖兎猫と同類になってしまつところだった・・・ん？

「つて、牛鬼。お前がいなくなつたら、あいつらヤバいんじやねえか？」

沖兎猫と言われて思ひ出したが、下の連中はどうなつたのだろうか。羽衣狐の配下の妖どもは強力だから、奴良組の奴らじゃヤバいかもしれない。

「ええ、ですから・・・さつさと戻りましょう」

「つたく、しょうがねえなあ」

牛鬼はワシを促し、下に帰ろうと言う。それを断る理由もないし、連れて降りやすくする為に、瑛姫を姫抱きにする。

「ほんじゃ、ボクらはここで帰るわ。大坂城の武士に見つかつてもあれやし・・・ちゅうちゃんによろしく言つといてな」

最後にそう言い残し、秀元たちは帰つて行つた。ワシらはそれを見届けた後、屋根を突き破つて下に降りる。

「いて・・・」

「キヤ・・・」

「総大将・・・瑛姫のこと、もっと考えて」

少し、強引過ぎたじやろうか・・・屋根を壊したことによって、砂ぼこりが凄くて前が見えない。さっきの部屋に降りたはずじゃが・・・

「・・・ん？ 音がねえな」

「これは・・・一体？」

屋根から色々と落ちてくる音以外、部屋で物音がしなかった。普通なら、何かしらの声があるはず・・・そして、砂ぼこりが消えた部屋には・・・

「なっ・・・何じゃ、これは!？」

ワシはその場の光景に、目を疑わずにはいられなかった。その部屋の妖たちは・・・ほぼ全てが立っておらず、変わり果てた姿になっていた。

立っているのは・・・立ちながら気を失っているらしい一ツ目と、口をあぐりと開けて信じられないような表情をしている沖児猫。その近くにいる、雪麗と髪の長い姫。そしてもう一人

「・・・誰じゃ・・・？」

沖児猫のいる場所から、少し離れた場所。ワシが今までに見たことがない、珍しい青くて床まで着くような長い髪をした幼女が・・・全裸でそこにいた。

「・・・ぬ、ぬらりひよん・・・終わった、のか？」

「あ、ああ。そんなことより、これは？ それに、その女は・・・

」

我に返つたらしい沖児猫が、動揺を隠さずにワシに話しかけてきた。ワシはそれに返答し、この訳の分からない状況について尋ねる。

「えっと・・・俺の、妹・・・らしい」

「妹じゃと!? 本当か!？」

「違う」

「って、違うんですか!？」

沖児猫の妹発言に、その幼女本人が否定する。よく分からないその状態に、同じく状況の掴めていなかった瑛姫が、沖児猫曰わくツッコミと言つやつをしてしまった。

「妹いもつとではなく義妹いもつと。義が有るのと無いのでは、全然違う。おわかり(Do you understand)?」

「イ、イエス・・・いや、でも、言つ分には一緒なんだが・・・」

「黙れ。義をつけるかどうかは、規制に引っかかるか否かを分ける天王山・・・って誰かが言つてた」

「誰だ、そんなこと言つたのは!？」

沖児猫とその幼女が、ワシからすれば全く意味の分からない言い争いをする。・・・ああ、なんか・・・また面倒なことになるんじゃないだろうか・・・

妹？・・・いいえ、義妹です（後書き）

ということで、主人公以外のオリキャラ登場回。その詳細は次話でやりますが・・・自分としては、設定が結構気に入ってたりします。

沖見猫は外見設定あんまりないのに、この義妹だけは絵とか描いてみましたしね（ただのシャープン書きですが）。挿し絵の投稿なんてやり方分からないから、まったく意味ないですけど。

そんなこんなで、次回『俺の義妹がこんなにチートなわけがない』
・・・完全にネタです。

俺の義妹がこんなにチートなわけがない(前書き)

義妹が色々とやっっちゃってくれます。ええ、色々。それに伴って、色々な人がキャラ崩壊します。キャラ崩壊してないキャラの方が少ない・・・だと？

俺の義妹がこんなにチートなわけがない

時間は遡り、板野郎と戦っていた頃。板野郎に立ち向かおうとしている俺の目に、あるものが光っているのが見えた。そのあるものとは……

「……なんで、俺の半身が光ってるんだ……？」

そう、先ほどオッサンにぶつた斬られた俺の右半身だ。体が半分だけあるとか、マジでホラーだったから直視しないようにしてたんだが……何が起こってるんだ？

そしてその光は強くなり、この場にいる全ての者がそれに注目している。皆が不審気に見守る中、ますます光は強くなり、次第に目を開けていられなくなった。

「くっ……一体、何が……」

最後に強烈な光を放った後、その光はふいに途絶える。目が慣れた頃に、ゆっくりと目を開けると、そこには……

「……なっ、なん……だと……？」

小学校の低学年から、成長の遅い上級生というぐらいの身長の子女が……全裸でそこにいた。その幼女の顔は、長く伸びた前髪のせいで多少隠れているが、相当に整っている。

「……」

その幼女は、無言で俺をじつと見つめてくる。そして何を思ったのか、トコトコと俺の方に歩いてきた。・・・ぐっ、なんだこの愛らしさは・・・！

その際、普通なら大事な所が見えてしまうのだろうか・・・長い髪で上手く隠れている。これが、ジャンプ漫画補正か？ 乳首券は貴重なんですね、分かります。

まあ、大して離れた距離でもなかったし、幼女はすぐに俺の所までやってきた。そして俺の後ろに回り、背中に登ろうとする。

「って、ちょ、おい！ お前結局誰だよ！！ それに、なんで俺に登ろうとする!?!」

だが俺は、それを急いで止める。こいつが誰だか分からない以上、下手な行動は出来ない。・・・幼女じゃなくて少女だったら、多分そのままだったと思うがな。

「・・・わたしは、義兄さまの義妹・・・名前はまだない」

「は?・・・ちょ、いも、どういうことだ!?!」

妹だとお!?! どういうことだ?! 俺には妹なんていなかったし(脳内妹ならいたが)、いたとしても、それは前世のことだ。この世界、この時代にいる筈がない。

「義兄さまの半身・・・そこからわたしは産まれた・・・だから、わたしは義兄さまの義妹」

「俺の、半身・・・?」

そう言われてよく見ると、確かに俺の半身が無くなっている。・・・いやでも、それって妹なのか? それに・・・

「俺の半身から、なんでお前が産まれたんだ？ どうしたらそんなことになる」

「義兄さまには、膨大な魔力がある。当然、分かれた半身にも。こんな妖気満載の中で、突然変異が起きない方がおかしい」

あー、そーいや俺って、全く意味もなく魔力チートだったな。それならまあ、分からなくもない……のか？……いやいや、有り得なくね？

「でも……突然変異で意識を持った幼女が産まれるとか……その辺、どうなんだ？」

「ググれカス」

「……え……あ、はい」

そつだよな、自分で調べたり考えたりせずに人に聞くとか駄目だよな。よし、今からググってみよ……ググれるかあ！！ パソがないのに、そんなこと出来る筈ないだろ！？

「いやいや、おかしい……」

「黙れ。自分でやる努力をしろ」

「……はい」

あれ、なんでだろうな？ 目から垂れる鼻水が、一向に止まらな
いや。……なんで初対面の妹？に、こんなにボロカス言われなく
ちやいけないんだ？

「分かった？ 義兄さま。分かったなら、早く背中に乗せて」

打ちひしがれている俺に、妹が手を上げて急かす。これ見てる分

だったら、凄く可愛いんだが・・・いかんせん、さっきのインパクトが強過ぎる。

「いや、まずなんで俺の背中に乗りたいんだ？ それ聞いてなかっただろ」

「・・・義兄さまの頭の中にある、インターネットをやるだけ」

「・・・どゆこと？」

「前に、閻魔大王が繋げてた・・・多分ロックがかかってるけど、外せば使える。それで、アニメを見漁る。それだけ」

・・・えーっと、確かに昔そんなことが有ったような・・・え、まさかまだインターネット繋がってたのか！？ 早く言ってくれ・・・って、俺には全く分かんねえな。

それにしても・・・こいつには、俺の記憶が有るんだろうか。アニメ好きっぽいのも、2chっぽい発言も、それなら説明が・・・つかないか。

「・・・けど、駄目だ。後で乗つけてやるから、それまで待ってる。今は、あいつらと戦闘中だから」

そうだ。今は空気となってるが、俺たちは羽衣狐の配下と戦闘中。こんな幼女を背負ってれば戦い辛いし、何より危ないからな。

「・・・いや。わたしは、早くアニメが見たい」

「我が儘言うなって・・・終わったら、いくらでも見ればいいから、な？」

うん。終わったら、いくらでも見せてやる。こいつが見れるようになれば、俺だっで見れるようになるだろうし・・・あれ？ なんか妹が、ブツブツ言ってる・・・

「・・・要するに、あいつらを倒せば・・・見れるんでしょ・・・」
「？」

「まあ、そうだが・・・まさかお前、戦うつもりか!？」

妹は、目をどす黒く光らせて、前に進み出ている。これは多分、自分であいつらを倒してやる!・・・ってことだろう。

「止める、あいつら滅茶苦茶強いんだ。それに、武器も持ってないお前が戦えるとは思えない」

「・・・あいつらが強いなんて、関係ない。ただ、わたしの邪魔をするクズを、排除するだけ・・・武器なら、義兄さまの刀を借りる」

そう言っただけ、夜王丸を持っていく。だが待て、あんな華奢な腕で、刀を振り回せるのか？ 仮に振り回せたとしても、大したことは出来ないだろう。

「おい、ガキ・・・悪いことは言わねえから、兄貴の言う通りにしな。てめえじゃ、オレらにはかなわねえ」

そんな妹に、板野郎がそう忠告する。おお・・・幼女とはいえ敵を心配するなんて、意外といい奴なのかもしれない。

「問題ない。こうすれば、いい」

だが妹は、こともなげに問題ないと言う。そしてその手を、自分の胸に当て・・・

「なっ・・・!」

その胸から、何かの結晶のようなものが出てきた。その結晶を夜王丸に押し付け、それは夜王丸に吸収される。そして・・・

「・・・うっそだぁ・・・」

夜王丸から、圧倒的なオーラ　畏とは別物か？　が放出され

た。周りの空気は悲鳴をあげ、近くの床はめくれあがっている。・・・これ、なんてチート？

「一体、何やった？」

「・・・義兄さまの中には、ガツシユ世界の魔術が眠っていた。それは、魔力がなければ使えないけど、結晶として外に出せる。そうすれば、莫大な力が手に入る」

んーっと・・・確か、ガツシユの原作でそんなんがあったような・・・確か、ファウードでゼオンがやってた気がする（マニアックか？）。だが絶対に、あんな使い方は出来ないと思うが。

「それはどうやれば、外に出せ「ググレカス」・・・」

せっかく、やり方を聞いて、俺もチートの仲間入りをしようと思つたのに・・・もしかしてこいつさ、俺を精神的に苛めるために産まれたの？

「ぐっ、ぬおおおおおおお！！！」

「おい、早まんじゃねえ！」

夜王丸の放つオーラに耐えられなくなったのか、羽衣狐の配下のモブ妖怪が、妹に向かってきた。それを板野郎が諫めようとするが、間に合わない。

「・・・ふん」

「ぐふえっ・・・」

そして妹は、夜王丸を軽々と一閃し・・・モブ妖怪は一瞬で、跡形もなく溶けた。・・・ええ、完全なるチート性能じゃありませんか。

「なっ・・・バカな・・・！」

「あんなのに、どうやって勝てていうんだ・・・」

そんなチートな妹を見て、モブ妖怪共に動揺が走る。一発当たれば、確実にお陀仏・・・まあ、動揺するわな。

「おい、びびってんじゃねえ・・・幾ら強くても、奴は一人だろうが」

「そうだ。皆でかかれば、造作もなく倒せる」

「おお・・・茨木童子様、鬼童丸様・・・」

だがやはり幹部連中は一味違い、一瞬で動揺を収める。・・・板野郎とオツサン、そんな名前だったんだ。

ともかくとして、これでモブ妖怪共の士気が戻った。・・・こうなれば、妹の不利な状況になる。

「おい、ヤバいんじゃないか？」

「・・・確かに、ちよつとキツいかも」

「だったら・・・」

「だけど問題ない。少し、時間を稼いで。わたしの・・・固有結界でやる」

「っつ！ 固有結界だと!？」

固有結界・・・それは、型月世界の大魔術のこと。自分の心象世界を具現化し、世界を侵す大禁呪。以前俺は、閻魔にアーチャーの『Unlimited Blade Works』を貰った。なら、チートな妹が使えてもおかしくはない。

「分かった、俺が足止めをする。だから、ちゃんと決めろよ？」

「余裕・・・」

俺は妹を背にして、板野郎　茨木童子か？　たちの前に立ちふさがる。そしてそれを確認した妹は、息を一つ吸い、静かに詠唱を始めた。

「心は怠惰が占めている。」

「何て!？」

俺は板野郎たちが目の前にいるというのに、振り返ってツッコンでしまう。・・・そのせいで、普通に斬られちゃった。

でも、しょうがないだろう？　だって、あんな詠唱されりやそうなる。元々は『体は剣で出来ている。(I am the borrower of my sword.)』というカッコいい詠唱なんだぜ？

「　　昼間はニコ動、夜中は2ch。」

そんな俺にはまったく構わずに、妹は詠唱を続ける。・・・もはや、原型残ってないじゃん。ファンからクレームくるぞ・・・

「　　幾たびの指導を受けて不変。ただの一度も反省はなく、ただの一度も理解されない。」

ふざけているとしか思えない詠唱は、まだまだ続く。そして、俺が無駄に斬られるのも、まだまだ続く。

「彼の者はうっぷを期待、パソの前で全裸で待つ。」

「止めなさい!！」

いや、確かにそういう文化?は有るらしい。けど、お前仮にも女の子だろう!?!?!って、俺もっ完全に兄貴思考になってるな。

「故に、世間体に意味はなく。」

まあ、俺の言葉なんて聞いてないかの如く、妹の詠唱は佳境に達する。その詠唱が終わった時、一体どうなるのか……

「その心は、きつと怠惰が占めていた。」

そうして、詠唱は終了。妹の周りから火が発生し、世界が書き換えられる。大丈夫だとは思うが、俺は一応ミヤと雪麗を庇っとく。こういうポイント稼ぎも、結構大事なんだ。

少しして、俺は反射的に閉じていた目を開く。その目に入ってきた光景……俺は、自分の目を疑わずにはいられない。だって……

「なんで、大量の布団が有るんだよ!？」

そう、その固有結界の内部は、数え切れない布団が占めていた。何これ? こんな意味不明な固有結界……ん?

「ちょ、狒々？ なんでお前布団に入っていく？ 奴らと戦えよ」

「嫌じゃ、ワシは戦いたくない」

「は？ 何言つてんだよ！？」

「だって面倒だし・・・戦ったら負けだと思ってる」

なんだ？ この二トみみたいな発言・・・はっ、まさか、この固有結界のせいか！？ 俺は急いで、他の奴らの状態を確認する。

「納豆、達磨！ お前らもか！？」

「だってオイラ・・・どんなに頑張っても出番ないし」

「ワシなんて、どうせ駄目妖だし・・・」

納豆も達磨も、狒々と同じ状態だ。まったくやる気を感じられない。・・・納豆、地味にメタ発言するんじゃないやねえよ。

「そつだ、一ツ目は・・・！」

俺ははっと気づき、奴良組一番の漢の一ツ目を捜す。あいつなら、こんな馬鹿げた固有結界なんかに負けない！

そして俺は、ちゃんと立っている一ツ目を発見する。やはり、奴良組一番の漢は伊達じゃな、い？

「・・・おい、一ツ目・・・なんで、動かないんだよ・・・？」

「・・・」

「・・・義兄さま、その人は既に」

死んでいる。・・・ってことはなく、ただ立ったまま気絶しているだけなようだ。固有結界に抵抗した結果だろうが・・・さすが、漢一ツ目。気絶しても尚君臨し続けるとは・・・

「・・・おい、これは一体・・・」
「これは、わたしの固有結界『無限の怠惰』(Unlimited NEAT Works)・・・文字通り、固有結界に入った者全てを二ートにする」

なんだ、その馬鹿馬鹿しいようで最強なチート能力・・・この子、恐ろしい子！

「あの、是炉様・・・皆は、どうなったのでしょうか？」

「・・・何よ、この変な空間」

「ミヤに雪麗、お前ら無事だったのか!？」

二人の声に俺が急いで振り返ると、困惑しつつも無事な二人がそこにいた。良かった・・・美女が壊れてるのは、さすがにこたえるもん。

「でも・・・なんで、二人は無事なんだ？」

「義兄さまが庇ったから。わたしと義兄さまは繋がってるから、この固有結界は義兄さまに効かない。その義兄さまが庇えば、効かない」

分かりやすい説明ありがとう。そうか・・・いまさらだが、俺にも効いてなかったな。うん、マジで庇って良かった。

「ちょっと、ちゃんと説明なさいよ。奴良組も、京妖怪も、全員おかしくなっちゃって・・・」
「ってそうか、敵の奴らも・・・」

雪麗の言葉で、俺は重要なことを思い出す。この固有結界が発動

されたのは、元々はそれが理由。一体奴らは、どうなってしまっているのか。

「まずは、板野郎……」

板野郎は目立つので、すぐに見つかった。固有結界に飲まれて、布団の中であるまっっている。うん、気持ち悪い、キャラ崩壊し過ぎだろ。

「……なあ」

「オレはな……こんな見た目なせいか、皆が逃げていくんだ。なら、オレは外に行かない方がいいだろ」

なんだ、このネガティブ野郎。いやまあ、確かに板が生えてる奴とか引くけど……

「うーん、ロックバンドとかやってみれば？ 案外売れて、ワーキヤー言われるかもよ？」

「……」

見た目から考えて、ロックバンドとかやれそうだな。ポーカルのIBARAKI……うん、他人事だから言えるんだよな、こういう無責任発言。

「他の奴ら……」

IBARAKIはほつといて、他の敵幹部を捜してみる。少し探す、さっきまで牛鬼と戦っていた天狗らしきジジイがいた。

「ジジイ……」

「ワシは最近、他の奴らからの扱いが悪いんじゃ・・・鼻が卑猥だとか言われてな・・・もう、外に出たくない」
「・・・ごめん、励ます言葉がない」

ジジイが言うように、ジジイの鼻は・・・卑猥な形をしてた。これは、さすがにフォロー出来ない。・・・俺、普通の鼻で良かったなあ。

「・・・」

「・・・オツサン・・・」

次に俺が発見したのは、あの鬼童丸・・・とかいうオツサン。無言で布団を被っていて、凄いシニールだ・・・

「・・・やはり、オレはオツサンか・・・ここ数百年、よく言われるのだ・・・鬼童丸って、名前合っていないだろう・・・とな」

「悪かった。これからはちゃんと、鬼老丸って呼ぶよ」

「・・・そうか、オレは鬼老丸か・・・そうだよな・・・」

「冗談で言ったのに・・・うん、冗談でも言っちゃいけないことってあるな。大丈夫、天狗よりはまだマシだと思うから。」

「ブツブツブツブツ」

「・・・イケメン、お前もか」

最後に俺が見つけたのは、キリシタン風のイケメン。ブツブツと何かを言っていて、ちよつと怖かったりする。

「お前は、なんだってんだ？」

「私は、今の羽衣狐様・・・淀殿に、ついていけないのだ・・・」

「・・・どゆこと？」

「淀殿には何というか・・・萌えが感じられない・・・そう、闇の聖母マリアとは思えない・・・」

「知るか!?!」

ああ・・・なんだこの固有結界。キャラ崩壊させまくって馬鹿馬鹿しいくせに、大抵の奴は戦意が無くなるというチートぶり。こんなのもって有りか？

「全然有り。わたしが幼女で義妹というだけで、きつと需要はある」
「・・・さいですか」

俺はもう現状についていけなくなつて、ぬらりひよん達が戻ってくるまで啞然としていた。この妹、いや義妹・・・これからどうなるんだろう？

俺の義妹がこんなにチートなわけがない（後書き）

どうでしたでしょうか、義妹の馬鹿馬鹿しいチートぶり。別に倒せないわけではないけど、戦えば大切なものを失ってしまうような気がします。

ここで皆さんに、幾つか募集したいことがあります。その内容は・

・

? 義妹の名前（出来ればその由来とかも）

? 沖兎猫（あと義妹）の中二臭い二つ名

? 沖兎猫の妖怪説明文（原作でセンターカラーの後ろにあるようなやつ）

です。募集期間は、作品の中で出てくるまで・・・としたいと思います。

・・・せめて、一人か二人ぐらいは、案を出して欲しいなあ・・・

自分の発言には責任を・・・(前書き)

義妹の名前、決定しました!!

案を出してくれた皆さまに感謝です。

自分の発言には責任を・・・

「あー、ひどい目にあっただぜえ・・・沖兎猫、お前の妹のせいだろお？　一発殴らせろよ」

「俺は関係ないだろ！？　むしろ俺だつて被害者だ！！」

「一つ言う。妹ではなく、義妹」

「おお、そうだったか」

「俺を無視すんなよ！！」

大量の布団をひっくり返して奴良組の組員を正気に戻し、大坂城から漸くねぐらに帰った俺たちは、戦勝祝いとして宴会をしている。今している会話は、そのことに対する狒々の冗談みたいなものだろう。

「いいじゃねえかよあ、こんな可愛い義妹なら。お前だつて、前に妹が欲しかったつて言ってただろう？」

「まあ・・・そうだけど、なあ・・・」

俺は言葉を濁しながら、ちらつと後ろを見やる。その視線の先には、アニメを見ているのだろう、心なしか満足そうな義妹。

「ん？　何か不満か？」

「いやいや、これ見りゃわかるだろ・・・」

狒々の疑問に、俺は多少イラつきながら返す。だつてそうだろう？　義妹の捕まっている場所・・・それは、背中なんかじゃない。

「なんで・・・頭に髪をぶっさされなきゃならねえんだ！？」

そう、俺の頭に、義妹の長い髪がどういう理屈かぶっささってるんだ。義妹は俺の体につけず、髪だけでぶら下がってる。重いし、頭ズキズキするし・・・いいことねえぞ。

「じゃなきゃ、脳にハッキング出来ない。これは、当然の結果・・・さすが、アーチャーはかつこいい」

「Fate見ながら話すんじゃないねえ!! 俺にも見せる!!」

「義兄さまに見せる? 冗談キツイ。わたしがずっと見続けるだけ」「てめえ、ふざけんじゃねえ!!」

本当、なんなのこいつ!? 俺の義妹だろ? もう少しさ、義兄に対する敬いとかいたわりとか・・・期待するだけ無駄か・・・

「いいじゃねえかよ、お前不死身なんだし・・・雪女の冷気に比べれば、可愛いもんだと思ってるよ」

「・・・別に、肉体的な痛みはどうでもいいんだよ・・・問題は、精神的ダメージの方だ・・・」

ああ、そうだ。肉体的ダメージなんて、首斬られたり真っ二つにされるのに比べたら、蚊に刺されたようなもんだ。けど・・・

「ん? どういうことじゃ?」

「・・・これは、さっきのことだ」

俺たちがねぐらに帰還して間もない頃、既に俺の頭には髪がぶっささっていたが、もう諦めの境地に至っていた。どうせ、俺の不幸属性の賜物だろ?と。

「ん、やべ、トイレ行きたい」

そんな中、俺はトイレに行きたくなかった。よく考えてみれば、一日近くトイレ行ってなかったからな・・・え? 大か小かって?・・・中さ。要するに両方。

「おい、えーっと・・・義妹」

そっぴい、こいつにも名前つけなくちゃな・・・いつまでも義妹じゃ駄目だし。出来るだけ、可愛い名前にしてやろうか・・・俺って素晴らしい兄貴だな。

「・・・なに、義兄さま」

「トイレ・・・廁行きたいから、一旦降りてくれない?」

俺はやんわりと、義妹に離れるように言う。・・・これはさ、俺のためでもあるし、義妹のためでもあるんだ・・・なんで俺って、こんな下手に出てるんだらう。

「いや。わたしは、ずっとアニメを見てる。・・・やっぱり、クロノはKYなのか・・・」

「リリカルなのはか!? とうかクロノだってな、好きでKYって言われてるんじゃない!! あいつだって本当は真面目ない奴だ!!!・・・きつと」

二次創作だったらほぼ確実にKY扱いで、踏み台になるかな。．．
・そういえば聞いた話によると、18禁のゲームでは．．．うん、
KYでいいや。

．．．はっ、よく考えれば話が変わってるじゃねえか!．．．
やるな、義妹。これが、孔明の罠か．．．罠にかける必要なんて、
これっぽっちもないな。

「あの子、いいか義妹？ これはお前のために言ってるんだぞ？」

「別に、義兄さまの息子なんて見る気は毛頭ないから大丈夫」

「ちよ、お前そういうこと言っんじゃねえ!! それにだ、問題は
他にもあって．．．」

「大丈夫。義兄さまに、可愛い義妹に汚物を見せる趣味があったと
しても、アニメが見れることになんら支障はない。．．．軽蔑はす
るかもしれないけれど」

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおおお!!
」!

「　　つてな．．．」

「そ、それは．．．確かに．．．」

そんなこと言われて、トイレに行けるか？ いや行けない（反語）
・・・おかげで、俺はずっとトイレを我慢してるんだ。食ったらまた行きたくなるから、宴会のご馳走にも手をつけられないし・・・
「これで、男だったら・・・迷いなくぶん殴るんだが・・・」

義妹だしなあ・・・しかも、美少女。義兄として、男として、俺には手を出すことが出来ない。こいつはそれを分かった上で、俺を嘲笑ってるふしがあるがな。

「是炉様」
「ん？ ミヤか」

俺が人生について本気で考えようとしている時に、ミヤが俺に話しかけてきた。先ほどまでは瑛姫や蒼姫と話していたようだが・・・
「瑛姫はぬらりひょん様と話していて、蒼姫は一ツ目殿と・・・」
「なるほ、ど？・・・え？ 一ツ目？」
「ええ、一ツ目殿です」

まさか・・・あの一ツ目が、ガチロリの蒼姫と・・・だと？ 確かに、人間の女と話せとは言ったが・・・見た目を考える。それは犯罪だ。

「それで・・・少し、是炉様と話したいと思ひまして・・・」
「おう、いいぞ。何について話す？」
「あの時のことを・・・お聞かせして欲しく・・・」

あの時って・・・ミヤが自殺しようとしたのを、俺が止めた時のことか。つつてもな・・・あんまり覚えてないんだよ。その時限り

だと思つてたし。

「あの時・・・18になったら、是炉様のはーれむに入れて下さると・・・」

「・・・言つた、な」

そういえば、そんなこと言つたっけ・・・あの時つて多分、ミヤは5歳ぐらいだろ?・・・やべえ、一ツ目どころじゃない犯罪だ。

「是炉様は、はーれむとは、誰もが悲しまない樂園だと言いました。・・・私は、もう18になります」

「うえっ!?!?・・・いや、ちよい待ちっ!?!」

よく、今の状況を整理しよう。俺がミヤをハーレムに入れてやると言つた ミヤはハーレムが樂園だと思つている 18になるし、そこにイーン!

「イーンじゃねえ!!」

「え? あ、まさか、私が何か粗相を・・・」

「い、いや、ミヤは何も悪くない。悪いのは全部・・・俺だ」

「そう。悪いのは全部義兄さま。何も気にせず、責任を押し付けられたい」

「お前はちつとは気にしろや!!」

つたく、話に入るならもう少しまともなことを言えよ・・・ないとは思つが、もしミヤまで毒されたら・・・俺の味方、いなくなるんじゃないかね?

「あの・・・是炉様?」

俺は気づいたら、ミヤを見つめていたようだ。ミヤは恥ずかしいのだろうか、少し顔を赤らめている・・・くっ、萌えるじゃないか・・・!

「いや、悪い・・・ハーレムのことだったな?」

「はい・・・私は、その、はーれむというものに・・・」

「・・・駄目だ」

「え・・・それは、私では・・・」

「いや、そういうことじゃないんだが・・・」

俺が上手く立ち回れば、ミヤをハーレムに入れることは出来るだろう。だが、それはミヤが俺に惚れたわけではない。俺のハーレムは、皆が俺に惚れてこそそのハーレムなんだ!

「それには、俺はまだ至っていない・・・だから、ミヤ」

「はい」

「待つてな。いずれ、お前を俺のハーレムに入れてやる!!」

俺は高らかにそう宣言する。ん? 何を馬鹿なことを大声で言うてやがるって?・・・気にしたら負けさ。

「わかりました。その時を・・・お待ちしておりますね、是炉様」

ミヤは柔らかい笑顔で、俺にそう言うてきた。ぐっ、そんな純粋な微笑み、俺には眩しすぎる! なんか悪いことしてるって罪悪感がわくじゃないか。

「・・・なあ、沖見猫。さっきから気になってたんだが・・・是炉ってなんだ?」

俺たちの会話を聞きながら酒を飲んでいた狒々が、不意にそう尋ねてきた。そういえば・・・そんな問題もあったな。

「是炉様は、是炉様では？ 昔、私にそう名乗られたのですが」

「こいつは沖児猫・・・ああ、もしかして下の名前か？」

ミヤと話している途中に、狒々は自分で答えを出した。うん、下の名前か・・・そうした方が、色々と面倒がないかもしれないな。

「ま、まあ、そんなところかな？」

「ふうーん、あんたって下の名前あったんだ？ しかも、人間の姫にだけ教えてたとか・・・もしかして、あんたも変態？ ああ、変態だったわね」

そんな声に、ふと俺が横を向いてみると、顔がもの凄く赤い雪麗がそこにいた。どう考えても、これは泥酔している。・・・まあ、当然かもしれないが。

「雪麗・・・お前酒臭いぞ。気持ちは分かるが、飲み過ぎは駄目だぜ？ あと、変態って言うな。男は皆変態だ」

「ひっく。あんたに、私の気持ち分かるって？ なら、朝まで付き合いなさいよ。飲み明かすから」

おいおい、完全に飲んだくれのオヤジじゃねえか。ぬらりひよんと瑠姫が結ばれたから、ヤケクソで飲んだらどうが・・・美女には似合わないぞ？

「知ってるだろ、俺は酒飲めないんだよ」

「知らないわよ。吐いてもいいから、付き合いなさい」

駄目だこりゃ、これは梃子でも動かないな。こつなつたら、俺も付き合つてやる、か？・・・は！ 駄目だ！ 酒なんて飲んだら、トイレに行きたくなるじゃないか！！

くそ、どうする！？ この状態の雪麗を、納得させることなんて無理だ。だとすれば、雪麗の意識を、別の方向に向けさせないと！ 何かないか、何か・・・！

「雪麗。義兄さまの意識が無くなつたら、わたしがアニメが見れない。それは困る」

い、義妹・・・？ まさか、俺を助けてくれたのか？・・・いや、多分自分の欲望のためだけだな。まあ理由はあれだが、今はナイスだ！

「・・・あなた、沖児猫の義妹だっけ？」

「そう、義兄さまの義妹。名前はまだない。よろしく」

「えっ、名前がない？ それなら、早くつけな」と

あー、そつちの話題にいくか。酒の話にならないのはいいが、その話もあんまりよろしくないな。・・・多分、今決めたら、義妹はテキトーなのつけるから。

「んー、自分の特徴を名前にすればいいんじゃないか？」

「じゃ、ニートで」

「なるほど、児衣兔か。可愛い名前だ」

「軽過ぎるわ！！ それにニートってお前！！ 義兄さま許さないぞ！？」

ほら、言わんこつちゃない。ニートなんて名前ついたら、将来的

にあれだろう。……まあ、兎なんて当て字は可愛いし、俺の兎猫とも近いけど……

「うるさい義兄さま。兎で決定。なかなか気に入った」

「嘘だろ!? 俺は絶対、兎なんて呼ばないぞ!!!」

「勝手にすればいい」

「う、うう……なんで、俺の思いやりが分からないんだ?」

これは、お前が呼ばれても恥ずかしくない名前にしてやろうという、義兄の気配りだぞ。それを、こんなに邪見に扱うなんて……

「あの、なら……下の名前というのをつけたら如何でしょう。是炉様みたいに」

「なるほど、ナイスだミヤ!!!」

「ない?……とにかく、お役に立てたなら、嬉しいです」

そうだ、まともな下の名前をつければいいんだ。それなら俺は二トなんて呼ばなくていいし、街中とかで呼んでも大丈夫になる。

「……とすると、どんな名前がいいか……俺の是炉とかぶせた感じに……是炉、ゼロ、零、れい……ん? レイってよくね?」

響きも女の子っぽいし、これはいいんじゃないだろうか。別に反論しないとこを見ると、義妹も嫌ではないみたいだし……よし、レイで決定だ。

「という事で、お前はレイな」

「……義兄さまだけが、勝手に呼んでればいい」

「ぬおおおおおおおおお!!! このくそガキいいい
い……!!!」

「あ、あの、私もレイと呼びますし・・・落ち着いて下さい、是炉様」

レイのあまりの理不尽に俺は暴走しそうになるが、ミヤの優しい言葉でなんとか抑えられる。ミヤ・・・お前はいつまでもそうであつてくれ。

「・・・別に兎衣兔だろうがレイだろうが、どうでもいいけど・・・私の酒に付き合わないつもり？」

「ここでお前がくるか!？」

ここでまさかの雪麗リターンズ。せつかく話題が変わって、酒飲まなくていい雰囲気になってたのに・・・ここは、レイに・・・!

「・・・眠い。分かった、雪麗。義兄さまを好きにしてい」

「レイ、貴様、裏切りおつたかあ!？」

あれほど頑なに離れなかったのに、今になって簡単に離れやがりましたよ。そしてそのまま、俺にあてがわれてた部屋に帰っていった。・・・なんか、同じ部屋なんだよね。

「はっ! レイが離れた今、トイレに行ける!！」

そうだ、俺は何を馬鹿なことを考えていたのか。レイが離れたなら、心置きなくトイレに行ける。そうすれば、雪麗に付き合ってもまあ大丈夫 雪麗さん、この手はなんですか？

「ちよつと、どこ行くつもりよ」

「いや、ただ厠に・・・すぐ戻ってくるから、な？」

「嘘でしょ。私には分かるもの・・・逃がさない」

「嘘じゃねえーーーー！！！！」

なんですかこの飲んだくれ！？ セリフだけ見たら、どこのヤンデレだって感じたが・・・実際はただの酔っぱらいだ。

「ほら、漏らしたりしたらあれだし・・・」

「大丈夫よ。出てくる穴に、栓をすればいいだけ・・・」

「は？・・・一体な、にいいいいいいいい！！？」

言葉の意味を俺が聞く前に、雪麗は冷気を・・・俺の、前と後ろの穴に・・・何してくれちゃってんですか！？ 機能しなくなっただろうとするつもりだ！！

「・・・さあ、朝まで、ね？」

「ぐうう、ミ、ミヤ、狒々・・・」

もはや、一周回ってヤンデレじゃねえの？ って感じの酔っぱらいを前にして、俺はミヤと狒々に助けを求める・・・あれ？ あいつらどこ行った？

「ああ、狒々と宮姫なら、兎衣を寝かしつけに行ったわよ」

「なんでだあーーーー！！！！」

くっ、ミヤお前もか・・・！ もはや、俺に逃げ場はないのだから・・・ふっ、分かったよ。ここは素直に、受け入れてやる！！

「朝までフイーバーじゃあああああ！！！！」

次の日、俺が目を覚ますと、布団の上だった。布団に世界地図が出来てたけど・・・氷が溶けたただけだろ！？ そうと言ってくれ！！

自分の発言には責任を・・・（後書き）

義妹の名前。種族名は兎衣兎、下の名前をレイとさせていただきました。

兎衣兎は、テイル様と三雲様、嘉神弥将様より。ニートの当て字で兎の文字という案をいただき、衣の文字だけ変えさせてもらいました。

レイの方は、ままま様より。下の名前をつけるかどうか迷ったんですが・・・後々のことも考えて、こうさせてもらいます。

惜しくも採用はしませんでした。朧月様とネメシス様も案をいただき、ありがとうございました。

他の二つは、まだ募集してるんで、ぱっと思いつかんだら、お気軽にごつぞ。

兎（義妹）の威を借りれない猫（義兄）

羽衣狐との決戦から数ヶ月が経った。その間に人間社会では、いわゆる大坂の陣が二度起こり、豊臣は滅亡。徳川の世になって、戦国の世は幕を閉じた。

そして俺たち奴良組は、魑魅魍魎の主になったということ、江戸に帰還する。今日はそのお別れ会として、花開院本家で宴会中だ。

「こ……ここは花開院本家だぞ！？ なぜ妖が入りこんどるんじやー！？」

これは、秀元の兄のハゲの言葉。まあ、俺たちは秀元に招待されただが、このハゲ兄は知らなかったらしい。小妖怪にバカにされている。

「くすくす。カリカリしてたらハゲるよねー」

「くすくす。ねー」

そんなハゲを、秀元の式紙すらバカにしている。こいつらには自由意志があるらしいが……秀元が言わせてるんじゃないかと、俺は考えてしまう。あいつならやりかねん。

「秀元おおー！ー！！ てめえかー！ー！ー！！」

ハゲは頭に血管を浮かばせながら、自分の弟の名前を叫ぶ。日頃から、秀元のせいで胃を痛めてるんだろうなあ。

「まあまあ、座れよ」

そんなハゲに、頭に鉢巻きつけた小鬼が手を振って誘う。だがハゲは座ることはなく、ずっと立ったままだ。

「お前、聞いたぜー。直系で28年修行したけど、当主になれなかつたんだって？」

「弟に越されたとか」

「これ天然ハゲ？」

「剃髪だー!!」

奴良組小妖怪ズは、わいわいとハゲを弄りにかかる。宴会の席において、こういう弄られキャラってのは貴重だ。いつもは俺の役だが……うん、ラッキー。

「……はあ、平和だねえ」

「いいことではないのですか？」

騒ぐハゲたちを見て俺が零した言葉に、一緒にいたミヤが反応した。いやまあ確かに、平和なのはいいんだけどなあ……

俺って元々、ハーレム&チート無双がしたかった訳だろ？ 平和だったら、ハーレムはともかく、チート無双なんて出来ないんだよ……まあ、俺はチートじゃないけど。

「なんかこう……滅茶苦茶強い敵に、俺が華麗に……なんてこたが」

「あるで」

「うおっ!?! 急に現れるんじゃないかねえ、秀元!!」

いつの間にもやら俺の後ろに秀元がいて、俺たちの話に割り込んで

きた。さつきまでは、別の部屋でぬらりひょんと飲んでたみたいだが・・・ぬらりひょんはあっちの方で、組の奴らと騒いでるな。

「・・・で、どういうことだ？」

「そのままの意味や。ちゅうちゃんに・・・滅茶苦茶強い敵を、やつつけて欲しくてな」

「なんで俺に？」

「陰陽師として、妖怪の組に協力を依頼する訳にはいかんやろ。なら、個人としての依頼になるけど・・・ボクの知り合いゆうたら、ぬらちゃんとちゅうちゃんだけやからな。で、ぬらちゃんに頼む訳にもいかんし」

まあ、ぬらりひょんに頼むイコール奴良組への依頼だからな。だから、俺に頼むのは妥当なんだろうが・・・俺の雑魚っぷり、お前知ってなかったっけ？

「この依頼受けてくれたら、ええもんあげるんやけどなあ」

「・・・それは、本当にいいものか？」

「それはもう・・・祢々切丸と同じくらいええもんや」

祢々切丸ねねきりまるつてのは、羽衣狐を斬ったあの刀のことだ。人を斬らず妖だけを斬り、妖の妖力を奪い取るチート刀・・・それと同格ならチート性能な物に違いない。

そんなチートな物、欲しくないわけがない。だとすれば、この依頼を断ることは出来ないということになる。秀元のことだから、なんか裏が有りそうだが・・・

「よし、いいだろう。その詳細は？」

「ありがとな。で、内容は」

「・・・あれか」

「ああ。あれがそつや」

秀元から依頼を受けてひと月ほど。俺はその依頼を遂行すべく、京都の街に來ている。この場には、俺と秀元、そしていつも通りアニメを見ているレイ。今日は、けいおんを見ているようだ。

この依頼は俺個人への依頼なので、奴良組の奴らは來ていない。というか、俺たちを置いて先に江戸へ歸って行つた。まあ、秀元が式紙で送ってくれるらしいが・・・薄情な奴らだ。

「よし。さつさと終わらせて、早いとこ歸ろうか」

一つ気合いを入れて、俺たちは目的の妖の前に出て行く。その妖は非常に大きく、俺の身長の4倍は軽く有るんじゃないのだろうか。

「ああん？ なんだお前は？」

「陰陽師や・・・土蜘蛛くん」

秀元は人のいい笑みを浮かべながら、件の妖・・・土蜘蛛に話しかける。今回の依頼は、俺の目の前にいる土蜘蛛・・・こいつの封

印を手伝うことだ。

土蜘蛛の容姿は、般若のような顔に赤い髪、デカイキセルを吹かす四本腕の巨大な男・・・はつきり言っつて、滅茶苦茶強そう。威圧感だけなら、羽衣狐より上かもしれない。

「陰陽師い？ んなもんが何のようだ」

「・・・最近君、京で暴れまくつとるやろ。陰陽師として、見過ごすわけにはいかんからなあ」

土蜘蛛の問いに、秀元はやりわりとそう返す。ここ最近、土蜘蛛は京都の街を破壊していた。どうやら、羽衣狐がいなくなつた影響らしい。

「オレを倒しに来たつてかあ？ いいぜ、やり合おうじゃねえか」

秀元 of 言葉を聞いて、土蜘蛛は寝転んでいた体勢を、少し持ち上げる。・・・なるほど、秀元の言つとおり、こいつはバトルジャンキーらしい。

「いやいや、ボクじゃ君には勝てへんよ・・・だから今日は、君に提案をしに来たんや」

「あん？」

「今の世に、君を満足させれる奴なんておらんやろ？・・・せやから、少しの間眠つといてくれへんかな」

まあ要するに、土蜘蛛に封印されてくれと言つてるわけだ。普通なら、こんな言葉で簡単に封印されるわけがないんだが・・・

「ああ・・・それも悪かねえなあ。羽衣狐も誰もいやしねえ・・・

「この土蜘蛛に限っては、その常識は通用しない。バトルジャンキーだからこそ、この行動……ここまでは、秀元の言っていた通りだ。」

「だがな、オレはまだ暴れ足りねえ……もう一勝負くらい、思いっきり暴れてえ」

「……やっぱりな。こう来る可能性が有るのも、秀元の予想通り。簡単には封印させてくれず、こういうことを言ってくる……ここで、俺の出番ってわけだ。」

「分かっているとツツチー。そのために、俺がここにいるんだよ」「つつちー？……まあいい。おめえが、オレとやるってのかい。いいぜえ、面白そうだ」

土蜘蛛は俺のつけた渾名に少し反応したが、すぐに切り替えて立ち上がる。立ったことで、更に威圧感が増したわけだが……俺には全く気に懸からんぜ！

え？ 何をそんなに余裕ぶってやがる？ お前くそ雑魚だろう？……おいおい、一体いつの話をしてやがる。俺は既に、チートの仲間入りしてるんだぜ？

「ふっ、ツツチーよ……お前には、俺のチート街道への踏みだいになって貰うぞ」

「へえ、大した自信だ……オレにそんな口がきけるってこたあ、相当強えってことだな？」

「誰にもの言ってるやがる……お前こそ、俺をがっかりさせんじやねえぞ？」

俺と土蜘蛛は、不敵に笑いあう。・・・まったく、チートになったこの俺に、デカいだけの妖が勝てるだけでも？

「・・・さあ、行くぜツツチー」

そう言いながら、俺は夜王丸を抜き放つ。さて、もう気づいたかどうか。俺をチートにする存在・・・それは、この夜王丸だ。

羽衣狐の残党駆逐の際、レイが夜王丸をチートにした。その夜王丸・・・俺の手元に返ってきている。つゝまゝり、俺はこのチート刀の使い手となったわけだ！！

「ふっ、この刀で・・・」

お前をちりくずに・・・って、ちょっと待て。・・・あれ？ またく威圧感とか無い・・・あれ？ チート性能は一体どこに・・・

「そんなもの、もうとっくに期限切れ」

俺の思考を読んだのか、レイが無表情にそう教えてくれた。・・・落ち着け、よく考えろ・・・って、落ち着けるかあ！？ 期限切れとかそんな設定、俺は聞いてねえ！！

「義兄さまに教える必要が、一体どこにある？」

・・・ああ。確かにそんな必要、お前にあるわけ無いよなあ・・・やべえ、この状況はくそ拙い。土蜘蛛はやる気満々だし、ここは逃げられない。なのに、俺には対抗手段が・・・キュピーン！

「・・・ああ、そうだレイ。俺は戦闘するから、ちょっと降りてくれ」

ここで俺が思いついた手段・・・それは、レイに全てまるなげすること！！レイの性格なら、土蜘蛛をさっさと倒そうとする筈・・・あれ、なんで普通に降りてらっしゃるんですか？

「お、おい、どうしたんだ？」

「義兄さまが、降りろと言った」

「いや、そうだけど・・・アニメは？」

「けいおんは全部見終わった。区切りがいいから、別に構わない。わたしは寝てる」

レイは小さく欠伸をしながら、どこからともなく布団を取り出す。聞いたところによると、無限の怠惰の能力らしい。そしてそれを地面に敷き、潜り込んですぐに眠りに入った。

・・・さーて困った。一体どうすればいい？俺の力はくそ雑魚、土蜘蛛は滅茶苦茶強くて、レイも役に立たない。・・・あれ、これって詰みじゃね？

「餓鬼を傷つけないようにしたってこたあ、もう始めていいってことだなあ？」

土蜘蛛は待ちきれないように、俺に問いかける。さっきの強気発言+今まで俺は取り乱してないから、俺が雑魚だということに気づいていないのだろうか。

「いや、少し待って・・・」

「待たねえよ！！！」

「ちよ、止め、とおおおおおおおおおおおお！！！！」

俺の制止を聞かず、土蜘蛛は俺に渾身の張り手をしてきた。その張り手は当然のごとく俺にぶち当たり・・・大体、100メートルぐらいは飛ばされたんじゃないか？

「ぐふう・・・あんにゃ、るうおおおおおおお！！！！」

「どうしたああ！？ さつさと本気を出しやがれえ！！」

俺が悪態をつこうとしたところに、土蜘蛛の更なる追い討ち。お前、酷くないか・・・？ こういう時は、立ち上がるのを待つのがお約束だろう！？

「おらあ！！！！ 早く本気出せよおお！！！！」

「ぶふ、ぶふお、ぶふおふおおおおおおお！！！！」

まあ俺の心の叫びが通じるなんて、天地がひっくり返ろうと有り得ない。土蜘蛛は俺を殴りまくり、例えるなら格ゲーで立ち上がりさせてもらえない状態になっている。命名するなら『寝たきり生活』だ。

「ぐつ、秀元・・・！！」

土蜘蛛にぶん殴られてる中で、俺は必死に秀元に助けを求めろ。この状況で俺を助けられるとしたら、秀元しかない！！

「兎衣ちゃん、地面に布団敷いて痛くない？」

「問題ない。そのあたりはちゃんと完備している。安眠様のスペシ

「ヤル布団セット」

「ふーん。なんや知らんけど、えさそうやなあ・・・ボクにもくれへん？」

「構わない」

「ありがとなあ」

秀元おおお！！ てめえええ！！ 何普通にレイと談笑してやがる！？ お前まさか、こうなることも予想してやがったか！？

「・・・（スツ）」

俺の視線に気づいたのか、秀元はこちらを笑顔で見してきた。そして、俺たちの目が合ったことを確認すると・・・

「・・・（ニヤツ）」

その顔が、悪魔のような微笑みに染められた。やはり・・・俺は・・・間違つて、なかった・・・が・・・ま・・・ごめん、痛すぎて思考がトリップしてるや。

「・・・なんだあ、てめえ。ほら、反撃してこいよあ？」

数分間殴り続けられた後、土蜘蛛がそう言ってきた。俺が実は強くないことに、漸く気づいたらしい。だがちょっと待て、なんでもっと早く気づかない？ 俺の体、もうヤバいことなってるぞ。

「あふおはあ、てへえ、ほおれふあくふおふあほふあんふあよ！！」

「あん？ 何言つてやがる？」

俺の顔は腫れ上がっていて、上手いこと発音することが出来ない。

因みに何て言ったかというと、『あいな、てめえ、俺はくそ雑魚なんだよ!!』となる。・・・言つてて悲しいな!

「ほまへ、ふあんふあよ!! ふふうひひーほへいほーひやふあつへ!! ほれひほひはら、ふあんふうんよほへ!!」
「・・・・・・・・」

必死に叫ぶ俺を見て、土蜘蛛は凄く萎えてるようだ。自分でやっ
といて、何勝手なことしてやがる。因みに『お前、なんだよ!!
普通にチート性能しやがって!! 俺にその力、半分よこせ!!』
となる。

「ふあいふあい、ほれはひゅひん、ぶふおおおおお!!!!」
「・・・・・・・・うるせえ」

俺が『大体、俺は主人公じゃないのか!?』って言う前に、
またしても土蜘蛛は俺を殴りやがった。今度は上からぶん殴られた
ので、俺は地面にめり込んでいる。モグラ叩きのモグラの気持ち
が分かった気がするな・・・

「おい、陰陽師い・・・」
「ん? なんや?」
「もういい、さつさと封印しやがれ」
「ん、りょーかい。えーっと・・・ちよちよいのちよい、っと」

そして萎えた土蜘蛛は、そのまま秀元に封印された。それにしても秀元、なんだその適当な封印の仕方。ちよちよいのちよいで封印とか・・・

「ええんや。形に拘るなんて、ちゅうちゃんらしくないなあ?」

秀元のその言葉に、俺ははっとしてしまふ。そうだ、俺は何を考
えているんだ・・・形なんて、機能性には関係ないよね！ だから、
世の中イケメンじゃない！・・・はず。

「・・・ふあ、ふあんにひへも、ほれもほれほおはへふあふあ。ふ
あふあら、ふあいほうほへいいふおふあらへ」

「何言つとるか、さっぱりわからんなあ」

「まあ、何にしても、これも俺のおかげだな。だから、最高の敬意
を払え・・・と言ってる」

レイの通訳を聞いた秀元は、ニコニコと俺を眺めている。これで、
ちゃんと俺の有り難さが分かっただろうか。

「確かに、ちゅうちゃんのおかげってのは間違いやないからなあ」

「ふおうふあろう（そうだろう）」

「はいはい、ありがとう。そしたらそういうことで、さっさと帰ろう
か」

「ふおおーい！！！」

秀元は超絶心がこもっていない礼をした後、足早に帰ろうとする。
だがよく考えろ、俺は土蜘蛛に地面にめり込まされていて、抜け出
せないんだ。

「ああ、そやったな。ちゅうちゃんへのお礼の品忘れとった」

俺の叫び声に、秀元はそう言いながら戻ってきた。そういえばそ
うだった、今回のお礼のチート性能の品を貰わないと。

「ほい、これや」

「ん・・・ふあんふあ、ほれ（何だ、これ）？」
「それは　　って品や。どや、なかなか凄いやろ」

秀元は簡単に、渡してきた品の説明をした。・・・んー、確かにチートつちゃチートだし、なかなか凄い品なんだが・・・いかんせん地味過ぎる。一体、いつ使えと？

「じゃ、確かに渡したで〜」

「ん、ほう（おう）」

「それじゃ児衣兎ちゃん、早よ帰るで〜」
「分かった」

俺がその品を眺めている間に、秀元はレイを連れて帰っていった。・・・ん？ 帰って、つておい！？ マジで俺を見捨てて行きやがっただと！？ ふざけんじゃねえ！！

「ほい、ほまへらあああ！！！！」

必死に秀元とレイに叫びかけるが、もう既にあいつらの姿はない。なんて酷いやつらだ・・・俺って、秀元に恨まれるようなことしたか？・・・あ、もしかして、まだカステラのこと恨んでたのか？

その後、京を循環していたハゲ兄に発見され、俺はなんとか地面から這い出ることが出来た。俺とハゲ兄の間に見えない友情が出来たことは、言うまでもないことである。

兎（義妹）の威を借りれない猫（義兄）（後書き）

んー、今回はちょっとテンポが悪かったかなあ・・・もう少し面白くなるかと思っただんですが、そこは致し方なし。

次は、ぬらりひょんと瑛姫の祝言の予定。小説版をベースにするので、見てない人にはネタバレになるかも。

バカップルとかやめれ!! (前書き)

ふはは、またもや前言を撤回だ。ぬらりひよんと瑛姫の祝言? . . .
・二話後くらいに書ければいいんじゃない?

バカップルとかやめれ！！

俺と兎衣兔は秀元の式紙により、先に帰っていた奴良組の奴らに追いついた。ぬらりひょん達は笑って俺たちを迎えたが、俺は声を大にして言いたい。大変だったんだぞ！？、と。

まあ、そんな空気を読まない俺じゃないんで、とりあえず笑顔で合流した。そしてそのまま、江戸に向けて進み・・・

「ふう、帰ってきたなあ」

今し方、江戸に到着した。俺たちが江戸を発った時よりも、随分と発展している。やはり、徳川の力が行き届いているのだろう。

「ここが、江戸の街ですか・・・」

江戸に来たのが初めての、ミヤや瑛姫、苔姫は、物珍しそうに街を眺めている。今までいた所と違った雰囲気を見て、期待やら不安やらあるのだろう。・・・レイは相も変わらずアニメしか見てないが。

「どつだミヤ、なかなかいいところだろ？」

「はい。私の実家は田舎でしたし、京と比べても遜色ない街です」

俺の問いかけに、ミヤは嬉しそうにそう語る。まあ、今の日本で一番発展してるって言ったなら、京都とここぐらいなもんだしな。

「ふん、あんた江戸出身でもなくせに、よくそんなデカい態度取れるわね」

のよね。

「まあ、どうでもいいから、さっさと屋敷にけえーるぞ。本家で待ってる奴らに、朗報を伝えにやならん」

微妙になつていた空気を、ぬらりひよんがそう言つて断ち切る。その言葉で意識を立て直した俺たちは、奴良組本家に向かって再び歩を進めて行く。

正直、どうでもいいことじゃないんだがな。久しぶり過ぎて感覚慣れてないし・・・まあ、置いてかれるのが嫌だから我慢するが。

そしてしばらく歩き、懐かしき奴良組本家に到着した。その姿は寸分も変わりなく、本家に残っていた妖怪たちが、ちゃんと留守を守っていたのだろう。

奴良組本家の門をくぐり抜け、屋敷の内部に堂々と入っていく。そしてその気配に気づいた妖怪たちが、続々と集まってきた。それを見たぬらりひよんは、大声で帰還を伝える。

「おう、てめえら！！ てめえらの大将が、妖の頂点になつて帰つて来たぜ！！」

「聞き及んでおりますぜ、総大将！！」

「我々は、いつかやってくれと信じておりました！！」

ぬらりひよんが羽衣狐を倒して妖の頂点に立ったということは、どうやらこの辺りにも知れ渡っていたらしい。まあ、妖界の大ニユースだろつから、それも当然と言えるか。

「新しく奴良組に入った連中もおるようで・・・ん？ 総大将・・・その者たちは、もしかや人間では？」

ワイワイと騒いでいた妖怪の一匹が、瑛姫やミヤを指して問う。
・・ついに来たか、このことを話せば、多分こいつらひっくり返る
んだらうなあ。

「こいつは瑛姫、ワシの妻になる^{おんな}。すぐに祝言を挙げるぞ!」
「あ、妖怪・・・」

ぬらりひよんは待つてましたと言わんばかりに、瑛姫を抱き寄せ
る。そして抱き寄せられたことにより、瑛姫は恥ずかしそうに頬を
染めた・・・何? このバカップル?

というかさ、ミヤと苔姫も紹介しろよ、無視されてかわいそうだ
ろ。まあ、ミヤたちは、瑛姫を羨ましそうな顔で見ているからいい
か。・・・こついうの、女の子は好きなのか?

「・・・・・えーつと、総大将・・・?」

「ん? 何じゃ?」

「その女は人間で、あなたは妖の頂点・・・間違いないですよね・
・?」

「何を言つとる、当たり前じゃろう」

「で、この女と夫婦になると・・・?」

「さっきからそう言つとる」

笑顔でそう言うぬらりひよんに、妖怪たちはポカーンとする。そ
して一拍置いて、ズーンとひっくり返った。・・・どこの吉本?

「な、なんですとおー!?!」

「正気かあんたあ!?!」

「嘘だろおおお!?!」

更にしばらく間を置いてからの、絶叫によるコントラスト。妖怪

「私たちは頭を抱え込んで、悲鳴が止まることはない……そんなに受け入れがたいことか？」

「……うゝるゝさゝいゝ」

「レ、レイ……？」

その止まらない絶叫に待ったをかけたのは、俺の背中でもくれているレイ。多分、うるさすぎてアニメに集中出来ないんだろうが・・・オーラが怖いですたい。

「なんで、そんなにわたしの邪魔をする？……こういう時は、おはなしが一番」

そう言いながら、レイは俺の背中から降りて、自分の足で地面に立つ。……なあ、レイ。多分そのおはなしって、魔王的OHANASHIだろう……？

「魔力を集中、圧力に変換……砲撃準備、全力全開」

「ちよ、待てレイ！！ それは色々と拙い！！ 屋敷が崩れる！！」

いや、拙いのはそれだけじゃないけど。これほつといたら、確実に俺に被害が来る。というかお前、リリカルなのは好きだな。

「別に、わたしは構わない。悪には、徹底的な懲罰を」

「いやいや、この状況見てあいつらが悪だと!？」

妖怪たちは、レイの威圧感に身を寄せ合って震えている。確かに妖怪は悪の側だが、これはレイの方が苛めてるようにしか見えないだろう。

「それに、もうこいつらも静かになってるだろ!? 許してやってくれ、お願いします!!!」

俺はもう義妹に対する対応じゃないが、スライディング土下座して許しを請う。・・・俺は、みんなの為にやってるんだからな!? そんな可哀想なものを見る目で見ると見るんじゃないかねえ!!

「あれが、是炉様?・・・いや、きっと深いお考えが・・・」
「宮姫様、現実を見て下さい」

そんな俺を見て、ミヤが自分に何か言い聞かせている。なんか、理想が崩れかけているような顔なんだが・・・あと苔姫、適当なことを言うな。

「・・・じゃあ、このやり場のなくなったエネルギーはどこに放てばいい」

レイは手のひらに集めたエネルギーを、無表情で俺に向けてくる。うん、空に向けて放てばいいんじゃないかな? そして、もうこの件のオチが分かったよ。

「・・・一応聞こう。それ以外に、道はないのか?」
「義兄さまが、それを望むのなら」
「・・・ふっ、いいだろう。好きにするがいいわ!!」

俺の発言のすぐ後に、レイは砲撃を放った。リリカルのように非殺傷設定など有るはずもなく、俺の体は肉体的な死を何度も迎える。

あのさ、この展開について行ける奴とかいんの?

そんなことを、幾度考えただろうか。それぐらい、この状況が俺には理解不能だった。なんで、家に帰っただけでこうなるんだ？

いや、俺が自分から死地に向かったんだけどさ・・・

別に、こんな目に遭う理由はないと思うんだ・・・それに、ぬらりひょん達にそんな目で見られる理由もない気がするな。

「・・・ん？」

「あ、気づかれましたか？」

ふと意識を取り戻すと、（恐らく奴良組本家の）布団の上だった。俺の体は完全に癒えていて、ミヤが枕元で覗き込んでいる。

「ミヤ・・・んーっと、レイは？」

俺がまず始めに聞くのは、色々と不安があるレイのこと。あの後ちゃんと落ちていたか分からないし、ほっといたら何かしでかしそ
うで怖い。

「レイなら、隣の部屋で眠っています。力を使ったことで、少し疲弊したのかもしれませんが」

「そつか・・・俺が気絶してから、どれくらい経った？」

「あれから二刻（四時間）ほどでしょうか・・・瑛姫が是炉様を癒やして、ぬらりひよん様が運んで下さりました」

聞いてないことまで教えてくれて、ミヤは気が利くな。こういう子が嫁になったら、いい生活が送れるだろう。まあ、それは置いて、四時間か・・・意外と長く寝てたらしい。

確か俺が気絶したのが、十一時前ぐらいだったから・・・今は大体三時くらいか。おやつ時だな、よし、プリンを食べよう！・・・この時代には無いだろ、ってツツコミが欲しいなあ。

「あの・・・是炉様？」

俺の無駄な葛藤のせいだろうが、ミヤが恐る恐る尋ねてきた。こういう空気が読める女の子っていいよね！・・・誰だ！今、お前は空気読めないだろって言った奴！！

「いや、別になんでもない。・・・そつか、瑛姫に礼言つとかないとな。今どこにいる？」

治してくれたなら、それに対して礼を言わないとな。ただしぬらりひよん、てめえは別だ。

「あ、今は止めておいた方がいいかと・・・。一週間後の祝言の準備をしているようですから」

「そつか、なら後にするか・・・ん？ 祝言、一週間後？・・・早くね？」

早めにやるだろうとは思ってたが、まさか一週間後だとは・・・。着いたばかりだし、もうちょい待ってもいいと思うんだが。

「ぬらりひょん様は、明日にでも祝言を挙げようとしたのですが・
」

「ああ、納得だ」

あいつの性格なら、さつさとやるうとするだろうなあ。で、流石にそれは拙いから、皆が一週間後まで伸ばさせた、と。

「なら、今行くのは拙いか……。んー、どうすっかな？」

瑛姫には後で礼を言うとして、これから何をするかが問題だ。他の奴らは忙しいだろうし、暇だなあ……。ん？俺は？……。勿論、邪魔にならないようにするのが仕事さ。

「でしたら、もしよろしければ、江戸を案内してくれませんか？

瑛姫へ祝いの品も贈りたいですし……」

「なるほど、祝いの品ねえ……。よし、今から行くか！」

俺はそう言いながら立ち上がり、ミヤに向けて手を差し出す。ミヤは暫くその手を見ていたが、少ししてからゆっくりと手を取った。

「はい……。では、参りましょう」

江戸は大分変わったけど、まあ大丈夫だよな？ いざとなったら、鴉天狗がなんとかしてくれるだろう……。多分。

あれ？ これってデートじゃね？

バカップルとかやめれ！！（後書き）

書いているノリで、よく分からない方向に路線変更。いや、宮古
姫とのデートはやるつもりでしたが、こんなに早めになるとは
・
・

というか、まだデート内容考えてないですけどね。・・・江戸時
代って、どうデートすりゃいいんだ？

デート・・・たぶんデート（前書き）

頑張つて恋愛的要素を入れてみましたが、こんなんでいいのか分かりません。・・・だってオレ、少女マンガを鼻で笑つて、恋愛ドラマで鳥肌立つような奴だもん・・・物にもよるけど。

デート・・・たぶんデート

「是炉様、あれは何ですか？」

隣を歩いていったミヤが、ある建物を指して、興味深そうに尋ねてきた。そうか、あんなのも珍しいのか。

「ああ、あれは銭湯だな。金を払って、湯に浸かるんだ」

そう、その建物は銭湯。湯気が立ち上り、独特の匂いを感じさせる場所。この辺の奴らの多くが利用している、江戸っ子御用達の場所だ。

「湯に浸かるのに、お金がいるのですか・・・？」

「そりゃ、そういう商売だからな」

「・・・屋敷で浸ければ、そんなことせずとも」

ミヤは心底不思議そうに、世間知らずなことを言う。まあ、ミヤは姫だったわけだし、庶民の生活をよく知らないのだろう。

「庶民の家じゃ、湯浴みなんて出来ないんだよ。それにあれだ、大勢で裸の付き合いつてのが、乙なもんなんだ」

訳知り顔でこんなこと言っても、俺は銭湯なんて行ったことないがな。この時代でも、前世でも。正直、知らないオッサンやじいさんの裸なんて見たくない。

「なるほど・・・では、一度行ってみたいですね」

「・・・ミヤ、悪いことは言わない。止めとけ」

「？ 何故ですか？」
「なんでもだ・・・」

豆知識を言うと、この時代の銭湯は、男女混浴なんだ。閉め切つてるせいで、暗くてよく見えないらしいが・・・色々よくない。そういう趣味もつた奴らが、いないとも限らないし。

俺が止めたことで、よく分かってないながらも、ミヤは諦めたようだ。銭湯の説明の為に止めていた足を再び動かし、江戸の街を歩いていく。

今のミヤの格好は、外出用の小袖に着替えている。普段の高級な着物だったら動き辛いし、なにより目立つ。面倒くさい連中に目を付けられないように、最低限の配慮だ。

「それにしても、やはり江戸の街は活気が溢れていますね」

歩いている内に、ふとミヤがそう言う。俺が最初に来た時とは遥かに違い、江戸には大勢の人がいる。これを見て、活気がないという奴なんていないだろうな。

「そうだな。徳川の世になって、ここが日本の中心になっていく・・・
きっと、まだまだデカくなるだろうさ」

これは、俺が知る歴史的にも間違っていない。この先更に、人も増え、妖も増え・・・もっと華やいでいくだろう。きっとじゃない、必ずデカくなる。

「ええ、そうなることが、楽しみです」

ミヤは目を細めて、本当に楽しみなように、顔を綻ばせた。そんな顔をされれば、俺も自然と笑顔になる。これも自然な成り行きだ。

「……………」

「……皆さん、お気づきでしょうか。今の俺が、いつもよりもまともなことを。ええ、気づいていますとも。いつもの俺は、馬鹿なことしかしてないってことぐらい。」

で、なんで俺が馬鹿やってないかと言うと……単純に、緊張しているからだな。よく考えてご覧？ デートだぜ？ しかも、美女人姫と。緊張せずにいられるわけないだろう。」

大体、俺はデートなんてしたことないからな。何やればいいのかすら分からない。今なんて、失敗しないように気を使いすぎて、神経が異常にすり減っている。」

「是炉様？　どうかされましたか？」

「い、いや、なんでもない……」

どうやら、緊張がミヤにも伝わっていたようだ。心配そうに、俺を覗き込んでくる……ええ子やなあ。……とりあえず、上目遣いは止めてくれ。クリーンヒットにもほどがある。」

「というか、ミヤはデートだと思っただろう？　俺だけ意識して、馬鹿みたいじゃないか。……意識を切り替えられないけどな。」

「えっと、瑗姫への祝いの品は何がいいでしょうか？」

俺が悶々としている内に、気づけば、店が多く建ち並ぶ区域に来ていたようだ。色々な物が溢れているのを見て、ミヤは目移りして

いるように見える。

「そつだな・・・」

・・・結婚祝いつて、何贈ればいいんだ？ 前世の知識からすれば、金一封。あとは・・・酒とか食品系とか？・・・ありえねえな。

「んー、まあ・・・形に拘らずに、ミヤの気持ちがかもった物が一番だろうな」

「私の気持ちがかもった物・・・ですか」

ミヤは考える素振りを見せた後、周りの店をキョロキョロと探し始めた。だが、ぱっと目に付くものがないのか、どの店にも入ろうとしない。困ったように、オロオロとしている。

「・・・別に、慌てることはないんじゃないか？ まだ一週間あるわけだし・・・ゆっくり探そうぜ」

「・・・はい。そつですね」

俺の言葉に考えを改めたのか、微笑を浮かべながらそう言う。まあ、何買うかすら決めてないなら、あまり悠長なこと言ったら駄目かもしれないが。

そんなこんなで、俺たちは色んな店を見て回ることにした。最初に入ったのは呉服屋で、色んな着物や布地を置いている。

「・・・高いですね」

「そりゃ、こついつのは高いだろうな」

ミヤは店頭に並ぶ着物を念入りに見入って、うめぬと唸っている。

店員から聞いた値段は、ちょっと手が出しづらい値段だった。その顔は真剣そのもので、どうするか迷っているのだろう。

「しかし・・・意外だな」

「？ 何がです？」

俺がふと零した言葉に、ミヤは顔をこちらに向けて、首を傾げる。

「いや・・・ミヤは姫だろ？ てつきり、値段なんて興味ないのかと思ってたからさ」

前世でよく見てた漫画とかドラマから考えても、俺が今までこの時代で生きてきた経験から言っても、姫様が直接物を買うことなんてなかった筈だ。

今ではそういう肩書きが無くなったとはいえ、今までそういう経験なんてない筈なのに、値段を気にすることにちょっと驚いた。

「くすっ、そう思いますか？」

俺の素直な反応に、ミヤは少し笑いを零しながら、可愛らしく尋ねてくる。・・・いやいや、正直そう思わない奴の方が少ないと思うぞ？

「あのですね、是炉様。実は私、元々姫じゃなかったんですよ」

「なるほど、姫じゃなかつ・・・ん？」

なんかあんまりにも普通に言うもんだから、大して実感が湧かなかったんだが・・・冷静に考えると、今、物凄い衝撃の事実を暴露したよな？

るじゃんって？ いや、雪麗はいいんだよ。「冗談で済むし、ツッコミ（致死性）がくるから。」

でも、もしミヤにまでそういうこと言ったら、このいい感じの空気すら壊れちまう。俺みたいなのに惚れる女なんて、実際はいないだろうからな・・・泣けてくるね。

「あの・・・是炉様？」

「いや、なんでもない。ただ、自分の低スペックに泣けてきたただだ」

「・・・？」

意味が分からないのだろうか、ミヤは疑問符を浮かべて、顎に手を当てている。正直、分からなくていいと思う。

「・・・ま、いいや。で、結局どうするんだ？」

「はい。流石にこれは高いので・・・値切ります」

そう言うミヤの目は、何故だか怪しく光って見えた。ミヤが値切るってのも意外だが・・・こういう表情が出来ることの方が意外だ。

「ちょっと、そこのあなた」

「はい、なんでしょう？」

いつもと違って、ミヤは少し高圧的な態度をとり、近くにいた店員を呼びつける。これから、営業スマイルの店員とミヤの、どれだけ値切れるかの心理戦が始まるのだろうか。

「この着物・・・いいはいいけれど、少し高すぎではなくて？」

「は、お目が高い。しかし、いいものを売るには、やはりそれなりの値段が必要でして・・・」

「でも、もつと安くなるでしょう?」

「それを言われると・・・では、これくらいでどうでしょう?」

店員は懐から紙を取り出し、筆でさらさらっと安くした値段を書き入れた。ミヤはそれを、少し退屈そうな目で見ている。ちなみに俺は、完全に蚊帳の外なので、ぼーっと眺めてるだけだ。

「私を、舐めているの? この程度値を下げただけでは、到底無理ね」

「するつていうと、一体どれくらいの値をご所望で?」

「そうね・・・これくらいかしら」

ミヤは待っていましたと言わんばかりに、店員から筆と紙を奪い取り、達筆な字で言い値を書き入れていく。ちらつとその値が見えたが・・・元値の半額割ってるぞ?

「な・・・お客さん、これは流石に、許容しかねますね」

「あら、妥当だと思ったのだけれど・・・どうしても、駄目なのかしら?」

「やはり、この値では・・・では、この値でどうでしょう」

店員は多少冷や汗を流しながら、新しい値を紙に書き入れた。・・・
うん、随分と値が下がったな。これくらい下がれば、ミヤも満足・・・

「駄目ね」

しなかったようだ。いや、もういいんじゃないか? 店員だって、もう涙目だし・・・

「話にならないわ・・・是炉様、別の店に参りましょう」

ミヤは踵を返して、備え付けの台座に座っていた俺を呼ぶ。・・・いいのか？ 正直、あれだけ安くなれば十分だっただろうに。店員も、もう諦めモードに突入してるから、引き留めてくれないぞ？

「まったく・・・鼻肩の店になるかと思ったのに、残念だわ」

そんな時に、多少わざとらしくも、はっきりと通る声で発せられた、ミヤのその言葉。どう考えても、これは店員に向けて発した言葉だ。

「お、お待ち下さい！」

その目論見は成功したようで、店員が急いで呼び止めてくる。法外に値切られているとはいえ、高級な着物を買ってくれる客を常連に出来るかすれば、それはこの店にとって、必ずプラスに働くだらうからな。

「・・・何か？」

「あの、流石にこの値では無理でございますが、お安くさせていただけますので、何卒・・・」

「・・・そうですね。そこまで言うのなら、考えましょう」

恐るべしミヤ。おそろくだが、最初にふっかけた言い値は、そこまで値切ろうとは考えてなかったのだろう。この展開を最初から計算していたとは・・・ミヤ、恐ろしい子！

あれからだいぶ時間が経過し、俺たちはまた街をぶらついている。ミヤは凄く機嫌がいいようで、いつもより俺に話しかけてくる割合が多い。

まあ、それも当然と言える。あの店で着物を値切り切ったところから始め、それから先に寄った店でも、ミヤ無双が繰り広げられたからな。

あの着物、実は自分の為の物だったようで、瑛姫への結婚祝いは別口で購入した。それはミヤも満足がいく物だったらしく、あまり値切らなかつた（それでも値切ったが）。

そんなこんなで、今は奴良組の屋敷への帰り道だ。だから、特に急ぐこともなく、見せ物小屋に寄ったり、ちよっとした買い食いをしたりした。

正に、とても楽しい、夢にまで見た美女とのデートだ。・・・だが、俺はそんな夢を見ちゃいけないということだろうか。今、こんな状況になっているのは。

「うおー、痛てえよー」

「ヤスー!!! 大丈夫かあー!!!」

「てめえ、何やってくれとんじゃい!!!」

俺の目の前にいるのは、いつの時代のヤクザだって格好をした男三人組。一人（ヤス？）が肩を押さえてうずくまり、残りの二人がそれを介抱している。

・・・状況、分かるだろう？　つまりは、ぶつかってきて因縁をつけるという、本当にいつの時代のヤクザだってやつだ。・・・いや、この時代だったら、逆に最先端なのか？

「是炉様・・・」

こんな状況に、ミヤは不安そうに俺の着物を掴んできている。・・・なんだろうか、こういうシチュエーションは美味しい筈なのに・・・嫌な予感しかしないんだが。

「まあ・・・大丈夫だろ。人間のヤクザごときにや、負けねえよ」

俺は確かにクソ雑魚だが、今まで羽衣狐勢力以下多くの妖怪たちと死闘を繰り広げてきた。だから、流石に人間ぐらいならまともに戦える。

というか、正直こんな三流くさい奴ら、余裕で捻り潰せる。さて、格の違いつてのを教えてやらねえとな。

「おい、下らない演技いいからよ。さっさとどっか行け。今なら、俺もてめえらをぶちのめさないから」

え？　完全に挑発じゃないかって？　よく考えろよ、こいつらに勝つことは楽だ。つまり、ミヤに格好いいところ魅せるチャンスなわけだろ？

「あんだとお！？」

「やんのかてめえ！！」

「つまんねえ面しやがって！！」

「うるせえ、くんなら来いよ！！　あと最後の奴、ぶっさいくなくてめえに言われたかねえ！！」

そんな下らない言い争いの末に、奴ら三人は揃って殴りかかってきた。・・・ふ、流石に素手だとキツいが、夜王丸をちらつかせれば・・・あれ？ 腰に夜王丸が無い？

「死ねやてめえ！！」

「ちょ、待て、一旦ストツ、ぶうっつうっつうっ！！」

制止も聞かず、三流ヤクザ三人衆は、俺の体に拳を入れた。・・・ああ、そういえば、街ぶらつくのに刀は拙いかと思つて、屋敷に置いてきたんだつたっけ。

「是炉様・・・またですか」

・・・ミヤが、なんか疲れた感じでそう呟いた。いや、本当ならこんなことにはならなかった筈なんだよ。うん、時代が悪かったな。

「は、大口叩いた割にや、弱えな！」

「違えよ、俺らが強すぎんだよ」

「はっはっは、違えねえ」

いやあ、勝手なこと言ってるな、あいつら。こう言っちゃなんだが、そこまで痛くはないぞ？・・・まあ、致死性ダメージとかと比べれば、だが。

「ん？・・・へえ、可愛いじゃねえか。俺、この子もーらい」

そんな中、一人の男が、俺の後ろにいたミヤに気づいたようだ。

いやらしい目つきで、上から下まで見定めている。・・・よし、ぶっ飛ばそう。

「おい、その変態ゴミ虫野郎」

「ああん！？ てめえ、殺されてえか！！」

俺が発した挑発に、男は血管を浮き上がらせて怒鳴りつけてくる。だがな、俺も凄く怒ってるんだぜ？ 俺のハーレム要因（予定）のミヤを、ふざけた目で見やがって！

そして、奴らはまたも俺に殴りかかってくる。今度は俺も、馬鹿な真似はせず、真っ直ぐと立ち向かう。それからは、俺と奴らの死闘が繰り広げられ

ることはなかった。

「沖児猫、何やつとるんじゃ？」

その理由は、団子を口にくわえているぬらりひよんが、俺に話しかけてきたからだ。あまりに呑気な声過ぎて、スライディングで駆けちまったよ。

「ぬらりひよん、てめえ！ 空気読めよ！！ ここはシリアスに決めるところだろ！？」

「普段、まったく空気読まねえお前に言われたくねえな。大体、こんな人間相手してるんじゃないか」

ぬらりひよんは悪びれもせず、逆に俺を注意してくる。・・・まあ、どっちのことについても、反論できねえがな。

「あん！？ てめえ、こいつの仲間か？」

「てめえも纏めてやってやるうか!？」

「面倒じゃな・・・おい、人間」

「ああん？」

「失せな」

「ひっ・・・ひえ」

最後の台詞で、ぬらりひよんは畏を発動させた。魑魅魍魎の主であるぬらりひよんの畏に、ただの人間が適うはずがなく、奴らはすぐに逃げていった。

「・・・何だよ、この煮え切らない感じ・・・俺、いいところねえじゃん」

「ああ、悪かったか？」

「悪いぜマジで。大体、お前なんでここに居るんだよ。祝言の準備は？」

さっきは気づかなかったが、ぬらりひよんがここに居るのはおかしい。こいつが祝言の主役なんだから、一番忙しい筈だろう？

「んー、最初はワシも手伝ったんじやが、邪魔だと言われてな・・・街に遊びに来たってわけじゃ」

「あー、なるほど」

うん、こいつも実は基本バカなので、俺と同じく邪魔しかなかったんだろ。当然と言えば当然の話だな。

「まっ、そういうことだ。だから、ワシはもう行く」

そう言って、ぬらりひよんはさっさと街に消えていった。いきなりやって来て、すぐに帰る・・・あいつ、なんなんだ？

「・・・まあ、もう帰るか」

「・・・はい、そうですね」

そんな微妙な空気になって、俺たちは屋敷に向かう足を再び動き出す。そんなんでしばらくは無言だったが、ある時、ミヤが口を開いた。

「・・・是炉様」

「ん？ なんだ？」

「先ほど、自分にいいところが無かったと言いましたよね」

・・・うん、確かにそういうこと言った。事実だったし。・・・ミヤは、何が言いたいんだ？

「ああ、言ったな。それが何だ？」

「是炉様はそう思うかもしれませんが・・・私は、是炉様が怒ってくれて、嬉しかったですよ？」

ミヤはそう言いながら、今日一番の笑顔を見せた。・・・うおっ、クラツときた。やべえぜ・・・核爆弾級の威力だよ。

「・・・義兄さま。わたしを置いて勝手に出歩くとは、いい度胸をしてる」

「待て！！ 落ち着けレイ！！」

屋敷に帰った途端、異常に機嫌の悪いレイが、俺に手のひらを向けてきた。どう考えても、これは死亡フラグだろう。

「大体、お前寝てただろうが！！」

「わたしが起きた時に、アニメを見せるというのが義兄さまの役目」「何だその理不尽!?!」

このことについて、俺に何か非があるか？ いや、ない。・・・まあ、そんなこと、こいつには関係ないんだろうな。

「・・・はあ、分かったよ、好きにするがいいさ・・・けどな、壊れちまうから、先にこれ渡しとく」

俺は自分の運命を受け入れて、レイの暴挙を許すことにする。ただ、言葉の通り、せっかく買った物が壊れたらやなので、早めに投げ渡す。

「・・・これは？」

「店で見つけたからな、お前に似合うかと思って・・・壊すなよ？」

レイにお土産的なものとして買ってきたのは、兎を模した髪飾り。俺は認めてないが、レイは兎衣兎って名前なわけだし・・・似合うと思っただし。

「・・・ふん。こんな物でわたしを釣ろうなんて、生クリームたっぷりシュークリームより甘い」

「そんなつもりじゃねえ！！　っていつか甘過ぎだろう!？」

「けど・・・」

「ん？」

「今日は、釣られてあげる」

なん・・・だと？　これはつまり、俺へのお仕置きを止めてくれるということか？・・・一体、どういう風の吹き回しだ？

「・・・まあ、いつか」

何にせよ、痛くないなら大歓迎だ。今回はオチがないみたいだが、偶にはこんなんでもいいだろうさ。

その光景を見ていた雪麗が、自分へのお土産が無かったというこ
とで、致死性冷気をぶつけてきました。・・・結局こういうオチか
よ!!!

デート・・・たぶんデート（後書き）

やっとこさ、次で祝言に入ります。ミヤの結婚祝いは、その時に
出す筈さ・・・ベツニ、オモイツカナカツタワケジャナイヨ・・・？
そしてもうすぐ、ぬらりひょん編も終わりに近づいてきました。
・・・さあ、どこらへんで終わらせようか。鯉伴が生まれるまではや
ろうかな？

浮世絵町祝言・桜花（準備編）（前書き）

少しばかり長くなりそうだったので、前後編に分けてみた。タイトルがまったく浮かばなかったので、小説版のタイトルをそのまま引用・・・ネーミングセンスが切実に欲しい今日この頃。

浮世絵町祝言・桜花（準備編）

ミヤとのデートから早くも一週間が経過し、今日はぬらりひよんと瑛姫の祝言当日。それ故に、今の奴良組本家は、組員の多くが忙しそくに働いている。

「さあ、もたもたしている時間はないぞ！ あと一刻（約二時間）もすれば、総大将と瑛姫様の祝言が始まる！ 抜かるなよ！」

そんな中でも一番慌ただしなのは、今俺が居座っていること、台所だ。行き交う妖怪たちの喧騒に包まれている中、世話役に選ばれた鴉天狗の指示が飛ぶ。

祝言にも当然料理は出されるが、その後にも宴会が用意されている。というよりもむしろ、そちらの方が料理がメインで必要なわけだが。

親戚筋に当たる近在の組の者も来る中、そこで料理が遅かったり足りなかったりすれば、本家の恥・・・それ故のこの忙しさだ。

「・・・つつても、俺は暇だな」

まあ、これは最初から分かりきっていたことだが。俺が手伝ったりなんかしたら、絶対に邪魔にしなければならないだろう。いや、マジで。

ん？ じゃあ何で今俺は台所にいるかって？・・・それはだな、俺の横にいる、この女に原因がある。

「ちよつと沖兎猫、早く注ぎなさいよ」

「はいはい、ただいま・・・」

その女とは、何を隠そう雪麗である。準備もまったく手伝わずに、忙しそうな奴らを肴に、昏間っから酒を飲みまくり、既に目が据わってるんだ。

いや、気持ちは分かる。ぬらりひょんが祝言を挙げる、今日という日に笑顔でいろって方が無理な注文だ。だから、俺も付き合ってるわけだし。

「でも、飲み過ぎだぜ？ あんまり飲み過ぎると、ヤジすら飛ばせなくなるぞ」

俺はそう言っただけながら、雪麗が持つてる猪口に酒を注ぐ。本当はヤジなんか飛ばされたら拙いが、そこは雪麗も空気を読むだろう。

「ふん、まだまだ序の口よ」

酒を注ぎ終わると、雪麗はそれを一気に飲み干した。まあ確かに、酒豪の雪麗には序の口なのかもしれないが・・・いかんせん、見た目があれだからな。

「まったく・・・ん？・・・あー、雪麗。すまんが、酒が切れた」

新たに酒を注ごうとして、猪口の中の酒が切れていることに気づく。これで、俺が事前に入手しておいた酒は、雪麗に全部飲み尽くされたようだ。

「・・・しょうがないわね。じゃ、カラスに貰うわ」

「ちよ、おい！」

まだまだ飲み足りなかっただろう雪麗は、そう言っただけで鴉天狗の下

へ向かった。たぶん、いや絶対、邪魔にしなければならないだろう。．．．
まあ、俺には止められないが。

その鴉天狗は、先ほどから一人でブツブツ何か言ってるようだ。言ってる内容からして、おそらくは祝言の口上の練習だろうか？ 雪麗が後ろに立っても、まったく気づいていない。

「ご、これより、奴良組、ぞ、ぞうだいじょう．．．」
「なにその、ダミ声」
「わ」

威厳がある風にもしたかったのか、鴉天狗の声は凄くおかしかった。それに対して雪麗がツツコみ、急に声をかけられた鴉天狗は驚きの声をあげる。

「お、おお、雪麗か。いやその、ちと口上の練習をな」

俺の予想通り、鴉天狗は口上の練習をしていたようだ。こんなところで練習しないといけないとは、世話役も大変らしい。それについて雪麗と問答し、少ししたところで、ほのかに漂う酒の匂いに気づいたのか、鴉天狗は鼻をすんすんと鳴らす。

「ん、雪麗、お前、飲んでおるのか？」

「悪いの？ 今日ほめでたい日なんですよ？」

雪麗の据わっている目に気づいたのか、鴉天狗は目をギョツと見開かせた。．．．めでたい日でも、目が据わるほど飲む奴とかそうはいないよな．．．。

「やや、悪くはないが、しかし、宴はまだ始まっておらんからな」

「ちよつとぐらい、いいじゃない。ね、お酒ない？」
「や、まあ」

鴉天狗は言葉を濁して、どう対応しようかと考えているようだ。後ろにいた俺に気づいて、助けを求めてきているが・・・俺しゝらね！

「雪麗。まあ、おぬしの気持ちもわかるがな、あまり飲みすぎはいかんぞ」

そう言つて鴉天狗は、雪麗をやんわりとなだめようとする。・・・だが、それでは駄目だ。その言い方では、絶対に噛みつかれる。

「私の気持ち分かる？ じゃあさ、世話役なんかうつちやらかして、今から私たちと飲もうじゃないの」

雪麗は俺を引っ張つて近づけながら、鴉天狗に更に突つかかる。ほらな、思った通り。さつき俺もそんなこと言つて、捕まっちゃまったんだもの。

「いや、今からというのは、ちと難しいな・・・」

「あつそ。ならいいわ、あの女と飲むから」

「なに！」

「へべれけの花嫁つてのも面白いもんね。お酒もらつていくわよ」

そう言いながら雪麗は、乱暴な手つきで二本ほどの徳利をつかみ取つた。猪口の付喪神たちが慌てて逃げ惑っている姿からも、どれだけ雪麗が恐ろしいかが分かるな。

・・・いや、そんなこと考えてる場合じゃなかった！！ 瑛姫に

酒飲ませるとか……。流石にそれはしない……。とは、言い切れないんだよ……!

「わあ、待て待て! 瑛姫様に飲ませるのはいかん! あの方は大事なこと……」

「大事な、なに?」

鴉天狗が慌てて雪麗を呼び止めると、雪麗はすぐにくるりと振り返った。その目は冷たく細められていて、異常な恐怖を駆り立てる。もしかして、ぬらりひょんよりも畏が出るんじゃないか? 今の雪麗なら、簡単に魑魅魍魎の主になれる気がする……。恐っ。

「いやその……」

「あの子は大事な花嫁様で、恋に破れた雪女は、漬物石でもだいてなさいって?」

「ぐ、そこまでは言うておらんじゃろうが。……全く悪い酒じゃ」

その鴉天狗のセリフは、おそらくはついもれてしまった本音なのだろう。だが、そういうことを言えば、今の雪麗の癪にさわってしまっ。

「悪かったわね。醜態さらして」

非常に険悪な様子で、雪麗は鴉天狗にずいと詰め寄る。その様子から察するに、鴉天狗には死亡フラグが立ったと考えていいだろうな。

「なによ、こんな日ぐらい飲ませてくれたっていいじゃないのさ、世話役って言うなら、私の世話もしなさいよ」

「や、もう十分に世話を焼いておるような気もするが……。それに、

沖児猫がおるじゃろ・・・」

あーあ、やつちゃったな。これでもう、雪麗のイライラ度メータ
ーは振り切れた。・・・幻聴だろうか、プツンって音が聞こえた気
がする。

「いちいちイラっとくるわね、このカラスはっ。その口、しばらく
閉じてなさい！」
「わ、ちよつと待て！」

危険を察知して逃げようとしたのだろうが、やはり無駄だったよ
うだ。先ほどの死亡フラグを見事に回収し、ごうと鳴る吹雪の餌食
になる。

鴉天狗はやはり妖怪なので、死ぬほどの冷氣ではないのだろうか。
・雪だるまとなったその姿に、同情心が湧くことを禁じ得ない。

「ふんだ！」

雪麗はそっぽを向き、台所から出て行った。俺は雪麗をほってお
くわけにもいかないので、その後についていく。・・・俺、今日は
大丈夫なのかなあ。

「雪麗様、落ち着いてください！」

「だめですって、そっち行ったら！」

「お願いですから、止まってください！」

廊下をどしどしと踏み進む雪麗に、何匹もの妖怪がしがみついているが、全く効果がない。……まあ、俺からすれば、よくそんな勇氣あるなあと思うが。

「バ、じゃなかった、沖兎猫……様も！ 見てないで止めてください！」

「俺は無理……っていうかお前、様つけるの躊躇っただろう？」

それに、最初バカって言おうとしたろ？ 顔覚えたからな、後で覚えとけ」

「はあ！？ 何言っただ、沖兎、このバカが！！」

「てめえ！！ 一応俺、奴良組幹部だぞ！！ 覚悟できてんだろうなあ！？」

「勝手にしろや、このバカ！！」

俺たちがこんな言い争いをしている間にも、雪麗の足は先に進む。もういかほどもせず、瑛姫の部屋につくだろう。

「いいから離しなさいよ、ちょっと挨拶するだけよ、あの子に」

そんな俺たちの言い争いがウザかったのか、雪麗は振り返ってそう言った。……まあ、罵ったりはしないだろうが……挨拶だけでも終わらない気がするな。

まあ、そんな予測なんて関係なく、雪麗は腰に妖怪をぶら下げたまま、瑛姫の部屋の前に着いた。そして障子に手をかけ、断りもいれず、いきなり開ける。

「おい、あんた!」

雪麗はそう言った途端、その場に立ち尽くした。遮られて前が見えないんだが・・・一体、何があつたんだ?

「ちょ、何が・・・ほお・・・」

俺が雪麗の後ろから少し覗き込むと、そこにいたのは、当然のごとく瑛姫。だが、その瑛姫の格好は、普段の桜模様の着物と大きく違う。

白無垢に着替え、綿帽子をかぶり、心持ち顔を伏せて畳に端座している瑛姫は・・・息を飲むほど美しい。雪麗が立ち尽くすのも分かる。

初めて袖を通す白無垢に恥じらっている様子は、マジで美しく可愛く・・・ぬらりひょんが妬ましい。今からでも、あいつを暗殺してこようか・・・

「おかしくは、ないですか?」

「ま・・・まあまあじゃない?」

頬を染めて聞く瑛姫に、雪麗は声を変に裏返して答える。動揺を悟られまいとしているのだろう・・・そういう姿は、滅茶苦茶可愛く思えてしまうな。

「瑛姫、あんたね」

「はい」

「あんた、あんたみたいなの、女はね」

「はい」

「だから、その」

雪麗は自分の言いたかったことを思い出せないのか、なかなかちゃんとした言葉を発しない。妙な間が空いた後、舌打ちのような空咳のような音を発して、瑛姫に背を向ける。

「祝言、もうすぐ始まるんだから、遅れないようにしなさいよっ」

そう言い捨てて、雪麗は部屋を出ようとした。しかし、その雪麗に、瑛姫がすぎるような声で問いかける。

「あの、それだけを言いに・・・？」

「そうよっ、文句あんのっ」

その言葉を最後に、雪麗はぴしやりと障子を閉めた。・・・ふむ。やはり、雪麗のツンデレは次第に、ぶふううふうふうふうふう！！

「・・・あなた、またツンデレとか思ったでしょ」

「いや、ぐふえ、渾然たる事実だ、るおおおおおおお！！！」

「ふん、勝手に言ってなさいよ。・・・沖兎猫、今日は私、飲むから。とことんまで付き合いなさいよ！！」

・・・これは、瑛姫に負けを認めたくはないが、かなわないと思っただかそういう辺りだろうか。今日が終わる頃には、きつと酔いつぶれた雪麗が見られるんだろうな。

と、この時点で、俺は祝言始まるまで雪麗の小言に付き合い続けなければならぬことが確定した。・・・難を逃れた妖怪共が、ざまあって言ってるみたいでムカつく。

どのみち、雪麗の不満を解消させてやるのは、俺の役目だしな・・・俺は飲むわけにはいかないが、付き合ってやろう。まあ、ムサイ

奴らといふべからば、百倍マシだらう。

浮世絵町祝言・桜花（準備編）（後書き）

なんか今、ジャンプ本誌でぬら孫の掲載順位がヤバいですね・・・
他がアニメ化ラッシュで、ぬら孫は終わるからかもしれないが（
二期やるのは決定らしいですけど）。

もしこのまま打ち切りとかなったらヤバいですし、アンケートを
出してみようかなと思いはじめます・・・ただ、こういうの出し
たことないから、あまりやりたくはないんですけどね。

浮世絵町祝言・桜花（本番編）

屋敷が宵闇に沈む頃、祝言の儀は始まった。大広間の上座に花嫁と花婿の席が用意されていて、俺たち幹部や出席者は、左右に分かれて花道を作っている。

俺が座っているのは、上座にほど近い右手の席。左には雪麗、右にはミヤ、後ろにはレイが座っていて、端から見ればハーレムのような体裁だ。

まあ、雪麗も前後不覚とかなるほど飲んだわけでもなかったし、空気を読んでいるのかレイも大人しいから、特に不都合はないんだが……

「……この状況で、俺が不幸な目に遭わないわけがない」

「是炉様、お静かに」

「ああ、すまん」

俺がこぼした独り言を、ミヤが静かに注意した。まあ、こんな時には一言も発しちやいけないってのは分かってるが……だって、不安なんだもの。

よく考えてご覧？ 厳粛な場とはいえ、俺の擬似ハーレム状態。・
・こんな状態を、俺の中の不幸属性が許すはずがないだろうよ。

「鬼火」

そんなことを俺が考えている内に、刻限がきたようだ。鴉天狗の言葉で、花道の両側に一斉に明かりがともった。

妖怪の祝言らしく、等間隔に浮かぶ鬼火が闇を明るく照らす。そのかすかに揺れる鬼火の光は、影を波打たせて幽玄な空間を作り出していた。

そしてその鬼火の点灯は、主役登場の合図。先に現れたのはぬらりひよんで、いつもの着流しではなく、かっちりと着込まれた黒の紋服となっている。

ぬらりひよんの様子は、別段気負った風でもなく、だが、いつもの色気に加えて、威厳というものが見えていた。・・・要するに、いつにもましてイケメンなんだな。

俺たちが座っている側、右側の花婿の席に、ぬらりひよんはふわりと腰を下ろした。そして、花道の方をじっと見つめ、瑛姫を待つ。やがて、かすかな足音が廊下から聞こえてくる。その足音の主である瑛姫が座敷に現れると、出席者の口から感嘆の声が密かに漏れた。

それは、俺の横にいるミヤもそう。祝言の前に瑛姫と会っていないかったミヤは、ぼーっとして瑛姫を見つめている。それほどまでに今の瑛姫は美しいんだ。

「では、これより、奴良組総大将ぬらりひよん様と、瑛姫様の婚禮の儀、執り行いたいと存じます」

瑛姫が花嫁の席に座るとすぐ、世話役の鴉天狗がそう告げた。座敷にはかすかな衣擦れの音が聞こえるだけで、とても厳粛な空気に満ちている。

最初に行われるのは、夫婦かための盃を飲むこと。鴉天狗が注いだ神酒を、ぬらりひよんと瑛姫が交互に口に運ぶ。

それは何事もなく終わった。いや、何事か起こってもらっても困るが。そんなこんなで盃事が終わり、座にはほのかな安堵感が漂う。

「それでは、ぬらりひょん様」

そんな空気で微妙に緩んでいたような鴉天狗が、威儀を正して口を開いた。おそらくは、次の行事に移るのだろう。

「盃事も滞りなく終わりましたので、ここで花婿の誓いのお言葉をいただきとう存じます」

告げられたぬらりひょんは、「うむ」と顎を引いて、背筋を伸ばす。……いつもと違って、かけらもふざける様子がないな。うん、滅茶苦茶違和感がある。

誰でも、こういう時はきちんとやるんだなあ……。と、俺が改めて確認したその時、やはりと言うべきか、危惧していたようなことが起こった。

「奴良組のご一党さんよお、邪魔するぜえ!!!」

そう言いながら座敷にずけずけと踏み込んできたのは、筋肉マツチヨな鬼を先頭にした、ブサイクでむさ苦しい集団。一瞬にして、座敷の空気がおかしくなった。

まあ、押し入ってきた理由は大体分かるが……。あまりにも絵面が悪すぎて、俺の気分は最悪だ!!! くそう、瑛姫やミヤと雪麗を見て回復しなければ……!

「なに奴じゃ。ここがどこであるか、今日がどういう日か知ってる狼藉か」

「大将の祝言やってんだろ。知っててぶち壊しに来たんだよ!!!」

先頭に立っている一番むさ苦しい鬼が、とてつもなく野太い声で

怒鳴った。やめてくれ・・・俺の精神ライフが、どんどんと削られていく・・・

「なにが魑魅魍魎の主だ！ 粹がるんじゃねえぜ！ てめえらを潰して、今日から俺たちが主だ！」

こいつらが主、ねえ・・・。ざっと見たところ、こいつらは完全な仲間じゃなくて、目的の為にだけに集まった感じなんだが・・・その後どうするつもりだよ。

大体、こいつらごときに奴良組が負けるはずがない。今は祝言中ってことで、刀を持っていない奴が多いが・・・ぶっちゃけ、素手でも余裕だろうよ。

ん？ 俺？・・・馬鹿だなあ、こんなむさ苦しい奴ら相手にしてられっかよ。一ツ目とかに任して、ゆっくり見物させてもらうさ。

「上等じゃねえか、このハンチクどもが」

ほら、やっぱり漢一ツ目が立ち上がった。いつも持ち歩いている刀もキセルも他の部屋に置いてあるらしいが、それでも威圧感是十分。俺の出る幕じゃねえよ。

「奴良組の祝言を、その汚ねえ足で踏み荒らしたんだ。代償は高いからな」

「ほざいてる。てめえら全員ぶつ殺して、屋敷ごと俺たちのモンにしてやるぜ。おっと、よくみりゃ美人が結構いるじゃねえか。ついでにこいつらもいただいちゃうかな、げっへっへ」

・・・最近、こういう輩が多いのかね。笑い方も気持ち悪い上に、考え方もゴミクソときたもんだ。・・・これは、ちよっといただけ

ないなあ。

「あだっ！」

「能書きはいいからさあ、とつととかかつといでよ」

俺が立ち上がろうとする間に、クズ鬼の汚い顔面に氷の塊がぶち当たった。その犯人は当然雪麗で、挑発するように薄く笑っている。

「このアマぁ……！ ぶっ殺す、ずおおおおおおお！！！」
「……汚い。ムサイ。臭い。煩い。気持ち悪い。死ねばいいのに」

クズ鬼が雪麗に怒鳴りつける途中で、レイがとんでもない罵声を浴びせながら、ある程度威力を抑えた砲撃を放った。まあ、祝言の場を壊さないようにしているのだろうがな。

「だ、誰だ！！！」

「奴良組、児衣兔……覚えなくていい。いや、覚えるな。虫酸が走る」

お決まりの名前の問い方に、レイは静かにそう名乗った。……くっ、何故だか知らんが、いやに格好いいじゃないか。

「まあ、それは置いといて……レイ、独りで片付けるな。俺の分も残しとけ」

「義兄さま……？ やれるの？」

「大丈夫だ。こんなこともあるうかと……修行したんだ」

「……脳内で？」

「……勝手に人の思考を読むなよ？ 俺だからいいけどな、他の奴らだつたらぶちギれるから」

「……別に、読んでない」

このやり取りで萎えたのか、レイの頭のとっぺんにあるアホ毛が下に垂れた。……うん、ごめん。今日は、お前一つも悪くない。

「……それも置いといてっ!! さあ、クズ妖怪ども!! この沖児猫様が、てめえらをぶちのめす!!」

ん? 結局は修行もしてない雑魚のくせに、よくそんな啖呵されるなって? ……こういう時にデカイ態度とったら、それだけで相手はビビるんだよ……多分。

「……沖児猫? 聞いたことあるか?」

乱入してきた奴らの内一匹が、仲間の妖怪に尋ねた。……ま、まあ、知られてない方が、ハツタリはかましやすいよな。

「オレは知ら……いや待て、どっかで聞いた覚えがある」

なん……だと……? まさか、俺の勇名が、妖界に響き渡っているとも言っつのか!?

「確か……『奴良組の汚点』だとか」

「誰だっ!! そんなこと言ってる奴はあ!!」

せつかく格好いい二つ名が付いてたりするのかと思いきや、そんな不名誉な名が付いてるとは……

一体誰が、そんなことを……待てコラ、何で誰も目を合わせようとしらない? まさか、お前ら全員か!?

「てめえら、よくも……!」

「いいじゃねえか。どんな伝わり方だろうと、妖界に名前が轟いてんだから」

「ふざけんな!! もっといい二つ名付けろよ!!」

「例えば？」

「ん？ えーつと・・・『不死身の殺し屋』とか」

「あー、空気の殺し屋ね。納得だわ」

「黙れや、このモブ野郎があ!!」

なんだこいつ、えらそうな口しといて大して目立たないモブキャラの癖に・・・はっ！ ヤバい、こんなことしてる場合じゃなかった!!

く、このままだと、気を逸らしている内にやられるといういつものパターンに・・・なっていないな。あれ、なんか俺はほつとかれて、既に戦闘始まってるとるんですけど。

え？ まさかの完全スルーパターン？・・・やめろよ!! 俺は肉体的ダメージくらうより、無視されることによる精神的ダメージの方が嫌いなんだ!!・・・マゾとかじゃねえぞ。

「くそつ、俺も混ぜやが、りいええええええええええええ!!」

戦闘に入ってしまった途端、すぐに殴り飛ばされました。お前、味方じゃねえの!?

「いい加減にしなさい！！！」

瑛姫山が噴火したのは、戦闘が始まってから十数分経った頃だった。今までずっと、味方も敵も関係なく治癒していたが、遂に限界に達したというところか。

「私に甘えるのもたいがいになさい！ もうこれ以上は治しませんよ！ 今日は私と妖様の祝言なのです！ さあ、喧嘩はもうおしまいにしなさい！ いいですね！？」

その瑛姫の怒りようは、正しく山の噴火と言えるだろう。火山だと思っただけでなかった山がいきなり噴火したとか、そんな感じ。

「いいですねっ！？」

俺がそう考察していたように、他の奴らも何か考えていたのか、誰も返事をしなかった。故に、瑛姫はそう言って畳を踏み鳴らした。その様は何というか・・・姉御？

『はい』

妖たちは皆口を揃えて、そう返事をする。それらの顔の多くがにやけていて、気持ちいいような悪いような・・・まあ、いいか。

そんな騒乱が鎮まった中で、瑛姫がほっと息をついている。するとそこに、雪麗が近づいて行って・・・まさか、何か言うつもりか！？

「やるじゃん、あんた。もう立派な姐さんだね」

・・・俺の不安は、まったくの杞憂だったようだ。雪麗はにとと瑛姫に笑いかけ、瑛姫もくすりと笑い返す。

おそらくはこれで、雪麗も大体の気持ちの整理がついたんだろう。よかったよかった・・・これで、雪麗のハーレム入りもあり得る、か？

「有り得ない」

「・・・レイ、今度は読んだらろ」

「うん」

「まあ、いいけどな」

ぶつちやけ、雪麗を本気で落とせる気がまったくしないし。いや、むしろ一人たりとも落とせる気がしないが。・・・俺の目標って、滅茶苦茶遠いよなあ・・・。

とりあえず今一つ言いたいことは、何で俺がダメージを負った夕イミングで、瑛姫山が噴火したかってことだよな。・・・うん、狙ったんじゃないかったら、俺の不幸属性は本物だ。

「是炉様、大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、問題ない」

そんな倒れている俺を、大して心配そうにもしていないミヤが覗き込んでくる。・・・ついに、ミヤも心配しなくなっただか。まあ、そうなるだろうとは思ってたがな。

「この程度だったら、雪麗の冷気のが百倍ヤバイ」

「ふふ、そうですね」

「だったら倒れなければいい」

「・・・それは、あれさ。雪麗のがオーバーキル過ぎんだよ」

「ふーん」

俺とミヤの会話に、レイが割り込んでくる。まあ、別に悪くはないが・・・ここは、笑い事で済ましてくれよ。

「だが断る」

「そうですねー」

まあ、思考を読まれているのをツツコむのはもはや面倒なので、そのまま話を続ける。そんな俺たちの会話を聞いて、ミヤも少し笑みを零した。

あれから、奴良組と侵入者たちは、何故か一緒になって飲み始めた。宴会の予定だったんだから、構わないっちゃ構わないが・・・何故お前らが加わってるんだ？

まあそれは置いていて、今俺はミヤと一緒に廊下を歩いている。祝いの品を今の内に渡しておこうということになり、途中で席を立った瑛姫を探しているところだ。

「ん？ あれか。って、ちょいミヤ、こっち隠れる」
「あ、はい」

瑛姫はすぐに見つかつたが、その隣にはぬらりひよんがいた。自然と瑛姫の肩に手を回して、さすがにここは空気を読まなきゃならないだろう。

「なにを考えていた？」

ぬらりひよんと瑛姫の会話は、俺たちの所まで聞こえてくる。なんか聞き耳たててるようであれなんだが・・・うん、不可抗力だね！

「今、ですか？」

「ああ」

「この幸せが、消えてしまわぬようにと・・・」

「消えると思うか？」

「わかりません。けれど、人の一生には、どんなことでも起こります」

「それは、妖もじゃ。ワシも、よもや狐に肝を喰われるとは思わなかった」

ぬらりひよんはそう言って、乾いた笑い声をあげる。狐に肝・・・ああ、そんなことあったんだ。まあ、大して問題じゃないと思うが。

「そっぴゃあ、誓いの言葉がまだだったな」

そんな時に、ぬらりひよんは思い出したように言い出した。そう

いえば確かに、侵入者が現れたせいで、うやむやになってたんだっ
たな。

「消えぬぞ」

とても真剣な声で、ぬらりひよんは静かに語り出す。

「幸せは消えぬ。ワシが消さぬ」

その言葉に、瑛姫は頷いたようだ。ここから微妙に見える限り、
瑛姫の目は潤み始めてるように見える。

「よいか、瑛姫。ワシのそばにいる。ワシを見続ける。ワシはぬら
りひよん。敵の目をくらまし、姿を消すのがワシの畏れじゃが・・・
、約束しよう、あんたの前からは消えぬ。あんたの目に、ワシは映
り続ける」

・・・かなわないな、マジで。俺って中二病だけど、絶対にあん
なセリフ言えないもん。正直、住んでいる次元が違うって感じ・・・
あ、元々は違ってたな。

「ミヤ、やっぱりああいうのって、嬉しいのか？」

「当たり前です・・・。これは、あまり必要ではなかったかもしれ
ませんね」

俺の質問に答えた後、ミヤは懐から結婚祝いの品を取り出した。
その品は、桜を象った首飾り。店の主人曰わく、縁が切れないとい
うぐ利益があるらしい。

結婚祝いに贈る品として、正にぴったりだったわけだ。素材がい
いものだったらしく、やはり高かったが、それでもミヤは満足して

これを買った。

「まあ確かに、ご利益は必要ないかもしれないが、それはそれでいいだろ？」

「はい、そうですね」

ミヤは俺の言葉に共感したのか、笑顔でそう言う。まあ、こういうのは実利ではなく、気持ちが大変なんだよな。

「そうだ、瑛姫、外を歩かぬか？」

「外を、ですか？」

俺たちが会話している内に、ぬらりひよんたちはそっぴい話になっていた。

「ああ、うちの百鬼を連れてな。江戸の町を歩くのだ」

「それは　　きゃっ」

瑛姫が何かを問おうとする前に、ぬらりひよんは瑛姫を軽々と抱き上げていた。うん、やっぱり、姫にはお姫様だっこだよな。

「花嫁行列の代わりに百鬼夜行じゃ。ワシらを先頭にな、百鬼がぞろりといってくるのだ。楽しいぞ」

そう言ってぬらりひよんは、瑛姫を抱き上げたまま庭に降りる。その瑛姫の顔は、とても幸せそうにほころんでいた。

「おい、沖見猫。さっきから何してやがった」

「ありゃー・・・バレてたのね」

「当たり前じゃ」

「沖児猫様に、宮姫様まで・・・」
「あの、ごめんなさい、瑛姫」

まあ、ぬらりひょん相手にバレないわけがなかったか。瑛姫は恥ずかしいのか顔を赤らめてるし、その瑛姫にミヤは謝ってるし・・・なんだこりゃ。

「まあ、いいさ。これから百鬼夜行じゃ。お前もついてこい」

「へいへい」

「おい、てめえら、出て来い！」

俺に話した後、ぬらりひょんは屋敷に向けてそう呼ぶ。すると、屋敷のいたるところから、妖怪たちがどっさりと溢れ出してきた。

その妖怪たちは、ぬらりひょんたちを見て、次々とヤジを飛ばす。それらは任侠者らしく粗野だが、同時に優しく温かかった。

「てめえら！ 今から百鬼夜行じゃ！ ワシと瑛姫の背中についてこい！」

浮世絵町祝言・桜花（本番編）（後書き）

たぶん、あと五話以内には、ぬらりひょん編が終わるんじゃないかなと、希望的観測を・・・今年中には、終わらせておきたいですね。

我らリア充撲滅同盟！（前書き）

いつものごとく、タイトルはその場のノリで適当に決めています。
・・・なんかこの話、最初の構想からまったくかけ離れたなあ・・・

我らリア充撲滅同盟！

SIDE 雪麗

・・・総大将と瑛姫の祝言から、今日でちょうど一週間。あれからずっと宴会気分だった妖怪たちも、漸く落ち着いてきたところだ。

最初は瑛姫を認められなかったけれど、今は私の気持ちも整理がついてきた。だから、決して優しくはしないが、ほどよい関係を築こう。そう思った。

「そう・・・思ったのに、ね・・・」

「あの・・・雪女さん・・・？」

私の顔は、この子にも分かるくらいにひくついているのだろう。布団の中から、探るような目つきで私を見てくる。

なんでこんなことになってるのかって？ そう、あれは、この子が朝餉に来なかったたので、見に来た時だった

「まったく・・・なんなのよ。祝言の日からずっと、朝餉に来ないし・・・」

私はぶつぶつとそうこぼしながら、瑛姫の部屋に向けて歩いていく。瑛姫の部屋と私に与えられている部屋は遠いから、長ったらしく鬱陶しい。

はつきり言っつて、私は瑛姫が大して好きじゃない。いや、元々は恋敵だったわけだから、これだけでも凄い進歩だと思っただけだ。

でも、例えそうだとしても、朝餉にも来ないというのは気になる。別に、瑛姫を心配してるわけじゃないけどね。ただ、ちょっと気になっただけ。

・・・何か今、沖児猫がツンデレとか言ってる気がした。意味はよく分からないけど・・・私って、本当にそのツンデレとかいうやつなのだろうか。

「・・・いや、たぶん違うでしょ」

あれは、ただ沖児猫が勝手に言ってるだけ。沖児猫みたいなバカの言うことなんて、真に受ける方がバカらしい。うん、そう思おう。私がそうやって区切りをつけたのと同じくらいに、ちょうど瑛姫の部屋の前に着いた。別に気負う必要もないので、一声かけてから入ることにする。

「瑛姫、入るわよ」

「あ・・・雪女さん、ですか？」

障子を開けて部屋に入ると、瑛姫は布団の中に潜ったまま、顔だけをこちらに見せた。ちょっとしてみても、なかなか起き上がろうとしない。

「……一体、どうしたのだろうか。この子の普段の性格なら、ちゃんと起き上がってくると思うのだけど。」

「……なに？ あんた、もしかして体調悪いの？」

「いえ、そういうわけではなくて……」

私が疑問を投げかけると、瑛姫は言葉を濁してはぐらかそうとする。……？ 体調が悪いわけではない？

「だったら、なんだったのさ」

「その……痛くて……」

痛い？……体調が悪くないのに痛いつてことは、どこかを痛めたということか？ でも、起き上がれないほどの痛みって……

「……つまり、具体的に言つと？」

瑛姫の要領を得ない言葉では分からないので、詳細を尋ねることにする。……後から思えば、なんでこの時に、質問を止めなかったのだろうか。

「あの、その、つまり……腰が痛くて、あまり動けないのです……」

瑛姫は顔を赤らめながら、そう言った。……なるほど、そういうことか……。さて……今私が感じている殺意は、この子と総大将、どっちへの殺意なんだろう。

……駄目だ、抑える私。ここで大声出したりなんてしたら、あの沖兎猫と同類になってしまう。それだけは、なんとしても阻止し

なければ。

「・・・へ、へー、それは、大変、ね？」

「は、はい」

平静を装おうとしたのに、少しばかりどもってしまった。一応、ちゃんと言葉に出来た筈だけど・・・この子に動揺が伝わってないか心配だ。

瑛姫を観た限りでは、私をどうこうというよりも、自分のことについて恥じらっている様子。まあ、当然でしょうけど。私だってもしそうになったら・・・やめとこう。

「そ、それで？ いつぐらいには治りそうなの？」

「おそらく・・・昼までには、動けるようになるかと」

「そう・・・大変、ね？」

あ、さつき、同じこと言ったっけ・・・。本当に私、凄い動揺してるみたいね。でも、しょうがないじゃない。だって、そうなんだもの。

・・・なんで、こんな気持ちになってるんでしょうね。せつかく気持ちの整理をつけて、ほどよい関係を築いていこうと思っていたのに。

「そう・・・思ったのに、ね・・・」

「あの・・・雪女さん・・・？」

本当に、今のこのモヤモヤした感じをどうしようか。たぶん、勝手には消えないでしょうね。・・・総大将に、ちょっとおはなしし

まじょうか。

「・・・瑛姫。まあ、安静にしてなさい。私はちょっと、行く所があるから」

「あ、はい」

そこまで話してから、私は足早に瑛姫の部屋を出る。今は一刻でも早く、このイラつきを無くしたいから。

私は走ると変わらない速度で、総大将を探して廊下を歩く。周りの小妖怪どもが震えているところを見ると、そこまで私は余裕がないのかと思う。

そしてしばらく屋敷を歩き回って、総大将を見つけることが出来た。私の目の前に見える部屋の中で、誰かと話しているらしい。

「この声は・・・沖兎猫？」

SIDE 沖兎猫

「なあ、ぬらりひょん」

「ん？ 何じゃ？」

朝飯を食い終わった後、ぬらりひよんに、話がしたいと言って、とある部屋に呼び出した。いつものように着流しに羽織りで、とてもりラックスしている様子。

「悪いことは言わないから・・・死ねやこらあ!!!」

「ちっ、止めるこのバカ!」

「へぶしっ!!!」

そんな隙を狙って、この世に在ってはならない悪を滅しようとしたのだが・・・軽くぶっ飛ばされてしまった。夜王丸も用意して、絶対にやれると思ったのに・・・!

「まったく、なんなんじゃ・・・ワシが何かしたか?」

「おいこらてめえ。本気で言ってるのか? あん!?!」

本気で言ってるとしたら、俺はこいつを何が何でもぶっ殺してやる。例え神が許しても、俺たちモテない者同盟が許さねえ・・・今、同盟に入ってるの俺だけなんだがな。

「てめえ、ここ一週間、毎日毎日・・・お前のせいだな、俺は不眠症だバカヤロー!!!」

俺と瑛姫の部屋は比較的近い。だからな、聞こえてくるんだよ、毎晩毎晩・・・。あんなん聞かされて、眠れるか? いや、眠れない。

しかも、俺はレイと同じ部屋だから・・・つまり、あれなんだよ。とりあえず、レイはまったく気にしてないようだが。

「ああ、そのことか・・・しょうがないじゃろ?」

「しょうがないで済ませんじゃねえ!!」

お前、童貞を舐めてるな？ 正直、マジでヤバいんだぞ？・・・
あ、そういや俺、前世と合わせたら合計70年くらい童貞だ・・・
ちよっと待ってくれ、これはマジでヤバくね？ 魔法使いになれ
るとか、そんなレベルじゃねえぞ・・・早く、ハーレムを完成させ
なければ・・・!

「まずは、早いとこ一人目を・・・だが、それは・・・」

「もういいな？ じゃ、ワシは行くぞ」

「お・・・って、ふざけ!・・・もういねえ・・・」

くっ、俺の意識を逸らした上で、さっさと逃げ去るとは・・・やるな、ぬらりひょん。さすが、俺が大将に認めた男だ。

「・・・あなた、何やってんのよ」

「ん？ 雪麗？」

ふと聞こえた声に振り返ると、そこには冷たい目をした雪麗が。いつの間にやら部屋に侵入して、俺の後ろに立っていたらしい。

そして俺たちは目が合った瞬間、両者の気持ちと同じところにあることに気づいた。どちらからと言うわけでもなく、互いに頷きあう。

「なあ雪麗、そうは思わないか？」

「そうね、沖見猫。珍しく意見が揃ったわ」

「ああいつのって、許しちゃいけないよな？ 雪麗さん」

「ええ、許しちゃいけないわね。沖見猫さん」

そのやり取りが終わった瞬間、俺たちは手をガシツとつかみ合った。・・・雪麗からつかんでくるとか、こんなことでもなきや有り得ないよな。

「同盟を組もう（組みましよう）」

まあ、そんなことは置いて、俺たちは同盟を結成した。モテない者同盟・・・いや、雪麗はモテるから・・・リア充撲滅同盟とかだろうか？

「俺たちはやれる！」

「私たちはやれる！」

「あのバカに、節操というものを教えてやれる！！！」

「俺たちはやれる！」

「私たちはやれる！」

「あのバカに、我慢というものを教えてやれる！！！」

その言葉を最後に、俺たちは拳を突き上げる。・・・なんで俺たち、こんなに息ぴったりなんだ？ やはり、意識が通、ぶふえあ！
！ごめん、真面目にやる。

「で、具体的には何やるんだ？」

一通り前座的なことを終えたので、本題に入って雪麗に問う。あれだけボルテージを上げたが、正直俺には何の考えもない。

「知らないわよ。あんた、何か考えなさい」

「俺だつて分かんねえよ。お前いつも俺のこと、バカって言うてるだろうが。俺に過度な期待するんじゃない」

「役に立たないわね・・・ま、分かりきってたことだけど？」

ちよつと待て雪麗さん？ 俺たちさつき同盟組んだばかりなのに、なんでこんなにバカにされてるんだ？・・・まあ、いつものことだけど。

「・・・ん、じゃあ、頭がいい奴に案を貰おうか」

「頭がいいって・・・誰を？」

この屋敷にいる中で頭がいいって言ったら、鴉天狗とかミヤとかそのぐらいたが・・・鴉天狗がぬらりひよんの邪魔するわけないし、ミヤは論外。あとは・・・

「牛鬼がいればな・・・」

今の奴良組で一番頭がいいと言ったら、やはり牛鬼しかいないだろう。でも、あいつ嫉眼山にいるからなあ・・・

「・・・いや、確か・・・今日来るって、誰かが言ってたわ」

「はい、ご都合主義乙！」

完璧にご都合主義だな。普通なら、絶対にこうはならねえよ。・・・まあ、俺たちに都合がいいんだから、別に構わないが。

「ぎゅ・う・き〜!」

「沖見猫に、雪女か・・・雪女、おかしな物でも食べたのか?」

「おい、なんで俺はナチュラル決定なんだよ」

牛鬼をやつとこさ見つけたと思ったら、会っていきなりの差別発言だ。・・・最近、俺の扱いがまた悪くなった気がする。

「・・・で、何のようだ?」

「実は、かくかくしかじかで・・・」

「・・・冗談に付き合ってるほど暇ではないのだが?」

くっ、かくかくしかじかで通じるかと思ったのに・・・いや、無理なのは分かってたけど。でも、説明面倒だなあ。

「どきなさい、沖見猫。牛鬼・・・実は、まるまるばつばつで・・・」

「いやいや、そのボケはいらないって」

「なるほど、総大将が・・・」

「ははは、やつぱりな。お決まり過ぎるんだよ、この展開」

俺のは通用しないのに、雪麗のは通用するって、どんなギャグだつての。・・・ま、いつか。説明する手間が省けて良かったってことで。

「・・・それにしても、沖見猫は分かるが、雪女までとは・・・
実に意外だ」

言われてみれば、確かに意外だよな。普段の雪麗の性格からしたら、こんなにはっちゃけて暴走なんてしないと思う。・・・まあ、

それだけあいつに怒っているとか？

「・・・何よ、悪い？」

「悪くはない。だが、ほどほどにせねばならんということだ」

「まあ、それはそうだけど・・・」

あれ？　なんでこんな、雪麗が牛鬼に諭されてる図が完成してるんだ？・・・何故だろう、牛鬼が渋格好い父親に見えてきた。

「それに雪女。お前が怒っているのは、一体何故だ？　総大将のことは、もう諦めをつけた筈だろう」

「それは・・・そうだけどさ」

「・・・つまりお前は、総大将に対して怒っているわけではないのだ。おそらくは、自身の身の置き所、それを求めているのではないか？」

「・・・・・・っ」

・・・あれ？　何この展開。雪麗が言い負かされてるのもあれだが、牛鬼が恋愛について語ってるのが不自然過ぎる。お前、そういうの疎いくせに。

というか、雪麗が身の置き所を求めている・・・ねえ。普通に嫉妬してるだけかと思ってたが、そういう風に見れば、そうなのかもしれない。

今まではぬらりひよんのことをずっと好きだったわけだから、その立場が無くなった今、どうすればいいのかわからないのかもしれないな。

「なにさ。じゃあ、私にどうしろってのよー！」

そんな牛鬼の言葉に感じるものが有ったのか、雪麗は毛を逆立たすように怒鳴りつけた。・・・いや、本当にどうしてこうなった？

「そうだな・・・新しい恋でも探せばいいのではないか」

「新しい恋?・・・そんなの、あるわけないでしょ」

うーん、まあ、雪麗がぬらりひょん以外に恋するって想像出来ないよな。牛鬼が言ってるのは、そういうことなんだろうが。

「そうでもないだろう。・・・オレが見る限り、沖見猫とはお似合いだと思っが?」

「・・・は?」

牛鬼のぶち込んだ爆弾発言により、雪麗が気の抜けた声を出す。・・・そうか、牛鬼から見て俺たちはお似合だったのか・・・よし、ナイスだ牛鬼!

「あ、あんた、本気で言ってるの!? どこをどう見たら、私とこのバカがお似合いなのよ!」

「先ほどの息の合いようといい、普段の掛け合いといい、ぴったりだとは思わないか?」

「思わないわよ!」

雪麗は顔を真っ赤にして、いつもは出さない大声を上げる。いやいや、今思い返してみれば、俺たちってお似合だった、てひいあああああ!!!

「ふん! もういいわ!」

俺を八つ当たり混じりに凍らせた雪麗は、どすどすと音を立てて

出て行った。・・・俺って、なんでこんな役回りばかりなんだろ
うな・・・。

「というか・・・最初の目的、どこいった？」

最初は俺たち、ぬらりひょんを何とかしてやるうってやってた筈
なんだが・・・。この感じだったら、多分雪麗はもう何もしないだ
ろうしな・・・。

結局、瑛姫の妊娠が発覚する三ヶ月後まで、俺の悶々とする日々
は続いた。・・・よくやった俺、よく耐えた俺・・・！

SIDE 雪麗

「はっ、はっ、はっ」

牛鬼の所から急いで飛び出してきた私は、誰もいない自分の部屋
で息を整えている。あいつが変なこと言い出すから、私もいやに動
揺しちゃったじゃない。

「・・・私と沖見猫がお似合いだとか、そんなことあるわけないじ
ゃない」

そうだ、私があんなバカとなんて有り得る筈がない。普段からバカなことしかしないし、私をツンデレだとかなんとか言ってくるし……。

そんなことを考えている内に、今まで沖児猫がやってきたバカな行動が頭を巡っていく。変な妄想をしたり、無駄に敵に格好つけたり……。

「でも……」

でも、悪いことばかりじゃなかった。一緒に笑い話をしたり、総大将が瑛姫と出会った頃には相談とかもしたっけ。

沖児猫と出会ったのは、遠野で総大将が連れてきた時。最初は、バカな奴だと思っただけでなくて、殺そうとしたような……

あ、そう言えばあの時、私と沖児猫、口吸いを……いやいや、あれはやってない。当たる直前に冷気を送り込んだ。そうだった筈！

「っ、何よ、牛鬼が変なこと言うから、変に意識しちゃうじゃない！」

私と沖児猫は、そんなんじゃない。ただの悪友。大体、沖児猫は最近、宮姫といい感じの雰囲気だし……。

「……そうよ。沖児猫は宮姫の方がお似合い。私はまったく関係ない」

そういう言葉が自然と口に出て、何故か頭が急に冷えていく。いいんだ、これで。私は雪女、最後には溶けて消える女なんだから。

我らリア充撲滅同盟！（後書き）

今この小説で一番の問題は、現代編での雪麗の立ち位置。沖見猫と恋愛関係にするか否か・・・どうしようかな？

あ、あと宣言しときます。ぬらりひょん編は、あと二話で終了です。次の話は、たぶん明日か明後日ぐらいに・・・

温泉と覗き、時々××(前書き)

頑張つて一日で書ききつたぜ！　なので、見直しが甘いとことかあるかも？　誤字報告なんか有ったら気軽にプリーズ！

さて、三ヶ月近く書いたためらりひょん編も、後一話を残すのみ・
・なんでこんなに長くなつたかなあ？

温泉と覗き、時々××

ぬらりひょんと瑛姫が祝言をあげて、大体三ヶ月が経過した。この間にも、瑛姫の妊娠が発覚したり、色々なことがあった。

まあ、そんなことは置いといて、今は二月であり、まだまだ寒いこの季節。となれば皆さん、体を温めたいですね？

「というわけでぬらりひょん。みんな温泉に行こう」
「どういうわけじゃ」

えー？ 一々説明しなくちゃいけないのか？ 雪麗みたいにさ、地の文も読めるようになれよ。・・・なったらなっただで面倒か。

「体を温めたいだろうが。瑛姫も妊娠してるし、体を休めないといけないだろう」

「うーん、まあ、確かに一理あるか」

ぬらりひょんは俺の言葉に納得しかけているようだ。まあ、瑛姫を引き合いに出されたら、こいつは断れないだろうからな。

俺の目的は別にあるが(サブタイトルで分かるか)、さっき言ったことも事実だ。それに、前にミヤが銭湯に興味を示していたから、温泉・・・ってのもある。

「よし、いいじゃろ。皆で行ける温泉を探して、明日にも行こう」

そんなこんなで、ぬらりひょんも温泉行きを認めたようだ。明日か・・・よし、おやつは三百円までで、バナナはおやつに含まれ・

・るんだろつか？

「んー、着いたな」

そうして次の日。俺たちは宝船とかいう馬鹿でかい船の妖怪に乗って、人もあまりこない秘境の温泉に来ている。

鼻につく硫黄の匂いと、近寄るだけで温まる空気・・・うん、温泉だ。いやあ、なかなか素晴らしいものだな。

「これが温泉・・・ですか。屋敷の湯船とは、また違う感じですね」「屋敷のは沸かしたただけだし、ここのは天然温泉だからな。成分からして違う」

「成分・・・よく分かりませんが、とにかく此方の方が良いのですね？」

「まあな。色々と効能もあるだろうから・・・」

あれ、こここの効能って何なんだろう。人が来ない秘境の温泉だし、誰も調べてないよな・・・いや、普通の所でも、この時代じゃよく分からないか。

「まあ、とりあえず浸かろうぜ」

「そうじゃな。瑛姫、ゆっくり休めよ」

「はい、妖精様」

俺の発言をぬらりひょんが肯定したことによって、男組と女組に別れて温泉に入りに行く。ちなみに男組と女組の温泉の距離は、大体百メートルぐらい離れてるかな？

男組にいる連中は、大体の奴ががたいがいい。．．．つまり、見てて気分の悪くなるようなものが見えるわけだよ。．．．オエツ。ま、まあ、温泉は広いわけで、散り散りになってあまり見えなくなつたから、大した問題じゃない．．．と、自分に言い聞かせる。とりあえず俺は、あまり人（妖？）影がない辺りでゆっくりと湯に浸かしておく。正直、白田坊あたりに近寄って来られたら、マジでヤバいからな。

「うーん、それにしても．．．ふう．．．なかなかどうして気持ち良いじゃないか」

温泉に浸かってみると、やはり普段浸かっている湯船とは違った感じがある。今まで温泉とか来たこと無かったが．．．意外とハマってしまつかもしれないな。

「沖兎猫、まったりしてるな」

「ん？ ああ、ぬらりひょんか」

全裸のぬらりひょんはそう声をかけて、俺の横に腰を下ろした。．．．くつ、なんて完璧な肉体だ．．．！ こいつの横にいたら、俺の価値が相対的に低くなるじゃないか！

「．．．どうしたんじゃ？」

「いや何、自分がどれだけ劣っているかを、改めて確認しただけだ」

「今更じゃろ」

「それを言うんじゃないかねえ!!!」

確かに、それは今更なことだよ。でもな、はつきりそれを口に出されると、俺だって凹むんだぞ?・・・まあ、こいつには関係ないか。

「ったく・・・で、何か用か? 俺には裸の男に近寄られる趣味はないんだが」

「その言い方は止める・・・」

何を言ってるんだ、渾然たる事実じゃないか。嫉妬と悪意によってねじ曲げられた、な。

「いや、確かに温泉ってのはいいが・・・お前には、他に目的があるんじゃないかと思ってる・・・覗きとか」

ぬらりひよんはそう言っつて、俺のことを疑惑の眼差しで見つめてくる。酷いじゃないか、仲間を疑うなんて!・・・何故バレたし。

「ふっ、俺の崇高なる策を見破るとは・・・さすがはぬらりひよんと言ったところか?」

「いや、お前が考えとることなんざ、誰でも分かる」

・・・うん、そうだよな。自分でも、こんなに分かりやすい奴なんざいないと思ってるよ。でも、いいじゃないか。

「いいじゃないか・・・お前には、キレイな奥さんがいるんだから。俺にはな、今まで一度も彼女すら出来てないんだ・・・覗きぐらいさせやがれ!!!」

俺はもう自分の想いの全てを込めたんじゃないかという感じで、ぬらりひよんに熱く語る。・・・だからさ、そうやって引くの止めるよ。分かってたことだろう？

「阿呆かお前は。誰が自分の妻が入浴してる時に、他の男に覗きを許すってんだ」

んー、ま、そりゃそうだな。自分の奥さんの裸が見られるのを許容する旦那なんか、一部の変態ぐらいしかいないだろうし・・・でも、俺が今日温泉に来た目的の一つは覗きだ。というより、温泉に来て覗きをしないなんて、そいつは漢じゃねえ！！

つまり、俺は絶対に覗きをしてやるんだ。だがそのためには、ぬらりひよんが邪魔になってくるわけで・・・ピコン！

「・・・なあ、ぬらりひよん」

「なんじゃ？」

「要するにお前は、瑛姫がいなければ、俺が覗いても構わないわけだろう？」

「まあ・・・ワシとしては構わんな」

よし、やはりそうだったか。ぬらりひよんの性格なら、自分や瑛姫に害さえなければ、覗きぐらいなら許容する・・・ここを突く！

「だったら、こうしないか？ お前と瑛姫、二人で混浴してこい」

「・・・それ、ワシに何か得があるか？」

ぬらりひよんは多少胡散臭げな目をして、そんなことを言う。ああ、駄目だ。全然駄目だぜ。てめえは何一つ分かっちゃいねえ！！

「バカヤロー!!」

「……………(ぺしっ)」

「……………うん、だろっな」

俺が勢いに任せて、青春漫画のごとく殴りかかったが、ぬらりひよんは軽く防ぎやがりました。こういう時はさ……空気を読んで殴られようぜ？

「まあ、とにかく！ お前は何も分かつちやいねえ！！ 自分に得がない？ 馬鹿言つちやいけねえなあ！！」

まったく、こいつは何を言ってるんだろっな。自分に得がないとか、脳みそ腐ってるんじゃないか？……というかお前、損得勘定するタイプじゃないだろう。

「よく考えてみる、混浴ということは、どういうことかということ……を！」

「どういふことって……ワシと瑛姫が、一緒に湯に浸かるってことじゃろっ？」

「黙れ馬鹿やろっ！ よく聞け、混浴とはつまり、女の新たな一面を見ることが出来る場なんだ!!」

「!?!? 一体、どういふことじゃ!?!?」

よし、食いついた。最後まで淡白で来られたら拙かったが、食いついたならこっちのモンだ。俺の全力をもって、こいつを説き伏せる!

「いいか？ 混浴の時の女には、独特の色気がある。それは恥じらいでもあるし、時として大胆な誘惑ですらあるんだ」

「ふむ……それはまあ、あれじゃが……瑛姫は妊娠中じゃぞ？」

「何を勘違いしてやがる！俺が言ってるのはエロスじゃねえ、萌えだ！！このド変態が！！」

「うおっ、いや、お前に言われたくは」

「シヤラップ！！いつもとは違った女を見て、改めてその女の良さを知れるんだ。そのギャップ、それこそが萌えだ！！！」

「しゃ、ぎゃ？・・・萌えとはなんなんじゃ」

ふっ、いい感じに困惑してきたな。このままでいけば、確実にぬらりひよんを陥落出来る！適当なこと言ってるだけなのに！

「そして、想像してみるんだ・・・」

そう言いながら、俺はトーンを落としてぬらりひよんの肩に手を置く。ここでの落差、それこそが説得の極意だ！

「その新たな一面を見せてくれた妻が、笑顔でこう言うんだ・・・

『いつも、ありがとうございます。私は、あなた様を愛しています』

・・・とな！」

「む、むう・・・」

自分で言ってるであれだが、なんかムラツとくるな。やっぱりあれだな、萌えって素晴らしいんだよ。うん、今更か。

「ま、まあ、そういうのは魅力的ではあるが・・・ワシらはもう湯に浸かっとなるわけじゃし、どうしようもないじゃろう」

「ふっ、甘いな、ぬらりひよん」

ああ、甘過ぎるぜ。例えるならば、砂糖たっぷりのシュガートーストに、蜂蜜をたっぷりかけたぐらい甘い。この俺が、その程度のことを考えつかないんでも？

「レイ、聞こえるか？」

『・・・何、義兄さま』

俺は目を閉じて、義妹であるレイに語りかける。レイと俺は繋がっているから、コツをつかめばこれぐらいのことが可能なんだ。

「そこに、瑛姫はいるか？」

レイは女組の湯の方に浸かっているから、十中八九いる筈だがな。一応、確認の為に聞いておく。

『・・・今はミヤヤと話してるけど、それが何？』

よし、ちゃんと視界内にいるらしい。これで瑛姫が説得出来れば、ぬらりひょんも従わざるを得ないだろう。完璧だ。・・・苔って呼び方はなくね？

「瑛姫に、ぬらりひょんと混浴しないか？って聞いてくれ」

『・・・それは、私にとってメリットがあるの？』

・・・やっぱりな。レイならば、俺にとって得でも自分に得じゃなければ、絶対に協力しないと分かっていたさ。・・・だが！！

「この頼みを聞いてくれれば、お前が好きな温州蜜柑、たらふく食わせてやるっ」

『・・・交渉成立。少ない量だったら、許さない』

女の子だからか知らないが、レイは甘い物とか蜜柑が大好きなんだよな。俺の懐は寒くなるが・・・覗きの為には惜しくない！

『ちよつと待つてて………義兄さま、瑛姫が了承した』
「おう、早いな。……ぬらりひょん、瑛姫が了承したんだと」
「……よし、分かった」

「ここまでくれば、ぬらりひょんも腹を決めたようだ。立ち上がって、瑛姫と混浴する温泉まで歩いて行く。……腰になんか付けて行けよ。」

「まあ……ふつ、来たぜ俺の時代が」

ぬらりひょんという障害が無くなった今、俺の覗きを阻む者などいない！ 少し間を置いて、俺も温泉から出て行く。当然、腰に布を巻いてな。

「えっと……こつちかな〜と」

俺は超がつくぐらいのご機嫌モードでスキップしながら、女湯を目指して行く。腰布しか無いから寒い筈だが、今の俺は、覗きのポルテージで燃え盛ってるぜ！

「あーちーちー、あーちー、燃えてるんだーろうか」

そのポルテージの上がりようと言えば、こんな歌を歌っちまう程だ。……JASRACに申請とかしないでもいいよな？

「さーみーみー、さーみー、凍ってるんだーろうか」

……ん？ あれ、なんか歌詞が自然と変わったような……えっと、凍ってる？……凍ってるうううううう！？

「ぐひゃ、うおっ、さむっ！！ ちょ、一体、何が・・・」
「・・・そんなの、私しかないでしょ」

そんな声に俺が恐る恐る振り返ってみると、そこには物凄い笑顔の雪麗さんが。そうですね、こんなこと出来るのは雪麗さんだけですよね。・・・止めて、笑顔が怖い！！

「な、な、何で、雪麗が！？」

「雪女の私が、温泉に入れるわけがないでしょ。・・・どうせあんたが馬鹿なことすると思ってるね、張ってたのよ」

く、そんな、俺の行動が簡単に予測されていたとは・・・！ いや、ぬらりひよんにもバレてたし、当然と言えば当然なのかもただど。

「・・・たく、なんでこんな奴に（ボソッ）」

「な、何か言ったか・・・？」

「・・・なんでもないわよ」

雪麗が小さく何か言ったが、俺には上手く聞き取れなかった。そして雪麗はなんでもないといい、凍って動けない俺の方ににじりよってくる。

「せ、雪麗さん・・・？」

「さあ、覚悟は万全かしら？」

・・・万全なんかじゃありません！！ あーっ！！！！

S I D E ぬらりひょん

それは . . .

ただ虐殺と言つには、あまりにも残酷すぎる光景じゃった

ただ一つ言えることは、ワシらは失ってしまったということ

何を？ 決まっている、それは

最高の戦士

ありがとう沖兎猫、ワシらに夢をくれて

ありがとう沖兎猫、ワシらに希望をくれて

ありがとう、本当に . . .

ありがとう

「妖様、こつこついうのもいいですね」

「ああ、そうじゃな、瑛姫」

ワシと瑛姫は、二人で一緒の温泉に浸かっている。瑛姫も最初は恥ずかしがっていたりしたが、今はもう随分と楽にしているようじやな。

「・・・先ほどの悲鳴は」

「沖児猫じゃろう。まあ、予想通りじゃな。気にしなくていい」
「そうですね」

さつき、この辺り一帯に響き渡る悲鳴が有ったが・・・気にすることはないじゃろう。内心で黙禱を捧げてやっただけ、ありがたく思えよ？

「でも、沖児猫様のおかげで、妖様とこういう機会を持てました」
「うむ。そうじゃな」

そのことについては、沖児猫もいい仕事をしたと思う。あいつの言う通り、瑛姫の新たな一面とやらも見えたしな。

「妖様、瑛姫は幸せでございます」
「う、うむ」

・・・ただ、あまりに瑛姫が可愛過ぎて、襲うのを我慢するのに必死じゃ。・・・耐えろ、耐えるんじゃワシ！ここで我慢せずに何が魑魅魍魎の主じゃ！

SIDE 沖兎猫

「う、うー、酷い目に遭った・・・」

「自業自得。・・・ただ、わたしへの報酬は忘れずに」

「うぐっ、・・・へーへー」

時間が大分経って、もうみんな温泉から上がっている。随分とあったダメージも、漸く落ち着いてきたところだ。

「そうですね、是炉様・・・覗きだなんて・・・」

「いや、すまなかった。マジで謝らせていただく!」

今の現状は、いつも通り俺の背中にレイがいて、宝船が出航する準備が整うまで、ミヤと一緒に近くを散歩しているところだな。

俺の覗き騒動は組の皆に伝わっていて、当然ミヤにも知られたというわけだ。・・・まあ、何故か皆が皆、やっぱりなって顔をしてたが・・・。

「・・・是炉様、聞いていますか?」

「いや、聞いてるって」

「ならいいですけど・・・今後は、こういうのは慎んで下さいね?」

「うっ・・・」

いや、こういうことが出来なくなったら、俺の溢れる欲求はどうすればいいんだ?・・・本当に悲しくなってくるなあ。こんな時に、

彼女がいればな……。

「ま、俺に惚れる女なんざいないだろうからな。いいよいいよ、分かってるともさ」

「……是炉様？」

あ、やべ、声に出しちゃってたな。こういうの聞かれたら、また点数が減点されていくんだよなあ……まあ、元々低いか。

「んっ、そろそろ宝船の準備も終わったかな？ ミヤ、そろそろ戻ろっぜ」

結構時間を潰したみたいだから、歩いて帰る頃にはたぶん準備も終わってるぐらいだろう。立ち止まっているミヤに一言かけて、船の方に歩いていこうとする。

「……そんなこと……ないですよ」

「ん？ 何か言ったか？」

ミヤはボソツと何か呟いたようだが、俺にはよく聞こえなかった。……さっきも有ったな、こういうことが。

「そんなことはないと、申し上げました。……ここに、一人おります」

「……」

あれ？ さっきしてた話って、どんな話だったっけ。確か、俺がモテないとかいう話だったような……。ん？ どういうことになるんだ？

「私は、是炉様のことを……お慕い申し上げていますから……」
「……え？」

温泉と覗き、時々××（後書き）

前半のくだりがおかしくない？とか言わないでね。オレも分かってるから。最後の辺りが重要なわけですよ。

次話はぬらりひょん編終わりなわけですが・・・正直、無理やり感がある終わり方になると思います。でも、許してね？

こんな終わり方ないだろ！？（前書き）

三日連続投稿だぜ！受験生が何やってんだとか思っちゃいけないぜ！ぬらりひよん編最終話がこんなのかよ！とか思っちゃいけないぜ！

・・・失礼。まあ、終わり方が駄目駄目だったのは、分かっちゃいます。が！選べる選択としては、このぐらいかなあ・・・と。

あ、今回の最後に、予告的な感じで、たぶん現代編で使うであろうセリフを入れてます。・・・ネタバレ上等！って感じですが。

こんな終わり方ないだろ!?

「私は、是炉様のことを・・・お慕い申し上げておりますから・・・」
「・・」
「・・え？」

ミヤがそんなことを言った瞬間、俺の中の時間が止まったような気がした。お慕い・・・・って、まさか俺に告白してきたとか・・・・？

『なわきやねーだろ』

『そうだそうだ、俺がモテる筈ねーもん』

『うん、絶対に有り得ない』

『例えば・・・夢オチとか？』

俺の脳内で、勝手な意見が飛び交う。・・・あれ、全員完全否定？ 普通に告白されたとかいう選択肢は無し？・・・まあ、俺も無いと思うが。

それにしても、夢オチか・・・うん、あり得そうな話だ。俺がモテるよか十倍ぐらいあり得る話だな。頬をつねって・・・あれ、痛い？

『夢オチじゃない・・・だと？』

『じゃあ、どういうことだ？』

『分かった、ドッキリなんだ！』

『いや、ミヤはそんなことしないだろっ』

『だとすれば・・・？』

『・・・聞き間違いだな』

『『『それだ！！！』』』』

最初の辺は置いて、お慕い申し上げておりますから、か・・・これをどう聞き間違えるって言うんだ？ 誰か、真実を教えてください！

『お慕い申し上げて・・・これは、どう変換される？』

『おりますからは、そのままでもいいだろうから・・・』

『んーっと、最後の辺りは、仕上げて・・・と訳せるから、何かの仕上げということか？』

『お慕いもう・・・こっちはどうだ？』

『あ！「おした」が「干した」で、いもはそのまま。つまり、干した芋とかじゃね？』

『『『お前、天才だな』』』』

『繋ぎ合わせると・・・？』

『干した芋を仕上げておりますから・・・』

『『『これだあ！！！！』』』』

俺の脳内会議の結果、こついつ答えが出た。参ったなあ、紛らわしいこと言ってくれんなよ、ミヤ。危うく、勘違いしちゃってるバ力になるとこだったじゃないか。

「・・・ミヤ」

「は、はい！」

ちょっと緊張している様子のミヤは、俺の呼びかけに過敏に反応した。芋を仕上げてるぐらいで何を緊張することが有るんだろうな？・・・とりあえず俺は、ミヤの肩に手を置く。

「芋を仕上げてるんなら早く言ってくれよ、俺も手伝ってやるのに」「・・・はい？」

俺が渾身の笑みを浮かべてそう言ったら、ミヤは物凄く拍子抜けしたような顔をした。ああ、そうか、手伝ってやると思われてなかったのか。

「俺でも、それぐらいのことはするぞ？ さあ、その辛つてのはどこに有るんだ？」

「あの・・・先ほどから、何をおっしゃっているのですか？」

「ん？ 干した芋を仕上げてるんだろ？」

「そんなことは言っておりません！！」

え？ 違うの？・・・あれ、じゃあなんて言っただ？ これ以上の聞き間違い、俺には思い浮かばないんだが・・・。

「私は・・・是炉様のことをお慕いしていると言ったのです・・・つまり、私は是炉様のことを、好いているのでございます」

「はは、冗談・・・」

「冗談などでは、ありません・・・」

「・・・qwse drftgyふじこ1p:;?」

「是炉様！？ どの言葉ですか！？」

・・・はっ、意識が別の世界に飛んでた。くそっ、あとちよっとで世界を征服出来たのに・・・って、そんなことはどうでもいい！！

「ミヤ・・・本気か？」

「はい、紛れもない私の本心です」

そのミヤの目は揺らぐことがなく、本当の本気なんだということが分かった。・・・もう、冗談でごまかしたりは出来ないよな。

「・・・俺なんかの、何がいったっていうんだ？ 自分で言うのもなんだが、惚れる要素は皆無だろ」

本当、自分で言うと思しくなるが、俺に惚れる奴なんて普通はないと思う。正直、今でも半分信じられないからな。

「確かに、普段の行いは、目に余るものがあります。私はそれを好くほど、酔狂ではありません」
「うぐっ」

いや、自分でも思ってるし言ったが、直接言われると地味に凹むぞ・・・。まあ、事実だし、しょうがないことではあるが。

「ですが、私は知っています。是炉様が私のために、いつも体を張って助けてくださるのを」

「あー・・・いや、それは・・・」

確かに、ミヤを助けるようなことをした覚えはある。だがそれは、俺がやりたいようにやって、結果的にそうなっただけ。ミヤを本当に助けようとしたわけじゃない。

「・・・ええ、それも分かっています。私を助けてくださったのは、偶然なのだ」と

「だったら・・・」
「でも、それでも、助けてくださったのは事実で、私が救われたのもまた事実です」

ミヤは目を薄めて、愛おしそうな顔をする。その眼差しの先にあるのは、一体なんなのだろうか。

「それに、そんなことは大した問題ではないのです。私が是炉様を想っているということ・・・そのことに、理由などいらなないと思います」

「・・・ミヤ」

そんな風に言われたら、俺はどうすればいいのか分からない。どうする、どうすんの俺。ここでの行動で、どうなるかが決まってくる・・・！

『そんなの決まってるだろ、襲っちゃえよ』

止める、俺の中の悪魔！　ここが一番重要なんだぞ！？　そんなこと駄目に決まってるだろうが！！

『そつだ。襲うなんて、野蛮過ぎる』

今度は俺の中の天使の言葉。いいぞ、もっと言って悪魔を追っ払え！　で、この先の俺の行動は、何をすればいい？

『そんなのは簡単だ。まずは優しく抱き寄せて』

ふむふむ。

『　　一気に押し倒す』

悪魔と一緒にじゃねえか！！　何？　俺の頭の中にいる奴らは、そんなことしか考えられないの！？・・・つまり、あれか。俺がそういう奴なんだな。

「・・・是炉様」

俺が悶々としていると、ミヤが静かに俺の名を呼んだ。そうしたら、俺もきつちりしないわけにはいかない。真正面から、ミヤを見据える。

「迷惑だと思われても、構いません。ですが、私の思いだけは、知っておいてください」

「ミヤ・・・迷惑なんかじゃ、ないさ」

自然と俺の体は動き、ゆっくりとミヤを抱き寄せる。最初からこうすると決められていたような、本当に自然な動作だった。

「俺なんかのことを想ってくれてるのは、本当に嬉しい。俺だってお前のこと好きだし・・・迷惑なんか、有るはずないだろ？」

「是炉様・・・嬉しいです」

ミヤは一筋の涙を流しながら、俺のことを抱き締め返してくる。その姿はとても愛らしくて、俺の心臓はバクバクだ。そしてそのまま、二人の顔が近づいていき

「あ

その影が重なるうとした瞬間、気の抜けたような声が聞こえた。そうすると俺たちは、二人揃って慌てて体を離すことになる。

声を発した主は、俺の背中にいたレイ。・・・やべ、レイがいるの忘れてた。危なかった・・・二人の世界って、マジであるんだな。空想の産物かと思ってた。

「ど、どうした？ レイ？」

俺は内心の動揺を隠せないまま、呆然としている風なレイに問う。さっきまでずっとアニメを見てたっばいのに、一体どうしたのだろうか。

「義兄さま・・・義兄さまと繋がってたインターネット回線が、遮断された・・・」

「・・・は？」

インターネット回線・・・かつて閻魔王が、俺に魔術回路の説明が面倒とかいう理由でつけた機能。それを使ってレイはアニメを見ていた。

本当は2chとかもやりたかったみたいだが、前世で俺が死んだ日のインターネットに繋がっていたようなので、アニメしか見れなかったらしい。

まあ、そんな余談は置いて・・・回線が切れた？ 閻魔王が何か干渉したのか？・・・今まで何もして来なかったのに、いまさらだと思っただが。

その頃の閻魔大王

「閻魔大王！　なんでこんなことなってるんですか！」

「知らん！　ワシが気づかない内に、異世界干渉が長時間行われとったんじゃ！　くつ、儂が離れている間によく分からん義妹なぞ作りおって・・・！」

「閻魔、責任はお前が全部とれよ」

「そんな、神ちゃん酷い！」

「閻魔大王、早く次元の歪みを直してください！　下手すると、世界が幾つか滅びますよ！？」

「分かつとる！　今直す！・・・あれ、久しぶりに出たと思ったら、出番これだけ？」

「何言ってるんですか！！　早くしてください！！！」

「ああ、分かった！！！」

「ふあ、早くなんとかしろよ。我は寝るから」

「神ちゃんも手伝ってよー!!」

「くっ、駄目・・・回線が完全にシャットアウトされてる。これは、復旧は無理・・・」

数分ほど苦悶の表情を浮かべて何やらやっていたレイが、そう言っ
つて絶望的な表情を見せる。まあ、レイにとってアニメが無くなる
のは、絶望に等しいことなのかもな。

「・・・アニメも何も無いなんて、わたしがいる価値はない・・・」
「おいおい・・・」

まさか、自殺とかしたりしないだろうな?・・・まあ、レイは俺
と繋がってるせいで不死身らしいから、それはないか。でも、そん
な感じのセリフに聞こえるぞ・・・。

「・・・よし」
「ん?」

レイは何かを決めたような顔で一言入れると、着物を漁って球状
のある物を取り出した。その、ある物とは・・・

「それ、秀元に貰ったやつじゃん」

以前土蜘蛛退治のお礼で秀元に貰った、微妙にチートな品だ。俺が持ってたと思ってたが、いつの間にやらレイに奪われてたらしい。

その効力は、簡単に言えば一度限りの超強力封印。それを使われた妖は、使用者に陰陽術の知識が無かろうと、使用者の力が続く限り完全に封印される。

魔力チートの俺らが使えば、望まない限り一生閉じ込めておけるってわけだ。まあ、地味だから使いたくな、……って、まさか！

「おい、レイ！」

「……封印術式展開」

俺が最悪の展開に気づいてレイを止めようとするが、一足先に術式を展開してしまったようだ。……こんな時にも発動されるのか、俺の不幸属性は……！

さつきも言ったが、レイと俺が繋がっていて、俺が死なない限りレイも死なない。それと同様に、片方が封印されたりなんかしたら、もう片方も封印されてしまうんだ……！

「止める、レイ……！ まだ蜜柑食ってないだろ？ な？」

「……蜜柑とアニメ、どっちが大事？ わたしは当然、アニメを選ぶ」

いや、分かるけど！ 分かるけれども！ ここでそれを許しちゃいけない……！ せっかく俺のバラ色の人生が始まるうとしてるのに、それはない……！

「・・・術式解放、対象・・・わたし」

「止めろっ！！！！」

「封印が解けるのは・・・インターネットっていつから？・・・ま、いいや。2000年丁度で」

「そんな軽く決めんなやああああ！！！」

最後のセリフがそんなので、レイの封印術式が発動された。それと同時に、俺とレイは玉の中に吸い込まれていく。これが、封印か！？

「是炉様！？ レイ！？」

そんな状況に、ミヤも戸惑っているのだろう。とても困惑したような顔をして、俺たちの方を見つめている。

そして俺たちを救おうと思ったのか、手をこちらに伸ばしてくる。・・・駄目だよ、お前が巻き込まれたら、どうなるか分からないから。

「・・・ごめんな、ミヤ。ぬらりひょんや雪麗に、悪いって言うといってくれ」

俺は最後の力を振り絞って、ミヤの体を押す。するとミヤは後ろに倒れ、もう何をやっても間に合わなくなっただろう。

「嫌、是炉様あ！！！」

封印されているためか、次第に俺の意識は薄れていく。この時代で最後に聞こえたのは、ミヤのそう泣き叫ぶ声だった・・・。

かくして沖兎猫と兎衣兔は封印された。

だが、彼らがいなくても、世界は廻る。

ある者はその姿を変え、またある者は子を成し……皆が変わっていく。

きっとそれは、いつの時代も同じ。

彼らの封印が解かれた、その後も……

ぬらりひよんの孫く不死身と中二、時々フラグく、ぬらりひよん
編終幕。

現代編で使われる予定のセリフ

「・・・あの妖が、復活するというのか」

「沖兎猫、兎衣兔・・・花開院家の名において、必ず滅する・・・！」

「妹は、大事にしなくちゃならねえんだぜ？」

「・・・はっ、馬鹿馬鹿しい」

「・・・久しぶりじゃな、沖兎猫」

「あんたが、沖兎猫さんかい？ オレは鯉伴、奴良組二代目総大将だ」

「・・・当然か。あいつは人間、四百年の時を生きれる筈がない」

「・・・何よ、悪い？ あんたとの約束、果たしてやるうってのに」

「この四百年・・・長かったです」

「ピッ、再開！」

「・・・勘違いしなくていい。わたしがあなた達を助けたのは、あなた達が死んだらわたしが嫌だから。・・・勝手に死んでいいと思うな」

「これが沖兎猫と兎衣兔、彼らの伝説の一部だ。どうかね、諸君」

「・・・うっそだあ」

「はい！ お母様のためならば、このつらら、一肌脱ぎますとも」

「ゼロ兄ちゃん、あんたも、妖怪なんやな」

「・・・確かにこいつ、最強かもしれねえな・・・」

「義兄さま・・・ごめんなさい」

「調子にのるなよ、人間。貴様は我らの玩具であつて、貴様に勝手な行動をする権利などない」

「しよーゆ、しよーゆ、しよーゆをかけて、めんつゆだつて愛せるの」

「行くぜ、レイ。俺たち義兄妹の力、魅せてやるっ」

「・・・うん、義兄さま」

「今までのことは水に流そう。俺たちは絶対に分かり合える筈だ。さあ、俺の手をとるんだ！！」

「じゃあな。お前も死んだら、閻魔大王にスライディング土下座してみな・・・人としての尊厳を失うから」

「これが幻聴だと思う？ なら止めておいた方がいい。もしそうなら、あなたは・・・本当に死ぬことになるのだから」

こんな終わり方ないだろ！？（後書き）

最初に言っておきますが、ミヤは現代編でも出てきますよ？いやむしろ、出すためのこの展開です。・・・児衣兔が凄い邪魔な子になっちゃってますが。

もしぬらりひょん編で完全にくつついたりしたら、ハッピーエンド過ぎて現代編が駄目になっちゃいますからね。・・・その分、現代編ではいちゃつかせてみようか。

現代編で使うセリフは、時系列順になってるわけじゃありません。おそらくはほぼ使うことになりましたが・・・多少変えるかもです。

で、見返してみれば・・・児衣兔のセリフ多いな・・・。沖児猫の次ぐらいにありますね。現代編ではいい子に・・・なるさ、きつと。

ちなみに最後の辺のは、京都編ぐらいにやる予定のオリジナルシナリオだったりします。そこまでちゃんと出来ればいいけどな・・・。

現代編序章〈花開院家会議〉（前書き）

四日連続更新はいいですが・・・ぶっちゃけ今回、ギャグありません。そして沖見猫も出てきません。皆さん真剣に討論なさります。ただ・・・

現代編序章〈花開院家会議〉

時は平成の世となり、原作西暦2000年丁度。ミレニアムイヤーのおめでたいこの年に、重苦しい空気が流れている屋敷があった。

「・・・あの妖が、復活するというのはか」

「はい。九分九厘間違はなく、ひと月以内に封印が解かれるでしょう。・・・二十七代目、どうなさるおつもりですか？」

その屋敷とは、かつては羽衣狐との戦いで奴良組と共闘した、陰陽師花開院家の屋敷。当主である二十七代目花開院秀元を中心に、数十人の陰陽師が集まっていた。

「・・・こうなってしまうば、仕方あるまい。我らが全力を尽くして、封印の解けた妖を討つ！」

「おお、二十七代目！」

目をかつと見開いて宣言した秀元に、他の陰陽師たちも追随する。その有り様は様々で、自信に満ちた顔をする者もいれば、難しい顔をする者もいた。

「・・・二十七代目」

そんな折、難しい顔をしていた代表とも言える男、花開院竜二が拳手をして秀元を呼ぶ。その顔は、以前として厳しいままだ。

彼はまだまだ子供と言われる年齢だが、こうして発言権を持っていることから、いかに才能を認められているかが分かる。

「何だ、竜二」

「その封印されている妖・・・確か、沖兎猫に兎衣兔とか言ったか。そいつらを倒せる算段が、ちゃんとおりか？」

竜二は目を細く、見定めるようにして、秀元の目を見つめる。この質問の対応次第で、花開院家の現当主の実力の程が分かるのだ。

「こら、竜二！ 口を慎まんか！」

そんな竜二のふてぶてしい態度に、周りにいた内の一人が怒鳴りつける。だが、竜二は嫌そうな顔を見せながらも、目を逸らすことはしない。

「・・・いや、構わん」

「二十七代目！？」

「これは重要なことだ。皆にも、知る権利が有る・・・」

秀元の静かに紡がれたその言葉に、周りの陰陽師たちも神妙な面もちとなる。そうして秀元は近くにいた陰陽師に目配せすると、その陰陽師が話し出す。

「まず、沖兎猫と兎衣兔という妖・・・花開院妖秘録によれば、兄妹の妖のようですね」

「ふん、妖に兄妹なぞ関係あるか」

「そうですね・・・話の腰を折らないでいただきたい」

「む・・・すまん」

そんなやり取りをした後、陰陽師はこぼんとわざとらしく咳をする。そして、手に持っている巻物に目を戻し、話を続ける。

「この妖が封印されたのは、およそ四百年前。丁度、名高い十三代

目の時代のことのようですね」

十三代目の名が出た途端、陰陽師たちの間に感嘆にも似たどよめきが起こった。言うなればそれは、よくぞやってくれたとでも言うべきなのだろうか。

「ただ・・・この封印を施したのは、十三代目ではないようです」「どういうことだ!？」

「詳しい経緯は分かりませんが、十三代目の作成した封印具を使い、誰かが兄妹を封じた・・・と」

その話が終わった瞬間、先ほどとは違ったどよめきが起こる。意外とも言えるその事実、驚きを禁じ得ない・・・そんなところ。

ただ、竜二を始めとした数人は知ったこととして静粛にしている。特に竜二などは、何故その程度のことを知らないんだとも言わんばかりの顔だ。

「この封印は、江戸のとある街で偶然に、花開院に繋がる者が見つけました。そしてその封印が解けるのを畏れ・・・この本家に持ち込んだというわけです」

「・・・それで」

「ええ。知つての通り、十三代目の封印の上から、本家の一角に強固な封印を張った・・・」

つまるところ、沖兎猫と兎衣兔の封印については、花開院家はあまり知ってはいないのだ。ただ、民間に被害が及ばないように、本家に厳重に封じただけと言える。

「な、ならば何故、その封印が解けるのだ!？」

「おそらくは、最初から封印を解くタイミングを決めていた・・・ということでしょうね。でなければ、辻褃が合わない」

十三代目の封印具であり、今まで完全に封じ込めていたその封印が、最近になって急に綻び始めた・・・これは、最初から決められていたと考える方が自然だ。

「何故、そんなことを・・・」

「さあ、それは・・・。封印した人物に、何か壮大な計画が有ったのか・・・いえ、分かりませんね」

「むう・・・」

こんな議論をしたところで、分からないものは分からない。だから語り部の陰陽師は、本題とも言つべき話、それに入っていく。

「そして一番重要なのは、我々で兄妹を倒せるか・・・ですね」

「そ、そうだ！」

「はつきり言いましょう・・・困難極まりない」

「なっ!?!」

今まであったどよめきとは比べ物にならないほどの喧騒が、陰陽師たちの間に沸き起こった。竜二はまたも、馬鹿らしげな顔をする。

「ば、馬鹿な!! 我ら花開院陰陽師が集まれば!!」

「・・・確かなことは言えませんが、難しいでしょうね」

語り部はそこで一息置いて、秀元の方をちらりと見る。秀元もすくなく頷いて、続きを話すことを促した。

「沖見猫と兎衣兔、それらの逸話は、民間の妖怪談に知られていま

す

「ああ、そんなことは我らとて知っている。だが……」

「ですが、それとは別に、あの十三代目が残した資料があるのです
「よ

周りの陰陽師たちは、もつとよめくことをしない。それはどよめくことを忘れたのか、そんなことをしている暇はないのか……。

「そこには、こう記されています

その動作一つで周囲を凍らせ、その言霊一つで腹をねじ切る。

もし邂逅するようなことがあれば関わる前に逃げることを勧める。出会った瞬間から毒されるのだから。

と

そこまで語られて、息巻くことが出来る陰陽師などここにはいない。当然だ。あの十三代目がそこまで言うのに、自分たちがかなう筈がないのだから……。

「……はっ」

そんな様子を見ていた竜二は、誰にも気づかれないように鼻で笑う。こんなことは少し調べた者なら知っている筈で、それで落ち込むなど馬鹿らしいことだ。

竜二は仲間である陰陽師たちを少々見下しながら、秀元の方をもう一度見る。その様子は淡々としていて、この結果を予想していたようだ。

「……二十七代目、結局どうするつもりだい？」

そうして竜二は秀元に、元来の質問を再びぶつけた。今度は誰も何も言わず、現当主の言葉を待つ。

「……確かに、沖兎猫に兎衣兔の兄妹を倒すのは難しいだろう」

秀元のその弱気とも思える発言に、陰陽師たちに絶望的な空気が流れる。しかし、秀元の言葉はそこでは止まらない。

「だが、かと言って、野放しにするわけにもいかん。私は全力をもつて、きやつらを滅する！」

その言葉は力強く、絶対の意志を感じさせた。竜二は軽く感心したような顔を見せ、場の成り行きを眺める。

「……強制はせん。だが、我こそはと思う者は、私に協力してもらいたい」

秀元がそう言うと、陰陽師たちは顔を見合わせる。そうして少しすると、あちこちから威勢のいい声が聞こえてきた。

「我々も、お供いたします!!」

「たかが妖二匹ごとき、我らの敵ではないでしょう!」

「二十七代目!!」

陰陽師たちは口々に参戦を表明し、この場にいる全員が戦うことを決めたようだ。秀元はそれを見て頷き、最後に号令をかける。

「沖兎猫、兎衣兔……花開院家の名において、必ず滅する……」

「！」

その言葉に合わせて、陰陽師たちから「応！」という声上がり、次の戦いの勝利を誓うのだった……。

息のつまる会議が終わって、竜二は花開院本家の廊下を歩いていく。才能があるとは言え、彼もまだ子供。会議などというものは苦手だった。

「竜二！」

「……秋房か。何だ？」

そんな竜二に声をかけたのは、後ろから走ってくる花開院秋房。花開院の分家、八十流の天才陰陽師で、次期当主の候補と目されている一人だ。

「まったく、お前は……肝を冷やしたぞ」

「あんなことで肝を冷やす？ お前らしくもない。当主狙ってるんだろ？ そんなことでどうするんだ」

「そういう問題じゃないと思うが……」

秋房は苦笑して竜二の横に並び、二人揃って廊下を歩き出す。彼

らは当主候補として擁立されている同士だが、それなりに仲は良かった。

「竜二はどう思う？」

「何がだ？」

「例の沖児猫と児衣兔という妖だよ。・・・正直、勝てると思うか？」

「知らないね。負けそうになったら、オレはさっさと逃げ出すさ」
「・・・相変わらずだな、竜二」

竜二がひょうひょうと秋房の質問に答え、秋房は若干胡散臭そうにそれを見る。秋房は知っているのだ。竜二が嘔吐きだということ。

「ああ、そうだ。ゆらは元気か？」

「・・・何だ、急に」

「いや、沖児猫と児衣兔は兄妹だと考えた時に、ゆらが思い浮かんだんだ」

ゆらとは、竜二の歳が離れた妹だ。竜二の兄弟は自分を合わせて四人いたが、残りは竜二とゆらだけとなっている。

「はっ、あのアホが病気なところを見てみたいね。いつもポケットとして、可愛くないったらありゃしない」

「またか・・・」

竜二がゆらを悪く言うのは、いつものことだ。それが愛情の裏返しなのかは、彼自身にしか分からない。

「ま、今は・・・」

今すべきことは、沖見猫と児衣兔の復活への対策をすること。若く才能に溢れる二人は、そこから別れ、それぞれが成すべきことをするのだった……。

現代編序章〈花開院家会議〉（後書き）

以前に募集した紹介文を見て、なんか思い浮かんだ今回の話。皆さん真剣に会議してるのに、ぶっちゃけ大した意味がない。

竜二は作者の好きキャラナンバー3。ちょっと出張ってもらおうかなーと。・・・他の奴らはネタにしまくるけど。

そして次話で沖児猫復活！ただ・・・明日の更新は無理です。今日だってね、センターファイナルやってたんだよ（明日もあるし）。なんで今話を書ききれたかが不思議。

ついでに言えば、少しの間更新速度は落ちます。何故って？俺妹とバカテスを全巻読むからです。・・・受験って、なんだっけ？

四百年後の世界・・・いきなりかつ！（前書き）

この作品には関係ないですが、俺妹マジで面白かった・・・バカ
テスは友達がまだ貸してくれませんか。黒猫かわいいよ黒猫。

四百年後の世界・・・いきなりかつ！

俺の意識は、ふつと呼び覚まされた。それは言うなれば、爆睡していたのが急に目が覚めたとか、そんな感じだろうか。

ただそれと違うのは、目を開いても何も見えない、まったくの暗闇だということ。光なんざ、一筋たりとも感じれやしない。

「・・・あれ、俺って何してたんだっけか」

こんな状況になっている理由が、俺にはいまいち分からない。普通に生活している分には、絶対に有り得ないことだと思っただけだ。

おぼろげな記憶を引っ張り出して、こうなる前は何をしてたかを思いだそうとする。不思議と、恐怖とか困惑だとかいった感情は沸き起こらなかった。

「えっと・・・最初からいくか・・・」

こういう手がかりもない記憶を思い出す時は、物事の始まりから思い出す方がスムーズに行く。他の奴らがどうかは知らないが、少なくとも俺はそうだ。

「ぬら孫の世界へ転生して、ぬらりひよんの仲間になって、数十年過ごして・・・」

そうそう、思い出してきた。割愛するけど、その数十年の間に色々あって・・・まあ、ほぼ毎日不幸　自業自得なところもあるが

な目にあつてたっけ。

で、俺にある最後の記憶は、奴良組のみんなで温泉に行った日。覗きのために色々と画策して・・・雪麗にきつついお仕置きを食らったんだよな。

「雪麗のお仕置きの後には、ミヤと散歩して、それで・・・」

告白・・・されたんだよな。最初は信じられなくて、めっちゃくちゃなこと考えまくったっけ。・・・あれ、まさかその夢オチだったりする？

・・・いやいや、絶対に違う。ちゃんとミヤの気持ちを受け止めて、俺も自分の正直な気持ちで応えた。あれを、嘘だなんて言わせない。

だとすれば、問題があつたのはその後だよな。一体何があつたっけ？ 確か、インターネット回線が遮断されたってレイが・・・ああ。

「・・・思い出した。マジで何やってちゃっててくれたんの、アイツ！」

そうだよ、そうだった。レイはあの時代に価値を考えられなくなつて、自らを封印。それに呼応して俺も封印されたんだ・・・。

ミヤと気持ちを通じあつて、これからがって時に・・・もうちょっとタイミングとかあるだろ！！ いや、いつだろうと止めてほしいけど。

「まあ、だとすると・・・これは、封印された状態だったことか？」

レイに色々と言いたいことはあるが、もう過ぎたことだ。そんなことより今は、現状を把握することに務めるべき・・・そうだろ？

で、本題を戻すと、俺の考えで十中八九間違いないだろう。というか、それ以外に考えられないし、それ以上の不幸なんて考えたくない。

「・・・封印って、なんか響き格好いいしな」

ちょ、今なんか、誰かに中二病乙！とか言われた気がするんだが！・・・いいじゃん、俺は中二病の妖怪、沖兎猫なんだし。

「ま、置いといて・・・何で俺の意識が戻ったんだ？」

そう、一番考えなきゃいけないことは、何故俺の意識が戻ったかということ。封印されてる時は、ずっと眠った状態ってのがお約束だからな。

一番有り得る可能性としては、俺の封印が解けかかってるってことだろうか・・・別に、それ以外の理由が思い付かなかったわけじゃないんだからねっ！

「ってことは、もう四百年経ったのか？」

レイは封印される時、たしか2000年丁度って言ってたからな。だとしたら、随分とまあ長い眠りだったわけだ。寝坊なんてちゃちなレベルじゃねえ。

「はあ、マジかあゝ・・・せつかく、坂本龍馬の暗殺犯を見てやるうとか思ってたのに」

うん、日本の歴史ミステリーの謎の一つを解き明かせると思ってたんだよ・・・もうちょっとまじなことでも落ち込めとか言っただよ？ これは重要なことなんだ。

「まあ、それもしようがない。ここは、さっさと日本の誇るべきサブカルチャーに再会できる喜びを噛みしめよう」

俺は自分で言うのもなんだが、前向きな性格をしてる・・・と思う。だから、こう考えることにして、さっさと状況確認に戻ることにする。

「つつても、他に考えることあるか？」

正直、何にもないような気がする。封印された後のことなんか分からないし・・・ミヤは・・・まあ、考えても仕方ないことなんだろうな。

ん？ そういや、そもそも元凶であるレイはどうなったんだ？俺と一緒に封印されたんだから、この空間内においてもおかしくはない・・・と思う。

「おい、レイ、いないのかー？」

俺はとりあえず声を出して、見えないレイを呼んでみる。まあ、さっきから声を出してはいたんだが、この空間で伝わってるのかは微妙だな。

1分ほど待つてみたが、レイからの返事はない。聞こえてないか、この場にはいないのか、それとも・・・あえて無視をしてるのか。最後のではないと信じよう。

『レイ、聞こえてんなら返事しろ』

というわけで俺は、最終手段つてわけでもないが、念話でレイに語りかける。念話なら、完全にシャットアウトされてない限り、絶対にいけるからな。

『・・・ん、んう？・・・何、義兄さま？ わたしがせっかく気持ちよく寝てたのに』

『ああ、それは悪かった・・・』

あれ、ここつて俺が謝るべきところなのか？ 封印されたのはレイのせいなんだし、強気に出てもいいとこだよな。・・・でも、たぶんレイの性格なら・・・。

『まずは聞こう。レイ、俺に謝るつもりはあるか？』

『・・・何を、謝る必要が？』

おっと、予想通りの答えが返ってきたぜ。そうだろうと思ったさ、お前は絶対に反省とかするタマじゃないって。・・・泣いても、いいですか？

『ったく、まあその辺は後でゆっくり話すとして・・・お前、今どこにいる？』

『・・・変な、暗い空間』

やっぱりそうか、レイも俺と同じくこの空間、あるいは個別の空

間にいると考えるべきだな。だとすれば、封印空間内ってのはほぼ確定ってことになる。

『これはたぶん、封印されてるってことなんだろうけどさ・・・お前、何か分かることないか？』

俺は自分の見解を伝えてから、レイにダメ元で聞いてみる。こういうのは俺は分からないけど、レイなら分かる可能性があると思う。なんでかな、スペックの差？

『・・・ちよつと、待ってて。今調べる』

レイはそう一言言って、念話をシャットダウンする。調べてくれるんだろうが・・・ごめん、何もしてくれないだろうなって思ってた。本当にごめん。

『・・・義兄さま』

時間の感覚がないからよく分からないけど、ちよつと間を置いてレイの声が聞こえた。たぶん、調べ終わったのだろう。

『この空間は、義兄さまの予想通り封印空間。・・・だけど、秀元の封印とは違う。秀元のは、もう解けてる』

『ん？ 違う？』

『たぶん、秀元の封印の上からさらに重ねがけしてたんだと思う。秀元のと比べて、随分と術式構成が甘い』

んー、よく分からないけど、秀元の封印はもう解けてるってことは・・・うん、四百年経ったのは確実みたいだな。正直、実感湧かないや。

『で、それはつまり、何とかしないと封印が解けないってことか？』
『そう。・・・だけど、そんなの余裕。わたしの力なら、すぐにも出れる』

なら出よう・・・その言葉が、今の俺には出せなかった。何故つて？ 決まってるだろ、レイが俺を置いて、自分だけ出て行く可能性が有るんだ！！

『・・・考えてることは大体分かる。やっぱり、義兄さまはバカ』

ぐふっ、なんだこの本気で憐れnder感じ。止める、俺をそんな優しい声で諭すな！！ お前は絶対にそんなキャラじゃないだろ！！

『わたし達は、一蓮托生。一人の封印が解けたら、もう片方も解ける』

・・・ああ、そっぴやそっぴだよな。封印された時もそっぴだったんだから、解ける時もそっぴに決まってるよな。確かに俺はバカだった。でもさ、お前一蓮托生って・・・いや、意味としちゃそっぴだけど、何かお前が言ったら違和感がめっちゃくっちゃ有るんだけど。・・・一蓮托生。

『んー、じゃ、さっさと出るか？』

『・・・分かった。少ししたら、出れると思う』

なら、もう俺にやれることはないし、ゆっくりしてよっか。・・・いや、ちよつと待て。落ち着いて考える俺、なんか忘れてないか・・・？

「……は！ しまったあ！！」

俺たちの封印はたぶん、どこかに嚴重に安置されてる筈だ。重ね
がけ封印なんてあるんだから、これはもう確定と言っていていいだろう。
すると、封印が解かれた時に、近くに人がいるって可能性も否め
ない。いやむしろ、いない可能性の方が少なかったりするかもしれないし。

「なら……封印解けた時のセリフ考えとかないと！！」

封印が解けた時って、やっぱり中二病臭いセリフ言いたいよな！
！……あれ、なんか誰かが滑って転けた気がするけど……気の
せいだろ。

「くつくつく……いや、ふっふっふの方が、笑い方としてはいい
のか？」

やはり、最初に決めないといけないのは、見下すような笑い方だ
よな。キャラ設定が定まっていなくて、威厳なんて感じられなくなっ
ちまう。

『……義兄さま、もう封印が解ける』

『おう、分かった』

そんな折に、レイの作業が終わったらしい。俺はとりあえず冒頭
のセリフだけ考えて、後は成り行きに任せることにした。

「さって……四百年後の世界で、俺の名を轟かせてやろうか！！」

格好良く俺がそう口にした瞬間、真っ暗の世界が一変し、光に包

まれた。不思議と違和感がなく、俺の意識はどこかに浮上していく。
「ふっはっはっは、俺はふっか、ぶごあああああああ
！！」

封印が完全に解けて、俺がセリフを発している途中で、俺の体は爆発してた。周りには更に札がいつぱい・・・なんでやねん！？

S I D E 竜二

オレたち花開院の陰陽師の中でも手練れの部類に属する連中は、花開院本家の一角にある、沖兎猫・兎衣兔の封印に集結している。皆が一樣に緊張した空気を醸し出していて、不信な物音がすれば一瞬でその近辺が札に包まれる。そんな嚴重な警戒体制をしいていた。

「・・・まったく、少しは落ち着けてんだ。勝つ気があんのかね？ これじゃ、奴らが復活する前に倒れるぜ」

「言葉を選べ竜二。皆、死を覚悟して臨んでいるんだ。そういうのは不謹慎極まりない」

「へいへい。お前は真面目だねえ、秋房」

「・・・お前が不真面目過ぎるんだ」

いいや、違うね。オレからすれば、お前は真面目過ぎる。いつか、その真面目さに足を掬われるなんてことがなければいいがな。

「つつ！ 封印が解けるぞ！！」

封印の状態を確認していた陰陽師が、声を張って警告する。全ての者が、それぞれの式紙や武器を構えて、その復活する一瞬を狙う。

今回の作戦は簡単だ。復活したての奴らを、万全な状態にする前に叩く。沖児猫は不死って話もあるから、滅せなかった場合はまた封印をし直す。

封印にもやりようがあつて、沖児猫の特性を考えて再封印する。不確定要素もあるが、おそらくは上手く封印できないこともないだろう。

「くるぞっ！！」

誰かがそう叫ぶが、皆がそれを分かっている。声とほぼ同時くらいに、至るところから札が投げつけられた。オレは封印の様子を、じっと眺める。

札が届く数瞬間に、一人の男と一人の少女が姿を現した。見た目からすれば普通の人間のようだが、内に秘めている力はいかほどなのか……。

「ふっはっはっは、俺はふっか、ぶごあああああああああ！！」

男の方が、爆の札を浴びる前に、なにやら言おうとしたようだが・
・爆発によって、それは悲鳴に変わった。そして更に、追い討ち
の札が男を襲う。

「ちよ、待つ、レイ、俺を防御に使っんじゃ、ぬえぐえおいおうお
うおおおおお!!!」

男は逃げようとしたのだろうが、レイと呼ばれた少女に体を掴ま
れ、札から身を守る盾にされている。・・・なんなんだ、これは。

おそらくは男の方が沖児猫で、少女の方が児衣兔なのだろうが・
・逃げようとしたり、簡単にやられて悲鳴をあげたり、予想と全く
違っただが。

「な、なあ、竜二。あれは一体、なんなんだ・・・？」

「・・・オレが知るか。とにかく、状況を把握して・・・」

「おい、てめえら!!!」

オレが秋房に意見を言おうとする間に、沖児猫らしき男の怒鳴り
声がある。ちっ、あれだけやられてピンピンしてるってことは、や
はり強いのか・・・？

「復活したとか変身中に攻撃しちゃいけないってのは、侵しては
ならない暗黙の了解だろうが!! ふざけたことしてんじゃねえ!
!」

・・・分かった。こいつ、絶対阿呆だ。

四百年後の世界・・・いきなりかつ！（後書き）

昨日、ぬら孫の14巻と小説を買いに行ったら、何故か小説しか無かった・・・くそっ、地方だからか？地方だからなのか！？・・・失礼。

で、小説を読んで・・・ぬらりひよんの話の子育て雪麗に癒やされました。沖児猫がいなくなった後の彼女たち・・・みたいな感じでやってみようかな・・・

そして最後に、表紙裏を覗いてみると・・・両手size、結成・・・だど？とか思ってたなら、雪麗は片手サイズ・・・だど？
・・・よし、ナイス！ オレは両手サイズより片手サイズ派です。
・・・でも、羽衣さんは両手サイズ・・・

今年の更新は、これで終わりですかね。皆さん、よいお年を！

この世ってさ、不条理だよね（前書き）

あけましておめでとございますー！！

今年は受験さえ終わってしまえば、自由な時間が増える・・・はず！

！
なので、今年も昨年に負けないようガンガン更新頑張りますっ！

統率が微妙で避けることができる。・・・俺って、避けることだけはちよっと上手くなったな。

「・・・貴様は、沖兎猫という妖で間違いないのか？」

例の頭がおかしな（コーンヘッド？）ジジイが、攻撃の手を休めずに聞いてくる。態度からみるに、こいつが一番偉い奴だろうか。

「ああ、そうだけど!？」

「攻撃を続けるー!!」

「なんでやねん!？」

えー？ マジでこの仕打ちは何なのよ？ 避け続けてるけどさ、幾らかは当たってるわけだよ。秀元のそれよりは楽だけど、それでも痛いわけね、分かる？

真面目に考えて、この状況は一体……。俺の名前を聞いてきたってことは、他人と間違ってるわけじゃないし……。ん？ まさか・・・俺のことを強者だと思ってる？

「・・・ちよい、その目つき悪いの」

「・・・オレのことか？」

俺は自分の考えが正しいかを知るために、攻撃に参加してなくて冷静そうなガキに尋ねる。横の子でもよかったがな・・・可愛いから後で名前を聞こう。

「なんで俺って、こんなに攻撃受けてんの？ 俺ってそこまで警戒する必要あると思われてる？」

「・・・沖兎猫という妖は、花開院の書物によれば・・・そうなる

な

「竜二！ 何をしているのだ！ お前も早く攻撃しろ！！」

「……へいへい」

ガキ（竜二って名前か）は言葉を選びながら俺の質問に答えるが、他の陰陽師に呼ばれて、仏頂面でやる気ない感じで式神を飛ばしてくる。

花開院の書物……ってことは、秀元かハゲ兄がなんか残したってことになるな。今の状況や竜二の言葉を考えるに……秀元の方だと思っが。

そしてその内容は、俺がめちゃうくちや強いつて内容なんだろう。普段の俺なら普通に喜ぶところだが……今のこの状況で喜べるかあ！！！！

「……ちょっと待て、兎衣鬼の方はどうした？」

ある時、俺への攻撃を続けていた陰陽師の一人が、ふと気づいたようにそう言った。確かに、レイは何してるんだ？……ていうかお前ら、ちゃんと仕事しろよ。

で、レイの姿を搜してみると……いた。……うん、いたよ？でもさ、こいつはなんで……普通に布団出して寝てるわけ？この状況でよく寝れるな？ 逆に尊敬するよ。

「こ、これは……二十七代目……？」

「む、むう……」

そんなレイを見て、コーンヘッドジジイと数名が話し合っている。

いくら敵の妖とはいえ、寝てる少女を攻撃するのに抵抗があるということだろう。

「いくら少女の姿とはいえ、あの沖見猫の妹。躊躇うことは」

コーンヘッドジジイのゴーサインが出る数瞬前に、そのジジイのすぐ横を光線が走る。まあ、それを放ったのは当然、レイなわけだが。

「な、なあ……！」

「……勘違いをしているようだから言うしておく」

「……!?!?!」

「妹ではなく、義妹。義が大事」

「は、ぬ!?」

レイは布団から跳ね起きて、そのよく分からない持論を展開する。……いや、ドヤ顔されても。陰陽師だって混乱してるだろうが。

それにしても、この状況は利用出来るかもしれない。今の砲撃や言動で、陰陽師たちの攻撃は止んでいる。だから、今の内に対策を

「走れ、げんげん 言言」

「なっ！」

対策を練ろうとする前に、あの竜二とかいうガキが、レイに向かって水状の式神をけしかけた。その様子は、先ほどとは違って真剣そのもの。

おそらく先ほどまでは、俺の様子からさほど強くないというのを

感じとっていたのだろう。しかし、レイの力の一端を見て、その余裕を無くした。

「……だけど、ダメだな」

「ガハツ……！」

「……その程度で、わたしは倒せない」

竜二が放った水の式神は、レイに軽く弾き飛ばされる。そしてレイはそのまま、術者である竜二に接近し、力強い一発をボディーにぶち込んだ。

「竜二……！」

先ほど竜二の隣にいた可愛い子が、焦ったように竜二の名を呼ぶ。まあ、当然か。奴の命は既に、レイに握られてるも同然なのだから。

「……殺せよ」

その竜二は、半ば諦めたようにそう言った。陰陽師として、仲間足を引つ張らないように……ってことなんだろう。俺はさぶる気に食わないが。

「……わたしに、あなたを殺す理由は一つもない」

「なんだと……？」

だがレイは、殺す理由はないと、倒れ込んだ竜二の上から離れる。
……ちよつと待ってくれ。なんかスゲー格好いいんですけど！？
……その格好良さ少し分けてくれ。

「……それと、あなたは筋はいいけど、力はない。だから、強者

相手にはかなわない」

「な・・・」

「それでも勝利を得ようとするなら、勝てるように工夫しろ・・・以上」

最後にそう言い残し、レイは布団の中に再び戻っていく。え？

どこのライバルキャラ？ 主人公に成長の切欠を与えてるんですね、わかりません。

「ちょ、ちよつと待て！」

「・・・何？」

竜二は少しポカンとしていたが、慌ててレイを呼んだ。まだ眠っていなかったレイは、不機嫌そうにそれに応える。

「お前は、一体・・・」

「ググれカス」

「・・・は？」

レイは竜二の質問を途中でバツサリ斬ると、さっさと睡眠に戻る。・・・たぶんだけどさ、お前、喋るの面倒だったらググれカスって言うてるだろ。

で、その言葉を聞いた竜二は、訳も分からないように呆けている。・・・そういやこの年代だと、まだその言葉なかったな。そりゃ、当然の反応だよ。

「・・・で、この空気をどうしろと？」

なんか今のくだりのせいで、陰陽師の奴らの時間が止まってんだ

よね。表現するならみんなこんな感じ（。）。俺への攻撃も止まってるし……

「いや、マジでどうすりゃいいのよ」

「竜二兄ちゃん……」

「ん？」

俺が途方にくれてると、なにやら女の子の声が出た。そちらを見てみると、陰陽服を身に包んだ女の子が、竜二に近寄っている。

「な、ゆら！ お前、こつち来んなって言ったろうが！！」

「竜二兄ちゃん、腹へった」

「ぬ、ぐ、てめえ……」

女の子（竜二の妹のゆら？）の腹へった発言に、竜二の顔が微妙な表情に変わる。まあ、そりゃな……妹が戦場に来たと思ったら、腹へったって……。

それにしても、更に力オスな空間になったな……陰陽師たちもまだ戻って来ないし。正直、俺の手にはおえない大惨事だよ。衛生兵を呼べー！！……ごめん。

「……ん？」

「なあ、あんた……誰？」

「おい、ゆら！！」

俺の着物を引っ張る感触がしたので振り返ってみると、そこには例のゆらがいた。竜二はそれを見て焦っているが、レイにやられたダメージで立ち上がれていない。

「俺か？・・・ふつ、俺のことは、ゼロと呼ぶがいい・・・」

聞かれたら答えないわけにもいかないの、格好良く決めて名乗ってやる。ミヤと初めて逢った時も、こう名乗ったな・・・懐かしい。

「ゼロ・・・ゼロ兄ちゃんか・・・よろしくなあ」

「ん？ おお、よろしく」

自分から名乗っとしてなんだが・・・この子、大丈夫か？ 俺が危険な妖怪だったら、お前死んでるぞ？・・・ま、俺には関係ないけどね。

「ちつ、おい！ ゆら、戻ってこい！」

「竜二兄ちゃん？ 分かったわ」

竜二がゆらを必死の形相で呼んで、ゆらはとてとてと竜二の下に歩いていく。・・・この子、頭の中がお花畑だったりする感じ？

「こんの・・・アホが！」

「あいたっ」

ゆらが竜二の下に辿り着くと、竜二はその頭をぶん殴った。加減はしたようだが・・・痛いぞ、あの感じだと。ま、気持ちは分からないでもないが。

「・・・なあ、竜二って言ったか？」

「・・・なんだ？」

それからちよっとして俺が竜二を呼ぶと、めちゃくちゃ機嫌悪そ

うに聞き返してきた。・・・凄い顔だな、おい。もしかしなくても、お前ススコンだろう。

「この状況じゃ、何にも出来ないからさ・・・一時休戦しないか？」
「・・・・・・・・ちっ、仕方ないか」

周りを見渡せば、陰陽師連中はまだ呆けていて、レイはよだれを垂らしながら夢の中。ゆらはなんか鳥を眺めていて、まともな状態は俺と竜二だけ。

こんな状況じゃ、戦うことなんか絶対に出来ないだろう。最悪の場合は人質とかしてもいいし、俺としてはなかなかいい状況だけだな。

俺は別に戦う理由なんて無いわけだし、ここで矛を納めれるなら重畳だ。たぶん、向こうとしても、レイという存在を考えれば、そうだと思うし。

「じゃ、そのコーンヘッドジジイ、起きろや!!」
「待て、私のTKGを・・・はっ!」

なんかこのジジイ、どこかの世界にトリップしてたんだが・・・
一つ言わせてもらうなら、俺もTKG(卵かけご飯)は好きだった!! 同士よ・・・!!

「・・・なあ、一時休戦ってことでいいよな？」
「む・・・妖と休戦、だと？」
「ほらさ、その辺は気にしないようにしろよ。俺も何もしないからな」

「いや、しかし・・・」

それから微妙に口論になったが、ジジイも最終的にはしぶしぶ納得して、場所を移しての話し合いと相成った。

レイの砲撃が横を掠めたことが、その選択を後押ししたのかもしれない。・・・その分、俺にも警戒が強みたいだが。

「・・・ところで、竜二。そのまだ呆けてる子、なんて名前？」

とりあえず俺は、さっきまで竜二の横にいた可愛い子の名前を聞いてとく。直接聞きたいんだけどな、まだ戻ってきそうにないし。

「・・・秋房のことか？ こいつは男だぞ」

「なん・・・だと・・・？」

「この可愛い子が、俺と同じ男だと？・・・この世ってさ、不条理だよな。」

DSなシスコ、花開院りゅ（ry）前書き

タイトルでは竜二がメインっぽいですが、別にそんなことはありません。いつものごとく、いいタイトルが思いつかなかっただけです。

ドSなシスコン、花開院りゅ（ry

「・・・ふー、いい湯だねえ・・・」

俺は今、花開院家の風呂を拝借している。四百年間動いてなかったし、体が伸びてく感じとか凄い気持ちいい。いや、やっぱり風呂はいいもんだ。

たぶん今ごろ、女湯でレイも同じく湯に浸かってる筈だ。ゆらも一緒に入りに行ったから、仲良くなっていたりは・・・しないか。レイが仲良くなるうとする筈がない。

「ま、関係ないか・・・」

あいつらは仲良くなっても、あまりいいことないからな。ゆらは陰陽師でレイは妖怪・・・将来的には、敵対するかもしれないんだから。

ところで・・・みんな、気になってるよね？俺がこんな風に、普通に風呂とか入ってるの。花開院家は敵なはずだろ？・・・とか。それはね・・・

「おい、早く出る。もう疲れや汚れは十分取れただろう」

この声は、一緒に風呂に入ってた竜二。まあ、一緒に入った理由としては、俺の監視って理由なんだが。

「はいはい、分かりました・・・」

「さっさと本家の廊下、全部綺麗にしろ」

「ぐ、ぬうう・・・分かってるよ」

・・・今のやり取りで、大体分かって頂けたらどうか。そう、俺は花開院家との取り引きの結果として、この屋敷の雑用を命じられたんだ。

あの戦闘から少しして、俺と陰陽師のトップが会談した。その内容は細かく言わないが・・・まあ、なんというか、ギスギスした嫌な時間だったな。

その会談の途中で、俺の雑魚っぷりも露呈してしまい、俺は再び封印されかけたり・・・まあ、レイの力を考えて、それは拙いという意見に押し切られたが。

で、俺たちの処遇を決めることになったわけだが・・・どうにも決まらない。まあ、封印も出来ないし、かといってほっぽりだす訳にもいかないし、当然だが。

そんな折に、竜二がこう発言したんだ　こいつを、この屋敷で飼ってしまえばいいだろう　と。たぶん、式神的な意味だろうけど・・・俺はペットかつ!!

まあ、つまり、妖を外に出すわけにはいかないが、倒したり封印も出来ない。その代わり、花開院家の手伝いをする事で、俺のことは目を瞑ろうってわけだ。

これはまあ、向こうにとっちゃ大して不利益はない。レイは基本的に何もしないし、俺は言わずもがな。精々、妖を見逃すという汚名ぐらいなものだろう。

それで俺の方はと言うと・・・まあ、悪くはない話なんだよ。俺らは復活したばかりで右も左も分からないし、拠点があるってのはいいことだ。

というか、今下手に外に出たりしたら、俺どうすりゃいいのってなるしな。道はさっぱりだし、金は持ってないし・・・奴良組まで絶対に辿り着けない。

面倒な雑用とか、竜二の監視とかは鬱陶しいし嫌だが、我慢出来ないものじゃない。だったら、あいつらの提案に乗ってやるのも、まあいいかって思える。

「・・・いや、やっぱり辞めとくべきだった」

風呂から出て花開院家の廊下を眺めた俺は、自分の先ほどの決断を後悔した。だってさ、めちゃくちゃ広いんだもん。ここを一人で掃除しろと？・・・無理でしょ。

「ぐぐぐだ言うな、早く掃除しろよ。埃一つ残すんじゃねえぞ」

竜二は凄くムカつく顔で笑いながら、俺に雑巾を渡してくる。・・・お前、シスコンな上にサディスト？　ろくな大人になんねえぞ、マジで。

「・・・っていうかさ、この屋敷なら手伝いぐらい雇ってんだろ？別に俺一人じゃなくても・・・」

「生憎、妖怪と一緒にさせるわけにはいかないんでね。例の義妹に手伝わせればいいだろう」

「・・・お前、分かってて言ってるな」

レイがこんな雑用をする？・・・はっ、天が降ってくる方がよっぽど有り得る話だよ。あいつが人の命令に従うなんて、奇跡とかいうレベルじゃねえ。

ちなみにそのレイは、現在花開院家にある漫画を読破中だ。ここにパソコンはないし、インターネットが大して進歩してないからな。暫くは我慢してもらおう。

「ま、分かつちやいるが・・・それなら、お前一人で頑張れよ」

・・・ああ、ウザイ。マジでもう嫌だ。レイほどじゃないが、俺もこういう面倒なこと嫌いなわけよ。・・・サボタージュしていいですか？

っていうかしよう、うん決定。さっき竜二は、もうすぐどっかに行くとか言ってたからな。簡単にサボることが出来るだろう。よし、さすが俺だぜ。

「・・・あ、そうだ。一つ言い忘れてた」

「ん？　なんだ、ガボオアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

どこかに行こうとした竜二がそう言って、俺が聞き返そうとする
と、俺の口から大量の水が溢れてきた。・・・は？・・・なんじゃこりゃあああああ！！！！

「ちょ、ガふ、なに、が・・・」

「今のは俺の式神、言言だ。体中の体液を自由に暴れさせることが出来る」

お前、俺が一体何をした・・・。今まで以上に悪い顔しやがって・

・・本当に性格悪いな、てめえ。うん、絶対にろくな大人にならない。

「そいつがお前をずっと見張ってる。・・・サボろうなんて、考えんなよ？」

「てめえ、それだけのために・・・」

「ペットの躡つてのはな、体で分らせるものなんだよ」

誰がペットだ！・・・っていかさ、マジでお前DSなのな。

人をこんな目に遭わせといて、そんな活き活きとした顔しやがって・・・。

俺をひとしきりニヤニヤと見た後、竜二はじゃあなと言って歩いていった。まだ立ち上がることが出来ない俺は、引き留めることすら出来ない。

「ぐうう・・・マジふざけんなし」

暫く悶えていたが、漸く落ち着いて俺はボヤク。無駄にダメージ食らった上に、サボれないだど・・・？ もう許せねえ。こうなったら・・・

「こうなったら、とことんまで綺麗にしてやんよ！！」

俺は右手に雑巾、左手に洗剤を持って、一人で高らかに宣言する。前世において畏れられた、俺の神業掃除テクを見せてやるぜ！！！！

「・・・ゼロ兄ちゃん、何しとるん？」

「ゆらか・・・何、ちよつとした敵に敗れただけさ」

「・・・敵？」

廊下を通りがかったゆらは、俺が言う敵の姿がないことに首を傾げる。・・・まあ、分かるわけないよな。俺が言ってる敵ってのは、ただの掃除だつてことに。

だいたい、気合い入れただけで、一人でこの廊下を掃除出来るわけないんだよ。畏れられたとか言っちゃったけど・・・ごめん、それ嘘だから。

「・・・なんでもないよ、気にしたら負けだから」

「ふうーん・・・？ あ、ゼロ兄ちゃん、灰吾さんが手伝って欲しいつて言つとつたからついて来てや」

「・・・灰吾さん？」

俺の知らない名前だが、たぶん花開院の陰陽師だろう。なのに俺に手伝って欲しいつて・・・どういうことだ？

妖怪とか人間とか大して考えないよつぽどの変人か・・・それとも、妖怪に頼るしかないほど困っているか・・・

「うん、変人の方だったな」

「・・・出会い頭に失礼だな」

ゆらに連れられてやって来た汚い部屋にいたのは、七分げの髪型に眼鏡のオッサン。周りに溢れている本とか変な薬草やらを見るに……やっぱり変人だ。

「で、俺に何かして欲しいわけ？」

「ああ、実はだな……この本に誤字や脱字がないかを確認して欲しいんだ」

「……人はなぜ筋肉にひかれるのか？」

「ああ、名著だぞ」

つまり、なんだ。自分が書いたこの本を出版したいから、変なところを探して欲しいと？……ああ、納得だわ。他の奴らに断られたから、俺に頼んだわけね。

「……ところでさ、教頭」

「教頭というのは、オレのことか？」

「うん。見た目的にな」

「……そうか」

こんなことしてられないし、このオッサンの気を逸らそうという作戦だ。……まあ、教頭っばいってのは事実だしな。校長にはなれそうにない感じとか。

「さっきから気になってたんだけど……これは何の実験してんだ？」

俺は周りの色々な物を見渡してそう問い、ゆらもうつんと頷く。ここに有る物はどう見ても実験用品であり、普通の実験には使われない物ばかりである。

「これは、色々だな・・・陽の力を体に取り入れる薬とか・・・まだ未完成だが」

「んー、いまいち分からねえけど・・・成功した薬とかないの？」

これだけ色々薬が有ったら、たぶん成功した実験ぐらい幾つかあるだろう。その中に、面白い効果の薬が有ったらいいなあ・・・と。

「む・・・偶然出来た薬なら幾つか有るが・・・」

「例えば？」

「例えば、そうだな・・・性別を変えてしまう薬とか」

「戴けるだけいたどころ」

「早いな!？」

え？ だつて性別を変える薬なんて、そんな夢の薬絶対に要るに決まってるだろう。正直、秋房とかいう子に使わせるためだけに生まれた薬だろ。

「・・・でも、効果が知りたいな」

「オレを疑ってるのか？」

「いや、試してみないとさ・・・」

「効力実験をしたから大丈夫だぞ？」

・・・その実験は誰がやったのかは、絶対に聞いちゃいけないんだろうな。その状態を想像するだけで・・・やべ、吐きそうになってきた。

「ゆら、悪いけど秋房つて子をここに連れてきてくれないか？」

「秋房義兄ちゃん？ 分かったわ」

ゆらは部屋の中の物を物色してたが、俺の頼みを聞いてスタスタ

と部屋を出て行く。いい子だなあ・・・レイもあのくらい素直だったら、凄い可愛いのかな。

「ゼロ兄ちゃん、秋房義兄ちゃん連れてきたでえー」

「ちょ、ゆら・・・」

数分ほどして、ゆらが秋房を引つ張つて帰ってきた。秋房が困惑してるところを見るに・・・たぶん、何も言わずに無理やり連れてきたんだろ。子どもは強い。

「まったく・・・で、何の用だい？」

「慌てるなって・・・先ずはこのお茶でも飲んで、落ち着いて話そう」

そう言って俺が差し出すのは、例の薬入りのお茶。普通に飲ませようとしても絶対に無理だろうからな、ちょっとした策・・・ってとこだ。

「ん、丁度喉が乾いていたところだ。ありがたくいただく」

「そうか、そりゃ良かった」

秋房って子は人を信じやすい口なのだろうか、躊躇いなくお茶を飲んだ。そしてそれを飲み干して数分して、劇的な変化が現れた。

「っ!？ 体が・・・一体、何が・・・」

急に苦しみだした秋房の体から煙が出て、何らかの現象を起こしているのが知認出来る。そして更に数分経つと、秋房の姿が・・・

「お、おお・・・」

「ふっ、言っただらう?」

「秋房義兄ちゃんか、秋房義姉ちゃんになった・・・」

「え、ええ!？」

先ほどよりも若干甲高くなった声。幾らか丸くなった体つき。そして何より、控えめに膨らんだ胸・・・間違いない。この瞬間、花開院秋房は女になったのだ!!

その秋房ちゃんは恐る恐る胸に手を当て、顔を青ざめる。そしてその後下半身に手を持って行って・・・これ以上青くならないと思つた顔が、更に蒼白になった。

「う、嘘だ・・・そんな、バカな・・・私が、女?・・・うわああああああん!!」

ちよつとの間呆然としていた秋房ちゃんだったが、いきなり悲鳴を上げてどこかへ走り去って行った。・・・ヤバいな、普通のキヤワイイ女の子にしか見えねえ。

「・・・なあ、教頭」

「・・・なんだ?」

「あんた・・・天才だ・・・」

「ふっ、そうだらう」

俺、あんたみたいな天才に出会ったことねえよ。マジで天才だ・・・この教頭みたいな天才がいっぱいいたら、絶対に素晴らしい世界になるだらう・・・。

「なあ、もつとないのか?」

「そうだな、例えば・・・」

「ほお・・・面白い話をしているな」

・・・ん？ なんだ？ 今、この場にいる筈のないシスコンの声がしたよう、なああああああああああ！？

「ガフエアアアアアアアアアア！！！」

「・・・まったく、掃除をサボって何をしてるかと思っただら・・・まあ、あいつを弄るネタが出来たのはラッキーだな」

俺の後ろにいつの間にかいたのは、何を隠そうシスコンの竜二さん。例の言言が俺の中の体液を暴れまくらせて・・・ちょっと、マジ止めてくれ！！！！

「あ、竜二兄ちゃんや」

「・・・ゆら、後でお仕置きな」

「・・・なんで？」

悶え苦しんでる俺をよそに、シスコンによる調教のお知らせ。ゆらの反応から察するに・・・いつもお仕置きとかしてんの？ 歪んだ愛だな、竜二。

「・・・お前、何か余計なことを考えてないか？」

「いえ、滅相ありません！！！」

まだ痛みが残りながらも、俺は急いで敬礼をする。今のこのシスコンは、絶対に機嫌を損ねちゃならぬ、iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！

「俺、ガふ、何も・・・」

「なんとなく、気に入らなかつたからな」

なんとなくでこんな仕打ちするんじゃないか……なんてことは言えないので、黙っておくことにする。言ったら絶対にまたやってくるもん、こいつ。

「で、てめえ……何サボってやがる」
「……あ」

そっぴや俺、まだ廊下の掃除終わらせてなかった……途中でゆらが来たから、すっかり忘れてたぜ。……ん？ でも、サボった一言言がって……

「まったく、あれだけダメージ食らったら、ハツタリでもちゃんとやるかと思っただのに……」

「てめ、あれハツタリだったのかよ!!」
「騙される方が悪い。だいたい、式神をそんなことに長時間使えるか」

くそ、確かに言われてみればそうだ……式神を使うには、相当な精神力がいるんだ。……なんだよ、普通にサボってたのかよ。

「てめえが一回サボったせいで、もう俺も監視をサボれなくなった」

あ、お前もサボってたのね。まあ、俺がもう一度サボったりしたら、監視役の竜二が怒られるんだろうな。……俺としては、いい気味なんだが。

「というわけで、てめえもお仕置きだ。……二度と、サボろうと思えないようにしてやる」

「へ・・・嫌だあああああああ！！！」

・・・それから先のことは、言いたくありません。一つ言えば・・・サボるなんて、絶対にしちやいけないってことだね。絶対駄目、サボタージユ。

DSなシスコン、花開院りゅ（ry）（後書き）

ドーピング konsumesup 灰吾さんが、まさかの天才設定に・・・
自分でもまったくの予想外。秋房ちゃんごめんよ、次話ではちゃんと戻ってるから。

たぶん次話で花開院家居候編は終了して、奴良組の方に行くと思います。この調子でいけば、たぶん今週中には再会出来るのかな？

別れは異臭と共に・・・（前書き）

思ったより時間がかかりました・・・一回気に食わなくて削除したり、なかなか展開が思い付かなかつたり・・・まあ、時間をかけたからと言って、面白いわけではないですが。

別れは異臭と共に・・・

俺とレイが花開院家に居候を始めてから、既に二ヶ月が経過した。なかなか色々なことが有ったけど、過ぎてみればあっという間である。

あの秋房ちゃん事件の後の竜二のお仕置きもあって、俺は真面目にお手伝いをしてきた。そのかいあってか、最近の花開院の陰陽師たちとも打ち解けている。

「止まれ、沖兎猫ー!!!」

「止まれるわけねえだろうが!!!」

・・・うん、打ち解けてきたんだよ？ 例の教頭とか、豪羅とかいう黒人っぽいオッサンとか。・・・あれ、俺が仲いいのって、変なのばっか？

まあ、そんな悲しい事実は置いて、現実と向き合おう。今の現状は・・・どす黒いオーラを出してる秋房が、妖刀を振り回して俺を追いかけてきてるな。

あの事件の後から秋房は、遭う度にこうやって俺を痛めつけようとしてくる。二ヶ月が経っても怒りが収まらないとは・・・さすがにこれは予想外だった。

「マジでゴメンって!!! いい加減、許してくれたりなんかはしないのかな!？」

「黙れ!!! 貴様のせいで私は・・・!」

秋房の拷問を見事耐えきった俺は、花開院家にほど近い田舎道に血まみれで倒れている。死なないとは言っても、今は秋房と同じ家に居れないもん。

そんな俺を嗅ぎ付けてきたのか、ゆらが近くに寄ってきて、俺を覗き込んでいる。こいつは四歳なはずだが・・・こんなグロい状態見て大丈夫か？

「ゼロ兄ちゃん・・・大丈夫？ 何が有ったん？」

「ゆら・・・お前は、間違えるなよ？」

「・・・何を？」

ゆらの疑問は至極もつともである・・・というより、疑問を持たない奴なんて絶対いないだろう。これだけで何のことが分かる奴とか、どこの超能力者だよ。

「それにしても・・・いつも思うんやけど、ゼロ兄ちゃんって凄い丈夫やな」

「・・・まあ、な」

俺はここ二ヶ月、竜二やら秋房やらに苛められまくって、ゆらも

それを見る。だからこそ、そう考えたのだろう。

ゆらは俺が妖怪つてことに気づいてない・・・らしい。この歳でそれを判断しろつてのも、無理な話なのかもしれないが。

それなら、別にわざわざ教える必要はない。教えることでいいことなんてないし、ただ関係が壊れてしまっただけだ。

「そういう体質なんだよ。ゆらも修行すれば、これぐらいの丈夫さをゲット出来る」

「え、ほんまなん？」

本当なわけないだろ。いや、俺みたいな生活をし続けたらなるかもしれないが・・・生憎、そんなことは不可能だからな。ていうか、可能でも止めとくべきだ。

「ゆらは、本当に純粹だねえ」

「ん・・・なんでそうなるん？」

「大人になれば分かるよ、きつと」

大人になれば分かるって、子どもの頃はよく言われたよな・・・でも、大人になっても分からないものってあるよね。俺のお年玉は、一体どこに消えてたんだらうか。

「あ、そうや、ゼロ兄ちゃん」

「ん？」

俺がそんなどうでもいい思考をしている中で、ゆらが思い出したように俺を呼んだ。それでそちらに向いてみると、何やらメジャーを持っている。

「指のサイズ、測らせてや」

唐突過ぎやしないか？ いや、メジャーを用意してたってことは、最初からそれを目的にしてたんだろうな。

「……………なんで？」

「……………駄目なん？」

「……………いや、いいけども」

指のサイズを測って、一体どうしようというのだろうか。……なになかな、何もあるはずがないっていうのに、いつもの俺の不幸のせいで、素直に納得できない。

俺の苦悩なんて気づかないゆらは、嬉々として俺の指の太さを測る。……別に構わないけどさ、これにどんな意味があるかぐらい、教えてくれないかな。

それを測ることに大した時間はかからず、すぐに俺は解放される。ゆらは紙にその結果を書くと、満足そうな笑顔を見せた。……まあ、別に構わないか。

「ところで……………気になってたんだけどさ、今日竜二はどうしたんだ？」

間が空いてちょうど良かったので、俺は朝から気になってたことを問う。いつもは俺の監視に着いている筈なんだが、今日は一度も顔を見ていない。

「竜二兄ちゃんなら、おじいちゃんに呼ばれて、朝からずっと話し合ってるよ」

「へ……………」

朝からずっと話し合いつて、それだけ重要なことを話し合ってるのか？ 昨日は特に何もなかったように思っけど・・・まあ、気にしてもしょうがないな。

「だったら今日は、ずっとゆらと遊んでやるっか」

「え・・・ほんまに？」

「ああ。シスコンの監視がないなら、思う存分遊べるぞ」
「わあ・・・」

俺がそう言つてやると、ゆらは花が咲いたように笑みを浮かべた。よっぽど嬉しいのだろうか・・・それなら、俺としても嬉しいけどな。

「竜二兄ちゃんがおらんかったら、ゼロ兄ちゃんといっぱい遊べるんかあ・・・」

「おいおい、その言い方だと、竜二がいない方がいいみたいに見えるぞ」

そんなこと竜二に聞かれたら、お仕置き確定だろうに。まあ、いないことが分かってるから、悪口を言つてやるうってことかもしれないけど。

「ええんや、だつてゼロ兄ちゃんの方、わぶうっつうっつうっ！」

「ゆらあああああ!？」

ゆらは言葉の途中で体勢を崩し、そのまま近くにあった肥溜めにドボン。・・・こんなムゴいことをするのは勿論・・・

「はっ、アホが」

「竜二……」

俺の後ろで鼻を鳴らしている、超絶シスコン竜二だろう。さっきのゆらの言葉か、俺と話してるのが気に食わなかったか……どっちみちシスコンだな。

「シスコンなのは分かるが、妹にやっていいことじゃないだろう」「誰がシスコンだ……アホがアホなことぬかそうとしてたからな、ちよっとしたお仕置きだ」

ダメだこのシスコン、早くなんとかしないと……。将来ゆらが結婚する時、結婚式を台無しにしそうだな、こいつ……。マジでゆらの将来が不安だぞ。

「妹は、大事にしなくちゃいけないんだぜ？」

「……はっ、馬鹿馬鹿しい」

「レイみたいになってもいいのか？」

「……ちっ」

俺の言葉に、レイみたいになったゆらを想像したのか、顔をしかめる竜二。まあ、どんなに雑に扱ったとしても、レイみたいな性格になるなんて有り得ないがな。

……あれ、なんで俺はお仕置きされてないんだ？ さっきみたいにシスコンなんて口走ったら、いつも言言の餌食になってたのに……。

「……沖見猫、率直に言う。花開院家から出て行け」

「……は？」

いきなり言われた竜二の言葉に、俺は気の抜けた返事しか出来ない。・・・え、どういうこと？

「今日の花開院上層部の話し合いの結果、そうするべきだという結論に達した」

「ちょ、ちよつと待てよ！ 俺の意思の確認は！？」

「何を言ってるやがる。お前は仲間の所に帰りたいんだろっ？」

・・・あ。やべ、すっかり忘れてた・・・俺、何普通に馴染んでるんだよ。

「金や必要な物なら此方から出す・・・だからさっさと出て行け」

「・・・それはありがたいが、なんで俺をそこまで出て行かせたいんだ？」

いままで何も言っておかなかったのに今更だし、出て行くための金も払うと言っている。これは、どういうことだ？

「・・・お前、最近うちの奴らと親しいだろう。つまり、そういうことだ」

「・・・ああ、なるほど」

俺は最近、教頭とか黒人とかと仲がいいし、曲解すれば秋房とも関わっている。それは、花開院の陰陽師にとって良くない影響に違いない。

具体的に言えば、妖怪と親しくなったことで、妖怪を滅する意思が弱まるかもしれない。意識はしなくても、無意識下でそれは起るだろう。

「だから、明日の朝一番に出て行きな」
「急だな・・・まあ、分かった」

俺はレイと一緒に居候させてもらってる立場だし、文句は言えない。敵対せずに見逃してくれるんだから、喜んで出て行くべきだろう。

「・・・ゼロ兄ちゃん、いなくなるん？」
「ゆら・・・」

肥溜めから這い上がってきたゆらが、悲しそうな声を出す。・・・いや、ここは悲しい別れになるのかもしれないけど・・・体を洗って欲しいな、うん。

「ごめんな、そういうことだ。・・・もう、遊べないな」
「・・・うん、分かった」

そのやり取りを最後に、俺たちの会話は終わった。何を話していか分からなかったし、俺は出て行く準備をしなくちゃいけない。

俺はその場を立ち去ってから、ゆらに会うことはなかった。・・・別れが肥溜めのふんまみれって何か嫌だなあ。いや、めっちゃくちゃ嫌だけど。

「ほらよ、これだけありゃ足りるだろ」

「ん、サンキュ」

時は進み、俺とレイが出て行く時間となった。竜二が渡してきた財布には、東京に行くには十分の金が入っている。

今日の見送りには、竜二しかいない・・・見送りというかどうかは知らないが。せつかく仲良くなったというのに、まったく薄情な奴らだな。

俺が出て行くということを知った奴らの反応は様々だった。教頭は色々な薬をくれて、黒人は喜んで、秋房はもう一度追いかけてきて・・・あれ、酷くね。

「まあいつか、じゃ、そろそろ行くわ」

「ああ。さっさと行けよ」

竜二にそう一言言って、俺は駅がある方角に向かって歩き出そうとする。定位置である俺の背中にいるレイは、ぶら下がったまま夢の中。まったく、器用だよな。

「待って、ゼロ兄ちゃん」

「ん？ ゆら？」

足を踏み出そうとした時、俺を止めるゆらの声があった。振り返ると、そのゆらがある・・・何故か、昨日の肥溜めにはまった時の服のまま。

「・・・ゆら、何故着替えてない？ ついでに言えば、風呂も入ってないだろう」

それを見た竜二は、鼻をつまんで苦言を呈す。まあ、着替えてないのに風呂に入ってるわけもないが・・・それにしても、匂いが凄いきつい。

「竜二兄ちゃんは、ちょっと黙つといて・・・ゼロ兄ちゃん、これ」
「ん、これは・・・」

ゆらが渡してきたのは、木で作られた不格好な指輪。たぶん手作りなのだろうけど・・・ああ、それである時、指のサイズを測ってきたのか。

「ほんまは、誕生日ってことで贈ろうと思つとつたんやけど・・・」

俺の誕生日 前世のだが は、3月5日。で、もうすぐその誕生日だった。この前ゆらにも教えてやったから、誕生日プレゼントにしようと思つたのだろう。

でも、今日俺が出て行ってくつて知つたから、着替えたり風呂に入ったりする時間も惜しんで、一気に作り上げたのだろう。なんといいか・・・凄いな。

「それ・・・魔除けのおまじない彫つとるから、ちゃんと身につけていてな」

なるほど、言われてみれば、それらしいものが刻まれている・・・俺は妖怪なんだが、魔除けて効果があるんだろうか・・・気にしないようにしよう。

「ありがとな、大事にする」
「ん……」

俺が礼を言つと、ゆらは照れくさそうに目を細める。こつこつ反応が出来るつてのは、純粋な証拠だよな。レイには絶対無理な反応だね。

「ふん、下手くそだな」

遠巻きにそれを眺めていた竜二は、皮肉気に鼻を鳴らす。……お前、自分が貰えないからつて、そんな不機嫌になるなよ。このどシスコンが。

「ほら、終わったならさつさと行けよ。こつちも暇じゃないんでね」
「……分かったよ。じゃあな、ゆらに竜二。また会えたら会おう」
「ふん……オレは会いたかないがな」
「じゃあな、ゼロ兄ちゃん」

最後にそう別れを告げて、今度こそ俺は振り返つて、花開院家を後にする。……いい別れな筈なんだがなあ……この異臭のせい
で、もの凄い台無しだよ。

別れは異臭と共に・・・（後書き）

今回、やりたかったことがあんまり出来ませんでしたね・・・豪羅さんとの触れ合いとか、竜二の嘘つき戦法誕生みたいにな・・・まあ、特に問題はありませんが。

そして、今回の感じで言えばゆらフラグのような気もするけれど、どうしたものか・・・原作の時間帯で中学生だし、ちょっと無理があるかな。

あと、今回教頭から薬を貰いましたが、何の薬か決めてなかったり。どんな面白い効果の薬にすればいいだろうか・・・アイデア求む！

四百年・・・何が有ったんだ？（前書き）

PV50万アクセス、ユニーク6万アクセス達成しましたー！！
日頃の皆さんのご愛読に感謝です！！

四百年・・・何が有ったんだ？

京都から新幹線に乗り、数時間かけて東京に到着。電車を乗り継いで、俺たちはようやく浮世絵町という町にたどり着いた。なかなか、綺麗な町並みである。

で、ここでの問題は・・・奴良組がいったいどこにあるかということだよな。だいたいの場所は分かると思うが・・・如何せん、周辺が近代化し過ぎてる。

「ま、気楽に歩いてみるか」

だいたいの方角は分かるんだし、ある程度歩けば見つかるだろう。最悪、その辺の人に聞けばいいし・・・たぶん、なんとかなるさ。・・・フラグじゃないよな？

460

「いえ、フラグでした」

ヤバいな、完全に迷った。記憶にある方向に向かって歩いたけど、さっぱり分からない。道行く人に尋ねても、無視されまくった。・・・都会だからか？

いや、そんなことはどうでもいい。問題は、どうやって奴良組にたどり着くかだ。早いとこ見つけないと、日が沈んで、最悪野宿とかななる恐れもある。

「そうだったら・・・」

そうなった場合を想定してみる。・・・まず、寝る場所としてはスタンダードに公園だろ？ 晩飯とかは、花開院家から貰った金の余りでオーケー。後は・・・

「・・・義兄さま」

「なんだ？」

俺が完璧な計画を立てている最中に、背中の子が呼びかけてくる。・・・ふむ、この声の出し方は、俺のことをバカにしてけなす時の声だな。

「今、野宿について考えてたでしょ？」

「ああ、想定は完ぺ、いっとううつつうつつ!!!」

笑顔で答えてやったら、レイの長い髪がまるで生き物のように動き、俺の頬をひっぱたいた。

「ってえ！ 何しやがる！」

「義兄さまがバカだから、お仕置きをただけ。逆に礼を言われたいぐらい」

「はあ！？ 意味分からねえ!!」

「考えることが間違っている。今は奴良組に行くことを考えるべき」

「……ぐつ、反論が出来ないほどの正論だ……！ そうだよな、
何で俺はたどり着けないことを前提に考えてたんだよ……でも、
叩かなくてもよくね？」

「まだ、分からない？」

「……いや、分かった……けど、どうやって奴良組を探すって
んだ？ 地道に歩いてても、迷っただけだろ？」

「……警察に聞けば？」

「警察署の場所が分からない」

「……地図を見れば？」

「地図の読み方が分からない」

「……（ベシッ、ベシッ）」

「痛い！ 地味に痛いから止めて……！」

くつ、これは全面的に俺が悪いから、大して文句が言えない。……
でもさ、分からないものは分からないんだから、仕方なくね？

「……仕方ない。わたしが何とかする」

なん……だと……？ バカな、有り得ない。レイが自ら動き
出しただと！？ やべ、早いとこ奴良組にたどり着かないと、槍で
も降ってくるかもしれない。

「……義兄さま、ちょっと降ろして」

「ん、ああ、分かった」

俺はレイに言われた通りに、ゆっくりとレイを地面に降ろす。レ
イは両の足でしっかりと地面に立ち、何やら集中している。……
凄い珍しい光景だな。

そして少し経って、手のひらに力を集中させて、砲撃を放つ準備を完成させ・・・それを、俺に向かって放った。・・・何でやねん！？

「ぶおっ！？ ちょ、ため、何を、ぶふあああああ！！！」

「・・・少しすれば、分かる」

少しすればって、こんなことで何が起るって言うんだ・・・と、そんなことを考えてる内に、空から三つの影が凄いスピードで降りてきた。

三つの影の正体は、黒い羽を生やした美形集団。格好から考えて・・・もしかして、鴉天狗の子どもか何かか？・・・あの野郎、子ども作ったのかよ。

それにしても・・・なるほど、そういうことか。レイのさっきの砲撃は、自分たちの存在を知らしめておびき寄せる為だったのか。でも、俺に放つ必要はなくなね？

「貴様ら、何者だ。ここが奴良組のシマだと分かっているのか」

鴉天狗の子ども（仮）の内、黒髪が一番イケメンな奴が尋ねてくる。なんかもの凄い真面目な雰囲気出してなあ・・・下手なこと言ったらヤバそうだな。

「俺たちは、沖兎猫と兎衣鬼・・・一応、昔は奴良組の幹部だったんだけど」

昔とつけたのは、今はどういう風になってるか分からないからだ。まあ、ぬらりひよんの性格だったら、そのまま幹部の座に置いてる

気もするけど。

「沖見猫と兎衣兔・・・」

「確かに、有り得なくはないが・・・」

「どうする、兄貴」

俺の名乗りを聞いて、三兄弟は警戒を解かずに相談している。俺が真実を言っているとは限らないし、ここは色々と難しい問題だろう。

しばらくして、結論に達したのか三兄弟が俺たちの方に向き直った。そして三兄弟を代表してだろうか、例の一番イケメンな男が口を開く。

「信用することは出来ない・・・が、否定する材料もない。よって、顔が分かる者に目通しをする。ついてこい」

そう言い終わると三兄弟は飛び上がり、俺たちを先導してくれるようだ。・・・この辺りは人通りが無いからいいけど、有ったらすぐにはバレるよな、これ。

まあ、何はともあれ、これで奴良組にたどり着けるわけだ。もう、理不尽な目には遭わないだろう・・・これはフラグじゃないよな!?

「いえ、フラグでした」

三兄弟の先導に従ってついでいくと、昔と変わらない奴良組にたどり着いた。そこまではいい、が・・・何故俺は、普通に捕まってるのでしょうか？

「てめえ、動くんじゃねえ！！」

「それ以上動いたら・・・もっと締め上げるよ」

俺は首が浮いてる金髪イケメンの紐に縛られて、白田坊にどこか似ている男に取り押さえられている。ついでに言えば、周りにも妖怪がうようよといるな。

なんでこんなことになったかと言うと、時間は数分前まで遡る。具体的に言えば、三兄弟が俺の知り合いを連れてくるために、屋敷に入ってしまった時までだ。

俺とレイが門の前で立っていると、小さな男の子（ゆらと同じくらいか？）が寄ってきた。それでちょっと話しかけてやると・・・さっきの状態になったわけだな。

「どこの妖怪かは知らねえが、リクオ様を誘拐しようとはいい度胸だなあ！？」

「誘拐なんてするか！ ちょっと話してただけだろうが！」

「・・・それなら、何で奴良組の妖怪でない君が、奴良組の前にいたんだい？」

「だから、俺は奴良組の幹部だった沖兎猫なんだっての！！」

さつきからずつと、こんな感じのやり取りが続いている。こいつら、俺が沖児猫だつて言つても、一つも信用しない。嫌になるな、頭の固い連中は。

ちなみにレイは、我関せずと布団を出した熟睡中。それを見張つてるっぽい胸のデカい女も、どうしたらいいか分からないみたいだな。うん、普通そうなるよ。

「・・・なんだい、この騒ぎは？」

「あ、お父さんだ！」

そんな折、一人の男が現れて、先ほどの子どもが近寄っていく。その男は子どもを慣れた風に抱き上げて、くしゃくしゃと頭を撫でている。

「総大将！」

「実は・・・」

俺の周りにいた奴らがその男を総大将と呼び、事情を説明しているようだ。総大将・・・ってことは、ぬらりひよんの息子か？・・・なるほど、そっくりだ。

男の顔はぬらりひよんと瓜二つのイケメンで、何故かずつと左目を閉じたまま（邪気眼？）。目につく違うところは髪が黒いことと、髪をくくっている位置ぐらいか？

「ふうん、誘拐ねえ・・・あんた、本当なのかい？」

「んな訳ねえだろうが！！俺は奴良組の幹部だつた沖児猫！！さつきからずつとそう言ってるだろ！！」

「・・・へえ、あんたが沖児猫さんかい？オレは鯉伴、奴良組二

代目総大将だ」

「うおっ！？ 普通に挨拶してきた・・・だと？ てっきりこいつも疑ってくると思ってたから、逆にびっくりしたぞ。」

「総大将、信じるのですか!？」

「オレにはこいつが嘘言ってるように見えねえ・・・首無、お前はオレの目が信用出来ないのか？」

「いえ、そういう訳では・・・」

この口振りだと、完全に俺のことは疑ってないのか?・・・いや、もしかすると、例え嘘だったとしても、何の支障もないって自信があるのかもしれないが。

「首無イ、分かったなら離してやんな」

「は、はい・・・」

鯉伴の催促によって、俺は晴れて自由の身になった。で、ちょっと呼吸を整えていると、鯉伴が近寄ってきて、俺に手を差し伸べてくる。

「大丈夫かい？ うちの奴らは少しばかり短気だね・・・悪かった」

「いや、そんな謝られなくてもいいんだけど・・・」

あー・・・何か、いつも理不尽に苛められるから、こうやって謝られると調子狂うな。・・・昔はこんなこと考えなかった筈なのに・・・悲しいね。

俺がそんなことを思いながら鯉伴の手を握り返す。するとそれと同じくらいに、例の三兄弟が飛んできた。・・・ついでに、何かち

「つちやいのもいるな。」

「おお、確かにこやつは沖児猫じゃな」

そのちつちやいのが、降りてきてすぐに俺を本物認定する。……ん？俺はこんなちつちやい奴知らないんだが……。でもこの声、どっかで聞いた気も……

「なあ、お前誰だっけ？」

「……ああ、そういえばおぬしは、大きかったワシしか知らんかったな……。ワシじゃ、鴉天狗じゃ」

「鴉天狗……。鴉天狗だと!？」

バカな、鴉天狗はもつとデカくてスリムで、こんなマスコットキヤラクターみたいじゃなかった筈……。でも悲しい、確かにこの声は鴉天狗の声だった!

「一体、何が……」

「気にしたら負けじゃ」

そう言っつて後ろを向いた鴉天狗の背には哀愁が漂っていて、俺がいない間に色々有ったんだと感じさせた。……。マジで何が有ったんだよ!?

「なあカラス、こいつは沖児猫で間違いないんだな？」

「はい、間違いございません」

「ははは、思った通りじゃあねえか。なあ、首無イ？」

鯉伴は鴉天狗に確認を取って、勝ち誇ったように首無に言っつ。あれだな、こいつ、思ってたより子どもっぽい。

「ま、何はともあれ・・・ようこそ、沖見猫に見衣兔。オレの奴良組へ」

ひとしきり首無をからかった後に、鯉伴がそう言っただけで俺たちを歓迎する。・・・とは言っても、レイはまだ熟睡中だが。いつまで寝てんだよ!?

「親父は中にいるから、早いとこ会って来るといい。案内をつけようか?」

「ありがとよ。ま、頼むわ」

ぬらりひよんか・・・久しぶりだ。色んな奴と会うのが楽しみだな・・・もう、逢えない奴もいるんだろうけどな。

四百年・・・何が有ったんだ？（後書き）

最初は鯉伴と戦う予定だったのに、何故こうなったんだろう・・・？

とにかくこれで、やっと奴良組に帰ってきました。次話では、彼女たちとも再会できる筈。無駄に恋愛チックになる畏れがありますので、お気をつけを・・・

ろくな再会ねえな、おい（前書き）

お待たせしました・・・センター試験がやっと終わったので、これからはガンガン更新出来る・・・といいなあ。英語が悲惨なことになったせいで、二次試験の勉強頑張らないといけないかもしれませんが・・・

くそ、やっぱり、試験一週間前だったのに、うみねこEP8を借りるんじゃなかった・・・うみねこアクションなんてのも全クリしてしまっただし・・・こんな状況で、地元の国立なんて無理だよ。テヘツ

それと、前回のあとがきで言っていた恋愛描写は、次回に持ち越されました。予定がきちんと上手くいくことなんて、そうそうないんだよね・・・

ろくな再会ねえな、おい

俺は現在、鯉伴につけてもらった案内の子に先導されて、かつて俺も住んでいた屋敷を歩いている。

で、その案内の子なんだが・・・誰だと思う？ チツチツチ・・・はい、時間切れ。正解は・・・

「どうぞ、こちらです。沖見猫様」

「ああ。ありがとう・・・つららちゃん」

そう、俺が前世の知識の中で知ってた数少ないキャラの一人、かわいかわいいつららちゃんだ。もう、さっきから内心俺のテンション凄いよ？

顔立ちは雪麗にそっくりだし、声とか着物もほとんど同じなんだが・・・雰囲気が違うよね。雪麗は色っぽかったけど、つららは癒し系って感じ。

つららに案内されたのは、昔と大して変わっていない大広間。まあ、昔って言っても実感はないがな。体感的には、つい数ヶ月前くらいだし。

「初代様をお連れしますので、少々お待ち下さい」

「ん、ありがとな」

俺を案内し終えたつららは、一言残して足早に部屋を後にする。その役目を一生懸命こなそうとする様子は・・・萌えを感じずにはいられないな。

つららが居なくなり、俺しかない（一向に起きなかつたので、

レイは一室に運んでもらった）大広間で色々と思案を巡らす。これからの、俺のすべき行動について。

俺の目的は、大きく分けて二つ。ハーレムの完成と、チート能力による無双。ハーレムは・・・今は置いておこう。ちよっと、そんな気分じゃないからな。

ぬらりひよんの孫がいるということは、もうすぐで原作時間軸に到達するということだ。つまり、場は用意されていることになる。

だとすれば、問題はどうかやってチート能力を得るかということ。苦労せずしてなんとかチート能力を得られないかな・・・無理ですよな。

俺がいい方策を考えている途中で、廊下から足音が二つ聞こえてくる。どうやらつららが戻ってきたようだ・・・そう思ったと同時にぐらいに、ふすまが開く。

「・・・久しぶりじゃの、沖見猫」

入ってきたそいつは、ニヤリと笑いながらそう言った。その笑みが何なのかは知らないが・・・挨拶をされたのなら、俺も挨拶を仕返さないといけない。

「・・・初めましてだな、チヨココロネ」

俺がその言葉を言い終えたのとほぼ同時に、チヨココロネの姿が消える。そして刹那の内に俺の目の前に現れ、持っていた刀を振り下ろした・・・ん？

「っつて、ぐびぎやあああああああ！！！」

「ふん、まったく・・・相変わらずじゃの、おぬしは」

刃で俺を斬りつけたことを少しも反省していないチョココロネは、ため息をつきながらそう言う。ちよつと待てこら、俺が悪いみたいな言い方するんじゃないか。

「ちよつとしたお茶目だろうが・・・チョココロ、もといぬらりひよん」

「・・・おぬし、今本気で間違えかけたじゃろう」

「・・・さあ、なんのことやら」

いや、本当に分かっているよ、お前がぬらりひよんだったことくらい。ぶつちやけ前世の知識から、こうなるのは分かっていたし。まあ、予想以上に長かったけど。

「それにしても・・・あれだけイケメンだったのにな・・・ざまあ」

「・・・もう一度斬りたいのか？」

「さーせんしたっ！！」

ふっ、久々に決まったぜ、俺の華麗なるスライディング土下座。既に芸術の域に達してるんだぜ？・・・どうしてこうなった。

「・・・まあいい。それより・・・よく戻ってきたな、沖見猫」

「・・・ああ。ただいま・・・って言うべきかな？」

俺はそう言いながら起き上がって、ぬらりひよんが差し伸べた手をとった。昔と違ってしわがれた手でも、昔と変わらない力を感じさせる。

と、いい感じの雰囲気になったところで、ぬらりひよんと一緒に

「しょ？」

「そりゃそうかもしれないが・・・ムードってものが欲しくないか？・・・というか、今までの再会の仕方、全部微妙だな・・・もしかして、これからも全部？」

「・・・あなたはやっぱり、変わってないのね」

「ん？・・・何が？」

「・・・まあいいわ。相変わらずのアホ面も見れたことだし・・・つらら、私はちよつと外に出てくるから、後はよろしくね」

「はい。わかりました、お母様」

「え、ちよ、さすがに早くないか？」

「再会してから、まだ一分も経ってないぞ。もうちよつとさ、積もる話なんてのも沢山有るだろ？」

「私だってね、暇じゃないの。あんたと再会したからって、特に関係ないのよ」

「そう言つて雪麗は、さつさと大広間から出て行った。・・・えー？ マジですぐに居なくなつたよ。あいつ、俺にダメージを与えるためだけに来たのか。」

「あの、沖児猫様・・・お母様のこと、誤解しないで下さい」

「ん？ どういうこと？」

「お母様に沖児猫様の帰還の報をお伝えした時、凄く嬉しそうな顔をしたんです。たぶんあれは、照れ隠しなのだ・・・」

「ふーん、なるほど、嬉しそうな顔をしたねえ・・・相変わらずツンデレだな、雪麗は。いっそのこと、素直に俺のハーレムに入れば」

いいのに。

「安心しな、雪麗のツンデレな性格なら熟知してる。誤解なんてある筈がねえ」

「ツンデレ・・・それは、ちよつと」

俺の言葉に、つららは苦笑を浮かべる。やっぱり娘としては、母親がツンデレって嫌なんだろうな。だけど残念、雪麗は完璧にツンデレなんだよね。

と、ここで俺は、見逃すことの出来ない重大な事実気づいた。つららが雪麗の娘ということは、つまり・・・

「・・・なあ、つらら。一つ聞きたいんだが・・・お前の父親って誰よ?」

そう、母親がいるなら父親もいる筈だ。俺が封印されてる間に勝手なことを・・・一体誰が、雪麗の俺のハーレム入りを邪魔しやがったっていうんだ?

俺の言葉を聞いたつららは、一瞬ポカンとした表情をしたが、すぐに晴れ晴れとした顔つきに変わる。そして、嬉しさを隠せないように、口を開いた。

「大丈夫です、沖見猫様。ご心配のことは、決してありませんから」

なんで嬉しそうなのかも分からないが、何がないってんだ? 俺が心配してることって・・・逆に何よ?

「・・・つまり、具体的に言つと?」

「えつとですね・・・私にお父様はいません!!」

つららは自慢げにそう言うが・・・普通は威張っていうことじゃないと思う。・・・まあ、俺が心配してたことってのは、そういうことか。それにしても・・・

「父親がないってのは、つまり・・・逝っちまったと?」

「いえ、そうではなくて・・・あれです、雪女は、単性生殖なのです!!」

・・・なるほど。へー・・・雪女って、一人で子ども作れるんだ・・・知らなかった。でもさ、そういうこと、女の子が大声で言うもんじゃないぞ。

まあ、具体的なことは分からないけど・・・雪麗に、特定の男はいないってわけだな。よし! これで、俺のハーレムに雪麗が入ることが可能なわけだ!

「・・・のう、ワシ、空気じゃないか?」

そんな中で、雪麗の登場からは一言も喋れていなかったぬらりひよんが、拗ねたように呟く。いいじゃん、ぬらりひよんってそういう妖怪だろ?

「……そうか。やっぱ、そうだよな」

「……ああ。人の一生は……短い」

時は進み、ある程度語らった俺たちは今、仏壇の前に座している。この仏壇はつまり……瑛姫が、祀られている。

「最初から分かっていたことじゃ……ワシらはそれを分かった上で、夫婦になつたのじゃから」

「……そうか。なら、俺が言うことは何もねえ」

ぬらりひょんが分かっているなら、俺が口を出せることなんて一つもない。俺は仏壇の前で手を合わせて、黙禱を捧げる。

「……なあ、ぬらりひょん」

「なんじゃ？」

「……ミヤのこと、なんだけどさ」

暫く黙禱を捧げた後、聞くべきかどうか迷っていたことを尋ねる。……いや、分かっているはいるんだ。だけど、聞かない方が楽かもしれないって思ってしまう。

「宮子姫か……あの姫なら、天寿を全うしたよ」

「……当然か。あいつは人間、四百年の時を生きれる筈がない」

……分かっていたことな筈なのに、心が沈むのを抑えられない。あんな別れ方なんてしたもんだから、もう一度ぐらいは逢っておきたかったんだが……。

「・・・ミヤに、謝りたかったな」

「何をですか、是炉様？」

「そりゃ、あんな別れ方しちまったことを・・・・・・って、うえっ?!」

俺が零した言葉に反応があつたので反射的に応えたが・・・この声に、こんな俺の名前の呼び方をするのは一人しかいないわけで・

「ミヤ!? は?! ちょ、は!?!」

声が出た方向、つまり俺の横を向いてみると、別れた時と変わらない いやむしろ、若くなった気がしないでもないミヤが、きちんと正座していた。

「え、ちょ、マジで、何が・・・」

理解が追いつかない・・・確かにさつき、ぬらりひよんはミヤが天寿を全うしたと言った。だから、ここにミヤがいる筈がない

そこで、俺はぬらりひよんを急いで見やる。すると俺の視界に入ってきたのは、悪戯が成功した子どものような笑みを浮かべたぬらりひよん。

「・・・ぬらりひよん、てめえ、騙しやがったか!?!」

「人間が悪いの・・・ワシは、嘘なんぞついとらんぞ」

嘘をついてないって、確かにここにミヤは生きて・・・というか、ただの人間であるミヤが何故生きてるっていうんだ!?!

「是炉様、確かに私は、天寿を全うしましたよ？」

俺がぬらりひよんを糾弾していることに関してのフォローだろうか、ミヤがこれまた悪戯が成功したような笑みで、俺にそう言うてくる。

「でも、お前はここに……」

「私はもう、ただの人間ではないということです」

そこから、ミヤによる分かりやすい説明タイムだった。曰わく、ミヤは現在、浮世絵町の一角にある神社の土地神をやってるらしい。

土地神　ある一つの土地に居着き、信仰によって畏を集める者。生前に人々から崇められ、死後に祀られたのならば……人から土地神になることもあり得る。

「……なるほど、それで……ん？　だったら、その神社にいないのいいのか？」

「ああ。大丈夫です。今は、苔姫が神社にいますから」

ミヤが言うには、苔姫も同じ神社に祀られていて、二人で一つの神社の土地神をしているらしい。だから、一人は好き勝手に動けるんだと。

「なんつーか……便利だな？」

「ええ、便利なんです。買い物も好きに出来ますし……」

……それはいいんだけどさ、あれ？　なんか、こんな軽い感じの再会でいいの？　あの涙の別れは、一体どこにいつちまったんだ？

「気にしたら負けです」

「……あっ、そう」

ミヤの満面の笑みに、俺は何も言うことが出来ない。昔だったらこんなこと言ってこなかった筈だが……強くなったねえ？

「そうじゃ宮子姫、こやつの帰還の宴会をやるんじゃないが、あんたも参加するかい？」

自分の存在をアピールするためだろうか、またしても空気となっていたぬらりひょんが、思い出したようにそう言う。……それ、宴会の口実が欲しいだけだろ？

「……いえ、今日はお暇いたします。あまり、遅くなってもいけませんし」

「そうかい。そりゃ残念じゃ」

うん、俺としても残念だ……というより、またしてもさっさと帰っちゃうのね。雪麗といい、ミヤといい……俺との再会って、そんなにどうでもいいの？

「是炉様」

「ん？」

自分の価値について真剣に考えようとしている時、そばに近寄ってきたミヤが俺の名前を呼んだ。そして俺の耳に顔を近づけ、小さな声で耳打ちする。

「明日にでも、神社に来てくれますか？」

「ん・・・別にいいけど」

俺の返事を聞いたミヤは、ほっとしたような、それでいて嬉しそうな笑みを浮かべた。そして少しした後、自分が住んでいる神社に帰って行った。

「・・・なんだかなあ」

「沖児猫、どうしたんじゃ？」

「いや・・・もっと再会を喜んでくれる奴がいてもいいんじゃないかと」

そんな感動的な再会を夢見てたわけじゃないが、さすがにここまで酷いとは思わなかったな。ミヤの告白って、結局どうなったんだろつか・・・。

「・・・本当に、そう思ってたのかい？」

「ん？・・・本当になって、何が？」

「・・・おぬしは、意外と鈍いのっ」

・・・鈍い？ 何が？・・・まあ、何にせよ、ミヤが生きていて再会出来たっつのは喜ばしいことだ。今日のところは、それで満足しておこう。

ろくな再会ねえな、おい（後書き）

雪女の単性生殖ってのは、某鬼の手の漫画であつたんで、まあいいんじゃないかと思ってこつしました。・・・原作で、つららの父親が出てこないことを祈る。

そして、宮子姫の土地神設定には無理があるかもしれませんが・
・気にははいけません。この世には、気にははいけないことが
いっぱいあるのです。

次話で宮子姫とのもろもろの決着をつけてから、原作時間軸に向けて頑張りたいと思います。・・・雪麗は、いつ落とせるんだろうか。

据え膳食わぬは男の恥？（前書き）

書いてて思った感想は、オレは何故、こんな恥ずかしい展開を書いているのだろうか。見れば分かりますが・・・本当に、なんでこうなったかなあ・・・？

据え膳食わぬは男の恥？

「・・・ここか」

浮世絵町にたどり着いた翌日である今日、俺はとある神社に来ていた。その名も『玉苔・櫛宮神社』・・・まあ、なんとも分かりやすいネーミングだな。

ここに来たのは他でもない。昨日ミヤとの別れ際に、今日来ると約束したからだ。いや、約束してなかったとしても、たぶんすぐに来てただろうけど。

「ミヤ？ 来たぞ」

神社の戸を叩いて、俺が来たことを伝える。数秒して、戸の前に誰かが立った気配がした。そして、戸が開かれる。

「沖児猫様、お久しぶりなのじゃ」

「ん、苔姫か。久しぶりだな」

戸を開いたのは、相も変わらずロリな苔姫。ミヤは苔姫と一緒に土地神やってるって言ってたけど・・・エターナルロリを実現しているとは予想外だった。

「む、何か侵害なことを思われたような気がするぞよ」

「大丈夫だ。間違ったことは何一つ考えてないから」

苔姫は釈然としない顔をしながらも、中に俺を案内する。神社の中は思ったよりも広く、色々な物が置かれていた。

「宮姫様はもうすぐ来られるので、ここで待っていて欲しいぞよ」
「ん？ ミヤは何してるんだ？」

「・・・はあ。沖兎猫様は、女心が分かってないぞよ」

俺は思ったことを率直に言っただけなのに、苔姫のため息をついて呆れられた。そりゃ、女心はあんまり分からねえけど・・・そんなに呆れなくてもよくね？

「では、わらわはお茶を淹れてくるぞよ」

ひとしきり呆れた後で、苔姫はそう言っただけで台所へ行った。この神社、何故か台所があるらしいんだよな。どういう意図で作ったんだか。

一人となった俺は、所在なく床に腰を下ろす。女の家で一人であるってのはどうにも・・・と、ここで、部屋の襖が開いて、ミヤが現れた。

「是炉様、申し訳ありません、お待ちせしました・・・」

「いや、そんなに待ってないさ」

そんなありきたりな会話を終えて、ミヤは俺の横に静かに座る。

近いような、そうでもないような、絶妙な距離を保った位置だった。

とりあえず、ミヤから何か言ってくるのを待つが、一向に何も言っていない。なんとというか、俺に対して何か期待をしているような？

「・・・どうかしたか、ミヤ？」

俺に何を期待しているかなんて分からないので、素直に聞いてみる。するとミヤは、やっぱりなという感じでため息をついた。・・・俺にどうしろと？

「いえ、特に何も・・・」

ミヤは笑顔で何でもないと言うが、たぶん本当は何かあるのだろう。それが何かは分からないが・・・ちよつと、悪いことをした気になってしまふ。

「悪い、本当に何か分からなくて・・・ああ、その着物と櫛はミヤに似合ってるな」

機嫌が悪いわけではないが、なんだかいたたまれないので、機嫌をとるための常套句を口にしてみる。キャバクラとかでも、服を誉めれば大抵大丈夫らしいし。

いや、本当にいつもより気合いの入った感じのコーディネートなんだけどな。俺としても、ミヤは普段から美人だが、いつにもまして綺麗に見える。

「・・・是炉様は、ずるいですね」

「え？ 何が？」

「いえ、何でも・・・」

そう言っつてミヤは、呆れているような、怒っているような、嬉しそうなの、そんな複雑な表情をした。・・・あれ？ 結局、何がどうなってるんだ？

「まあ、いいです。それよりも・・・」

本題に入るつもりだろうか、ミヤの表情は真面目な風に変わる。
一拍間を置いてから、口を開いた。

「是炉様・・・お帰りを、お待ちしておりました」

そう言うミヤの顔には、うつすらと涙が滲んでいる。それは、心から喜んでくれているに他なく。俺としては、今すぐ抱きしめたいという衝動にかられた。

「・・・ああ。ただいま」

・・・まあ、俺がそんなに積極的にいけるかということ、そうではなく。普通にそういう返事をするに止まった・・・ヘタレとか言うなよ!?

「この四百年・・・長かったです」

その声は、俺を非難しているような色も含んでいるが、主たるところは、悲しみの感情だ。俺は口を挟まずに、ミヤの言葉の続きを待つ。

「いつ封印が解けても構わないように設けた祠から封印具が盗まれた時は、もう二度と逢うことは叶わないかと思いました」

あ、そんなこと有ったのか。なんで京都の花開院家で復活したのか疑問だったんだが・・・盗みとはな。あれだ、花開院工。

「それでも、こうして再会出来た・・・私は今、とても嬉しいのです」

「・・・悪かった。もう少し、早く帰って来れば良かったんだが・

「・・・」

封印が解けてから二ヶ月は花開院家で油売ってたしな・・・というか、封印されなきゃ良かったわけだし。ここは全面的に、俺の方が悪いのだろう。

「・・・仕方ないことなのは分かっていますが、やはり納得出来ないのです」

「そうか・・・でも、ミヤにそうまで想ってもらえてるとは嬉しいな」

これは、俺の偽らざる本心だ。ミヤにこんな悲しい顔をさせられるほどに、俺の存在はデカいらしい。これが、嬉しく思わずにいられるか。

「前にも言いましたが、私は・・・是炉様をお慕いしているのです。少なくとも、四百年を待てるほどには」

・・・あれだな。これって、俺の妄想だったりしないのか？こんなに俺が想われる筈がないもん・・・いや、現実つてのは分かってるが。

ここで、少し会話が途切れる。そのほんの少しの間が今は何故か気恥ずかしいわけで・・・んー、何か話題はないか？ 何でもいいから・・・

「あー、そーいや何で、昨日はあんな態度だったんだ？」

ひねり出した話題は、ちょっと口に出す話題じゃなかったかと思う。けど、昨日から気にはなっていたから、出るべくして出てきた

話題なのかもしれない。

「ふふっ、せっかく再会するんですから、二人きりでゆっくり話したいじゃないですか」

俺の質問を聞いたミヤは、少し可笑しいというように上品な笑みをこぼす。まあ確かに、昨日の感じで言えば、宴会になるのは必至だったろうな。でも……

「いや、そうだけど……もちつとさ、いい感じの再会の仕方はなかったものかと」

「ああ、あれはですね、雪麗さんに提案されたんです」

「……雪麗に？」

何でここで雪麗が出てくるのだろうか。昨日の夜の宴会に帰ってきた時は、特に何も言っていなかったんだが……。

「はい。神社まで急いで来られて、私に是炉様の帰還を教えてくださいました」

「へー……」

ああ、昨日すぐに出て行ったのは、ミヤに俺が帰ってきたことを伝えるためだったのか。急いでって、走ってきたのか？ 雪女なんだから溶けるぞ？

「それで私も、急いで是炉様に逢おうとしたところ、雪麗さんが、『あいつと今再会しても、あんまり長いこと喋れないでしょ。だから今日は抑えとして、明日にでも存分に語らいなさいな』……と」

……これは、どう考えればいいんだろう？ 雪麗が気をきかせ

てくれたと考えるべきか・・・まあ、考えても分からないことだが。

「いや、そうだったか・・・だったら、存分に語らないとな」

「ええ・・・話したいことが、沢山有ります」

俺から話せることなんて大してないが、ミヤには四百年の間に積み重ねられた思い出があるだろう。・・・本来なら、俺もその思い出の中にいたんだろうがな。

ミヤはどこから話そうか迷っているようで、ああでもないこうでもないと言を悩ませている。そんなに悩まなくても、最初からゆっくり話してくればいいのに。

「そうですね、最初はそう・・・あの時の話でも」

一二分して漸く話す内容が決まったミヤは、昔を懐かしむように少しずつ語り出す。それらの話は総じて興味深く、飽きさせないような話ばかりだった。

その中でも興味を惹かれたのは、幕末の頃の話だろうか。当事者からその時の状況を聞くと、今まで知らなかったような真実を知ることが出来る。

「そういえば、その時の写真が有りますけど・・・見たいですか？」

「今もまだ残ってるのか？ それは是非とも見てみたいな」

ミヤが言うには、幕末の頃に奴良組の奴らと一緒に撮った写真がまだ残ってるらしい。初めて撮ったであろう写真でどんな顔をしているのか・・・見物だな。

「えっと、確かその棚に有ったは……っ、あ……」

写真を探すためにミヤは立ち上がって、反対側にある棚まで向かおうとする。だが、着物の裾でも踏んだのかバランスを崩して……っ、危ねえ！！

俺は急いで立ち上がり、ミヤが転けるのを防ごうとする。しかし時既に遅く、俺に出来たのは、ミヤを傷つけないように抱え込むことだけだった。

「っっー……大丈夫だったか、ミヤ？」

「は、はい……是炉様が、守ってくださったので……」

無事かどうかを確認してみたが、どうやら大丈夫らしい。良かった良かった……と、安心したところで、俺は重大な事実気づくことになる。

今の俺たちの体制は、ミヤが仰向けに倒れていて、その上から俺が覆い被さっている状態。まあ所謂……押し倒しているような状態ってわけだな。

「わ、悪い。今すぐ退く」是炉様……構いませんよ？……は？」

俺はすぐに退こうとしたのだが、ミヤは赤らめた顔を反らしながら、そんなことを言ってきた。構わないってなにが……まさかとは思っけど……。

「……これ以上、女に言わせるおつもりですか？」

そう言われた瞬間、頭を鈍器で殴られたような気がした。ああ、これは間違いなく・・・そういうことだろう。・・・マジですか。

こうなってしまったら、据え膳食わぬは男の恥と言いますし・・・いいんですよ？ もう、数十年を共にしてきた称号とお別れしてもいいんですよ!？

「ミヤ・・・」

「是炉様・・・」

俺たちは互いに名前を呼び合い、最後の確認をする。そして、お互いの距離を縮めて行き・・・

「お待たせなのじゃ!! 茶葉がなかなか見つから・・・あ・・・」
「・・・あ」

俺とミヤの距離がゼロとなる直前、勢いよく襖が開いて苔姫が入ってきた。今の俺たちの状態から言って・・・うん、これは・・・やっちまった。

暫く呆然と見つめあっていた俺たちだが、苔姫はふと我に帰った

ような顔つきになる。そして少し間を置いて・・・

スタスタスタ（こちらに歩いてくる音）

カタン（持ってきた茶を置く音）

スタスタスタ（元の位置に戻る音）

お茶を置いて元の位置に戻った苔姫は、着物の中から何故か笛を取り出し（何故持つてる？）、それを口元に持って行き・・・

「ピツ、再開！」

「出来るかああああ！！！」

こんな状況で、再開出来る筈がないだろう！？ というか、封印される直前の時といい・・・なんでこんなに邪魔ばかり入るのだろうか。

苔姫はすぐにスタコラと出て行ったが・・・まあ、少なくとも今日はもう無理だな。なんともいたたまれない気分のまま、俺たちは体を離す。

「ふう・・・なんか、もうあれだな」

「・・・そうですね」

今の俺は、残念のような気もするし、ホツとしたような気もする複雑な気分だ。ミヤは、どう思っているのだろうか。

「しょうがない、今日のところはもう帰る。また今度、ゆっくり話そう」

もう思い出話をするような気分でもないし、今日のところは帰った方がいいだろう。これからは、いつだって逢うことが出来るのだし。

「はい・・・ただ、是炉様」

「ん？ どうした？」

「最後に、四百年も待たされた罰を、受けてほしいです」

「ぶふっ・・・!？」

何故いまさらそんな話になる！？ いや、言ってきたもおかしくはないと思うが・・・このタイミングで切り出すとは・・・まあ、仕方がない、か。

「・・・わかった。そりゃ、俺が悪いんだからな。どんな罰だって受けてやる。さあ、どんとこい！」

「分かりました、加減はしません」

そう言ってミヤは、右手を捲り上げて、簡単に言えばビンタの体勢になる。これはあれだな、肉体言語による魔王的OHANASHIというやつだ。

「ですから是炉様、目を閉じておいてください」

「ん、分かった」

ミヤの言葉に従い、俺はぎゅっと目を瞑る。そして頬に衝撃が来るのを待つが・・・あれ、なかなか来ないな？

「・・・是炉様」

「ん？ どうした、ミヤ・・・っ!？」

何故か凄く近くでミヤが俺を呼んだので、反射的に目を開けると、目の前にミヤの端正な顔がドアップで。次いで、唇に柔らかい感触を感じた。

「ん!？」

「是炉様、これが、今日のところの罰です。・・・でも、まだ許せてませんからね」

そう言うミヤの顔はほんのり赤く、少し恥ずかしいのだろう。いくら四百年生きてきたからって、恥ずかしいものは恥ずかしい。

というか、俺もテンパってる。俺がキスしたのって、雪麗のあれを抜いたら・・・初めてってことになるわけだし。年甲斐もなくテンパってるんだ。

生きてる年齢だけで言ったら、二人とも長い筈なのに、なんともまあ、お互いに初過ぎるんじゃないかと思うが・・・まあ、許して欲しい。

拝啓、名前も覚えてない父上様。あなたの息子は、異世界の大地において、こんなに綺麗で可愛い彼女が出来ました。

Perplexity of the snow fairy (前書き)

今回の話は、雪麗視点オンリーで、ギャグは殆どなし。もうここまで来たら、雪麗も何も言わずに落としてやるうってことで作りました。

一部設定や展開にご都合主義が含まれます。なんでこんな風に思っただよww と笑って下さって結構です。

ちなみにタイトルは、作者がうみねこ好き過ぎてやってみたくなった。・・・合ってるかは知らないよ？ オレの英語力の無さをなめちゃいけない。センターでも、英語さえ出来れば・・・！

Perplexity of the snow fairy

その知らせは、酷く突然だった。何の前触れもない、本当に急な話。予想だにしていなかった、信じられない話。

『沖見猫が、封印された』

宮姫が泣きながらその報告をしてきた時、私は呆然とするしか無かった。というより、実感が湧かなかったのかも知れない。

先ほど、温泉を覗こうという、いつも通りのバカな行動をしようとした。私がそれを止めて、お仕置きをするという本当にいつも通りの光景。

そんな普段と変わらない今日という日に、こんなことがあるなんて誰が予想出来るだろうか。私が理解出来る範囲を、遙かに超えている……。

総大将が宮姫に仔細を尋ねるが、あまり容量を得ない説明ばかり。その時分かったことと言えば、宮姫が持っていた封印具に、沖見猫と兎衣兔が封印されているということぐらいだった。

そして明けて次の日。屋敷に戻り、漸く落ち着いた宮姫が、詳細を話してくれた。だがその話の途中にも、うつすらと涙が滲んでいく。

曰わく、原因として考えられるのは、あいつの義妹である兎衣兔らしい。あまり内容は分からなかったらしいが……この時代に、いる意味がないとか。

「……どーいうこつた？」

「つまり、この時代にいる意味がないから、わざと封印されて時を過ぎさうということでしょうな……」

「なるほど……。兎衣兔なら、やりかねえな」

総大将と牛鬼が、そんな風なことを言っている。え？　ちよつと待って、やりかねないって……そんな、バカなことが……義兄を、巻き添えにしてまで。

「その封印、解けねえのか？」

「……難しいでしょう。封印を作った陰陽師にも、解けないようですし……」

そう。その封印は、封印を行使した者にしか解けない、そんな封印らしい。つまり、兎衣兔にしか。だから……私たちには、どうすることも出来ない。

「ん〜、だったら仕方ねえな。あいつの封印が自然に解けるまで、気長に待つか」

……封印が解けるまで、気長に待つ……？　この時代に興味が無いって言ったのに、すぐに解ける筈なんてない。だから、何百年と時間がかかるに決まってる。

それなのに、そんな悠長な……。ここは、なんとか封印を解く方法を探すべきなんじゃないの？　私のこの考えは、間違っているの？

私はちらりと、宮姫の方を盗み見る。彼女はあのバカのことを、なんでか知らないけど好きだった筈だ。総大将たちの話を聞いて、どう感じたのだろうか。

宮姫の様子は　とても落ち着いていた。まだ目元に涙が見えるが、それでも気丈な態度を保っている。彼女は一体、何を思っているのか……。

「宮姫」

「……雪麗さん、ですか」

話し合いが終わって、自分の部屋へ帰ろうとする宮姫を呼び止める。彼女の真意が、問いたくて。

取り敢えず場所を私の部屋に移して、二人だけの会談と相成る。宮姫と二人きりなんて、初めてじゃないだろうか。

「……あなたは、どうするつもりなの？　あいつの封印が解ける頃には、もうあなたは……生きてないでしょ？」

遠回しに言うべきかとも思ったが、敢えて真っ直ぐ尋ねる。その方が、彼女の真意が聞けると思ったし……私の方も、気が楽なのだ。

「……私は、諦めません。諦めなければ、いつか再会出来ると信

じています」

宮姫の答えは、そんなあてもないような答え。普段の私だったら、鼻であしらうような答えだが、宮姫の真剣な目を見て、何も言えなくなる。

ただ愚直に、あのバカのことを想うその瞳には・・・適わないと思っただ。

・・・適わないって、何に？ 自分で思っておいてなんだが、私には分からない。私は一体何に対して、宮姫の何を感じて、適わないと思っただのか・・・分からない。

「雪麗さんは・・・」

私が惑っている間に、宮姫が話を切り出した。今度は逆に、私に何かを聞くことというのだろう。

「雪麗さんは・・・是炉様の事を、どうお考えですか？」

「・・・は？ 何それ？」

「・・・雪麗さんは、是炉様がいなくなったことを、悲しんでおられます。それは、きつと・・・」

私が悲しんでいるって？ そんなこと・・・ない、と思う。私はただ単に、あいつがいなくなったたら張り合いが無くなるし、面白くないから・・・それだけだもの。

それ以外に、何が有るって？ そりゃ、牛鬼に変なこと言われて、意識しちゃったことも有ったけど・・・。・・・あいつは、宮姫といい関係だったじゃない。

この日は、そんな会話だけで終わった。でも、私の心は納得なんてしていない。・・・私は、一体何を望んでいるのだろうか・・・。

それからは、なんとなく過ごす日々が多くなった。あいつがいなくなつて、本当に私の日常は一変したと思う。あいつは、私の日常の一部だったんだ。

宮姫とはあいつがいなくなつてから、何度も話すようになって、親友・・・まではいかなくても、それなりの仲になった。共通の話題があつたからだろうか。

そして春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬も過ぎ・・・一年が過ぎ、年月を経ていく。あつという間のような、とてつもなく長かつたような・・・。

その間に色んなことがあつた。例えばそう・・・年を経て宮姫が死去したが、生前の行いから民衆に崇められて、苔姫と共に祀られた神社の土地神となつた事とか。

それは、奇跡と言つてもいいのだろうか。彼女は年を経たとしても、あいつを待つことが出来る。私としても、それは嬉しいことだった。

あいつの封印が安置していた祠から無くなった時は、二人して呆然となったっけ。・・・あれ？　なんで私まで、そんなに呆然としたんだろう・・・。

そんなことから数百年経って、私は子どもを作った。まあ、男がいたらそういう行為で作れないこともないが・・・今回は、単性生殖というやつだ。

つけた名前はつらら・・・以前、あいつに提案された名前である。別に、特にそういう意識をしたわけではない。ただ、その名前がいいと思っただけ。

雪女が一人で子どもを作ると、親の畏だとか妖力とかは、子どもに大半が移る。つまり、今の私は往年の力が無い・・・だから、どこかで隠居でもしようかと思っただ。

でも、止めた。戦闘には役立たないかもしれないが、家事なんかの手伝いということで、本家に残してもらった。ちよつとしたわがままとして、見逃して欲しい。

止めた理由は・・・まあ、あいつが戻ってくるまでは、いてやるうかなと思っただけ。あのアホ面を拝まないと、きつと後悔する・・・何故かそう感じた。

つららを作ってから・・・何年経った頃だろうか。西暦で言えば、ちよつと二千年。江戸時代からだいぶ変わったこの時代で、ついにあいつは帰ってきた。

「お母様、大変です！　一大事です！」

「・・・どうしたの、つららっ？」

私が洗濯物を畳んでいる時、そんな風にしてつららが部屋に飛び込んできた。この子は偶にこんな風な調子になるから、私はあまり気にせずに作業を続ける。

「帰ってきたんですよ!」

「帰ってきた・・・誰が?」

「お母様が昔よく話してくれた、あの沖児猫様です!」

その言葉を聞いた瞬間、思考が少し止まったような気がした。帰って・・・きた? あいつが?・・・冗談なんかじゃなくて?

私はその時、どんな顔をしていたのだろうか。私の顔を見て、つららはなんだかニコニコしている。親子だというのに、性格はまったく似ていない。

「では、私は初代様をお連れするので、早く来て下さいね!」

つららはそう言つて、さっさと出て行く。残されたのは、私と洗濯物だけ。・・・逢えるの? あいつの顔を、また見ることが出来るの?

私は心の整理がつかないまま、あいつがいるという大広間に向かった。どんな顔をして行けばいいのだろうか? どんな話をすればいいのだろうか?

「つららつて・・・雪麗の娘だよな?」

「はい。私のお母様は雪麗と言います」

襖の前まで来て躊躇していた私の耳に、変わらないあいつの声が

といけない。

「私だってね、暇じゃないの。あんたと再会したからって、特に関係ないのよ」

自分でも、これは嘘だと思う。こいつが帰ってきただけで、私の心は酷く揺れている。それはもう、ぬらりひょんが瑛姫に求婚した時と同じくらいかもしれない。

あまり立ち止まると、何かが溢れてきそうなので、すぐに屋敷を出て行く。そして急いで宮姫がいる神社へ・・・暑くてちよっと溶けかけた。

「宮姫、いる!？」

神社の戸を開けて、宮姫を呼ぶ。普通はずっといる筈だけど・・・あの子たち、偶に街に買い物に行くからな・・・土地神のくせに。

「どうかしましたか、雪麗さん?」

「良かった、いたのね。実は」

あいつが帰ってきたことを伝えると、宮姫は口元を手で押さえ、涙を目尻に溜める。そしてすぐに、奴良組の屋敷に向かおうとした。

「・・・待ちなさい。慌てちゃ駄目よ」

私は宮姫が行くのを、静かに止める。あれだけ慌てていた私が慌てるなんて、おかしいと思うけど・・・幾分冷静になった分、慌てちゃ駄目だと思えた。

「あいつと今再会しても、あんまり長いこと喋れないでしょ。だから今日は抑えといて、明日にでも存分に語らいなさいな」

どうせ今日は、あいつの帰還にかこつけての宴会だ。だったら、今日は顔を見るだけにして、明日ぐらいにゆっくり二人きりで語らった方がいいと思う。

宮姫は私の提案に少し悩んでいたが、しばらくして是と答えた。そして話が終わるとすぐ本家へ向かう。あいつの顔が早く見たい・・・その気持ちはよく分かった。

あいつと宮姫が再会したところを盗み見て、その日の晩の宴会でまた凍らせて、明るる日の宮姫との一連の話を聞いて・・・良かったと、心から思える。

でも、それと同時に、なにやらモヤモヤとしたものも感じた。一体この嫌な感じはなんなのだろうか・・・答えなんて、一切浮かんでこない。

いや、一つ浮かんではいる。だけどそれは、有り得ない、有り得ちゃいけない。だって私があんなバカにしているなんて。絶対に、有るわけがない。

「おい雪麗、どうしたんだ?・・・反応ないな。よし、これ

は俺に身を預けると、いいいいいうううう!!!!」

「・・・何、変な妄想してんのよ」

長い間思考の渦に潜っていたが、バカの声で現実に戻される。そうだ、今は奴良組総出での花見の宴会の途中だったっけ・・・すっかり忘れてた。

「ぶっ、ぐおっ、・・・ひでえな、せつかく起こしてやったのに」

・・・確かに、ちょっと悪かったかもしれない。こいつはこいつなりに私を気遣って・・・なんてことはないか。うん、別に謝る必要なんてない。

「ふん、起こすにしても、言葉がおかしいでしょ?・・・だいたい、宮姫と恋仲のくせに何言ってるんだよ」

「ふっ、分かってないな。俺は昔から、ハーレムが目的だと言っているだろう」

・・・こいつ、こんなバカなことを堂々と行って恥ずかしくないんだろうか。ハーレム・・・その意味は、最近どこかで聞いたことがあった。

「・・・あなた、やっぱりバカよね」

「何を言うか! 俺は純粋に、俺が大好きな美女を侍らせたいだけだ!」

「・・・だからバカだと言ってんのよ」

やっぱり、こいつはただのバカだ。私がこいつに してるなんて、勘違いもいいところだったらしい。私は一体、何をこいつに期待してたんだか・・・。

「女を純粹に愛せない男に、何人も美女がなびくわけないでしょ。宮姫と上手くいったからって、調子に乗らない方がいいわ」

「……はっ、雪麗、それは違うぞ?」

このバカは私の言葉を鼻で笑い、そんなことをのたまう。……こいつは、何が言いたいのか? 何か違うところでも有るわけ?

「……何が違うって言うのよ」

「俺は純粹に女を愛する。ハーレムってのは、俺が愛する奴ら全員が悲しまない形。ミヤもお前も、俺は全力で愛する」

……二の句がつけない。こいつ、本当にここまでバカだとは……。そんなバカな考え、一笑にふして、……。ふして。

「んじゃ、俺は他の奴らの所行って来る」

「……あ」

呆然としている内に、あいつはそう言って立ち去る。自然と手が伸びそうになるが、慌てて引込めた。私は、一体何をしようとしていたの?

あいつが言っていた言葉を、何度も反芻してみる。何度確認しても、ばかばかしいセリフでしかない。それなのに、そんなセリフで私は……。

……これは、認めるしかないのだろうか。私は、あいつのことが……沖見猫のことが……

というわけで、雪麗を落とす下準備をしておきました。これで後は、いつ、どうやって落とすかだけ・・・どうしようかな？

それよりここで、皆さんにアンケートしたいと思います。内容は沖見猫ハーレムをこれからどうするか・・・です。人数を増やすべきか否か。誰を入れるべきなのか。

？現状のまま・・・宮子姫と雪麗（プラス兎衣兔？）だけでオーケー！。

？原作キャラの誰か・・・ただし、原作カップリングを壊したくないので、カップリングあるキャラは無し。

？オリキャラを出す・・・楽だけど、二次創作要素が薄れるかなあ？

？キャラだけ何かとクロス・・・まあ、出来ないことはないかと。ただ、微妙かな・・・。

？その他・・・何か上記以外であれば。

・・・というところで、よろしくお願ひしますm()m

人の話は、ちゃんと聞きましょう(前書き)

ちょっと今回は自信ないですね……。実は次話の方を考えてたんですが、色んな事情により今話を差し挟みました。次話はちゃんとマシに、……。なればいいなあ。

そして今回、予定を少し変えて沖見猫にパワーアップフラグ？みたいなのを二つほど。本当はもう少し後で出そうと思ってたのにな。
・まあ、いいけど。

人の話は、ちゃんと聞きましょう

ミヤと恋仲になってから、約一ヶ月が経過した。桜が満開となった春の暖かい日差しの下、俺は奴良組本家の部屋にてお昼寝タイム中。春眠暁を覚えずってね。

そういう関係になったからって、俺たちの間に大した変化はない。偶に俺が神社に行ったり、ミヤがこっちに来たりするだけの・・・清いお付き合いだ。

だってさ、なんとなく恥ずかしいじゃん？ 意識して、ギクシヤクしたことになるとか。・・・ああ、俺の称号とのお別れは、一体いつになるんだろう。

それと、今一番気になってることは、雪麗の不自然な態度だ。再会時はともかく、最近の雪麗は上の空でいることが多い。まあ、家事に支障はないみたいだが。

なんというか、自分の中の何かと戦っているとも言っのだろうか。周りの空気に馴染まず、自分の世界に入っている。一体、何があつたんだかな。

「・・・ま、俺がどうこうする問題じゃないよな」

雪麗が自分で悩んでいることを、俺が横から口出しなんてするわけにはいかない。向こうから相談してくれるなら別だが・・・しては来ないだろうなあ。

「沖見猫、ここにいたのかい」

「ん・・・鯉伴？」

俺のまどろみが最高潮に達した時、部屋の外から声がかけられた。その声の主は鯉伴で、いつも通り飄々としてる癖に隙がない。本当に無駄に格好いい奴だよな。

「何か用か？ 俺は今、惰眠を貪るといふ任務があるんだが」

「ハハ、そりゃ悪かった。今晚出入りがあるだろ？ それで、ちよいと話があつてね」

出入り・・・最近、奴良組のシマで暴れている奴らがいて、今晚そいつらを討伐しに行くらしい。俺も一応、それについて行く予定だ。

「何か有つたのか？」

「いや、実は・・・お前の義妹の児衣兔、あいつも連れて行って欲しくてね」

「・・・レイを？ 何でだ？」

レイを連れていくことに、何かメリットが有るんだろうか。今回の出入りって、そこまで強い奴らだったって記憶はないんだが・・・？

「あいつ、こっちに来てから、寝るか食うか趣味に走るかだけだろ？ 組としては、流石に許容できねえからなあ」

「・・・ああ、なるほどね」

基本的にレイは、面倒なことはずせずに自分の好きなことだけをやる。つまり、完全なニート生活だ。そんな奴を許すのは、組としては下に示しがつかないのだろう。

故に、出入りに参加させることで、最小限の仕事はしていること

にすると。まあ、そういうことなら無理にでも連れていくべきなのかもな……。

「でも、ちゃんと行くかは知らないぜ？」

あいつの性格だったら、行こうとしない可能性の方が高いだろう。大した役割もない出入りに参加するなんて、面倒なことこの上ない筈だからな。

「そんな時はそんな時、他に何か考えるさ」

「ふうーん？ ま、説得するだけしてみる」

「おう、頼んだぜ」

鯉伴はにまつと笑ってそう言うが……期待しない方がいいと思うぞ？ あいつが俺の言うこと聞くなんて、本当に奇跡的なんだからな。

「……分かった。今晚、行けばいいんでしょ？」

「なん……だと……？」

あれからすぐにレイの下に赴き、鯉伴の提案を駄目もとで話してみたが……何故かすぐに了承された。一体、どういうことだ？

明日は、槍でも降るってのわ！？

「って、ぐべあっ！！！」

そんなことを思ってる内に、レイの砲撃が俺を襲っていた。くそっ、俺が何をした！！ 渾然たる事実を、的確に予測しただけじゃ、ぬがああああああ！！

「・・・失礼にもほどがある」

「・・・そりゃ、こふっ、すまなかつた」

しょうがないじゃないか。いつもの態度から考えたら、当然俺の考えに・・・ごめん、もうそんなこと考えないから、その集約されたエネルギーをなんとかしてくれ。

「・・・わたしの平穩が崩されるといふのなら、その芽は最初に摘んでおく。さっさと終わらせて、さっさと帰る」

「格好いいセリフに見せかけて、どうしようもなくニートなセリフだよな？」

「・・・だつてわたしは、兎衣だもの」

さいですか・・・。まあ、分かりきっていたことではあるさ。こいつは最初っから、全く変わらずニートだもん。ああ、いつかいい子になってくれないかな・・・。

「期待するだけ、無駄」

・・・なんでこいつは、人生負け組みたいなセリフを堂々と言ってるんだろっ。・・・まあ、俺が言えたことじゃないかもしれないが。

「で、時間が来ましたよーと」

「・・・義兄さま、見てて痛々しい」

「・・・うっせー」

夜になり、出入りの時間を迎えた。出入り組はそれぞれに準備をして、留守番組は見送りのために門の前まで来ている。ちなみにレイは、いつも通り俺の背中だ。

で、見送りの連中っていったら、戦闘員じゃない雪麗とか、先代のぬらりひよんとか・・・あと、鯉伴の家族、つまりリクオと若菜さんなんだが・・・

「気をつけて下さいね？」

「おう、行ってくるぜ」

「あらあら、こんなとこに糸屑が・・・」

と、こんな感じで新婚ホヤホヤみたいなバカップルっぷりを発揮している。いや、悔しいわけじゃないよ？俺もあんなピンク色の空気出したいなーって思ったわけじゃないよ？本当だって！！

・・・それで、この光景を見て、お似合いなんだと思うんだが・・・ちょっと、おかしいよな？だって、若菜さんは現在二十二歳

で、息子のリクオは今四歳・・・さて、どこがおかしい？

つまりはさ、若菜さんって十八歳の時にリクオを産んでるわけだよ。妊娠期間とか考えて、確実に十七の内には手を出してるわけで・・・昔ならともかく、今は絶対駄目な感じだよな。

「そうじゃ、沖児猫」

「ん？　なんだ、ぬらりひよん」

鯉伴と若菜さんの空気を辟易として眺めていると、ぬらりひよんから話しかけられた。俺が声をかけられた方を向いてみると、何やら「そこそと懐を弄っている」。

「えーい、どこに・・・おつ、有った有った。ほれ、沖児猫」

「うわっ、おつと・・・」

ぬらりひよんが懐から取り出したのは、何やら物々しい雰囲気のある刀。いきなり投げつけやがって・・・もう少しタイミングが合えば、キヤツチ出来たんだぜ？

「おぬし、刀を持ってないじゃろ。おぬしが封印されている内に手に入れた妖刀じゃ、有り難く使うといい」

「え・・・お、おお、ありがとうよ」

昔は夜王丸という名の刀を持っていたが、封印時に持っていなかったせいで無くしてしまった。だから今は手ぶらだったわけだが・・・え？　マジでくれんの？

俺に鑑定眼なんざ無いが、かなりの力が秘められていることは分かる。こんなのをタダで貰えるなんて、俺の不幸属性らしくもない・・・くそ、何が目的だ！？

「・・・まったく。人を信用することが出来るのか、おぬしは」
「・・・ああ、そうだよな。悪かった、有り難く使わせてもらう」
「うむ。その刀に妖力を込めれば、それだけ力が強くなる」
「へえー・・・」

あれ、それってなかなかチートじゃないか？ 妖力を込めれば強くなるってことは・・・あれだよ、某大魔導師の杖みたいな上限無しのパワーが・・・例えが違う？

「よし、てめーら、行くぜ」

ぬらりひよんとの話が一区切りついたぐらいに、鯉伴の号令がかかる。よっしゃ、今回の出入りで、この刀の力を試してやるう！

鯉伴を先頭にした百鬼夜行は、夜の街を練り歩く。今回の出入りは、奴良組のシマの一角で人間を襲っているという集団の掃討。そこには、すぐにたどり着いた。

幾らか量はあるが、大して強そうに見えないし、奴良組の敵ではないだろう。だとすれば今回の出入りで重要なのは、いかにそれぞれの力を発揮するか、だ。

「さて、敵さんのお出ましなわけだが・・・一番槍は、誰が取るんだい？」

その敵を見て、鯉伴が余裕たつぷりに部下に問う。まあ、俺も出て行きたいっっちゃ行きたいんだが・・・俺は鯉伴と盃を交わしたわけじゃないし、ここは譲つとこう。

「総大将、ここは特効隊長の青田坊にお任せを！」

「いやいや、ここはこの黒田坊に・・・」

一番槍を争って、青田坊と黒田坊が進み出る。こいつら普段は仲いいくせに、こういう時は対抗心を剥き出しにすんだな・・・というか、敵が可哀想じゃね？

「ハハハ、いいねえ、負けん気が強くて。お前さんたち、二人で一番槍を取りな」

「はっ、御意に！」

鯉伴からの命を受けた二人は、揃って敵の軍団に突っ込んでいく。割合としては、百対二ぐらいの筈なんだが・・・なんというか、余裕に見えて仕方ないな。

突っ込んだ青田坊は周りの妖怪を千切っては投げ、千切っては投げ・・・怪力に物を言わせて、敵を蹂躪していく。

黒田坊の方はどうかというと、こちらは武器による乱舞だ。袖の中から数え切れない程の武器を出して、敵を駆逐する。

「・・・いやー、無双だねえ」

もうこれは、無双としか言えないな。そういうのは、オリ主の俺の役目じゃないのかなー？・・・ええ、主人公じゃないですもんね、俺。

「さて、沖児猫に兎衣兎よ。あんたらも参加するかい？」

「ん・・・そうだな。そろそろ行くか」

早く戦わないと、敵がいなくなっちゃう。俺の刀の性能を見るためにも、早めの参加を・・・ってレイ、その無駄なエネルギー集約率は何だ？

「・・・面倒だから、早く終わらせる。全力全開」

以前もそのセリフで砲撃を放ったことが有ったが、その時とはエネルギーの格が違う。こんなのを放ったら、大変なことになってしまっくんじゃ

「スターライトブレイカー
SLB」

「名前的にも大変だろ！！」

そんな、人の技名をモロにばくって・・・というかちよつと待てよ・・・え？地形が滅茶苦茶に変わってる？放たれた先が更地になってんだけど！？

「こりゃあ・・・流石に予想外だったな」

そんな惨状に、あの鯉伴でさえ顔をひきつらせている。そりゃそつだよな、大した予備動作もなく、あんなバカげた威力を発揮するんだから。

こんなモノ見せられたら、戦意を喪失しそうなもんだが・・・敵はまだまだやる気らしい。奴良組のシマで好き勝手やるくらいだし、基本的にバカなんだろうか。

「・・・ま、それは俺にゃ好都合だな」

ここでさっさと戦いが終わってしまったら、俺の活躍もないし、刀の能力も分からないままだ。それではあまりにも、意味がない。

俺はぬらりひょんから渡された刀を抜き放ち、しかと握る。重さも握り心地も俺にフィットしていい感じ。試しに少し、妖力を刀に流してみて・・・

「うおっ、なんかスゲ・・・」

先ほども充分力を感じたが、今はそれよりも遥かに確かな力を感じる。これは疑うべくもなく、チートな刀・・・まさか、俺のチート街道が始まるというのか!?

「よっし、行くぜええええええ!!!!」

「ちよっと待て沖兎猫、その刀は・・・」

鯉伴が何か言っているが、俺の耳には全く入らない。俺が今関心が有るのは、この刀によって俺がチートになるのかどうかだけ! 他のことなんか知るかあ!!!

「食らいな、雑魚どもがああ!!!!」

俺は敵が群れている所まで走り込み、妖力をフルに込めた刀を振る。それはまるで羽のように軽く振れ、一振りですべての妖怪たち

全てを無に帰した。

これは 本当に、チートな刀に違いない。妖力を全力で込めるから凄く疲れるが、それを差し引いても有り得ない程のパワー、がああああああああ！？

「なっ、ぎあっ、ちょ、どうお・・・ぶぬっ、いどう、わがあああ
あ！！！！」

急に、俺の全身を痛み・・・というよりは死が襲った。首を跳ねられた時の方がまだマジというような、そんな途方もない痛み・・・マジで、何が・・・。

「あー・・・やっぱりな」

「ぎっ、鯉は、これ、ぬおっ、何！？」

「その刀は、所謂諸刃の剣なんだよ。敵を斬ったら、その分の痛みが自分に帰ってくるって代物だ」

おい、ちよつとそれは駄目だろう！？ さっき俺は何体妖怪を倒した？ たぶん十体ぐらいだから・・・約十回分の死が、俺にフィードバックしたってわけだ。

くそ・・・声すら、もう出せない。こんな痛みを味わうなんて、普通じゃ不可能だろう・・・。ちょ、レイ！ 滅茶苦茶痛いんだから、つつくんじゃねえ！！

「親父にや、軽く注意しとけって言われてたんだが・・・すまなかつた」

俺のダメージの深刻さを見てか、鯉伴が本当に申し訳なさそうに

そう言う。ぬらりひょんに注意しとけって言われてた？　それは、
どういう・・・

・・・ああ、そうか。ぬらりひょんとしては、一回身を持って知らせるために、わざと説明を避けたのだろう。その力と、その恐ろしさを知らせるために。

この刀は、一応俺の性質にぴったりの刀だからな。鯉伴に注意させときゃ、無茶はしないと思ったんだろが・・・俺がそれを聞かなかったせいで、こうなった。

・・・なんて思うとも思ったか！！　どうせ、面白そうとか思っただけだろう！？　ちくせう、こんな酷い目にあわせやがって・・・！　帰ったら、絶対に復讐してやる！！

「・・・まあ、今は休んでな。さっさと終わらせるからよ」

俺のそんな胸中なんて知らない鯉伴は、目を鋭くして刀を抜く。その威厳を感じさせる風格は、かつてのぬらりひょんと比べても見劣りすることがなかった。

「・・・黒」

「はっ、ここに」

「お前の畏、オレに貸してくれ」

鯉伴のその言葉と同時ぐらいに、黒田坊が自らの畏を放つ。そしてそれを鯉伴が身に纏い、鯉伴の持つ刀に集中していつて・・・その力を、俺に魅せつける。

「見てな、沖兎猫。これが、百鬼夜行の主の御業だ」

黒田坊の畏を纏った鯉伴は、それを妖怪の残党に向けて放つ。刀・槍・薙刀・・・色んな種類の武器が鯉伴から現れ、残っていた妖怪を殲滅し尽くした。これは・・・いつたい、なんだろう？

「ああ、これはだな」

俺の疑問に答える形で、鯉伴はその御業とやらの説明を始める。曰わく、その業の名は『鬼纏まとい』。百鬼夜行の主が、配下の畏を己に纏わせる業。

一応、種類が有るらしいが・・・面倒なんでカット。だってさ、そこは重要じゃないんだよ。ここで重要なのは、その鬼纏が・・・滅茶苦茶強いつてことだ。

もしこれが使えたらさ、妖刀の代わりになるチート能力にならないか？ 鯉伴が使えらつてことは、俺オンリーの能力じゃないけど・・・でも、いいよなあ。

けど、俺が使えるかどうかっていったら、無理なんだろうな・・・色々と条件が有るみたいだし・・・まあ、記憶に留めることだけはしておこうか。いつか役に立つ時が来るかもしれない。

「それにしてもさ・・・」

「ん？ 何だい？・・・というか、もう回復したのかよ」

鯉伴が少し驚いたように言うが・・・俺の回復力をなめちゃいけないぜ？ 10回分の死を味わった？・・・はっ、そんなことで何分も倒れてたら、今までやってこれなかったさ。

「……この惨状は、どうするべきか」

周りを見渡せして視界に入ってくるのは、変わり果てた荒れ地だ
け。レイのSLB（仮）に、鯉伴の鬼纏……。そりゃ、そうなるさ。
これ、どうするつもりだよ。

「あー、えっと、だなあ……」

俺の言葉にやり過ぎたことを気づいたのか、鯉伴はやっちまった
って顔をする。いつもは余裕ぶってるから、なかなか新鮮な光景
だな、おい。

というか、いまさらだけど、明らかにオーバーキルだったよな。
あんな雑魚集団相手に、大技連発しまくって……。極道とはいえ、
余りに酷すぎだと思う。

「……ま、いいんじゃないか？」

「いいのかよ……」

まあ、鯉伴がいつて言うなら、俺が気にすることじゃない。目
的も達成したことだし、さっさと帰って寝るか……。

翌朝、起きてテレビをつけてみると、例の現場が映されトップニ
ュースとして騒がれてた。……。うん、そりゃそうなるわ。

人の話は、ちゃんと聞きましょう（後書き）

沖兎猫の新しい刀について 銘は、二代目夜王丸（沖兎猫命名）。ぬらりひょんが全国を回っている時に見つけた、強力な呪いのかかった妖刀。

その効力は、込めた分の妖力を威力に変えるというもの。基本的に上限はないが、沖兎猫の妖力の総量が上限。まごうことなく、チートの類である。

ただ、使用者にもリスクが大きい。敵を斬りつけた場合、込めていた妖力分のダメージが自分に帰ってくる。フルに妖力を込めれば、普通はシヨック死するレベル。

・・・とまあ、こんな感じです。沖兎猫の回復力考えればチートな気もしますが・・・当たらなければ意味がないし、多用は流石にちょっとキツイ。ということ、最弱ぶりは変わらず。

そして、前回行ったアンケートですが・・・なんと19人もの方が協力してくれました。まさかの多さに、少し目を疑いましたよ・・・ガクブル。

そのアンケートの結果から言えば、羽衣狐様とゆらが多い感じですが・・・これについてはどうするべきでしょうかね？

羽衣狐様は依り代にカップリングが有るんで、本体ということになるような・・・どうしてもというなら、昼は依り代で夜は羽衣狐様とか？・・・ないか。

ゆらは最初自分でも落とそうと思ってたんですが・・・待っててく

れ、原作でゆらは中学生。沖見猫は一応見た目年齢も大人なわけで・
・・ロリコン。

というわけで、まだどのキャラをどうするかは決めてません。ですが、アンケートにリクエストがあったキャラには、確実に絡みを入れていきます。その流れでいい感じになれば、入れてみようかと・・・。

黒髪ロングっていいよね（前書き）

いやー、やることが決まってるってスラスラ書ける。ちょっと今回は、最後の辺りがシリアス気味かな？

あ、今回はかなりネタバレ要素を含むので、単行本派の人はご注意を……。いまさらなのかもしれませんが。

黒髪ロングっていいよね

「・・・義兄さま、早く」

「まったく、分かったよ」

先日の出入りから少し経った今日、俺はレイを背中に乗せて、街に向かつて走っている。まったく、楽をしてるんだから、もう少し俺にいたわりを持ってっただ。

こんな状態になっている理由は、いつもの通りレイの我が儘。なんでも、今日は一人一つ限定ケーキの販売日らしく、俺を使って買おうと・・・面倒くせえ。

「こないいい天気の日じゃ、ゆっくり昼寝でもしたいのにな・・・ん？ 鯉伴？」

俺が不満を言いながらも足を進めていると、視界に見知った顔を見つけた。それはいいんだが・・・あれ、なんか滅茶苦茶可愛い幼女が一緒にいるんだが。

その幼女を一言で表現するなら、黒。綺麗なストレートの長髪に、肩まで露出した黒のワンピース。とても白い肌が、それを更に引き立てている。

「なあ、レイ。ちょっと寄っていいか？」

「・・・遅くならないなら、許可する」

レイの許可を貰えたので、少し方向転換。鯉伴がいる方に、足を進める。よく見れば鯉伴の横には、幼女の他にリクオもいるようだ。

・・・じゃなきゃちよい拙いか。

「おい、鯉伴！」

「ん？・・・沖兎猫か、どうしたんだ？」

近寄って声をかけると、鯉伴は普通に返事をした。・・・良かった、普通に返事をするってことは、やましいことは無いんだな。うん、本当に良かった。

「その子、どうしたんだ？」

俺は横目で幼女を見ながら、鯉伴に問いかける。・・・字面だけ見たら、なんか変態っぽいな、俺。・・・違うからな！？

「ああ、この子はリクオと遊んでくれてたらしくてな・・・」

「はい、こんにちは」

鯉伴が少し促すような目を見ると、幼女はニコツと可愛い笑みを浮かべた。その笑みは含むところがなく、純粹そのもので・・・くっ、マジで可愛いな、おい。

「・・・なあ、君？」

「はい？ なんですか？」

「大きくなったら、俺のハーレムに、いいいいいいいい！！！！」

俺が未来の美女の懐柔に動こうとすると、いきなり鯉伴が頭をぶん殴ってきた。・・・って、はあ！？なんで殴られなきゃ・・・はっ、まさか、マジで・・・

「やっばお前、ロリコンだったのか！？」

「・・・んなわきゃねえだろ。というか、やっぱりって何だ、やっぱりって」

え？ 女子高生に手を出したこと考えたら、ロリコンって思わない方が少ないだろ？ ぬらりひよんも、瑛姫の歳考えたらロリコンっぽい・・・時代が時代だしな。

「・・・ちよつと、離れてってくれるか？」

「はい、分かりました。 リクオ、あつちで遊ぼう？」

「うん！ 行こ、お姉ちゃん！」

俺に何か話でも有るのか、鯉伴は子どもたちに離れるように促した。幼女は素直に快諾して、リクオを引っ張っていく。・・・うん、いい子だな。

「・・・で？ 何か話でも有るのか？」

「ああ。ちよつと、な・・・」

リクオと幼女が離れた頃を見計らって、俺から鯉伴に切り出す。鯉伴は少し迷った風な顔になるが・・・まあ、ちゃんと話してくれるみたいだな。

「・・・まだ、おふくろも生きてる頃だ。オレには、若菜の前に嫁がいたんだよ」

・・・まあ、そのぐらいは当然かもな。四百年も生きてきて、最近までいなかった方がおかしい。・・・けど、それが今、何の関係が有るんだ？

「そいつは山吹乙女って言ったんだが・・・あの娘に、そっくりで

な

鯉伴は幼女をじっと見つめ、昔を思い出すような顔をする。その顔からして・・・あまりよくない別れ方だったのだろうか。

「オレたちの間には、子ができなかった。羽衣狐の呪いのせいだな・・・。だがあいつは、それを自分のせいだと思い込んで、オレの前から姿を消した」

「・・・なるほど。それでか？」

「ああ。だから・・・オレには、あの娘がオレたちの娘みたいに見えるんだ」

「・・・まあ、だとしたら、俺のセクハラ紛いの発言は許せないだろう。・・・このシリアスな空気で、昔の女引きずってるな」とか考えちゃ駄目だよな。

「・・・義兄さま、そろそろ」

その鯉伴の話が終わったのを見計らって、レイが俺を急かす。ああ、ちよつと長引いちゃまったな。レイの性格からしたら、待つてくれただ方なのだろう。

「ん。じゃ、鯉伴、そろそろ行くわ」

「おう、気いつけて行きな」

鯉伴に別れを告げて、俺は街に向けて方向を変える。そこでふと気づいて、幼女とリクオの方を見ると、こちらに向けて手を振っていた。

「・・・ん？」

手を振り返した時、何やら幼女の顔が誰かとかぶった。んーっと・
・誰だろう、知り合いにはいない筈だが・・・。・・・まあ、い
つか別に。

そうして思考を切り替えて、俺は街に向けて走り出す。・・・こ
の時、もう少し思い出す努力をしていれば、悲劇は起こらなかった
のだろうか・・・？

俺とレイは街でケーキを入手することに成功し、現在は奴良組の
屋敷に帰宅中。レイは普段無感情な感じが多いが、今は少し機嫌が
いい気がする。

「・・・んー、誰だったっけな」

そのレイを背負ってる俺は、しかめっ面で絶賛考え中。あの幼女
が誰に似てるのか、やっぱり気になるんだ。小骨が喉に引っかかっ
てるような感じ。

似てる奴は絶対に見たことがある筈なんだが・・・少なくとも、
今世ではない。だとすると前世なんだろうが・・・前世の知り合い、
一人も覚えてないからなあ。

「だとすれば、こっちが一方的に知ってるとかか？」

芸能人みたいな、テレビで見る人とかに似てるのかもしれない。
あの娘は凄く可愛かったし、成長したら華のある芸能人みたいになるだろう。

それなら、知り合いに覚えがないのも頷ける。でも、似てるのが
芸能人にいたかって言えば、記憶にない、・・・ちよつと待て、ま
さか・・・。

「まさか・・・羽衣狐か!？」

前世の記憶にある、数少ないぬらりひよんの孫のキャラ。その内
の一人、羽衣狐・・・。江戸時代の奴は別人だったみたいだが・・・
あの娘は、とても似ている。

顔立ちも記憶にある羽衣狐とそっくりだし、黒づくめというのも
同じ。こう考えれば、彼女が羽衣狐じゃないという方が考えづらい。
くそ、なんで思い出せなかった!

「レイ! 悪いが寄り道する!」

「え、ふざ・・・」

レイが抗議の声を挙げようとするが、ここは無視して先ほどの場
所まで走る。ケーキが崩れるかもしれないが・・・今は、そんなこ
と言ってる場合じゃねえ!

「いねえな」

全速力で飛ばして、先ほどの場所まで戻ってきた。だが、鯉伴やリクオ、あの娘の姿はない。まあ、同じ場所にずっと居るなんざ思っただけだが……。

「いったい、どこに……ん？ リクオ？」

「ハア、ハア……沖兒猫？」

どこに行ったかを予測しようとしていると、リクオが走ってこちらへ向かってきた。その顔には涙が浮かんでいて、荒々しく息を切らしている。

「どうした、何が有った？ 鯉伴は？」

「お父さんが、血まみれで……」

血まみれ……だと？ まさか、羽衣狐が？ というか、鯉伴がそんな簡単にやられる筈はないんだが……って、そんなこと悠長に考えてる場合じゃなかった！

「リクオ！ この箱持って、どこかに隠れてる……！」

俺は強引にケーキの箱をリクオに預けると、リクオが走ってきた方向に全速力で駆ける。レイは抗議することを諦めたらしく、もう

何も言わない。

少し走ると、山吹の花が沢山咲いている場所に出た。先ほどの鯉伴の話が思い出される中で、その中心に、血まみれで倒れている鯉伴を見つける。

「鯉伴！ 大丈夫か！？」

俺は鯉伴に近寄って、状態を確認しようとする。だが、そこで気づいた。鯉伴が血まみれってことは、当然それを行った奴が近くにいるわけで……

「フェフェフェ。何じゃ、おぬしは？」

「……いや、お前のが何だよ」

怪しげな声の主は、肩に変な鳥を乗せた、頭にデカイ目玉がある爺。どう見ても、こいつのが不審者だろうよ。むしろ、そうじゃなきゃ困る。

「ま、答えなくてもいいが……これを行ったのはお前か？ それとも、羽衣狐か？」

「フェツフェツ、ワシは見ての通り戦闘には向かぬよ……」

……それは、羽衣狐がやったってことか？ いや、何か違う気もする。あの娘の姿も見えないし……いったい、どうなってやがる。

「で、羽衣狐はどこにいるんだ？ うちの大将をこんな目に遭わせたんだ。きっちり落とし前つけてもらわなきゃならんのだが」

情報が少なすぎて判断のしようがないから、直球で尋ねてみる。
こいつは俺を侮ってる節があるからな、たぶん普通に答えてくれるんじゃないだろえか。

「フエフエフエ。羽衣狐様なら、既にワシの仲間が保護してあるよ。落とし前をつけられなくて、残念じゃったなあ？」

やっぱり、べらべらと喋ってくれたな。にしても、仲間か・・・保護してるってことは、つまり・・・。こりゃ、単純な羽衣狐の仕業とかじゃないみたいだな。

「ふっ、なら・・・てめえを捕まえて、代わりになってもらおうか！..」

これ以上の情報はさすがに話さないだろうから、あの爺をひっ捕まえることにする。いくら俺でも、あんな爺ぐらい・・・やべ、フラグっぽい。

俺は二代目夜王丸を鞘から抜きながら、爺に向かって走り出す。
・・・俺が近づいてるってのに、動く様子がない？ いったい、どういふつもりだ？

「フエフエフエ　　夜雀、やれ」

爺が嘲笑を浮かべながらそう言うと、俺の横にいきなり女が現れた。黒い羽を持ち、顔を布で覆い隠している。・・・おいおい、どう見ても美女じゃないか。

「って　　なっ!?!」

その美女の羽が俺の目に入った瞬間、俺の視界は真っ黒になった。何も見えない、完全なる闇……。これは、夜雀って妖怪の能力か……。？

「がつ、ぐあつ！」

視界がないからよく分からないが、おそらく夜雀に蹴られたり斬られたりしているらしい。目隠しプレイか？ なかなかそそるが、俺はやる側に回りたいな。

「……。なあ、夜雀って言ったか？」

いたぶられてる中で、俺は夜雀に問いかける。しかし、夜雀はまったくの無言……。まあ、さつきから一言も喋ってないし、無口な奴なのさ。無視されたんじゃない！

「お前、俺のハーレムに入らないか？」

そう言った瞬間、一瞬だけ攻撃のリズムが変わった。まあ、バカな発言に呆れてるのかもしれないが……。ここはポジティブに、動揺してると捉えよう。

「俺はお前みたいなの（美女）が大好きなんだ。……。な？ 俺のハーレムに入れよ」

って、ちょっと待ってくれ。いきなり攻撃のスピードが上がったんだけど！？ 照れ隠しだよな！？ じゃなきゃこんなダメージ、やってられんわ！！

「つつ、ゴブツ！ ぬ、ぐおお……。！」

猛攻が続いていた中で、最も強烈なダメージが、俺の腹を襲った。この感触から考えるに・・・たぶん、夜雀の武器の薙刀が、俺の腹を貫通してるんだろう。

「フェツフェツ、良くやった夜雀。何者かは知らぬが、手こずらせ・・・!？」

「・・・なあ、夜雀」

爺が阿呆なことを抜かしてるが、俺は無視して薙刀をがっちり掴む。夜雀が抜こうとするが・・・離さねえよ？ 滅茶苦茶痛いかな!!!

「俺のところに、来ないか？」

薙刀から辿って夜雀の手を掴み、強引に引き寄せてから囁く。夜雀は逃れようとジタバタ暴れているが・・・見えないせいでその表情が見えないのが、非常に残念だ。

「心は怠惰が占めている。」

俺がそんな口説きモードに入った時に、背中から聞こえてきたその詠唱。これは確か、昔レイが使った固有結界の!？」

「昼間はニコ動、夜中は2ch。」

「おい、レイ!？」

なんでいきなり、レイは呪文を唱え出したんだ？ いや、その固有結界使ったら、夜雀も爺も無力化できるから、俺としては大歓迎なんだけど。

「・・・いい加減、避けるのが面倒になってきた。 幾たびの指導を受けて不変。ただの一度も反省はなく、ただの一度も理解されない。」

「・・・ああ、そういや俺が攻撃されてたつてことは、背中にいるレイも攻撃されてたつてことだよな。・・・というか、今まで全部避けてたのかよ!？」

「ぬ、まさか、沖兎猫に兎衣兎か!？」

レイの詠唱を聞いて思い当たることでも有ったのか、爺が動揺した声を出す。・・・え、まさか俺たち意外と有名だったりする?・・・いや、羽衣狐の仲間だからか。

「彼の者はうpを期待、パソの前で全裸で待つ。」

そんな爺の焦りなぞ無視して、レイの詠唱は終盤に差し掛かる。夜雀は必死に薙刀を抜こうとしてるみたいだが・・・さすがに、ここまできたら俺も頑張るぜ?

「夜雀エ! 構わん、ここは引け!」

「故に、世間体に意味はなく。」

爺の指示から一瞬で、薙刀にかかっていた圧力が消える。これ以上長引かせたら、レイの詠唱が終わるからな。妥当と言えば、妥当な判断だ。

「おい、夜雀!」

まだいるかは知らないが、大きな声で夜雀を呼ぶ。・・・やべ、腹にぶち刺さってる状態で叫ぶと、滅茶苦茶痛え・・・。

「いつでもいいから、薙刀取りに来いよ。歓迎してやるからな？」

その言葉がいい終わらない内くらいに、暗かった視界がうっすら明るくなる。最後に見えた夜雀は、横目でチラッと俺を見た後、爺を連れて飛び去って行った。

「・・・ふう、終わったか」

完全に夜雀たちがいなくなったのを見計らって、俺は薙刀を引き抜いた。呪文を最後まで唱えきれなかったレイは、顔が見えなくても不機嫌な様子が伝わってくる。

「・・・逃げられた」

「構わねえさ。それより・・・鯉伴！」

夜雀たちがいなくなったことだし、俺は素早く鯉伴に駆け寄る。かなり血が出てるとはいえ、鯉伴は半分妖怪。息さえあれば、なんとかなる可能性もある。

「よし、微かだが息がある！」

本当に集中しなければ分からないほどのレベルだが、ちゃんとまだ呼吸をしている。これなら、なんとかなるかもしれない。

「っと、こういう時は医者を・・・間に合わないな。なら、自分でやるしかないか」

つつても、俺って医療知識なんざまったく無いし……とりあえず、止血と体力の回復が重要なんだろう。それさえやっとならば、後はなんとかなる……気がする。

「えっと、確かこの辺に……あった！」

俺が懐から取り出したのは、以前教頭から貰った薬の中の一つ。簡単に言えば回復力増強薬だが……俺にはあまり必要ないから、使うことになるとは思わなかった。

水とかなないから飲ませにくい……なんとか無理やり飲ませる。どうやって飲ませたかについては、企業秘密だ。いや、大したことじゃないが。

「……でも、このままじゃ拙いな」

今ので出血は止まったみたいだが……こんなの、焼け石に水だ。早く治療しないと、手遅れになる。ヤバい。

「ちくしょう……何か、ないのかよ」

何でもいいから……何か、ないのか？ このままじゃ、マジで鯉伴は死んじゃう。そんなの、許すわけにはいかねえ。本当に、何か……。

「……もう、無理なんじゃないの？」

俺が頭を巡らせている中で、レイのそんな言葉が聞こえた。レイは俺の背中から降りて、鯉伴の容態を窺い、首を横に振る。

「・・・やっぱり、鯉伴はあと数分で死に至る。・・・義兄さまは、自分出来ることは全てした。誰も責めはしないのだから、諦めて・・・っつー!」

・・・そんなレイの言葉は、途中で止まった。・・・まあ、その原因は、・・・俺が、レイの頬を平手打ちしたせいだが。

「・・・何を「あんな、レイ」・・・?」

レイは目を鋭くして抗議しようとしたようだが、俺はその言葉を途中で遮る。本当はこんなことしてる場合じゃないんだが・・・言っとなきゃならないだろう。

「別に、死んじまった後なら、何を言おうが俺は知らねえよ。・・・けどな、こいつはまだ死んでないんだ。最後の最期まで、諦めるんじゃないねえ」

奇跡なんざ俺は大して信じちゃいないが・・・ないとは言えない。それが万分の一の確率でも、万に一回は起こるんだ。だったら、最後まで足掻くべきだろう?

「・・・ま、ぶつたのは悪かった。後で、好きにするといい」

「・・・別に、いい」

「そうかい。そりゃ良かった」

うん、言っただけがいいが、やられたくはなかったからな。・・・でも、そんなことで状況がよくなりはしない。・・・どうすりゃいいのかな・・・。

「・・・っつー」

「ん？ どうした？」

「・・・一つ、方法が無くもない」

レイは先ほどよりも真剣な面持ちで、静かにそう言った。方法がある・・・それが本当なら、希望の光が見えてくる。

「それは、どういう？」

「・・・鯉伴を、一度封印する」

封印、か・・・。封印すれば、確かに死ぬことはなくなる。すぐには解くことが出来ないだろうが・・・数年も経てば、ある程度は回復するだろう。

「なるほど・・・出来るのか？」

「・・・秀元を見て、だいたい覚えた」

おい、見ただけで覚えるとか・・・本当羨ましいな、そのチート振り。・・・まあ、そのチートのおかげで何とかなるかもしれないから・・・いいことだが。

「よし、それでいこう」

「・・・分かった」

そうして、レイは封印術式を展開し、数分後には鯉伴を完全に封印することに成功した・・・。

「　　ってわけだ。・・・勝手なこととして、悪かった」
「・・・いや、おぬしらはよくやってくれたよ。ワシも、それが最上の選択じゃったと思う」

鯉伴を封印し終えてから一時間ほど経った今、俺とレイはぬらりひよんと会談している。他の奴らにはまだ言っていない・・・完全な機密事項だからな。

「その封印、すぐに解くわけにはいかんのじゃろ？」

「・・・今解いたら、危篤状態のまま。最低でも、五年・・・もつとかも」

「・・・じゃろうなあ」

ぬらりひよんは渋い顔をしながら、腕を組む。恐らくは、考えているのだろう。これから、どういった風にすればいいのか。

「鯉伴は死んだ・・・とした方が、いいんじゃろうな」

「・・・まあ、ベターな選択だろう」

ありのままを公表すれば、鯉伴をやった奴らが再び狙ってくるかもしれない。・・・そうすれば、せつかく助かった命が無駄になってしまう。

「これから、荒れるな・・・」

「・・・ああ」

その会談の数時間後、鯉伴の死が公表された。真実を知っているのは、俺たちと若菜さん、そして一部の幹部（隠蔽に必要な最小限のみ）。

総大将の座にはぬらりひよんが戻り、態勢が大きく変わった。・
・これから、いったいどうなるのだろうか・・・？

黒髪ロングっていいよね（後書き）

というわけで、原作ブレイクの鯉伴（一応）生存ルートに突入。また封印？と思うことでしょう。ええ、分かっています。そうさ、オレは困った時は封印さ！

まあ、この展開にするかはちょっと迷ったんですけど・・・やっぱり、京都編をハッピーエンドにしたかったんでね。まだ、若菜さん問題がありますが・・・。

そして、夜雀とちょっと絡ませてみました。どう思ってるかは、分からない感じで・・・今後出会った時に、どう動いてくれるかな？

次話は・・・一気に原作一話にいくか、雪麗落としにかかるか・・・どちらにしても、たぶん今回よりはギャグ色強めになるとわれ。

つららの頑張り物語（前書き）

なんとなくの思いつきによる産物です。今回はつらら視点オンリー……堀江さんボイスで再生することをおすすめします。

そして、今回は声優ネタ……というよりはひぐらしネタが多し。作者の趣味です。羽入可愛いよ羽入。

つららの頑張り物語

皆さんこんにちは、雪女のつららと申します。本日は、私のお母様である雪麗と、沖児猫様というお方のことを話したいと思います。

沖児猫様は私が生まれるずっと前、江戸時代の頃に、義妹（義が重要らしいです）の児衣兔の我が儘というか何というかで、封印されていたとのこと。

私が生まれた当初、お母様は子守歌のように、私に沖児猫様の話をしてくれました。きっとそれは、沖児猫様との日々が、とても楽しかったからなのでしょう。

お母様の話は終始、沖児猫様がいかにバカだったかということに尽きていました。だけど、お母様の表情はとても楽しそうで・・・私は子どもながらに、とても素晴らしいお方なのだろうと感じたのです。

その考えは、すぐに証明されました。ちょうど西暦二千年のこと、沖児猫様の封印が解け、奴良組に戻られたのです。私は、沖児猫様の案内役に命ぜられました。

案内中に、何故か熱い視線を私に向けてきたり、偶に身悶えるような仕草をして、おかしな方だとは思いましたが・・・話してみると、本当に面白いお方でした。

それは、お母様の話から浮かんだ人物像に、ぴたりと合致したのです。だから、私が沖児猫様のことを好きになるのに、時間はかかりませんでした。あ、いえいえ！好きと言っても、親愛の好きです！

その後、沖児猫様の帰還をお母様にお伝えしたのですが・・・その時のお母様の顔は、喜びで溢れていて・・・私は確信しました。お母様は、恋をなされている！と。

お母様は沖児猫様のことをあれだけ貶していたのですから、きつとお認めにならないでしょう。しかし、私には分かります。つららの乙女の勘なのです！

沖児猫様の方も、きつとお母様のことをごまざらではないはずですよ。私の父親のことを考えて、嫉妬なされているようでしたから。・・・さすがに、沖児猫様をお義父様とは呼べないですけど。

その再開の翌日でしたでしょうか、沖児猫様は宮姫様と恋仲になったそうです。昔からそういう関係に近かったとは聞いていたのですが・・・お母様は、それを聞いてどう思われたのでしょうか・・・。

そのことが気になってモヤモヤしている間に、約一ヶ月が経過してしまいました。お母様の様子も、その間とてもおかしくて・・・仕事に支障はなかったようですが。

その日は奴良組揃っての花見の日で、私たちは朝から大忙しでした。料理を作ったり、幹部の皆様のお酌をしたり・・・大変ですが、やりがいのあるお仕事です！

そして、花見の宴会中、私はお母様を捜していました。特に用はなく、ただ捜していただけですが・・・その時、つららは見たのでございます！

「俺は純粹に女を愛する。ハーレムってのは、俺が愛する奴ら全員が悲しまない形。ミヤもお前も、俺は全力で愛する」

ドツカーン！と、私の背中に雷のエフェクトが出た気がします。ハーレム・・・以前にも沖児猫様は仰っていました。まさか、本気なんでしょうか。

沖児猫様は、きっと本気です。お母様のことも、宮姫様のことも愛するでしょう。・・・今の言葉を聞いて、お母様はどう思ったのでしょうか？

お母様は・・・何を言っているか分からないというような、呆然とした顔をしています。口をパクパクさせて・・・何か言いたいの、言葉にならないのでしょうか。

「んじゃ、俺は他の奴らの所行って来る」

言いたいことを言い終えた沖児猫様は、お母様の下を離れます。ですが、そこは重要ではありません。重要なのは・・・そこでのお母様の反応です！

「・・・あ」

お母様は、沖児猫様を引き止めようとした手を、慌てて引っ込めたのです！そして、離れていく沖児猫様を、じっと眺めています・・・！

私はお母様の娘ですが、敢えて言わせて貰います・・・あなた、なんて可愛いんですか！ああ、これが沖児猫様が熱く語ってくれた、萌えというやつですか・・・！

「……ええ、決めましたとも！」

私は……お母様と沖児猫様を、絶対にくつつけてみせます！
宮姫様には悪いですが……私は、娘として、お母様の幸せを望んでいるのです！

……と、その時決意したのはいいですが、行動に移すことは出来ませんでした。総大将である鯉伴様が亡くなられて、奴良組がこたついたので、

沖児猫様も、とても忙しそうにしていました。……普段働いていないだけというツツコミは、つららには対応不可能なので、あしからず。

そのせいもあって、お母様だけでなく、宮姫様ともあまり一緒にいられなかった様でした。……まあ、一緒にいれる時は目一杯楽しんでおりましたが。

そんなこんなで、長い間お母様と沖児猫様の間に進展は有りませんでした。ですが……そろそろ私も、我慢の限界です！ ということで……

「お母様！ 早く沖児猫様に告白なさって下さい！」
「……いきなり、何？」

夜中、睡眠につく前にお母様に言ってみました。お母様は鬱陶しげに、冷たい目を向けてきました。ですが、今日のつららはお母様に負けません！

「もう、見てもらえません！ 沖児猫様なら、お母様のことを受け入れて下さるでしょうから……」

「……あのね、私はあいつのことなんて、何とも思っていないわよ」「嘘だっ！！！」

え？ 中の人が違う？……いったい、何のことですか？

「お母様は、沖児猫様のことを……」
「……もう、その話は終わりよ。……早く寝ましょ」

お母様は私の話を無視して、さっさと布団を被ってしまいました。……ええ、お母様。あくまでも、意地を貫くんですね？ なら、私にも考えがあります！

「……おやすみなさいませ」

私はお母様に挨拶して、お母様の隣の布団に潜り込みました。今日のところは、ここで終わります。ですが、明日さっそく行動に移ることにしましょう！

「沖児猫様〜！」

「ん？ つららっ。」

翌日、朝の仕事を済ませた私は、廊下を歩いていた沖児猫様を呼びました。沖児猫様は起き抜けなのか、眠そうに目を擦りながらも立ち止まって下さいます。・・・もうすぐ、お昼ですよね？

「どうした？・・・はっ、まさか、俺のハーレムに自ら志願しに来たのか！？」

「えっ、い、いえ！ そんなわけないじゃないですか！」

沖児猫様は、どうしてそんな解釈が出来るのでしょうか？ 私はただ、沖児猫様にお母様のことをどう思っているか、率直に聞こうと思っただけなのに・・・。

「はっはっは、照れなくていいんだぜ？ よし、俺の胸に飛び込んで来い！」

「何故この状況で、そんな言葉が出てくるのですか！？」

このお方は、どれだけ自分の都合のいいように解釈するのでしょうか！？・・・い、いえ、きっとこれは、沖児猫様なりの私とのスキンシップなのでしょう！！

「冗談はほどほどになさって下さい！ 沖児猫様はお母様を、は、ハーレムに入りたいのでしょうか？ それなら私は・・・」
「・・・あのな、つらら」

私が必死になって反論しようとしていると、途中で沖児猫様が私の肩に手を置いてきました。・・・いったい、何を仰られるおつもりでしょうか？

「この世にはな、親子丼というジャンルが存在するんだ。・・・それに俺は、来る者は一切拒まないさ（美女限定で）」

「お、親!? どういう意味・・・、というか何故、俺いい事言っただなというようなオーラを出しているのですか!?!」

こ、このお方、底が知れない・・・! というより・・・はっ、しまった、沖児猫様のペースに乗せられて、当初の目的を見失っていました!

「あ、あの、沖児猫様・・・」

「・・・分かつてる、みなまで言わなくともいい」

そう言いながら沖児猫様は、私のことを軽く抱きしめてきました。・・・え、えー!? なんでこんな、というか何も分かってないじゃないですか?!

「あうあう、こんな時は・・・」

中の人ネタ? そんなことは知りません! ...そ、それより、お母様から、こんな状況になったら遠慮なく凍らせると言われていました!

「すみません、沖児猫様!」

私は無礼だとは知りつつも、沖児猫様に冷気をぶつけました。・・・これで、機嫌を損ねられなければいいのです、が!?

「ふっふっふ、温いな」

「え、ええ!?!」

沖児猫様は、冷氣？ 何それ、美味しいの？ とでも言わんばかりに、余裕な顔をしています。な、何故なんですか！？ 加減したとはいえ、そんなバカな……。

「この程度じゃ、俺、ぶわあああああああ！！！」
「ふえ？ え、沖児猫様！？」

私の冷氣を軽く耐えた筈の沖児猫様は、絶叫しながら凍りつきました。この、私がよく知っている畏は……

「ふん、つらら……そいつにはね、加減なんかせずに、殺すつもりでやりなさい」
「お、お母様！」

振り返れば、機嫌がとても悪いお母様がそこに。殺すつもりって……さすがにそこまではやらなくても……いや、お母様が言うなら、そうなのかも。

「さつきから聞いてれば、意味の分からないことをべらべらと……」
「ぶぶつ、聞き耳立ててた、ぬおおおおお！！！」
「ふん、聞こえてきただけよ」

……えーっと、これは何なのでしょう。夫婦漫才？……まあ、何にせよ、沖児猫様に直接聞くのは駄目そうです。他の手を考えましょう……。

「兎衣兎、あなたはどう思う?」

一日経って、私は兎衣兎に相談してみました。兎衣兎は沖兎猫様の義妹で、一番近い存在です。何か、この状況を打開する方法を教えてくださいませんか。

「・・・さあ。そんなこと、わたしが知るわけがない。・・・それに、わたしは今とても忙しい」

兎衣兎が返してきたのは、そんなそつけない答え。・・・忙しいと言っても、シュークリーム食べてるだけじゃない。誰かから送られてきたらしいけど。

というか、シュークリームって私が食べるべきではないのでしょうか、中の人から考えて。・・・ええ、ネタだとか知りません、ただ単に食べたいんです。

「・・・食べたい?」

「もちろん!・・・って、本当に!??」

そんな、まさか兎衣兎が自分のシュークリームを!??・・・いや、駄目です私。きつと兎衣兎は、気を利かせてくれて・・・いやでも、食べたいし・・・

「・・・持ってきた」

と、私が葛藤している間に、新しい物を持ってきてくれた様です。あー、いけません、用意されてしまったら、反故にする方が失礼ですよね!??

「……目を閉じて。食べさせてあげる」

「え！？ いや、そんなこと……」

「……駄目？」

「……ぐはっ！ 児衣兔に上目遣いでそんなことを言われて、断れるわけないじゃないですか！……この子は将来、魔性の女になっ
つてしまいそうです。」

「分かりました……」

結局私は、児衣兔のお願いに負けてしまいました。ええ、これもきつと萌えなのでしょう。……私、沖児猫様に毒されてきている
気がします。

「……あーん？」

「あーん」

そんな、バツクに百合の花が咲いていそうなやり取りで、児衣兔は私の口にそれを入れてきました。私はそれを噛みしめます。それは辛い……!?

「ひえ、辛ひれす！ 何故なのれふか！」

児衣兔に食べさせられたのは、シュークリームではなくキムチでした！ 何ということ……！ 悪魔です！ 悪魔の所業なのです！

「……やつぱり、予想通り」

「酷いれす、児衣兔！」

私の反応を見た児衣兔は、満足そうに親指を突き出しました。「やっぱり羽入・・・」とか言っています。私には何のことかさっぱりなのです！

・・・はっ、またしても昨日に続き、ペースを乱されてしまいました！ 沖児猫様といい、児衣兔といい・・・この義兄妹、とても似ている気がします・・・。

「んー・・・結局、どうしたらいいのでしょうか・・・」

児衣兔と別れた後、私は自分の部屋に帰ってうんうんと唸っています。頼みの綱だった児衣兔も駄目で、もはや手詰まり感が溢れてきました。

「・・・もしかして私は、無駄なことをしているのでしょうか」

何も思いつかなければ、段々と思考がネガティブになっていきます。・・・いえ、そもそもこれはお母様の問題で、私が口を出すことではなかったのかもしれない。

「でも・・・お母様には、幸せになつて欲しいんです」

これは、私の我が儘なのかもしれません。けど、私にはどうしても、お母様は沖児猫様と添い遂げるべきだと思つのです。

・・・これ以上は、私には何も出来ません。ですから、最後にお母様の本心を確認しましょう。それで・・・

「お母様、本心では沖見猫様のことをどう思っておられるのですか！？」

すぐに私は、お母様に話しに行きました。いきなり過ぎて、わけが分からなかったかもしれない。お母様は、うんざりとしたようでした。

「またその話？ 前にも言ったでしょ、私はあいつのことなんか好きじゃないって」

「いいえ！ お母様は沖見猫様のことが好きです！ 見ていれば分かります！」

「・・・違つわよ」

・・・沖見猫様が以前、お母様はツンデレと言ったのが分かる気がします。なんでこんなに素直じゃないのでしょうか。初代様には猛アタックしたらしいのに・・・。

「何故、そんなに認めないのですか？ お母様だって、分かっておられるでしょう？」

前々からの態度から考えて、お母様が自分の気持ちに気づいているのは分かります。だったら何故・・・そんなに意固地になって、拒み続けるのでしょうか。

「・・・そう。あなたにも、そんな風に見えるのね」

「もちろんです！ そう見えないなら、私は乙女ではありません！」

私が断言すると、お母様は深くため息をつかれます。そして、少

し考える素振りを見せて、もう一つため息。その後、その重い口を開きました。

「・・・そうね、私はあいつのことが・・・好きなんでしょうね」

お母様はしぶしぶといった感じに、沖児猫様が好きなことを認めます。でも・・・何故こんなに、複雑な表情をしているのでしょうか。

「それでも、私はあいつとどうしようとは思わないわ」

「何故ですか!？」

「その方が、全員のためになるからよ。沖児猫にも、宮姫にも、・・・私にも、ね」

・・・それは、いったいどういう意味なのでしょう。お母様と沖児猫様が添い遂げないことが、何故全員のためになるのでしょうか？

「あいつはハーレムだとか言ってるけど、そんなのが長続きするわけないでしょ。・・・だったら、私が身を引くのが一番いい選択なのよ」

お母様は自嘲するかのように、そう言います。・・・ええ、確かにそうかもしれない。ハーレムなんて、普通に考えて長続きするわけがないでしょう。でも・・・。

「だから、私は「お母様、それは違います!」・・・!？」

さらにお母様が何か言おうとしますが、私はそれを遮って叫びました。このままでは、お母様は自分の気持ちを押し殺してしまします。そんなの、私は嫌です!

「やってみてもないのに、何故諦めるのですか！？ それに、そんなのは誰のためにもなりません！ お母様が傷つくだけです！」

私は自分の思いの丈を全て込めて、お母様にぶつけました。ええ、きつと沖児猫様なら、お母様も宮姫様もずっと愛してくれる筈です！

「お母様は、今の関係を崩すのが嫌なだけです！ 宮姫様も大切かもしれませんが、自分の幸せを掴みに行くべきです！」

「……これで、私が言いたいことはだいたい終わりです。お母様は私の言葉を、心底驚いたように聞いていましたが……どう、感じてくれたのでしょうか。」

「……そうね、私は……逃げてただけだったのかもね」

「お母様、それって……」

「ありがとね、つらら……なんで娘に、恋愛を教えてもらっているのかしら」

「あははは……」

あれ、私だって恋なんてしたことないのに、何故こんなに語れたのでしょうか？……いえ、お母様が大切だからこそですね。

「でも……」

「？ でも、なんですか？」

お母様は自分の想いを捨てない決心をしたようですが、少し困ったような顔になります。この後に及んで、いったい何があるのでしょうか。

「……いまさらだから、どう話せばいいか分からないわ」

「……確かに、それは重要な問題です。けど……真顔でキリツとしながら言わないで下さい、一瞬芸人のように転けかけたじゃないですか。」

「えっとですね、それは、えーっと……そうですね、デートに誘えばよいのです!」

「……デート?」

「何かをきっかけとすれば、デートぐらいなら行ける筈です!そこで、いい雰囲気になってしましましょう!」

私のその提案にお母様は最初渋っていましたが、最終的には乗ってくれました。そして、過程は省略しますが……明日、沖児猫様とデートなさるそうです。

ここまで来たら、私は応援に徹するだけです。お母様、頑張ってください!……今日の内に、マスクとサングラスを買ってきておきましょう!

つららの頑張り物語（後書き）

作者が一番好きな声優は、若本さん（ネタ的な意味で）と並んで堀江さんです。最近のドラゴンクライシスというアニメを、ほぼ堀江さんのためだけに視てたりします（釘宮さんも嫌いじゃないですが）。

さて、本編ですが・・・本当に思いつきで書きすぎかもしれませんね。デートなんざ何してやるうか・・・ちよろちよろつとしか考えてません。まったく、宮子姫の時の反省をちゃんと生かせよと。

リア充ですが・・・何か？（前書き）

・・・今回は書ききった後、マジでこれでいいか迷いました。もう、自分で書いてて分からなくなった・・・これって、基本ギャグだった筈だよな？

リア充ですが・・・何か？

雪麗が俺の所に来たのは、俺が真・三國無双の千人斬りを達成した頃だった。この時代になったので久しぶりにやってみただが・・・やっぱりいいよね。

「ねえ、沖兎猫・・・」

「悪い、雪麗。今ちよつと忙しいんだ・・・。あと少しで、呂布倒せるから・・・」

虎牢関の戦いは敵がウジャウジャ出るし、呂布を倒せるから好きだ。よし、あと一撃で倒せるかな？ 最後はカツコ良く決め、つてなんか寒・・・？

「え、ちよ、なあああああ！？ 雪麗、お前何てことを！！」

寒気に気づいて後ろを見てみると、青筋を浮き上がらせて冷気を出している雪麗がそこに。それが俺に来るかと思いきや、プレ2が雪麗の餌食に・・・。

「ぐおおおお・・・！ それは、さすがに酷、iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

「ふん・・・あんたが、人の話を聞かないのが悪いんじゃない」

抗議をしようとしたが、結局俺まで冷気の餌食となってしまふ。くつ、俺が何をした！ ふん、そんな拗ねた顔されても・・・許してやんよ、こんちくしょう！！

「・・・で、何の用なんだ？」

「あ、それは、う……」

俺の質問に対して、雪麗何かを話そうとする。だが、それは言葉にならないらしく、口を開こうとしては、顔を赤らめて閉じてしまう。……何なんだろう、これ。

「えーっと……雪麗さん？」

「違う、そうじゃなくて、えっと……、そう！ 昔の約束よ！」
「……約束？ 何の？」

昔の約束……雪麗と何か、約束なんかしたっけ？ というか、してたとしても、そんなに慌てて言うことなんだろうか？……ふむ、さっぱり分からないな。

「オタクがどうのこうのって……」

「ん〜？ んう、えーっと……ああ、確かにそんなのもあったなあ」

昔、確かぬらりひょんが瑛姫に求婚した日のことだったと思うが、雪麗と俺は一つの賭け的なものをした。まあ、と言っても、ただの口約束的なものだが。

内容としては、オタクという存在が世界に羽ばたくとか何とかか何とか……、それが実現したとしたら、雪麗が俺の言うことを一つ聞くというものだった。

「いや、あんなのその場のノリだし……。俺だって忘れてたんだから、そんな口約束守らなくていいんだぜ？」

「……何よ、悪い？ あんたとの約束、果たしてやるうってのに」

「・・・こいつ、自分が何言ってるのか分かってるのか？ 普段の雪麗だったら、絶対こんなこと言う筈ないだろうに。」

「・・・まあ、なんだか知らないが、自分から言ってきてるわけだし・・・自重しなくていいよね？ 本当にしないぞ？」

「よし、なら、メイド服を着て俺にご奉仕を、しいいいいいいいいい！...！」

俺が自重せずに注文してみたら、いつも通り致命傷ダメージの冷気が。くそつ、雪麗の方から言ってきたくせに！・・・まあ、普通に考えて当然の反応か。

「そんな服、着るわけないでしょ。・・・あんに決めさせたら、変なのしか出てこないし、・・・し、仕方ないから、明日あんとデートしてあげるわ！」

「・・・へ？ デート？」

「・・・あれ、なんでそんな話になるんだろうか。まあ、雪麗とデートなんて嬉しいからいいんだけど、・・・この流れじゃおかしいだろう？」

「ふむ、つまり・・・雪麗が俺とデートしたいのに、口に出すのは恥ずかしいから、ツンデレモードに突入した、と？」

そこまで言っつて、この状況は冷気がくるだろうと考え、俺は身構える。が、いつまで経っても冷気はこない。で、雪麗の方をおそろおそろ覗き込んでみると・・・

「ふ、ふん！ 明日の朝、出かけるから！」

微妙に顔を赤らめてそう言うと、雪麗はすぐに出て行った。そのため、俺の体は五体満足なわけで。・・・えーっと、つまりこれってどういうことなんだ？

色々分らないな・・・。なんで、俺って凍らされなかったんだろつか？・・・それとなんで、隠れているように隠れきれていないつららが、身悶えているんだろっ？

・・・うん、さーっぱり分かんね。

で、翌朝。俺と雪麗は朝食を済ませて、奴良組本家の門の所まで出て行き、昨日の約束通りデートに行くことにする。・・・のはいいんだが。

「・・・なあ、雪麗。もしかして、その格好のまま行くつもりか？」
「そのつもりだけど・・・駄目なの？」

雪麗の格好は、いつも通りの着物にマフラー。別に悪くはないが・・・デートなんだったら、もうちょっと、な？

「ふむ・・・じゃあ、先ずは雪麗の服買いに行くか」
「え、いいわよ、そんなの・・・」

「いいから、早いとこ行くぞ」

断ろうとする雪麗を遮って、俺は無理やり雪麗の手を取り、駅の方へ歩いていく。その時、雪麗が握り返してくれた気がするが……気のせい、なんだろうか？

電車に乗って近くのそれなりに大きな街に着いた俺たちは、目についた服屋に入った。で、いまいち分らないという雪麗に替わって、俺が服を見繕ってやっている。

「うーん、これなんかどうだ？」

「……あんだ、本気で言ってる？」

俺が雪麗に勧めたのは、所謂ゴスロリ系ファッション。雪麗は肌白いいし、かなり似合うと思うんだ。……まあ、デートに着る服じゃないと思うが。

「もちろん本気だが？　って雪麗、何故に店の外に俺を連れて出ようとする？」

「店の中じゃ凍らせられないでしょ」

「本当に悪かった。別の服を選ばせてください」

本気で似合うとは思っているが、さすがに着せてデートするつもりはなかった。こんなことで一々凍らされてたら身が保たないからな、ここは真剣に謝しておく。

まあ、雪麗としても大して怒ってはいないようで、すぐに俺の手を離れた。……よし、今度はちゃんとした服なんてものを選んでやろう。

「うーん・・・雪麗って言ったら、やっぱり白系統の服か？」

雪麗は美人だし、基本何でも似合うとは思うが・・・やっぱり、白い服が一番似合う気がする。普段は着物で足まで隠れてるから、スカートなんて穿かせてみたいな。

「別に、変じゃなかったら何でも・・・」

「バカ野郎。こういうのにはな、妥協なんてしちゃいけないだよ」

俺は雪麗の発言を速攻切り捨てて、幾つか服を探っていく・・・
どうでもいいことだが、女に野郎ってのは違うよな？ まあ、本当にどうでもいいが。

幾つか選んだ候補を、多少嫌がる雪麗に渡して、試着室に無理やり入らせる。雪麗だって女なんだし、もう少しファッション好きでもいいと思うんだがな？

早く終わらせたいのか、雪麗はすぐに色々と着替えていくが・・・
普段見れない雪麗の格好が見れて眼福物です、本当にありがとうございしました！

とまあ、そんなこんなで、三十分ほど悩んだ末に、雪麗の服は決定した。結局はシンプルイズベストってことで、白のワンピースに
つば広帽子をかぶせた格好。うん、まさに夏の雪女って感じだろうか。

「でも、マフラーは取らないんだな？」

「ああ、これは体温調整のために巻いてるのよ。冷気を逃がさないようにね」

「へー・・・初耳だな」

雪女がなんでマフラー?とか思ってたが、まさかそんな裏設定が有ったとは……。いや、普通の漫画とかだったら絶対に後付け設定・これ以上は止めておこう。

「で、これからどこに行くんだ?」

「……決めてないけど」

「……マジですか。雪麗から言ってきたわけだし、何か行きたい所でも有るのかと思ってたが……。まあ、こういう時は、男の俺がリードすべきなんだろうな。」

でも……俺って、まともな現代デートしたことないからなあ。

どこに行けばいいか、さっぱり分かんねえや。……うん、ここは定番のデートコースにしよう。」

「……で、ここなの?」

「駄目か?」

「そうじゃないけど……私には、似合わないと思っただけよ」

今、俺たちが来ているのは、その辺によくある遊園地。デートスポットとしてはベタかな……と思ったんだが、雪麗は遊園地では

しゃぐタイプじゃないか。

「まあ、せつかく来たんだからちゃんと楽しもうぜ？」

俺はそう言いながら、雪麗に手を差し出す。デートなんだったら、手ぐらい繋ぎたいもんな。・・・まあ、雪麗は軽く無視してくる可能性が高いが。

「・・・そうね、楽しみましょうか」

暫く俺の手を眺めていた雪麗だったが、少しして差し出した手を取ってくれる。・・・え？ マジですか？ これ、本物の雪麗？ 偽物じゃなくて？

・・・これはもしかして、本当にデレ期に突入してたりするの？
・・・？ いや、さすがにそれはないんじゃない？
・・・でも、この状況は・・・。

「どうしたの？ 行くんじゃないの？」

あまりのパニックに硬直していた俺に、雪麗が訝しげに問いかけってくる。・・・まあ、いいか。雪麗の真意がどこにあるかは置いて、今は思いつ切り楽しもう。

「よし、行くか。 で、先ずはどのアトラクションに行く？」

「そうね・・・ジェットコースターとかいうのに、一回乗ってみたかったわ」

「却下の方向で。・・・さて、他の「待ちなさい」・・・はい」

くっ、華麗にスルーしたというのに、何故そっとしてくれないんだ！

「説明しなさい」

「・・・絶叫系、駄目なんです」

ああ、そうさ。俺は何十年と生きてきて、何百回と死亡ダメージをくらって来たにも関わらず、絶叫系なんて子ども騙しが苦手だよ！ 笑いたきゃ笑うがいいさ！

「・・・そういうの聞いたら、無理やり乗せてやりたくなるわね」「ちくしょう、このDSが！」

うう・・・雪麗の性格だったら、こんな展開になるとは思ったんだよ。・・・くっ、こうなったら俺も男だ！ 腹くくって叫びまくってやる！

「・・・冗談よ。そんなことしないわ」

「・・・へ？」

「今はデート中ですよ。あんたが楽しくないのに、私が楽しいわけないじゃない」

クスリと笑いながら言う雪麗にドキッとした俺は、絶対に悪くないと信じたい。しょうがないだろ、可愛いんだから。こっぴつの、なんて言うんだらうな？

そんなこんなで俺たちは、目についたものに乗っていくことにした。絶叫系が駄目だと、選ぶものが限られてくるが・・・それでも、絶対に楽しいと断言出来る。

数時間遊んで、俺たちはベンチで一休み中。めちゃくちゃ楽しかったが、さすがにぶっ通しで遊び続けるのはキツイ。

「いやあ、楽しかったな」

「そうね・・・こういうのも、偶には悪くないわ」

本当に、かなり意外だった。雪麗はいつもは見せないような笑顔を見せてくれたし、まるで本物のカップルみたいな感じだったと思う。普段の俺が見たら、リア充爆発しろって言ってると思うよ、マジで。

「で、あと一つぐらいなら乗れそうだけど、どうする？」

時間的に考えて、あと一つ乗ったら帰らないといけないぐらいだろう。雪麗はそれを聞いて、少し考える素振りを見せた後、一つのアトラクションを指差す。

「・・・あれ」

雪麗が指差したアトラクションは、観覧車。遊園地の定番で・・・カップルの定番だとも思う。まあ、俺の勝手なイメージかもしれないが。

で、少しだけ並んで、観覧車に乗ることが出来た。二人で乗り込

んで、向かい合わせに座る。すると見つめ合う形になって……なんというか、むず痒い。

「……ねえ、沖兎猫？」

ゴンドラが少し上がった所で、雪麗が意を決したように切り出してくる。その顔はどことなく緊張しているような……そんな顔されたら、俺も緊張してしまう。

「ん、どうした？」

「あのね、その……なんでもないわ」

何かを言おうとしたのだろうが、そう言って顔を背けてしまう。

本当に今日の雪麗は、別人みたいにしおらしいな。……まあ、俺もそこまで鈍感じゃないが。

「なあ、雪麗……」

「……何よ？」

「俺のこと、どう思ってる？」

下手に探りを入れることはせず、直球で聞いてみる。今日の態度から考えれば、たぶん、そう思ってくれてるんだと思うが、……自信はちよつとない。

「……あなたは、バカで、変態で、どうしようもない奴で……」

おいおい、散々な言われようだな。というか、まだまだ出てきそうな雰囲気なんだが。……まあ、はっきり言ってその通りだから仕方ないんだけど。

「でも・・・私は、あんたのこと・・・」

雪麗はその先を言おうとして、躊躇する素振りを見せる。なんとなくか、そこまで言ったなら最後まで言ってくれよと思わないでもない・・・まあ、可愛いんだが。

「雪麗、俺はいつも言ってる通り、お前のこと好きだぜ？」

いつまで経っても言いそうにないので、こちらから攻めてみる。ちゃんと雪麗の目を見て言ったから、俺の真剣さは伝わってると思うんだけど。

そうすると雪麗は顔を逸らし、今日で一番顔を真っ赤にさせる。それで少し経ってから、「わ、私も・・・」とか言ってる気がするが・・・よく聞き取れない。

「雪麗・・・」

「な、何・・・!？」

俺は横を向いてる隙を狙って雪麗に近づくと、こちらを向いた瞬間に、雪麗の唇を奪う。まあ、触れるだけのキスなんで、すぐに離れたが。

「あ、あ、あ、あ、あ、何を・・・」

「ん？ 嫌だったか？」

動揺する雪麗に、爽やかな笑顔で聞いてみる。・・・まあ、雪麗にキスした瞬間、致死量の冷気が流れ込んできたから、余裕なんかさっぱり無かったりするんだが。

「・・・嫌じゃ・・・ない、けど・・・」

その言葉だけでも十分可愛いんだが、体勢的に雪麗は上目遣いになっていて、更に可愛さが増している。いや、これはもう・・・我慢出来る筈ないよね　　？

「あのう、お客様？　もう一周行っちゃいますか？」

「いえ、けっこうです！！」

ゴンドラは既に下まで降りていたようで、従業員の人に生暖かい目で見られた。あー、やべえ・・・さすがにこつというのは、めっちゃくちや恥ずかしい。

俺と雪麗は二人とも顔を真っ赤にして、その場からそそくさと立ち去る。その際、上の方のゴンドラで窓を叩いているような音がしたたが・・・なんだったんだらう？

あの後すぐさま遊園地を出た俺たちは、一旦心を落ち着かせるために、人気のない公園に二人で立ちすくんでいる。はっきり言って、凄く気まずい。

「な、なあ、雪麗。まさか、あんなことになるとは思わなかったよ

なあ？」

「そ、そうね……」

気まずい空気を脱するために、なんとか話題を切り出してみても、そんなやり取りだけですぐ会話は途切れてしまう。うう……これは、マジでヤバくないか？

「……ね、ねえ、沖兎猫」

俺が頑張つて新たな話題を考えている中で、雪麗が切り出してくる。ちよつと緊張しているような、勇気を振り絞っているような、そんな顔だった。

「さっきの話の、続きなんだけど……」

「あ、ああ……」

「あの、私はあんたのこと……好き……なんだと、思うの」

ようやく言ってくれたその言葉は、本当に微かな声量だった。それでも、俺にはちゃんと伝わって、本当に感慨深いというかなんというか……。

「それでね、あの……」

更に何か続けようと思っているようだが、言葉にならないらしい。もう、そんな様子もいじらしくて……。俺は雪麗の肩を掴んで、もう一度キスをした。

「ん……」

雪麗も俺を拒むことはなく、あるがままに受け入れてくれる。さ

つき観覧車に乗っている時にしたものより、長いキス。冷気がどうのこうのなんて、今は関係ない。

それが何秒か いや、もつとかもしれないが した後、俺たちは唇を離す。名残惜しい気もするが、なんだか清々しいような気もしたりする。

「ねえ、沖兎猫」

「なん、！」

少し顔を背けていたら雪麗に呼ばれたので振り向くと、今度は雪麗からキスをしてきた。俺たちには身長差が有るので、多少背伸びする形になっている。

「私、あなたのこと好きよ」

「ああ。俺だって、お前のこと好きだ」

唇を再度外した後に、雪麗は言い、俺は返す。これ以上に、俺たちの間に言葉はいらない。このやり取りだけで、俺たちは分かり合えるんだから。

拝啓、顔も覚えていない母上様。あなたの息子は、異世界の大地において、ハーレムを形成しつつあります。

リア充ですが・・・何か？（後書き）

あー、恥ずかしいー。なんという展開か・・・、最初の予定ではもっとギャグチックになる予定だったのに・・・。違うんです、なんかのラノベのイメージがこんな感じだったんです！

ま、まあ、それは置いといて、今回描写しきれなかった所なんかは、次話のつらら尾行話でやりたいと思います（本当はこれに入れたかったんですけど、長くなっただけ）。2日以内には作っておきたいな。

つららの尾行大作戦！（前書き）

思ったよりも遅くなりました……。なんというかですね、久しぶりに昔のゲームがやりたくなっただんですよ。偶にありません？突発的にやりたくなるの。

今回は、前回の話のつらら視点ですが……。あれ、前回よりも長くね？

それと、今回の話はいつも以上に細かいことは気にしちゃう駄目です。

つららの尾行大作戦！

こんにちは皆さま方、雪女のつららです。なんと、一話挟んだだけで、語り部役に再び選ばれてしまいました。不肖このつらら、選ばれた以上は誠心誠意頑張らせていただきます！

今回は……ええ、お母様と沖児猫様のデートです。お母様は、ちゃんと自分から沖児猫をデートにお誘いになられて……私が焚き付けたかいたったというものです！

その時のお母様と言ったら、苦しい言い訳をしながらデートに誘い、沖児猫様に見破られてそそくさと立ち去るといふ……これが、悶えずにいられましょうか？ いえ、不可能です！

私は柱の影に完璧に隠れ、一通りお母様の可愛らしさに悶絶した後、デパートまで行って変装用グッズを揃えておきました。これで明日の準備も完璧です！

明けて翌日、お母様と沖児猫様は朝食を食べてすぐに、二人揃って出掛けて行きました。私はすぐに変装を終えて、二人の後ろをついて行きます。

「さて、先ずはどこに行くのでしょうか？」

二人は並んで歩き、駅の方へ向かっているようです。ということには、遠出になるようですが……、っと、お母様が振り向きませんでした。私は、電信柱の影に隠れます。

「ふーっ、危ないところでした・・・」

「・・・おぬしは、何をやっとするんじゃ」

「っっ！ 何やつ！」

華麗に隠れきったところで、不意に後ろから誰かに肩を掴まれました。私はそこで咄嗟に、その声に向けて冷気を放ちます！

「のわっ、止めんか！ ワシじゃ、ぬらりひょんじゃ！」

「ほえ、総大将？・・・うわっ、申し訳ありません！ なんてご無礼を！」

私の後ろにいたのは、なんと総大将でした！ 避けられていたようですが・・・、なんてことをしてしまったのでしょうか！ 違うんです！ 気分が高揚し過ぎて、私の後ろに立つんじゃねえ！ 状態だったんです！

「いや、構わんよ。それより・・・何をしておったんじゃ？」

「えっと、それは・・・って、しまった、もういない！？」

心広くも私を許して下さった総大将に、説明をしようと思いました。既に二人は視界にはいません。なんとということでしょう・・・、見失ってしまいました・・・。

「ふむ・・・おぬしは、何をそんなに落ち込んでおるんじゃ？」

「・・・はい、実は」

私は幾分肩を落としながら、総大将に今までの経緯を話します。総大将はふむふむと相づちを打ちながら話を聞いて下さり、話が終わると、ニヤニヤと笑いながらどこかを見ておられます。

「ほお……。あやつ、やっと素直になりおったか。昔つから、ツンドラとかいうやつじゃったからのお……」

……それ、ツンドラではなくて、ツンデレでは？……まあ、それは置いて、総大将はふむと一つ頷いた後、私の方に向き直ってきました。

「つららや。その尾行、ワシも一枚噛ませてもらうぞ。ワシの能力なら、何かと便利じゃろう」

総大将の能力……要するに、人から認識されなくなる畏。確かに、尾行にはとても便利です……。総大将は普段、主に食い逃げに使っておられるみたいですけど。

「それはありがたいのですが、肝心の二人がどこに行ったか……」
「ふむ……。どこか、心当たりでもないのか？」

心当たりと言われても……。つて、あ！ そうでした、先ほどお母様と沖児猫様は、駅の方に向かっていました！ 今から駅に向かえば、まだ間に合うかもしれせん！

「総大将、二人は駅に！」

「駅、か……。よし、行くぞい」

私は総大将の言葉に頷き、駅へと急いで向かいます。今までのやり取りで、少し時間が経ちすぎてしまいました。なんとか、間に合えばよいのですが……。

『総大将ぬらりひょんが仲間になった！』

・・・なんでしょう、おかしなテロップが流れた気がします。

なんとか二人に追いついた私たちは、電車に乗って大きな街まで来て、更に尾行を続けました。そして、二人は暫く歩き、ある店の前で足を止めます。

「これは・・・服屋さん、ですね」

「うむ、どうやら雪麗の服を買うようじゃな。ま、あの格好じゃあのお」

確かに、お母様が着ているあの着物では、デートには合わないでしょう。お母様はあの着物以外は普段着ないので、これはいい機会でもあるかもしれません。

因みに、私の今の格好は、尾行のためのスペシャルセット。トレンチコートにサングラスにハット、そしてマスクという完璧装備です！・・・総大将には、物凄く引かれましたが。何故でしょう？

「沖見猫様を選ばれる様ですね」

「ま、妥当じゃろう。雪麗にまともな洋服が選べるとは思えん」

まあ、そうなんですけど・・・、娘としてはかなり複雑な気分で

す。

「じゃが・・・」

「どうしたのですか？」

「沖児猫も、まともな服を選ぶ気がまったくしなくてのお」

そう言われてみると、いつもの沖児猫様の行動からして、おかしな服を選ぶ気がします。具体的に言えばそう、今沖児猫様が持っているゴスロリ風なやつとか・・・

「・・・って、本当にそんなのを選んだのですか!？」

信じられません! そんな服をお母様になんて、・・・想像したら物凄く可愛かったですが!! でも、お母様の気持ちを考えてあげて下さいよ!

「くっ、沖児猫様を凍らせて・・・!」

不敬かもしれません いや、完全に不敬です が、さすがに許容しかねます!・・・と、そんな風に私が息巻いている横で、総大将はいやいやと首を振りました。

「いや、その必要はないじやろう。雪麗の性格なら・・・ほれ、店の外に引っ張っていきおる」

その言葉に二人の方を再度見てみると、お母様が沖児猫様を引っ張っているところでした。店の中では他の客もいるから、外に連れ出そうと言ったところでしょうか。

「でも、そんなことをしたら、デートが台無しになってしまうんじ

や・・・」

と、私は一抹の不安を抱えます。しかし、そんな心配は杞憂でした。沖児猫様がすぐに謝られて、またお母様もすぐにお許しになられたようです。

いつものお母様なら、きっと許していません。それはつまり、お母様もデートを楽しみたいのでしょう。・・・なんというか、萌えるじゃありませんか。

「・・・おぬし、大丈夫か？」

「らいじょうぶでふ！」

テンションが上がり過ぎてしまったのでしょうか、私の鼻から赤い液体が溢れてきてしまいました。・・・キャラ崩壊？ そんなこと、気にしてはいけないのです！

そんな私の事情など知る由もない沖児猫様は、今度はちゃんとした服を選んでいきます。私も、そこまでファッションに詳しいわけではありませんが・・・見る限りでは、なかなかセンスはいいみたいです。

そこから、お母様のファッションショーが始まりました。と言っても、あまり気乗りはしていません。まあ、お母様の性格だったなら、さもあらんです。けど、沖児猫様は気にせず服を渡していきます。そして、それら全てに対して批評をつけていきました。もっとも、ほぼ全てが可愛いだとか似合ってますが。

そんな言葉でも、女性にとっては嬉しくない筈がありません。お母様もその例に漏れず、何やら機嫌がいい模様。嫌がる体をしつつも、色々と着替えていきました。

「ほおほお、若いっていいのお。青春しとるのお」

総大将はそんなことを言いながら、ニヤニヤと笑います。．．．ええ、確かに、お母様と沖児猫様は青春してると思いますが．．．ただ、総大将と同世代ですよね？

「次は、どこに行くつもりでしょうか？」

「さてのお．．．。沖児猫のことじゃから、．．．さっぱり分からんな」

あの後服を決定した二人は、服屋を出てまた駅に向かいました。どうやら、沖児猫様が行く場所を選んだ様ですが、．．．沖児猫様がデートで選ぶのが、どこになるかまったく分かりません。

「それにしても．．．、多いな」

「ええ．．．多いですね」

多いって何が？．．．ですか？ それはですね．．．お母様を狙った、ナンパ男です。．．．まあ、それも当然なのかもしれません
が。

お母様は普段美人系で、人を寄せ付けないようなオーラを出して

います。しかし今日は、服もさることながら、柔らかい雰囲気の影響で、とても可愛らしいのです。

そしてそのお母様の隣には、・・・こう言ってはなんですが、普通の顔立ちの沖児猫様・・・そうなると当然、妬みなんかもあるのでしょうかね。

そんなこんなで、お母様に声をかけようとする不届き者が多いのです。・・・まあ、それらは全部、話しかける前に私が氷漬けにしてやりましたが。ふっふっふ。

「ぬ？ ほお、どうやらここらしいのお」

総大将が指差した場所は、遊園地でした。・・・なるほど、遊園地ですか。確かに、デートの定番です。ただ、お母様の性格とは、ちよつと違う気がしますけど。

私と総大将は、先に入って行った二人に続いて、遊園地の中に入っていきます。総大将の畏のおかげで、お金は要りませんでした。・・・い、今は緊急事態なので！

「と、二人はどこに・・・って、わっ！」

中に入って、先に入った二人を捜すと、すぐに見つけられました。けど、先ほどとは違うところがあります！ ええ、手を握っているのですよ！

「総大将！ 総大将！」

「うむ・・・。もはや、恋人じゃな」

ああ・・・。これなら、今日の内には必ず・・・って、何でお母

様は冷たい視線を沖児猫様に向けているのでしょうか？

「ふむ。どうやら、沖児猫は絶叫系のアトラクションが無理らしいな」

「ええっ！？ それならなんで、デートにここを選んだのですか？！」

「ま、あやつはバカじゃからなあ・・・」

いや、そんな、例えそうだとしても、こんな展開ぐらいは簡単に予想出来る筈、・・・何故でしょう、沖児猫様なら納得出来てしまう気がします。

あゝ・・・、こんなことで、デートの雰囲気が悪れたりなんてしたら・・・。お母様、気持ちは分かりますが、ちゃんと抑えて下さいよ！？

「ん？ む、ぬうう・・・」

と、私が悶々としている内に、総大将がそんな声を上げました。どうしたのでしょうか？ お母様たちに、何か変化でも有ったのでしょうか・・・って、あゝ！！

お母様が、とても可愛らしい笑顔で沖児猫様に語りかけています・・・！ その内容は・・・もう、話すまでもないでしょう！ こんなの、反則物ですよ！

そんなやり取りの後数時間、お母様と沖児猫様は楽しく遊んでお

られました。お母様も、普段は見せない笑顔を見せたりして、やはり楽しまれた様です。

というか、端から見ていてこの二人、カップル以外の何者でもなかったです。総大将なんて、尾行の間何度砂糖を吐きそうになったことか……。まあ、私は当然、ずっと興奮していましたが！

「ふう、あやつら、あれでまだ付き合っておらんのか？」
「ですよね……。まったく、早く告白なさって欲しいものです」

二人がベンチで休憩中なので、私たちも同じく休憩。そして今までを振り返り、愚痴ってみます。早く告白してくれないと、私たちも安心出来ませんしね。

・・・と、二人が立ち上がって、どこかに向かう様ですね。時間的に考えて、次のアトラクションが最後のアトラクションの筈・・・って、あそこに有るのは・・・！

「観覧車！ 観覧車ですよ、総大将！」

「確かにそうじゃが・・・、何故おぬしはそんなに興奮しとるんじや？」

「何故って、観覧車ですよ！？ 観覧車なんて、遊園地最大の恋愛スポットじゃないですか！！」

ええ、そうです。観覧車は恋愛イベント発生率が、遊園地の中でダントツ一位というところ（つらら調べ）。因みに二位は、お化け屋敷です（つらら調べ）。

ということつまり、お母様はあそこで勝負を仕掛けるわけですね！ これは、今までの様に遠くから眺めているだけではいけません！ 私たちも、観覧車に乗らないと！

そうして、私たちは観覧車に乗る列に並びます。私たちの順番は、あの二人の五つ後ろ……。これなら、十分視界に入れることが出来る筈です！

「あらあら、お孫さんですか？」

「いや、知り合いの娘でしてな……。そちらは、息子さんで？」

「はい、そうなんです。太郎、挨拶して」

「こんにちは」

「こんにちは。飴いるかい？」

「うん！ ありがとう！……おじいちゃん、この飴美味しくないよ」

「こら、太郎！」

私が息巻いている様で、総大将は私たちの前に並んでいた親子とそんな風に団欒しています……。確かに、あの飴 宇佐美お婆さんの飴 は美味しくなかった。

そんなやり取りをしている内に二人はゴンドラに乗り込み、それから大して時間はかからずに、私たちも乗り込みます。

「今は、どんな状況でしょう……」

私は周りの景色など気かけず、五つ前のゴンドラを見つめます。今は……。二人とも見つめ合って、何やらモジモジしている模様。告白……。出来たんでしょうか？

よくは分かりませんが、二人は何やら真剣に話し合っている様です。それで、お母様が顔を真っ赤にしている……。これは、おそらく間違いないでしょう！

「総大将・・・！」

「うむ、ついにやりおったか」

私たちの間にも明るいうもろが立ち込めます。本当に、お母様を
焚きつけたかいはありました・・・、つて、え！？ お母様の下に、
沖児猫様が近づいて？！

え、ちょ、これつてまさか、キ、キスをしちゃったり？！ いけ
ません、つららはまだ子ども・・・。でも、偶然見えちゃったりし
ても、構いませんよね！？

「つて、あー！！ なんでこんな時に、見えなくなるんですかー！
！」

まさに、沖児猫様がキスをする一寸前に、前のゴンドラに隠れて
二人の様子が見えなくなりました。くつ、まさか、まだ私には早い
ということなのですか！？

というか、前のゴンドラの母親さん！ 息子さんには目隠しして
おいて、自分はちゃっかりガン見じゃないですか！ そんな恍惚な
表情しないで下さい！ 気になります！

「うー・・・結局、どうなったのでしょうか・・・」

私の視界に再び二人が入った時には、既に二人の体は離れていま
した。あの様子だと、多分ちゃんとキスした様ですが・・・それで、
どうなったのでしょうか？

あれ、でもあの二人の距離、まだ近くありませんか？ それに、

何やら見つめ合っている様子。これは、更なる展開を期待しても、いいんですよね。

「・・・下まで、降りきった様じゃな」

「なんでですかぁー!!」

何故いつもいつも、こんないいタイミングで邪魔が入るのでしょぅ!? というか・・・あれ、お母様に沖児猫様、物凄いスピードで立ち去って行ってませんか？

「うわ、待って下さい！ お母様ー！」

このままでは、結末を見届けられません。私はゴンドラを必死に叩き、お母様を呼びますが・・・止まってくれる筈もなく。無情にも、二人を見失ってしまいました。

私はゴンドラから降りると、すぐに姿を捜しますが・・・もう、影も形も有りませんでした。こうなれば、追跡は不可能・・・私は、地面に打ちひしがれます。

「・・・お嬢さん」

「ふえ・・・？」

そんな私に、誰かが声をかけてきました。私が顔を上げると、そこには先ほどの母親さんが。まさか・・・お母様たちの居場所を、知っているとでも？

「・・・(ぐっ)」

そんな私の期待を碎き、母親さんは親指を立てて、すぐに立ち去

りました。……このつらら、生まれてからここまで殺意を感じたことは有りませんでしたよ……！

あれから結局、お母様たちを見つけることは出来ませんでした。総大将も慰めて下さりましたが……やはり、少しばかり、落ち込みます。

「つらら、あんたどこに行ってたのよ」

「お母様……」

私が屋敷に戻ると、既にお母様は帰宅していました。この口振りからして、やはり尾行には気づかれていなかった様子。私はお母様の質問に、適当に答えておきます。

「ところで、あの……お母様？」

「……何？」

「今日のデートは、いかがでしたか？」

少し間を置いて、私は本題を聞いてみました。どうなったかというのは、大方分かっています。ですが……結局、最後はどういう風になったのかと。

「・・・ちゃんと、上手くいったわ」

お母様が出してきた答えは、予測出来ていた答えです。しかし・・・ちよつと、思っていたものと違いました。実感が籠もっているというか、なんとというか・・・。

私のそんな複雑な感情を、どう解釈したのかは知りませんが、お母様は私の頭を撫でてきました。少し恥ずかしいですが・・・嬉しい気もします。

「ありがとね、・・・あんたのおかげで、私もやつと素直になれたわ」

お母様がそう言いながら見せてくれた表情は、本当に幸せそうでした。この表情を見ただけで・・・私も、凄く幸せな気分になってしまいます。

尾行なんて、しなくても良かったのかもしれない。今私は、こんなに満たされているのだから・・・。つららは、少し成長したよくな気がします。

つららの尾行大作戦！（後書き）

観覧車の見える見えない云々は・・・ぶっちゃけ、よく分かっています。こんな感じのイメージが有ったんですが・・・最後に遊園地行ったの、小三ぐらいだからな・・・スルー推奨なのですよ。

さて、次話に一話番外編的な物を挟んで、漸く原作本編に突入です。次話の投稿は、出来るだけ早くするつもりです。では、次の更新までノシ

とあるバレンタインの一日（前書き）

な、なんとか間に合った……。日付が変わるギリギリですが、なんとかバレンタインデーに間に合わせれました。まあ、番外編的なので、本編には関係ありません。

今回はバレンタイン物ですが……。うん、なんというか……。ちょっと自重してませんね。いつもより変態分が多いので、苦手な人は気をつけてください。

とあるバレンタインの一日

・・・俺は現在、奴良組本家の台所に入る扉の前にいて、中に入るべきか否か迷っている。なんで迷ってるかって？ 誰だって、こんな状況になったら迷うよ。

ん？ どんな状況かって？・・・まあ、簡単に言えば、だ。台所から何やら声が聞こえてくるんだよ。この声は、レイとつららだなで、その内容が

「ふえ！？ ちょ、児衣兔、舐めないで！」

「・・・嫌？」

「うつ、・・・い、嫌なわけでは・・・」

「じゃあ、構わない・・・」

「でも、そんな、汚い・・・」

「別に、汚くなんか、ない・・・」

「ひつ、あ、児衣兔・・・」

・・・さあ、分かっていたただけたらう。こんな状況で中に入れるか？ 入れないだろう？ 俺はまったくおかしくない。

・・・いや、俺だって分かってるんだ。こんなのはどうせ、つららが指を切つて、レイがその指を舐めてあげてるだけっていうオチぐらい。ああ、本当にベタな展開さ。現実にかかるかは知らんが。けどな、リアルで百合ン百合ンな展開という可能性も捨てきれないわけだ。だから・・・俺は扉を開けずに、真実を分からなくする！ これってなんて言っただけ？ シュレデンガーの猫だったか？

まあ、それは置いといて・・・、台所の中の話に耳を傾けよう。

なんだって構わないさ、だって俺は男で妄想族！　いくらでも変態な妄想をしてやるっ！

「・・・ちよっと、苦い？」

「そ、そう・・・、って、なんでそんなとこまで舐めるの!？」
「いいでしょ。わたしが、舐めたいの」

ぐはっ、苦いって何だぁああああ!!　　というか・・・レイ、何でそんな妖艶な声色を使う？　義兄さまはお前をそんな子に育てた覚えはありません！

もうね、ピチャピチャと液体を舐めてるような音とか、どうやってら出せるんだろう?・・・うん、なんっーか、そっちの想像しか出来なくなってしまうった。

「ふっ、・・・これは、無理だわ」

・・・いや、本当にこの状況はどうしようか。賢者モードに突入すべきなのかどうか・・・助けて、エロい人！

『いいんじゃないね?』

助けを求める俺の耳に入ってきた、そんな声。え、何がいつてんだ?・・・というか、どっかで聞いたことあるようなフレーズなんだけど。

『中に入っちゃっても、いいんじゃないね?』

・・・いいのかな?　男の夢が壊れるかもしれないけど・・・いいんだよね、中に入っちゃっても。よし、入っちゃうよ!?!　止め

るなら今のう、はい終わりいー!!

「だらあっしやアあああ!!!!」

俺はテンションが上がり過ぎて、奇声を上げながら扉の中に飛び込んで行く。体面？ 世間体？はっ、そんなもん、今さら俺に関係あるかああああ!!!!

「さて・・・ん？」

「ええ?! な、何なんですか!？」

「・・・義兄さま、何してるの？」

俺が中に入って見えた光景は、・・・なんとというか、予想は当たってる。うん、当たっちゃってるんだよね。・・・どうすりゃいいんだろ、この状況。

簡単に言えば、つららの着物が微妙にはだけていて、つららとレイの距離が異様に近い。・・・まさか、マジでなっちゃってるとは思わなかった・・・。

「えっと・・・お邪魔しましたー」

「ち、違います! 沖児猫様は、盛大に勘違いをなさっています!」

あまりの展開に俺が出て行こうとしたところ、つららが慌てて引き止めてきた。・・・え、本当に違うの? なんか、安心したような、残念なような・・・。

「えっと、つまりですね」

「

つららの説明によると・・・何でも、つららがチヨコレートを手

作りしていたところ、レイがふらふらとやって来たらしい。レイは甘い物好きだし、まあ納得だ。

そんなこんなしている内に、アツアツの液体チヨコレートが飛び散った。すると、雪女のつららには地獄であって、暴れている内に着物がはだけたらしい。

で、体についたチヨコレートは冷気で凍り付いて張り付き、それがもつたいたいと思ったレイが舐めだして、あんな状況になったと・・・いやいや、おかしくね？

「レイ、さすがにそれは・・・」

「・・・女同士で、何を気にする必要があるの？ この、変態が」「ぐ、ぬおおおおおおおおお！！！」

俺は何か間違ったことを言ったか！？ 何でこんなこと言われなきゃならねえんだよ！ おかしいと思った全読者に謝りやがれ！・・・やべ、メタ発言。

「ちよ、児衣兎、それは流石に失礼よ！」

そんな、傷ついた俺を救ってくれる、優しいつららの助け舟。ああ・・・、こんな俺を救ってくれるとは・・・。つららちゃんマジ天使。

「・・・義兄さまが変態なことに、疑問を挟む余地があるの？」

「それは・・・ない、かもしれないけど」

なんとという、まさかのつららの裏切り。いや、分かっているけどさ、俺は変態だつてことぐらい。だが敢えて何度でも言おう、男はみんな変態だああああ！！！！

「・・・まあ、いいけどね」

うん、そんなこと叫ぶほど俺も落ちぶれちゃいないよ。俺は大人で、レイの義兄だからな。ここは、百歩譲って大人しくしてやろう。感謝するがいいわ！

「・・・ん？　そういや、なんでつらはは、チョコレートなんか作ってたんだ？」

さつきはあまり考えなかったが、何故だろう？　熱いのが苦手なんだし、わざわざ作らなくても・・・と、何故つらはは、そんな呆れた表情をしてるのだろうか。

「沖児猫様・・・今日は何の日か、ご存知でございましょうか？」
「ん？　今日は二月十四日・・・って、バレンタインデーか！」

やべー、すっかり忘れてた。そうだった、今日はバレンタインデーだったんだよ。いやー、今は俺リア充なせいで、あんまり関心が無かったんだよな・・・。

「はい。それで、奴良組のみんなにと思わせて・・・。あ、これは沖児猫様の分でございます」

「え、マジ？　これは、俺のハーレ」それはありません！」・・・
ありがとうよ」

・・・まあ、礼は言わないとな。ハーレム入りしてくれるなら、一番良かったんだが。・・・そういや、レイはくれないんだろうか。
十中八九、無理だと思うけど。

「レイは、用意してたりなんか」

「・・・今日がバレンタインということすら、失念してた」
「だろうな・・・」

まあ、構わないけどね・・・と、俺がちよつといじけていると、レイは少し考える素振りをする。そして、自分の顔についてるチョコレートを指で掬い

「・・・いる？」

「お前は俺をどこに向かわせたい!？」

・・・いや、なんかそるけどね？ でも、さすがにその境界は越えちゃいけない気がする。・・・まあ、くれようとしてくれた気持ちだけ受け取るう。

あの後台所からすぐに退散した俺は、奴良組の屋敷をぶらぶらと歩いている。・・・別に、チョコレート誰かくれないかな〜とか思ってるわけじゃないんだからねっ！

「あ、ちょうどいい所に！ 沖兎猫さん！」

そんな時に、飛んで火に入る夏の虫・・・じゃないや、女の人の

声が聞こえた。この声は・・・若菜さんだな。え、もしかしてチョコレートくれたりするの？

「なんですか？　もしかし「はい、これ。送られて来てましたよ」・・・ありがとうございます」

笑顔で渡されたのは、クール宅急便によって送られてきたダンボール箱。差出人は・・・まあ、考えるまでもなくゆらだろうな。うん、やっぱりそうだった。

ゆらとは、花開院家から離れてからも、偶に手紙のやり取りなんかをしている。お互いに、大したことは書かないで、取り留めもないことばかり書いてるがな。

「あ。若菜さん、ありがとう」

「はい、どういたしまして。　あつと、忘れるところだった。はい、私からもチョコです。それじゃ、私は家事があるので」

若菜さんは俺にチョコを渡すと、さつさと台所の方に向かって行った。・・・えー？　なんで、このタイミング？　もう少し期待を持たせたり・・・無駄な期待か。

「ま、何にせよ、この箱の中身を見ないと・・・」

若菜さんからのチョコは後でゆっくり食べるとして、先にゆらからの贈り物を確認しよう。まあ、だいたいの中身は予想出来るがな・・・嬉しいじゃないか。

箱とチョコを抱えて自分の部屋まで戻り、ダンボール箱を開封する。中には一つの綺麗に包装された箱と、一通の手紙が添えられて

いた。で、手紙を読むと

『ゼロ兄ちゃんへ

きょうはすきなひとにチヨコをわたす日だときいたので、チヨコをおくりました。

おかあさんといっしょにがんばって作ったので、たべてみてください。

ゆら』

くっ・・・なんて、いい子なんだ！ くそっ、俺はロリが嫌いではないとしても、そこまで幼女趣味なんかじゃないってのに・・・不覚にも萌えてしまった・・・！

ゆらはまだ小学校にすら入ってないんだぜ？　なのに、こんな・・・。手紙の方だって、字はお世辞にも上手いとは言えないが、一生懸命書いたのが伝わってくる。

「くっ、ありがたくいただくぞ、ゆら！」

一人で何をこんなにテンション上がってたかと思わないでもないが、そんなことを言いながら箱をあける。するとそこにはチヨコが・・・はい？

「・・・なんだ、これ？」

箱を開けると、そこにチヨコは無かった。中に有るのは、有るはずだったチヨコをむさぼったような跡と、一枚の紙。俺が恐る恐る

それを見ると、そこには

『不味かったな』

.....

「竜二イイイイイイイイ！！！！」

あの野郎、言うに事欠いてそれか！　いくらゆらが俺にチョコを贈るのが嫌だったからって、それはあんまりじゃねえか！？　この、ドシスコンが！！

・・・とまあ、シスコン馬鹿のせいでチョコが食えなくなったので、俺は心の中でゆらに謝っておく。ごめん。・・・残ってたチョコのカスは、美味かったぞ。

あれから俺は、竜二に身長が伸びなくなる呪いをかけた後（簡単に出来る黒魔術という本に書いてあった）、ミヤがいる神社に来ていた。今日来てくれて、前から言われてたんだよ。

「まあ、チョコレートだろうな」

この流れから言って、チョコレートしかないだろう。まあ、考え

ついてない方が良かったんだろうが・・・それでも、嬉しいもんだよな。

「ミヤー？ 来たぜー？」

勝手知ったる場所なので、ミヤを呼びながら遠慮なく扉を開けた。扉を開けると、ミヤがすぐに出てきたんだが・・・何故か雪麗も一緒にいる。

「あれ、なんで雪麗がいるんだ？」

「・・・何よ、いちゃ悪いの？」

「いや、そうじゃないけど」

雪麗とミヤは普通に仲がいいし、いるのは全く不思議じゃない。ただ単に、予想してなかったからびつくりしただけだ。

「ふふつ、私たち二人でチョコレート菓子なる物を作ってみたんですよ」

俺がちよつともたついているのを見て、ミヤが笑いながら説明してくれる。ああ、なるほど。二人で作ってたから、一緒に渡してくれるわけか。

「私たち、二人とも西洋菓子には疎かったですから・・・」

ということとはつまり、二人で四苦八苦しながら、俺のために慣れないチョコレート作りをしてくれたわけだ・・・。やべ、かなり嬉しいじゃないか。

「では、持って来ますので・・・」

「ちょっと、待ってなさい」

そう言っつて、二人は神社の奥に引っ込んで行った。・・・あれ、俺一人でここで待つの？ まあ、構わないっっちゃ構わないけど、多
少暇になるな・・・。

よし、ここは二人がどんなのを作ってくれたかを予想してみるこ
とにしよう。・・・えっと、二人とも奥に引っ込んで行ったってこ
とはつまり

(注、沖兎猫の妄想です)

呼ばれて俺が奥に行つてみると、そこはパラダイスと言つてよか
った。何故か？ そんなもん、二人がチョコを自分たちにつけ
て、俺を誘惑してくるからだ。

「私たちを、食べて？」

「あんたは、何を妄想してんのよ！！！」

「ぐびゃあああああああ！！！！」

妄想の中で夢の30に突入しようとしたところ、怒り心頭の雪麗
の猛吹雪が俺を襲った。何をする！・・・とは言えないな。分かっ
てる、俺が悪かった。

「そ、そんなこと、私たちがするわけないでしょう！」

「雪麗さん？・・・えつと、何でこんなことになってるのですか？」

「宮姫・・・。あんたは、知らない方がいいことよ・・・。」

「？・・・なんだかよく分かりませんが、知らなくてよいのですね」

遅れて入ってきたミヤが、惨状を見て問いかけるが、雪麗がとります。・・・うん、ミヤには知られない方がいいだろうな。ミヤはいつまでも純粹であってくれ。

「・・・私たちが作ったのはそんなじゃなくて、もっと普通のやつよ」

雪麗がそう言って渡してきたのは、・・・まあ、俺の妄想に比べたら百倍普通だが、それでも普通と言うにはもつたいない。これを作るには、相当な時間と研鑽が必要だったように思う。

「あの、お口に合うかは分かりませんが・・・どうぞ、召し上がってください」

「ん、ありがとな」

食べるのがもつたいないような気もしたが、思い切って一口食べてみる。そうすると口に広がる、甘みにほんのりとした苦味・・・とても、美味しい。

「・・・美味しい。お世辞じゃなくて、本当に美味しい。なんて言えばいいのか・・・。うん・・・ありがとう、二人とも」

俺が口下手なのが、本当に悔やまれる。こんな時に、気の利いた台詞が言えればな・・・。だけど、こんな俺の言葉でも二人は喜んでくれたらしい。顔を綻ばせていて・・・うん、可愛いな。

「こづいづのって、やっぱり愛情が大事なわけだろ？ 本当、俺って愛されてるんだなと思うよ……」

感極まって、俺はそう言いながら、二人を抱きしめる。二人はちよつとびっくりしたようだったが、素直に俺に体を委ねてくれた。

「俺は、お前たちが大好きだよ」

「私も、是炉様のことをお慕いしております……」

「わ、私だって、……大好きよ」

二人ともに言い方は違うが、二人とも俺を愛してくれてるのが分かる。ああ……、本当に幸せ者だよな、俺。

そんな、バレンタインの一日。

とあるバレンタインの一日（後書き）

危なかった・・・書き終わったのが、日付が変わる三十分前でした。そのせいで、最後がちよっと駆け足になりましたが・・・許してくださいね。

というか、次話は遂に！ 原作一話に突入ですよ！ いやあ、長かった・・・。なんで四十話以上もかかってるんでしょうね？ まあ、無計画な俺が悪いんですが。

腹黒か天然か、それが問題だ（前書き）

ちよつと間が空きました・・・なんかですね、数日風邪引いてまして。ダメですよ、Tシャツ一枚で深夜にゲームしちゃ。

今回から原作突入ですが・・・まさかの一話分割。くそう、無駄な展開を増やすから、無駄に長くなるんだよな・・・反省。

腹黒か天然か、それが問題だ

俺の封印が解けてから早五年、西暦に表すと2005年。時が進むのは、年をとるほど早く感じると言うが、まさにそんな感じの五年間だった。

これまでの間に、あまり大きな出入りなんてものはなかったから、チート無双を目指してる俺としては、ちよつと退屈な感じがしないでもなかったが。

「平和だねえ・・・」

「ちよつと、動かないだよ」

そんな内に声を漏らすと、体が動いたことに駄目だしがはいった。まあ、その駄目だしってのは、口調から分かると思うが、俺の恋人の一人である雪麗である。

で、なんで駄目だしなんかされるかと言うと・・・今現在、俺は雪麗に膝枕で耳かきをしてもらってるからだ。美女に耳かきをして貰うって、男のロマンだよな。

「うわっ!?!」

そんな平穏な空間に突如として聞こえてきた、悲鳴のような驚愕のような声。この声は・・・つららだな。いったい、何があったんだろ

「つつ! つらら!?!」

「ぬおおおおうつつつつうつつ!?!」

つららの声に反応した雪麗は、耳かきを手放した。となると当然、重力によって俺の耳の奥に・・・よい子も悪い子も、絶対に真似しちゃ駄目だぞ

「・・・あ。・・・ごめんなさい」

「い、いや、気にするな。致死ダメージに比べたら、大したことじゃない」

うん、本当は物凄く痛いけどな？ そりゃ、致死ダメージと比べたら・・・とはなるけど、比べるものが違う。やられてみないと分からない痛みだとは思うが。

「それより・・・、つららの事だろ」

「・・・そうね」

雪麗はまだ申し訳なさそうな顔をしていたが、俺の言葉に気を取り直したようだ。俺たち二人は立ち上がって、声がした庭の方に向かう。すると、そこには

「・・・つらら、何してんのよ」

「うう・・・、お母様、助けて下さい」

庭に植えられている木に、ロープで逆さ吊りにされたつらがいた。誰がやったかは知らないが・・・なかなか、いい趣味をしてやがると言っていてやろう。

「・・・で、お前らも何やってるんだ？」

「沖見猫様、助けて下せえ・・・」

「・・・同じく」

つららがぶら下がってる木の近くに空いている大きな穴、そこには青田坊と黒田坊のコンビがはまっていた。・・・その穴、昨日青田坊が掘ってなかったっけ？

まあ、なんだかよく分からないが、とにかく救出した方がいいだろう。という事で、雪麗はつららを、俺は青田坊と黒田坊のコンビを救出した。

「・・・それで、結局何があっただんだ？」

「えっと、また若の悪戯でして・・・」

俺が説明を求めると、代表してつららが答えた。ああ、なるほど、リクオは最近、毎日のように悪戯してるからな。・・・というか、最初からそう考えるべきだった。

「・・・懲りないね、お前ら。いいかげん、子どもの手口くらい理解しろよ」

「そうは言ってもですね・・・」

リクオの悪戯にやられた奴らがゴニョゴニョ言ってるやがるが、結局は子どももの悪戯じゃねえか。そんなのに引くかかって、大人としても妖怪としても・・・なあ？

「ほら、例えばあんな風な罠があったりするだろ？ そしたらお前らは、普通に引くかかってちまうわけだ」

俺はちよつと二人（つららは別！）をバカにする感じにしながら、庭のある一点を指差す。その先には、ここが罠ですよー的なオーラぶんぶんの地面。

「いや、流石にあれぐらい・・・」

「はっ！ 甘いんだよ、お前たちは！」

「な、何だってー？」

分かり易すぎる罠に、あんなのぐらいなら自分たちでも流石に引つかからないと、黒田坊は反論しようとするが・・・駄目だな、全然駄目だ。その認識は甘過ぎる！

「あんな見え透いた罠、引つかかる奴なんていないだろ？・・・そこで逆に、お前らは罠に引つかかっているんだ」

俺はニヤリと笑いながら、その辺に落ちてたそれなりに大きな石を持ち上げる。そしてその石を、例の分かり易すぎる罠の横の地面にぶん投げる　！

この場にいる皆が息を飲む中、俺が投げた石は狙い通りの場所にジャストミート！　するとどうだろうか、やはり俺の予測通り、落とし穴がそこに現れた。

「これは、ぬうう・・・」

「な、言っただろ？」

この辺が、まだまだ子どもなんだよな。これ見よがしに見せつけたら、罠だと自分から言っているようなもんだろうに・・・。俺に勝つには、まだ早かったようだな！

俺は勝ち誇ったように、罠の落とし穴の下に向かう。勝利の証として、その落とし穴に見せかけたフェイクを踏みしめてやる。大人気ないとか気にしな、

「ぬあああああああ！？」

囿の地面を踏んづけた瞬間、体が浮くような感覚、次いで体中に鈍痛。え、ちよ、なんでこっちにも穴が開いて……。労力とか考えたら、絶対に掘る筈がないのに。

俺はリクオの行動に混乱していたが、穴の中に一枚の紙が落ちているのに気づき、その紙を急いであらためる。すると、その紙に書かれていたのは……

『沖見猫のバーカ byリクオ』

……マジで？ え、俺が見破って、尚且つこの落とし穴を踏むことも予測済み？……あのガキ、なんて策士だ。……将来的に、めちやくちや腹黒くなる気がする。

「……あなた、物凄くかつこ悪いわね」

俺がリクオの将来を予測して恐怖していると、落とし穴の上から雪麗の冷たい視線と声が。……リクオの野郎、まさかこの展開も予測なんて……してないよな？

そんなリク才腹黒疑惑が噴出した事件から数日後、奴良組幹部が集まる総会が開催される。一応幹部である俺も、当然のことながら参加だ。

それにしても・・・いつも思うんだが、こいつらって幹部に見えないよな。もったいないお化けとか・・・確か、応募で作られた妖怪だったろ。

「おお、総大将」

「やあやあごくろうつ、どうじゃい？ みんな最近、妖怪を楽しんでるかい？」

俺が幹部たちを観察していると、ぬらりひょんとリクオが大広間に入ってきた。せこい悪行自慢をした幹部たちも、会話を止めてぬらりひょんの方に注目する。

「へへへ・・・シノギは全然ですな」

「ところで総大将、今回はどういった？」

「うむ・・・。そろそろ・・・三代目を決めねばなと思ってなあ」

幹部の数人が挨拶をして、早速本題を尋ね、ぬらりひょんはニヤリと笑って顎に手を当てながら答えた。周りの幹部連中も、その議題について賛同の空気を示す。

「おお・・・それはよいですなあ。二代目が死んでもう数年・・・いつまでも隠居された初代が代理では、おつらいでしょう」

最初に口を開いたのは、死神みたいな格好をした妖怪。ガゴゼツて名前で、昔から奴良組に居たらしいんだが・・・すまん、まったく記憶にないんだ。

「総大将！ 悪事ではガゴゼ殿の右に出る者はおりますまい！」
「なんせ今年におこつた子供の神隠しは・・・全てガゴゼ会の所業ですからな！」

ガゴゼが口を開いたことで、幾らかの妖怪がガゴゼにゴマをするようにすり寄る。なんとというか、こいつら本当に幹部なのかって思うんだが。まあ、それより・・・

「え、マジで？ 今年の神隠しが全部ガゴゼの仕業って・・・本当か？」

「・・・なんじゃ、沖児猫」

「いや・・・神隠しって一年に全国でかなりの数あるだろ？ それを、一つの団体だけでやるって・・・なかなかやるな」

奴良組のシマって、牛鬼組までの筈だしな。その先は敵地なのに、それを振り切つてまで子供を攫うとは・・・って、なんでみんなそんな目で俺を見る？

「・・・沖児猫は無視せい」

「「「はっ！」「」」

「いじめか！？ いじめなのか?!」

俺はただ単に素朴な感想を口に出したただけじゃん！ それなのに、こんな仕打ちとは・・・！ ああ、こんな感じでいじめって発展していくんだな・・・。

「まあ、沖児猫は置いて、相変わらず現役バリバリなようじゃが・・・ガゴゼ、お前じゃ駄目じゃ。三代目の件・・・このワシの孫、リクオをすえようと思つてな」

ぬらりひよんは隣に置いていたリクオの頭を撫でながら、爆弾発言を投下する。今まで場の空気に馴染めていなかったリクオは、急な話に驚いているようだった。

そして、その宣言に驚いているのは、リクオだけじゃない。一部を除いた幹部たちは、軒並み驚嘆の声を上げている。その中でも一番顔色が変わったのは……

「どうした、ガゴゼ？ 顔が悪いぞ？」

「そつ、そんなことはないぞ、沖見猫」

……まったく、分かり易すぎるな、こいつ。俺の冗談にも反応出来ないほど狼狽えるとか、絶対に腹芸下手くそだろ。まあ、此方としては楽でいいが。

「じいちゃ……」

「どうした、リクオ……よろこばんか。お前が欲しがったもんじゃろ」

リクオがぬらりひよんに何か物申したそうにするが、ぬらりひよんはそれを遮る。……いや、ちゃんと聞いてやれよ。嫌われていいのか、おじいちゃん。

「さあ、採決を取ろうではないか！ リクオ……、お前に継がせてやるぞ！ 奴良組72団体……構成妖怪一万匹が今からお前の下僕じゃ！」

「い……いやだ！」

ぬらりひよんがドヤ顔でリクオに言うが、リクオは即座に断る。ふむ、断る？……さっきまでのバカ話のせいかね？ まあ、その

気持ちは分からなくてもないが。

「こ、こんな奴らと一緒になんかいたら、人間にもっと嫌われちゃうよー！」

「リクオ……？」

「妖怪が……こんな悪い奴らだつて知らなかった！ おじいちゃんになんか、ぜんぜん……似てないよー！！」

リクオは一方的にまくし立てた後、部屋から走って出て行く。一寸遅れてぬらりひょんが呼び戻そうとするが、全く聞く耳を持たずに庭を走り去った。

「リクオ……」

「あーあ。嫌われたな、おじいちゃん？」

「……うるさいわい」

俺が茶化してみると、ぬらりひょんは目に見えて拗ねた素振りを見せた。こいつも人のジジイ……、孫に拒否されて、傷つかないわけがないんだよな。

「ま、リクオは俺に任せときな。お前は、この場をなんとかしとけよ」

「……うむ、頼んだ」

難しい顔をしているぬらりひょんに手を振って、俺はリクオの後を追う。俺が残っても大したことは出来ないし、これが一番いい行動だろう。適材適所ってやつだ。

庭に出て、少し探してみる。この屋敷、隠れん坊にはもってこいだなー……と、そんなことを考えてる時に、しだれ桜の木の下で

俯いているリクオを発見した。

「リクオ！」

「・・・沖児猫？」

リクオを呼ぶと、元気の無い声で返事をしてくる。・・・まあ、今までの価値観が変わったわけだからな、これくらい落ち込むのも無理からぬ話か。

「・・・どうしたの？ 沖児猫もおじいちゃんみたいに、組を継げって言うの？」

「うん？ そんなわけないだろ。別に、お前は組なんて継がなくていいぞ」

俺が即答すると、リクオは意表を突かれたような顔を見せた。まあ、俺はぬらりひよんの部下なんだし、そんなこと言うのは予想外だったってことか。

でも、ぬらりひよんにも色々事情が有るんだよ。はっきり言って、鯉伴が実は死んでないから、リクオに組を継いでもらう必要は全くないからな。

ぬらりひよんが継げって言ったのは、ガゴゼみみたいな奴らを牽制したり、一応の後継ぎを決めとかなないといけないからだ。いつまでも、無視は出来ないだろうし。

リクオが継がなくても、鯉伴が復活したらそのままでもいいし、リクオが継ぐって言うっても、その時鯉伴は身を引くだろうから・・・まあ、そんなとこだ。

「・・・だったら、何しに来たの？」

「その言い方は無くないか？・・・まあ、ちょっと話でもしようか

「思ってたな」

うん、俺はそれ以上のことなんて出来ないし、しようとも思わないからな。リクオも最初は訝しんでいたようだが、俺の言葉が真実だと分かったようで、口を開く。

「・・・ねえ、沖見猫も妖怪・・・、なんだよね？」

「ん〜、まあ、そうだな」

「だったら、あいつらみたいなさ・・・したことがあるの？」

あいつら・・・ってのは、ガゴゼとかのことだよな。子供を攫ったり、火事を起こしたり・・・いや、そんなセコいこと、この俺がするわけないじゃん。

「ふっ、俺をあんな雑魚共と一緒にするな。そんなこと、一度もしていない」

「・・・そうだよな。いつも屋敷でゲームばかりしてるのに、そんなことしてる時間ないよね」

・・・あれ、なんでこんなこと言われてるんだろう。今って、そんな話だったっけ？・・・うん、やっぱりリクオって、腹黒いような気がする。

「・・・それで、沖見猫は、あいつらのやってること・・・賛成なの？」

「賛成？　するか、そんなもん。俺だって一応元人間だしな、普通に胸くそ悪いぞ」

さすがに、あんなこと堂々と言われて気分悪くならないほど、俺だって妖怪に染まりきっちゃいない。人間としての心は、一応まだ

残ってると思う。

「え、沖兎猫って元々人間だったの!？」

「ん？ 言って無かった・・・というか、誰にも言っていないか。うん、まあ・・・色々と込み入った事情があるがな」

そついや、言ったこと無いな」と思いつつ、言っても仕方ないことだろうと思う。まあ、閻魔とか神とか・・・今の俺の生活に、何の関係性もないし。

「・・・だったら、沖兎猫は、何で奴良組にいるの？」

「そんなもん、この組にいるのが楽しいからに決まってるだろ。・・・まあ、他にも有るっちゃ有るがな」

俺が奴良組にいるのは、楽しいのも有るし・・・、実理的なことを言えば、原作の展開に絡んだり、原作キャラをハーレムに加えたいとかだが。

「・・・楽しいの？ あんな、悪事ばかりやってるだけなのに」「悪事しかやってないわけじゃないからな。そんなの、一部の奴らだけだ」

悪事なんて、奴良組の本当に一部の面だけだしな。むしろ、人のためだったり、土地神を守るためだったり・・・けっこう、役に立つこともやってるんだ。

「・・・そう、なんだ」

リクオはそう言って、そこから喋らなくなった。今日の間に色々な知識が入って、頭を整理しているのかもしれない。こういう時は・

・大いに悩め若者よ、かな？

腹黒か天然か、それが問題だ（後書き）

最後ちよつと区切り悪かった気もしますが、作者がオチつけるの
苦手なのは知つての通り。毎回ちゃんとしたオチをつけれる他の作
者さん達が、心底羨ましい。

リクオが腹黒い……つてのは、作者的にただそう思ってるだけ
です。うん、夜才はともかく、昼才は腹黒いと思う。

慣れないことはしない方がいい(前書き)

お待たせしましたあ！ 言い訳させてもらおうと、入試やら卒業式やらで暇な時間が少なくて……。あと、一回行き詰まって方向を変更したせいも……。ですが、待たせた割には、内容は微妙かもしれません。

慣れないことはしない方がいい

リクオが継がない宣言をした奴良組総会の翌日である今日、俺は珍しく仕事をしている。これは、ぬらりひょんと俺の協議の結果なわけだが・・・面倒だな。

その仕事というのは、リクオの護衛。ガゴゼがリクオを狙ってきたそうだが、そんな不確定なことを本家の奴らに話すわけにもいかないので、俺が直接つてわけだ。

「ふう、それにしても・・・他に方法はないのかねえ？」

俺は周りの様子を見渡しながら、当初から思っていた不満を口にする。いや、だって、護衛方法が酷いんだよ。その護衛方法つてのが

「あれ、運転手さん変わつたんですか？」

「いやあ、ちよつと事情が有つてね。大丈夫、少ししたら元に戻るから」

今のやり取りで、分かつてもらえただろうか。そう、俺は現在、リクオが登下校するバスの運転手に化けているんだ。あ、もちろん運転は出来るぞ。

ガゴゼがリクオを狙うとしたら、言い逃れがしやすい事故に偽装するだろう。事故が起きるとしたら、このバスを狙うしかない・・・なら、バスの運転手つてこと。

「・・・でも、やっぱり俺には向いてないよな、運転手なんて」

俺ってこういう裏方系みたいな仕事苦手だしな・・・と、そう考えていたところで俺は、一人の美少女がバスの外にずっと立っていることに気づいた。

「その子、大人になったら俺のハー、・・・もとい、バスに乗らないのか？」

危ない危ない、紳士なお兄さんを演じるつもりだったのに、ついいつものノリで話しかけちゃった。まあ、美少女は気づかなかつたようで、普通に話しかけてくる。

「あの、友達が一人来てないんです。さっき、バスに乗らないって言ってたけど、他に帰る手段なんてないし・・・」

「バスに乗らないって・・・なんでさ？」

その友達つてのが誰だか知らないが、どんな理由があつてバスに乗らないと言うのだろう。あれか、他の友達と喧嘩して、意地になるといふ若気のいたりか。

「自分には一緒に乗る資格なんてないからって・・・。妖怪とか何とか言つてたけど、意地なんて張らなくていいのに」

「妖怪・・・その友達つて、もしかしなくてもリクオだったりする？」

「リクオ君を知ってるんですか？」

あゝ、やっぱりリクオだったのかよ。妖怪云々を口にするとしたら、リクオぐらいなもんだと思つたんだよ。・・・あれか、昨日の件が後を引いてるのも有るのか。

「まあ、ちよつとな。えつと・・・あ、家長カナです」そう、カナちゃんね。カナちゃんは、リクオが説得したらバスに乗ってくると思うか？」

「うーん、リクオ君は意地っ張りなところが有るから・・・難しいかも」

だよなー・・・リクオの性格だったら、意地張ったら最後まで意地張りそうなんだよな。仕方ないな、俺の仕事の意味がないが・・・迎えを呼んでやるか。

俺は着ているスーツのポケットから携帯を取り出し、アドレス帳に入ってる鴉天狗の名前をプッシュする。すると少しコール音が続いた後、鴉天狗が電話に出た。

「もしもし、カラスか？」

『うむ、なんじゃ、沖見猫』

「リクオがバスに乗らないって言うてるらしいからさ、お前が迎えに行つてやつてくれない？」

『む・・・分かった』

そんなやり取りで、俺は電話を切る。これで、たぶんリクオは大丈夫だろう・・・それにしても、鴉天狗ってなんで携帯とかパソコン得意なんだろうな？

「まあ、リクオはこれで大丈夫だ。他の子は全員乗つたのか？」

「えつと・・・はい、ちゃんとみんな乗つてるみたいです」

「ふむ、じゃあ出発するか。カナちゃんも席に座つてな」

俺がそう言うと、カナちゃんは「はい」と返事をして、友達が

いる一番後ろの席に向かって行った。カナちゃんが座ったことを確認した俺は、バスを発信させる。

「・・・俺って、なんでバスの運転手なんてやってるんだろっな」

「・・・謎だ。うん、謎だよ。」

バスは順調に道を進み、発車してからだいたい五分ぐらい経った。バスの中の子ども達は騒ぎまくって五月蠅いが、それもすぐに終わることだろうと諦めている。

と、そんな風に油断していたのがいけなかったのだろうか。いや、油断してなくても意味ないけど。バスがトンネルに差し掛かったところで、事件は起きた。

「ぬおっ!?!」

いきなり窓の外に妖怪が現れ、俺は一瞬それに驚愕してしまう。たぶん、あの格好からして、ガゴゼの部下だと思うが・・・リクオがないのに襲ってくるとは。

そして、バスに強烈な負荷がかかる。ミラーから見えた限り、岩をバスの上に落とされ、横転したようだ。トンネルの中なわけだか

ら・・・うん、閉じ込められたな。

「ちっ、総会の翌日に来るなんて・・・。ガゴゼの野郎、絶対にバカだろ」

普通、少し間を開けないと、疑われるのは分かりきってるだろうに。この俺にバカって思われるとか、相当バカな証拠だぜ？ 分かってる？ その辺り。

「ま、リクオが乗ってないのは良かったと考えるべきかな。それよりも・・・おい、ガキ共！ 無事か！？」

バスには岩はかすっただけだったみたいだから、たぶん大丈夫だとは思うが・・・もしもということもある。横転した時に頭を打つてたりしたら、洒落にならない。

「う、運転手さん・・・私は、無事です。でも、何人か意識が無くて・・・。それに、岩に足が挟まってる子も・・・」

俺の呼びかけに、カナちゃんがはっきりとした声で返してくれる。・・・あれ、カナちゃんって一番後ろにいた筈だよな？ 一番危険だったろうに、なんでこんなにピンピンしてるんだ？・・・まあ、いいか。

「はいはい、ちよいと見せてくれ・・・」

意識が無い奴らは・・・、うん、大したこと無いな。呼吸も安定してるし、たぶんショックで気絶してるだけだろう。問題は・・・岩に挟まってる奴か。

岩に挟まっていたのは、将来が楽しみな美少女。挟まってるだけで、下敷きにはなつてないみたいだな。運がいいな。．．やはり神は、美少女に優しいんだろう。

まあ、救助を待つべきなんだろうが、ガゴゼがいる以上、そんなこと言つてられない。さつさと救出しとくか．．これ、本当はやりたくないんだけどな。

俺はバスの座席の下から、隠しておいた二代目夜王丸を引っ張り出す。そして、適度な妖力を込め．．岩に向かって、それを振り抜いた。

「うわっ、ちょ、運転手さん!？」

俺が刀を持っていることにか、それとも岩に向かって斬りつけたことにか．．カナちゃんが驚愕の声をあげる。まあ、どっちも意味が分からないだろうからな。

だけど、俺はそんな声に構つてられるほど余裕がない。何故つて？ 実はこの刀の呪い、無機物にも有効なんだ。だから．．今、体中が引きちぎれそうに痛いんだよ！

「ぐう、耐える俺．．！ ここで耐えたら、漢度が上昇する筈！
そうすりゃ、もつとフラグが立つ筈なんだあああ!！」
「．．．運転手さん?」

あれ、何故だろう？ 漢度が上昇どころか、カナちゃんの視線がおかしなものを見る目になつてるんだが．．あれか、口に出していいセリフじゃなかったな。

ま、まあ、そんなことは置いといて．．よし、上にあつた岩は

全部退かせたみたいだ。美少女に傷一つつけず、岩だけ綺麗に壊すとは・・・さすが俺だぜ。

「これで、トンネルを塞いでる岩も・・・いや、無理だな。さすがにそれは死ぬ」

トンネルを抜けるためには、かなりの岩を壊さないと駄目だろう。一つ二つならともかく、それは身が保たない。・・・ここは素直に、助けを待つべきか。

「・・・だけど」

「ち、けっこう生き残ってんじゃねーか」

俺が視線を横に向けると、ガゴゼ以下数十の妖怪がいた。・・・俺一人で戦えと？ それ、なんて無理ゲ？・・・いや、元々護衛なわけだし、戦う予定だったが・・・それは、援護ありきだったし。

本来の作戦だったら、俺がリクオの護衛について、襲ってきた場合には時間を稼いで、レイを通して応援を呼ぶつもりだった。けど、リクオがいない今、妖怪たちが応援要請に応えてくれるか怪しい。

「ヒツ!? ど、どなたさまですかぁー!?!」

と、どうやら子ども達がガゴゼに気づいてしまったらしい。・・・今、大声上げた子ども、小学生の癖に老け顔だなぁ・・・それに、ワカメだし。

「ひ・・・ああ・・・こっちへ・・・」

俺がそのワカメの将来について真剣に考えかけていると、どうや

らガゴゼ達が近づいてきたらしい。ワカメやカナちゃん達が悲鳴を上げる。・・・しょうがないな。

「おい、ガゴゼ！」

「！・・・沖兎猫、だと？」

時間を稼ぐのと、俺の存在を知らせるためにガゴゼを呼ぶと、ガゴゼは顔を驚愕の色に染める。・・・もともと汚い面なのに、さらに気持ち悪くなったな。

「何故、貴様がここに・・・」

「そんなの、考えるまでもないだろう？」

「・・・くっ、おのれ・・・！」

うん、さすがにそこまでバカじゃなかったらしい。これで、俺がいる理由が分からなかったら、本当に死んだ方がいいと思う。・・・まあ、どの道死んだ方がいいが。

「う、運転手さん、あ、あれと、知り合いなんですか！？」

ガゴゼと俺が普通に話しているのを見て、カナちゃんが冷や汗を流しながら尋ねてくる。まあ、妖怪なんかと知り合いだったら、怖いのは当たり前だよな。

「んー、いや、知り合いというか・・・よく知らない隣人、みたいな？」

あれと知り合いなんて、例え真実でも認めたくない。だから、この答えで充分だ。・・・あれ、よく知らない隣人って知り合いに入るのか？

後ろの子ども達が危ないし……。しょうがないってことで、夜王丸に妖力を込める。

「ちっ、来るんじゃないよ!!」

迫りくるガゴゼの部下たちに、俺は夜王丸を振り抜いた。かなりの量の妖力を込めたから、敵は一層出来たわけだが……。当然、俺の体に激痛が走る。

「ぬっ、があっ、ぐう……。がつ!!」

「運転手さん!？」

妖刀の呪いで苦悶の声を漏らす俺に、カナちゃんが悲鳴に近い声を上げる。だが、大丈夫だと言えるほど、俺には余裕が無い。体の痛みもそうだし……。残ってるガゴゼの部下だって、まだ沢山いるんだ。

「クカカ、少しは強力な武器を持っているらしいが……。使い勝手が悪いらしい」

「うる、ぐっ……。さい」

あ、何かウルグアイみたい、って五月蠅いわ!……。なんで俺、自分で勝手に考えて、自分にノリツツコミしてるんだろ?。……。あれだ、たぶん疲れてるんだよ。

「ふん、これなら、大した時間はかかるまいて……。」

俺の状態を見て、ガゴゼは余裕そうに鼻を鳴らす。まあ確かに、普通に考えて、俺が長い時間保つ筈がない……。だが。

「・・・ふつ。悪いがガゴゼ・・・俺はな、こんな所でやられる男じゃないんだ」

「ククク、負け惜しみを・・・」

負け惜しみ？ ああそうさ、こんなのは何の根拠もない、ただの負け惜しみさ。けどな、最後の最後まで、俺は戦い続けてやろう。

「いくぞ、ガゴゼえエエエー!!!」

俺は最後の力を振り絞り、ガゴゼに向かって走り出す。この勝負、負けるわけにはいかないんだあああ!!!

「　　沖兎猫、何をしている？」

「あべしっ!!!」

気合いを入れて立ち向かおうとした時に聞こえた、間の抜けたような声。出鼻をくじかれた俺は、前方向にスライディングで転けてしまった。ちくしょう、誰だ!!!

「って・・・ぬらりひょん？」

声のした方を向くと、そこには若い頃のぬらりひょんをちっさく

した感じの奴と百鬼夜行がいた。まあ、ぬらりひよんの訳はないし。
・・ああ、もしかしてリクオか？

確か、ぬらりひよんの孫って作品の中でも、リクオってあの姿だったしな。・・それにしても、鯉伴よりぬらりひよんに似てるって・・・、隔世遺伝かよ。

「よう、沖見猫・・お前が、カナちゃん達を守ってくれてたのか？」

「・・まあ、そうなるんじゃないね」

「すまねえな、助かった」

・・誰だ、このイケメンは！？ いや、リクオだけど・・でも、リクオはこんなんじゃないだろ？！ 変化しただけで、何でここまで性格変わってんだよ！！

「まあ、こつから先はオレがやる・・おめえは休んでな」

ふむ、俺に休めとな？ 後から来たくせに、いいとこだけ持って行こうとするんじゃないやねえ！・・なんて言えないけど。だって俺、もう立ってるだけで精一杯だし。

「・・分かったよ。ひじょ〜に残念だが、ここは素直に引いてやるっ」

俺はそう言って、トンネルの縁に移動し、背中を預ける。もう、体中が痛いし、気持ち悪いし・・座れるだけでもありがたいよね、こついう時って。

一息ついたところで、俺は前方に注意を向ける。どうやら、既に

戦闘が始まっているようだ。．．．まあ、圧倒的に本家のリクオ達
が勝ってるみたいだが。

「こ．．．こんなバカな．．．。私の組が．．．そんな．．．。誰
よりも殺してきた．．．最強集団なのに．．．」

その状況に、自分の組に自信を持っていたらしいガゴゼは呆然と
する。．．．いや、殺してきたって人間の子供だろ？ というか、
奴良組に昔からいたなら、自分たちが最強じゃないことぐらい分か
るだろうに。

「ガゴゼ、妖怪の主になるうってモンが、人間いくら殺したからっ
て．．．自慢になんのかい」

俺が思ったことを、青田坊も口に出す。うん、それって誰でも思
うとこだよな。何でガゴゼは気づかなかったんだろうか？．．．ま
あ、バカなんだろう、きつと。

「あきらめる。この企み．．．指つめどころじゃすまされんぜ」
「く．．．ん？」

青田坊の言葉に苦悶の声を漏らしていたガゴゼだったが、何かに
気づいたような表情をする。ガゴゼの視線の先には．．．子ども達
？ って、拙い！！

「フハハハハハ、ザマあ見ろ！！」

ガゴゼの狙いに気づいて、俺が立ち上がる前に、ガゴゼが子ども
達に向かって飛びかかった。青田坊たちも気づいたようだが、不意
を突かれたせいで追いつけない。

「こいつらを殺すぞ!? 若の友人だろ!? 殺されたくなければオレを・・・ヒイイイイイイ!!」

はつきり言って何の意味もないガゴゼの脅し文句は、途中でリクオに遮られた。刀をガゴゼの正面に据え、ガゴゼの顔を真つ二つにしている。おそらく、ガゴゼの行動を読んで先回りしてたんだろう。

「なんで、なんで、貴様のようなガキに・・・。ワシの、ワシのどこがダメなんだー!? 妖怪の誰よりも、恐れられているというのにー!!」

えつと・・・、顔だろ? 強さだろ? 性格だろ? 小物っぽいところだろ? バカなところだろ? 後、他には・・・というか、全部じゃね? むしろ、いいところないし。

「子を貪り喰う妖怪・・・そらあ、おそろしいさ・・・」

ガゴゼに向かって、リクオが目を鋭くして語りかける。・・・まあ、確かに恐ろしいかもしれないが、妖怪ってそういうこと普通にやってる奴多いと思うんだがな。

「だけどな・・・弱えもん殺して悦にひたってる、そんな妖怪が、この闇の世界で一番の“おそれ”になるはずがねえ」

リクオは刀を構え、さらに目を鋭くする。・・・あれ、こいつまだ小三だよな? なんでこんなに風格があるんだろ?・・・育て方を間違えたんじゃないか?

「情けねえ・・・こんなばっかか、オレの下僕の妖怪どもは!

だつたら!!」

声を一段と上げながら、リクオはさらに言葉を続ける。・・・いや、悪いがリクオ、そんなに小物な奴は少ない・・・こともないけど、少数派だよ、きつと。

「オレが三代目を継いでやらあ!! 人にあだなすような奴あ、オレが絶対ゆるさねえ!!」

ぬおつ!? リクオが三代目を継ぐ宣言したつてことは・・・これで、他の候補は出て来にくくなつたつてことだろう。うん、ありがたいこつた。

「世の妖怪どもに告げる、オレが魑魅魍魎の主となる!! 全ての妖怪は、オレの後ろで百鬼夜行の群れとなれ!!」

リクオはそう高らかに宣言しながら、ガゴゼを一刀両断にした。文字通り、上から下まで真っ二つ・・・俺もやられたけど、めっちゃくちゃ痛いんだよあれ。ご愁傷様。

「すげえ・・・あんな小さいのに・・・」

「カツコイイ・・・」

「妖怪つて・・・本当にいたんだ。あんな、スゴイんだ・・・」

その様子を見ていた子ども達が、リクオにそんな讃辞を送る。・・・って、あんだけ守つてやった俺を忘れるな!! なんだか悲しくなつてきただろうが!!

と、俺が不満を感じていたところで、リクオが急に倒れた。ついでに言えば、変化も解けて、普段の姿になっている。・・・これは、

どうしたんだろうか？

「まさか、四分の一……血を継いでるからって、一日の……四分の一しか、妖怪で……いられない……とか？」

リクオを心配している妖怪の中の一人が、そんな予測を立てる。そして、そこから一拍空き……悲鳴のような絶叫がトンネルに響き渡った。

……いや、それ仮定だろ？ というか、一日の四分の一って六時間で、まだそんなに時間経ってないような……。まあ、結局はよく分からないんだが。

「そんなことより……」

なんで、誰も俺の方に来ないんだろうな？ 俺って結構頑張った筈なんだが……もう少ししいたわりの言葉を、っってお前ら、俺を置いて帰ろうとするんじゃないかねえ！！

結局奴良組の面々に置いてかれた俺は、その後バスの運転手として、事情聴取やら取材やらで面倒なことになった。とりあえず一言・
ふざけるなあああ！！！！

慣れないことはしない方がいい（後書き）

これで、やっと原作一話が終了です。次話は、原作二話に入っていきますが・・・誰もが「嘘だっ！」となる展開になる予定です。まあ、予測出来るかもですが。

と、ここで、またまたアンケート！ 以前質問された、沖見猫は下部組織みたいなもの・・・自分の組を持たないのか？というもので、持つべきなのか否かです。

持った場合、基本的に構成員はオリキャラになると思います。まあ、キャラ設定はそこまで問題じゃないんですが・・・空気になるおそれがありますね。

さらに、作者が暴走するかもしれません。持つとしたらどんな妖怪かな〜と考えて、イカ娘が真っ先に浮かびました。イカちゃんは妖怪でもいけると思うのでゲソ！

これらのことが許せるなら、オーケーです。期限は一週間後の3月9日いっぱいまで、今回の決定は、単純に数が多い方にあわせたいと思います。

トラウマは身に染み付くものさ(前書き)

大学前期入試、なんとか合格してましたあ!! 良かった良かった、これでニートにならずに済んだ・・・けど、県外に出ないといけないというorz

ちなみに今回、原作の話ではないです。

トラウマは身に染み付くものさ

ガゴゼの暗殺騒動から早四年、リクオも中学生に上がる年になった。桜舞う通学路を、軽やかな足取りで歩いている。・・・そしてその後ろを、つららがストーカーの如くついて行っている。

まあ、つららにストーカーされるなんて、物凄く羨ましいわけだが・・・これは別に、つららにストーカーの趣味があるわけじゃない。単に、リクオの護衛なだけだ。

「そう、リクオの護衛なだけ・・・。だから、リクオは悪くない・・・！」

「・・・沖児猫様、その拳をほどいてください。護衛が始まってから、いったい何年やってると思ってるんですかい・・・」

俺がつららの後ろで歯を食いしばっていると、横にいた青田坊今は人間に化けて倉田くんだが、呆れたように言ってきた。まあ、何年も・・・

「何年もだとう！？ 許せねえな！！！」
「だから、落ち着いて下せえ！！！」

これが落ち着いてられるか！？ 否よ、否なり、否で在れ！！
リクオオ・・・つららに毎日毎日ストーカーされるなんて、羨ましいにも程が有るわ！！

「よし、落ち着いた。青、じゃなかった倉田くん・・・コンクリートってどこに売ってるか知ってるか？」
「知って何するつもりですかい！？」

え？ そんなの、リクオを海に沈めるに決まってるじゃん。それ以外に使い道なんてないだろう・・・青田坊は何をバカなことを言ってるんだらうな？

「さつさと受け入れて下せえ・・・というか、沖児猫様は二人も美女を侍らせてるんだからいいじゃねえですか」

「バカ野郎！ 女を数なんかで図るんじゃないやねえ！ 大切なのはな、それぞれ個人のスペックなんだよおおおおお！！」

まったく、何をバカなことを・・・。さつきの発言は、全世界のハーレム男を敵に回すぞ。良かったな、俺は心が広がって。これからは気をつけるよ？ あれ？

「つて、リクオにつらがいねえ！？」

「沖児猫様が余計なことばかり言うから、見失っちゃったじゃねえですか！！」

「俺のせいじゃない、リクオのせいだ！」

そんな無駄なやり取りをしながら、俺と青田坊は学校まで走る。周りの視線が痛い気もするが・・・別に構わないさ。だって、俺は慣れてるもの・・・ぐすん。

・・・さて、ここで一つ問題がある。一応幹部にもかかわらず、俺はリクオの護衛なんてものをやってるわけだが・・・どんな風にしていると思う？

つららや青田坊は、小学校から同級生として潜入していたが、俺は中学校の入学式である今日からだ。・・・この時点で、一つ予想が立ったのではないだろうか。

・・・では、答え合わせと行こう。その問題の答えとは

「俺は、リクオの担任の先生なのさあ！」

「先生ー、誰に向かって何を喋ってるんですかー？」

「先生ー、奴良君がいきなり椅子から転げ落ちましたー！」

「誰に向かってだと？ お前には見えんのか！ 何、リクオはほつといて大丈夫だ」

そう、俺は浮世絵中学校一年二組、リクオのクラスの担任教師なのだ！ 学園物の作品に転生したなら、一度はやってみたいよね、先生の仕事。

ガゴゼの一件で、リクオが覚醒したことにより、俺はもうすぐ原作が始まると直感した。だから、別にお前はいらんと言っぬらりひよんを説得して潜入したんだよ。

まあ、原作の舞台が中学か高校か判断出来なかったから、妖怪の成人というイベントがある中学にしたんだが・・・惜しかったな、女子高生たちに囲まれる生活・・・

「先生ー、何故オレ達そっちのけで涙を流してるんですかー？」

「バカ野郎・・・これで、お前は泣かずにいられるのか？」
「いや、知りませんよ」

なんだと？ まったく、最近のガキは・・・。草食系もいいがな、夢を追いかけることを知りなさい！ じゃなきゃ、お前の将来は魔法使いオンリーだ！

・・・ん？ 何故俺が、教師になんかなれるのかって？ そんなもん、組の妖怪の妖術で色々頑張ったんだよ。なかなか便利な能力持つてるよな、あいつら。

何？ お前が教師なんて務まるのか、お前ってバカだろ？・・・ふっ、すこぶる甘いな。バカなことで、勉強が出来ることは関係ないんだよ。・・・いや、元々は勉強も出来てなかったんだけど。

それは、俺がまだ前世で普通に生きてた頃の記憶。殆ど臆気な中で、幾つか覚えている記憶の中に、俺が勉強がちゃんと出来るようになった記憶がある

それは、俺が中学生になったばかりの事だった。その時はまだ、俺は勉強なんてやる気がなくて、赤点回避が出来ればいい程度の考えだったんじゃないだろうか。

そんな考えだから、テスト週間でも遊びに出かけ、幼なじみでとんでもない金持ちの・・・名前も顔も性別も分からない、A（仮）の家でパワプロをしていた。

「なあ、（俺の名前だろう）」

「ん・・・なんだ？」

「明日はテストだろう？ 何故私たちは、普通にパワプロをやっているんだ？」

「・・・何か問題でも？ お前んちのテレビはデカイからな、楽しいんだよ」

一人称が私・・・ってことは、女だったんだろうか。まあ、とにかく、Aが投げかけてきた質問に、俺はそんな風に答えた。・・・それが、いけなかったんだと思う。

「・・・なんだと？ 問題がない、お前は本当にそう思うのか・・・？」

「逆に聞くが、何の問題が有るんだ？ というか、お前がピッチャーの番なんだから早く投げろよ」

「こんの・・・、バカめが!!!」

俺がバッターにスイングをさせている中、Aの怒声が部屋に響き渡った。バカめが・・・これは、政宗じゃなくて司馬懿の方かな・・・そういうことじゃないか。

「ふっふっふ、常日頃から私は思っていたのだよ・・・」

「・・・一応聞こうか、何をだ？」

「この大金持ちである私の幼なじみ兼、親友兼、こ「嘘つくんじやねえ!」・・・が、こんなにバカでいい筈がない、とな」

自分で大金持ちって・・・いや、事実だけど。というか、この時の俺はなんでAの言葉を遮ったんだろうか？・・・まあ、気にすることじゃないと思う。

「なんでお前の意味不明美学のために、俺が勉強しなくちゃいけないだよ。はいはい、この話題は終了ってことで」

「知っているだろう？ 私は、一度宣言したことは、いくら金をかけてでも実行するということを。 逃がさんぞ？」

そう言いながらAは指を鳴らし、テレビでよく見る黒服が何十人も現れる。・・・これ、逃げられないね。はた迷惑にも程があると、言っただけかな？

「よし、黒服Aと黒服B、こいつを連れて逝っちゃってくれ」

「部下の名前ぐらい覚えてやれよ・・・じゃなくて、字が違っただろ！？」

俺は叫んで、抗議の言葉を続けようとしたが、黒服Aと黒服Bに捕まえられてしまう。そして、俺の中にはトラウマしかないある一室に引っ張っていかれて・・・

「あ、ちょ、マジで止め、あー！ー！ー！ー！」

・・・で、その後いろいろ有って、俺の体に二流大学合格レベルの学力が染み付いたんだよ・・・。まあ、二流・・・ってところが、俺の限界点なんだろうかな。

「先生ー、なんで私たちを無視して、遠い目をしてるんですかー？」
「・・・お前も、いつか分かるさ・・・。」

ふっ、なんでこんな記憶は残っているんだろうか。・・・あれだろ、トラウマだけ残してやろうという、閻魔（笑）&神（笑）の陰謀なんだろう？

・・・まあ、いいや。俺って、過去には殆ど拘らない事で有名な人だし。ここはポジティブに、教師の仕事が出来る程度の学力が有ったことを喜ぼう。

「　　ということで、今日のホームルームは終了だあー！！」

「先生ー、どういうことですかー？」

「考えるんじゃない、感じるんだー！！」

俺も自分が何を言ってるか分からないが、やるべきことは既に終わってたし、まあ構わないだろう。一応ね、俺だってやらなきゃならない仕事はきちんとこなすよ？

生徒たちは挨拶をした後、友達と話しながら、教室から出て行く。そして、その流れに逆らって、リクオは俺の方に向かってきた。後ろにいるのは・・・カナちゃん？

「沖兎猫、これどういうことー!？」

「どづいつことも何も、こづいつことだ。というか、学校では先生と呼びやがれ」

まったく、カナちゃんが近くにいるってのに、そんなデカい声で名前を呼ぶんじゃないやねえよ。俺のことがバレて一番困るのはお前だろうが。

「・・・先生、どこかで会ったことありませんでしたっけ？」

そんな俺たちのやり取りを見ていたカナちゃんが、自信なさげに聞いてくる。まあ、ガゴゼの時のあれなんだろうが・・・。

「ん？ それは口説きの常套句だな。ということは、カナちゃんは俺のことを・・・。あと三年・・・いや、もう少し・・・。」

「沖児・・・じゃない、あんた一応先生のくせに何言ってるの!？」

残念そうに首を振ると、リクオが盛大にツツコミをいれてきた。おいおい、深く突っ込まれたらバレるから、ごまかしただけじゃないか・・・本当だよ？

「せ、先生！ 真顔で何言ってるんですか！ もう、行こリクオくん！」

「え、ちょ、カナちゃ・・・沖、先生！ 後で詳しく聞くからね！」

俺の言葉に顔を赤くしたカナちゃんは、リクオを引っ張って教室から出て行った。そうすると、俺は教室に一人になってしまっわけ・・・。

「ふむ、職員室に戻るか・・・。」

別に、寂しいわけじゃないんだからねっ！・・・本当は寂しいです、嘘つきました。兎は寂しいと死ぬって迷信があるけど、俺は本当に死んじゃうかもよ。

「こうなったら、美人の理科教師、マナ先生とのランデブーと洒落込んでやる」

この学校の先生も生徒も、何故か美人揃いだが、マナ先生はその中でも上ランクに属している。今年三十とは思えないほどの童顔っぷりだよ、うん。

「職員室はこっち・・・ん？」

寂しく独り言を喋りながら職員室に向かっていると、学校にある寂れた噴水に、一人の美少女が向き合っているのが見えた。そして、その噴水には・・・

「・・・確か、白蛇？」

その昔、奴良組に起こった財産危機を救った、幸運を呼び込む白い蛇。あいつ、俺が復活してから見たこと無かったが、こんな所にいたのかよ。

というか、あいつとあの美少女はいったいどういう関係・・・はっ！まさか、そういう関係か！？あいつは何故か人間の嫁さんを貰っていたし、あり得る！

「てめえ、何ふざけたことしてやがる！」

「ぬおっ、なんじゃ！？」

「え、ひーおじーちゃん?!」

白蛇の暴挙に気づいた俺が、跳び蹴りを食らわそうとすると、白蛇は直前に気づいて器用に避けた。そして、美少女はそれを見て叫んで・・・ひーおじーちゃん?

「・・・この爬虫類の血から、こんな美少女が?・・・うっそだー」
「悪かったのー!・・・沖児猫?」

「ん? 今気づいたのかよ。久しぶりだな、この爬虫類が」
「・・・相変わらずじゃな」

相変わらず? 当たり前だ。俺は今も昔も変わらず、自分以外がモテるのが大嫌いだもん。・・・俺はいいのさ、世界は俺を中心に回っているんだから。

「・・・ひーおじーちゃん、この人・・・」

「おお、凜子・・・こやつは沖児猫、ワシがお世話になっとる奴良組という組織の・・・一応、幹部じゃ」

「おいこら、その溜めと一応ってのは何だ? 自分でも思っただいけど、他人に言われるのは凄く腹立つんだよ」

人が腹立つ時って、自分でも自覚していることを指摘された時って、どこかで聞いたことがある。今日、そのことが実感出来たよ。いい勉強になった。

と、俺がまた一步大人になっている横で、先ほど凜子と呼ばれていた子が、何かを言いよんでいるような気配がした。・・・もしかして、告白ですか?

「凜子ちゃん、言いたいことが有るなら、はっきり言って欲しい。」

俺が、全てこの身で受け止めてやるっ」

俺は全力でスマイルしながら、凜子ちゃんの肩に手を置く。凜子ちゃんはそれに一瞬ビクついたが、意を決したように、俺に話しかけてくる。

「あの、あなた・・・四年前の、運転手さんですよね？」

そう言われた瞬間、俺の脳内で記憶フォルダ探しが開始された。だってさ、こんな美少女に貸しが有るってことだよ？利用しない手はないでしょう！

だけど・・・やべ、思い出せない。あの時、けっこうな人数がいたし、激痛やら何やらで他に気をかける余裕が無かったからなあ・・・。くそ、何たる不覚。

「私、その、あの時あなたに助けて貰って、その・・・ありがとうございました！」

「え？・・・ふっ、何、気にすることはない。当然のことをしたままでさ」

「・・・お前、本当に相変わらずじゃな」

そんなやり取りをした後、凜子ちゃんはその時のことを語ってくれた。なんでも、あの時岩に挟まっていて、俺が助けた子が凜子ちゃんだったらしい。

「だから、ずっとお礼が言いたくて・・・。バス会社に行ってもいなかったし、まさか妖怪だったなんて・・・」

「・・・お前を襲った奴らと同じで、俺も妖怪なわけだが・・・怖いかな？」

「あなたが怖いわけなんてないです。・・・それに、私も八分の一は妖怪ですから」

凜子ちゃんは最後に自嘲するかのように、そう付け加えた。八分の一妖怪？ まあ、白蛇の曾孫だったらあり得るが・・・まさか、リクオみたいなのがまだいるとは。

「リクオは・・・知らないだろうな」

「？ リクオって、誰ですか？」

「うちの若頭だが・・・まあ、また今度会ってみるといい。お互いに、いい影響になると思うぞ」

凜子ちゃんはたぶん、自分の中途半端な血にコンプレックスが有るんだろう。だったら、同じ境遇のリクオと話せば、もっと自信が持てるようになるかもしれない。

まあ、それからずっと凜子ちゃんと話してたわけだが、辺りが暗くなってきてしまったので、さすがに拙いと思い、また会うことを約束してから家に帰した。

で、また一人美少女との繋がりが出来たことに喜びながら、意気揚々と職員室に向かうと、学年の主任がドアの前に直立していた。何してるんだらう？

「何やってるんですか？ 今時、廊下に立たされているとかなわけないし・・・」

「ほう、廊下に立たされる？ なるほど、それを君に実践してもいいかもしれない」

「・・・はい？」

なんで俺がそんなことをしなければ？ 俺には何も身に覚えが無いんだが・・・って、しまったあ！！ 教師としての仕事を一切何もやってない！？

「いやあ、まさか入学式なんて時から仕事をサボる新人教師がいるとは・・・。時代は変わったものですねあ！」

「ははは、そうですね・・・」

「笑っている場合かあ！！ 貴様の腐った性根、私が叩き直してくれるー！！」

「え、ちょ、待って、あー！！！！」

それから日付が変わるまで、俺は学年主任の先生に付きっきりで教師としての心構えを仕込まれ、慣れない事務仕事を泣きながらやる羽目になった。

・・・うん、自分から志願していてなんだが、やっぱり俺は教師になんて務まる器じゃなかったね。今さらながらに後悔している・・・
・辞めていいですか？

トラウマは身に染み付くものさ(後書き)

最近、思うんだ・・・原作一話〜三話辺りの話、凄く書きづらい・・・って。・・・もういつそのこと、ゆらが来るまで時間を飛ばそうかと思つ今日この頃。

そして皆さん、今週号のジャンプ、椎橋先生のコメントを見ましたか！？ ネタバレを見たわけでもないのに、シンクロするとは・・・
・なんかすげえ。

児衣兔の二トな一日(前書き)

今回は、何となく書き始めてしまった児衣兔視点の一日。本当は、二コ動とか2c hとかにはまったく詳しくないんで、児衣兔がやってる事がよく分かってないんですが・・・こんな感じでしょうか？

兎衣の二トな一日

わたし、兎衣は、毎朝起床するのは十時過ぎ。遅い時はもっと遅い時もあるけど、とりあえず今日はいつもと同じくらいの時間に目が覚めた。

「……ん、んう」

目を擦りながら、布団から起き上がる。今は春だからいいけど、冬なんかだったらこんなにくすぐ起きれない。まあ、別に起きなくても支障はないけど。

起き上がったわたしは、一つ欠伸をしながら、横の布団をチラリと伺う。そこには、もう冷たくなっている布団・・・義兄さまは、とっくに出かけたらしい。

少し前まで、義兄さまが起きるのも、わたしと同じくらいの時間だった。むしろ、わたしの方が早く起きて、義兄さまを親切にもたたき起こしてあげていたぐらい。

だけど、最近は教師になんて化けているせいで、早起きをしているらしい。原作に介入したいから云々と言っていたけど・・・そんなこと、する必要無いと思う。

「……ふん」

わたしは鼻を一つ鳴らして、部屋に設置してあるパソコンを起動させる。この時代では最高ランクのスペックを誇る、先月からのわたし愛用機体だ。

暫く待って、まずはインターネットに接続し、アニメ動画の試聴サイトにアクセスする。本当はこれって違法な筈だけど・・・わたしは一応妖怪だし、関係ない。

「ん・・・今期は不作」

幾つかのアニメを流し視して、やはりそう感じる。なんというか、いかにも駄作な感じの作品ばかり・・・。リリカルなのはは、去年に終わってしまったし・・・。

「 兎衣衣、お昼出来たわよ」

その声にわたしが振り向くと、エプロンをつけた雪麗が後ろに立っていた。ふむ、アニメを視ている内に、もうそんな時間になっていたらしい。

雪麗は、義兄さまが昼に屋敷にいないようになってから、毎日わたしを呼びにくる。どうやら、わたしのことを気遣ってらしいけど・・・何を思ってるのやら。

「わかった。今行く」

わたしはパソコンを待機状態にしておいて、居間の方に向かう。その際、雪麗もわたしの横を歩く。端からみたら、身長差なんかから、親子みたいに見えるのかも。

というか、雪麗は義兄さまとできてるわけだし、義姉になるのだろうか・・・ん？ 義兄の嫁って、そのまま義姉になるの？・・・まあ、どうでもいいや。

そんなことを考えている内に居間について、わたしは用意された膳の前に座った。妖怪たちは食事を取る時間もバラバラだから、この場にいるのは少ない。

「 児衣兔。あんた、ちよつとは外に出た方がいいわよ。最近、殆ど屋敷から出てないじゃない」

わたしが、隣の首無の膳に気づかれないようピーマンを移している時に、雪麗が不意にそう言うてくる。そこで慌てて失敗しないのが、わたしが玄人たる所以だ。

「・・・だって、わたしは児衣兔だもの」

「・・・あんた、まったく悪気ないのね。・・・やっぱり、沖児猫の義妹だわ」

・・・？ 何か悪いことでも有るの？ 出る必要なんて無いし、だったら出ない方がいい。・・・というか、わたしが義兄さまの義妹だったら何なのだろう。

「いい？ あんたは奴良組の一員で、あんたは奴良組に扶養されているの。そんなあんたが、ずっとニート生活してたら、迷惑以外のなものでもないでしょう」

「・・・出入りに参加してる」

義兄さまが、出入りに参加しておけば、最低限大丈夫だと言っていた。だから、わたしとしては、ニート生活することに何の躊躇もないんだけど・・・違うの？

「それはあくまで最低限よ。本当なら、もっとしなきゃいけない仕事は有るの」

無然という雪麗を前にして、わたしの頭は高速で思考を巡らせている。仕事・・・わたしが？ 児衣兎で二トトなわたしが、仕事？・・・わたしには、無理だ。

わたしの脳内では、如何に仕事を回避するか シュミレートが同時に幾つも展開する。ただ、あまりいい策は浮かばない。忠告を無視する・・・わけにもいかないし。

「あらあら、雪麗さん。あんまり児衣兎ちゃんを苛めちゃ駄目ですよ」

良策が出る前に、思わぬ助け舟が入った。それは、新しい食事を運んできた、リクオの母である若菜。いつも優しくしてくれてるし、今回も擁護してくれ

「児衣兎ちゃんには、仕事として、後でおつかいに行ってもらおうから」

裏切られた。ニカツとした笑顔でわたしに言ってくるが、わたしには悪魔が笑っているようにしか見えない。きっと、わたし以外にも見えないのだろうけど。

だって、おつかいでしょ？ 商店街まで出かけて、メモを片手に色んなものを買いたさらないといけないという・・・そんなの、面倒なことこの上ない。

「若「はい、これ。買うもののメモとお金ね。あゝ、良かった。児衣兎ちゃんがいてくれて助かったわ」・・・うん」

わたしは急いで反論しようとしたが、若菜に先手を取られて封殺されてしまう。余りにタイミングが良すぎたせいで、若菜が策士に見えてくる・・・流石リクオの母。

結局、おつかいに出かけることになったわたしは、以前若菜に買って貰っていた洋服に身を包み、商店街まで足を運んでいる。自分の足でこれほど長い距離を歩いたのは・・・初めてかもしれない。

「おや、お嬢ちゃん。おつかいかい？ 小さいのに、えらいねえ」

さつきから店に寄るたびに、おじさんがそう言いながら飴をくれる。わたしは一応、合計して十年は生きてるんだけど・・・まあ、貰える物は貰っておく。

「次は・・・」

この辺りにある本屋に寄って、ぬらりひょんが欲しがっていた本を買えと。・・・そんなの、普通おつかいで買わせるものだろうか。

ちよつと探して本屋を見つけ、何の気兼ねもなく中に入る。さつさと目的のブツを見つけて、早く屋敷に帰ろう。そう、心から思っていた時。

「あれは・・・」

ふとラノベコーナーを見ると、わたしが揃えているラノベの最新刊が一冊だけ残っていた。ついこの間出たばかりだったのに、もう新刊が出ているとは・・・。わたしとしたことが、不覚だった。

「・・・まあ、良かった」

気づかずに何ヶ月も経過していたら、初版本がなくなっていたかもしれない。やっぱり揃えるなら、全部初版で揃えておきたいというのがファン心理だ。

財布の中に有る残金を見て、余っているお金だけでそれが買えることを確認する。そして、ラノベコーナーに近寄って、そのラノベを手に取りようと

「「あっ」「」

手に取ろうとしたら、誰かの手とぶつかった。なんというベタなフラグだとも思ったけど、声が女の声だったので、恋愛には発展しないだろう。

というか、どこかで聞いたことがあるような声な気がする。でも、わたしのリアルの知り合いに、ラノベなんて買う人いただろうか、と考えながら顔を見ると・・・

「・・・ミヤ？」

出かける用の身軽な着物を着こなしているミヤが、目を逸らして

そこにいた。着物美人がラノベコーナーに・・・なんて、不釣り合いな光景だろうか。

「レイ・・・これは、違うのよ」

・・・何が違うというのだろうか。ミヤがラノベコーナーにいて、わたしと鉢合わせたことに間違いはない。これから、苦しい言い訳が始まるというのだろうか。

「私はね、是炉様がこの書物について熱く語っておられたから、それで興味を持っただけであって・・・」

「・・・結局は、読んでるんでしょ」

「・・・はい」

苦しいどころか、言い訳にすらなっていないかった。ミヤはわたしのツッコミに、少し間を空けて肯定する。まあ、義兄さまの影響っていうのは、違いないと思うけど。

とりあえずわたし達は、そのラノベとおつかいの本を購入して、ゆっくり話せるミヤの神社に移動した。おつかいの品は買い終わったので、帰り道でちょうどいい。

「・・・でも、意外。ミヤがラノベなんてものを読むなんて」

「ええ、そうでしょうね・・・」

わたしが出されたカルピスを飲みながら率直な感想を言うと、ミヤは恥ずかしそうに答える。隠れオタクというやつは、バレる事を嫌うと言っし、それだろうか。

「ある日、是炉様が一冊のラノベ・・・それを、この神社に持って

来てしまったのが、全ての始まりだったのよ・・・」

それから、ミヤの身振り手振りを交えた熱い説明が始まったけど・・・どうでもいいからカットで。ぶっちゃけ、そんなことに大して興味はないし。

まあ、簡単に要約すると、義兄さまが忘れていったラノベにはまっつてしまい、今では二次創作にまで手を伸ばしてるとか。・・・それでいいのか、髪長姫。

「いいのよ。面白いものは皆が読むべき、当たり前のことだわ」

・・・本人がいつて言うのなら、わたしは何も言わないでいい。ただ・・・キャラ崩壊が凄まじい、とだけ言うておく。

カルピスを飲み切ったことで、用事が無くなったわたしは、神社からさっさと帰宅した。まあ、ミヤはもう少し語りたかったみたいだけど。主にラノベについて。

それで、屋敷に帰っておつかいの品を渡すと、若菜に頭を撫でられながら誉められた。もう、そんなことをされる歳ではないと思うけど・・・別に、悪い気はしない。

「はい、おつかいをちゃんとしてくれた児衣兔ちゃんに、ご褒美のチョコレート！」

そう言いながら渡されたのは、高級で美味しいと評判のチョコレート。わたしも食べたいと思っていただけ、なかなか手に入らなくて諦めていたものだ。

「……ありがとう」

「あらあら、いいのよ。おつかいに行ってくれたお礼なんだから」

若菜はそう言って、台所の方に入っていく。……たぶん、このチョコレートを渡すために、わたしをおつかいに行かせたんだろうな。……出来た人だ。

わたしは早歩きで、鼻歌（by水樹奈々）を歌いながら、部屋へと向かう。こういう物は、食べるのがもったいないけど……わたしは、すぐに食べてしまう派。

「ふんふんふん」

部屋に入って、パソコンをニコ動にアクセスさせて、チョコレートを開封。色んな動画を見ながら、色とりどりのチョコレートを味わっていく……至福の時間だ。

ニコ動と言えば、この前わたしも動画をアップしたな。つららを騙もとい協力して貰って、ウッーウッーウマウマを踊って貰って……あれは、相当な反響だった。

また、つららを使って何か投稿してみようか。例えば……前キムチを食べさせた時の反応が素晴らしかったし、ドッキリ集なんてどうだろう。……うん、いい。

「なら、シュークリームを・・・」

「シュークリームがどうかしたの？」

「・・・いきなり、後ろに立たないで欲しい。間違っつて、銃をぶつ放してしまっつ」

「どこのゴルゴよ!？」

わたしがつららへのドッキリについて考えている内に、つららが後ろに立っていた。どうやら、もう学校が終わった時間らしい・・・時間が経つのは早いな。

つららは、奴良組の中では一番仲がいい。同性で、見た目年齢が近いからなのか、よくつららから話しかけてくるからだ。・・・まあ、友だちだとは思っつてる。

「・・・で、どうしたの？ 何か用が有るんじゃないの？」

「あっ、そうだった！ 私はこれから、リクオ様の護衛で中学生の旧校舎に行つてくるから、お母様に伝えておいて欲しいの！」

「ふーん、分かつた」

何故この時間にそんな所に出かけるのかは知らないが、わたしには関係ない。まあ、雪麗に話すだけだし、特に面倒にもならないだろつうから、伝言は受け取つておく。

「じゃ、頼んだわよ!」

わたしが了承すると、つららはすぐにまた出かけて行つた。さつき帰つてきたばかりだというのに、実に慌たましいことだ・・・まあ、当然だろつうけど。

「・・・ということは、義兄さまもそろそろ帰って来るのかな」

独り言を呟いたのとほぼ同時に、ドタドタと誰かの走って来る音がした。こんな品のない音を出すのは、義兄さま以外に有り得ない・・・タイミングばっちりだな。

「レイ！ 俺は今日もなんとか生還したぞ！ さあ、思う存分褒めちぎるがい、いいいいいいいい！！！！」

「・・・つつさい」

帰って早々暑苦しくまくし立ててきた義兄さまを、わたしは砲撃を放って黙らせる。まったく、これを使ったら、眠くなって夜起きられないのに・・・やれやれだ。

「何故だ、レイ・・・。昨日まで、暖かく迎えてくれたのに、いいいいいい！！！！」

「・・・ふああ」

義兄さまは、教師の仕事をビシビシしごかれたせいで、帰って来るたびに死にそうな風だった。だから、ちよつと優しくしてあげただけど・・・もう、いいでしょ？

「・・・あなた、本当に格好悪いわね。・・・なんで私って、こいつを・・・」

後ろについてきたらしい雪麗が、少しこめかみを揉みながらそう言う。この光景は、一週間に一回は見るのだけど・・・雪麗が義兄さまに惚れた理由なんて、わたしにもさっぱり分からないな。

「雪麗・・・つららが、リクオの護衛で中学校の旧校舎に行くって」

「ん？ そうなの？」

わたしがつららの伝言を伝えると、雪麗は顔を此方に向けて聞き返してくる。一応一ツ頷くと、雪麗はすぐに夕食の用意に向かった。つららが居ないので、夕食の準備にも支障が出るのだろう。

「・・・なあ、レイ？ 俺のこと忘れてな、おうふううううっ！..」

・・・今日は、さっさと寝よう。

夜、夕食を食べ終えて、お風呂も入り終えたわたしは、部屋で独りパソコンの前に座っている。義兄さまは・・・たぶん、雪麗といちゃついでるんだろう。

わたしは普段、この時間はネットサーフィン+2chをやっている。けど、今日は三回も砲撃を使ったせいで、かなり眠いから・・・2chだけに留めておく。

「・・・さて、やりますか」

わたしは一口に出して宣言し、一つのスレに突入していく。そうスレの過去レスを一通り流し視してから、自分のコメントを放り

込む。そうすると・・・

『糞コテ光臨乙w』

『こいつ、NG推奨』

『オレはこいつ好きだ。お前らこそキチ』

・・・と、こんな感じの反応が帰ってくる。余り細かい説明はしないけど・・・わたしは、2chの連中に好かれているんだ。異論は認めない（キリツ）。

わたしぐらいのレベルになると、こんな反応はとても心地よい。後、偶に他の人がわたしを擁護した時に、『自演乙』と見当違いなレスが有ると、凄く笑えてくる。

「駄スレたてんな・・・と。ふああ」

幾つか書き込みをしてみるが、やっぱり眠い。普通だったら、だいたい深夜二時ぐらいまではパソコンの前に居るんだけど・・・もう、今日は無理かな。

2chに寝オチすることを書き込んで、パソコンをシャットダウンした。そして、わたしの能力で布団を出して潜り込む。・・・一応、義兄さまの布団も出しておく。

まあ、義兄さまが帰ってくるのは、大分後になるんだろうけど・・・布団無しにするほど、わたしも鬼じゃない。義兄さまには、わたしに感謝して欲しいものだ。

そんなことを考えている内に、わたしの眠気はピークに達する。

今日は、けっこう色々やったし、疲れたな・・・。明日は、もう少しゆっく、り・・・

そんな、わたしの一日。

兎衣の二トな一日（後書き）

アンケートの結果、組まで作らなくても、舎弟ぐらいでいいんじゃない？という意見が多かったので、そんな風にしてみたいと思います。

とりあえず、舎弟について色々検討してみた結果

・原作キャラ1に、オリキャラ2（もう一人増やそうかな）とも思いましたが、たぶんこれで決定です（

と、なっています。ただ、そんなに出張らせるつもりは無いので、オリキャラばかりで原作の空気が壊れる・・・なんて事はないと思います。

そして、次話は一気にゆらが転校してくるとこまで飛びます。旧校舎探索？ 鳩の登場？・・・すいません、ダイジェストで終わらせませす、本当にすいません。

金持ち？美女以外認めぬ（キリッ（前書き））

前話の投稿で、遂にPVが100万アクセスを超えましたー！（ドンドンパフパフ）。だからと言って、特に何か企画が有るわけでもないですがね！

金持ち？美女以外認めぬ（キリッ）

リクオが中学に入学してから、既に二週間が経過した。つまり俺の教師生活も同じくつてことで・・・漸く慣れ始めてきたところ。いやぁ・・・疲れたなぁ・・・。

この間にも、リクオの周りでは色々なイベントが起こっていたらしい。ということは、原作展開に入っていたってこと可能性が高い。・・・まあ、たぶんだが。

因みにイベントというのは・・・

一つは、リクオが学校の級友と一緒に、旧校舍探索をしたこと。これだけだと原作イベントかどうかは怪しいが・・・つらら達の事を知ったらしいし、可能性は高い。

もう一つは、リクオの義兄弟にして奴良組幹部の鳩が、部下の裏切りに遭った事件。その時は、リクオが再び覚醒して、なんとかならしい。・・・まあ、これは原作イベントに違いないだろう。

「くっ、このままだと、俺が蚊帳の外でイベントが進んでしまっ・・・！」

「・・・何故、いきなり訳の分からない独り言をし始めたんですか？」

「マナ先生、これは実に重要な問題なんですよ！？」

「・・・いや、知りませんよ」

職員室で隣の席のマナ先生は、毎日こんな風に俺のバカな話に付き合ってくれる。かなり呆れた感じのだが・・・それも、愛がなけ

ればしてくれないよね！

「とうことで、俺のハー」はいはい、そうですねー」・・・ぐすん」

ちくせう、マナ先生つてば、生徒には凄く優しくいくせに、俺にはこんなに冷たいぜ。・・・いや、冷たくされた方が、攻略しがいがあるってものだろうか？

「あ、そうそう、今日ですよね？」

俺が若干いじけていると、マナ先生が急に思い出したように、俺に話しかけてきた。・・・今日つて、何が？俺のハー、違いますよね、分かってます。

「何がですか？」

「先生の隣のクラス、一年三組に、転校生が来るらしいじゃないですか」

「・・・は？ 転校生？」

余りに予想外な内容に、俺は間の抜けた声を出してしまった。だって、学校始まってからまだ二週間だぞ？ 入学したばかりで転校つて・・・んなアホな。

「・・・というか、なんで俺が知らないんだ？ 普通、知らされる筈・・・」

「先生・・・私は、ちゃんと職員会議で話しましたよ？ まさか、聞いてなかったんですかね？」

「ひいいいいいい！！ すいませんでしたあああああ！！」

俺が漏らした独り言に、後ろにいた学年主任の恐ろしい声。そうすると、俺は反射的に悲鳴を上げて謝罪してしまう。この前からの調きよ、……もとい指導によって、それが体に染み付いてしまった。

「まったく……。その子の家の事情で、急にそういう風に決まったんですよ」

「家の事情って、どんな……」
「……それは」

説明をしてくれた学年主任に事情とやらを聞くと、少し口ごもってしまう。そして、学年主任が遂に話そうとした時……職員室の扉が、開かれた。

「おはようございます、今日から転校してきた者なのですが……」

俺の席からは転校生の姿は見えないが、どうやら女生徒らしい。あと、イントネーションの感じからいって、関西の方の出身なんだろうか？

その転校生の姿を見るために、俺は席から立った職員室の入り口の方へ向かう。そして、近づくにつれて段々と見えてきたその人物は

「……ゆら？」

「もしかして、お知り合いですか？」

「ええ、ちよつと……」

そこに居たのは、かつて花開院家において俺に懐いていた、花開院ゆらの面影を残す少女。そして、その少女は俺の声に気づいたの

か、此方に振り向く。

「誰や？ って、なんやゼロ兄ちゃんか。脅かさんとして……って、なんでゼロ兄ちゃんが学校におるんや!？」

おお、なんとというノリツッコミ。ゆらは京都出身であつて、大阪出身なわけではないのに……やるな。まあ、別に要るようなスキルではないんだが。

「俺はな、ここの教師なんだよ」

「ゼロ兄ちゃんが教師!？……有り得へんやろ」

おい、なんでそんな信じられないような顔してるんだよ。俺が教師になつちやいけな、つておい！ マナ先生を始めとした先生たちも頷いてるんじゃないやねえ!!

「まったく……ん?というかなんで、ゆらが浮世絵中に転校して来てるんだ?」

さつきまではよく分からないノリで考えてなかったが、普通に考えておかしいだろう。花開院家は健在なのに、ゆらが京都を離れるなんて……。

「えつとな、それは……ここで一人暮らししながら、陰陽師の修行をするんや」

修行……まあ、なるほど。あの花開院だもんなあ、そんな訳分からぬ事も平気でやるんだろう。学年主任が言い渋ったのも、よく分かるってものだ。

だってさ、陰陽師なんて胡散臭いものの修行なんかで、中学生の女の子が一人で上京ってことだろ？しかも、二週間で転校って・・・理解出来なくても、無理はない。

「それなら、手紙で教えてくれれば良かったじゃないか」

「だって・・・急に訪ねて行って、ゼロ兄ちゃんを驚かしたかったんやもん」

少し顔を赤くして言うゆらのその姿は、なんとというか物凄く可愛かった。・・・まったく、もう少し歳が上だったなら、俺のハーレムに勧誘するんだが・・・惜しい。

「あ、そうや。えーっと、竜二兄ちゃんが、ゼロ兄ちゃんに会ったらこれを渡せって言っとったんやけど・・・」

「ん？ 分かった」

そう言いながらゆらが渡してきたのは、一通の厳肅な感じのする文。どうやら、竜二が俺に一筆書いたみたいだが・・・いったい、何が書いてあるのやら。

えーっと、何々？『沖兎猫、知っての通りゆらがそっちへ修行に行った。どうせ妖怪にいいように遊ばれるだろうから、その姿をビデオに撮って送ってくれ』・・・。

「ふむ、竜二はやっぱりシンデレだな」

これって要するに、心配だから見守っといってくれってことだろ？まったく、雪麗がデレ期に入ったからって、ここぞとばかりにキヤラ立てしてくるんじゃないよ。

「ツンデレって・・・竜二兄ちゃんのどこを見たら、そんな風に見えるんや?」

「どこと言われても・・・全部だな」

だって・・・あの竜二だぞ? どこをどう見ても、ツンデレシスコンだったじゃないか。まあ、竜二の妹にして素直なゆらは、そのことに納得がいつてないみたいだが。

「分からんなあ・・・ん? ゼロ兄ちゃん、もう一枚手紙が有るんやない?」

「もう一枚・・・お、本当だ」

俺は気づかなかったが、さっきの文は重なっていて、もう一枚有ったらしい。これ以上何か言うことが有るんだろうか、と思いながら読んで見ると・・・

『追伸、オレにかけた呪いを解きやがれ』

・・・呪い? そんなもん、かけた覚えはないんだが・・・なんのことだ? というか、呪いなんて器用なものが、俺に出来る筈がないじゃないか。

「何て書いてあつたん?」

「ん、たぶんあいつの気のせいだろ」

だいたい、花開院家を出てから俺は竜二と会ってないし、俺がこちで呪いなんかかけても、あいつは分からないだろう。・・・ん? 一度電話で罵りあつたような気もするが・・・まあ、関係ないだろうな。

「清十字怪奇探偵団！！ 今日僕の家集合だからなー！！」

その中二病丸出しのネーミングセンスを放ったのは、昔俺が助けてやった子どもの一人、ワカメこと清継くんだ。・・・ちなみに、こいつの名前は俺も知らない。

職員室でのゆらとの一連の流れの後、ゆらは自分のクラスへと向かった。そして、転校生恒例の儀式、質問責めの最中に、清継と話し始めて・・・何故かこうなる。

清十字怪奇探偵団・・・いかにも怪しい団体だが、たぶん原作に関わっていくんだらう。だって、リクオとカナちゃんが捕まっていた。だったら俺は・・・

「話は聞かせてもらったあー！！」

「うおっ、ゼロ先！？　なんで掃除用具入れから出てきたんだ？！」

俺が、隠れていた掃除用具入れから出ると、周りの生徒たちが異様に驚く。・・・驚くのはいいが、鼻をつまむのは止めてくれ、俺も後悔してるんだから。

ちなみに、先ほど生徒が口に出したゼロ先というのは、俺の渾名みたいなものだ。是炉先生の略に、例の飛行機ゼロ戦をかけた感じ・・・どうだ、格好良いだろ？

「細かいことは気にするな」

「いや、絶対に細かくはないやる!?!」

俺の発言に、ゆらが全力でツッコミを入れてくる。だけど、いいのか？ さっきまで猫かぶってた感じだったのに、いきなり化けの皮はがしちまって。知らないぞ？

「まあ、そんなことよりも、清継……」

「な、なんですか？」

「俺が、その清十字怪奇探偵団とやらの顧問となってやろう！ ありがたく思え！」

漫画なんかだったら、後ろに『ドン!』と描かれるような感じで、俺は清継に言っちゃった。この団体の顧問になったら、俺は原作に関わり易く

「いえ、結構です」

こやつ、断りおったわ。

「なん……だと……?」

「悪いですが先生、ボクらは別に顧問は要らないんで。それでは」

しれっと断った清継は、そう言って次の授業の準備を始める。・ちよっと待てや、なんで部活造るのに顧問要らないんだよ。馬鹿なの？ 死ぬの？

「顧問がいると、色々動きづらくなりますからね」

・・・まあ、確かに。顧問がいたら、危険なことや犯罪ストレス行為をさせないようにするからな。妖怪に関わっていく上では、邪魔なことこの上ないだろう。

「だけど、学校が許さないだろう？」

「ボクの家は超お金持ちですからね。このぐらいの我が儘なら軽いですよ」

・・・どこかで聞いたようなセリフだな？ 具体的に言えば、前世の幼なじみ。まったく、金持ち連中はこれだから。・・・だったら、あいつの話を利用して・・・

「・・・なあ、清継。俺には、超お金持ちの幼なじみがいた。そいつは、かつて俺にこう言ったことがある」

「・・・何を、言ったんですか？」

「『私は、金持ちだ。貧民には到底出来ないことを、私は容易く出来る。どうだ、羨ましいだろう？』・・・とな」

俺が中三ぐらいの時に、何故かそんな話になった記憶がある。・・・ええ、ぶち殺してやるうかと思いました。羨ましいに決まってるだろ、あんちくしょう！

そんな、俺が話したAの言葉に、カナちゃん達一般人は引いている。ただしリクオとゆら、ためえらはダメだ。お前らだって、一応金持ちの部類に入るもんな！

「うわー。ムカつくなあ、そいつ」

「そうだろう、俺もムカついた。・・・だが、こいつの話には続きがある」

げんなりしながら言うゆらを遮って、俺は話を続ける。この話の続きは・・・ぶっちゃけもっとウザいんだが、そこは俺の話しようだな。

「『故に私は、貧民には出来ぬことを、私自身の手で行うのだ』・・・奴は、堂々とそう言った。この意味が分かるか？」

「・・・つまり、金持ちは金持ちにしか出来ないことをして、世の中の役に立てると・・・そういうことですか!？」

「うん？ それは、想像に任せよう」

いや、本当はあいつが言ってたのはだな・・・ただ単に、自分しか出来ないことをやって、貧民どもに自慢する+優越感に浸るっただけだったんだが・・・うん、まったく正反対だな。

あいつの家、面白そうだからって、ゴルゴ並みの暗殺者とか、ブラックジャックを遥かに超えるレベルの医者とか、そんな連中を金で作ってたらしいからなあ・・・いや、本当かどうかは知らないけど。

「でも、それが今、何の関係が・・・」

「分からないのか？ お前は金持ちだからって、それを利用してルールを破ろうとしている・・・器が小さいとは思わないか？」

「あ・・・」

俺の言葉に清継は、何かとてつもない物を発見したような表情をする。・・・いや確かに、俺がそう誘導したんだが、そんな簡単に騙されるなよ。

「真の金持ちなら、金持ちである自分にしか出来ないことを、その金という能力で実行するべきだろう？」

まあ、清継のごとき金持ちの男子が騙されようが、俺は知ったことじゃないし、話を続けていく。さて・・・そろそろ、仕上げと参りましようか。

「妖怪の主に逢う？ なるほど、結構なことじゃないか。それは、お前が金をかけて実行するに値するだろう。・・・だが、部活を造るなんて一般人でも出来る事を、金の力で解決しようとするんじゃないねえ！」

俺は清継を指差しながら、かなりの声量で怒鳴りつける。その際、「論点ズレてるよね？」と言おうとするリクオを睨みつけて黙らせるのも、忘れてはいない。

そして、俺の言葉に感激したらしい清継は、体をプルプルとさせながら、俺に握手を求めてきた。俺はその手を取りながら思う・・・こいつ、チヨロいな。

「おお・・・先生、一緒に妖怪の主を見つけ出しましょう！！」

「ああ、これからよろしくな！」

ぶっちゃけ、まったく論理が通ってなかった話だったが、清継が納得した以上は、これで俺が清十字怪奇探偵団の顧問だ。・・・ふっ、これで原作介入出来るぜ。

「・・・あの、授業は・・・？」

そんなこんなで、俺らはテンションが上がっていたから、次の授業の時間になっていたことに気づかなくて、数学の先生がオロオロしていたが・・・うん、知らん。

金持ち？美女以外認めぬ（キリッ（後書き））

何か区切り悪い気もしますが、漸く特に展開を考えてなかったゾ
ーンを突破。これからは、ノンストップで突き進、・・・窮鼠編を
考えてなかったorz

陰陽師に法律はないんです

ゆらが浮世絵中学校に転校してきた週の日曜日である今日、清十字怪奇探偵団は奴良組の屋敷で妖怪会議をしてるらしい。いやはやまったく、熱心なこった。

で、なんで顧問の俺が他人事の様に行くかということ・・・うん、他人事だからだな。だって俺、今屋敷に居ないもん。ん？ じゃあどこにいるかって？ それは・・・

「アキバです！ アキバですよ、是炉様！」

・・・そう、秋葉原、通称アキバ。言わずとしれた、オタクの町である。まあ、それはいいんだが・・・ミヤは、あまりにテンション上がり過ぎじゃないか？ キャラ崩壊にもほどがあるぞ、マジで。

「これが、高揚せずにいられますようか！？ いえ、否です！！」
「おーい、戻ってこーい」

うん、マジでどうしてこうなった。かつては髪長姫として崇められた美姫が、何故こんなことに・・・いや、本当は俺が神社にラノベを忘れていったせいだけだ。

ラノベに嵌ってしまったミヤは、アニメに走り、ゲームに走り・・・遂には、自分で二次創作を書いているらしい。タイトルは「もしも転生オリ主が孫子の兵法を読んだら」・・・もし孫ですね、分かりません。

で、そんなオタク街道まっしぐらなミヤは、最近になってやっぱ

りアキバに行ってみたいと言ってきた。それで、今日は俺と二人アキバデートというわけだ。

「でも、よろしかったんですか？ 今日、部活とやらの会議があったのでしょう？」

「ああ、それなら心配いらん。俺にや関係ない話ばかりだからな」

今日はどうせ、俺が興味ない妖怪の豆知識話だ。どうせ、戦闘なんてのが有る筈ないし・・・それに、もし俺が屋敷にいたら、ボロ口を出す恐れがあるからな。

「ま、そういうことだ。そんな心配はいらないから・・・今日は、目一杯楽しめよ」

内容はともかくとして、せつかくのデートだもんな。変に心配事なんか有って、少しでも楽しめなくなったら損だ。俺も、楽しい方がいいし。

「・・・はい、そうですね！」

ミヤも、ちゃんと俺のそんな意図を汲み取ってくれたらしい。少し間を置いた後に、綺麗な笑顔で返事してきた。まったく・・・いつ見ても惚れ直す笑顔だな。

そんなこんなで、俺は手を差し出し、ミヤも手を取って、二人で手を繋いで歩く。・・・ふむ、周りのオタク連中が揃って歯を食いしばってるな・・・ふっ、ざまあ。

「で、どこに行きたいんだ？」

「えっと・・・じゃあ、先ずは」

「

そうして、俺たちはミヤが行きたかったらしい場所を練り歩いていく。俺も楽しいし、ミヤも喜んでくれている・・・今日は、いいデートになるだろう

S I D E ゆら

私は今日、清十字怪奇探偵団の集まりで、奴良くんの家に来とる。この前、清継くんの家が付喪神を滅した時に、おもむきが有るっちゆうことで、そう決まった。

「それにしても、噂にたがわぬボロ屋敷」

奴良くんの家の前まで来て、清継くんが率直な感想を述べとる。
・うん、まあ、確かにボロ屋敷やけど・・・そんな大声で言うことやないやろ。

と、そんなことをしとる内に、奴良くんの家が僅かに開いて、奴良くんがひよっこり顔を出した。・・・なんやろ、ずいぶんと冷や汗かいてるみたいやけど。

「ごめんごめん、遅くなっちゃって・・・」

「本当に遅いぞ、奴良くん！！ さつさと案内したまえ！」

え、奴良くん、ええんか？ こんな自己チュー発言を許しても？ 私やったら、なんでやねんってツツコンドるやるうけど・・・はっ、これが東京のルールか！

京都におった時も、竜二兄ちゃんがよう言っつたもんな、東京人は薄情やから、猫被つとらんと苛められるって・・・。やっぱり、ホンマやったんやな。

「妖怪屋敷で妖怪会議だ！」

「ちよつと清継くん、奴良くんに失礼だよ」

「かまわんよ」

東京人のルール・・・家長さんが注意したって事は、やっぱり普通に失礼なんやろうか。でも、奴良くんは何にも言わへんし・・・うーん、分からんなあ。

・・・ん？ なんや、今そこらで妖気が蠢く気配が・・・。でも私って、探知能力低いからなあ・・・竜二兄ちゃんにもようからかわれとつたし、気のせいやろか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」

そこで私は、ふと一つの引っかかりを覚えた。何か、忘れていたような気がするなあ・・・大事な事のような、そうでもないような・・・誰かがおらん？

「って、ゼロ兄ちゃんがおらんやん！」

「うおっ、いきなりどうしたんだい、花開院くん!？」

あ、ヤバ、慌てて本性が出てしまった。危ない危ない・・・つて、それどころやない、なんでゼロ兄ちゃんおらんのや、あの人この部活の顧問やる!?

「ああ、先生なら・・・なんでも、今日はデートで来れないそうだよ」

「デ、デート・・・やと・・・?」

あ、あのゼロ兄ちゃんが、デート・・・? 出来る相手がおったとか、知らへんかった・・・。・・・なんや、ちよつとム力つくな・・・なんでか知らんけど。

というか、部活の顧問のクセに、なんで部活よりも個人の用を優先するねん。そこから先ずおかしいやろ・・・これも、東京のルーだったりするんやろか。

「それにしても・・・花開院くんは、先生となんでそんなに親しいんだい?」

「それは・・・昔、ゼロ兄ちゃんが私の家に住んどったことが有るからですね」

清継くんに聞かれて、私は正直に答える。さっきまでテンパって地が出とつたけど、今回はちゃんと猫被ることが出来た。うん、私はやれば出来る子や!

「何!? あの花開院家に、先生が住んでいたことが!?!?・・・ああ、羨ましいいい!」

「ええ?! そ、そうなの!?!」

私が答えると、清継くんは羨ましがって、奴良くんはかなり驚い

とる。清継くんは、まあ分かるとして・・・奴良くんは、なんでそんなに驚いとるんやろ？

「くっ、なんで先生が・・・ん？ 本当に、なんで先生が花開院家にいたんだい？」

「えつと、それは・・・」

・・・あれ、なんでやったんやろ。確か、ゼロ兄ちゃんがやって来た日は、みんなが庭に集まっとして・・・ん、ホンマになんでやったんやろ。

「・・・ゼロ兄ちゃんに、今度聞いてみようかな・・・」

なんか、ちよつと本気で気になってきたわ。ゼロ兄ちゃんは、陰陽師の修行しとるわけでもなかったみたいやったし・・・。今日来とつたら、すぐに聞けたのにな・・・今、どこにおるんやろか。

その頃沖兎猫は・・・

「くっ、やるなミヤ！」

「ふふっ、ええ、是炉様も！」

「ふっ、食らえっ！ 昇竜拳！！」

「させませんっー！！」

ゲーセンで、ミヤと格ゲーしてた。

「そして　それら百鬼を束ねるのが、妖怪の総大将　『ぬらりひよん』と・・・いわれています。うわさでは・・・この街にいついているという　」

あれから奴良くんの家の中に入って、清十字怪奇探偵団のメンバーに、妖怪について話しとった。みんな真剣に聞いてくれとるみたいで、話しとるかいがあるわ。

「ぬらりひよんか　妖怪の主とは言え、小悪党な妖怪だと思っ
ていたよ・・・」

清継くんが、真剣な眼差しで、一筋の汗を流しながら率直に言う。
ぬらりひよんが小悪党なんて、とんでもないことや。ヤツは・・・
そんなもんやない。

「そう、ヤツは人々に多くの畏れを与える、別格中の別格。でも
ヤツを倒せば、私もきつと認めてもらえる・・・」

私は昔っから、才能が有ると言われて、党首の条件でも有る“破
軍”も使える。・・・けど、みんなは私の力を認めてくれへん。だ
から・・・。

「古の時代より、彼らを封じるのが我々陰陽師。その縁を、この地
で必ず・・・」
「お茶入りました〜」

張り詰めた空気の中に、緊張感のない声で、一人の大人の女の人

が入って来た。ええところに……とは思ったけど、お茶飲ましてくれるんなら、許してやるわ。

それにしても、この女の人……微かに、妖気を感じるな。特に胸から！ なんちゅう物を……私なんか、片手サイズぐらいしかあらへんの……！

「ごゆっくり」

「何！？ 誰？」

「おねーさん！？」

「奴良、あんなすごいお姉さんがいるのか！？」

と、変なこと考えとる内に、あの女の人が出てっつてもた。その後を、奴良くんがついて行っつとる。まだ、妖気についてはつきり確認したわけやないのに……

「あ……そーいえば、お手伝いさんがいるって言っつたっけ」

「お手伝いさん……？」

こんなデカイ家やっつたら、お手伝いさんぐらいおるやろっけど……でも、ちよつと怪しいなあ……。最初に来た時も、微かに妖気を感じたし……。

「そう……今のが……。この家は……どうも、変ですね」

私は部屋の襖を開けて、廊下に出る。後ろから清継くん達が追っつて来とるけど、私は気にせーへん。失礼なんは承知やけど、廊下を走っつて行く。

もしホンマにこの家が妖怪屋敷になっつとるんやっつたら、住んどる

奴良くんが危険や。それやったら、失礼やろうが何やろうが、陰陽師としての仕事はこなす！

どっかに行つとつた奴良くんも合流して、屋敷探索を続ける。さすがに、私を引き止めようとしとつたけど、清継くんには却下された。清継くん、初めて役に立つたわ。

最初は大浴場を見て、次は金ピカの仏像が有る仏間を見て、それから・・・屋敷中を見て回る。けど、妖気は感じるのに、一匹も妖怪は見つからん。

「なんだ、いないじゃないかー」

「お・・・おかしいなあ」

なんでや・・・どう考えても、この屋敷には妖怪が有ると思ったに・・・。これだけ騒いどつたら、絶対一匹ぐらいは出てくる・・・ん？ あの部屋・・・

「あの部屋から、凄い妖気を感じる！」

「本当かい、花開院くん！」

この広い屋敷を見てきた中で、今までで一番デカい妖気を感じる

部屋が有った。あの部屋には、絶対に妖怪がおる筈や！ 今度は、間違いない！

「あ……そ、その部屋は、ダメー！！」

私が襖に手をかけて中に入ろうとすると、奴良くんが絶叫に近いような声で止めてきた。ホンマにダメな部屋なんかもしれんけど……もう、遅いわ！

「妖怪、覚悟ー！」

奴良くんの制止を無視して、そんな声を上げながらその部屋の中に入ると、そこに居たのは

「……誰？」

私より小さな、女の子やった。……しかも、何故か全裸で。

「つつ！ “爆” ！！」

「うわー！？ 何故だ花開院くんー！！」

その女の子を見て、私は式紙“爆”を咄嗟に使い、清継くと島くんを爆撃する。まだ小さいとは言え、流石に私のせいで男に裸を見せさせるわけにはいかん！

“爆”の爆撃の煙が晴れて、視界が晴れると、清継くと島くんは上手く伸びとった。遠くにおける奴良くんはこっちに来んように言っつて、私は女の子の方を見る。

「ホンマにごめんな……まさか、こんなことになるとは……」

って、あれ、もしかしてレイちゃんか!？」
「・・・ゆら、か。・・・久しぶり」

改めてよく見てみると、その女の子はゼロ兄ちゃんの義妹で、昔ちよつと遊んだことがある、レイちゃんやった。レイちゃんも、私のことを覚えてくれとるらしい。

「え、なんでレイちゃんが奴良くんの家におるんや!？」
「・・・わたしと義兄さまは、この家に居候してる・・・それだけ」

レイちゃんは、事も無げにそう言う。・・・確かに、この屋敷なら居候ぐらい受け入れてもおかしくないんやろうな。けど・・・教えてくれたら良かったのに。

「ま、まあ、それは分かったけど・・・レイちゃん、なんで裸なんや?」

とりあえず、今一番気になるんはそこや。なんで真つ昼間から、レイちゃんは裸なんやろうか。家長さんも顔いとるって事は、東京のルールやないんやろうし。

「とある情報がうpされるのを、全裸待機中。これが、ネット住人のマナー」

「いや、絶対に違うやろ!？」

うpがなんかは知らんけど、そんなのがマナーであってたまるか! レイちゃんは「違うの?」って首を傾げとるし・・・ゼロ兄ちゃんは、どんな教育をしとるんや!

「あ・・・レイちゃんって言うの?」

「・・・誰？」

「私は、家長力ナ。初対面で言うのも何なんだけど・・・あなたは女の子なんだから、そういうのは止めた方がいいと思うよ」

お、おお・・・家長さん、大人の対応や。そうやった、自分より小さな子が間違つとる道に行こうとしたりしたら、ちゃんと止めんとあかんよな。

・・・ん？ 何か今、頭に引っかけたような・・・何やろう、何が引っかけたんや？・・・あかん、分かん。分かんかったら、しゃーないわ。

「・・・ふむ、今度から気をつける」

家長さんの説得を受け入れてくれたんか、レイちゃんはそう言つて、傍らに置いてあつた着物を着始める。うん、良かった良かった。これで安心したわ・・・ん？

「しもた！ 妖怪のこと忘れとつた！」

あかん、最初の目的やった妖怪を忘れとつたなんて・・・！この部屋は、今もデカい妖気を感じる。それやったら、絶対に見つけんとあかん！

私は急いで、部屋をくまなく探索する。けど、やっぱり妖怪は一向に見つからん。こんな馬鹿デカい妖気をしとるのに、なんで見つからへんねん！

「・・・ゆらは、妖怪を探してるの？」

「そつやけど、それが何！？」

着替えを済ませて、パソコンに向かっていたレイちゃんが、ふと私に話しかけてくる。焦つとつた私は、ちよつと強めに聞き返してしもつたけど・・・ごめんな。

「・・・別に、探す必要なんてない。これ以上部屋を荒らされると迷惑」

レイちゃんはパソコンの画面から目を逸らさず、変化のない声調でそう言う。・・・確かに、部屋を荒らされるなんて迷惑やろっけど・・・！

「っつ、せやけど、探す必要はある！ 見つからんかったら、「だから、探す必要なんてない」・・・!?」

私の言葉を遮つたレイちゃんに、本能的に恐怖心が溢れてくる。もしかして・・・やめろ その先を言うな・・・！

「・・・わたしが、妖怪だもの」

レイちゃんのはつきりとそう言った瞬間・・・私の視界は、今は真つ昏間な筈なのに・・・真つ暗になったような気がした。

その頃沖児猫は・・・

「頑張ってください、是炉様！」

「おお、任せとけ。行くぞ！ サンダートルネードスクリーン

「ドオー!!」

「そこです、脇の下を狙って・・・あ、是炉様、そこはダメです!」

「しまった! 俺のチョッパー人形がー!」

「変わってください、是炉様! 今度は私の超竜翔腕で、あの馴鹿を我が手中に!」

「頼んだぞ、ミヤ!」

未だゲーセンで、変な技名を叫びながら、クレーンゲームをやっていた。・・・本当に仲いいな、お前ら。

陰陽師に法律はないんです（後書き）

宮子姫のキャラ崩壊が、異様なスピードで進んでる件について。
・あね、どうしてこうなった？ ここまで逝かせるつもりは無かったのに・・・いやはや、その場のノリって怖いですねえ・・・。

ん？ 今回はそっちがメインじゃない？・・・まあ、そういついともあるぞー！

シリアス？いいえ、シリアルです（前書き）

今回は、三人称視点オンリーです。久しぶりにやってみたら、書きやすいのは書きやすいですが・・・ギャグ入れ辛いや。

シリアス？いいえ、シリアルです

花開院ゆらの心は、生まれてから味わったことが無いくらい、とかく揺れていた。目の前にいる年端のいかぬ少女が先ほど口にした言葉、それが頭をぐるぐると回る。

『・・・わたしが、妖怪だもの』

その言葉を理解出来ず、納得がいかなかったわけではない。むしろ、ゆらだつて心の底では気づいていたのだ。目の前にいる彼女が・・・先ほどからひしひしと感じる、馬鹿デカい妖気の主だということ。

思えば、彼女が自分の知る少女だと気づいた時に、変だと思っべきだった。だってそうだろう？ 八年も前に別れた、自分より少し年上風だった少女が、その時と同じ姿をしている筈がないじゃないか。

「・・・ぎりっ！」

だからこそ、理解出来るからこそ、納得がいかないのだ。何故、自分が敬愛している青年の義妹であり、自分の旧知の友が・・・自分の敵である、妖怪なのだと。

妖怪ならば、陰陽師として手を下すのは当然だ。この町に来たのも、妖怪を倒すため・・・しかし、彼女に手出しすることは、どうしても躊躇われる。

(くそっ、私はどうしたらええねん！)

今までのゆらの人生の中で、ここまで苦悩したことはない。少しの交わりとはいえ、旧知の友を討つというのは、齡十二の少女にとって、それほどに重いことなのだ。

「・・・・・・・・ふっ」

そんなゆらを尻目に、児衣兎はパソコンをじっと見つめながら、一つの嘲笑ともとれる声を上げた。それを耳ざとくも聞いたゆらは、苦悩する自分を笑われた様に思えて、頭に血が昇る。

・・・実を言えば、児衣兎が笑ったのは、2ch内で突っかかってきた相手を論破してやったからなのだが・・・、大切なのは、真実がどうなのかではなくて、相手にどう伝わるかだ。

(何やねん、私が迷ってるのが、そんなにおかしいんか！)

だから、ゆらがこう思考することに、誰の責も有る筈がない。有るとすればそれは、価値観のかけ離れている二人が、このような状況に陥った運命にこそ有るだろう。

『妖怪は黒で、私達は白だ、ゆら』

「あ・・・」

そんな状態の時に、ゆらが秋房のその言葉を思い出したことにも、誰の責もない。妖怪は黒で、陰陽師はそれを被う者・・・それを思い出したゆらは、決断をする。

「・・・・・・・・貪狼！」

苦い顔をしながらゆらが繰り出したのは、ニホンオオカミの式神

である貪狼。大きく強力な牙を持つ貪狼は、ゆらが信頼する式神の一角である。

式神を初めて見るカナは軽く「ヒッ」と悲鳴を上げるが、そんなことに構っている余裕は、今のゆらにはない。今はただ、目の前にいる敵を・・・倒すことのみ！

「貪狼、やったりいいい!!」

「ゆらちゃん!？」

ゆらが兎衣兔に式神を向けたことに、カナは驚愕の声を上げる。自分から妖怪を名乗ったとはいえ、やはり目の前の幼い少女を殺そうというのが理解出来ないのだ。

「家長さん・・・ごめん、下がっというて」

その声には悲壮が宿っており、決意が宿っている。そんなゆらを前に、ただの少女であるカナが何を言える筈もない。ただ、反射的に頷いて下がるしか出来なかった。

カナが下がったことで、何も遠慮する必要がなくなったゆらは、貪狼を兎衣兔に突進させる。まだ幼い少女とはいえ、天才と賞されるゆらの式神貪狼の突進は、相当な威力を誇っていた。

「・・・・・・・・ふん」

だが、それも兎衣兔には通じない。なぜなら、兎衣兔はチート性能の申し子。たかが、狼なんかの突進に本気を出すまでもない・・・自らの髪を操って、突進を阻む。

児衣兔がやっているのは、ただ髪に魔力を通して、強引に強化しているだけ。砲撃一発に使う魔力と比べると・・・大体、十分のぐらいか。・・・それで充分なのだから、如何に児衣兔がチートか分かる。

まあ、これを使うと髪が傷むので、雪麗や若菜には止められているのだが・・・児衣兔は気にしない。だって、全裸待機を敢行する子だよ？ 自分を女だなんて、一度も思ったことはない。

だいたい、今の児衣兔にはそんなどうでもいいことを気にかけている暇はない。もうすぐ、さつきから待ち焦がれていた情報がアップされる筈なのだから。

「・・・・・・・・キター」

そして、その時は来た。児衣兔も慣例通り、こう言うのだが・・・それすらも棒読みなのは、性格故だろうか？ 宮子姫とは違って、キアラ崩壊してなくて何よりです。

というか、ゆらサイドと児衣兔の温度差が激し過ぎはないだろうか。ゆらは苦悩した末、児衣兔を倒すと決めたのに、児衣兔はゆらなど眼中にない。そんなものより大事なもの（うp）が、彼女にはある。

児衣兔だって、普段ならゆらを一撃で沈めるだろう。だが、今日ばかりはその時間すら惜しい・・・その選択が、悲劇を生む。児衣兔がマウスをクリックした時・・・

「ええ加減にせい！ 黄泉送葬水包銃（よみおくりゆらMAX）！
」

やはり、直情的な性格をしているゆらにとって、兎衣兎に無視され続けることは耐えられなかったらしい。それはどうかと思う技名で、某ロックバスターの如き形の金魚砲から、高水圧水鉄砲を放った。

そして、その水鉄砲が狙っていたのは兎衣兎ではなく、兎衣兎が向かっているパソコンだ。いきなり兎衣兎を狙うのは躊躇われたし、自分を無視する原因を叩くのは自然な流れだろう・・・それが駄目だった。

「あ・・・」

自分に対する殺気を感じれなかった兎衣兎は、水砲に対しての防備を全くしていなかった。すると当然、水砲はパソコンにクリティカルヒットするわけで・・・

ズバッシャアアア!!!

兎衣兎の視界には、それが酷くスローモーションに見える。水圧に負けて横に押し込まれてる姿も、ディスプレイにヒビが入るところも、さめざめと見せつけられた。

「あ、ああ・・・」

たった一ヶ月前に新調したばかりのパソコン・・・今日まで自分に娯楽と悦楽を与えてくれたパソコン・・・。今、自分に情報を齎そうとしたパソコン・・・。

それが逝くところを見せつけられて、兎衣兎はただ声にならない声を上げながら、手を伸ばすことしか出来なかった・・・あれ、

なんでこんなにシリアス風味なの？

『泣かないで、児衣兔』

そうして児衣兔の耳には、有りもしないパソコンの声なんて物も聞こえたりしてきた。・・・別に誰も泣いてなんざいないが、触れてはいけないことなのだろうか。

『ボクはもう逝くけど、君には新しいパソコンがきつと現れる・・・だから、そんなに悲しまないでおくれよ』

・・・なんだろう、何故この妄想パソコンは、ドラマの別れシーンみたいなのを演じているのだろう。というか、児衣兔ってそこまです悲しんでるの？

『ボクは一ヶ月しかキミと居れなかったけど　嬉しかったよ。』

大切にしてくれて・・・どうも、ありがとう

そんな妄想ゼリフの末に、パソコンは最期を遂げた。享年一ヶ月と少し・・・あまりに、早すぎる死だ。惜しいモノを亡くしました・・・お悔やみ申し上げます。

・・・で、パソコンが逝ってしまった児衣兔は呆然となる。なんでこんなことに？　誰がこんな惨いことを？・・・決まっている、あそこにいる少女、花開院ゆらだ。

「・・・ゆら」

「な、なんや」

児衣兔は幽鬼のようにふらふらとしながら、先ほどまで完全に無

視っていたゆらに話しかける。あまりの豹変ぶりに、ゆらも少しおっかなびつくりという感じだ。

「少し……頭、冷やそうか」

「ヒツ……」

今までとは違い、蔑んだほのかに殺気のコもった目で睨まれたゆらは、軽い悲鳴を上げる。……うん、白い魔王のセリフですね。やっと言えた感が有りますよ。

まあとにかく、ゆらは児衣兔の目に、畏れを抱いた。そうになるとゆらの抵抗も塵芥と同じようなもので……主を守ろうとした貪狼は、砲撃により一瞬で沈む。

「え……た、貪る……」

「心配しなくてもいい」

目の前の現実を受け入れられないゆらの耳に、児衣兔の低い声が聞こえてくる。……なんとということだろう、もはやラスボスのような威圧感だ。

「……殺しはしない。ただ……ちょっと、OHANASHIするだけだから」

人はそれを、終わりなき拷問と呼ぶ。心配しなくてもいいなんて、この状況で誰が言えるだろうか。さすが、魔王の意志を継ぐ者（自称）である。

まあ、そんなことは気にしない児衣兔は、砲撃の溜めに入る。普段ならそこまで時間がかからないのに、今は時間をかけているのは・

・・恐怖心を募るためだろうか？

「ろ、祿存！ 武曲！ 巨門！」

そんな児衣兔に、なりふり構っていられなくなったゆらは、今出せる式神を総動員する。順にエゾジカ、落ち武者、象の式神・・・どれも、強力なものばかりだ。

「・・・ふん」

「あ・・・」

しかしそんな強力式神軍団も、児衣兔の前には歯が立たない。一瞬で塵と化して・・・なんというか、沖児猫の義妹がこんなにチートなのは、なんでだろうか。

そして、守る者がいなくなったゆらに、児衣兔の砲撃の手が向けられる。おそらく、加減はするのだろうか・・・それでも、瀕死は覚悟せねばなるまい。

「くっ・・・！」

児衣兔の手から発光を見てとった瞬間、ゆらは固く目を瞑った。気休めとは分かかっていても、それが人間の本能・・・衝撃に備えて、身構える。

「・・・・・？」

だが、いつまで経っても衝撃は来ない。先ほど、何か破裂するようなデカい音も聞こえたのだが・・・何か、有ったのだろうか。でも、目を開けるのは怖い・・・。

「え……?」

そんな折に聞こえた、後方に下がっていたカナの声。何か予想外のものに出くわしたような、そんな間の抜けた声。それが気になつて、ゆらも遂に目を開ける。

「あ……」

するとそこに有つた光景は

「ゆら……無事か?」

刀を振りかざした状態の沖見猫が、背を向けて自分を守っている姿だった。

シリアス？いいえ、シリアルです（後書き）

偶には、沖児猫に主人公っぽい活躍をさせてやろうの巻。本当は、もう少し先まで書こうかとも思ったんですが・・・メッキが剥がれる前に締めてやろうとww

そして、カナちゃんエ・・・。やべ、今回プロットでは微妙に出張る予定だったのに、要らない子扱いになってるや。これが噂に聞く彼女の畏（空気化）か・・・！

次回はまたシリアス擬きに・・・なる、のか？ 沖児猫が来た以上、シリアスにならない気がしないでもないぜ・・・。

ごり押しすれば大抵大丈夫！（前書き）

ええ、シリアスになんかありませんでした！ 沖兎猫がシリアスになるなんて、何十話に一話ぐらいの奇跡なんでしょうか？ これからのプロットでは、シリアスシーンけっこう有る筈だったのに・・。

ちなみに今回は、展開がやや？強引かと自分では思ってますが・・
・あんまり深く考えて読まないでね！

ごり押しすれば大抵大丈夫！

「ゆら・・・無事か？」

俺は妖刀のせいで痛む体に鞭打って、何事もなかったように言う。こういう時にもクールでいるってのが、フラグ立ての基本だ。分かったかな、諸君！？

「え・・・？　なんで・・・ゼロ兄ちゃんがここに・・・？」

「ん？　リクオに携帯で呼ばれてな。・・・まったく。デート中だったってのに、急いで帰って来たんだぜ？」

目の前なのが信じられないという感じのゆらに、爽やかな笑顔で答えてやる。・・・まあ、ぶっちゃけもう少し前に帰って来てたがな。割り込む絶妙なタイミングを図ってたんだよ・・・ふっ、騙されたか！

ミヤと色々な店を回ってる内にリクオから電話がかかって来たと思ったら、すぐに三羽鴉がやって来たからな。あいつら、マジで仕事出来るよな、まったく。飛行もかなり早くて、微妙に酔っちまっつたし。

「・・・義兄さまどいて、そいつ殺せない・・・殺さないけど」

「何のネタだったっけか、それ？」

「ググレカス」

「・・・はいよ」

ええ、そうくるだろうとは思ってましたよ。まあ、そのネタは後でググるとして・・・この様子だと、レイは引かないだろうな・・・

・だが、策は練つてあるぜ！

「レイ　落とすなよ！」

俺は地面に置いてあつたデカイ袋を拾つて、レイの方に放り投げる。レイは不信気にしながらも、綺麗にキャッチする・・・俺だったら、たぶん落とすだろうけどね。

「・・・何を　これは・・・」

「最新型のノーパソだ。お前、確か前から欲しがってたろ？」

「・・・でも、これだけでわたしをかどかわせるなんて思わない

」

「ふっ、それだけな筈が無いだろう。アキバで見つけてきた・・・限定物のリリカルグッズ、三点セットだああああ！！！」

悪いが、これでも十年程お前の義兄さまやってるんだよ。お前の好みや、要求する量ぐらい熟知している。・・・まあ、まさか一括で買うとは思つてなかつたけどな。

リクオの電話で、どうせこんなことになるだろうと思つてた俺は、ご機嫌とりのためにこれらを急いで買った。・・・義妹のご機嫌とりのために紛争する義兄つてのも、どうかと思うが。

もちろん、それらを買う程の金なんて俺が持つてる筈はない。だから、ミヤに借りるといふ男にあるまじきことになつたが・・・しようがない。ミヤには礼を言つて、今度また埋め合わせをしよう。

「・・・（グッ）」

「うん、そりゃ良かった」

袋の中を吟味し終えたレイは、俺の方に親指を突き上げてきた。そして、満足したのか、布団を出して眠り始める。・・・たぶん、砲撃の使いすぎ？だろう。

まあ、これでレイの方の問題は終わった。一度納めた怒りをぶり返すような奴じゃないし・・・起きたら、すっかり気にしてないだろう。問題は・・・

「・・・ゆら」

「ゼロ兄ちゃん、あんたも、妖怪なんやな」

その目に映っているのは、どう見ても明確な拒絶。腕にくっついている金魚型ロックバスターを俺に向けて、いつでも撃てるように構えている。

「ん〜、まあ、一応妖怪かな。というか、昔から変わらず若々しい姿のままだろ？」

「・・・ははっ、そうやな。そんなこと・・・もっと早く気づくべきやった」

・・・どこの、正義の味方になれなかった中年だよ。偶然だよな？ さすがにこんな時に冗談やる子じゃない・・・以前の問題として、元ネタ知らないか。

「でも、妖怪なんやったら・・・私は陰陽師として、滅するだけや。例え・・・それが、ゼロ兄ちゃんと言えどもな」

「俺を滅する・・・悪い、それ無理だわ」

俺って不死身だからなあ、幾ら頑張っても殺せないよ？ だからこそ、花開院家の陰陽師たちも俺を見逃したわけだし。ちゃんと説

明してやるつか

「そんな余裕、すぐに無くしたる！ 黄泉送葬水包銃（よみおくり
ゆらMAX）！！！」

「ちょ、誤解、だばあああああ！！！」

殺せないって言ったのを余裕だと見たのか、ゆらはロックバスターを乱射してきた。不意を突かれたのを避けるなんて、俺には当然不可能で・・・全部直撃する。

「ふっ、ゆらMAXを全発受けて立つとるなんて、余裕は本物みた
いやな・・・」

「いや・・・だから、誤か」

「黄泉送葬水包銃！！！」

「話を聞けよ、おおおおおお！！！」

こやつ、俺の話を一切聞いてねえ。何？ 俺を滅することに躊躇ないってのは置いといても、話し合いの余地すら無いってか？ なんと悲しいじゃないか。

まあ、だとしたら、こちらにも考えがある。その、ゆらなんたらという技・・・お前が諦めるまで受け止めてやるう！ 耐久戦なら俺が負けることはねえぜ！

「・・・ふっ」

俺は戦意が無いことを示すため、刀を地面に突き刺して手を大きく広げた。我ながら完璧な無抵抗ポーズな筈だが・・・ゆらは更に顔を険しくする。・・・なんでさ。

「ゼロ兄ちゃん・・・憐れみのつもりか？ 私は、そんなに弱いつて言っんか？」

「またしても完璧な誤解を・・・まあ、もう釈明なんてしないけどね。何故って？ そんなの・・・ゆらMAXって連呼しながら、連射してきてるからさ！」

「ぬおっ、うおっ、がほっ！」

「さっきだってそっや！ レイちゃんの攻撃からも、私を守った！ 私は、敵からも憐れまれるような雑魚って言っんか！」

「・・・いやいや、それはさすがに自虐に過ぎるだろうよ。こんな砲撃出来る奴が雑魚って言っんだったら、俺は何になるんだって話だ。それに・・・」

「ぐお・・・それは、違うな」

「何がやねん！！！」

「俺は、お前の敵じゃねえぜ？」

「っつ！・・・うるさい！！！」

「うるさいって悲しいな・・・ってやべ、更に砲撃のペースが速くなった。せつかく話を通ったつてのに、逆効果って悲しいにも程があるぞ。」

「うるさい！！ うるさい！！ うるさい！！」

「・・・いや、誰も何も言ってな、」

「うるさい！！！！」

「ぬおお おおお おおお おお！！！！」

「いや、それは理不尽じゃねえですかい？ 気持ちは分からんでも」

ないが・・・周りをもつとよく見れるようになるかな？ そんなんじゃない、いつまでも竜二に苛められるぞ。

と、そんなことを考えながら血まみれになっていく中で、ゆらの砲撃が不意に止んだ。諦めたのか？・・・と思ったが、息を整えているだけらしい。

「ハア ハア 」

「・・・ゆら、そろそろ止めねえか？ って、ぐあっはあああああ！！！」

丁度いいし、優しく提案してみたが、例のゆらMAXが俺の腹を襲った。くそう、平和的解決が嫌なんて、平和ボケした日本人め！・・・俺もですけどね！

「私は、ハア 、陰陽師として、ハア 、妖怪を、滅するんや！」

「陰陽師として、ねえ？ 月並みなセリフだが、花開院ゆらとしてはどうなんだよ？」

いやあ、一度は言ってみたいセリフ・ベスト20に入るセリフを、こんなに自然に言えるとはな。まあ、俺の本心でもあるわけだが・・・それでも、なんか嬉しいね。

というか、ここで説得出来ないマジでヤバい。何がヤバいって今、立ってるのがやっとな状態なんだよね。俺も、随分とポーカーフエイスが上手くなったもんだよ。

「私、は・・・けど、陰陽師は・・・」

「ふむ、陰陽師として許容出来るならいいんだな？ それなら話は

「簡単だ。お前がそんなに悩む必要はない」

「え……？」

「まったく……忘れたか？ 俺は花開院家にいたことが有るんだぞ？ 奴らが、俺の正体を知らんわけがないだろう」

「あ……」

俺の冷静を装った必死の説得に、ゆらは呆然とロックバスターを下ろす。……ふっ、やったぜ。後はいい具合に、和解方向に持ち込んでいくだけ……

「奴らも最初は俺を滅そうとして来たんだが、俺は不死だからな。結局滅せないってことで、観察処分になって……遂には解放されたってわけだ」

まあ、解放されたのは、妖怪と馴れ合い過ぎては駄目だからってのが多くを占めるんだが……こんな言い方をすれば、たぶん勝手に勘違いしてくれるだろう。

「……何なん、それ？ それって、私が一人で勝手に盛り上げて、馬鹿やってたってことやんか……」

ゆらはポロポロと涙を零しながら、顔を歪めて悪態をつく。……って、泣かれた！？ いや、ぶっちゃけそうなんだけど、女の子に泣かれたら困るぞ！！

と、俺が内心テンパってる内に、ゆらはヨロヨロと俺に近づいて来て……嗚咽を漏らしながら俺に抱きつき、ぐしゃぐしゃの顔を俺の胸に埋めてきた。

「ゆら……？」

「ごめん、ゼロ兄ちゃん・・・ちよつと、このままでいさせて・・・」

・・・うん、もう少し年がたってからそんなセリフを言われたかったなあ。というか、俺の今までのやり取りでこんな風になったと考えると、ちよつと後ろめたいぜ。

まあ、そんな無駄な思考は置いて・・・俺は、抱きついてきているゆらの頭を優しく撫でてやる。ゆらは一瞬ビクツとしたが、素直に受け入れたようだ。

「ん・・・」

「俺はな、お前と戦うつもりなんか一切ないんだよ。お前は・・・俺の大事な奴（未来のハーレム要因）だからな」

「ゼロ兄ちゃん・・・」

だって、ゆらと俺の関係からしたら、絶対に可能性高いだろうからな。もう少し年上なら、猛烈アタックかけてるところだし・・・あれ、俺って最低な思考してる？

「私だって・・・昔っから大好きやったゼロ兄ちゃんに、本当はこんなことしたくなかったんや・・・」

俺の裏の思考なんか知らないゆらは、止め処なく涙を流しながらそんなことを言う。本当に純粹で素直ないい子だな・・・やべえ、マジで俺最低じゃんかよ。

「私は・・・」

「あゝもう、辛気臭せえ！ いいんだよ、終わったことなんかどうでも！！」

更に落ち込んだ風になるゆらに耐えられなくなった俺は、大声を上げて続きを言えなくした。ゆらは何やらビックリしたようで、涙を止めて目を丸くしている。

「俺もゆらも、別に戦いたいわけじゃない・・・だったら、妖怪だろぅが陰陽師だろぅが関係なく、今まで通りの俺たちでいいんだよ！！ 分かったか!？」
「え？ わ、分かった・・・」

俺の剣幕に圧されたのか、事態をよく飲み込めない様子ながらも頷くゆら。・・・大丈夫だ、俺もよく分かってない！

「ま、ということ、仲直りな?」

別に喧嘩したわけじゃないが、他に言い方も思い当たらないのでこう言って手を差し伸べる。ちよっと迷っている風だったゆらも、すぐに手を取ってくれた。

「うん・・・」

「よし。これからも、よろしくな?」

「・・・うん!」

最後は綺麗な笑顔で、ゆらは頷いた。・・・うん、最後まで俺はシリラスになれなかったが、終わりよければ全て良しさ！

SIDE カナ

・・・なんだろう、このよく分からない展開は。いきなり先生がやってきたと思ったら、ゆらちゃんが攻撃しまくるし、最後にはハッピーエンド？になるし・・・

「・・・部外者の私には、さっぱり何やってるか分からないや」

こういう時って、ちゃんと説明してくれないと困るな。二人は私のことなんか視界にも入ってないって感じだし・・・これが、空気キャラってやつだろうか。

「・・・カナちゃん」

「リクオくん？」

「大丈夫！ ボクも同じだから！」

そういえばリクオくんも、まったく中に入っていけてなかったよ。うな……。なんでかな、リクオくと凄く仲良くなれた気がするよ。

ごり押しすれば大抵大丈夫！（後書き）

沖見猫エ・・・マジで最低野郎だぜ。物凄く真剣な少女を余所に
して、変な事しか考えてないとはな・・・いや、オレがやらせた
んですがw

今回プロットの上で有った展開

・以前ゆらに貰った指輪を、ゆらの左手薬指にはめてやる

・カナちゃんが兎衣と友好関係を結ぶ

・カナちゃんがゆらの前に立って、それは駄目だと諭す

・カナちゃんが沖見猫があその時の運転手さんだと気づく

・カナちゃんが（ry

・・・改めて列挙してみると、空気の畏が凄い・・・。カナち
ゃん、いと哀れw

あ、あと、本編では語られてませんが、ゆらにリクオの家に居候
している理由を聞かれて、爺さん（ぬらりひよん）と昔馴染みで世
話になっていると言いついています。いや、一応事実では有ります
がねw

次話は、ちょっと時系列が異なりますが、つららメインの短編前

後編になります。まあ、窮鼠編の内容考えてないし、この間になんとか考えようかと・・・。

で、前編の方は殆ど出来ているので、三月三十一日の午前零時頃に投稿すると予告しておきます。・・・因みにその瞬間、オレは漸く18禁が解放だったりw

・・・一つ確実ではない情報を言つと、この短編の最後の展開次第で・・・つららにフラグが立つかもです。

つららのキッズパニック（前編）（前書き）

予告通り、つららがメインとなる短編の前編です。まあ、と言っても、前編と言っより状況説明回って感じですが……。メインは後編の方になります。

……ぶっちゃけ、今回つらはそこまで出張りませんので、あしからず。

つららのキツズパニック（前編）

奴良組のとある一室・・・というか沖兎猫の部屋で、ある一人の漢が長年の思いを完遂すべく行動していた。まあ、その漢とというのは勿論、沖兎猫なわけだが。

「・・・えっと、これを・・・こうか」

色々な薬品を混ぜながら、時たま手元の紙を確認する。この紙というのは、以前教頭にもらった薬を完成させる調合法で、ずつと使うのを忘れていたが、最近になってやっと思い出したものだった。

「・・・うん、出来た。完璧じゃね？ ふつ、さすが俺だぜ」

そうして出来た薬品を手にして、沖兎猫は自画自賛をする。・・・まあ、説明書通り作るのなんて、そこまで難しくはないわけだが・・・そこは触れないであげて。

「さて、早速・・・」

そして、沖兎猫は出来たばかりの薬を口に放り込む。その迷いの無さは尊敬に値するぐらい考え無しなわけだが・・・やはり、今回は軽率に過ぎたようだ。

「うえっ、不味い、なああああ!？」

沖児猫がそんな馬鹿な事をしている同時刻、つららは母の雪麗と共に洗濯物を干していた。現在の時刻は朝の八時・・・なんとも清々しい朝なのだが・・・

『みぎやあああああああ！！！！』

「ふえ！？ な、なんですか！？」

・・・その静寂は、近所迷惑極まりない悲鳴によって崩される。

いきなり聞こえてきたその悲鳴に、つららはビクリして洗濯物を取りこぼしてしまった。

で、雪麗が呆れ顔でそれをすぐに拾い上げる。・・・洗濯物にも、三秒ルールというのは通用するのだろうか？ いや、通用しても嬉しくはないのだが。

「はあ、どうせあの馬鹿がまた変なことでもやったんでしょ？ 気にしたら負けよ」

つららが落とした洗濯物の土を落としながら、慣れたように雪麗は言う。長年の付き合いではあるし、そろそろ達観してきたのかもしれない。

だが、沖児猫が復活してから八年一緒にいる筈のつららは、未だに慣れていなかったりする。まあ、それがつららのキャワイイところでも有るが・・・。

「でも・・・先ほどの悲鳴は、尋常ではありませんでしたよ？」
「そう？　いつもあんなもんじゃない？」

・・・いや、近所迷惑な悲鳴がいつものことと思っている時点で、普通の感覚が壊れているのかもしれない。そんなことに慣れてしまつたら、駄目だと思う。

「とにかく、一度見に行ってみませんか？　洗濯物も、殆ど終わりましたし・・・」

「そうね。別に、面倒なわけでもないし」

つららの言に雪麗も頷いて、先ほど落とした洗濯物を物干し棹にかける。それを汚いと思うなかれ、それが沖児猫の下着だとしたら・・・誰でもそうするだろう？

まあとにかく、雪女親子は連れ立って沖児猫の部屋に向かった。で、部屋にはすぐにたどり着いたのだが・・・部屋の周りを、何故か妖怪たちが取り囲んでいる。

「ちょっと、首無・・・これ、さっきの悲鳴でみんな集まったの？」

その現状を訝しんだ雪麗が、近くにいた首無に訪ねる。沖児猫の悲鳴が上がったぐらいで、これだけ多くの妖怪が集まってくるわけがない・・・何故だろう？

「いや、それはそうなんですけど・・・それだけでも無くて・・・」

なんとも歯切れの悪い言い方に、雪麗はじれったくなる。どうせ、沖児猫に何か有ったのだらうと、妖怪たちを押しつけて部屋を覗いてみると

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

親子揃って、間の抜けた声を出してしまった。・・・まあ、それはそうだろう。だって、中に有った光景というのが

「お！ その美女と美少女は誰よ！？ ジジイ、俺に紹介しやがれ！！」

「・・・・・・・・子ども？」

そう、子どもである。見たこともない、ここにいる筈のない子どもが・・・奴良組総大将ぬらりひょんを尻に轢いてふんぞり返っていた。・・・これ、なんてカオス？

「そ、総大将・・・・・・・・これは一体、どういうことですか？」

「おお、雪麗につららか・・・・・・・・いいところに来た。早くワシを助けてくれい」

あまりに理解出来ない現状に、つららが困惑しながら尋ねると、ぬらりひょんは苦笑しながら助けを求める。その様子から見て、そこまで苦勞はしていないらしい。

雪女親子は一度顔を見合わせて、すぐに助けに入る。だが、さすがに子どもを無理やり退かすのもあれなので・・・平和的解決、話し合いに持ち込む。

「ちよつとそこのガキ、早く退きなさい」

失礼、話し合いではなくて命令だった。まあ、子どもの方が悪い

のは火を見るより明らかだが・・・子どもの機嫌を損ねてもしたら、面倒なことになるだろうに。

「おー。いいなあ、そのツンとした態度！　いつかデレさせてみてえ！」

・・・機嫌を損ねるところか、興奮させてしまった。この結果はさすがに予想外だったのか、雪麗は顔をひくつかせている。

「な、何よ、このガキ・・・。まるで、沖児猫を小さくしたみたいじゃない」

「・・・その通りじゃ」
「・・・は？」

雪麗のボヤキに、ぬらりひょんが小さくそれが正解だと言う。しかしそれを聞いても、雪麗は理解が出来ない。・・・この糞碌ジジイは、今なんて言った？

「だから、こやつは沖児猫が小さくなった者なんじゃよ・・・」

「はあ！？　何よそれ?!」

「おいジジイ、俺は中二病なんかじゃねえよ。俺は・・・小二病だぜ！」

意味が分からないと声を荒げる雪麗をよそに、子ども沖児猫（仮）は、何故かドヤ顔で馬鹿なことを言う。・・・まあ、見た目的にはそうなんだけど。

その声でハツとした雪麗は、その子どもをよく観察してみる。年の頃は自分で言う通り、小二ぐらい。肝心の顔は・・・確かに、沖児猫を小さくしたような顔だった。

「ほ、本当に沖児猫なの、このガキ……。で、でも、なんでこんなことに……。」

「……それはじゃな」

子ども沖児猫の尻に敷かれながら、真剣な眼差しでぬらりひよんは語り出す。……いや、そんな状態で真剣な顔されても、ギャグにしかならないんだけど。

ぬらりひよんが言うには、先ほどの悲鳴が上がる前に、一度もつと小さな悶絶する声が上がったらしい。それを聞き咎めたぬらりひよんがこの部屋に來ると、沖児猫が苦しんでいる姿が有った。

「……何やつとるんじゃ、おぬし」

それを見たぬらりひよんは、当然の様に変な物を見る目でこう言った。……まあ、心配の言葉ではないところが、如何に沖児猫が信頼（笑）されているかが分かる。

「……ぬらりひよんか。俺はな、薬を作ってたんだよ。で、それを飲んだら……。いきなり苦しくなった」

「やつぱり、自業自得じゃな。……で、何の薬を作ったんじや？」

「ん、若返り薬ってどこか？」

沖児猫が作っていたのは、簡単に言えばコナン君のあの薬……。見た目は子ども、頭脳は大人な状態を作るあれだ（当然、時間経過で戻る）。そしてその目的は……

《これで、女湯に入り放題だぜ!!》

・・・こういうことだったりする。子どもだったら男でも女湯入れるじゃん?という思考の末、教頭の薬を思い出したわけだ。・・・かつて、女湯を覗こうとして失敗したことを、一切懲りてないと見える。

まあ、そんなことを知らないぬらりひよんは、なんでそんな物を作るうとしたんだ・・・と、やや呆れ気味だ。・・・いや、ワシの方が必要じゃろ?的な感じか?

『まったく・・・ほれ、さっさと起きんか。丁度鳩が来ておるから、診てもらえ』

『おう、そつだ、な!?!』

起き上がるうとした瞬間、沖児猫の体に激痛が走り、体から煙が噴出する。これはまさか、薬の効力が出だしたんじゃないか?・・・なんて、思ってたら。

『みぎゃ ああああああ!!!!』

『うおっ!?! なんじゃ!?!』

いきなり、大音量で悲鳴が上がった。ぬらりひよんだって、このぐらいの悲鳴には慣れてるとは言っても、いきなりだったらビックリしてしまうのは当然だ。

で、煙が晴れて場がよく見えるようになると・・・沖児猫がいた場所に、一人の子どもがいる。キョロキョロと周りを見渡して、何やら首を傾げていた。

『んあ？ ジジイ、なんだその変な頭の形』

『ぬ、沖児猫・・・てめえ、小さくなつたからと言って、ふざけるんじゃないわい』

で、ぬらりひよんを視界に入れたと思ったら、いきなりのこの暴言である。ぬらりひよんの額に青筋が浮かんでいるのも、よく分かるというものだ。

『ん？ 中二病？ いや、俺は小二病だし・・・あれ、俺って名前何だっけ？』

『ぬ？ おぬし、まさか・・・本気で幼児化したのか!?!』

『幼児化・・・？ 俺はいつもと変わらんぜ？ 何かの間違いだろ？』

無駄に格好つけながら言う子ども沖児猫に、ぬらりひよんは自説が正しいことを知る。何のことはない、この男・・・ミスって頭まで幼児化してるのだ!!

『それにしても・・・後ろにいる化け物どもは何だよ!?!』

『む・・・心配せんでもええ、全部ワシの部下じゃから、取って食ったりはせんよ』

後ろで野次馬と化していた妖怪たちを指しながら言う沖児猫に、恐怖させてしまったと思つたぬらりひよんは、安心させるべくそう言う。・・・それがまずかつた。

『すげー、ファンタジー世界じゃなかよ!・・・はっ、これはまさか、俺の異世界主人公フラグだったり!?!』

『ぬああああ!?!』

「ん？ ジジイ、何で転けてるんだ・・・はっ、そういやさっき、こいつらは全部自分の部下だって言ってたし・・・このジジイ倒せば、俺の天下か！？」

その物言いに、沖児猫は子ども時代から変わらないと、ぬらりひよんは吉本的転倒のせいで倒れた体を起きあがらせながら思っ。・・・まあ、起きあがれなかったが。

『ぬおっ！？』

起き上がるうとした瞬間、沖児猫による足払いでぬらりひよんはバランスを崩して再び転倒。そしてその上に腰掛ける・・・この間実にコンマ三秒、普段の沖児猫からは考えられない仕事ぶりである。

『ふっはっはっは！ その化け物どもよ！ 貴様らの大将はこの通り・・・大人しく、俺に跪くがいいわ！』

いくらあの沖児猫だからといって、さすがに子ども悪戯レベルのものを無理やりというのもどうかということ、妖怪たちは二の足を踏んでいた。・・・とまあそんな時に、雪女親子がやって来たのである。

「・・・なるほど、そういうことね」

「いや、そういうことで済ませても良いのですか！？」

話を聞いて納得する雪麗に、つらはツッコミを入れる。どう考えても、幼児化する薬を作るとか、いきなり老人を人質にとる子どもとかツッコミどころ満載だろう。

「そこをスルーするのが、あいつとの上手い付き合い方よ」
「いや、でも……もういいです」

いちいち全てにツッコんでいたら、体力の無駄でしかない……雪麗はそれを知っているのだ。そしてそれを知ってか知らずか、つららも実行する。……つららは、また一つ大人になりました。

「……要するに、このガキは沖兎猫の子どもの頃で、私たちのことは一切覚えていない……そういうことでしょ？」

「ふむ……まあ、そんなとこじゃな」

一歩大人に近づいたつららを余所に、雪麗が現状把握に勤しむ。分かりきっていることでも、一度整理をしておく……こういう時には、一番大事なことだ。

「まあ、どうせ効力は一定何でしょ？ それまで放っておけば？」

「それはさすがに駄目じゃろう……というか、早くワシを助けんか！！」

丸投げしようとした雪麗を窘める途中で、自分がずっと尻に敷かれたままだということに気づいたぬらりひょんは、大声で助けを求めた。

「は、はい、すみません、総大将！」

その求めに反応したのは、当然というべきか、つららである。雪麗？……ジジイの救援なんて、一切興味がないのですよ。

「えーっと、沖兎猫様？」

「だ〜か〜ら〜、俺は中二病なんて名前じゃなくて・・・ん〜と、マジで俺の名前何だったけかなあ？」

つららが取り敢えず話しかけてみると、沖児猫はそんな風に自分で首を傾げ始める。まあ、沖児猫となる前の彼を知らない者にとつては、意味が分からないのだが。

「ん〜、覚えてないならしょうがねえや。まあいつか、中二病だろうが何だろうが」

本当にいいのか、そんな簡単に決めて・・・と、つららはツッコミを入れたくなったが、入れたら入れたで面倒になりそうだったので、すんでのところで堪えた。つららは、大人になったのです。

「そ、そうですね・・・では改めて、沖児猫様。総大将の上からお退きください」

「え〜？ そしたら俺、そいつら従えられないじゃん。メリットが何にもねーよ」

却下却下という風に、沖児猫は手を振る。まあ、確かにメリットは無いだろうが・・・老人を労るという感情が、このガキにはないのだろうか？・・・ないのだろうか。

とすると、つららは困ったことになる。無理やりというのは、仮にも幹部に失礼だし、子どもということではばかられた。だとすると・・・どうすればいいのか。

「・・・沖児猫様。どうしたら、総大将の上から退いていただけますか？」

「ん？ そうさな・・・あなた、名前は何て言うのさ？」

「私ですか？ 私は、雪女のつららです」

「そう、つららね。つららが、水着で写真撮影大会やってくれるならいいよ」

「なるほど、水着で・・・えー！？」

つららは元からぐるぐるだった目を更にぐるぐるにして、今の発言を必死に理解しようとする。・・・だが、何回思考しても、水着で写真撮影大会ということに変わりはない。・・・なんでさ。

まあ、もつと直接的な工口要求が来ることを思えば、可愛いものなのだろうか？ それとも、玄人的要求と捉えるべきか・・・まあ、どのみち関係ないが。

助けを求めて、後ろにいる妖怪たちをチラリと伺うと、「いいぞ、沖児猫！」・・・などという声が多数聞こえて、とても頼れそうにない。母の雪麗は・・・言外に諦めると、目を逸らしている。裏切り者！

「う、うー、どうしたら・・・うー」

声優ネタではないので、あしからず。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うるさい」

そんな時に、どこからともなく聞こえてきた、幼い少女の声。それは当然、この部屋のもう一人の主である児衣兔の声で・・・もしかして、今までずっと寝てたのか？

「・・・・・・・・んう、なんで朝っぱらから、こんなに部屋が騒がし」

あの沖児猫になったのだろう。

「まあ、何にせよ・・・これで、総大将は解放されたわね」

「はっ、しまったああああ!!!!」

雪麗が笑顔で沖児猫の肩を掴みながら言うと、沖児猫は大袈裟に叫ぶ。普段の沖児猫なら、ここで悲惨な目に遭うわけだが・・・今回、さすがにやらないらしい。

「という事で、つらら・・・こいつが元に戻るまで、世話は任せ
たわよ」

「は、はい・・・はい？」

あまりに普通に雪麗が言うので、つららも反射的に承諾してしま
ったわけだが・・・いやいや、おかしくないか？ 何でいきなりそ
うなってしまう？

「な、何故私が・・・？」

「消去法よ。 沖児猫、あなたの世話する人が男だったら、ど
うする？」

「黄金の玉を蹴って逃げる」

「でしようね。 で、この屋敷の中で、ともに沖児猫の世話
が出来る女は・・・あんたぐらいなのよ。 頑張ってね」

まあ、この屋敷の女率は低く、女はだいたい台所に立っているし、
暇な女の中で、沖児猫の事を理解していて、尚且つ子どもの世話が
出来るそうなのは、つららと・・・

「・・・お母様でもよろしいのでは？」

「私は、今日は宮姫と会う予定なのよ」

この人、逃げやがった・・・とはさすがに言えなかったの、つ
ららが世話することが確定する。つららは、絶対に苦勞するなあ・・・
・と思いつつ、現状を理解していない沖見猫に微笑みかけるのだっ
た。

つららのキツスパニック（前編）（後書き）

予定通りに投稿出来たようなので、一安心しております作者です。
この調子で後編の方も早めの投稿を目指して・・・たぶんですが、
三日以内にはなんとかかなるか。今しばらく、お待ちくださいませ。

つららのキッズパニック（後編）（前書き）

まず最初に言っておきます・・・あつるえく？どうしてこうなつた？自分で思ってるだけかと思いますが・・・うん、何故だ。何故こんなことになってしまった。

一応、だいたい最初に考えていた展開通りではありませんが・・・あれだ、文章力無さ過ぎて、展開に違和感が有るんだな・・・なんか、すみません。

つららのキッズパニック（後編）

SIDE つらら

「沖児猫様ー？ どこですかー？」

結局沖児猫様の世話役を任された私は、今は奴良組の庭にて沖児猫様と隠れん坊をしています。何をしたいか聞いたら、少し悩んで隠れん坊がいいと仰られました。

先ほどのやり取りから、もっとおかしな要求をしてくるかと思っ
ていましたが、子どもっばいところも有るようで、ちょっとホッと
していたりもします。

「それにしても、隠れん坊ですか・・・ふふ、リクオ様の幼少期を
思い出しますね」

昔はよく、リクオ様とこの庭で隠れん坊をしたっけ。いつも軽く
あしらわれていたけど・・・今では、いい思い出です。今は隠れん
坊なんてしないから、ちょっとだけ寂しかったりも・・・。

「よし！ 沖児猫様！ 勝手知ったるこの庭、すぐに見つけて差し
上げます！」

いくらこの庭が広いといっても、リクオ様との隠れん坊で隠れら
れる場所は熟知しています。この庭を一切覚えていない沖児猫様に、
負けるわけにはいきません！

三十分後

・・・そう思っていた時期が、私にもありました。どこをどう探しても、沖児猫様の姿は無くして・・・もしかして、誰かに攫われてもしたんじゃない・・・。

「そんな・・・私のせいで・・・」

「何が？」

「それは、もしかしたら沖児猫様が・・・って、沖児猫様!？」

「ん、確かに俺だが？」

不意に聞こえてきた声に振り返ると、今の今まで探していた沖児猫様が、腕を頭の後ろで組みながら立っておられました。なんでそんなにのほほんと・・・心配してた私が、馬鹿みたいじゃないですか。

「というより、どこにおられたのですか？ 私は、庭のいたるところ全て見回ったと思うのですが・・・」

リクオ様との隠れん坊の経験もあって、私には見落としがないと断言できます。だというのに、どうして見つからなかったのでしょうか？

「ん、まあ、俺も動き回ってたからな」

「動き回って？ 何故隠れん坊で・・・」

「隠れん坊で絶対に見つからないようにするには、どうすればいいか・・・さ」

隠れん坊で絶対に見つからない方法なんて「いやそれにしても、つらの尻はいい形してたなあ」ない・・・、って、ちよっと待って下さい！

「私の、お、お尻って!?!」

「ん? そりゃ、ずっとつららの尻眺めてたんだもんな」

「は、はいー!?!」

ずっと私のお尻を眺めてたって、まさか・・・私が沖児猫様を捜している間、ずっと私の後ろについて回っていたとでも言うのですか!?! あり得ません!?!

「だって、そんなのに気づかない筈がないですし、気配も一切感じませんでした!」

「ふっ・・・エロに走った漢は、時に限界すら超えてしまうのさ・・・」

沖児猫様はニヒルに笑いながら、やれやれと嘆息します。・・・いやいや、そんな馬鹿な。そんなことで・・・でも、実際に私は分からなかったし・・・。

「まあ、そんなことはどうでもいいんだ」

「・・・え?」

と、私が非常に混乱しているのをよそに、沖児猫様ははちきれんばかりの笑顔でそんなことを言います。私は、急なことに少し目を瞬いてしまいました。

「時につらら、遊んだら汗をかかなかったか? いや、お前がかいてなくても、俺は充分汗をかいているんだよ」

「は、はあ。それが、何か?」

「とすれば君・・・風呂というものに入りたいと思うのが、人の性じゃないか?」

・・・いや、そうかもしれないませんが、子どもがそんなしたり顔で言っても違和感しか有りませんよ。・・・まあ、つまり、お風呂に入りたいですね？

「では、浴場の準備を「待て、何を勘違いしている」・・・!?」

え、今のやり取りで何の間違いが有ったのでしょうか？ 沖児猫様のバトルフェイズがまだ終了していないなんて・・・。・・・私も、随分毒されましたね。

「俺が入りたいのは、この屋敷の浴場じゃなくて・・・銭湯の風呂だよ」

「何故・・・銭湯？」

「だって、どうせこの屋敷のだと一人で入らないといけないだろ？」

・・・まあ、そうですね。こんな時間にわざわざお風呂には入りませんし・・・。でも、なんでしょうか・・・裏が有るような気がするんですよね。

「さ、連れて行ってくれよ！」

そんな笑顔で言われたら・・・是非もなしです。子ども沖児猫様の、純粹で在る善の心を信じましょう・・・。

その期待は、一瞬で崩れました。

「待って下さい、沖児猫様。そつちは女湯です。あなたは男湯ですよっ?」

「何を言ってるんだ、つらら。俺は見ての通り子ども・・・女湯に入っても咎められることはないわ! だいたい、男湯で汚いモノなんざ見たくねえ!」

なんとということでしょう、このお方何の躊躇も有りません。いや、確かにこの結果は予測してしかるべきだったのかもしれないが・・・いえ、もういいです。

「はぁ・・・分かりました、もう止めません。どうぞ、行ってくださいませ」

投げやりかもしれませんが、私には止める術なんて有りません・・・。ですが、沖児猫様は何やら不満気な顔をして、私の腕を掴んでこられました。

「何言ってるんだ、つららも来いよ」

「・・・それは、無理です」

「はぁ? 何で?」

「私は・・・雪女ですから」

「え・・・しまったぁぁぁあ!!!」

一瞬の間を置き、沖児猫様はこの世の終わりというような表情をしながら絶叫します。というか、やっぱりそれが目的だったのでね・・・ふっ、今回は勝ちました。

「では、私は入れませんので・・・ここで待つておきます」

「ああ・・・ぬ、待てよ？ つららがいなくても、全裸の女性たちが俺を待ち受けているのは間違いない・・・待つてるよ、全裸美女たちー！ー！」

「行つてらつしゃいませー」

私は、なんであんなにポジティブなんだろうなーと思いつつ、軽く手を振ります。まあ、全裸の女性はいるでしょうね・・・いるだけでしょうけど。

どうせすぐに帰ってくるでしょうから、私はゆっくりと探索しています。そして見つけたのはコーヒー牛乳・・・これを飲んだら、私も日焼けするのでしょうか？

「つらら~~~~~！」

「沖児猫様・・・お早いお帰りで」

ちよつと意地悪な皮肉でしょうか・・・と思いつつ、半泣き状態の沖児猫様を迎えます。こうなることを予測していたわけですから、びっくりすることは有りません。

「ひつく、美女が・・・一人もいなかったあ。逆に、ひつく、婆さんたちが、ひつく、俺を取り囲んで・・・」

でしょうね。今は夕方に差し掛かるような時刻とはいえ、まだ早い時間帯。若い人たちは、こんな時間に銭湯なんて来ようとはしないでしょうから。

「それは、残念でしたねえ」

私はひねくれてしまったのでしょうか・・・こんな風に意地悪してしまうなんて・・・まあ、そうなった原因は沖児猫様でしょうから、後ろめたさはありませんが。

「うわ。すげー、これが東京の祭りかあ」

「ふふつ。沖児猫様、ハシヤくのはいいですが、はぐれないでくださいね？」

この言葉の通り、私と沖児猫様は今、浮世絵町から少し離れた所で催されているお祭りに足を運んでいます。子どもらしく目を輝かせている沖児猫様は、不敬かもしれませんが・・・凄く可愛らしいですね。

あの後銭湯から退散した私たちは、屋敷までの道を歩いていました。そしてその途中の電信柱で、このお祭りのことを知らせる貼り紙を発見した沖児猫様は・・・

『これ、行こうぜー！』

そう言われて、私の腕を取って駅まで走り出したのです。沖児猫様が行きたいというのなら、私に拒否する理由はありませんでした。

・・・それに、私も行ってみたいと思いましたしね。

「やっぱり祭りだと、浴衣着てる女が多いな・・・ナイスだぜ」

「そうですねー・・・って、まさか、それが目的だったんですか！
」？
」

あまりに普通に言うので反応が遅れてしまいました。このお方はどれだけ下心で動いているのでしょうか。本当に子どもなのでしょうか・・・演技じゃないですよ？

「いんや、祭りの方が興味は有ったさ。ただ、浴衣美女が好きなのでだよ」

そ、そうですね・・・。これは、良かったと考えるべきでしょうか？ まあ、何が良かったのかはいまいち分かりませんが。

それにしても、浴衣ですか・・・確かに、周りの女性の多くが浴衣姿をしています。やはり、日本の伝統有るその格好は、魅力に溢れていますね・・・。

私とて女ですから、ああいった格好には興味が有ります。私も普段は着物ですけど、それとはまた違った魅力が有りますから・・・。沖児猫様のお気持ちも、分からないではないですね。

「ですが、それはそれ、これはこれです。・・・浴衣美女にばかり、目を向けないでくださいね？」

今日はお祭りを楽しみに来たのですから、他に目を向けられ過ぎでは困ります。・・・あれ、この言い方だと、私が沖児猫様の彼女みたいじゃないですか？

「その点は大丈夫だ。俺はつららのそのミニスカも好きだぜ！」

良かった、いつものように私の発言を拡大解釈をされなかった。
・って、ちょっと待ってくださいよ！

「ど、どれだけ私のことをそっち方面で見ているんですか！ だいたい、このスカートはそこまでミニでは有りません！」

このお方、今は子どもの筈なのに、今日一緒に居た中でそっち方面で見えていなかったためしがありませんよ……。本当に、恐ろしいお子様ですね！

「ふっ、つららが可愛すぎるからいけないんだよ……。それと、それだけ短かったら、男の欲情を誘うには充分だぜ？」

だから、そこまで短くはないと……。そんなに欲情するのは、貴方だけです……。まあ、可愛いと言ってくださったのは、嬉しくないことはないですが。

とにかく、今のやり取りはさっさと忘れてしましましょう……。せっかくのお祭りだというのに、変な気持ちで行動すれば、楽しめるものも楽しめませんか。

「ふう……。もういいです、そろそろ参りましょうか」

「む、男の変態性を舐めちゃだめだぞ？」

……。貴方が言わないでください。

大勢の人で混み合う道を、私と沖児猫様は手を固く繋いで歩きます。雪女である私には、この熱気は少々辛いのですが……これも、偶には乙なものなのです。

「あ、つらら！ 祭りで綿あめを買わない手はないだろう！」

「くすつ。はいはい、綿あめが食べたいのですね？」

さっきからこんな風に、沖児猫様は私を引っ張って色々な屋台に寄っていきます。こうして見ると普通の可愛い子どもなのに……いえ、何でもありません。

「おっちゃん、綿あめ二つくれ！」

屋台に辿り着くなり、沖児猫様は元気な声で注文します。こういう時に、自分の分だけでなく私の分も頼むのが沖児猫様らしいですね。……まあ、その代金は私の財布から出ていたりするのですが！

「おう。ボウズ……姉さんと祭りかい？ 楽しそうじゃねえか」

屋台のおじさんは、強面ながらも気さくに話しかけてきました。それはいいのですが……姉に見えると聞いて、沖児猫様はどう反応するのか……。いえ、なんとなく想像はついてしまうのですが。

「姉さんじゃねえ・・・俺の未来の彼女の一人だけ！」

「おつ、それはすまねえな。 あいよ、未来の彼女さんに渡してやんな」

・・・おじさん、冗談だというのは分かりますが、そんな風にいうと沖児猫様は調子に乗ります。・・・なんとというか、私、こんなこと考えていいんでしょうか。

「つらら！ ほら、甘くて美味いぞ！」

「あ、ありがとうございます・・・」

ちゅ、沖児猫様が・・・沖児猫様が、調子に乗っていない！？
くつ、私が酷いことを考えていたみたいじゃないですか・・・その笑顔が、非常に眩しいです！

「味が違うから、後で交換しような？」

「そ、そうですね。どちらも食べたなら、凄くお得な気がします！」

珍しく沖児猫様がまともだったので、この時は何も考えていなかったのですが・・・後から考えれば、きっと間接キスを狙っていたのでしょうか・・・閑話休題。

その後も、私たちは色々な屋台を回りました。沖児猫様がヒーロのお面を買ってポーズをとってみたいり、かき氷早食い勝負という無謀な挑戦を私にしたりと・・・とても楽しい時間を過ごしましたね。

そして最後に、お祭りと言えば・・・やはり、花火でしょう。私たちは現在、よく見える場所を陣取って、夜空に咲く色とりどりの花を魅入っています。

「うわー、綺麗ですねー！」

「ああ、ここまでスケールでかいのは久しぶりだな・・・褒めてしんぜよう」

私は見ている興奮状態のまま花火の感想を言いましたが、沖児猫様はあくまで冷静に感想を述べます。・・・くす。沖児猫様、格好つけてるつもりでしょうが、目の輝きを誤魔化せていませんよ？

「沖児猫様は、どんな花火が一番好みなのですか？」

「そうだな・・・やっぱり、派手なデカいのが・・・って、しまつたああああ!!！」

な、何ですか!？ 私は興味本位で聞いたのですが・・・何か、いけないことでも有ったのでしょうか・・・いえ、この感じは、きつといつものパターンですね。

「一体、どうしたのですか？」

「ああ・・・普通、こういう時は、花火なんかより君の方が綺麗だよ、って言わなきゃならなかったのに・・・」

・・・ほら、やっぱり。でも、私は詳しくないから知りませんが、こういう時にそう言うのが決まりなのでしょうか?・・・絶対に違うと思いますけど。

落ち込んでいる沖児猫様をよそに、私はどんどん打ち上げられる花火の方に目を移します。やっぱり綺麗・・・こんな光景を、素敵な殿方と・・・キャッ!

「やはり一乙女として、そういうのに憧れないとは言えませんよね・

・・・」

特に、お母様が沖児猫様と仲睦まじくデートにお出かけになる姿
を見ている私としては、その憧れもひとしおなのです。偶に妄想が
・・・あー！ 何でもありません！

まあ、お母様の相手である沖児猫様はここにいます。……
今は子どもですし、何より沖児猫様ですからね……。そういう相
手には、見えません。

「なあ、つらら……」

「何ですか？」

「俺への評価が、凄く低くないか？」

そういうわけではないですよ？ 沖児猫様はお母様の恋人で、幹
部なわけで……。私には手が出せないってことです。……いえ、
別に出しませんが。

「規則やルールってのは、破るためにあるんだよ！」

……すみません、誰かバファリンをくれないでしょうか。

色々有りましたが、ちゃんとお祭りを楽しんだ私たちは、時間も

遅いということ、電車に乗って奴良組の屋敷へ帰宅します。ですが・・・この時間とはいえ、やはり乗る人は多いですね・・・。

「仕方ないですね・・・沖児猫様、ちょっと起きてくれませんか」

私は、途中で疲れて眠ってしまったためおぶっていた沖児猫様を、出来る限り優しく起こします。さすがに、満員電車の中でおんぶするわけにはいけませんから。

「んう？・・・どした・・・」

「申し訳ないのですが、これから電車に乗るので、ご自分で立っていただけますか？ 私の方に寄りかかって眠っていただいても構いませんので・・・」

「分かった・・・」

沖児猫様は私の背から降りて、お立ちになられました。しかしやはり眠いようで、時折かくんと頭を落としながらも、フルフルと頭を振って眠気に抵抗しています。

・・・すいません、なんだか凄く可愛いです！ これはもはや、兵器といっていい可愛さではないでしょうか！・・・はあ、なんで起きている時はああなんでしょう？

ま、まあ、そんなことは置いといて・・・私たちはやって来た電車に乗って、ドアの近くに収まります。沖児猫様はもう限界だったようで、私にもたれかかりながら、すぐに眠りに戻ってしまいました。

「ふう・・・」

これで・・・今日のお守りは終わりですかね。なかなかハード

な一日でした・・・楽しくなかったと言えば嘘になりますが、何日も続くのは絶対に嫌です！

と、安心したところで、お尻に違和感が。それはずっと続いていて・・・沖児猫様、せつかく眠ったと思ったのに、まさかこんなことをしてくるとは・・・！

「沖児猫様、さすがに怒

」

え？ 違う？ 沖児猫様はまだ寝てる・・・。だったら、さつきから感じるこれは・・・まさか、本物の痴漢というやつだとも言うのでしょうか・・・？

「くっ、ふざけ

」

私はこの下手人に向かって冷気をぶつけようとして 直前で踏みとどまりました。こんな場所でそんなことをすれば、下手人以外も巻き込んでしまいます・・・。

こんなに混んでいたら、直接彼の者の手を掴むのは不可能だし、大声を上げるのは・・・駄目、沖児猫様が眠ってるのに、起こしてしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こうなれば・・・我慢するしか有りません。確かに不快ではありますが、それもただかだか三十分程度我慢すればいいだけ・・・造作もないことで、す！？

「！？ ヒツ？！」

なんで・・・さつきよりも手の動きが・・・。こんなの、嫌・・・でも、沖児猫様が起きて・・・それは、絶対駄目。けど・・・っつ！嫌、気持ち悪い！誰か・・・助けて・・・。

「てめえ、ふざけてんじゃねえぞ」

・・・え？この声・・・沖児猫、様？

「俺の可愛いつららに手え出すとは、大した度胸だな？」

先ほどまで子どもだった筈なのに、今はいつもの沖児猫様に戻っていて・・・私の後ろにいる人の手を掴んで、鋭い眼光で睨みつけています。・・・あの、なんとというか・・・ちよつと、格好よく、見えます。

「痴漢だと？ ああ、確かにつららの尻はいい形をしている。だから、触りたい撫でたい・・・その気持ちはよく分かる。だが！それは、お前がやっていいことじゃない！ つららが、自分から「触ってください、ご主人様」と言えるような相手（つまり未来の俺）しかやってはいけない！ 分かったか、この変態野郎がああ！！」

あの、沖児猫様・・・怒ってくれるのはとても嬉しいのですが、かなり恥ずかしいのですが・・・。というか え？

「変態だあああ！！」

私がそれに気づいた時、近くからそんな声が上がりました・・・ええ、変態がいます。・・・それは、まあ、沖児猫様なんですが。

だってですよ？ 沖児猫様はさつきまで子どもだったわけで……当然、子ども服を着ていました。つまり、大人に戻った今は……大変あれなことになっています。まあ、破れきってないことが幸いですが。

そんな格好をした人物がいきなり現れて、騒ぎにならない筈がありません……ヤバいです。とりあえず、沖児猫様の顔をさつき買ったお面で隠して……。

「あ、駅です！ 着きしだい降りますよ！」

「む？ 分かった……というか、今さらだが、俺ってなんでこんな所にこんな変てこな格好でいるんだ？」

そんなこと、私の方が聞きたいですっ！

「ハア、ハア……ここなら、誰にも見つからないと、ハア、思います……」

あれから、到着した駅にさつさと降りた私たちは、他の乗客の痛い視線から逃げて、とある場所に隠れました。……まあ、こんな小さな駅で隠れる場所って言ったら、ここ（トイレ）ぐらいです

けどね。

「……で、結局俺は、なんでこんなことになってるんだ？」

幾らか落ち着いたこともあつてか、沖児猫様は話を切り出してきます。なんでこんなことになっているか……まあ、最初から話すしかないですよね。

「えっと、かくかくしかじかで……」

え？ 手抜き？……馬鹿なことを言わないでください、ちゃんと相手に伝わっているなら、それでいいですよ。

「ふむ、俺は子ども化に成功したのか。……くっ、何故その記憶がないんだ！？」

沖児猫様は本気で悔しがっている模様……きつと、いつも通りの考えからですね。私としては、無くなって良かったんじゃないかと思えます。

「まあいい、無くなったものは仕方ない。それより……つらら、お前は痴漢なんてされて、なんで黙ってたんだ」

そう言う沖児猫様の顔は、先ほどまでとは打って変わって、真剣そのもの。非難めいたその眼差しは、私のことを本気で心配してくれている証で……。

「あ、あの、その……冷気を使えば妖怪だというのがバレてしましますし……」

「……大声出して、助けを求めれば良かったんじゃないか？」

確かに、それが普通の痴漢の対処法ですが……ここで私が、沖児猫様を起こさないように……などと言えば、私の至らなさを沖児猫様の責任にしてしまいます。

しかし、私はそれが出来ない程意志が低くは無いのもまた事実で……それを沖児猫様も分かっているから、こうして聞いてきているでしょう。ならば、正直に話すより他ありません……。

「それは……えつと、起こして……しまうんじゃないかと」「子ども状態の俺をか?……あれだ、アホだな、お前は」

沖児猫様はそう言いながら、私のおでこに所謂デコピンというやつを放つてきました。あうう……かなり、痛いです。赤くなつてなければ良いのですが……?

「あの子、お前のその真面目っぷりは美德だよ。俺も萌えを感じずにはられない」

痛がる私を無視して、沖児猫様は話しはじめます。……あの、真面目な顔でそんなこと言わないでください……もの凄く恥ずかしいです……。

「だが、自分が嫌なんだったら、他のことなんか気にするんじゃない。別に命がかかっているわけでもなし……お前が無理する必要なんざ一つもない」

「で、でも……!」「俺の大切なつららが、そんな目に遭うのは……俺が、嫌なんだよ」

沖児猫様は私の頭を撫でながら、悲しそうな顔をしてそう言います。その顔を見た瞬間、何故か心臓が跳ねて、体中が無性に暑くなつて今にも溶けそうで……。

ち、違つんです！ 私、知ってますよ！？ これって確か吊り橋効果というやつで、ピンチの時のドキドキを勘違いしてしまうという……正にそれじゃないですか！！

「だからつらら……って、どうした？」

「い、いえ！ なんでもありません！」

そ、そう、これは吊り橋効果！ 所詮は勘違いです！ だいたい、私が沖児猫様にドキドキする筈がないじゃないですか！ 今日の日を顧みれば、分かりきっています！

「？……まあいいか。つらら、嫌な時は周りのことなんか気にしなくていい。駄目な時は、俺も力を貸すから」

安心させるような感じの笑顔で言う沖児猫様に、またもや心臓が跳ね上がりました。そのせいでまた体温が上昇して、本当に溶けてしまいそう……。

……これは、吊り橋効果です……けど、それに身を任せるのは何故か心地良くて……今だけは、この勘違いした鼓動のままでも……いいですよ……？

後日聞いた話に寄ると、例の事件のせいで、夜の電車に現れる変態仮面という都市伝説が出来たらしいです。それを聞いた沖見猫様はと言つと……

『変態仮面だと？……そこは、変態紳士と言いやがれ！』

……うん、やっぱり吊り橋効果だったみたいですね！

つららのキッズパニック（後編）（後書き）

ふっ、色々と駄目だったが・・・特に痴漢描写の辺りに違和感が凄かったらどう？ 大丈夫、作者のオレもだ。だって、痴漢なんてよく分かんねえもん・・・じゃあ、なんで書いたんだって話ですが。

まあ、その辺は置いといて・・・最後の所、書き終わってよく考えたら、かなりあれな状況ですよ。

だってさ、トイレという密室空間に、さっきまで痴漢されてた女と、服がヤバいことになってる男・・・やったことないから詳しくは分かりませんが、エロゲーだったらここから本番だろww

ここはああ言っておくべきか・・・『省略されました。この先が読みたければ、ワツフルワツフルと入力してください』

ペットを飼うには知識が必要！（前書き）

はい、超お久しぶりでございます。三週間もお待たせしてしまつて・・・その割に、あんまり納得がいく感じになつておりませんが、最悪、書き直すかも・・・。

さて今回は、つらら番外の前の話からの繋がり、窮鼠編へと入つていく話です。つらら番外はいつの時間軸になるのか・・・書いた自分が分かりません。

で、今回、以前言っていたオリキャラ登場となります。キャラ的にはいい感じかなと思いますが、いかんせんキャラ紹介のせいで変な感じに・・・申し訳ない。

ペットを飼うには知識が必要！

あれから、ゆらとカナちゃんにある程度の言い訳をした後、俺は一旦奴良組の屋敷を出た。清継たちが起きてきたら、また面倒なことになるからな。

で、どうせ出てきたんだからということ、先ほどの騒動のせいでデートが途中止めになったことを謝りに、俺は神社まで足を運んでいた。

「ミヤー、苔姫ー、入るぞー」

この神社に通い慣れている俺は、何の躊躇いもなく扉を開ける。女の家は無許可で入るなんて普通は失礼だろうが、もはやここは第二の家になっているので、俺もミヤたちも気にしない。

「む、沖児猫様。お久しぶりなのじゃ」

俺が中に入ると、すぐそこにいた苔姫が気づいて対応してくる。それにしても・・・お久しぶり？　なんでだ？

「確か、三日前ぐらいに会ったと思うんだが・・・なんで久しぶりなんだ？」

「なんでもないぞよ。・・・一応主人公の沖児猫様には、わらわの様な脇役の気持ちは絶対に分からないぞよ（ボソ）」

「ん？　なんだ？」

「なんでもないぞよっ！！」

なんなんだろうな？　殆ど聞き取れなかったんだが・・・まあ、

いいか。それより、ミヤが出てこないな・・・どうかしたんだろうか？

「苔姫、ミヤはどうしたんだ？」

「宮姫様は・・・今は、夕飯の買い出しに出かけているぞよ」

あゝ、マジか。そりゃ、俺がもう一度来るなんて予想出来なかったんだろうから、しょうがないよな・・・。まあ、帰って来るまで待つてればいいか。

「ところで・・・さつきから気になってたんだが・・・そいつは、何だ？」

俺が指差したのは、苔姫が俺と話しながらもずっと撫で続けている、銀色の毛を持つ獣。どうやら眠っているらしいが・・・いや、なんだこいつ？

「こやつはポチ公ぞよ！」

「ポチ公・・・」

「うむ、犬を飼ったらそう名付けると決めていたぞよ！」

苔姫はそう言って興奮しているが・・・犬？ 人を乗せても大丈夫なぐらいデカいんだが、犬なのか？ というか、ポチ公っていう名前はどうかと思うが。

「・・・飼ってるのか？」

「さつき、神社の前で倒れているのを拾ったぞよ。だから、これから飼つぞよ」

拾ったのかよ！？ 落ちてる物を拾っちゃダメって親に教わらな

かったのか!!・・・さーせん。いやでも、こんなデカイ犬?なんて、やっぱり拾っちゃダメだろ。

「保健所に連絡した方が・・・」

「沖児猫様・・・そんなことをしたら、ポチ公が殺されてしまうぞよ・・・」

「う・・・」

俺は現実的に保健所に連絡することを提案するが、苔姫のあまりに悲しげな顔に、言葉が詰まってしまふ。苔姫を悲しませたら一ツ目の野郎に殺されるかもだし・・・まあ、本人がいつて言うならいいか。

「ふう、飼うのはいいが、ちゃんと予防接種はしとけよ? 狂犬病

とか、色々面倒な病原菌があるみたいだからな」

「うむ、分かったぞよ」

正に気分は、娘にペットを飼う時の心得を教える父親だろうか。俺はまだ子どももないからな・・・というか、俺に子どもって出来るんだらうか?

「む、子どもで思い出したが、犬を飼う時って去勢した方が良かったよな・・・」

あれ、それって猫を飼う時だったっけ? よく覚えてないな・・・まあ、たぶんやっておいた方がいいだろう。

・・・因みに去勢するのは、無駄に子どもを増やさないために、男の大事なところを切り落とすことだな・・・おー、怖っ!

「むう・・・よく分からぬのじゃ。とりあえず、去勢とやらをして

おくぞよ
「

「ちよつと待て!」

よく分からないのに雄の尊厳を切り落とそうとした苔姫の言葉に、俺たち以外の誰かの声で待ったがかかる。声の感じからして、若い男だと思つが・・・誰だ?

「えーっと、今の声はいつたい・・・はっ、まさか、幽霊か!？」
「ゆ、ゆ、ゆ、幽霊!? わ、わらわは、そういうのは苦手ぞよ!」

俺が冗談(ここ重要!)で言った発言に、苔姫がオーバーリアクションで慌てふためく・・・幽霊が苦手って、お前も大概似たよくなもんじゃないか?

「苔姫、苔姫、冗談だから。幽霊なんかじゃないから」
「ぬわあゝ、わらわは美味しくなんて・・・はっ!？」 冗談だったのですか!？」

おい、苔姫。慌ててるのは分かるが、幽霊にはたぶん喰われないと思うぞ? まあ、そういうところは可愛いんだが・・・口説いたら、一ツ目に何されるか分からん。

「当たり前だ。今の流れからいって・・・どう考えてもこいつだろ
う」
「え? ポチ公?」

俺がポチ公を指差すと、苔姫は目を丸くして信じられないような顔をする。確かに、動物が話すつてのは信じられないだろうが・・・俺らは何かを考えようぜ。

「おい、ポチ公・・・お前、妖怪だろ」

「・・・僕は、ポチ公などという名前ではない」

そう言いながら、ポチ公は目を開いて立ち上がる。・・・改めて見ると、かなりデカいな、こいつ。たぶん、大人二人は余裕で乗せられるぞ。

「ポ、ポチ公が・・・ポチ公が、普通に喋ったぞよ・・・！」

「だから、僕はポチ公なんて名前ではないと言っている！！」

ガビーンといった感じに恐れおののく苔姫に、ポチ公は毛を逆立たせながら怒鳴りつける。・・・うーん、いつも獣型の妖怪を見るたびに思っただが、どうやって人語を喋ってるんだろうな？・・・謎だ。

「まあ、そんなことは置いといて・・・お前、人化出来ないのか？」

正直、デカい犬に話しかけてるのは何か気持ち悪い」

「僕は犬ではなく、狼だ！！」

「あ、そうなのか。それはすまん」

なるほど、犬にしては珍しい姿をしてると思ってたが、狼だったのか。まあ、犬だろうが狼だろうが大して変わらないし、俺には何も関係ないな。

「で、結局人化出来るのか？」

「・・・出来る。ちよつと待っている」

ポチ公はそう言うと、段々と体が小さくなっていった・・・最後には、中々高校生ぐらいの少年になった。そして、その姿に俺は・・・

・怒りを覚えてしまう。え？ 何故って？ それはだね・・・

「うん、犬耳に尻尾だと？・・・ふざけるんじゃないねえ！！ そんな萌えアイテムを付けていいのは、美少女だけなんだよー！！」

そう、ポチ公の綺麗なサラサラ黒髪の間からは犬耳が、白いズボンの後方からは銀色の尻尾が・・・イケメンだから似合っではいるけども、俺は認めねえ！！

「そんなこと、僕が知るか！ 人化したら勝手にこうなるんだ！」

「・・・話がズレているぞよ」

話がズレてる？ 馬鹿言っちゃいけない、これは重要な問題だよ。まあ、そんな冗談・・・でもないけど、冗談は置いといて、さつさと本題に入るか。

「で・・・結局、お前は何なんだ？」

「僕は 化け狼・・・名は、無い」

化け狼・・・聞いたことはないが、化け猫やら何やらがいるんだから、化け狼がいてもおかしくないだろう。それと、名前が無いのか・・・

「言うておくが、少なくともポチ公などという名前ではない！」

はっはっは、君は何を言ってるんだい？ この俺がそんなことを考える筈がないじゃないか。まったく、お前は馬鹿だなあ！・・・ちっ。

「まあ、置いといて・・・なんでお前は、神社の前なんかで倒れて

「たんだ？ その辺りは、はっきりしとかないとな」

「どうやら俺たちに敵意は無いみたいだが、事情は知っておかないと駄目だろう。誰かに追われていた・・・なんてことになったら、奴良組としても動かないとだし。」

「・・・僕の最初の記憶は、母さんと二人で暮らしていた頃の記憶だ」

「そこから、何故かポチ公の過去話が始まった。何でも、ちよつと前までは母親と一緒に平穩に暮らしていたらしいが・・・ごめん、面倒だからカットで。」

「そして、つい先日、二人でこの辺りまで来た時・・・母さんは、人間の放った凶弾に倒れたんだ・・・」

「・・・なるほど」
「母さんは息も絶え絶えに、僕に生きろと言って・・・それから僕は・・・僕は！」

ポチ公は臨場感たつぷりに、身振り手振りて己の過去を語る。その話を聞いた苔姫は、「不憫ぞよ」などといってハンカチを濡らしているが・・・

「・・・つまり、何か？ お前の唯一の肉親の母親は人間に撃ち殺されて、そこから逃げたお前は、この神社の前で力尽きて倒れたと・・・そう言いたいのか？」

「ああ・・・そうだ」

「神妙な顔で体を震わせながら、ポチ公は絞り出すように声を漏らす。・・・ああ、よくもまあ、こんなにも堂々と・・・、嘘っぱち

を言えるもんだな。

俺は出来る限り満面の笑みを咲かせて、夜王丸を抜き放った。それを突きつけてやると・・・ポチ公はぱっと見冷静そうな顔をしながら、冷や汗を流している。

「日本では狼なんて絶滅してるんだ。もし人間に殺されたんだったら、俺だって知ってる筈だろう？ つくなら、もつとまともな嘘をつきやがれ？」

狼を撃つたなんて情報が、ニュースにならない筈がないもんな。まったく、そんなことに気づかないのなんて、そのロリっ子姫ぐらいなもんだぞ・・・俺も、随分と舐められたもんだ。

「・・・ふつ、よく見破つたな。まさか、貴様のような見るからに馬鹿が、僕の嘘を看破するなぞ思いもよらなかった」

「お前、喧嘩売ってるよな？」

首筋に刀突きつけられてるのに余裕ぶるとは・・・相当な実力があつて余裕なのか、ただ単に馬鹿なのか、それとも・・・相当な中二病なのか。

「まあ、Nice boatする前に聞いてやる。なんで嘘なんぞついたんだ？」

「ふん。貴様らが何者かも分からないのに、真実を話して何になる」

・・・ありゃ、俺って名乗ってなかったっけ。まあそれなら、警戒してもおかしくはないわな。・・・まあ、あんな嘘をつく理由は無かったと思うけど。

「それは悪かったな。こつちのロリ姫は苔姫って言って、この神社の土地神の一人。そして俺は沖児猫・・・任侠妖怪一家、奴良組の幹部の一人だ」

「なっ!?! 奴良組の幹部だと!?!」

俺が自分たちの正体を明らかにすると、ポチ公は信じられないといった感じに驚愕する。そして、少しの間呆けていた後、ハツとしてまた喋り始めた。

「奴良組の幹部・・・なるほど、それならば僕の嘘を見破ったのも頷けるというものだ。よくよく見れば、強者独特のオーラというものも感じる事が出来る」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「先ほどの非礼は詫びよう・・・しかし、僕が嘘をついたのも、仕方ないことであるというのは分かってもらいたい」

「うわー、こいつすげー。何が凄かって、態度は偉そうなのに物凄い勢いで言い訳をしていることもそうだが・・・何より、スカした態度のまま、後ろに摺り足で下がり続けているのが凄い。」

よくもまあ、表情を一切変えずに、そんなことが出来るな。おそらくは、俺の奴良組幹部って肩書きにビビって、逃げ出したいが見栄っ張りな性格のせいでこんな態度をとってるんだろう。

「・・・おぬし、将来大物になれるぞよ」

「大物だと?・・・ふん、そんなことを言われても、僕は何も嬉しくはない」

苔姫の揶揄にポチ公は何を血迷ったか、ツンデレ風にそんなことを言う・・・盛大に尻尾を振りながら。いや、言っとくけど、一切褒められてないからね?

それにしても・・・ああ、分かった。こいつは狼の妖怪で、少年の姿・・・つまりは、狼少年ですね、分かります。

で、今までの感じから言っ、こいつの性格はおそらく『嘘つき』『馬鹿』『臆病』『見栄っ張り』『中二病』　　ってとこかな。・・・俺が言つのもなんだが、いいとこねえな。

「まあいいや、それで、結局本当のところお前は何なんだ？」

「・・・これは僕の問だ「速やかにプリーズ？」・・・僕は母の下から独り立ちをして、故郷から此方に出向いてきたんだ」

また何かゴチャゴチャと言いそうだったので夜王丸を再び向けてやったら、少し早口気味に語り出した。うん、この感じでいったら、たぶん嘘はつかないだろう。

「だが、此方に来たはいいものの、食べられる野生動物は少ないし、スーパーの店員には何故か付け狙われるし・・・」

「・・・要約すると、だ。地元を離れてこつちに来たが、餌を手に入れることが出来ず、腹が減って万引きをしたら見つかって、追いかけて回されてここまで逃げてきたところで倒れたと・・・そういうことか？」

俺がジト目で確認すると、ポチ公は無言で目を逸らす。・・・なんだそりゃ。結局のところ、何でもないとただのホームレス妖怪だったってことかよ。

「にしても、妖怪が万引きって・・・」

「仕方ないだろう！　何も食べてないところに、アツアツのコロツケを見れば・・・手を出すしかないだろう?!」

いやいや、その気持ちは分からなくてもいいが・・・妖怪だったら、素直に人間を襲うとかさ・・・。

まあ、奴良組のシマでそんなことすれば一瞬であぼーんだろうが、万引きなんてものよりはマシじゃないか？

「・・・人間を襲うなんて野蛮な真似、僕のプライドが許さないんだ」

万引きなんて下らない真似をする奴がプライドを語るか？・・・まあ、こいつは人間を襲いたくなかったんだろう・・・たぶん、襲うのが怖かったからだと思いが。

「はあ、つまりお前は今も腹ペコだったりするわけか？」

「・・・そ、そんなことはない『クキユ〜』・・・こともなかったりする」

こいつ、滅茶苦茶ベタな腹してやがるなあ。俺は苦笑を漏らしつつ、苔姫に目配せをする。苔姫は俺の合図に一つ頷くと、少し席を外した後、幾つか簡単に作れる食事を持ってきた。

「ほら、ポチ公。よく味わって食べるがよいぞよ」

「僕はポチ公ではない！・・・が、出された物を捨てるのはもったいないから、僕が食べてやる」

はいはい、ツンデレ乙。ポチ公は苔姫が持ってきた食事を引つたくるように奪うと、ガツガツと食べ出した。よっぽど腹減ってたんだろうな〜。

「・・・なあ、ポチ公。お前、これからどうするつもりだ？」

「僕はポチ公などではないと、何度言ったら……。特に、行くあてはない」

「ふーん。なら、ウチの組に入らないか？ たぶん、大丈夫だと思うぞ」

こいつは見たところ、嘘はついても性格的には大丈夫だとは思ってから、ぬらりひょんも許すだろう。能力は知らないが……。あれだけ大きな狼なんだから、少なくとも潜在能力は高い筈だ。

「……僕が、そんな言葉だけで、貴様らの仲間になるとでも？」

「よし、そんな憎まれ口は、振りまくってる尻尾を止めてから言おうな」

「馬鹿、止めるー!!」

あんまりにもポチ公がツンデレだから、揺れに揺れてる尻尾を捕まえて触りまくってしまう。本当は男にこんなことするのは嫌なんだが、ペット的感觉でやってしまった。……。それが駄目だったんだらう。

「（ガラッ）沖兎猫！ い、る……。？」

いきなり扉を開けて入ってきたのは、少し急いでいる風な雪麗。すぐに俺と目が合った雪麗は、しばし沈黙した後……。顔を引きつらせた。

さて、ここで今の俺の状態を確認してみよう。体勢は前屈みで、俺の手は犬耳尻尾つき美少年の尻尾をわさわさ……。うん、俺でも普通に引くと思うな。

「あ、あんたまさか、私や宮姫だけじゃ飽きたらず、こんな男の子に犬のコスプレまでさせて……。？」

「ちよっと待て雪麗！ お前は盛大に勘違いをしているー!」

確かに俺でもそう思ったかもだが、さすがに本気で引かれたくはない。だいたい、犬コスなんてもの、男にやらせるくらいなら、つららを騙してやらせる！

「ポチ公、お前からも」

「くっ、この男は、嫌がる僕に無理やり……。僕は、本当に嫌だったのに……」

「てめえ、ここでそれか!？」

嘘つきってのは分かったが、ここで裏切るとは……。確かに少し嫌がってる振りをしてたが、あんなのただのじゃれあいじゃないか! って、冷気!？

「沖兎猫……。覚悟はいい……。？」

「ば、待て、止め、ぎゃあああああああああ!!!!!」

数分後、雪麗が来てからずっとオロオロしていた苔姫の取りなしによって、雪麗の誤解はなんとか解けた。……。俺がやられている間ずっとニヤニヤとしていたポチ公には、かなり苛ついたと追記しておく。

「がふつ。で・・・急いでたみたいだったが、何の用だったんだ？」
「用・・・って、そうだった、あんたが馬鹿なせいで忘れてたじゃない！」

「ぬがあああああああ！！！」

いや、確かに俺のせいかもしれないが、それ（冷氣）は理不尽じゃないか？ ついでにそのバカ犬！ 爆笑してるんじゃないやねえよ！

「あんた、窮鼠組って知ってる？」

「窮鼠組？ んーつと・・・聞いたことある気もするが、覚えてないな」

「そいつら、昔破門されてたらしいんだけど・・・あの子の友達二人を人質に取って、三代目を継がないように回状を回させようとしたのよ」

「はあ！？」

リクオの友達って・・・まさか、カナちゃんとか清継とかのことか！？ というか、リクオが三代目を継がないようになって・・・おいおい、相当拙くないか？

「で、今どうなってるんだ？」

「あの子がまた変化して、これから出入りだそうよ。私はあんたにそれを知らせに、ここまで呼びに来たってわけ」

変化したのなら・・・まあ、人質と引き換えに回状を回すなんて馬鹿な真似はしないでだろう。最悪な状況は避けてるが・・・でも、早く救出しないと拙いか。

「そうそう、捕まってる子なんだけど・・・一人はあの陰陽師の子らしいわよ」

「ゆらが？ あいつがそう簡単に……って、レイが式神破つちま
つたんだっけ」

式神つて一度破れたら、移し替えるか修繕するかしないと使えな
いらしいからな……主力の式神が居なかつたら、例えゆらでもち
よつと厳しいか。

「ちっ、場所は？」

「一番街だけど……たぶん、もう百鬼夜行は向かったと思うわよ
？」

一番街か……ここから一番街まで、かなり距離が有るな……。
今から走っても、間に合うかどうか……って、ん？

「あゝ、ちょうどいいところに、ちょうどいい足が……」

「ふっ、ふっ、……ん？」

俺が指を指すと、苔姫と何故かボール遊びをしていたポチ公は此
方に振り返る。……お前、やっぱり狼の妖怪じゃなくて、ただの
犬なんじゃないか？

「ポチ公、俺を乗せて一番街までヨロ」

「ふん、何故僕が……」

「断るなよ？ 断ったら、誰が何と言おうと去勢するから」

「ふっ、まったく、僕の力を借りねば禄に出入りも行けないとはな」

ポチ公は俺の脅しによって、虚勢を張りつつ元の狼形態に戻る。
……卑怯と言っなかれ、俺はイケメンの男に対して容赦なんか一切
しないんだ。

「雪麗・・・お前は どうする？」

「私はもう引退した身よ、いまさら出入りに参加するつもりはないわ」

「そうか・・・じゃあ、行ってくる」

俺は最後にそう言って、ポチ公の背に飛び乗る。乗ってみて・・・おお、かなり安定感があるな。この安定感だと、走る速度の方も期待出来るな。

「ポチ公・・・帰って来たら、また一緒に遊ぶぞよ」

「ふん・・・僕は、ポチ公ではない」

そんな死亡フラグ紛いのやり取りの後、ポチ公はおもむろに走り出した。その速度は予想よりも速くて・・・うわ、すげ。

「・・・お前、意外と凄かったりする？」

「・・・ふん、五月蠅い」

まったく、ツンデレするぐらいならそんなに尻尾を振るんじゃないよ。・・・まあ、とにかく、この速度なら間に合うかな？ 待ってるよ、ゆらプラス誰か一人！

ペットを飼うには知識が必要！（後書き）

今回登場したオリキャラ、モデルとしてはTODのリオンをめちやくちやに崩したらというものです。いや、原型を留めてないような気がします。

ポチ公という仮の名前を付けましたが、まともな名前を付けようかな〜と思いつつ、そのままポチ公でもいいような・・・まったく、どうしたものか。

次話で窮鼠編を終わらせて、そのまま牛鬼編・・・と行きたいな〜。でも、リハビリ的にまた番外編を書くかもです。

恋は、突然始まるものです（前書き）

タイトルからして、あれなんですが・・・誰かが、誰かに恋します。無理やり？分かっていると、作者だって書き始めるまで予想だにしていなかった展開さ。

さて、今回の話を読む上での注意点は・・・視点の変換がいつもよりかなり多いことと、リオンネタバレロデイが多いことですかね。リオンが分からない人には、ちょっと見づらいかもです。

恋は、突然始まるものです

SIDE ゆら

「・・・うつ、・・・な、こじは!？」

不意に目を覚ましてみると、私はハムスターのゲージをデカくした感じの檻に閉じ込められた。同じゲージには、家長さんも一緒に閉じ込められてるみたいや。

なんで私はこんな所に・・・確か、奴良くんの家から帰る途中で、家長さんとまた会って、それから・・・そうや、旧鼠と戦って、負けたんやった・・・。

「よう、陰陽少女。どうだ・・・？ ネオンの光の中・・・処刑される気分は？」

ゲージの外で、趣味の悪い椅子に座っている旧鼠が、仰々しくそう言う。・・・そういや、昔ゼロ兄ちゃんが、こんな奴をナルシって呼ぶって言ったなあ・・・、って、そうやない!

「な・・・、処刑・・・？」

「そつだ・・・。あの、三代目のガキが・・・約束を破つたらな」

旧鼠の薄ら笑いに合わせて、周りにいる雑魚鼠も気持ち悪く笑つとる。生理的に受け付けんのやけど、そこは我慢して・・・

「三代目・・・？ 何のことや・・・？ 旧鼠・・・アホなことはやめるんや!! ええかげんにしい!!」

何のことかは知らんけど、私らには三代目？なんて関係ない筈やから、勘違いで私らは捕まったことに・・・たぶん、きつと、そうやとええなあ・・・。

「おい、女・・・その名で呼ぶなや。この街ではな・・・」

雑魚鼠の一匹が私の言葉に反応して、私の胸ぐらを掴んだ。くそつ、普段やったらこんな雑魚、一瞬で滅したるの、に!?

「星矢さんって呼べやー!!」

そう言いながら、鼠は私の制服をそのままの勢いで破った。私は確かに陰陽師やけど、一人の女の子でもあるわけで・・・当然、人並には羞恥心もある。

私は反射的に、体を隠すように屈んだ。その様子を、旧鼠や雑魚鼠どもが、またニヤニヤと嗤いながら見ていて・・・ヤジも幾つか聞こえてくる。

「さて・・・そろそろ時間だな。ま、来ないなら来ないでオレは構わんがな・・・」

そんな私を尻目に、旧鼠は腕時計を見ながらそんなことを言う。来るとか来ないとか・・・さっき言っつた三代目とかいう奴の何か？

でも、来ないでも構わへんなんで、一体どういう、そう思っただ瞬間、旧鼠は今までの人間擬きの顔を捨てて、醜い妖怪の本性を現した。

「知ってるか・・・？ 人間の血はなあ・・・夜明け前の血が一番ドロツとしててうめえのよ。ちよつど、今くらいのなあ？」

「いやっ、ひっ……」

旧鼠が舌なめずりをする、雑魚鼠どもがゲージの中に押し入って来た。家長さんはその脅威に小さな悲鳴を上げて……あかん、私が守らなあかんに……。

「いや……」

「へへ……オレこっちが好みだな」

……これが、妖怪。なんて、非道な奴ら……ゼロ兄ちゃんやレイちゃんとは、ぜんぜん違う。倒さないと……私は……陰陽師だから。

式神さえあれば……こんな奴ら。そんな風に思ったところで、どうしようもなく恐怖が溢れてきて……目の奥の方から、涙が滲んでくる。

「いやああああ……!!」

誰か、誰か……助けて、ゼロ兄ちゃん、助けてええええ!!

「待たせたな、ゆら！ 今俺が助けて　　って、おい、ちょ、ぬ

あああああ！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
えっと、ゼロ兄ちゃん？

S I D E ポチ公

「僕は、ポチ公などではないっ！」

・・・はっ！ 僕は一体、何を言っつて・・・まあ、誰に聞かれたわけでもないし、別に構わないか。後々、なんとなく恥ずかしくなってくるだけさ・・・嫌だな、それ。

まあ、そんなことは記憶の片隅に置いて・・・今のこの場の状況に、僕はひじょ～～～に困っている。何故、僕がそんなに困っているかというと

「ぬあああああ！！！！」

僕がちゃんと奴良組に所属した場合、不本意だが一応上司になる男が 知り合いが一人もない戦場に僕を置いて、空の散歩を楽しんでいるからだ。

慣性の法則というものを知っているだろうか？ 簡単に言えば、電車に乗っている時にブレーキがかかったりすると、前方に引っ張られるというあれだ。

僕はその辺の車以上の速度以上で走っていて、あいつが止まれと
いうから急停止したら・・・その慣性の法則で、前方に飛んでいっ
たというわけだな。

「ふっ、無様だな・・・」

とりあえず、あいつには色々と不満が有ったから、僕としてはど
こか気分がいい。まあ、馬鹿は殺しても死なないと言うし、たぶん
大丈夫だろう。問題は

「あ、あいつ、何なんだ？」

「いきなり来て、いきなり死んでいくとか・・・馬鹿か？」

「何しにきたんだ？」

「たぶん、奴良組の奴だろうな・・・たぶん。馬鹿っぽいから、自
信ないが」

ドブ臭い匂いを撒き散らしながら、チューチューと喚いている鼠
どもと・・・

「ゼロ兄ちゃん・・・いつたい、何やってるんや・・・」

「え、今の・・・是炉先生なの？」

あいつが助けようとしていたらしい少女二人と・・・

「・・・で、あいつは何なんだ？」

「化け犬か？ さっきの奴を乗せてたつてことは、奴良組の奴つて
ことだよな」

その二組の突き刺さるような視線で、所在がない僕との間に生ま
れた、微妙な空気だ。鼠どもは敵意を剥き出しにしているし、少女

たちは困惑しつつも警戒しているし……居づらいつたらないな。

本来なら、僕は少女たちを助けるために動くべきなんだろうが……こんな空気の中で僕は動けない。だいたい、なんで僕一人で鼠の群れと戦わなければならない？ 別に、僕は戦う必要はないだろう？

「というわけで、僕は帰　　」

「構わねえ、殺っちまえ、お前ら」

ポチ公は逃げだそうとした！

しかし、回り込まれてしまった！

「……貴様ら、そこをどけ」

「へへっ、それは聞けねー相談だな」

下品な笑みを見せつけたドブ鼠は、手だけを獣化させて僕に向かってきた。こうなれば仕方ない……僕も己の武器である双剣を腰から引き抜き、鼠どもに対峙する。

「目障りなんだよ。僕の目の前から……消えろ！」

「剣構えつつ摺り足で後ろに下がってるくせに、言葉だけは勇ましいな！？」

ふっ……いったい、何のことだ？ 僕は逃げたりなんか……つて、ちよっと待て、こっちに来るんじゃない！

SIDE ゆら

「・・・ねえ、ゆらちゃん・・・。あの男の子も、妖怪・・・なの？」

「そっやな・・・たぶん、やけど」

家長さんも私も、さっきまでのピンチはどこへ行ったかというように、啞然と目の前の戦いを見ている。だって・・・なあ？

「はっ、ふっ、二度と会うことはないだ、ぬあっ！ 待て！ 最後まで言わせる！」

「知るか！ さっきからちよこまかと・・・さっさと死にやがれ！」

「僕には・・・無理だ・・・」

「何なんだよお前！？」

そんな、何やら関西の人間としてツッコまなあかんような気がする発言をしながら、例の少年は華麗に逃げ続けている・・・というか、逃げしかしていない。双剣持つてるくせに、自分からは戦わんのかい！

「ふっ、僕の剣は、こんなドブ鼠を斬るためにあるんじゃないんだ」

・・・あかん、分かった・・・あの妖怪、ゼロ兄ちゃんと同類なんや・・・。たぶん、実力以上の大言壮語を吐くように魂の内から染み込んでるんやろうな・・・。

まあ、ゼロ兄ちゃんを乗せてきたってことは、たぶん私たちの敵

やないわけやし・・・ここは今の内に私も何とか脱出して、式神を取り戻して

「陰陽少女、変なことは考えるなよ？」

・・・ちつ、さすがにそこまで馬鹿やなかったみたいやな。もしかしたら、上手く脱出出来るかとも思ったんやけど・・・。そして、いったいどないすれば・・・

「おいおい、なんだこの状況は？」

そんな時に聞こえてきた、どこか呆れたような第三者の声。反射的に声のした方に振り返ってみると、そこには反重力の長髪を持った百鬼夜行を率いる男が・・・

これが、私と百鬼夜行の主との、最初の邂逅やった。

S I D E つらら

哀れ捕らわれの身の陰陽師娘は、突如現れた百鬼夜行・・・そしてそれを率いる若　　リク才様の姿に驚愕し、呆けているようです。ふふっ、正直ザマあですな！

まあ、個人的な感情は置いて・・・今一番気にしなければならぬことは、鼠たちを相手に戦ってるあの男の子のことですな・・・

・いや、逃げてるだけですけど。

あの男の子は何者なのでしょう？ 妖気を感じるし、何より犬耳や尻尾が有るから妖怪なのでしょうが・・・ああ、触ったり、引っ張ったり、モフモフしたりしたい・・・はっ！ 違います！

「化猫組よ・・・あいつらか？」

「ああ・・・憎い、ねずみどもだ」

「そうか・・・。で、あっちの方は？」

「いえ、ワシらにも・・・」

この場の状況確認のため、首無たちが化猫組当主の良太猫に尋ねているけれど・・・良太猫にもあの少年のことは分からないよう。さて、本当に何者なのでしょうか？

「ふーん・・・沖児猫、か？」

ふと、ずっと少年を観察していた若が、したり顔でそう仰られました。沖児猫様・・・そう言われてみれば、沖児猫様の関係者である可能性が高い気がします。

この場で旧鼠組との抗争があることは、奴良組の組員と旧鼠組しか知らないわけで・・・その上で陰陽師娘と家長に關係が有るのは、沖児猫様しかいないでしょう。

「でも・・・その沖児猫様は？」

「あいつのこった・・・いつも通り、馬鹿なことやっただらうよ」

ああ・・・その言葉だけで納得してしまう私は、ちょっと拙い気もします・・・まあ、沖児猫様だからいいですよね！

「星矢さん！！こ、これは!？」

「化猫組の奴らがいますぜ!!」

おっと、例の少年にばかり構っていた鼠たちが、漸く百鬼夜行に気づいたようです。此方としては別に構いませんが・・・そんなので、いいのでしょうか？

「またせたな・・・ねずみども・・・」

「何者だあ!？ テメー！ 本家の奴らだな・・・三代目はどーした!？」

若が多少挑発的に自らの存在を知らせると、若がリクオ様本人であることを知らない鼠たちは、リクオ様を出せと喚き散らします。そして、その隙に・・・

「ふっ、二度と会うことはないだろう!」

何かをやり遂げたような、そんなスッキリとした顔をして、あの少年はどこかへ走り去ろうとします。・・・本当に、あの人は何なんでしょう？

「・・・つらら」

「え?・・・は、はい! ふうー!」

そんな時に、リクオ様が私の名前を呼びました。一瞬意を図りかねましたが、すぐにそれと分かり、あの少年が走る地面を凍らせます。すると・・・

「ぬあああああああ!」

私の狙い通り、少年は滑って転けて、頭をぶつけて気絶したようです。・・・まあ、私がやっといてなんなんですが、大丈夫なんでしょうか？

「たぶん大丈夫だろ。見たところ、沖兎猫の同類みたいだしな」

どうやら私の心配を察してくださったようで、リクオ様は事も無げにそう言います。如何に沖兎猫様と同類でも、今は関係ないような気がします。・・・まあ、たぶん大丈夫ですよね！？

「そいつには色々と話聞いときてえからな・・・。起きるまで、見といてやんな」

「は、はい。分かりました」

私は急いで彼の少年の下に走り、少年を抱き上げます。小柄な体は予想通り軽くて、さほど苦勞はしませんでした。女としては羨ましいえ、なんでもありません！

と、とにかく、私は少年を安全な所に運んでから、安静にするために膝枕をします。私の体温は氷と同じなので、これだけで氷嚢代わりになるんですよ？

「さて、此方はこれでいいとして・・・」

リクオ様の方は・・・ああ、もう大丈夫なようですね。陰陽師娘たちを捕らえていた檻は破壊されて、人質はいなくなっただよう。これなら、百鬼夜行も何の気兼ねもなく戦うことが出来ます。

「私も戦闘に・・・」

参加したいですけど・・・無理ですね。この少年を介護するのも、リクオ様から与えられた任務の一つ。せめて、彼が起きるまで、は・・・？

「ん・・・ぐ、僕は・・・？」

「あ、気がつきましたか？」

どうやら、少年は気がついたようで。目を覚ますのがかなり早い気もしますが、妖怪なのでこのぐらいが当たり前なのです。

「・・・お前、は？」

「私ですか？ 私は、雪女のつららと申します」

えっと、この少年が目を見開いて言うので答えたのですが・・・何故、そんな熱い視線で私を見つめてくるのでしょうか？

SIDE ポチ公

「だから、僕はポチ公などではない！」

「ふえっ!?! な、何ですか!?!」

「あ・・・、す、すまない・・・」

いきなり僕が意味不明なことを叫んだせいで、つららを吃驚させてしまったようだ・・・まあ、僕としても、何故か叫ばなければならぬ気がしただけだな。

つらら……。彼女は僕が目を覚ました時、慈愛の笑顔で僕を見つめてくれていた。何故気絶してしまっていたのかは覚えていないが、その笑顔をみた時……。僕は、初めて恋の味を知ったんだ。

彼女の顔も着物も、あいつにこの事を伝えにきた女性に酷似していたが……。あの女性には感じる事が出来なかった胸の高鳴りが、彼女には感じ取れる。

「あ、あの〜？」

「なんだい、つらら？」

自分でも凄く意外だが、今まで出したことがないような優しい言葉遣いで聞き返した。ああ、これが恋が成せる業というものとも言うのか……。

「あなたがここにいた理由と名前を……。聞こうとも思ったのですが、先に聞かせて下さい。……。何故、そんな目で私を？」

「……。君が、僕にとってのマリアンだからさ」

「ま、マリアンって誰ですか!？」

……。さあ？ それは、僕にも分からない。勝手に口から出てきただけだからな……。まあ、時間が有る時にでも、Google先生に尋ねてみてくれ。

「うう……。やはり、沖兒猫様と同類の方のようで……」

「……。僕を、あんな馬鹿と同類にしてもらいたくはないのだが」

確かに自分でも時々、僕はちょっとおかしいんじゃないかと思うことは有るが……。さすがに、あんな奴よりはかなりマシな部類に

入る筈だ。

「えっと・・・やっぱり、沖見猫様の関係者なんですか？」

「・・・確かに、僕はあいつに奴良組に勧誘された。だが、ただそれだけだ」

まあ、あいつに誘われなければ、こうして彼女に出会うことも無かったわけだから、そこは感謝するがな・・・。

「奴良組に勧誘・・・それなら、私たちは仲間ということになりますね」

「つつ!? た、確かに・・・」

だとすれば、これから僕たちは、共に笑い共に泣き共に迷う関係になるわけで・・・。そして、最終的には職場結婚ということにも・・・なんてことだ。

「寿退社・・・いや、寿退組というのはあるのだろうか？」

「は、はい・・・?」

「ああ、気にしないでくれ。独り言だ」

僕としては、仮に結婚した場合、出来れば仕事には出て欲しくない。特にこういう荒っぽい家業だからな・・・家を守って、僕の帰りを待っていて欲しいんだ。

「えー、えっと、何故そんな幸せそうな顔を・・・いえ、もう何も言いません」

つららは何かを言おうとしながらも、すんでのところできいとどまる。はっはっは、僕としては、全て包み隠さず言ってくれてもいい

いんだがな？

「あゝ、えっと、もう大丈夫そうなので、私は戦闘に参加してきますので……」

「戦闘に参加？……ま、待て！！」

「は、はい！？」

「戦闘に参加だなんて……危ないに決まっているだろう。君がそんなことをする必要はない」

「え、いや、でも……」

僕は散々つららを説得するが、それでもつららはまだ渋っている。ええい、そんな危険な目には遭わせられないというのに……こうなったら！

「そう、つららが戦闘に参加出来ないようになればいいんだ！」

SIDE つらら

え、え？ こ、この人、いったい何を言っているのでしょうか……？ 戦闘が出来ないようにって、まさか私を戦闘不能まで倒すってことでしょうか……？

なんてこと……この少年からはお母様と同じシンデレレの気配がしていたのに、音に聞くヤンデレというやつだったとは……お母様、世界は広いです。

「さあ、つらら・・・」

む、来ますか!？ 仲間同士で争うなんて許されることではありませんが、向こうから来るなら話は別。私とて妖怪の端くれ、簡単に負けはしません!

「僕の活躍を、そこで見ていてくれ!」
「ええ・・・はい?」

理解が追いつかなかった私を置いて、少年は乱戦の中に身を投じていきました。えっと、つまり・・・自分が敵を全滅させるから私の出番はないと、そういうことでしょうか?・・・ええ、良かったです。

「でも・・・彼、ちゃんと戦闘が出来るのですかね・・・?」

最初に彼を見た時は、自分からは戦わず、ずっと攻撃を避け続けていただけのようでしたが・・・でも、双剣なんて持つてるくらいだし、戦えないことはない

「あ! あれは何だ!?」

「?!何が、があああああ!?」

「ふっ、足手まといがいなければざっとこんなもんだ」

「はああ!?」

・・・何やら、古典的な嘘で引っかけた隙を作るといって、黒田坊も吃驚の卑怯業で鼠たちを駆逐している模様。・・・というか、なんであんなのに鼠たちは引っかけてるんでしょうか。馬鹿なんですな。

「・・・まあ、一応倒しているわけですし、いいですけど・・・」
けど、何とも納得がいかない。まあ、別に私がいなくても、すぐにこの戦闘は終わると思いますが、やっぱり私も参戦しましょうか・・・と、リクオ様？

「奥義、明鏡止水“桜”」
「な、なんじゃこりゃー！」

リクオ様の業によって旧鼠は、松田優さ・・・じゃない、断末魔の悲鳴を上げながら、炎に包まれました。ええ、太〇に吠えるですね、分かります。

「その波紋鳴りやむまで、全てを・・・燃やし続けるぞ」

まあ、そんな染められてしまった私の思考をよそに、リクオ様はクールにキメます。本当に、夜のリクオ様は・・・なんと頼もしいのでしょうか。・・・我ながら、ちよつと表現がえつちい気がしますね。

「夜明けと共に、塵となれ」

リクオ様のその決めゼリフと共に、旧鼠は完全に消滅しました。他の鼠たちも組員たちが駆逐したようで、これで今回の出入りは終わりのようです。・・・私は力になれませんが。

・・・あれ、結局沖兎猫様は？

その頃、沖兎猫は

「すみませんでしたああああ!!」

「あのねえ、すみませんですんだら、ボクたち警察はいらないわけね？ 分かる？」

ぶっ飛んでいった先が交番で、そこに猛スピードで突っ込んだために職務質問なんかされていたりした。

頑張れ沖兎猫！ 負けるな沖兎猫！ 今回は出番なくてダメだったけど、一応は主人公なんだから、これからいくらでも見せ場があるさ！・・・たぶんね。

恋は、突然始まるものです（後書き）

偶には、主人公が活躍しなくてもいいじゃないか・・・え、いつものこと？ さて、何のことやら、作者には分かりません。

で、次話について。

今回と前回よりは、早く投稿出来るかなと。出来れば、また以前のペースに戻したいと思っているんで・・・UVERworldの魑魅魍魎マーチをエンドレスリピートしつつ、ノリノリで展開構成中。

現在、先の展開としては

牛鬼編：70%

四国編：50%

京都編：60%

程度ほど、やる内容は決まっていたりします。故に、その辺りの更新は速くなる筈・・・たぶん。まあ、四国編のラスボスをどうするか迷い中ですが。

で、話はぶつちぎりますが、最近のアニメで「電波少女と青春男」ってありますよね？ つい先日、漸く部屋にネットに繋がったんで視聴したんですが・・・驚いた。

何が驚いたって、ヒロインのエリオなんですけど・・・以前書いた児衣兎の設定絵と、かなり似てるんですよ。まあ、エリオの目を気

だるげにしたら、児衣鬼になると思ってもらえねば。

いぢあゝ、びっくりした。

お姉さま・・・お義姉さま？（前書き）

本当に久しぶりに、最初から決めてた感じにポポポーンと書いた気がします。まあ、大したオチが付いてなかったり、無理やり感が有ったりもしますが・・・気にしないようにして。

そして、サブタイトル・・・いつも通り、まったく思いつきませんでした。出来ればいいんですが・・・誰か、いいサブタイトル付けてくれませんか？ 今までのやつも含めて・・・駄目？

お姉さま・・・お義姉さま？

「ああ・・・疲れた。マジでブタ箱行きかと思っただぜ・・・」

旧鼠組との抗争から一夜明けて、俺は昨夜の疲れから、奴良組の大広間で寝転がっている。まさかの交番ダイブで、すわ逮捕・・・ってとこだったが、ぬらりひよんの根回しで何とか帰ってくる事が出来た。

「ふん、試しに一回入ってみれば良かったんじゃないの？」

「うう。今回は俺、何も悪いことしてないのに・・・」

先ほどから雪麗は、いつも以上のジト目で俺を非難している。確かにポカったのは俺なんだが・・・悲しくなるから、出来ればその目は止めてくれ。

「ふむ。まあ、いつものことじゃから、ワシとしては、ぶっ、爆笑したんじゃないの」

「おいジジイ、てめえも一回交番ダイブ体感してこいや」

ぬらりひよんめ、ジジイになってからは本当にギャグ要因になりやがって・・・昔からそんなこはあったけど、かつての格好良さはどこいったんだ？

「まあ、許せ。それよりも・・・そっちの子の話の話を聞かせてくれんか」

「ん？ ああ、そうだった、忘れてたぜ」

「・・・忘れるんじゃない」

俺がすっかり忘れていたことに、仏頂面のポチ公は俺を睨みつけながら不満気な声をだす。・・・いや、さっきからずっと機嫌悪かったけど、何かあったのか？

「く、何故つららはいないんだ・・・」

「つららはたぶん、学校に行つたんだろうな・・・リクオは今日休んでる筈だが」

リクオは昨日の疲れから風邪をこじらせて、今は寝ている筈だ。なのに何故行つたんだか・・・ん？ 俺？ さすがに疲れてたから、ちゃんと病欠の連絡いれたよ。

というより・・・え？ なんでポチ公がつららがないことを気にするんだ？ まさか・・・つららに惚れたとでも!? はっ、てめえにつららはやらねえぞ！

「・・・あなたにもやらないけどね」

「馬鹿な、夢の親子ど、ぬあああああああ！！」

「寝言は寝ていいなさいっ！」

ぐおおおお・・・！ 今まででも指折りの冷氣だぜ・・・。こりゃ、本気でNGパターンだな・・・。でも、俺は絶対に諦、ちよ、悪かったから、止めてくれ！

「・・・話を戻してもいいかの」

「おう・・・ぐふお・・・早く、本題に戻、・・・るうあ・・・」

俺の惨状に、ぬらりひよんや雪麗は慣れたものだが、初めてこの光景を見るポチ公は顔を引きつらせている。まあ、普通はそうだなあ・・・。

「で、結局そやつは何者なんじゃ。見たところ・・・狼、かの」
「ああ、こいつは化け狼。何でも、田舎から独り立ちしてきたが、人を襲う度胸もなくて食いつばぐれてたらしい」

その説明に、ポチ公は抗議しようとして立ち上がりかけるが・・・すんでのところでは止めた。まあ、間違いでないし、たぶん話の腰を折るのもなんだと思っただろう。

「だから、ウチの組に誘つといた・・・おっと、下の名前はポチ公な」

「だから！ 僕はポチ公ではない！」

「なるほど、ポチ公じゃの」

「納得するなああああああ！！」

おいおい。それ、一応奴良組のトップだぜ？ 俺もぬらりひよんも弄ってる自覚が有るからいいが・・・普通のヤクザだったら、かなり危ない発言だぞ？

「ま、名前のことは置いて・・・別に、構わんだろう？」

「ふむ。まあ、弄・・・もとい、なかなか見どころも有りそうじゃし、いいじゃろ。ただし、おぬしが監督するんじゃぞ」

「ん、了解」

そりゃ、俺が勧誘したわけだし、俺が面倒見るのは自然な流れだよな・・・ん？ ということは、俺の初めての部下になんのかね？・・・ふつ、来たぜ俺の時代。

「んじゃ、こいつが住む部屋は・・・俺の部屋の隣が空いてたし、そこでいいか？」

「うむ、あそこなら構「ちょっと待ってくれ！」・・・なんじゃ？」

俺とぬらりひよんがポチ公の住まいについて談義していると、そのポチ公からちよつと待ったコール。・・・んつと、今の会話に何か駄目なところが有ったか？

「まさか、つららと一つ屋根の下に僕も住めと！？・・・それは、まだ早いだろう」

「え、こいつ何言っちゃってんの？」

顔を少々赤らめてそう言うポチ公に、俺はかなりの戦慄を覚える。まさか、このイケメンにこんな中二的妄想癖が有るなんて・・・沖児猫の存在意義がヤバくないか？

「まあ、それは置いておくとしても・・・お前、マジでここに住まないつもりか？ さすがにそれは・・・」

「・・・別にいいんじゃない？」

俺が珍しくも好意で説得してやろうという時に、今まで場を静観していた雪麗が口を挟む。いったい何を・・・って、もしかして、イラついちゃってます？

「せ、雪麗？」

「いいじゃない、自分が住みたくないってんだから。私としてもね、つららを狙ってる奴をこの屋敷に住ませたくないわ」

おー・・・さすがは雪麗、明確にポチ公のアタックを牽制してやる。雪麗はつらら溺愛してる節が有るからな・・・というか、その前提だと俺も駄目なんじゃね？

「まあ、それだと・・・ミヤと苔姫に頼んでみるか。お前も苔姫は

知ってるんだし、それでいいだろう？」

「……ああ、それでいい……」

うわー、なんだこの変わり様。思いつ切りテンション下がってるな……そんなに雪麗の言葉が効いたのか？……いや、たぶん、本当はつららと一緒に暮らすのを期待してたんだろっな……バカめ。

「……義兄さま、いる？」

「ん？ レイか、なにか有ったのか？」

ポチ公の件が一段落ついたところで、大広間の襖が空いて我が義妹レイが入ってくる。この娘が自分から動いてるなんて……何か有ったとは思えない。

「今日、駅前の店で限定プリンが販売されるから、乗っかってって欲し……」

「限定プリンだと！？ いや、決して僕が欲しいわけではないのだが……」

「……なに？ この……犬？」

久々のレイのお願い？を途中で遮ったポチ公に、レイはこてんと首を傾げる。そういや、昨日は出入りに参加してなかったらしいから……初対面なのか。

それにしても、プリンが好きって……お前ずっと田舎で母親と暮らしてたんじゃないかったっけ？まあ、別に俺にとっちゃどうでもいいことだがな。

「僕は犬ではなく、ポチこ……じゃなかった、狼だ！」

「・・・おすわり」

「誰がそんなこ、おすわり〜」とうぐべあつつくおおお！
！！」

レイが普通の犬に言うようにおすわりを要求し、ポチ公はそれを拒否しようとしたが・・・レイの強化髪による殴打で、おすわりが完成した。・・・今の呻き声、生き物に出せる音なのか？

「っと、そういうことらしいが・・・他に、何かあるか？」

「いや、ワシからはもうない。どうせ、難しい話はおぬし抜き会議でやるからの」

「・・・ツッコミ入れるべきか、おい」

まあ、確かに俺にや難しい話なんて分からないし、これから有る会議には元々サボ、・・・もとい参加しない予定だったが・・・それでも、何かム力つくな。

「私からは、つららに纏わりつく虫はちゃんと見張ってなさい・・・それだけよ」

先ほどよりは幾らか機嫌が直った雪麗は、それでも少しぶっきらぼうにそう言う。本当に、つららが可愛いんだろ・・・俺の夢の親、くべしつ、・・・ごめん。

「まあ、それは・・・」

たぶんだが、大丈夫だろう。あいつの性格からすれば、つららが嫌がることはしないだろうし、ヘタレだから出来ないだろうし、何より・・・

「・・・おすわり」

「ワンっ！」

「・・・お手」

「ワン、ワンっ！」

「・・・いい子いい子」

・・・レイのやつに、完全に調教されちゃってるからな。もう完璧に犬じゃ・・・俺の初めての部下があれって・・・これって、ちゃんと治るんだろうかな？

さて、ポチ公をちゃんとこつちの世界に引き戻した後、俺はレイを背中に乗せて屋敷を歩いている。で、少し歩いた所で・・・リクオの部屋が目についた。

「ん〜つと、出かける前に一回リクオの様子を見とくか。レ

イ、いいよな？」

「・・・ん、構わない」

一応病状も気になるので、レイに確認をとってみたらすぐに了承された。まあ、普段は自分至上な感じのレイだが、ちゃんと話せば分かってくれるんだよなあ。

で、ちゃんと了解もとったことだし、すぐに用事を済ませようと、リクオの部屋の襖を開けて　　この時、部屋の中の空気を感じとるべきだったんだ。

「リクオ、調子はど　　すまん、部屋を間違えたようだ」

「ん？　あゝ、ゼロ先じゃ〜ん！」

「え？　え？　今日病欠じゃなかったの？　なんで奴良くんの家にいるの？」

リクオの部屋に入ると、どこかで聞いたような姦しい声が二つ。

順に巻紗織と鳥居夏実・・・俺が担任のクラスじゃないが、浮世絵中学の生徒たちだ。

「おお、是炉先生ではないですか！　先生も妖怪への愛によって、我が清十字団の談合に参加しに来たのですね！」

そして、清継を始めとした清十字団の他のメンバー・・・島にカナちゃん、つらら。ゆらはいないが・・・ほぼ全員集合だな。まあ、リクオのお見舞いだらうけど。

で、そのリクオはつと・・・くそデカイ氷嚢が頭に乘つけてやがる。たぶんつららの仕業だが・・・これだけデカいと、逆に体調悪化するんじゃないだろうか。

「はあ。俺はな、この家に厄介になってるんだよ。妖怪への愛では、断じてない」

妖怪なんざ、毎日嫌ってほど顔合わせてるしな〜・・・だいたい俺自身が妖怪だし。清継は物凄く落胆してるが・・・知るかと言ってやりたい。

「というかさ、結局今日はサボリってことなの〜？」

「何を言う。サボリではなく、酷使され続けていた精神と肉体へのご褒美だ」

「きゃはは、結局サボリなんじゃんか」

「いやいや、サボリなんかじゃない・・・あー、サボると言えば、昔竜二にやられた記憶が・・・。そう、だから、今日の俺はサボリなんかじゃないのさ！」

「ん？ ゼロ先・・・その、背中に引っ付いてるのってさ・・・」

そんな時に、俺の背中にいるレイに気づいた巻が、少し目を見開いて聞いてくる。あー、そうか。レイの存在知ってるのって、ゆらとカナちゃんだけだったか。

「ああ・・・俺の義妹の、レイだ」

「えー、マジで！？ ゼロ先にこんな可愛い妹がいたのかよー！」

「本当、スツゴク可愛いー！」

俺がレイを紹介すると、巻と鳥居は興奮しながらレイを観察する。まあ、普通の女子中学生の反応なんだが・・・他の奴らが付いてきてないから、自重しような。

「・・・違う。妹ではなくて、義妹」

「そうなの？ ごめんごめん。あー義妹か・・・ね、ねえ、私のこと、お義姉さまって呼んでみ・・・？」

「・・・お義姉さま？」

「なにこれ！ マジ可愛いんですけどー！」

まさかのお義姉さま発言に、巻は先ほどよりも更に興奮してキャーキャー言っている。・・・だからさ、周りが付いていけてないん

だつて・・・自重しろ？

それにしても、お義姉さまか・・・確か巻は『地震、雷、火事、お姉さま・・・』なる本を持ってたし、そっちの気が有るのかも・・・俺としては、全然有りだが。

「さあて！ 是炉先生も来たことだし、看病や義妹さんのことは置いていて、ゴールデンウィークの予定を発表する！」

・・・うん、清継は周りの空気を読むような奴じゃなかったから、自重なんてしなくて良かったみただな。まあ、欠点というべきか、美点というべきか・・・。

「へ？ ゴ・・・ゴールデンウィーク？ 週末からの？」

「そうだ！ 君たちヒマだろう！ アクティブなボクと違って！」

いやいや、普通ゴールデンウィークつてさ、毎日休みなわけだし、家でのんびりニート生活するもんだろ？ 暇でいいじゃないか・・・え？ 違うの？

「ボクが以前からコンタクトを取っていた妖怪博士に会いに行く！」

「え！？ な、何それー！？ 合宿！？」

「場所はボクの別荘もある掬眼山！ 今も妖怪伝説が数多く残る彼の地で・・・妖怪修行だ！！」

・・・ん？ 掬眼山？ それってどこかで・・・ああ、牛鬼組の本拠地か。というか、なんでそんな所に別荘なんか有るんだよ・・・あいつ、何考えてやがるんだ？

「ふむ・・・ま、俺も引率で行かなきゃならねーだろうな」

「おお、来てくれますか！」

いや、だつて行くの牛鬼組のシマだろ？ そんな所に勝手に行って死なれたら、俺のクビが軽く飛んじまう。・・・それに、別荘で優雅に過ごしてみたいし。

「じゃあさじやあさ、レイちゃんも連れて来てよ！ そしたら私のテンションちよー上がるからさ！」

「えー、レイも・・・？」

レイの性格からすれば、絶対そんな面倒な合宿なんて行かないだろ・・・。ほら、ちよつど今も、俺の背中で嫌そうなおーラを出しまくってるし・・・。

「・・・断る。そんなことより義兄さま・・・駅前に早く行かないと、限定プリンが無くなっちゃう」

「え〜？ いいじゃんか〜！」

予想通り即断ったレイに、巻がブーブーと文句を言う。まあ、気持ちは分らないでもないけどさ・・・レイを動かすには、相当な奇跡が起こらなきゃ無理

「駅前での限定プリン？・・・ああ、ウチの系列店で出しているアレか」

「・・・今、なんて？」

「君が欲しているプリンは、ウチの系列店が出しているものなのだよ。ああ、それにケーキやらシュークリームを出してるなんかの店も有ったりするね」

「・・・バカな、あれらの店を・・・」

「ふむ、どうかね？ 君が来てくれるなら、好きなだけ限定甘味を揃えるが？」

「・・・あなたが、神か・・・」

・・・やべ、奇跡が起こったっぽい。清継・・・レイを動かすとは、マジすげー。というか、系列店？・・・清継家の財力、恐るべし。ちょっと分けてくれ。

まあ、ということ、今週末は俺とレイは揃って挨拶山で合宿だ。・・・よし、明日はおやつを買い込みに行こうかな。ん？先生のやることじゃないって？・・・大丈夫、誰も俺が先生の仕事をこなしてるとは思っていない。

お姉さま・・・お義姉さま？（後書き）

さて、どうでしたでしょうか、牛鬼編への序章。個人的には、こ
こ二、三話の中では一番マシな部類かな？と思ってるんですが・・・
もちろん、オチ以外。

あと、出来れば、気づいた駄目な点があれば、教えていただけ
ら嬉しいです。その方が作者としても成長出来ますし、いいものが
書けると思うんで・・・どうか、何卒よろしく。

歴史って、うそばっかり(前書き)

今回はあまり進みませんでしたー。というか、あってもなくても大して変わらない気も・・・まあ、気にしないがベスト。

そして、今回は兎衣視点多め。

歴史って、うそばっかり

多少の不快感から、目が覚める　この間までは四月の癖に冬並みの寒さだった筈なのに、今はもう夏にさしかかっているって暑さだ。まったく、春はいつたいどこにいったんだろうか。

「・・・いや、もう昼なのか。・・・まあ、今日は休みだし、構わな・・・」

そう言いながら、久しぶりの二度寝に移ろうと再び布団を被ったところで・・・何か忘れているという引っかかりを覚えた。そう、何かの待ち合わせと、か・・・！

「やべ、擦眼山！」

急いで布団から跳ね起き、壁にかかっている時計を確認する。確か集合は朝の九時だったから、もしかしたら間に合うという希望も・・・ないな。

「もう、十時じゃねえか・・・！」

ああ、認めよう。これは完全なるお寝坊だ。一切合切何の疑いもなく、寸分の違和感すらなく・・・やべえ、自分で何考えてるか分からなくなってきた。きやがった。

「落ち着け・・・クールになれ、沖見猫」

そつだ、今さらここで慌てても何にもならない。まずは、何でこんなことになってるかの確認だ。俺は確かに昨日の夜、目覚ましを

ぶっ壊れてやがる。

「・・・そうか、五月蠅くて殴っちまったんだっか」

一度起きてから、まだ大丈夫って目覚ましを壊しちまったんだっ
た・・・そのせいで今も拳が痛いな。・・・うん、偶に有るよね、
こういう些細なミス。

というか、何で誰も起こして・・・いや、起こしてくれそうなのは
はつららだけで、つららとレイは昨日から女の子だけのお泊まり
会的なのに行ってたから、今日はいないんだっ・・・なんてこっ
たい。

「くそう、リクオは・・・」

そついや、朝早くから街の清掃ボランティアに参加して、そのま
ま集合場所に行くって言うってたな・・・くそ、良い奴ってのも厄介
だな、俺にとっては。

つららもリクオも屋敷にいないくて、俺の携帯はゆらMAXによっ
て水没したから修理中・・・そりゃ、起こしてくれる奴なんている
わけないよな・・・マジですかい。

「今から行っても、絶対電車には間に合わないし・・・」

後から電車で追いかけて行くこうにも、山の中で当てもなく一人な
んで迷うは必定。つまり、もはや手詰まり
なあんて言うつても思っただか！

「ぶっ、昔あいつに言われたっけ・・・」

こつちの世界に転生する前、名前も分からない我が友人Aが言っていた言葉 『困った時は、下僕を馬車馬のごとく使うべし』
・
・
つまり、そういうことだろ？

「ポチ公うづうづうづう！ どこにいる！」
「………五月蠅いな、何の用だ。あと、何度でも言うが僕はポチ公ではない」

急いで用意して神社に直行してきた俺が呼ぶと、ゆったりとした足取りで神社の中からポチ公が現れる。いつもの俺なら、ここで弄りモードに移るんだが……生憎、今はそんな余裕はない。

「頼む、今から滋賀にある抜眼山まで乗せてってくれ。急いでるんだ」

「断る。何故わざわざ僕がそんな所まで行「俺の秘蔵つらら写真集をやるから！」さあ、早く僕の背に乗るがいい！」

俺が交換条件を口にすると、コンマ一秒の速度でポチ公は変化した。こいつ本当に扱いやすいな……まあ、せつかく今まで苦労して盗撮してきたつらら写真集をくれてやるのは断腸の思いなんだがな！

とりあえず、なんとか足を手に入れた俺は、ポチ公の背に飛び乗り、それと同時にポチ公は猛スピードで駆け出す。ああ・・・ちゃんと追いつけるといいな？

S I D E 兎衣児

時折感じる揺れに、深い眠りから目が覚める。寝ぼけ眼のまま周りを確認すると、どうやら新幹線の中のように・・・近くの席には、清十字団の面々が座っていた。

私は自分の足で新幹線に乗った覚えはないし、きつとメンバーの誰かが乗せてくれたんだろう。まあ、わたしがそう頼んだらから、それ以外はないと思うけど。

「・・・むう、あれ・・・義兄さまは？」

「お、レイちゃん起きたんだ。ゼ口先は・・・なんかさ、集合時間になっても来なかったし、携帯も連絡着かなかったから分からなくてさ・・・ごめんね」

沙織義姉さま（何故かそう呼ぶように言われた）は申し訳なさそうに、手を合わせて謝る。・・・そうか、義兄さまは新幹線これに乗っ

てないのか……。

「……たぶん、義兄さまのことだから、起こしてくれる人もいないのに二度寝した……とか、そんなところ。……だから、義姉さまが謝る必要はない」

わたしがそう言うと、義兄さまのことをよく知る約三名（リクオ、つらら、ゆら）は、「あ……」「と遠い目をする。義兄さまの信頼って……まあ、いいけど。」

「……それに、たぶん義兄さまの性格なら……すぐに追いついてくると思う」

「追いついてくるって……新幹線だよ？ 次のに乗って来るにしても難しいし、さすがに無理なんじゃ……」

……確かに夏実の言う通り、義兄さまがわたし達に追いついてくるなんて不可能に近い。けど……義兄さまだもの、何をしても絶対に追いついてくると、思う。

「ふむ、ボクも、是炉先生ならば、必ずやボクたちに追いついてきてくれると思うよ。何しろ、是炉先生は妖怪愛に溢れるお方だからね……！」

神（清継）はそう言いながら、心酔したように拳を握りしめる。義兄さまに妖怪愛なんてものが有る筈ないけど、何で神はそんな風に思えるんだろう……謎だ。

まあ、神が思うところにけちを付ける気はない。彼は素晴らしい……極上の甘味、尚且つわたしが好きなアニメの限定グッズもくれたりした。

そんなこんなで、昨日の女子お泊まり会にも大量の甘味を提供してくれて・・・昨日はこの世の天国かと思った。まあ、だから神の言うことは極力従うつもり。

「ということで、是炉先生が追いついてきた時の為に　ボクが考えた妖怪修行『妖怪ポーカー』を続けようじゃないか!」

・・・けど、やっぱりこういうノリは面倒だ。わたしはわいわい騒ぐのって得意じゃないし、本当は遠慮したい・・・けど、神の提案だし・・・はあ。

渋々ながら、わたしはメンバーの中に入っていき、妖怪ポーカーとは名ばかりのインディアン・ポーカーに興じる。まあ、カードを特に交換しなければ、さほど面倒でもないだろうと思う。

「さあ・・・みんな、いいかな?　それで」

何回目かのカード交換の末、神が皆に問いかけ、皆も頷いて了承する。・・・リクオが13でゆらが12の時点で勝てない気がするけど・・・どうなんだろ?

「よし・・・いくぞ!　せーの!」

神の合図で一斉に皆がカードを叩きつけ・・・その強さを見て、車内を阿鼻叫喚に包む。どう考えても他の客に迷惑だけど・・・まあ、気にしない。それで、結局わたしのカードは・・・

「・・・ジョーカー?」

わたしが出したカードには、ジョーカーの文字と人の皮を被った

兎の絵が描かれていた。普通、こういう勝負にはジョーカーって抜くんじゃ・・・それに・・・

「あ、やってて気になってただけだよ、ジョーカーってどういう括りなの？」

「そうそう。普通抜くもんじゃん！」

「ふむ・・・ボクも抜いたと思っていたんだが・・・何故だろう？」

神を始めとして、わたしの正体を知らないメンバーは首を捻る。

けど、残りのメンバー・・・特にゆらは、わたしの方をじっと見つめてくる。何故なら・・・

「このジョーカー、なんて妖怪なんすか？　なんか・・・兎？　みたいつすけど」

「島く〜ん、君は本当に勉強不足だね〜。この妖怪は、あの児衣兎じゃないか！」

「ニート・・・っすか」

そう、ジョーカーに描かれているのは、児衣兎わたし。リクオはぬらりひょん、つらは雪女を引いてるあたり、このカード実は凄かったりするんじゃないのか。

「そう！　もう一枚のジョーカーに描かれている沖児猫とセットで知られている、とっても有名な妖怪さ！」

神はかなり興奮した様子で、しまじろう（前に一度呼んだら嫌な顔をされた）を指差す。へー・・・わたしって有名だったんだ・・・義兄さまとセットで。

「中二病にニート？　なにその名前え」

「ふむ、それらの現代用語の語源になったのが、彼らだと言われているんだよ」

なんと、驚愕の事実判明。わたしと義兄さまの名前の由来がそれなのに、この世界じゃ逆だとは・・・タイムパラドックスってやつだろうか。

「そもそも、沖兎猫と兎衣兔という妖怪は義兄妹であるのだが」

神はそこからわたしと義兄さまの妖怪ウンチクを語るが・・・わたしは無視する。どうせ、真実のわたし達とは違うのだから・・・そんなもの、興味なんて湧かない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そうして神の話を無視して窓の外を眺めるわたしに突き刺さる、ゆらの警戒するような視線。義兄さまと和解したらしいけど、やっぱりまだ少し抵抗があるみたい。

「であるからして、兎衣兔は沖兎猫を自分ごと巻き込んで封印し・・・」

ゆらの視線も無視していた折に耳に入った、神のウンチク話・・・なんだ、そんな話まで伝承に残ってるんだ・・・いったい、どんな脚色をされてるのやら。

「そうして、沖兎猫と兎衣兔の義兄妹は永遠に一つとなり、今でもどこかに封印されているらしい。どうかね、諸君」

「うう、不覚にも感動しちゃった」

「同じく」

神が団員に話を振ると、沙織義姉さまと夏実はハンカチを目に当てながらそう言う。・・・あれ、わたし達の話で何故感動？ ちよつと、気になってきた・・・。

「う、うっそだく・・・沖児猫様に兎衣兔が、そ、そんな切ない・・・」
「つらら、つらら！ そんなこと言ったらバレちゃうから！」

その横では、否定の言葉を口にしながらも涙を滲ませているつららと、それを必死に窘めようとしているリクオの姿が。・・・本当に、どんな脚色されてるんだろう。

「・・・まあ、いいか」

別に、わたしに何の不利益があるわけでもないし・・・人間たちが何を言おうと勝手だ。そう思って、再び窓の外に視線を戻す。すると・・・

『ポチ公、追いついた！ あの新幹線だ！』

『だから・・・僕は・・・ポチ公では・・・ない、と・・・』

『ポチ公！？ お前減速してないか！？』

『もう・・・、無理・・・』

『諦めるな！ 写真集だけじゃ駄目なら、特性つらら抱き枕もつけるぞ！？』

『う、うおおおおおおお！！！！』

・・・なんて、馬鹿げた光景が目に入った。まあ、声は基本アフレコ（正解率99.99%）だけど・・・姿は見られないんだろう

か。ちょっと靈感強かったら、すぐに見つかりそうなんだけど。

「ん？ レイちゃん、なんでそんな微笑んでんの？ なんか面白いことでもあった？」

「・・・微笑んでる？」

沙織義姉さまに言われて気づいたが、わたしは何故か無意識で微笑んでいたらしい。何を思ってわたしはそうなったのか、自分でも分からないけど・・・悪い気はしないから、まあいいか。

歴史って、うそばっかり（後書き）

最近、たまにはギャグじゃなくてシリアスやらダークやらグロやら燃え展開やらを書きたくなってきました。牛鬼編で有るかと思われたら、・・・微妙かもしれない。

ただ、四国編では確実にそれらが有る筈なので、そこまで行くことが作者の当面の目標。オレって本当はギャグじゃなくてシリアス派の人・・・だったよね？

よろしい、ならば観察だ(前書き)

まずは最初に謝っておきます・・・すみません。まさか一ヶ月近くも投稿しなかったなんて・・・活動報告で一週間とかいいながら、結局かなりの時間がかかってるし・・・本当に、申し訳ありません。

ええ、大学に入ってから遊び過ぎなのが悪いんです・・・この前なんか・・・

(深夜二時)

友人S「今からカラオケ行かね？」

周りにいた連中「うん、俺はおk」

5時まで熱唱 7時まで友人Kの部屋で談笑。自分の部屋に帰って爆睡。

(その翌日、部活終わり)

友人Y「カラオケ行きたいなー」

オレ「んー、行くか？」

友人T「おし、オールナイトで行こう」

結局、夜0時から七時間歌いっぱなし。帰ってから爆睡。

(その翌日、夜10時)

友人K & 友人S「今からゲーセン行こうぜ」

オレ「ok」

ゲーセン行く 0時になって追い出される 別のゲーセン探そう
見つからない じゃあ帰ろう 終電無い 歩いて帰る 色々有って
帰ったら7時 爆睡。

(その翌日、夜)

友人K「今からお前の部屋遊びに行くわ」

オレ「おk」

友人Kが来る 他の奴らも呼ぼうぜ 友人Sと友人Uが来る 酒飲もうぜ 朝六時まで飲み明かす 講義の時間まで爆睡。

などなど、駄目人間街道まっしぐら。そして、先週の金曜は・・・

(部活終わり)

友人T「今日麻雀やらね？」

オレ「じゃあ、他の奴らに聞いてみるわ」

友人U & 友人K「おk」

夜10時から麻雀開始 結局朝8時まで続ける 爆睡。

(翌日、夜)

友人T「よし、カラオケ行こう。もちろんオールナイトで」

麻雀メンバー+友人S「おk」

夜0時から10時までカラオケ 帰宅してすぐ爆睡。

・・・駄目だこいつ、早くなんとかしないと・・・!

よろしい、ならば観察だ

あれから、なんとか新幹線を見失う前に抜眼山についた俺たちは、合流する前に一息入っていた。さすがに、ポチ公の体力は尽きてたからな。

「大丈夫か、お前？」

「げほっ、ごほっ、……だ、大丈夫だ、問題ない。それより、例のブツを……」

「ん、本当ぐに断腸の思いでくれてやるんだからな……ありがたく思え？」

ぼろ雑巾のようになりながらもヨロヨロと手を伸ばすポチ公に、俺は懐に入れてあつた写真集を渡す。さすがに、ここまでやってもらって出し惜しみはしない。

「ふ、ふふ……僕は……！」

……出し惜しみした方が良かったんだろうか。あまりにポチ公が不気味なんだが……まあ、いいか。バックアップはとってるから、俺の損失は無いし。

「さて、と。俺はこれからあいつらと合流するが……お前はどっするんだ？」

「……僕は、少し休憩したら帰る」

「そうか。ま、俺らに合流するわけにもいかないし、そりゃそうだな」

当たり前と言えば当たり前前のことを確認して、俺はポチ公に手を

振って別れる。早いとこ合流しないと、あいつらが先に山に入って・・・それは、本末転倒だもの。

少し歩いた所で、ちょうど清十字団の奴らが乗り換えたバスから降りてくるところに出くわした。ちよつとタイミングが遅れたらヤバかったが・・・これも、日頃の俺の行いがいいおかげ？

それにしても、あいつら俺に全く気づかないな・・・まあ、移動の疲れも有るだろうから、それも当然か。ここは、さっさと俺の方から合流するでしょう。

「よう、お前ら。ちよつど良かった!」

「え・・・ゼロ先!?　なんで私らより先についてんだよ!」

「ふ、俺にかかれはこの程度の距離、瞬間移動すら可能なのさ・・・」

「・・・なるほど、ゼロ兄ちゃんは瞬間移動なんてもんが出来るんか・・・」

「ゆらちゃん!?　嘘だからね?!」

ふむ、やはりゆらの騙されやすい性格は何とかしないとな。このままだったらきつと、将来ろくでもない男(竜二とか)に騙される・・・つと、背中に違和感?

「レイ・・・乗るのは構わんが、先に言っておいてくれ」

「・・・ここが、わたしの定位置」

俺の背によじ登ってきたレイに注意するが、言葉のキャッチボールに失敗したような答えが返ってくる。ほんと、こいつはマイペース過ぎる・・・って、何だお前ら。その、心底意外そうな眼差しは。

「いや・・・なんとというか、仲良いんだな〜って思ってた」
「は？　なんでここでそうなる？」

そりゃ、仲が悪いわけじゃ無いし、背中に乗っけるってことはそ
う見えてもおかしくはないが・・・別に前にも見た筈だし、そんな
に驚くことでもないだろう。

「だって・・・ねえ？」

巻が他のメンバーに確認をとると、一様にうんうんと頷く。なん
なんだこいつら・・・まあ、いいけど。別に、どう思われようが俺
には関係ないし。

「はあ・・・ま、さっさと動こうぜ。こんな所にずっといてもなん
だろうよ」

「賛成〜。早く温泉行こうぜ〜」

俺が話題を切り替えるて言うと、巻も追隨して手を挙げる。他の
メンバーも概ね同意のようで、唯一道を知っている清継に視線が集
まるが・・・

「そんなものは夜だ！　さあ、いくよー！」

清継はどこか焦っているようにそう言い、古びた階段をさっさと
登っていく。・・・かなり不安だが、ここに来たことは有っても道
なんて分からないし・・・まあ、清継に任せておこう。

・・・で、現在夜。清継家別荘に到着したであります。飛ばし過ぎ？ いいじゃん、特に面白いことなんか無かったし。汚いオッサンに会うために一時間歩かされたことなんて、わざわざ話すことじゃないさ。

「さあ、おまちかね。この奥が特製の温泉だよ。女の子たち・・・先に思うぞんぶん入るがいい」

清継が自慢気に紹介した温泉は確かに豪華で、巻や鳥居は目を煌めかせた後、カナちゃんやつららを誘って温泉に突入していった。因みに、レイを誘わなかったのは、俺の背中で爆睡しているからである。

そして、俺がそのレイを部屋の布団に寝かせた後、外に出てみると・・・清継、島、リクオの三人が何か言い争っているようだった。リクオが喧嘩なんかするわけないし・・・何やってんだ？

「おい、リクオ・・・何してる？」

「あ、先生・・・。いえ、これから妖怪スポットを回ろうとしたのですが・・・何故か奴良くんに止められてしまった」

・・・いや、そりゃ全面的にお前が悪い。この状況で妖怪スポットに行くとか・・・馬鹿かよ。リクオの方が完全に正しい。

「はあ、清継・・・今はどんな状況だ？」

重いため息を一つついて、清継の肩に手を置く。この馬鹿には、初めからちゃんと教育してやらなければならぬようだ。

「え……いや、妖怪が出そうな夜で「馬鹿め！違うだろうが！」……!？」

俺が出した大声に、清継だけじゃなく他の二人も驚愕しているようだ。だが、ここは一番重要な所……力が入って大声になるのも当然だろう？

「今の状況とは、つまり……女子がっ！入浴しているということではないか!？」

あ、全員派手に転げやがった。うん、まあこうなるだろうとは思っていたが……だがしかし！俺はこんなことでは止まったりしないぜ！

「あ……あなた、一応先生でしょう!？そんなことしていいとでも「黙りやがれリクオオ!!」……っ!？」

——早く現実世界に戻ってきたリクオが平凡的ツッコミをしてくるが、途中で遮ってやる。まったく、やはりこいつも何も分かっていなかったようだな……。

「諸君、俺は美女が好きだ」

「いきなり何を……」

「諸君、俺は美女が大好きだ」

「え、続くの!？」

はんっ、当たり前だろう。そして俺は息を大きく一つ吸い……

「幼なじみが好きだ。

後輩が好きだ。

ツンデレが好きだ。

クーデレが好きだ。

電波女が好きだ。

巫女さんが好きだ。

ナースが好きだ。

合法ロリが好きだ。

ドジっ子が好きだ。

都会で、田舎で、

異界で、宇宙で、

過去で、未来で、

自宅で、学校で、

戦場で、司令で、

この世のどこかにいる、ありとあらゆる美女たちが大好きだ」

リクオたちの俺を見る視線がかなり痛い気がするが・・・俺は、
負けないっ！

「一列にならんだ美女たちが一斉に走って、俺の下まで来るのを妄想するのが好きだ。スタートダッシュに遅れた運動音痴が必死に走る姿を妄想すると、心がおどる」

「健気な美女の作った料理の味付けが、砂糖と塩を間違えているのが好きだ。次は間違えないと言いながら、涙を浮かべて必死に謝ってくるのを見た時など、胸が満たされるような気持ちだった」

「ツン期の長かった美女のデレが、とてつもなく不器用なのが好きだ。何も言えない状態の美女が、必死に言いたいことを何度も何度も伝えようとしている様など、感動すら覚える」

え？ 長い？ しょうがないじゃん、少佐の演説パロだもん。ぶっちゃけもうちょっと続くんだけど・・・まあ、この辺で少し略しておこうか。非常に残念だが。

「諸君。俺は美女を、天使の様な美女を望んでいる。

諸君。俺の生徒である清十字団諸君。お前たちは、一体何を望んでいる？

アダルトイな美女を望むか？

法律スレスレなロリ美少女を望むか？

子どもから大人への転換期において、輝きを増していく美少女を望むか？」

俺が促すが・・・はつきり言って、誰も賛同してくれない。普通ならここで「美女！ 美女！ 美女！」ってなる筈なのに・・・やれやれ、分かってない奴らだ。

「宜しい、ならば観察（NO・ZO・KI）だ」

「どこからそんな話になったの!？」

「何？ 今の話を聞いて解らなかつたのか？ 俺はあらゆる美女が好きで、その温泉には将来有望な美少女たちが・・・これは、戦力を分析するのが男の義務だよ」

「そんな義務なんていらない!」

まったく、何も分かっていないガキめ。俺が覗くのは美少女の裸が見たいわけじゃなくて（いや見たいけど）、そこに美少女が浸かっている温泉が有るからなのに・・・これだから素人は困る。

「だいたい、先生の癖に・・・というか、先生じゃなくても犯罪だよね!？」

「ふっ、それは俺が敗れた時のこと・・・バレなきゃ犯罪じゃないのさ!」

「無駄にそんなポーズ決めて最低な事言わないでよ!」

なんとなくジヨジヨ立ちしながら言っちゃったら、切れのいいツッコミが入ってきた。・・・ふむ、なかなか腕を上げたな。この調子なら、いずれは免許皆伝さ。

「ふ、最低だと？ 確かにお前はそう思うかもしれない。だが、他の二人はどうかな？」

俺が不敵な笑みを浮かべながら言っちゃると、リクオは「まさか!？」という風に勢いよく振り返る。二人を見ると、清継は興味なさそうな顔をしているが・・・

「し、島くん・・・？」

「ボ、ボクは我慢しな「リクオくん、私も一緒に・・・ってあれ？ なんですかこの空気」ボクは清継くんと一緒に行くッス!」
「何いーーーーー!？」

ば、馬鹿な・・・! 確かに、つららは可愛いし、つらら目当てに清継に付いていきたいという気持ちは痛いほど分かる。

だがっ! 天平の反対側に乗っているのは、女湯という名の理想郷だぞ!？ ここは涙を飲んで、此方に来るのが漢ってもんじゃないのか!？

「くっ、いいもんいいもん! こうなったら俺一人で行ってくるも

んっ！」

俺はうわーんと叫びながらその場を走り去り・・・っと、その前にすることが有ったな。一度立ち止まってリクオの側まで近づき、清継たちに聞こえないように・・・

「女の子グループの方は任せとけ。俺が見張ってるから」

「！・・・分かった、ありがとう」

それだけのやり取りをして、俺はリクオ達の下から離れる。まあ、こう言っておけば覗いてもリクオやつらには怒られないだろう・・・いや、ちゃんと護衛も目的の一つだから・・・本当だよ？

「・・・さて、確か」

ビデオカメラ・・・持って来てたよな？

よろしい、ならば観察だ（後書き）

今回の話は基本的に、ヘルシングネタを入れてみたかっただけです。・・・え？力を入れるところが間違っている？・・・はい、その通りです。

まあ、友人Sの影響で作者はヘルシングとアーマードコアのネタに汚染されたので・・・これから、意味もなく乱発する恐れがあります。ご注意ください。

あ、いつの間にかPV150万ってました。日頃のご愛読、ありがとうございます。

ま、空気が出張っても構わんがな（前書き）

どうも、連続で1ヶ月近くのブランクを空けた駄目人間です。内容は最初から決めてた筈なのに・・・どうしてこうなった。

いや、ゲーセンのアクアパツアで中の人が堀江さんだからってマルチを極めようとしたり、カラオケでネタ歌でオールするとい、止めて！ 石を投げないで！

・・・うん。次こそは、なんとか一週間更新を・・・！

P S ・サブタイトルなんて飾りさ！

ま、空気が出張っても構わんがな

SIDE カナ

「あー、来てよかったあー」

何とも言えないポーズで温泉に浸かりながら、巻さんがはちきれんばかりの笑顔でそう言う。・・・私にはあんなの出来そうもないから、ちよつと悔しかったり。

「妖怪とか全然興味ないけどオ、この別荘気に入っちゃったあー。さっすが清継くん、もう一生ついてくー！」

巻さんはそう言いながら、足でパシャパシャと水面を蹴りまくっている。何というか・・・覗きでもされてたら、かなり恐ろしいことになる気がするね・・・！

「効能とかってどーなの？ この温泉」

「くもつててこつからじゃ見えないしー」

・・・そーいえば、リクオくん・・・なんでアレ（石碑の文字）が見えたんだろ？ 目・・・悪いんじゃないのかなあ。

てゆーか。メガネかけてからリクオくん変わった・・・？ 昔は・・・もつとイタズラっぽくて・・・クラスでも目立った存在だったのに。

今は、進んでパシリとかして・・・ちよつと・・・変だよ・・・。

「あれ？ つららちゃんは？」

「そーいえば」

ハッ!? ちょっと・・・、まさか、夜に二人で・・・抜け出し!? あの娘

「私、もう出るね!」

「早ー。もつとゆっくりしていきなよー」

巻さんがそう言って引き留めてくるけど、今はそんなにゆっくりしてられない。私は一目散に脱衣所に戻り、素早く体を拭いて私服に着替えた。

で、私の勘違いだったら心底恥ずかしいので、別荘の中を軽く捜してみるけど・・・やっぱり二人ともいなかった。・・・というか、誰もいなかった。

「なんで・・・先生たちまでいないんだろう・・・散歩?」

いやいや、全員でこんな山の中を散歩って・・・、そんなことも有るんだろうか?・・・まあ、無いとは言えないかもしれない。何しろ、あの人たちだし。

「とにかく、別荘の中にはいなかったんだし、私も外に・・・」

って、ちょっと待って? こんな夜の、しかも妖怪が出るなんて言われてる山の中を、私一人で歩き回るの?・・・いや、さすがにそれはちよつと怖すぎる。

けど、だからといってここで引き下がるわけには・・・。ああ、もう・・・こんな時に、ゆらちゃんみたいに強い人がいてくれたら・・・って、あれ?

「・・・そう言えばレイちゃんって、ゆらちゃんを軽くないなせるぐらい強い妖怪なんだよね・・・?」

見た目からはそうは見えないけど、あの時なんて殆ど相手にもしてなかったし。レイちゃんが付いてきてくれたら、一応怖くはないかも・・・。

でも・・・付いてきてくれそうにないよなあ・・・。あの娘、面倒なことは絶対にしたくないってタイプだし。それに、あんまり話したこと無いし。

「・・・まあ、駄目でもともと・・・ってことで、聞いてみようかな」

というわけで、私はレイちゃんの助力を得たらいいなあ・・・と、レイちゃんが眠っているであろう部屋の前まで向かい、襦を開けた。すると

「・・・ん?」

「レイちゃん、なんでまた裸なお!?!」

襦を開けてすぐに目に入ってきたのは、布団の上で全裸の状態ノートパソコンをいじっているレイちゃんの姿。いや、レイちゃんが目当てで来た訳だから居るのはいいんだけど・・・何故にまた全裸?

「何って・・・全裸待機。これがネット世界のマナーの一つ・・・」

「この前、それは違うよってちゃんと教えたでしょ!?!」

「でも・・・それを確認したら、全裸待機は絶対にやらなきゃいけないって・・・」

「ちょ、誰がそんなデマを教えたの!？」

「水没@王子さんとか、1+1=50さんとか・・・」

「ネット住人の言うことを全部鵜呑みにしちゃ駄目えー!!」

この子、色んな意味で恐ろしい・・・! 騙されやすいとかそれ以前に、現実で言われたことよりネットを信用するとか・・・うう、私ってそんなに信用ないのかな?

「と、とにかく! 女の子がそんな格好しちゃ駄目! 誰が何と言おうと、これ絶対!」

「・・・分かった。善処する」

・・・これで、本当にちゃんと分かってくれたのかな?・・・いや、この子はまた同じことを繰り返す気がする。・・・まあ、その時は 私が、また注意しよう。

「・・・ところで、何か用？」

「え?」

ゆっくりと服を着ながら尋ねてきたレイちゃんの言葉に、一瞬何を言われたか分からなかった。けど、すぐに意味を飲み込んで・・・ここに来た理由を思い出す。

「あ、えっと・・・レイちゃん、今暇だったりする・・・?」

「・・・パソコンに保存してあるアニメを見てるけど・・・それが何?」

「え、いや、ちょっと外に行くから付いてきてくれたらな・・・とか思ってたけど、忙しいみたいだし、大丈夫だよ」

さすがに、こんな理由でレイちゃんが私についてきてくれるとは

思わない。ちょっと怖いけど・・・うん、やっぱり一人で行く。

「じゃあ、私は・・・別に、ついて行ってもいい・・・え？」

ちよ、今・・・ついて行ってもいいって、そう言った？ 私の耳がおかしくなっていないかったなら、そう言った筈・・・。一体、どういうこと？

「今のこの山は、人が出歩くには少し荷が重い・・・あなたが円環の理に導かれて逝ってしまったら・・・うん」

え、円環の理？ 何それ、っていうか何そのドヤ顔？ 何だか、そのセリフが言いたかったがためについてくるって感じなんだけど・・・いや、いいんだけどね。

「えっと、じゃあ、レイちゃん・・・ついてきてくれる？」

「だからそう言っている・・・ただし、わたしは自分では歩かない」

レイちゃんはそう言いながら、するすると器用に私の背中に登る。レイちゃんの体は驚く程軽い・・・これなら、背負ったままでもあまり体力は使わなそうだ。

「ふう。ありがとね、レイちゃん」

「？・・・それは、何に対しての礼？」

私が口にしたお礼の言葉に、心底不思議そうに尋ねてくる。私はそれに苦笑いを浮かべつつ、二人を追いかけるために急いで別荘から出て行くのだった。

SIDE 沖兎猫

ふう……。最近の中学生つてさ、やけに成熟してる感じがするんだけど……。どう思う？ いや実際、巻のあのスタイルつて、どう見ても中学生に見えないんだが。

現在俺は、露天風呂の垣根の上で絶賛覗き……。じゃなかった、風呂に入っている女子たちの護衛中。まあ、その最中に女子の裸を見てしまっても、不可抗力だよ。

「いや、それにしても……。けしからん」

巻の大人顔負けのスタイルもだが、鳥居の成長する直前という感じの体もグッドだし、ゆらのまだまだ幼い体も捨てがたい……。いや、ロリコンなわけではないが。

何というか、こういうのってエロスとは違うと思うんだよ。一種の芸術というかね？ もう、どこかの美術館に飾っておいてしまえとでも言うべきか……。

「ま、揃いも揃って美少女ばっかだしな。この中につららが入るんだし、清十字団って異様にレベルが高……」

……。はて？ 何だか一人足りないような。清十字団って女の子

は五人だった筈・・・レイなわけは無いし、あともう一人って誰だったっけ・・・（長考中）・・・

「って、カナちゃんいないじゃん!？」

おいおい、何故気づかなかったし、俺。いくらカナちゃんが空、・・・もとい、ちょこつと影が薄いつたって、あの美少女の裸た・・・じゃなかった、護衛任務を遂行するのを忘れるとは・・・!

「そもそも、何でいないんだ？ まだ入ってないってことは無いだろうし、もう上がったっていうには早すぎ・・・ん?」

あれ？ 何だかゆらが、じつとこつちの方を見つめてきてるんだけど？ 何故・・・俺の気配遮断は完璧な　　って、さっき大声上げちゃいましたもんねー!

「ヤバイヤバイヤバイ・・・巻の奴がこつちに向かって来てる・・・!」

いや、リクオの前じゃバレたらバレた時とか言っちゃったけど、実際そんなことないからね!?　ここで見つかったりしたら、原作介入何それ美味しいの? 状態だし、何より雪麗に殺される・・・!

「どこか、その辺にダンボールは・・・」

・・・あるわけないやん。というか、有ったとしてもダンボールで隠れられるなんてあの蛇の人くらいだよ。

・・・そっぴやあの人って、本来のダンボールの使い方を知らなかったらしいな・・・ええい、現実逃避するな俺。

SIDE つらら

「つらら！ 島くんを追って！」

「え！？ ま、待って下さい」

沖児猫様と別れた後、私たちは掖眼山の妖怪スポットを回って
いました。ですがその最中、いきなり清継さんと島くんが二手に別れ
てしまい、リクオ様はそう言って、清継くんを追って走り出してし
まいます。

「若！！」

だめよ！ 若の側近だから……私が離れるわけには……。で
も……私に言われたことは……命令は……

「もう！ 待ちなさい！ 島くん！」

「てめーが側近か」

「！！！」

島くんを追おうとした時に、上から聞こえてきた声。私はとつさ
に妖怪化しながら後ろに下がり、冷気を放つ。その瞬間、私のいた
場所に白銀の刃が突きたった。

私を襲った犯人は、少なくとも見た目だけは少年の姿をした……
妖怪。この山にいる妖怪ということは、牛鬼様の部下ということ、
なんでしょう……。ね。

「何・・・？ 牛鬼殿の手下なの？ バカなことよしなさい？ 私を誰だと・・・思ってるの」

下手人を睨みつけながら、普段は使わない威圧的な態度をもって呼びかける。こういう時は、下手な態度をとってはならない・・・けど、疲れるから嫌なのですが。

「・・・ああ。なるほど・・・雪女・・・、ね・・・」
「刀をおさめなさい。今だったらあなたのこと、とがめないから。リクオ様の命令で人を追ってるの。ほっといてくれる」

出来るだけ冷ややかな声を出して、牛鬼様の部下であろう少年に引くように告げる。しかし、彼は無言のまま余裕そうな表情で

「くくく・・・」

不気味な笑い声を出した。

「！？ なにがおかしい！」

「ハハハ・・・」

「なにを笑ってるの！？ あなた・・・誰に手を出してるか、わかってないよーね！！ 私の主は・・・」

あなたの所属している牛鬼組の老家、奴良組若頭のリクオ様
そう言おうとした瞬間、彼は一瞬で私に近づいてきた。

「ガタガタうるさいよ、女」

その言葉と同時に、足に酷い痛みを感じる。最初は何がどうなっているか分からなかったけれど、すぐに気づく・・・刀で、足を

えぐられているんだ。

「うっ……」

「えらそうにするな!! 問題児の側近のくせに! 本家だからって命令してんじゃねーぞ!! 牛鬼組をなめるなよ!!」

な!?! こいつ……全てを知って……

「まさか……若だと知って……!?! どうして!?!」
「フン」

少年は私の疑問を鼻で笑いながら、私の足をえぐっていた刀をぶりつけて引き抜いた。その時の痛みによって、私は呻き声を上げてしまう。

「思慮深い牛鬼様のお考えよ!!」

そう叫び、刀を左の方から薙いできた。普段の状態ならいざしらず、今の私にはまともに防ぐこともままならない。苦し紛れに繰り出した呪いの吹雪ごと押し切られ、地面に倒される。

「私が……私が、守らないといけないのに……」
「死ね」

痛みで反射的に目を閉じた一瞬の内に頭上から聞こえてくる、私の死を告げる声。もはや、これ以上私に出来る抵抗なんて、何も有りはしない。

その瞬間に思ったのは、リクオ様をお守りできないことに対する申し訳なさとな甲斐なさ。それを無念に思いながら、最期の瞬間を

ギイイイイン!!

「……え？」

頭上で聞こえた金属がぶつかり合う音に、意識が硬直する。今の音はおそらく、誰かが刀で、私を殺そうとした刀を弾いた音……だと思つ。けど……それは、誰？

「……てめえ、誰だ？」

私を殺そうとした男が、訝るような声で私を守つたであろう人に尋ねる。……そうか、この男も知らない人物なのか。……それは、いつたい……誰？

「ふん。貴様に名乗る名など、あいにく僕は持ち合わせてなどいない。第一……貴様の方こそ、いつたい誰だ？」

この、声……知ってる。この声は、本名すら知らないあの人だ。でも……なんで、あの人がここにいて、私を……助けてくれたんだろう？

「あ？ ふざけてんのか、てめえ」

「ふざけてなどいるものか。僕は貴様になぞ一切興味がないからな……ただし」

今まできつく閉じていた目を、ゆっくりと開く。すると

「つららを傷つけた代償・・・安く済むと思わないことだ」

私を庇うようにして立つ少年の後ろ姿が、そこにはあった。

ま、空気が出張っても構わんがな（後書き）

なんか1ヶ月更新しなかった間に、ぬら孫も色々有りましたね。人気投票の結果分かったり、つららの3Dマウスパッドが何故か二種類出たり、アニメ二期が始まったり……。

アニメ二期と言えば、一応一話視ときました。で、感想として・うん、一期なんて無かったんや。……こんなセリフ、言うことになるとは思わなかった。

で、ぬら孫のアニメもなんですが、今期は色々見る予定です。よって、更に更新が怠る……いや、そんなことは、きつとないさっ！

ちなみに、今期視るアニメ

ぬら孫

バカテス

神メモ

ロウきゅーぶ

ここまでは確定。ロウきゅーぶ以外は原作既読で、ロウきゅーぶ友達から借りる予定。神メモはかなり面白いと思う……アニメは、どうなんだろう？

いつか天魔の黒ウサギ

ゆるゆり

まよチキ

魔乳秘剣帖

神様ドルズ

猫神やおよろず

R 15

快盗天使ツインエンジェル

とりあえず、一番最後のはギャグだと思ってます。能登さん繋が
りだし、これで羽衣狐様を誇っ(ドベシッ)・・・

クイズと空気と黒歴史（前書き）

はい、1ヶ月ぶりの更新です。活動報告にも書いたんですが、ログインすらまともに出ていなかったもので・・・え？ 何してたかって？・・・テ、テスト勉強とか！・・・本当に、それも有りますよ？

今回は、番外編です。ええ、原作がないせいでストーリーが進められません。たぶん8月中は帰省してるので、1ヶ月はストーリー進みませんね・・・。

PS . 知ってるか？ この話考えたの、昨日の昼なんだぜ・・・
？ なんで今まで、全然更新出来なかったんだ・・・orz

クイズと空気と黒歴史

SIDE つらら

「 今日、みんなに集まってもらったのは他でもない・・・」

奴良組の屋敷の一室にて、リクオ様は神妙な面持ちで語り出し始めました。集まっている面々 青田坊、黒田坊、首無し、毛倡妓、そして私 は、息を吞んでリクオ様の次の言葉を待ちます。

「 と、本題に入る前に、みんなはこの問題が解けるかな？」
「・・・問題、ですか？」

何故、このタイミングで？ リクオ様がこれからする話と、何か関係が有るのでしょうか？ 私たちはリクオ様の言葉に従うのみですが・・・気になりますね。

「大丈夫、ただのクイズだから。 問題。三国志が元となつて作られた言葉で、優秀な部下でも規則に則って切り捨てる・・・とは、どんな言葉でしょう？」

三国志が元・・・ですか。残念ですが、私はちよつとその辺りには疎いので、解りかねますね。それはたぶん、毛倡妓も同じでしょう。二人して首を横に振ります。

「ううむ・・・、いや、さっぱり解りませんな」

「ふつ、青田坊。この程度の問題も解らんのか。常識ではないか」

「ああん！？ 馬鹿にしてんのか！」

ああ、リクオ様の話をネタに、また青と黒が喧嘩を……。まあ、これも仲がいいからこそだとは思いますが……!?

「え、えつと、リクオ、様……?」

「ん? 何かな、つらら?」

「い、いえ! えつと、その、何か、お気にでも障りましたか……?」

何だか急に、リクオ様の周りからどす黒いオーラが溢れ出して来ていました。リクオ様自体はニコニコと笑顔なんですけど……その笑顔が、とても怖いっ!

「うん? ボクが機嫌悪いようにでも見える? ははは、何ともないよ」

……ええ、そういうことにおきましよう。絶対、突っついたら駄目だと思います。私だって、まだ死に急ぎたくは無いです。

「で、首無しは解るの?」

「は、はあ。一応は。泣いて馬謖を斬る……ですよ?」

「うん、そうだね。……じゃあ、次の問題へ行こうか」

ひい! ま、まだ問題が有るのですか!? こんな何が何だか分からない空気のまま、まだ続けると!? 私のライフはもう風前の灯火ですよ!

「ふはは、だから貴様は体力馬鹿だと言っただ。もっと学をつけよ」「あん!? 悪いかよ!」

ちよつと、その馬鹿二人！ 空気読みなさいよ！ リクオ様の
空気が更に険悪になつたの分からないの？！ 沖兎猫様じゃないん
だから、空気ぐらい読みなさい！

「うん、じゃあ次の問題ね。現在の大分県の大名で、外交手腕に優
れていたとされる、キリシタンだったことで有名な人物とは誰でし
よう？」

ああ、良かった。またしても私には分からない問題です。何だか
正解したら駄目みたいな空気だし・・・これで、みんながちゃんと
空気を読んでくれれば・・・。

「若！ 若！ オレが分かります！」

「なつ、拙僧だつて分かるぞ！」

だから、空気を読めええええ！！！！

「・・・首無し、分かるんだよね？」

「・・・大友宗麟、です」

「うん、正解」

首無し・・・可哀想に。少し学が有るからつて、こんな損な役回
りを・・・。それもこれも、あの二人が空気を読めないのがいけな
いんですが。

「あー！ 若、オレだつて分かりましたのに！ 何で首無しに答え
させるんですかい！」

「ふつ、貴様に答えさせる訳がなかつた。・・・して、何故拙僧は・

・・・」

「お前達、あなた少しは空気を読め（読みなさい）！！！！！！！！！！」

「ぐはあつつつつ！！！」

とうとうリクオ様の空気に耐えられなくなって、私たち空気が読める三人組は一斉に二人を攻撃しました。ええ、私たちはよく耐えた方なんです！

「はあ、はあ、はあ・・・はっ！ いえ、違うんですリクオ様、これは・・・！」

しまった・・・！ こんなとこ見せたら、リクオ様の機嫌が更に悪くなるに決まってるじゃない！ なんとというミス、なんとという馬鹿、なんとという愚鈍・・・！

「ん？ どうしたの、つらら？ 何か有ったのかな？」

「え、リクオ様・・・」

・・・もしかして、無かったことにしましたか？ いえ、それならそれでいいんですけど・・・いや、よくないですが。

「そ、それより！ 結局これは何だったのでしょうか？ いったい・・・」

何故、こんな・・・。

「・・・あれはね、つらら。昨日、沖児猫と二人でテレビを視聴する時だった」

え？ 沖児猫様？ 二人でテレビを視聴ることなんか有ったんですかね・・・というか、これから回想に入るんですか？

昨日の晩、居間で一人クイズ番組を視ていたリクオの横に、学校から帰ってきた沖兎猫が座った。肩をコキコキと鳴らしたりして、お疲れのご様子である。

「お帰り、沖兎猫。お疲れ」

「おお、マジ疲れた。今日はマナ先生が出張でいなかったから、癒やしが無かったし・・・本当に地獄の一日だったぜ」

沖兎猫は基本的に、面倒な仕事が大っ嫌いである。普通だったら、二ト街道まっしぐらな奴だ。・・・まあ、義妹とキャラが被るので、遠慮したいのだろうが。

そんな奴が仮にも仕事を続けられるのは、原作への介入意欲と、美女を見ることによって得られるやる気のおかげなのである。本当に、自分の欲望に忠実なことだ。

「で、今何視てんの・・・って、こりゃクイズ番組か？」

「うん。沖兎猫、視たことないの？」

「あー・・・あんま好きじゃないからな」

「え？ 何で？」

「んー、この類のやつは大体同じようなことしかしねえからな。飽きる」

その言い分に、少しは理解を示すリクオだが、納得出来ない部分もある。クイズ番組は好きな部類に入るわけで、否定されるとやはりムツとなるのだ。

「自分の知識が通用するかを確かめるのが面白いんじゃないか。まあ、今は珍解答を笑うのが流行ってるみたいだけど」

「知識が通用するか、ってもなあ・・・」

「ほら、一回問題解いてみたら？ そしたら、面白いと思うから」

リクオはそう言って、テレビの方を指差す。今番組では一区切りがついて、ちょうど新しい問題が出る所のようにだ。

「えっと“三国志が元となって作られた言葉で、優秀な部下でも規則に則って切り捨てるとは、どんな言葉でしょう？”・・・だってボクにはちょっと分からないや」

問題を自分で口に出してから、リクオは照れくさそうに笑いを浮かべる。リクオはまだ中学生で、三国志についても詳しく知っているわけではない。

だから、例えばこの問題が解らなくても本来なら当然であり、非難されることも、自分に引け目を感じることもないのである・・・普通だったら。

「ああ、泣いて馬謖を斬る、か」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

一瞬、空気が凍りつく。何でもなしのように答えを言った沖見猫に、どうせ分からないだろうと思っていたリクオの思考がフリーズしたのである。

だって、「あの」沖児猫だ。確かに教師なんてものをやっているが、正規の手段で入ったわけではないだろうし、勉強も出来なければ知識もないだろうと思っていた。

だが、結果がこれだ。自分が分からなかった問題を、軽々と事も無げに答えられた・・・それは、リクオに取っては青天の霹靂としか言い様がない。

「（い、いや、沖児猫が三国志好きだけってことも・・・）ちゅ、沖児猫って三国志好きだったりする？」

「まあ、好きだろうな。無双シリーズは全部やったし。正史も演義も全部読んだ」

その返事は、沖児猫があんな長くて字ばかりのものを読んでいたのは意外だったが、リクオの心を少し安堵させた。大丈夫、あれは偶々得意分野に嵌っただけ、と。

「じゃ、じゃあ、次の問題に行こうか。“現在の太分県の大名で、外交手腕に優れていたとされる、キリシタンだったことで有名な人物とは誰でしょう？”」

この問題も、リクオには分からない。というか、一般人にはあまり分かるような問題ではない筈だ。だから、この問題は沖児猫にだって分からない

「大友宗麟か、マニアックなところ行くなあ。そっいや、こいつが西洋風に描かれた絵が有るんだけど、見たことあるか？ お前何人だよって感じなんだよなあ」

けらけらと笑う沖児猫に、リクオは目を見開く。何故？ 沖児猫

が得意なのは三国志だけでは無かったのか？ まさか、戦国時代までもカバーしていたのだろうか。

「俺こいつ一回だけ会ったこと有るんだけどさ、かなり面白い奴だったぜ。何せ、京まで嫁探しに行く奴だったからな」

「！（そ、そうか！ 沖児猫は戦国時代に生きてたわけだし、詳しいのは当たり前だ！）じゃあ、次の問題を・・・」

そうして、リクオは自分の尊厳を守るために、次々と問題を読み上げていく。それが、自分を更に惨めにさせるだけだとも気づかずに・・・。

「次の内、声優が同じキャラの組み合わせを答えよ」

「ヒカルの暮の佐為と銀魂の近藤さんだな。いや、千葉さんはマジ凄いと思う」

「くっ、UVERworldのサポートメンバーの名前は・・・」

「サックスのSEIKA。インディーズ時代は正式なメンバーだったんだが・・・」

「岡山県の近辺のみに普及している言葉、うったてとは何で使われる用語”！？”」

「習字だな。書き始めのところを、岡山ではそう呼ぶんだ。岡山県民はうったてが県外で通用しないことを知って、驚くんだよ。あと、チャラ書きとかも方言だな」

「・・・ドンダバ デンデン ヌケヌケ ドンと言えば？」

「テニミュのドタバタ ジャンゴの高級魔法だ。・・・さっきからこのクイズ、いやにマニアック過ぎやしないか？」

こんな感じでリクオは番組が終わるまで問題を続け、沖児猫はパーフェクトで正解した。そして、リクオはパーフェクトに叩きのめ

された。

沖児猫は元々マニアックなことは詳しかったし、友人Aの暗躍によりある程度の知識は溜め込まれていて・・・要するに、クイズにめっぽう強かったのである。

「やっぱ、クイズ番組はそんな好きじゃねえなあ・・・」
「うっ、うっ・・・」

リクオは決めた。沖児猫を、クイズでギャフンと言わせてやると・・・！

「とまあ、こんなことが有ったんだよ・・・」
「あの、それは、何というか・・・」

・・・ただの、八つ当たりでは？ 確かに、空気の読めない沖児猫様もどうかとは思わないでもないですが・・・。

「ということ、みんな。沖児猫に太刀打ち出来るクイズを考えてくれ」
「はあ・・・」

まあ、別に危害を加えるわけでもないですし・・・沖児猫様には

悪いですが、リクオ様のお手伝いをしましょう。私たちがお役に立つのなら、ですけど。

「これだけ人数がいれば、沖見猫様を唸らせるクイズの一つや二つ・・・」

「これだけつて、リクオ様を合わせても四人しかいないけど？」

自分自身とリクオ様を安心させる意味を込めて、半分独り言を口に出しましたが、横から首無しに口出しされます。けど・・・あれ、どういうこと？

「え？ 私、首無し、毛倡妓、青田坊に黒田坊・・・リクオ様を抜いても、五人もいるじゃない？」

「・・・雪女、忘れたのか。青と黒は・・・ほら」

首無しがゆっくり指差した先を追っていくと、私の目に入ってきたのは、全身痣だらけの上に紐でぐるぐる巻きにされて氷漬けになっている二人の姿・・・ああ、あの時あそこまでやったんですか、私たち。

「ま、まあ、三人よれば文殊の知恵と言いますし、大丈夫ですよ！？」

三人どころか四人もいるのだから、人数としては十分足りている筈なのです。・・・まあ、文殊というのが私には何だか分からないので、説得力はないのですが。

「じゃあ、どんな問題がいいか方向性を決めようか。・・・誰か、提案はある？」

リクオ様が私たちを見渡して、問いかけます。提案、と言われても・・・私にはパツと思いつくものがありません。他の二人は、何か有るのでしょうか？

「ふふふ、ここは私にお任せあれ！」

そうやって脂肪の塊をたゆんたゆんと揺らしながら立ち上がったのは、言うまでもなく毛倡妓。・・・今まで空、もとい喋っていないかったのに急にでてくるなんて、よほど自信が有るのでしょうか？

「ふつ、沖児猫様が解けない問題・・・ズバリそれは、アダルテ」
あ、却下の方向で。あの沖児猫が解けないと思えないし、ボクが無理だから「・・・」

・・・いつたい何を言い出すかと思えば、そんな馬鹿なことですか・・・。偶に出てきたかと思えば・・・それなら空気のままでもいい欲しいものですね

「・・・雪女、声出てる」

「・・・はっ！」

あ・・・いつの間にかやら、本音がポロリと口から出てしまっていましたね。

「・・・ふ、ふつ、ふふふ・・・そうよね、私は空気だもんね・・・
・どうせ、今の奴らは私みたいなアダルティな魅力なんて分からないのよね・・・」

「毛倡妓ー!？」

そんな感じで陰鬱な空気を醸し出しながら、毛倡妓はフラフラと部屋を出て行ってしまいました。その後を首無しも付いていきます。

・・・やっちゃいましたね。

「ふふふ、私なんて、私なんてえええ！」

「落ちてけ紀乃おおお！！！」

・・・紀乃って、誰なんでしょうね？

「・・・つらら、二人になっちゃったよ」

「・・・ええ。このままじゃ、文殊の知恵になりませんね」

毛倡妓も首無しもいなくなったので、残るは私とリクオ様だけです。だからといって、キャツキャツウフフなんかにはなりませんかね。

「誰か、もう一人呼んできます・・・」

「・・・うん。お願い」

さて、誰がいましたっけ？

「・・・で、児衣兔なの？」

「はい。他に、まともに役立ちそうなのがいなかったもので・・・」

他に屋敷にいたのは、納豆小僧とか3の口とかの小妖怪ぐらい。後は出払っていて無理だったし、納豆小僧には・・・ええ、任せられませんか。3の口なんて、そもそも喋られるのでしょうか？ まあ、兎に任せられるかと言えば、絶対的にNOなんです。沖兎猫様のことを分かっているのはやはりこの子だし、マニアックなことなら一部沖兎猫様以上だし。

「兎に、あなたが頼みなんだから、頑張ってね!」
「・・・何を頑張るのか分からないけど、まあ、ほどほどに」

兎に、そう言いながら、PSPの操作に没頭する。どうやら、ぎゃるげえというモノにハマっているらしく、最近では毎日深夜までプレイしている様子。・・・それで、いいのでしょうか。

「で、結局どんな問題にしようか？」
「えっと、私も少し考えてみたのですが・・・沖兎猫様も日本古の妖怪なわけですし、英語なんて苦手なんじゃないかと」
「英語・・・うん。それ、いけるかも」

リクオ様は私の提案に頷き、少し思案する風になります。こんな風に私の提案が少しでも役立つのなら、このつらら、本望でございますとも！

「ううん・・・じゃあ、英語で問題を作るとして・・・こんな感じかな？」

そう言いながらリクオ様は、何やら紙にアルファベットを書き始めます。どうやら問題を書いているようですが・・・いったいどんな問題なのでしょう？

「じゃあ、つららに児衣兔、これ解る？」

リクオ様がそう言っただけで、見せてきた紙に書かれていたのは、“CH AOS”の文字。これを、日本語に直せよってことですよな？

さて・・・分かりません（キリッ）。いえ、冗談抜きで分かりませんよ、これ。そもそも私だって日本古来の妖怪で、英語なんて出来ないわけ・・・いや、どこかで見たことあるような気がするのですが。

「に、児衣兔はこれ、分かるの？」

「・・・YES。アニメ好きでこのキャラを知らないなんて言わせない」

アニメ好きで、このキャラ・・・？ どういうこと？ これは何かの単語じゃなくて、キャラの名前ってこと？ でもそんな単語をリクオ様を使うわけがないし、だとすればそれは・・・

「ああ！ 分かりました！ つまり、そういうことなんですな！」

なるほど、そういうことですか！ 児衣兔も意地が悪い・・・それならそうと申すてくれればいいのに。最初から申すてくれれば、私だってすぐに思い出せたのに！

それから私と児衣兔は、それぞれ問題の答えを紙に書いていった。私はすぐに終わったけど、児衣兔は何やら長く書いている様・・・なんでそんなに？

「じゃあ、児衣兔から先に・・・」

「・・・了解」

私たち二人が書き終わるの見計らって、リクオ様が回答を兎衣に求める。一応自信がありますし、私からでも良かったんですが……まあいいです。

「えつと…… “エンジエロイドタイプ、愛に飢えるロリッ娘シスター、その名はカオス”……何これ？」

「……何これとは失礼な。これが答え」

「……日本語訳だと？」

「混沌」

「……分かってて、やったんだね」

「当然でありますよ」

……
……
……
……
……
……
……
……
……
……

「じゃあ、次はつららの答えを……あれ、つらら？」

「え？ い、いえ、答えは混沌なのですわ！ ええ、分かっていますとも！ だから、別の問題にいきましょうか！」

「……つらら？」

うう……、リクオ様と兎衣の視線が、痛いほど私に突き刺さってくる……。まあ、こんな露骨に反応したら、そうなるのでしようけど……。

「さあ、リクオ様、次の問だ……取った」って、ああ！」

私が渾身の笑みでリクオ様に次の問題を促した隙を狙われ、兎衣に私の答えを奪われてしまいました。駄目……あんなもの、見

られたら !

「……………餃子？」

あ、終わった。

「何故餃子…………？」

「…………つまり、CHAOS チャオズ 餃子…………ってこと、だ
と思う」

「ああ、なるほど！…………でも、チャオズって中国語じゃ…………」

あうあうあうあうあうあうあうあう。

「つらら…………」

恥ずかしさで頭がオーバーフローして、もうすぐ溶けて消えてしま
いそうな私に、児衣兔が語りかけてくる。うう…………もういつそ
消えてしまいたい…………。

「大丈夫…………可愛いから」

「見ないで、そんな優しい目で私のことを見ないでえー！！！」

児衣兔の今まで見たことないような優しい目に、私は耐えられま
せんでした。こういう時は、思いっきり笑われた方が逆にいいので
す…………。

「……………うう…………」

「…………つらら。英語は、止めよっか？」

「…………はい」

うう……面目ないのです。

「まあ、とすると……一体どんな問題ならいいんだろっね……」
「難しいですね……」

先ほどのCHAOSショックはなんとか頭の片隅に追い込んで、私とリク才様は頭を捻ります。ああ……出来るだけ早く、この話を終わらせたい……。

「……二人は今、義兄さまの解けない問題を考えているの？」

私たちの様子を見て、児衣兎が首をコテンと横に傾けながら聞いてくる。……最初にそう言ったじゃない。また、聞き流していたわけね……。

「そうだけど……何か、いいアイデアでもあるの？」

「Of course. こんなのは、とても簡単な問題でいい……」

それは、一体……！？

「……目の前に女湯があります。あなたは、どうしますか？」

「覗きます・・・　ぐべえあああああああー!!」

児衣兔が出した問題に敬礼しながら答えた沖児猫様は、いつも通りお母様に氷漬けにされて、引つ張られていきました。ええ、いつも通りの光景ですね。

「・・・ねえ、つらら。ボク思ったんだけど、もうクイズをするのは止めようか」

「・・・ええ。私も、ちょうどそう言おうと思っていたところです」

思えば　　例え沖児猫様がクイズが得意だろうと、結局は沖児猫様なわけで・・・決して、リクオ様が負けているわけではないのでしたね。

そんなことにも気づかず、こんなに悩んで、あんな黒歴史を作ってしまうなんて・・・本当に、自分の馬鹿さ加減が嫌になります。

こうして、この騒動は、何とも言えない空気と私に恥ずかしい黒歴史を作って、終了したのでした・・・。

クイズと空気と黒歴史（後書き）

作中に出て来たマニアックなクイズは、何となく知っているのを引っぱり出してきました。CHAOSの件のやつは・・・知ってる人は知ってるだろうか？

今回の内容は、さっぱり何も考えてなかったりします（オイ）。

牛鬼編の後にやる予定だった新キャラの登場を先に済ませてしまいか、座談会でもやってみるか、適当にクロスさせてみるか・・・思いつきで書き進めるので、ごめんなさい。

PS・書こうと思ってた声優ネタでカラオケが歌詞規定で駄目になったオレ涙目。

京都、ある日のティータイム（前書き）

ぬら孫のアニメを視ていたら、なんとなく思い浮かんで昨日の晩に書き始めた話。みんな大好き、羽衣狐様の視点だよ。わーい、やったー。眠い中書いてたので、訳分からないかもですね。

・・・オリキャラがないと、ギャグ要素が殆ど入らなくなった。

どうでもいいけど、今期はゆるゆりが一番好きかもしれない。あつかりーん。

京都、ある日のティータイム

此度の体に転生して・・・何年が経ったであろうか。確か八年程前であつたと思うが・・・よく覚えていない。妾には、そのようなことは些事である。

この体は、塵地藏が言うように、今までで最高の身体じゃ。妾の妖気にも馴染んでおるし、何より美しい・・・。故に、妾はこの身体を気に入つておる。不満は無い。

じゃが、未だ京を支配出来ず、晴明を再び産んでやれておらんのは、妾を酷くイラつかせる。前の転生先で妾を滅ぼした、花開院秀元の封印がまだ弱まつておらんからじゃが・・・気は急ぐばかりじゃ。

「様。お姉様っ！」

「・・・なんじゃ、狂骨の娘よ」

妾を呼ぶ声で、深い思考の縁から常世に意識を戻す。目の前におるのは、以前妾に仕えておつた狂骨の娘・・・。未だ姿は幼子ながら、時おり父よりも優秀なところを垣間見せる、愛い奴じゃ。

「いえ、急にどこか遠くを見るような眼をなさっていたので。

それより、先ほどの続きを・・・お姉様の今までの話を、聞かせて下さい！」

期待に胸膨らますようなキラキラとした眼で、狂骨は妾を見てくる。まったく、今のこの娘の様子は、妖怪というよりは、普通の若い女子ではないか。

「分かっておる、急かすでない。ほんに、おぬしは愛い奴じゃのう．．．」

今、妾はこの娘に今まで妾が転生してきた先での話をしておった。妾としては、そう面白いものではないのだが．．．さて、どこまで話したのじゃったかな？

「えっと．．．、お姉様が大坂城の淀殿に転生して、徳川と対立した．．．というところまで聞きましたっ！」

そうか、もうそのようなところか。となると、もう終盤じゃな．．．この後の展開と言えば、力を蓄えるために生き肝を集めさせて、不思議な力を持つ姫を．．．

「．．．．．」

「お、お姉様っ！？ どうなされたのですか？！ いきなり雰囲気かどす黒く．．．いえ、そんなお姉様も美しいですが．．．」

黙り込んだ妾を見て、狂骨が手を上下に振りながら慌てる。む、妾はそんなに機嫌が悪く見えたのか？．．．手に持っていたティーカップにも罅が入っておるの。

妾は自分でも気づかない程度ではあるが、苛立っていたらしい。一つため息をついて、罅が入ったティーカップをテーブルに置いて、屋敷にいる従僕を呼ぶ。

「は、はい。お嬢様、お呼びでしょうか」

「ごめんなさい、ティーカップに罅が入ってしまったの。悪いのだけれど、代えの物を持ってきてくれる？」

「分かりました。すぐにお持ちします」

従僕は少しおどおどしながらも、律儀に礼をして代えを取りに行
った。妾は余興として、この屋敷のお嬢様を演じておるわけじゃが
・・・、もしや従僕どもも、妾の畏に薄々気づいておるのやもしれん
な。

「あの、お姉様・・・。何か、私はお姉様のご機嫌を損ねるような
ことをしてしまったのでしょうか・・・?」

狂骨が、恐る恐ると言った風に妾に尋ねてくる。この健気な娘に、
余計な気遣いをさせてしまつとは・・・。妾も、まだまだだとい
うことじゃの。

「ふふ。なに、おぬしが気に病むようなことではない。少し・・・
昔の屈辱を思い出して、苛立ってしまっただけじゃ」

「昔の・・・屈辱?」

妾の返答に狂骨が疑問符を浮かべたところで、従僕が代えのカッ
プを持ってきた。それを受け取って、一口茶を啜る。

ふむ、この時代は人間どもに汚されておるが・・・この紅茶を飲
めるといふのは、悪くないことじゃと思えるの。

「・・・そう、屈辱じゃ。これは・・・おぬしの父にも関係するこ
とじゃが」

「父さまに・・・」

従僕が下がった機会をうかがって、話を続ける。狂骨は妾が口
出した父という言葉に反応して、思案顔になった。どうやら、父か
ら話を聞いてはおらんようじゃな。

「あれは・・・妾が力を蓄えるため、不思議な力を持つ姫たちを集めて、その生き肝を喰らうておった頃の話じゃ・・・」

公家の娘に、どんな病や怪我をも手を翳すだけで治すという、京一の絶世の美女・・・瑛姫という者がおった」

ああ、あの姫はまこと美しく、絶世の美女というに相応しかった。そうじゃ、一緒に連れてきておった宮子姫も、それに比肩する美しさであったの。

「妾は部下に命じ、瑛姫と他三人の姫を連れてこさせた。先ずは一人の姫の生き肝を喰らうて・・・いつも通り、それから全員の肝を喰らう、筈じゃった」

「では・・・姫たちの生き肝を、喰らうことが出来なかったのですか？」

「ああ・・・あの、今でも妾を苛立たせる、ふざけた猫のせいでのう。そう、瞼を閉じるだけで鮮明に思い出すことが出来る、あの妖・・・。姫の生き肝を喰らう直前にどこから飛んできた、わけのわからぬ男。」

「そやつの名は沖児猫。不老不死を実現した・・・、妾の今までの生の中で、最も得体の知れぬ男じゃ」

「沖・・・児、猫」

まあ、その名を知ったのはこの体に転生した後なのじゃが。奴の主であるぬらりひょんがその名を口にはしていたが、妾はその時気にもかけておらなだからな。

「あやつは大坂城に飛び込んでくるなり、妾に『俺はお前を許さねえ』・・・などと、ふざけたことを抜かしてきおったのだ」

「その、沖児猫は・・・お姉様と何か関わりが有ったのですか？」
「いや。妾も奴も、互いに顔すら知らなんだ」

妾とて、いきなりあやつにあのようなことを言われたのか、未だによく分かつておらん。何やら、姫を殺したことを怒っておるようじゃったが・・・。

「奴はわけのわからぬ戯れ言で妾を怒鳴り散らした後、妾を己が樂園、はーれむには入れてやらんと言いおった」

「はーれむ？・・・何ですか、それは？」

「妾もその当時は分からなんだが・・・ほれ、この辞書に意味が載つておる」

ちょうど近くに置いてあつたぶ厚い辞書を狂骨に渡すと、妾は紅茶をもう一度啜つた。あの辞書の厚さでは、一つの単語を調べるにも時間がかかるであろう。

この体に転生してから・・・妾はあやつが口にした樂園、というものの意味が気になって、調べた。結果として、下らぬ、妾を苛立たせるだけであつたが・・・。

「はーれむ、はーれむ・・・有つた！ えつと、意味は・・・」

狂骨は妾が紅茶を三口飲む頃に、漸く単語を見つけたようで・・・少しした後、顔を真っ赤にして怒り出した。

「な、なんて無礼な・・・！ お姉様を、侍らせる必要がないと！
？ いや、そもそも、そんなものにお姉様が・・・」

わなわなと辞書を睨みつける狂骨は、ぶつぶつと怨念の籠もつた

呪詛を発しておる。まあ、妖としては可愛いものじゃから構わんが・
・話を続けても良いのかの？

「しかも、じゃ。あやつは拳げ句の果てに、妾たちの理想・・・魑
魅魍魎が跋扈する暗黒の世界のことを、『中二病乙！』・・・の一
言で切り捨ておった」

「それって・・・」

「ああ、あやつの名と同じ・・・。じゃが、この時代では、妄想癖
が激しい者のことを揶揄する言葉のようじゃの」

妾が言い終わると、またも狂骨は怒り始めた。・・・ここから先
がこの娘の父の話なのじゃが、続けてもいいのじゃろうな？

「妾は当然、その当時は意味が分からなんだが・・・馬鹿にされた
のは分かったのでな、おぬしの父に排除を命じた」

狂骨は父の名に、ゴクリと唾を飲み込んだ。まあ、そんなに身構
えられても困るのだがな。これから話す話は・・・その、あまり聞
きたい話ではないじゃろうから。

「初め、勝負は圧倒的におぬしの父の有利で進んでおった。しかし・
・途中で奴が戦いを止め、こう口にしたのだ」

『イタい格好して、イタい笑い方して、どんな戦い方するかと思っ
たら・・・がっかりだ、そんな普通の戦い方しかないのかよ。あ
ーあ、期待して損した。』

まったく・・・キャラ付けをきっちりして来いよ、この中途半端
野郎。せめて逆立ちして戦うとか・・・それぐらいの気概は魅せる
よな』

・・・改めて、あの男がどうしようもなくふざけた奴だと解るセリフじゃ。ふむ、よくぞ妾も一言一句奴の言葉を覚えておるものじゃが・・・。

狂骨の方に目をやると、口をあんぐりと開けて唾然としておる。

まあ・・・その気持ちはイタイ・・・じゃなかった、痛いほど分かるのじゃがな。

「そうして、どんどんと奴の口車に乗せられていったおぬしの父は・・・戦うことなど出来ぬ体制にさせられ、奴の刃をその身にあびることになったのじゃ」

そこで死にはしなかったらしいが・・・鬼童丸や茨木童子が言うには、相当深い心の傷を負ったらしい。本当に・・・気の毒なことじゃな。

「じゃ、じゃあ、その沖児猫という妖は・・・、父さまの敵、ということなのですか・・・？」

「殺されたわけではないが・・・まあ、見方によつてはそうなるか」

妾がそう言うと、狂骨は顔を俯かせ・・・体を震わせておる。そして、その大きな眼には、大粒の涙が溜まっていた。

「殺すつ！ その沖児猫という妖は、この私が殺します・・・！」

「ふむ、気概がいいのう・・・。それでこそ、妾が見込んだ娘じゃ」

まあ、あやつは妾の獲物なのじゃが・・・どうせ不死じゃから死なぬじやろつし、士気を落とすこともあるまい。二人で、存分に楽しもうではないか。

「その後、沖児猫の主であるぬらりひよんがやって来た。奇想天外なことに、ぬらりひよんは瑛姫に惚れておつたらしくてな？ それで、沖児猫も大坂城に殴り込んできたというわけらしい」

まこと、あれには驚かされた。妾も、かつては人を愛し、晴明を授かったわけじゃが・・・まさか、死を省みずに助けにくるほどだとは。

「ぬらりひよんの部下も揃い踏み、場は乱戦となった。妾は沖児猫とぬらりひよんと相對し・・・結果的に、沖児猫に作られた隙をもつて、ぬらりひよんに斬られた」

体は違つても、今でも覚えているあの感触・・・抜けていく妖気。妾の記憶の中で・・・最低にして最悪の記憶じゃ。

「妖刀の能力で妖気が抜けてしまった妾は力が落ち、花開院秀元の破軍に自由を奪われている間にぬらりひよんにトドメをさされた・・・これが、前回の結末じゃ」

最後は駆け足であつたが、要点はつかんでいたであろう。憎き、妾の宿願を潰えさせた者ども・・・沖児猫、ぬらりひよん、花開院秀元。奴らの顔は、この四百年間片時も忘れたことはない・・・！

「・・・む？ どうしたのじゃ？」

話も終わつて、残った紅茶を飲み干していると、狂骨が意外そうな顔で妾を見ているのが目に入った。なんじゃ、妾は何かおかしなことを言つたか・・・？

「いえ・・・、お姉様を前回倒したのは、話を聞く限りでは、ぬら

りひよんの割合が強いと思ひまして・・・」
「ふむ？ まあ、そうじゃな」

基本的には、ぬらりひよんが妾を倒したと言えるじゃろう。他の者どもは援護をしておっただけじゃし・・・。まあ、ぬらりひよんというよりも、妖刀祢々切丸が強かっただけじゃがな。

じゃが、それが何じゃ？

「その割には、その・・・沖見猫の方を、目の敵にしているのだなあ・・・と」

「ん？・・・確かに、な」

言われてみれば、確かにそうじゃな・・・。ぬらりひよんも当然、憎んでおるのじゃが・・・沖見猫の方が、印象としては強い気がする。・・・何故じゃ？

「・・・自覚なく、奴のことばかり考えておるなど、まるで生娘の初恋ではないか。ふふっ、なるほど、恋か・・・これは、言い得て妙やもしれんな」

「お、お姉様っ！？ お姉様がそんな奴に恋なんて・・・そんな馬鹿なこと！」

狂骨は一筋の汗を垂らしながら、必死に妾の発言を撤回させようとしてくる。ふふ、こつこつのも、悪くないかもな。

「安心するがよい。何も、惚れたとかそういうものではないのじゃ」
「で、でしたら、どういう・・・」

ふむ・・・どう説明したものか。

「よいか、簡単に言っただけは……奴を、この世で一番憎んでおるのじゃ。それは理屈なく、直感的に、の」

「……!？」

「そして、それ故に妾は恋しておる……奴を、この手でいたぶることにな……」

そう、妾は奴を好いているのではなく、奴の悲鳴を上げて泣き叫ぶ姿が見たくて仕方ないのじゃ。それは……恋していると言っても、おかしいことではない。

「えーっと、よく分かりませんが……とにかく、お姉様は沖児猫を苛めて、虐めて、いじめ抜きたいんですね!？」

「ふむ、そうじゃな」

妾が奴をいたぶって、なぶって、弄んで、罵って……。そして、奴が悲鳴を上げて妾に許しを乞う姿を想像するだけで、ゾクゾクとした快感が妾を満たす。

「先ずは……無難に、奴に跪かせて、妾の靴を隅から隅まで舐めさせてやるうか」

「あ、それ楽しそうです！ 私にもやらせて下さい！」

「ふむ、では交互に舐めさせようかの。……まあ、奴がもし真正の変態なら、喜んでやりそうじゃがな」

……妾は奴の性格をいまいち把握出来ておらぬから、何とも言えんが……有りそうでならないな。もっと、奴が心底妾に屈服するようなのがいいか……。

「ふっ、それを考えるだけで、退屈を紛らわすことが出来そうじゃな」

椅子から立ち上がり、狂骨を伴ってとある部屋へ向かう。沖児猫をいたぶる算段は、これからじっくりと考えよう……。時間は、たっぷり有るのだから。

「皆、いるか……？」

部屋を開け放ち、静かに問いかけた。すると、部屋のおちこちから何かが蠢く気配がする。そう……。ここは、妾の下僕たちが潜む部屋じゃ。

「はいい……。ちゃんとおりますよ、羽衣狐様あ」

「塵地藏……。相変わらず気持ち悪いのう、お前。茨木童子はどうした？」

最初に答えた、額に巨大な目玉を持つ爺の妖……。塵地藏に、姿の見えない茨木童子について尋ねる。まあ、おそらくはアレじゃろうが。

「まあ、いつものアレですなあ」

「……。早く止めさせよ。どうせ、直にそんな場合ではなくなるのだから」

アレ、とは……。茨木童子が人の内でやっている、バンドというやつじゃ。なんでも、IBARAKIとかいうふざけた名で活動しているらしい……。何が有った。

これも沖児猫の悪影響らしいから、まこと手に負えぬ。奴が計算して何かを吹き込んだのなら恐ろしいことこの上ないが……。まあ、おそらくそれはないじゃろう。

「まあいい・・・、皆聞け。妾たちの宿願は、直に復活する」

妾の言葉に、部屋のあちこちで歓声が上がる。今まで陰陽師の奴らに封じられていた分、鬱憤が溜まっているということであろう・・・妾もじゃがな。

「じゃが、それまでにはまだ数ヶ月の時がある・・・ならば如何するか？ 決まっておる。英気を養い、闇に堕ちた京を思い浮かべるのじゃ」

そう、妾には見える・・・晴明が復活した後、闇が跋扈する地上での楽しい一時が・・・妾にとっては、それが樂園。沖児猫がいうはーれむなぞ、断じて違う。

「浮かんだその景色は、幻や妄想などではない・・・未来の景色じゃ。妾たちに、恐れるものなど何もない」

「フェフェフェ、良いですなあ・・・」

妖たちは、揃って士気を向上させた。彼らが望む世界、妾が望む日々・・・それは、もうすぐそこまで近づいておる。

待っておれ、四百年前宿願を潰した者ども。花開院、ぬらりひよん、そして沖児猫・・・。京を征服した暁には、先ず初めに貴様らから血祭りに上げてくれようぞ。

「ゆくぞ、皆・・・。妾に、この羽衣狐についてくるがよい」

京都、ある日のティータイム（後書き）

原作無いと、初めて書くキャラの口調やら思考が曖昧だなあ・・・
覚えてる限りで書いたけど、大丈夫でしょうか？

まあ、何とか形にはなっただんですが・・・最後の辺りが、自分で
も何がしたかったか思い出せない・・・。

とりあえず、次の話は一応思い浮かんではいますが・・・その次
が一切浮かんでこねえ。クロスさせようかなとか思っただけ
ど、色々有って挫折したし・・・これが、締め切りに追われる作家
の心境か。

ということ、誰かネタをください・・・いや、切実に。どのキ
ャラをメインにどこで だけでもいいんで。インスピレーションが、欲しいんだ・・・。

有り得ない現実とお弁当（前書き）

何故か、前の話の時に次書こうと考えてた話とまったく別の話が出来ていた。確かにオレは、最初の目的通りに書こうとしていたんだ！・・・何が有ったし。

有り得ない現実とお弁当

SIDE マナ先生

「ん？ 無い？・・・あれ、まさか・・・忘れた、だと・・・？」

朝の職員会議の前、私が一時間目の授業の準備をしていると、隣で是炉先生がカバンを漁りながらそんなことを言っているのが聞こえた。なんだか、ひどく焦っているみたいね。

「どうかなされたんですか？」

ちよつと気になったし、軽い気持ちで聞いてみた。すると是炉先生は、困ったように後頭部を掻きながら私に返答してくる。

「いや、それが・・・どうやら、弁当箱を忘れて来たみたいで・・・」

「お弁当箱・・・ですか？」

この中学校は、給食制ではなくてお弁当制。だから、教員も多くの人がお弁当を各自で持参している。

是炉先生も、そんな内の一人。昼休みには、色々な場所で生徒たちと一緒に食べているのを何度か見かけた。

しかも、見かける度に違う生徒とお弁当を食べているから凄い。よっぽど生徒に人気があるのかしら・・・やけに女子ばかりだった気がするけど。

「困ったな・・・仕方ない、今日はパンでも買って済みますか・・・」

もつたいない」

少し思案顔をしていた是炉先生が、諦めたようにそう言う。まあ、お弁当を忘れたのならそれが無難なところではあるか。

と、そこで、一つの疑問がふつてわいた。好奇心から、少し聞いてみる。

「そういえば・・・是炉先生のお弁当って、誰が作っているんですか？」

一度中身を見る機会が有ったが、あれは中々に素晴らしい出来映えだった。食べてはいないが、あの懲りようからして、おそらく味も美味しいに違いない。

是炉先生自身は料理出来ないって、以前言ってたし・・・。一番有り得るとしたら、実家から通つてて、お母さんが作ってくれてるとかかな？

「誰が作つてるかって、それは・・・」

ちよつと言いつらそんな顔をしつつも、是炉先生が答えようとした瞬間・・・ガラツと、職員室の扉が開いた音がした。

開いた扉の方を見た是炉先生は、答えるのを止めてポカンとした表情をする。それを見て、私がそっちを見てみると・・・

「・・・ふん、なんだか、随分とゴチャゴチャした場所ね」

白い着物を見事に着こなした、妙齡の女性がいた。しかもスツゴク美人。今まで見た中で、一番かもしれない。

あれは、誰？ 見たことないなあ・・・。迷い込んで来たって感

じはしないし、不審者でもなさそうだけど……。

「是炉先生、あれって誰なんでしょうね……あれ？ 是炉先生？」

野次馬感覚で隣の是炉先生に話しかけるが、反応がない。なんと
いうか……、パニックっている、のかな？

そんなこんなしている内に、別の先生が件の女性に恐る恐る話しかけに行く。女性は、興味なさ気な顔をしていた。

「え、えー、どちら様でしょうか……」

「私は……」

面倒くさそうに対応しつつ、職員室を見回していた女性は……私の方を向いた時、目的のものを見つけたような顔をした。

そして、話しかけた先生をどかして、此方に向かってきて……私のすぐ目の前まで来て立ち止まった。……な、何？

「……あんだ、いい度胸ね」

ひい！？ 何でいきなり見ず知らずの人にそんなことを?!
まさか、私が何かやってしまったとか……。そういえば、昨日百円が落ちてたからラッキーと思って拾ったけど、あれがこの人のだつたんじゃ……。いや、でも……。もしかしたら一昨日の「人がせつかく作った弁当忘れてくなんて、本当いい度胸してるわ」……はい？

「せ、雪麗……待て、話し合おう。話せば分かる。むしろ話さな

・・・いや、私たちの方がビツクリしてるんだけど。

「あ、有り得ない・・・。何で、あんな美人が・・・是炉先生なんかにい・・・」

「馬鹿な・・・あのふざけた輩に、あんなふつুকしい彼女がいて、私は10年間彼女無しだと？・・・いつからだ、いつから私は夢を見させられていた？」

「美人な上に家庭的で、更にツンデレ属性だとお・・・？ 羨ましすぎるう・・・！」

「死ねばいいのに。氏ねじゃなくて死ね」

そこらかしらの男性教員から、怨念の籠もったような声が漏れでる。その気持ち、分からなくもないけど・・・、教育者なんだから自重して下さい。特に最後の人。

憤怒する男性教員陣、啞然とする女性教員陣、訳が分からない二人という構図が出来た中で、職員室の外がにわか騒がしくなる。さっきの絶叫で、生徒たちが集まってきたのかもしれない。

「み、皆さん落ち着いて！ 生徒たちが集まって来ています、驚くのは分かりますが、ここは一端落ち着いて！」

さすがに危険と思つたのか、教頭先生が事態の収拾に奔走する。良かった、これでなんとか教師のメンツも

「あ、あれ？」

そんな中、職員室の扉の方から可愛らしい声が聞こえた。その声のした方に目を向けると・・・雪麗さんと同じ顔をした、制服姿の女の子がいた。

今度は男性陣と女性陣両方が、あちこちでパニックを起こしている。・・・私も、取り乱す程じゃないがパニックってたり。けど、最後の人は本当に止めて下さい。

だって、彼女が子どもってことは、少なくとも12年前には産んでるってこと。つまり、私とほぼ同年代か、もしくはもっと上ってことに・・・負けた。

「はぁ・・・。何よ、この変な空気。もういいわ。目的も果たして、さっさと帰って洗濯でもしてるから」

私が打ちひしがれている間に、雪麗さんはため息をついて、是炉先生にそう言った。

はい、そうしていただけると非常に助かります・・・色んな意味で。

「ん、分かった。気をつけて帰れよ」

「心配されなくてもそんなの　ん？」

雪麗さんは手をシツシツと振って、如何にもツンデレ風なお別れをしようとして・・・私を目に留め立ち止まり、ジト目で是炉先生を見た後、もう一度私の方を見た。

「あの・・・何か？」

私がそう聞くと、雪麗さんは呆れたように私に喋りかけてきた。

「・・・あなた、こいつが好きそうな感じの顔してるわね。・・・どうせ、付きまとわれてるんでしょ」

え、ええ！？　なんでそんな……。まあ、付きまとわれてるって言うのは大袈裟だけど、確かに時々しつこい　じゃなくて！　なんでこの人はそんなことを聞いてくるの！？　私、なんて答えれば……。下手なこと言えば二人の間に罅を入れることになるし……。ああ、どうしよう……。

「……心配しなくてもいいわよ。別に嫉妬してるとか、そんなんじゃないから。……まあ、少しも気にならないって言ったたら、さすがに嘘になるけどね」

「……え？」

「長い付き合いだし、性格ぐらい把握してるわ。だから、あんたみたいな美女、こいつは見逃さないって分かるのよ」

えっと、それ……。どう反応すればいいんでしょう。

「まあ結局、私が言いたいの……こいつが嫌になったら、思いっきりぶん殴りなさいってことね」

「え、は、はあ……」

「ま、それが出来ないなら私に言ってね。　三日ほど冷凍してやるから」

「ひいひい！　止めてくれ雪麗！」

雪麗さんは冷たい微笑みを浮かべ、是炉先生は身を抱えて本気っぽい悲鳴を上げる。今のって……。比喻、よね？

「あんたが何もしなけりゃ、私だって何もしないわよ」

「なるほど、正論だな。　だが断る！　美女を前にして何もしないなんて、神が許しても俺の矜持が許さない！」

「……今日、早く帰って来なさいね」

「……うん、分かった」

「・・・な、何なんだろ、このカップル。こんなこと言いあつてくせに、お互い信頼しあつてゐるみたいだし・・・、訳がわからないよ。」

「ま、そういうことよ。じゃ、また機会が有つたら会いませよ。」

雪麗さんはそう言い残して、スタスタと歩いて、堂々と扉を開け放つて出て行つた。・・・なんか、嵐みたいな人だったな。

「えと・・・それじゃ、私も!」

その後、娘のつららちゃんも職員室から退出した。顔はそつくりだけど、性格はあんまり似てないみたいね・・・。

「・・・じゃ、俺も授業有るんで・・・」

そう言つて、是炉先生も退出しようとしたところで・・・

「ちよつといいかな?」

男性教員陣に、退路を阻まれた。

「な、なんでしよう・・・?」

「ちよつとOHANASHIが有る・・・こっちに来て貰おうか」

「いや、俺これから授業・・・」

「君より適任はいくらでもいる。・・・言い訳はそれだけか? じゃ、行こうか」

「いや、ちよ、待つ、誰か・・・」

その言葉を最後に、是炉先生の姿は見えなくなり・・・どこかで「ぎゃあああああああ！！！」という悲鳴が聞こえたような気がする。

・・・私、ここの教師辞めようかな。

有り得ない現実とお弁当（後書き）

この話、適当に千〜二千字ぐらいの小ネタを幾つか纏めて一話にしてやるうと思って書いていたら、いつの間にか四千字を超えていたという。

そのためか、少し淡々と進んでいった感が……。もちっと膨らませてみても良かったかもですね。

次は、何の話になるだろう……。今のままで行けば、懲りずに小ネタ集に走ろうとして、また短い一話になりそう……。

初心者には分からのです(前書き)

今回ののは色々微妙過ぎるんで、本当はお蔵入りしようかな〜って思ってたんですが、もったいないし投稿しておきます。

正直、今回の分かる人少ないんじゃないかな・・・ノリで読むしか無いよ。

あ。PV2000000、ユニーク2000000超えました。ありがとつございます・・・ただし、何にもないッ!!

初心者には分からのです

場に、何とも言えない緊張が走る。そんな重たい空気の中、俺は手を伸ばし 最後の一つを己の袂へ入れた。

それは、俺が欲しかったモノ……。今となっては遅いとも言えるがしかし、これで俺はまだ戦える。

だが、何かを得るためには何かを捨てなくてはならない。それは今の状況も同じ……。だが、俺は何を捨てればいいんだ!?

「……………」

俺は、場にいる俺以外のハゲタカどもをチラッと見る。

ぬらりひよんは飄々として諦めた振りをしているが、俺にはあれがフェイクだと見てとれた。奴め……。狙ってやがるな。

で、レイの奴は……。分からん。今まで観た限りでは、たぶん俺と奴の狙いは違う。なら、あいつは大丈夫、か……?

最後に、つらは……。片目を閉じて、ジッと俺を見つめてくる。……チクシヨウ、可愛いじゃねえか!

「早く捨てちまいな。ワシ、これでも短気じゃからな……。?」
「うるせえ、くそ爺。俺の時間は俺のものだ。誰にも邪魔させねえ」

だが、確かに早く捨てなければならぬのも事実。俺が捨てなければ、俺たちは永遠にこの闘いを終わらせられない。

で、だ。問題となってくるのは、俺が勝ちを拾いに行くか、勝ち

は無くとも負けない戦を演じるか、そこだけ。

・・・ふ。その選択肢で、俺に逃げの一手なんか有る筈もないっ！

「くらいやがれ！　これが俺の、勝利の方程式だああああ！！！」

引かない、逃げない、省みない！　それが俺の道ロード！　そして、俺が得た答えは

「「「「ロン」「」」」」

トリプルロンを食らう運命だった。

「いや、そこで五筒は無いじゃろ」

「・・・義兄さまなら出すと思つてた」

「あの、すいません・・・。跳ね満なんて上がってしまつて・・・」

三人からいつぺんにロンされた俺は、現在絶賛弄られ中。・・・俺だつて分かつてたさ、ここは白切りだったことぐらい。　しかし！　これが俺のロード！　逃げることなど出来る筈も無かつた！

「馬鹿じゃな」

「・・・バカ」

「・・・あつあつ」

五月蠅い貴様ら、人の戦い方にケチなんてつけるんじゃないっ！
・それはそうとつらら、お前はどつしようもなくかあいいのでお
持ち帰りいいい！

「・・・義兄さま、雪麗が買い物から帰って来たら報告するからね
「済まなかった。黙っていてくれると非常に助かる。なんなら、お
前の欲しい物を何でも一つ買ってやるから」

もちろん、綺麗な土下座をかましなからである。プライドなんて
下らないもの、とつくの昔に捨てました。痛いのは大嫌いなんです。

「・・・ペンタブの、一番高いやつで」

「ちょ、おま！ あれ意外と高いんだぞ！」

「何でもいって言ったのは・・・義兄さま、でしょ？」

レイは天使のような微笑みで、悪魔の宣告を叩きつけてくる。く
そ・・・俺の今月の給料が飛んでいく・・・。

「ま、そんなのはどうでもええから・・・さつさと席に戻んな。こ
のまま、決着をつけようじゃねえか」

いい加減続きを始めたのか、しくしくと涙を流す俺に、牌を一
つ持って片膝を立てたぬらりひょんが、ニヤリと嗤いながら急かし
てくる。・・・うぜえぜ。

「俺はお前と違って、万引きも食い逃げも出来ないんだよ。そう、
金が無いんだ！」

「知らんわ」

酷い。少しぐらい恵んでくれよ。俺、教師になってからの給料、一回も自分用に使ってないんだぜ？・・・まあ、俺がまいた種が原因なことが多いけど。

「ま、いいか。ここで勝って・・・憂さを晴らさせて貰おうかつ！」

この、第一回チキチキコスプレ麻雀大会は、文字通り、敗者はコスプレさせられて写真撮影するというルール。勝てば天国、負ければ地獄の世界だ。

爺のコスプレなんざ、頼まれても見たくないが（面子いなかったんだよ）・・・つららのコスプレだけは、何が何でも見なければならまい！

「俺の親番は流され、現在最下位だが・・・ここから勝ってこそ、俺の強さとスター性が証明されるんだよおおお！！」

いくぜ、勝負　　！

ここからは、ダイジェストの会話でお楽しみ下さい

「ふっ、見えた！　これが俺の逆転の一手！　いくぞ、立直^{リーチ}！」

「・・・すいません、それロンです」

「なにiiiiiiiiiiiiiiii!？」

「ロンじゃ。立直、一発、ドラ3・・・。ふっ、満貫じゃな」

「な!?!　てめえ、いつ立直なんて・・・」

「ふっふっふ。ここからは、ステルスぬらの独壇場じゃ！」
「それ、どこの咲!？」

「今こそ、左目の封印を解く時……!」
「な!？ ば、馬鹿な……。その能力は、風越の部長の……。何故、つららが!？」

「なるほど……。中の人と同じほっちゃんだから……」
「それだけで能力使えんの?!」
「沖児猫様、それ、ロンです!」

「嘘だ……。国土無双じゃないと、テンパイすら出来ないなんて……」

「……ツモ。海底模月」
ハイテイラオユエ

「なん……。じゃと……。三連続で、海底……。?」
「それ衣の能力だろ! つららは百歩譲っても、お前に何の関係性も無いじゃん!」

「……。あのリボン、兎みたいだから」
「それだけの理由で!？」
「……。あ。義兄さま、それロン」

「ふっふ……。ここまでだ」
「な、何か、沖児猫様の雰囲気が……」
「ここまでいいのが揃った以上、俺の勝ち揺るぎねえ……。もう、何も怖くない! テイロ・フィナーレ(立直)!」
「……。沖児猫様」
「……。哀れじゃの」

「それが、死亡フラグだと気付くべき」
「……ロン」
「ノオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

そして。

「うっ、うっ……酷い、こんなの……あんまりだよ……」

最終結果。ぬらりひよん55000点、つらら78000点、レイ67000点。そして俺は……100000点。飛び終了無しの結果、ここまで搾り取られてしまった……。

……で、当初のルール通り、俺はコスプレ中……。うう、こんなの着たくなんて無かった……。つららのコスプレ姿が見たかったのにいいいい！！

「はん、おぬしが言い出したことじゃろ」

いや、そうだけど……。だって、負けると思わなかったんだもん。鳴きの中二病の異名を有していたこの俺が……。

「あの、その……その格好、大変似合っておいでですよ？」

俺が打ち拉がれているのを見かねたのか、つららが優しくフォローしてくれる……。つららは優しいね、けど、そのフォロワーの方はどうかと思うんだ。

だってさ、今俺がコスプレしてんの……。ばいきんまん、だぜ？ そんなのが似合っても、何も嬉しくなんてねえよ……。つか、何故にはいきんまん？

「ま、有りじゃないか？」

ねえよ。

「……義兄さまにはやっぱり、アンパンマンの方が良かったか・
」

いや、そつちもねえから。

「……つか、他のコスと差が有りすぎじゃねえか？」

つららが着る予定だったのは、ひぐらしの羽入コス。いや、実に素晴らしいセンスだ。これを羽入に着せた奴 確か陸だったか？
とは、一晩語り明かせそうだ。

レイのというと、リリカルなのはのフェイト（小学生バリアジヤケットver）。これは本人たつての希望だ……俺としては、そこで何故なのはさんじゃないのかが非常に気になるところである。
別にどうでもいいが、ぬらりひよんのは……スネークコス……
・これはあれだな、大塚違い。まあ、本当にどうでもいいことだからツッコまないが。

で、このコスを用意したのが

「んー……、やはりイマイチですね」

最近現代かぶれが激しいミヤである。なんとこの美女、お手製でコスを100着近く作っているのだ。まあ、自分では着ずに、苔姫やポチ公に着せてるみたいだが。

「やはりって……。そう思ったのなら、止めてくれよ……」
「羽が少し気に食わないですね……」

そっちかよ！ 俺に似合わないとかじゃなくて！？ 逆にばいきんまんコス似合ってる方が嫌なんだからな？！

「はぁ……。可愛いのに……」

「よし、明日は一緒に眼科に行こうか」

「？ 別に視力は問題ないですよ？」

いや、少なくとも美的センスはおかしいと思う。天然か？ 天然なのか！？

「まあいい……。次こそ勝利して、つららの羽入コスを拝んでくれる！」

そうやって、俺が拳を握りしめながら決意を新たにしていて……。ぬらりひょんがわざとらしく一つため息をついて、喋りだした。

「何を言っとなるんじゃ。おぬしはもう何も失うものが無いんじやから、参加出来んに決まっとなるじやろ」

「……。え、マジ？」

「マジじゃ」

ちょ、それは無いだろ！？ 俺だって、今ちようど気合いを入れ直して、ここから本番……。ってとこだったのに！

「……。じゃ、これで今日は終わりってことで。わりと楽しかった。……義兄さま、ちゃんとペンタブよろしくね」

「では、私も……」

いや、ちょっと待てお前ら！ いい子だから、大人しく座っててくれ！ まだ、逆転の一手が無い訳じゃないと思うから！

くそ、この状況をいつたいどうすれば・・・！ 何かないか、何、か・・・。

「・・・あー、その手が有るか」

「・・・？ 何でしょう、是炉様？ 何故、私を見てそんなに笑ってるのですか？」

うん、それはね・・・

「とまあ、簡単なルールはこれぐらいだ。・・・何か、分からないことや気になることは有るか？」

「正直、分からないことだらけなのですけど・・・、先ず、何故私が麻雀をすることになったのかが知りたいです」

それはだね、俺の代わりにミヤが面子に入れば、何の問題もないからだよ。・・・いや、むしろこれは、ミヤが負けても俺には得しか無いんじゃない？

「・・・沖見猫、宮姫が負けたら、おぬしにも何か罰ゲームじゃからな」

「なして?!」

「言わんでも分かるじゃろ」

ぐ・・・ま、まあ、ミヤが勝てば、何の問題もないわけだし・・・それに、たぶん大した罰じゃない・・・といいなあ。・・・有り得ないな、うん。

「・・・えと、これが八索でこれが・・・何でしたっけ？」

やべえ、勝てる気がしねえ。

・・・ま、まあ、負けたとしても、ミヤのコスプレが見れるということでモチベーションを保とう。一応頑張つて、ミヤを勝たすように努力はするが。

「確認するが、基本的にミヤが考えて打って、俺がそのアシストをする・・・ってことでいいんだよな？」

「ああ。だが、口の出し過ぎは駄目じゃ。どうしても・・・という時だけとする」

なるほど、把握した。つまり、致命的なこと、チャンスな時にだけ発言おっけてわけね・・・。嘘をついてもすぐにバレるだろうし、俺の心情が許さねえ。

・・・ということとは、このルールは非常に俺たち不利だと言える。麻雀は捨て牌から相手の待ちを予測する・・・ある程度の域までいくと、初心者には少し厳しい。

その点、この場にいる奴らはプロだ。例のチート技は置いといて、俺以外誰も満貫以上に振り込んでいない・・・お、俺だって、

危険と思ってたんだからね！

「・・・ちっ、爺・・・分かっててこの勝負受けやがったな？」

俺の問いかけに、ぬらりひよんは答えないが・・・その顔からして、自分の勝ちを確信しているのだろう。

・・・ふっ。だが、お前は気付いていないようだ。その、勝ちを確信しているというのが・・・負けフラグだということに！

「いくぞ、ミヤ！ 準備は万全か！」

「えと・・・、はい。平和はちゃんと覚えました！」

よし、平和さえ覚えておけば、後は勢いで何とかならないこともない！ 勝てる確率が高いとは言わないが・・・全力を、尽くすのみ・・・！

「麻雀、^{デュエル}開始　！」

あれから、死闘が続いた。

ぬらりひよんのステルスがつららに破られたり、レイが飽きて適当に打ち始めたり、つららの独壇場が始まったり・・・そんな中、

ミヤはよく食らいついたんだ。

・現在の点数

1位 つらら 40000点

2位 レイ 32500点

3位 ぬらりひょん 23000点

4位 ミヤ 4500点

・・・だが、やはり限界というものはある。その結果がこれだ。まだ、逆転が可能な点差とは言えるが・・・オーラスでこれは、厳しいとしか言えない。

「すみません・・・是炉様。私、お役に立てなかったようです・・・」

「・・・ふっ、まだ諦めるには早い。ここから逆転してこそ、面白くてもんだ」

厳しいには厳しいが、それでも、俺たちならきつと逆転出来る
そう信じる！

「さあ、再開しようか」

「・・・はいっ！」

そして、配牌は・・・

「・・・くっ！」

く・・・、くくつ、ふははあつ、ふふふ、うひゃつはつはアびゃつはああアああああア!!!・・・勝った!!!　これは、どうしようもない位に、勝ちしか見えねえ!

ミヤの手牌は、一萬が二枚、四萬が一枚、八萬が二枚、そして・・・白が三枚、發が三枚、中が二枚・・・!

つまり、既に小三元・混一・対々ほぼ確定の、大・三・元ルートつてことだあ!!!　どう転んでも、逆転は容易に可能!　下手すりゃ一気に一位奪取も見えてくる!

・・・これ、麻雀やらない奴らにはさっぱりなんだろうな・・・。

「ミヤ・・・先ずは四萬切りで、後は・・・分かるな?」

「は、はい・・・たぶん」

この待ちだと、流れに身を任すだけで欲しい牌は自ずと出てくる・・・特に指示はしなくてもいいだろう。

ツモ切りばかりでも怪しまれるから、色々工夫した方がいいんだろうが・・・まあ、初心者にそこまで求めまい。

そして、何事もなく三巡目・・・ぬらりひよんが、中を捨てた!

「ミヤ、今だ・・・鳴くんだ!」

「なっ、ここで鳴きじゃと!」

「まさか・・・大三元!」

本当は鳴かずにツモりたかったが、贅沢は言ってられまい。この

点差だし、奴らにも俺たちの狙いはバレバレだが・・・三元牌確定なら、勝機は十分此方にある。

「ええっ！？　こ、ここで・・・な、鳴くんですか・・・？」

俺の指示を聞いたミヤは、信じられないことを聞いたかのような反応で聞き返してくる。まあ、その気持ちも分からなくもないが・・・トップを狙うなら、ここは外せないところだ。

「ああ、鳴くんだ、ミヤ！」

事後承諾で悪いが、俺が鳴きを宣告している以上、もう鳴かないという手はない。宣告した時点で、大三元狙いなのはバレてしまっただけだからな。

そして、俺の指示を聞いてからミヤはオロオロしていたが、決意を固めたかのように深呼吸を一つして

「み、みゃあー・・・」

鳴いた。

・・・ああ、そう言えば・・・ポンとかチーとかは教えても、鳴くって言葉は教えて無かったっけなあ・・・

そんな風に思いつつ、俺にはもう、勝負の結果なんてどうでもよくなっていた。

いいじゃないか、もう。こんなに満足した気持ちになれたのなら。

今ので、中を鳴かなかったことにされたからって。

ミヤが、八萬を鳴いた後につららから一萬をロンしたからって。

その結果、点数的にレイが一位で俺たちが最下位になったからって。

それはもう、全てどうでもいいことなんじゃないのになって。

「……罰ゲームは……うみねこEP6の、戦人とエリカ指輪強姦のシーンを音読すること……雪麗の前で」

……それは、俺に死ぬと？ってのは、どうでもよくないんじゃないかなって。

これ以降のシーンは、都合によりカットされました（主にR1 8の意味で）

宮子姫のなく頃に、生き残れた沖見猫はなし。

初心者には分かんのです(後書き)

以前のCHAOSは餃子ネタにツッコミが入らなかったってことは、この鳴き声もみやあネタも知られてないんでしょうかね？ 某コピペからとってきたんですが……。

とにかく、本当はこの話、鳴き声もみやあネタのためだけに、短く小ネタのつもりで書き始めたのに……気づけばこの有り様だよ。ぐだつた感が半端ねえぜ。

そろそろ実家から帰るんで、原作進めるようになります。今のところ、番外編的なのは2つほど構想中なので、お蔵入りしない限りそれから牛鬼編に戻ろうかなと。

あと……牛鬼編の展開構想、ちょっと方向修正しました。なので、無理やり感が出る作りになるかも……。

PS・エリカの指輪強姦は、余りに？なのでやむなくカットしました。さすが探偵という名の変態……。だが、オレはエリカが、どんなキャラよりも大好きだッ!!!

さあ、Let's Shout! (前書き)

何ヶ月ぶりだろうか・・・漸くの更新です。待つて下さっていた皆さんには申し訳ありません。忘れられて・・・ない、といいなあ・・・。

今回から本編に戻りますので、内容忘れた人は読み直しを・・・あ、自分のことだった。ちょっと読み返してくる。

あ、あと、あけましておめでとつございます。本年も出来ればいろいろ読ませてい。

さあ、Let's Shout!

前回のあらすじ。

俺は女湯を覗く　　もとい、女子の安全のために監視をしておりました。すると、女子から悲鳴があがりました。すわ何事かと思いきや・・・でつかい鬼が沢山女湯を覗き込んでおりましたとき。

「ダイナミックな覗きだなあ・・・」

あんな覗きの仕方だと、見つけてくれて言ってるようなもんじやないか。俺を見るよ、女子たちに気配すら感じさせてないぜ。・・・違うよ？　覗いてないよ？

こほん。・・・まあ、何にせよ、だ。確かに女湯を覗きたい気持ちにはよく分かる。奴らと半日は語り明かせる自信もある。

だがしかし、覗かれてるのは我が教え子たちなわけで・・・、ここは正義の味方として、注意しにしなければなるまい。

・・・べ、別に、合法的に覗こうだなんて思ってないんだからねっ！

そうと決めたら俺は、カッコいい登場の仕方をするべく、温泉の近辺で一番高い木に登り

「とおっっっ！」

華麗なる三回転半のジャンプを決めて、我が教え子たちの下に降り立った。

「女子たちよ、待たせたな！俺が来たからにはもう安心だ！こんな覗き魔どもなんて、すぐに追っ払っ」

セリフを言っている途中で気づいた。巻と鳥居は逃げるポーズで固まっっていて、ゆらは式神 祿尊、武曲っというらしい を繰り出してこっちを凝視、妖怪たちは攻撃体勢を取りつつも、間の抜けた顔をしている。

「うん、これはつまり」

襲われてたんだね。

そつだよな、普通に考えてあんな覗き方しないし、そもそも妖怪が女湯覗かないよなあ……。

「……ゼロ兄ち「テイク2！」……」

いやあ、ミスったミスった。まさか普通に襲われてただけだったとは。誰だよ、こいつらが覗き魔だって言った奴。出てこいよ、俺がぶっ飛ばしてやんよ……あ、俺だった。ごめん、今からちよっと吊ってくるわ。ハッハッハ。

色んな方向からの冷たい視線を感じながら、再び先ほどの木に登る。次こそはちゃんとキメてやらなければな……。

「とおっっ！」

先ほどのリプレイの如き華麗なジャンプを決め、再び見事な着地を成功！

「てござっているようだな、しr・・・じゃなかった、手を貸そう
！」

・・・・・・ああ。我が教え子たちの視線が・・・、痛いなあ。

「・・・・ゼロ兄ちゃん・・・・・・」

あ、ゆらの視線と言葉に酷い殺意を感じる。ダメだぞ？ 女の子
がそんなんじゃない。

「ゼロ兄ちゃん？」

「はい。すみませんでした」

安定と信頼の土下座である。だってしょうがないじゃないか、怖
いんだもの。

「・・・・って、そんなコントみたいなことやってる場合じゃないっ
しょ！？ 私たち今襲われてんだぞ?!」

「そ、そうよ！ 早くなんとか・・・ゼロ先は置いて、私たち
ゆらちゃん頼みなんだから!!!」

俺たちのコント・・・もといじゃれあいを見かねて、鳥居と巻・・・

・取り巻きコンビがギャーギャーと喚く。

まったく、なんて奴らだ。俺はともかくだと？ 馬鹿なことを・・・

・俺こそがお前たちを救ってやる救世主だというのに。

「ま、俺は心が海のように広い・・・今の失礼なセリフは水に流して
やるっ」

そう言いながら、俺は土下座の体勢から立ち上がり、取り巻きコンビの前に躍り出た。ゆらは置いといて、二人は相当驚愕しているようである。まあ、二人は俺が一般人だと思っっているのだから当然か。

「ちょ、ゼロ先！」

「やめなつて！ 危ないんだからゆらちゃんに任せときなよ！」

なんだかんだ言っつてこいつらは優しいし、俺のことを心配してくれるんだ。体を張るかいがあるというものである。

俺は近寄ってくる二人を片手で制し、ゆらに目配せしながらこの中にいるであろう、妖怪を操る大将に向かって呼びかけた。

「さあ！ 女湯を襲うなんて羨まけしからん野郎はどこのだいつだ！ 俺がぶつ飛ばしてやるから出てこいよ！」

三人が何か微妙な顔をしているが気にしない。しょうがないじゃない、だって俺健全な男なんだもん。

「げ・・・あれ、もしかしなくても沖児猫じゃないか・・・。なんでこつちに・・・くそくそくそ！ 牛頭丸のアホー！！！」

声が出た方を見ると、頭に馬か何かの骨を被った小さい子供みたいな奴がいる。どうやらあれが大将らしいが・・・どこかで聞いたような声だな。ひぐらしとか、そらおととか、ガンダムとか・・・ガンダム見てないけど。

「お前が覗き魔か？ 待つてろ、今すぐぶん殴つてやるから。あ、だからと言っつて『親方様あああ！』とか言っつて向かってくるなよ？ 暑苦しいから」

「なんでボク覗き魔扱いになってるの!? あと、後半意味わから
ないし!」

「はあ・・・、そんな声で言われても説得力ねえよ」
「声から否定された?!」

だって、そんな ボイスしてるお前が悪いんだもの。・・・いや、
羨ましいわけじゃないよ? 本当だよ? 嘘じゃないよ?

「ぐう・・・、もういい! こうなったらヤケクソだ! 根香!
宇和島! 殺つちまええええ!!」

何が癩癩に触れたのかはまったく見当もつかないが、馬の骨(仮)
は鬼たちに指示を出して俺にけしかけてきた。図体はデカイので、
やはり迫力がある。

「ゼロ先!」

「だから逃げてって言ったのに!」

取り巻きコンビの悲痛な叫びが、温泉内に木霊する。ちつぽけな
俺と、凶悪そうな巨大鬼・・・普通に考えて、俺の勝利は絶望的だ
ろう。

だが、実際は違う。俺が見た限り、あの鬼たちにそこまでの力
はない。やれてせいぜい、今みたいに人間を襲うぐらいだろう。そん
な雑魚・・・我が愛刀、夜王丸の敵じゃねえ!!!

「はっ、てめえら如き、この刀の錆にしてやんよ!」

・・・おろ?・・・腰に手をやるが・・・そこにあ
るはずの刀の感触が・・・ない・・・?

「あつ、そうか・・・流石に刀持ってくるのは駄目だろうって屋敷に置いてきたんだった。いやぁ、まいったまいった、とうぁあああぁあぁあぁ!!!!」

失敗を笑っている内に鬼たちが繰り出した拳にはね飛ばされた。
・誰だよ、こいつらがくそ雑魚だと言った奴。普通に死ぬレベルで痛いんですが。

「ゼロ先ーっ！ やっぱり駄目じゃんっ！」

「だからあれほど止めると・・・」

取り巻きコンビの二人は俺が死んだと思ったのだろう。目に軽く涙を浮かべながらそんなことを言っている。

・・・ゆらが平然としているのは、俺が死なないことを知ってるからだよな？ いつもの馬鹿だとか思ってるわけじゃないよな？

「まあ、分かってたんだけどね。先生のくせに馬鹿だし、頭悪いし・・・あ、これ殆ど同じことか」

「見栄っ張りだしね・・・いつかこうなると思ってたよ」

・・・おい、なんだその評価は。せつかく身を呈して教え子を守ろうとした教師に対する言葉かよ。

「違う！ 今のはあれだ・・・た、ただの準備運動だからな！」

あまりの罰の悪さに痛みを忘れて立ち上がり、二人に向かって苦しい言い訳をする。・・・いや、間違えた。うん、今のは本当に準備運動だったんだよ。

「さあ、今度はこっちからいくぜっ!!」

俺は拳を振り上げ、鬼に向かって走る。よく考えたら俺の力で勝てるわけないんだが・・・まあ、アドレナリンとかその辺がいっぱい分泌されたんだよ、きつと。

「覚悟し、りゅうつうつう!!」

ま、当然の如く。俺はものの見事に、カウンターの要領でぶっ飛ばされた。分かったた・・・、分かったたさ。でも・・・、分かってくれよ・・・?

「はぁ・・・、やっぱり・・・」

「どうせ、そうなるんだろうと思ってたんだよね・・・」

おいこらお前ら。何でそんな、人を馬鹿にしたような発言をしゃがるんだ。俺がこうなった理由分かってる? 君たち守るためだよ?・・・まあ、自分の性格上つてのものないこともないんだが。

「・・・ふっ、忘れていたよ。俺の力は強過ぎて封印してあったんだ・・・。次は、ぎゃあぁあぁあつす!!!」

また別の言い訳をしながら立ち上がる途中で、俺のセリフを遮るようにして鬼に投げ飛ばされた。・・・頼むから、せめて最後まで言わせてくれよ。

「あ・・・次こそは逝ったか・・・」

「惜しくない人を亡くしたね・・・」

そしててめえら、いい加減にしゃがれ。

「……え？　ちょ、陰陽師が……ゲブオオオ！！！」

俺に意識を向けて丸つきり油断していた馬の骨は、ゆらのくそダサ……ゲフンゲフン。ゆらの必殺技の直撃によって、鬼の背から落ちる。

ほお、ゆらのやつ今まで黙ってると思ってたら、どうやら俺のあれによって馬の骨が油断するのを待っていたらしい。やるじゃない……いや、全て俺の計算通りさ。

「ぐうっ……くそくそくそ！　陰陽師のやつ……！　こんな、ごほっ、ちょっと油断しただけだっ！」

どうやらゆらの砲撃はダメージを与えたが、致命傷にはならなかったようだ。咄嗟に気づいて受け身でもとったんだろが……割とあの馬の骨、やるようである。

しかし、だ。もはや馬の骨に勝ちの目はない。今の決定的な隙の間に、ゆらの式神たちは鬼どもを各個制圧していたようだ。敵の戦力は、馬の骨のみ。

「くっ、何やってんだよ！　根香、宇和島！　そんな簡単にやられるなんて、牛鬼組の恥だぞ！」

！　やっぱりこいつら、牛鬼の組の奴らだったのか。あいつが間違えて襲うなんてまず有り得ないとして……、一体何が目的でこんなことを……？

「くそ、どうすれば……うん？」

「……ん？」

何か、事態に窮した馬の骨が、ジーツと俺のことを凝視している。おいおい、止めてくれよ。いくら俺が魅力的だからって、俺は男なんかに興味は

「ふっふっふっ、そうかそうか、こうすれば良かったんだ・・・さすがボク、あつたまいー！」

そう言って馬の骨は、何かの呪文のようなものを唱え始めた。これは・・・そう、牛鬼が昔使ってた、幻術をかけるやつだ。

「ぐ・・・俺に・・・幻術をかける気か」

「そーだよ。分かったなら早いところかかってくれよ。陰陽師が体勢立て直す前にはかけなきゃならないんだから」

抗おうとするが・・・強制力みたいなものによって動けない。これは・・・早く何か手を打たないと、すぐにヤツの支配下になってしまう。

こういう幻術をレジストするには、術者を倒すか、自分の精神力だ。倒すのは無理として・・・精神力はつまるところ、根性論になっってくる。

根性は割とあると自負しているが・・・こういった類の術に打ち勝つのは、かなりの労力が必要。つまり、精神を奮い立たせなければならぬ。

なら、叫んでみるのが一番。俺は幻術の対抗手段としてこう考える。脈絡が無さ過ぎる？ 知らないよ。俺も余裕が無いんだ。

さあ、Let's Shout!

ヨロリと立ち上がったってそちらを見ると、取り巻きコンビがゆらを抑えこんでいる。

あの様子からして、おそらく馬の骨に操られているのだろう。あの野郎お・・・俺を操ったのは二人を操るための時間稼ぎだったわけか・・・やられた。

「カカカ！ 式神はあつかうものが倒れば力を失うってか！？ いけ！！ あの女に集中攻撃だー！！」

集中が途切れたせいかゆらの式神たちは全て消え、ゆらは完全に無防備。よろめきながらも復活した鬼軍団相手に、対抗する力はない！

「ゆら、逃げ」

無理と分かりつつも叫びかけた瞬間、黒い羽が舞った。比喻でもなく実際に あれは鴉天狗の息子たち・・・三羽鴉。

「ふえ！？ ゲブオオオ！！」

三羽鴉は一瞬にして、鬼軍団を沈黙させた。ゆらが与えたダメージを考えても・・・強い。下手したら鴉天狗の全盛期より強いんじゃないだろうか。

「・・・若は・・・いないのか」

三羽鴉の長兄 苦勞ま、・・・間違えた、黒羽丸は、温泉の中を見渡してそう呟いた。・・・そうか、こっちが襲われてるってことはリクオも。

「ブハア！！ なにしゃがるーーーー！！ てめえら・・・何者だあーーーー！！」

三羽鴉の紅一点ささみ そのネーミングセンスはどうかと思うに温泉に叩き落とされた馬の骨は、浮き上がると同時に怒鳴り散らした。

「小僧。自分が誰に口をきいているかわからんのか。ワレらは鴉天狗一族・・・知らぬわけではあるまい」

「カ・・・カラス天狗！？ 本家の・・・お目付役・・・なんで・・・ここに・・・」

しかし、堂々とした態度で名乗った黒羽丸、そしてその正体に驚いたのだろう、ひどく狼狽している。まあ、おそらくはこの騒動は本家には知られずに遂行するつもりだったんだらうな。

「ハッ！」

馬の骨は何かに気づいたように、急に首を横に振った。俺もそっちを見ると・・・正気に戻った取り巻きコンビを振りほどいたゆらが、ジト目で馬の骨を見ている。・・・うん、あの視線は辛い。

「けがらわしい・・・女湯を・・・襲う妖怪か・・・」

ささみが汚物を見るような目で馬の骨を見る。その目は鋭く、馬の骨はうるたえるしかない。・・・俺にも少なからず似たような視線を感じるのはいのせいな。

「あ・・・いや・・・」

「小僧・・・てめえに聞きたいことがある」

馬の骨が何か言い訳をしようとしたところで、黒羽丸が何か尋ね
だした。何を聞くのかは知らないが・・・とりあえず、ここでの戦
闘は終わりだろう。

「ふう・・・」

黒羽丸の質問している中、俺の美女レーダーが馬の骨のチラツと
見えた素顔に反応する。これで ボイスなのか・・・女だったらま
ず間違いなく口説くレベルなんだがな・・・。

「えっと・・・この辺に・・・」

とりあえず俺は黒羽丸の真面目な話を一切無視して、例の女体化
薬を取り出した。

さあ、Let's Shout！（後書き）

とりあえず復活しました。イエイ！

しかし、実は今自分の携帯がおかしなことになっていて、ずっと圏外になりっぱなしという異常を引き起こしています。

これが原因で活動報告から一週間更新出来なかつたんですが・・・偶に直る時を狙って書き進めて、やっと投稿出来ました。

近くにAUショップないせいで修理にも行けず・・・そんなこんなで、今は書くのが非常に難しい状況です。

出来れば1ヶ月以内には次話投稿したいんですが・・・怪しい。そんな中でも、更新を待ってくれば非常に嬉しいです。

では、これからも作者と沖見猫たちを、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1166o/>

ぬらりひよんの孫～不死身と中二、時々フラグ～

2012年1月6日02時45分発行